

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(22)

中國 縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査

12

1977・12

岡山県教育委員会
文化課

中國縦貫自動車道 建設に伴う発掘調査

12

序

この報告書は岡山県教育委員会が、昭和44年から昭和51年まで実施しました中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和50年から51年10月までに調査した新見以西の、山根屋遺跡、四日市古墳、清水谷遺跡、塚の峯遺跡岸本城址、二本松遺跡について第12分冊としてまとめたものであります。

岡山県教育委員会では、8年間にわたる発掘調査の結果を、昭和49年3月の第1分冊以来順次発掘調査と併行して調査報告書を作成してきました。第8分冊以降につきましては、昭和51年10月をもって発掘調査が終了しましたので、調査報告書作成に専念する体制も整い、このたび、第12分冊の発刊のはこびになりました。

しかしながら、新見市以西において調査を実施した遺跡は40カ所にのぼり、そのうえ、それらの調査報告書を作成するために予定された期間は1年半に限られたため、今までとは違ったむずかしさがありました。この報告書作成のため、関係者一同万全を期して努力しましたが、なお不備な点が多々あると思いますので、ご叱正を賜りたいと存じます

本報告書が、失なわれた遺跡の記録として、文化財の研究、保護活用に多少でも役立てば望外の喜びであります。

なお、調査・報告書の作成にあたって、日本道路公団並びに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめとして、神郷町教育委員会、哲西町教育委員会、地元住民の方々、その他関係各位からよせられたご協力とご指導に対し厚くお礼を申し上げます。

昭和52年12月

岡山県教育委員会

教育長 小野啓三

凡　　例

1. 本調査報告書は、日本道路公団の委託により、岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の調査報告である。
2. 岡山県内の発掘調査は、第1次整備区間（落合インターチェンジ以東、25遺跡）では、昭和44年3月久米郡久米町久米庵寺に着手し、昭和48年6月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで4年3か月を要した。この調査に係る報告書は5分冊に分けて刊行された。第二次整備区間（落合インターチェンジ以西、50遺跡）の調査は、第一次整備区間の調査に引き続いで実施され、昭和51年10月阿哲郡哲西町横田遺跡の終了をもって完了した。第二次整備区間に係る報告書は本分冊を含めて7分冊が既に刊行され、さらに、昭和52年度中に1分冊の刊行をもって完了する。
3. 本報告書は、通巻第12分冊であり、以下報告遺跡と担当者は下記の如くである。

山根屋遺跡	竹田 勝、岡本寛久
四日市古墳	下澤公明、浅倉秀昭
清水谷遺跡	下澤公明、浅倉秀昭
塚の峯遺跡	福田正継、中野雅美
二本松遺跡	伊藤 晃、山磨康平
岸本城址	松本和男、友成誠司
4. 中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会は、昭和42年5月、岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて設置した。
昭和52年12月現在、対策委員に下記の諸氏を委嘱している。

勝央中学校教諭	浅野 克己（昭和47年11月～）
岡山大学教授	近藤 義郎（昭和47年11月～）
津山みのり学園	植月 庄介（昭和44年4月～）
院庄小学校教諭	土居 徹（昭和44年4月～）
津山高等学校教諭	宗森 英之（昭和47年11月～）
津山市文化財保護委員	渡辺 健治（昭和44年4月～）
5. 調査は、岡山県教育委員会文化課が埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。
6. 50,000分の1の地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。
(承認番号) 昭52中複、第200号
7. 各遺跡調査地周辺の方々、神郷町、哲西町の各教育委員には、有形、無形の協力を得た。
8. 本書に用いたレベル高は、海拔高である。
9. 本報告書に用いる時代区分は一般的な政治区分に準じし、それを補うために文化史区分と世紀を併用した。

10. 昭和50、51、52年度の構成員と調査遺跡を下記にあげる。

昭和50年度

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘は、文化課、津山・高梁両教育事務所が協議した結果、前年度からの継続調査中の遺跡については津山教育事務所で、その他の遺跡は高梁教育事務所でそれぞれ担当することになった。このため、調査員は文化課へ配置換え（高梁教育事務所兼務）となった。前年度から継続調査中の遺跡の担当調査員は、調査終了まで津山教育事務所勤務となり、その後文化課へ配置換え（高梁教育事務所兼務）となった。

文化課

課長	小林 孝男
参考事	富岡 敬之
参考事	西口 秀俊（課長補佐＝文化財二係長事務取扱）
文化主幹	水田 稔（文化係長事務取扱）
主任	光吉 勝彦
文化財保護主事	葛原 克人 山磨 康平 正岡 陸夫 下澤 公明
	岡田 博 高畠 知功
主任	田仲 満雄 二宮 治夫 浅倉 秀昭 竹田 勝
主事	福田 正継 友成 誠司

津山教育事務所

所長	菱川 豪
次長	吉田 賢吾
主幹	田中 篤周（庶務係長事務取扱）
主任	大山 行正
主事	山本 政昭

高梁教育事務所

所長	田井 治太郎
次長	小林 克己
主幹	守屋 明
庶務係長	小野 茂正
主事	丸尾 洋幸 藤井 守雄

遺跡名

谷尻遺跡・桃山遺跡・空古墳・岩倉遺跡（共に前年度より継続）、宮の鼻古墳、宗金遺跡、新見庄関連遺跡（二日市場・祐清塚）、横見古墳群、横見墳墓群、迫遺跡、新市谷遺跡、古坊遺跡、岩屋城址、安信古墳群、塚谷古墳群、山根屋遺跡、中林調査区、野田畠遺跡、西江遺跡、二野遺跡、光坊寺古墳群、土井遺跡、土井城址、鳴山古墳群、清水谷遺跡、塚の峯遺跡

昭和51年度

担当調査員は、調査終了（昭和51年10月）までは文化課勤務（高梁教育事務所兼務）として調査にあたり、その後は兼務を解かれて、岡山市西古松の文化課分室において報告書作成に従事した。なお、横田東古墳群と工事中発見の二本松・岸本下両遺跡の計3遺跡の調査は、高梁教育事務所兼務の調査員だけでは対応できず、文化課勤務者が出向いて調査にあたった。

文化課

課長 小林 孝男

参考 西口 秀俊

文化主幹 水田 稔

文化係長 小川 佳彦

文化財二係長 光吉 勝彦

文化財保護主査 葛原 克人

文化財保護主事 伊藤 晃 山磨 康平 正岡 陸夫 下澤 公明

井上 弘 松本 和男 岡田 博

主事 田仲 満雄 浅倉 秀昭 福田 正継 竹田 勝

中野 雅美 友成 誠司 岡本 寛久 秀島 貞康

内藤 善史

高梁教育事務所

所長 田井 治太郎

次長 小林 克己

主幹 守屋 明（庶務係長事務取扱）

主事 丸尾 洋幸 藤井 守雄

調査遺跡名

宗金遺跡、岩屋城址、山根屋遺跡、西江遺跡、清水谷遺跡、塚の峯遺跡（以上前年度より継続）
桑原遺跡、門前中屋古墳、佐藤遺跡、道の上遺跡、横田東古墳群、横田遺跡、藤木城址、大倉遺跡、忠田山遺跡、御供川遺跡、四日市古墳、二本松遺跡、岸本下遺跡、岸本城址

昭和52年度

発掘調査が昭和51年10月に終了し、同年11月1日付けで高梁教育事務所兼務を解かれる。以降、文化課分室において担当調査員全員による報告書作成に従事する。昭和53年3月までに順次担当遺跡の報告書を刊行してゆく予定である。

文化課

課長 飛田 真澄

課長補佐 塩見 篤

主幹 小川 佳彦（文化係長事務取扱）

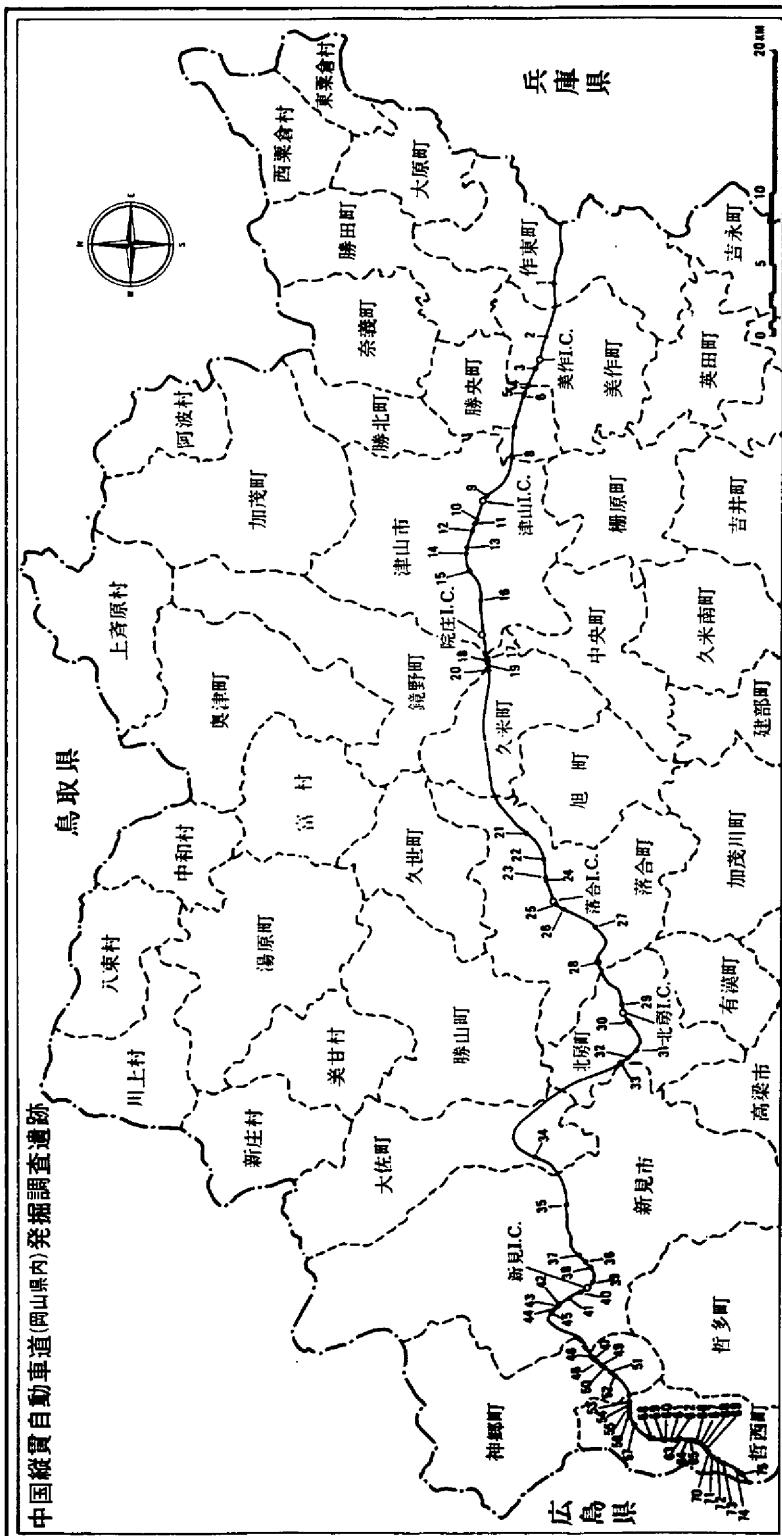
文化財二係長 光吉 勝彦

文化財保護主査 河本 清
文化財保護主事 正岡 陸夫
" 山磨 康平
主 事 岡本 寛久

文化課分室

文化財主幹 難波 進
文化財保護主査 葛原 克人
文化財保護主事 井上 弘
" 下澤 公明
" 松本 和男
" 岡田 博
主 事 福田 正継
" 竹田 勝
" 藤井 守雄

中国縱貫自動車道(岡山県内)発掘調査遺跡



総 目 次

序

凡 例

総 目 次

1. 阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境	9
2. 山根屋遺跡 (54)	13
3. 四日市古墳 (70)	151
4. 清水谷遺跡 (71)	161
5. 塚の峯遺跡 (72)	193
6. 二本松遺跡 (73)	279
7. 岸本城址 (75)	295

阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境

1. はじめに

中国縦貫自動車道(以下縦貫道といふ)建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査も、岡山県内で75遺跡を調査して昭和51年10月30日に終了した。縦貫道は県北の美作・備北の2市9町を通っているが、この11市町のうち遺跡数の最多の所は阿哲郡哲西町である(75遺跡のうち23遺跡を占めている。哲西町内の遺跡の調査報告は、この分冊以後刊行が4冊予定されている。その4冊分には新見市及び阿哲郡神郷町内の遺跡も含まれている)。これら各遺跡の報告にあたって、各遺跡ごとに地理的歴史的環境について記述すれば、説明が重複することが考えられるので、哲西町内の遺跡の最初に出てくる報告の前に町内の地理的歴史的環境をまとめて記載することにした。各遺跡の報文では、その遺跡の立地を記述するにとどめた。

2. 地理的環境

哲西町は岡山県北西部に位置し、南北約15km・東西約5kmの南北に細長い町で、西は広島県比婆郡に接し、他の三方は阿哲郡神郷町・同郡哲多町・川上郡備中町と境を接している。

哲西町の総面積は約7700ha、その内水田は580haで残りの大部分は山林・原野・牧草地・畑となっている。総面積の7.5%しかない水田はその大部分が町内を南西から北東へ流れる神代川(高梁川の一枝流)こうじろ沿いに細長く存在している。神代川沿いのわずかな水田地帯も、集落・国道182号線・国鉄芸備線・縦貫道などによって更に少ない面積を保持しているにすぎない。

哲西町の中央部・南部は準平原の「吉備高原」の北端部に位置しており、北部はややけわしい山が連なっている。神代川およびそのいくつかの支流沿いにわずかに沖積層が見られる。沖積層(水田地帯)の縁辺部(山裾および樹枝状に発達する小さな舌状の尾根部分)には新生代第三紀層が存在している。縦貫道は、その大部分がこの第三紀層の部分に建設され、一部が水田(沖積層)を埋めてつくられている。言葉を変えるならば、縦貫道用地内で調査した23遺跡はすべてこの第三紀層の上に形成されているといえる。

山間部の大部分は、中生代の閃綠岩(哲西町北部)・斑岩(中央部)・玢岩(南部)で構成されており、一部は中生代の橄欖石・蛇紋岩や古生代の石灰岩・粘板岩・砂岩で構成されている。荒神山・明神山・温の明神山・高山・長松寺山・権現山などは新生代の玄武岩鐘である。

第三紀の中新統に属する灰色の泥板岩層は国鉄姫新線・芸備線沿いに細長く分布し、この層からはピカリア・ハマグリ・マテガイ・シジミ・サメの歯・カニ・カキ・オキシジミ・メタセコイヤ・ブナ・カシ・ヤナギなどの化石を産する。野馳の大野部ではエダサンゴの化石が出土している。縦貫道の工事中に各所からカキなどの化石がよく出土している(地質については第2図参照)。

3. 歴史的環境

阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境

哲西町は総面積に比して水田はわずか 7.5 %しか存在しない所であるが、遺跡の分布密度はかなり高い方である。町内を通る縦貫道の長さは 7.6 km であるが、この用地内に発掘調査を実施した遺跡の数は 23 に達した。これから見ても分布密度の高いことがわかる。

町内へ人間が足を踏み入れたのは古く旧石器時代に遡る。大字矢田字貝田に存在する二野遺跡（第 1 図 59 以下「第 1 図」を略す）では、縄文時代から平安時代にかけての遺物の包含層から、旧石器時代のサヌカイト製ナイフ形石器と尖頭器が出土している。これは平安時代までの遺物と混在しているため原位置の確認は出来ないが、偶然の出土とはいえない。西へ約 10 km の地点には帝釈峠遺跡群（註 1）が存在し、北 25 km の所には野原遺跡（註 2）が存在している。これらの遺跡を拠点に狩猟を行なっていた旧石器時代人がこの哲西町内に足を踏み入れたことは充分考えられる。

縄文時代の遺跡も、縦貫道用地内の発掘調査を契機にして、8 か所が確認されている。大字下野部字柄峰では早期の石鎌が、土井上遺跡（註 3）・馬場遺跡（註 4）では早期の土器片が採集されている。塚の峯遺跡（72）では前期の土器片が、二野遺跡では前・後・晚期の土器片が、清水谷遺跡（71）では晚期の土器片が出土しており、西江遺跡（58）では晩年のピットと土器片が確認されている。佐藤遺跡（53）では、後・晚期の土器片が出土し、後期の住居址 1 軒が確認されている。佐藤遺跡の住居址・西江遺跡のピットを除いて他の遺跡では遺構は存在しない。土井上遺跡は、縦貫道の工事中に土器片が採集されたもので、発見時にはすでにオープン・カットされていて、調査しないで消滅した遺跡の一つである。馬場遺跡も土器を表面採集しているだけで遺跡の実態は不明である。

弥生時代になると遺跡数も多くなる。しかし前期に属するものは、西江・大倉（67）・清水谷・岸本下（74）の 3 遺跡に土器片が見られるのみである。中期になると、縦貫道関係では、山根屋遺跡（54）・野田畠遺跡（57）・西江遺跡・二野遺跡・横田遺跡（65）・大倉遺跡・清水谷遺跡が知られており、これら以外にも家坂遺跡（20 註 5）・善光院裏山遺跡（註 6）・三角高下遺跡（註 7）などが知られている。山根屋・野田畠・西江・横田・大倉・家坂では、住居址やピット・溝などが確認、または調査されている。住居址もかなりあり、この時期以後人々が哲西の地に定住したものと考えられる。

弥生時代後期になるとさらに遺跡数も増し、縦貫道用地内に限っても前記の中期の遺跡に加えて、土井遺跡（61）・土井城址（62）・横田遺跡 4 区、藤木城址（66）・御供川遺跡（69）・塚の峯遺跡・二本松遺跡（73）・岸本城址（75）・宮の尾遺跡（6）をあげることができる。西江遺跡では特殊器台・特殊壺の伴う土墳墓群が確認されている。

これらの弥生時代の遺跡は（家坂遺跡を除く）、神代川沿いの狭長な沖積に向かって樹枝状にのびる第三紀層の丘陵上あるいは山裾部に位置し、家坂遺跡は大字矢田字元町から広島県境に展開する小さな谷の奥に位置している。家坂遺跡同様に谷間の遺跡が今後発見される可能性がある。

哲西町では昭和 36 年度に第 1 回目の分布調査が行なわれ、約 250 基にのぼる古墳などの遺跡が『岡山県遺跡地図』（註 8）に載せられている。第 2 回分布調査は、縦貫道予定線を中心に巾 500 m の範囲にわたって昭和 44 年度に実施され、これをもとに縦貫道の路線が決定された。この時点で路線内に含まれる遺跡は、中林遺跡（56）・西江遺跡の一部・二野遺跡（59 横穴式石室 1 基のみ）・鳴山古墳群

阿哲郡哲西町の地理的・歴史的環境

(63)・大倉遺跡(67)・四日市古墳(70)・塚の峯遺跡(72)の7遺跡のみであった。昭和49年度になって発掘調査に先だち、縦貫道の調査担当者全員で精査した結果、佐藤遺跡・山根屋遺跡・野田畝遺跡・西江遺跡(延長1kmに拡大)・二野遺跡・土井遺跡・土井城址・横田遺跡・藤木城址・忠田山遺跡(68)・御供川遺跡・清水谷遺跡・岸本城址を新たに確認した。また当地内の伐採終了後に、光坊寺古墳群(60)・横田東古墳群(64)を確認した。53~75(55・73・74を除く)の20遺跡を対象に発掘調査を開始した。

数度にわたる分布調査にもかかわらず、縦貫道建設工事中に発見された遺跡は、道の上古墳群(55)・宮の尾遺跡・土井上遺跡・二本松遺跡・岸本下遺跡の5遺跡をあげることができる。これらの遺跡では1片の土器も採集されなかった地点である。工事中発見のうち、二本松遺跡・岸本下遺跡については工事を中止して調査を行なうことができたが、宮の尾遺跡・土井上遺跡では発見したときにはすでに工事によって遺跡は消滅していた。また、野田畝遺跡では、たった1個の石庖丁のみを表面採集しただけであった。これらは埋蔵文化財の分布調査の難しさを痛感させた。

さらに岡山県全域の分布調査の一貫として昭和50年度に分布調査が実施された。この際は主として神代川の南の地域の分布調査が行なわれ、その成果は、前2回のものと合わせて『岡山県遺跡地図第5分冊』(註9)に載せられる予定である。

古墳時代になると、遺跡の分布は縦貫道沿いの所だけでなく、小さな谷の奥まった場所や山頂などにも点在している。集落址は佐藤・山根屋・野田畝・西江・土井城・横田・大倉・忠田山・御供川・清水谷・塚の峯・二本松・岸本下・岸本城の各遺跡で確認されている。弥生時代と同様に古墳時代の集落址は、縦貫道建設用地内の調査の行なわれた部分のみでわかっているのであって、その他の所にも存在しているものと思われる。

古墳時代初頭の墳墓は、山根屋遺跡・西江遺跡にあり、方形台状墓・シストあるいは土壙墓で形成されている。前半期の古墳群として光坊寺古墳群をあげることができる。これは円墳・方形墳から成っており、内部主体に竪穴式石室をもち、珠文鏡などの遺物が出土している。その他の場所では古墳時代前半期に属する古墳は明確にしえない。

古墳時代後半期に属するものは各所に散在している。内部主体は、シストあるいは木棺直葬のもの、横穴式石室が認められる。畠木の鳴木山古墳群(40)の一基(径5mの小円墳)からは、6世紀初頭の須恵器が出土している。横穴式石室は6世紀後半になって出現する。上神代吉が谷にあるひさご塚古墳は国鉄芸備線建設時に破壊されたものであるが、形象・円筒埴輪を持っており、5世紀中葉の築造と考えられる(註10)。埴輪を持つ古墳としては備中北部では唯一の例である。ただ西江遺跡の包含層から埴輪片1片が出土し、その地点はひさご塚古墳から南へ1kmの地点である。西江遺跡出土の埴輪片は、どこの古墳に伴うものかは不明である。

後半期のもので特筆すべきものに横穴がある。家坂横穴(20-1基)(註11)・竹川内横穴群(22-7基)・愛宕山横穴群(23-15基)・鳴山古墳群(2基)・寺畠横穴(青谷古墳群(35)の内-1基)の26基の存在が知られている。このうち家坂横穴・鳴山古墳群の3基は発掘調査が行なわれた。県中北部の久米町、加茂町、北房町などにその分布が知られている。

阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境

奈良・平安時代の遺構・遺物は、山根屋・西江・二野・土井・二本松・井下谷（36）の各遺跡で確認されている。

城址では、鎌倉時代の西山城（50）・万石城（17）・育野城（84）がある。室町時代のものでは、尼子方の見坂山城（1）・豆木城（34）・藤木城・岸本城・岩高城（8）があり、毛利方の育野城・要塞城（50—後に尼子方となる）がある。哲西町の北西部に尼子方が、南東部に毛利方が対峙していたものである。城址ではないが、建物群・墳墓などは、土井遺跡・忠田山遺跡・二本松遺跡などで確認されている。

製鉄関係の遺構は、鍛冶炉が西江遺跡・二野遺跡で確認され、鉄穴・水路などは柄峠と浅尾田に残っている。
(田仲満雄)

註 1. 広島大学が十数年来発掘調査を続けている。

註 2. 『岡山県埋蔵文化財報告 7』岡山県教育委員会昭和52年3月刊

註 3. 土井遺跡のすぐ南の尾根上にあった。

註 4. 矢田元町にある町役場の東側の山裾部分で採集された。

註 5. 藤田等「備中哲西町弥生式遺跡」『古代吉備』第4集古代吉備刊行会・昭和36年刊

註 6. 矢田荒堀の光坊寺古墳群の西に位置する南にのびる尾根上にある。

註 7. 八鳥の鳴木山東古墳群のある尾根が低く北にのび、その先端部に位置している。

註 8. 『岡山県遺跡地図』岡山県教育委員会 昭和39年刊
『全国遺跡地図一岡山県』文化財保護委員会 昭和42年刊

註 9. 『岡山県遺跡地図第5分冊』岡山県教育委員会 近刊予定

註 10. 遺物は現在、東京国立博物館と哲西町立矢神小学校に保管されている。

註 11. 潮見 浩・難波宗明「備中哲西町家坂の横穴調査報告」『古代吉備』第4集古代吉備刊行会 昭和36年刊

(参考文献)

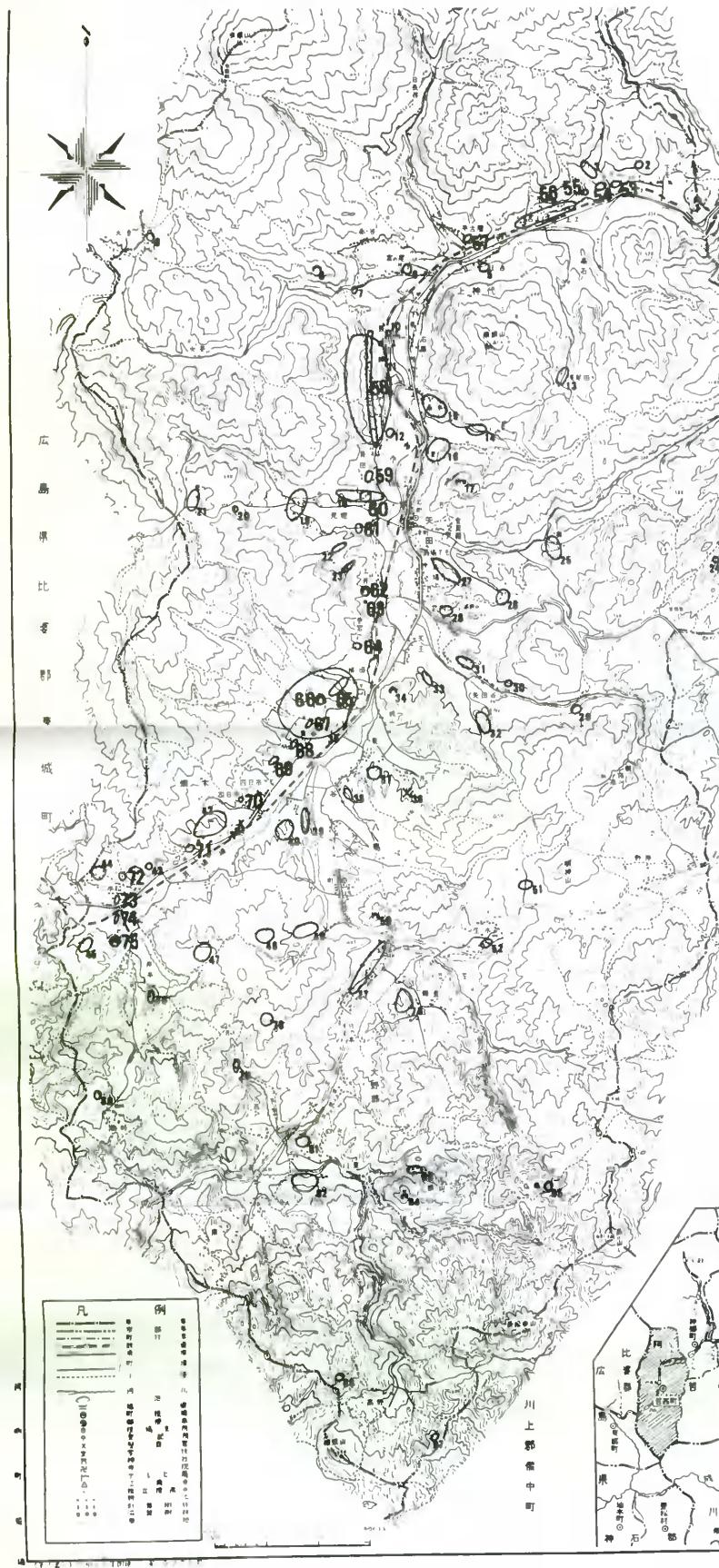
『哲西町遺跡カード』哲西町教育委員会

『哲西史』哲西町 昭和38年刊

『阿哲郡誌』阿哲郡教育会 大正12年刊

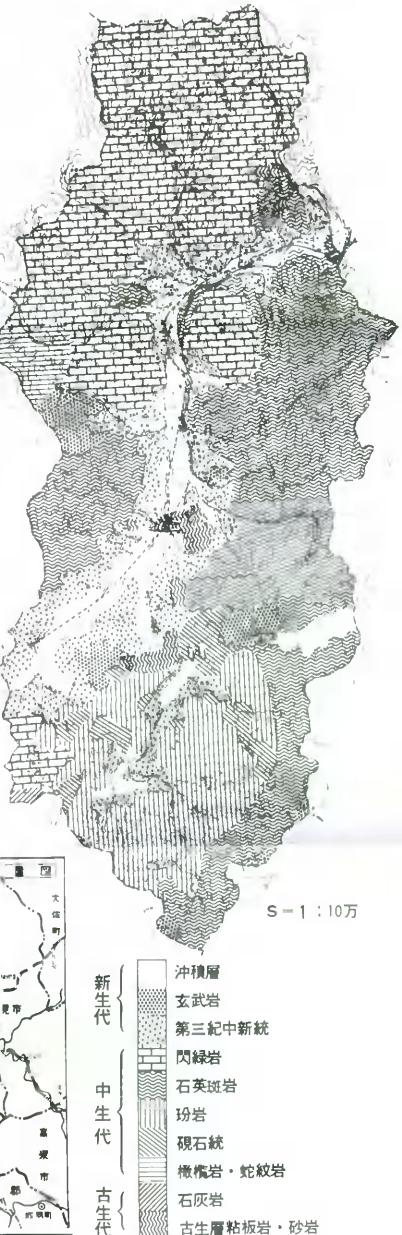
『古代吉備』古代吉備刊行会 昭和36年刊

第1図・2図とともに哲西町教育委員会提供の地形図($S = 1 : 25,000$)に記入し、縮尺したものである(5ヶ年分布調査を基本にして作成—田仲満雄)



1. 見坂山城址
2. 温光庵古墳群
3. 京の段古墳群
4. 市岡古墳群
5. 実本古墳群
6. 宮の尾遺跡
7. 宝堂古墳群
8. 岩高城址
9. 大金古墳群
10. ひさご塚古墳
11. 西江古墳群
12. 山王小丸古墳群
13. 浅尾田古墳群
14. 水江古墳群
15. 森本古墳群
16. 浪方古墳群
17. 万石城址
18. 善光院裏山遺跡
19. 塚原古墳群
20. 家坂遺跡
21. 倉木古墳群
22. 竹川内横穴群
23. 愛宕山横穴群
24. 横路古墳
25. 奥古墳群
26. 猿ヶ鳴古墳群
27. 登宇の歎古墳群
28. 武内古墳群
29. 順刈古墳群
30. 上川内古墳群
31. 室ヶ畠古墳群
32. 叶谷古墳群
33. 天王奥古墳群
34. 豆木城址
35. 莠谷古墳群
36. 井下谷遺跡
37. 塚の段古墳群
38. 茶室田古墳群
39. 曜木山東古墳群
40. 鳴木山古墳群
41. 住吉遺跡
42. 住吉古墳群
43. 御立山古墳群
44. 妙伝寺裏遺跡
45. 岸本西古墳群
46. 岸本古墳群
47. 岸本東古墳群
48. 上室古墳群
49. 小釜谷古墳群
50. 西山(要塞)城址
51. 清水奥古墳群
52. 林古墳群
53. 佐藤遺跡
54. 山根屋遺跡
55. 道の上遺跡
56. 中林遺跡
57. 野田歎遺跡
58. 西江遺跡
59. 二野遺跡
60. 光坊寺古墳群
61. 土井遺跡
62. 土井城址
63. 嘉山古墳群
64. 横田東古墳群
65. 横田遺跡
66. 藤木城址
67. 大倉遺跡
68. 忠田山遺跡
69. 御供川遺跡
70. 四日市古墳
71. 清水谷遺跡
72. 塚の臺遺跡
73. 二本松遺跡
74. 岸本下遺跡
75. 岸本城址
76. 頼重古墳群
77. 日の本古墳群
78. 七つ塚古墳群
79. 烏田奥古墳群
80. 術峰古墳群
81. 二条山古墳群
82. 塚の鼻古墳群
83. 山平古墳群
84. 育野城址
85. 大開古墳
86. 天堤古墳群
87. 地藏ヶ谷古墳群

53~75は中絶関係発掘遺跡一覧表の番号と同じ



第1図 阿哲郡哲西町遺跡分布図

第2図 哲西町地質図

やま　ね　や
山　根　屋　遺　跡　(54)

例　　言

1. 本報告書は、日本道路公団の委託により、岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる、埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。

2. 遺跡は阿哲郡哲西町上神代字山根屋に所在する。

3. 発掘調査は1976年1月16日から1976年9月5日まで実施し、井上弘、竹田勝が1976年3月31日まで担当、4月1日からは竹田、岡本寛久の担当となった。しかし井上は中林遺跡を、岡本は道上遺跡を主に担当した関係で、竹田が主になり全期間を担当した。

また発掘調査にあたっては下記の方々から実測などの援助を受けた。

滝本正志（奈良大学）、西村尋文（四国学院大学）

4. 発掘調査にあたっては地域住民の方々にお世話になり、また発掘作業は下記の方々の御協力によって行われた。記して感謝の意を表したい。

男知合音一、小豆澤勲一、福田宮二、福原章、藤原登、奈須岩根、塙本武志、内田忠美、三輪武志、田辺光男、入江繁一郎、難波石男、奈須真吾、嶋田孝志、田辺寅雄、野田常吉、武坂繁男、畠勇、内田義一、内田照明、西川仁徳、谷本繁、大原泉、楳原龍、小林栄、三村富士夫、田中一安、田中尚、西川茂成、木村利久、内田信恵、土星光子、小豆澤英子、小川島子、高山常子、嶋田波子、福原桂子、岡西文与、千原美屋野、赤場好子、吉岡ふみ子、小谷良子、楳原常子、田原毎世、木下絹子、千原康代、西川マスヨ、忠田小夜子（事務担当）

5. 遺物整理は横穴式石室関係を岡本が、その他は全て竹田が行った。また復元作業においては現地において忠田小夜子に、分室では坪井和江、細田美代子の援助を受けた。

なお出土遺物は岡山市西古松265、岡山県教育庁文化課分室に保管している。

6. 報告書作成は竹田勝、岡本寛久があたった。執筆分担は、第3章第3節の1号墳と古墳出土の須恵器についてと、第4章第4節を岡本が、その他は竹田が担当編集を行った。

なお報告書作成にあたっては、近藤友子、村岡久子、山尾真由美、塩見康代、山本悦世の援助をうけた。

7. 石棺の石材については三宅寛氏（岡山理科大学教授）に鑑定を依頼した。

8. 本書に掲載した遺跡分布図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。（承認番号 昭52中複、第200号）

山根屋遺跡(54)

本文目次

第1章 調査の経緯	27
第1節 調査に至る経過	27
第2節 調査の経過	28
第2章 遺跡の環境と現状	31
第3章 遺跡	35
第1節 遺跡の概要	35
第2節 弥生時代の遺構と遺物	38
I 住居址	38
II 住居址状遺構	46
III 溝状遺構	70
IV 遺構に伴わない遺物	76
第3節 古墳時代の遺構と遺物	77
I 古墳時代前期の墳墓	77
(a) 箱式石棺墓	77
(b) 石蓋土壙墓	84
(c) 配石土壙墓	86
(d) 土壙墓	86
(e) 古墳	87
II 古墳時代後期の墳墓	98
(a) 箱式石棺墓	98
(b) 石蓋土壙墓	102
(c) 古墳	103
第4節 古代・中世の遺構と遺物	125
I 火葬墓	125
II 住居址状遺構	126
III 古道	128
IV その他の遺物	128
第4章 総括	129
第1節 弥生式土器について	129
第2節 弥生時代の住居址・住居址状遺構について	144
第3節 古墳時代前期の墳墓について	146
第4節 古墳時代後期の墳墓について	148

山根屋遺跡(54)

図 目 次

第1図	グリッドの設定とトレンチの位置	28
第2図	山根屋遺跡地形図	31
第3図	遺跡分布図(S:50000分の1)	32
第4図	調査範囲と遺構全体図	35
第5図	遺構全体図	36・37
第6図	3号住居址<№11>平面図・断面図と出土遺物	38
第7図	21号住居址<№32>平面図・断面図	40
第8図	21号住居址<№32>出土遺物	41
第9図	32号住居址<№61>出土遺物	41
第10図	39号住居址<№58>平面図・断面図	42
第11図	39号住居址床面出土遺物	43
第12図	39号住居址周溝出土遺物	43
第13図	39号住居址出土遺物	44
第14図	39号住居址出土遺物	45
第15図	39号住居址出土遺物	46
第16図	1号住居址状遺構<№4>平面図・断面図	47
第17図	25号住居址状遺構<№69>平面図・断面図	47
第18図	28号住居址状遺構<№57>平面図・断面図	47
第19図	4号住居址状遺構<№18>平面図・断面図	48
第20図	5号住居址状遺構<№17>平面図・断面図	48
第21図	6号住居址状遺構<№44>平面図・断面図と出土遺物	49
第22図	7号・8号住居址状遺構<№19・24>平面図・断面図	50
第23図	7号住居址状遺構<№19>出土遺物	51
第24図	8号住居址状遺構<№24>出土遺物	52
第25図	9号～11号住居址状遺構<№25～27>平面図・断面図	53
第26図	9号住居址状遺構<№25>出土遺物	54
第27図	10号住居址状遺構<№26>出土遺物	54
第28図	11号住居址状遺構<№27>出土遺物	54
第29図	12号住居址状遺構<№21>平面図・断面図	55
第30図	12号住居址状遺構<№21>出土遺物	56
第31図	12号住居址状遺構<№21>出土遺物	57
第32図	13号住居址状遺構<№23>平面図・断面図と出土遺物	58
第33図	14号住居址状遺構<№30>平面図・断面図	59

山根屋遺跡(54)

第34図	15号・16号住居址状遺構<№31・37>平面図・断面図	59
第35図	14号住居址状遺構出土遺物	60
第36図	17号住居址状遺構出土遺物	60
第37図	22号住居址状遺構<№38>平面図・断面図	60
第38図	22号住居址状遺構出土遺物	60
第39図	23号住居址状遺構<№53>平面図・断面図	62
第40図	26号住居址状遺構<№65>平面図・断面図	62
第41図	27号住居址状遺構<№70>平面図・断面図	62
第42図	26号住居址状遺構出土遺物	63
第43図	34号住居址状遺構出土遺物	63
第44図	34号・35号住居址状遺構<№63・66>平面図・断面図	63
第45図	35号住居址状遺構出土遺物	63
第46図	29号～31号住居址状遺構<№59・60・62>32号住居址<№61>平面図・断面図	64
第47図	29号住居址状遺構<№59>出土遺物	65
第48図	30号住居址状遺構<№60>出土遺物	65
第49図	31号住居址状遺構<№62>出土遺物	65
第50図	31号住居址状遺構<№62>出土遺物	66
第51図	33号住居址状遺構<№64>平面図・断面図	67
第52図	38号住居址状遺構<№75>平面図・断面図	67
第53図	33号住居址状遺構<№64>出土遺物	68
第54図	38号住居址状遺構<№75>出土遺物	68
第55図	36号・37号住居址状遺構<№74・71>平面図・断面図	69
第56図	2号溝状遺構<№56>24号住居址状遺構<№77>平面図・断面図	71
第57図	2号溝状遺構遺物出土状態	72
第58図	2号溝状遺構<№56>出土遺物	73
第59図	2号溝状遺構<№56>出土遺物	74
第60図	2号溝状遺構<№56>出土遺物	75
第61図	遺構に伴わない遺物	76
第62図	1号墓<№2>平面図・断面図	77
第63図	2号墓<№5>平面図・断面図と出土遺物	78
第64図	2号墓<№5>墓壙内出土遺物	79
第65図	3号墓<№12>平面図・断面図	79
第66図	4号墓<№9>平面図・断面図	80
第67図	11号墓<№16>平面図・断面図	81
第68図	12号墓<№40>平面図・断面図と出土遺物	82

山根屋遺跡(54)

第69図 17号墓<№47>(上)、18号墓<№48>(下)平面図・断面図	83
第70図 6号墓<№1>平面図・断面図	85
第71図 5号墓<№10>平面図・断面図	85
第72図 7号墓<№14>平面図・断面図	85
第73図 10号墓<№15>平面図・断面図	86
第74図 13号墓<№39>平面図・断面図と出土遺物	86
第75図 8号墓<№8>(上)、9号墓<№20>(下)平面図・断面図	87
第76図 4号墳<№7>平面図・断面図	88
第77図 4号墳<№7>周溝出土遺物	89
第78図 5号墳<№50>平面図・断面図	89
第79図 5号墳<№50>第1主体部平面図・断面図と出土遺物	90
第80図 5号墳第2主体部と出土遺物	91
第81図 6号墳<№49>平面図・断面図	92
第82図 6号墳第1主体部(上)、第2主体部(下)平面図・断面図	93
第83図 7号墳平面図	94
第84図 7号墳第1主体部<№51>平面図・断面図	95
第85図 7号墳第1主体部棺外出土遺物	96
第86図 7号墳第2主体部<№52>(上)平面図・断面図と出土遺物(下)	97
第87図 14号墓<№41>平面図・断面図と棺外遺物	98
第88図 15号墓<№22>平面図・断面図と出土遺物	99
第89図 19号墓<№72>平面図・断面図	100
第90図 20号墓<№76>平面図・断面図	101
第91図 22号墓<№68>平面図・断面図	102
第92図 21号墓<№73>平面図・断面図	102
第93図 16号墓<№42>平面図・断面図	103
第94図 1号墳墳丘測量図	104
第95図 1号墳墳丘断面図	105
第96図 1号墳石室実測図	106・107
第97図 1号墳出土遺物	109
第98図 1号墳出土の須恵器(1)	110
第99図 1号墳出土の須恵器(2)	111
第100図 1号墳石室床面平面図	112
第101図 2号墳<№54>平面図・断面図	115
第102図 2号墳<№54>石室実測図	116
第103図 2号墳<№54>石室平面図	117

山根屋遺跡(54)

第104図 2号墳出土遺物	118
第105図 3号墳<№55>平面図・断面図	120
第106図 3号墳<№56>石室実測図	121
第107図 3号墳<№56>石室平面図	122
第108図 3号墳出土の須恵器	122
第109図 3号墳出土の遺物	123
第110図 23号墓と蔵骨器	125
第111図 蔵骨器	126
第112図 2号住居址状遺構<№6>平面図・断面図	127
第113図 2号住居址状遺構出土遺物	128
第114図 中世の土鍋	128
第115図 弥生式土器分類図(1)	131
第116図 弥生式土器分類図(2)	132
第117図 弥生式土器分類図(3)	133
第118図 弥生式土器分類図(4)	134
第119図 弥生式土器分類図(5)	135
第120図 弥生式土器分類図(6)	137
第121図 弥生式土器分類図(7)	138
第122図 弥生式土器分類図(8)	139
第123図 山根屋遺跡出土弥生式土器編年表	142・143
第124図 弥生時代の遺構	144
第125図 古墳時代の墳墓	146

表 目 次

表1 新旧遺構番号対比表	36・37
表2 1号墳出土須恵器観察表	113・114
表3 2号墳出土須恵器観察表	119
表4 3号墳出土須恵器観察表	123・124

図 版 目 次

図版1 上神代地域の航空写真	
図版2 1 遺跡遠景(南より)	
2 遺跡遠景(林道より下側の調査終了後)	

山根屋遺跡(54)

- 図版3 1 上神代の風景(南から上流を望む)
2 上神代の風景(山根屋遺跡より下流を望む)
- 図版4 1 3号住居址
2 21号住居址
- 図版5 1 39号住居址
2 32号住居址
- 図版6 1 1号住居址状遺構
2 28号住居址状遺構
- 図版7 1 7・8号住居址状遺構(西より)
2 7・8号住居址状遺構(南より)
- 図版8 1 14号住居址状遺構
2 15号住居址状遺構
- 図版9 1 12号住居址状遺構
2 9~11号住居址状遺構
- 図版10 1 17~20号住居址状遺構
2 22号住居址状遺構
- 図版11 1 23号住居址状遺構
2 27号住居址状遺構
- 図版12 1 29~31号住居址状遺構
2 30・31号住居址状遺構
- 図版13 1 33号住居址状遺構
2 34・35号住居址状遺構(手前が35号)
- 図版14 1 2号溝状遺構
2 2号溝状遺構遺物出土状態
- 図版15 1 39号住居址出土遺物
- 図版16 1 12号住居址状遺構出土遺物
- 図版17 1 2号溝状遺構出土遺物(1)
- 図版18 1 2号溝状遺構出土遺物(2)
- 図版19 1 1号墓
2 1号墓蓋石除去
- 図版20 1 2号墓
2 2号墓蓋石除去
- 図版21 1 2号墓石棺内出土遺物
2 2号墓墓壙内出土遺物

山根屋遺跡(54)

- 図版22 1 3号墓
22 2 3号墓蓋石除去
- 図版23 1 4号墓
2 4号墓蓋石除去
- 図版24 1 5号墓
2 5号墓蓋石除去
- 図版25 1 6号墓
2 6号墓蓋石除去
- 図版26 1 2号墓周辺の墳墓群(東から)
2 2号墓周辺の墳墓群(北から)
- 図版27 1 7号墓
2 7号墓蓋石除去
- 図版28 1 10号墓
2 4号墳周辺の全景(北より)
- 図版29 1 11号墓
2 11号墓蓋石除去
- 図版30 1 12号墓
2 12号墓蓋石除去
3 12号墓出土遺物
- 図版31 1 13号墓断面
2 13号墓
3 13号墓出土遺物
- 図版32 1 13号墓遺物出土状態
2 17号墓
- 図版33 1 18号墓
2 18号墓蓋石除去
- 図版34 1 4号墳全景
2 4号墳周溝内出土遺物
- 図版35 1 4号墳主体部
2 4号墳主体部横断面
- 図版36 1 5号墳全景(西より)
- 図版37 1 5号墳第1主体部蓋石除去
2 第1主体部出土遺物
- 図版38 1 5号墳第2主体部
2 第2主体部出土遺物

山根屋遺跡(54)

- 図版39 1 6号墳検出状態
2 6号墳全景
- 図版40 1 6号墳第1主体部蓋石除去
2 6号墳第2主体部
- 図版41 1 6号墳第2主体部蓋石除去
2 7号墳全景
- 図版42 1 7号墳棺外遺物出土状態
2 7号墳蓋石除去
- 図版43 1 7号墳蓋石除去
2 7号墳第2主体部遺物出土状態
- 図版44 1 7号墳棺外遺物
2 7号墳第2主体部出土遺物
- 図版45 1 14号墓
2 14号墓棺外遺物
- 図版46 1 15号墓
2 15号墓蓋石除去
3 15号墓出土遺物
- 図版47 1 16号墓
2 16号墓蓋石除去
- 図版48 1 19号墓
2 19号墓蓋石除去
- 図版49 1 20号墓
2 20号墓蓋石除去
- 図版50 1 22号墓
2 22号墓蓋石除去
- 図版51 1 1号墳全景(南東より)
2 1号墳全景(北西より)
- 図版52 1 1号墳周溝・墳丘断面(南西より)
2 1号墳羨道部閉塞石検出状況(北西より)
- 図版53 1 1号墳横穴式石室北西側壁(東より)
2 1号墳横穴式石室南東側壁(北より)
- 図版54 1 1号墳横穴式石室羨道閉塞状況(北東より)
2 1号墳玄室内遺物出土状況(南東より)
- 図版55 1 1号墳墓壙断面(北東より)
2 1号墳墓壙断面(南西より)

山根屋遺跡(54)

- 図版56 1 1号墳墓壇全景(北東より)
2 1号墳横穴式石室北西側壁裏側(北西より)
- 図版57 1 2号墳全景(北より)
2 2号墳全景(西より)
- 図版58 1 2号墳南北断面と20号墓
2 2号墳東西断面
- 図版59 1 2号墳墳丘除去後の全景
2 2号墳閉塞石(石室内から)
- 図版60 1 2号墳墓道
2 2号墳石室内の遺物出土状態
- 図版61 1 3号墳全景(南より)
2 3号墳主軸断面(奥壁後方)
- 図版62 1 3号墳横断面
2 3号墳敷石除去
- 図版63 1 3号墳石室内
2 3号墳実測風景
- 図版64 1 1号墳出土遺物
- 図版65 1 2号墳(左上2・右下6)・3号墳・15号墓(左1・2)出土遺物
- 図版66 1 1号墳出土の鉄器
2 2号墳出土遺物
3 3号墳出土遺物
- 図版67 1 23号墓(火葬墓)
2 23号墓蓋石除去
- 図版68 1 23号墓蔵骨器取り上げ後
2 23号墓蔵骨器
- 図版69 1 2号住居址状遺構
2 2号古道
- 図版70 1 1号古道
2 1号古道敷石
- 図版71 1 蔵骨器
2 発掘調査終了後の遺跡遠景(南より)
- 図版72 1 作業風景
2 調査参加者

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の分布調査は、文化庁と日本道路公団の「覚書」に従い、岡山県教育委員会が実施することになった。

第一次整備区間の落合インターチェンジ以東は、1967年に分布調査を実施し、落合以西は1969年度に実施した。

落合以西の第二次整備区間の分布調査は、1968年に路線が内定した後に、高梁教育事務所を中心に関係市町村による分布調査委員会を設置して行なった。この結果に基づき新見以西のルートが決定されたが、道路建設用地内においては8遺跡が確認されていた。しかしこの段階においては山根屋遺跡をはじめ、多くの遺跡は未発見の状態であった。ところが1974年になって発掘調査実施計画策定のため、細部にわたって検討した結果、未発見遺跡の存在が考えられ、なおかつ工事中発見の防止と調査期間、調査体制の整備などに万全を期するため、再度分布調査を実施することに決定した。

分布調査は1974年8月27・28日に文化課と津山教育事務所とで実施した。その結果これまで確認されていた8遺跡の3倍以上の遺跡が新たに発見され、総計32遺跡となった。山根屋遺跡もこの時点で発見されたもので、丘陵斜面中腹の林道崖面に住居址状の黒い落込みが認められ、若干の須恵器片などを表採したことによる。

このように多くの遺跡が新たに発見されたことから新見以西の調査工程は非常に厳しい状況になることが予想され、分布調査の重要さと、方法について考えさせられることになった。

分布調査について、1969年当時はルート内の伐採などが行なわれていなかったことなども原因として考えられるが、市町村に委嘱したため市町村の文化財保護委員などが中心となり、専門的知識を有する人の参加が少なかったことにもよるであろう。さらに山間部という辺境的なイメージが遺跡の少なさを正当化した面も否定できず、また山根屋遺跡などのように、従来では考えられないような丘陵の急斜面などにも遺跡が存在したことでも原因であろう。いずれにしても山間部での遺跡の立地を考えさせられ、また分布調査の重要性を痛感した。

新見以西の発掘調査は1975年度より本格的に開始され、調査体制も津山教育事務所から文化課、高梁教育事務所に移った。山根屋遺跡の発掘は当初計画では1976年6月から2か月間の予定であったが、他遺跡の調査期間の変更などによって、結局1976年1月17日から開始することになった。途中佐藤遺跡などの調査も実施したため終了は9月5日であるが、実質は7か月を費やした。

第2節 調査の経過

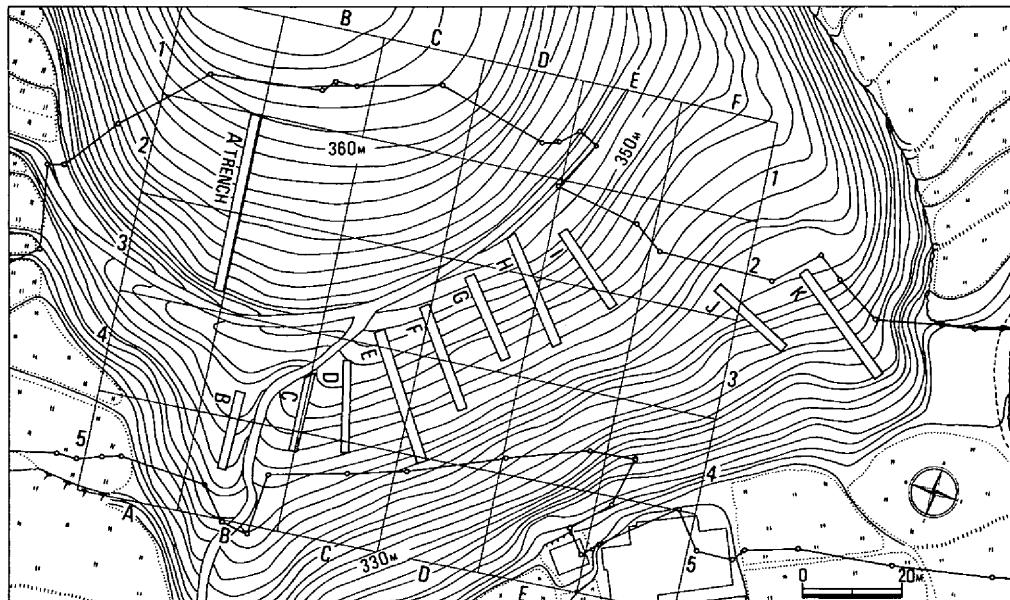
山根屋遺跡は分布調査の段階で住居址状の落込みと若干の須恵器片が認められたのみで、遺跡の性格、あるいは遺跡の広がりなどについては不明な点が多かった。特に林道より下側は急斜面と言うことで、遺構の存在は疑問視されたため、全面表土剥ぎを開始する前にトレンチ調査を行なった。

トレンチは林道より下側を中心に、AからKまで設定した。その結果、AからIまでのトレンチに、弥生時代を中心にして古墳時代までの遺構遺物が検出された。しかしJ～Kのトレンチでは遺構も遺物も存在しないことがわかった。山根屋遺跡では急斜面に加えて山裾に人家があり、土捨場の確保に苦心したが、F～Iトレンチの南側をそれにあてた。

全面調査は工事工程との関係で、林道より下側を先に実施することにした。Bトレンチ側からC・Dトレンチの方向へ、表土剥ぎの作業を行なっていったが、尾根状を呈する位置に設定した、Bトレンチ周辺から墳墓群が検出されはじめた。またE～Iトレンチでは斜面を階段状に切込んだ、弥生時代のものと考えられる住居址状の遺構が検出された。これらの住居址状の遺構は住穴のないものが多いが、火所を持つものが認められる。

Hトレンチでは横穴式石室が検出され、山根屋1号墳とした。また遺構は性格を考えず、とりあえず1番から順番に遺構番号を付する方法をとった。したがって1号墳は№43となる。

林道より下側の発掘は5月初旬に終了した。その後佐藤遺跡の調査を一部行い、6日1日より上側の発掘を開始した。上側の部分については全面にわたり遺構の存在が考えられ、土捨場の確保が問題になった。各種の案を検討した結果、林道を利用してダンプカーによって表土を運搬する方法をとっ



第1図 グリッドの設定とトレンチの位置

山根屋遺跡(54)

た。しかし林道とは言え、奥には人家があり、生活道路となっていたため多くの苦労があった。上側においても弥生時代の遺構、墳墓、横穴式石室、火葬墓などが検出された。横穴式石室に関しては、伐採後においてもそれらしい痕跡は認められず、表土剥ぎ後確認された。

遺構の実測は住居址などが20分の1、古墳の主体部、墳墓などは10分の1で行なった。

表土剥ぎ後の地形測量図は第三紀層上面(黄褐色土層)での等高線である。これがかならずしも当時の生活面ではないが、黒色土の面で遺構を検出することが困難なため、便宜上そうしたものである。

当初の予想をこえて遺構遺物が出土したため調査が長引き、また道上古墳などの新規発見の調査が重なり、専従の調査員1人が実測を行い、かつ遺構の検出や作業を見るということもあり、非常に厳しい調査であった。したがって諸々の問題点を多く抱えてはいたが、一応後述するような成果を得て1976年9月5日に終了した。

日誌抄

1976年1月17日、調査開始。発掘に先立ち調査地域内の整備、あるいは機材小屋などをつくる。調査担当者は井上弘、竹田勝であるが、井上は津山の収蔵庫において報告書作成のため当分の間竹田が専従した。

1月19日～23日、林道より下側を中心A～Kまでのトレンチを設定した。その結果弥生時代の遺構、古墳時代の墳墓群が確認された。

1月31日～2月28日、Bトレンチ周辺の遺構検出作業と墳墓群の実測を行ったが、霜柱と雪で悪戦苦闘する。多くの墳墓群が検出されたが副葬品を持つものが少なく、作業員一同ガッカリする。

3月1日～3月6日、C、Dトレンチの方向へと表土剥ぎは進行していったが、土捨場がないため、ベルコンを長く連結してH・Iトレンチの南側まで運搬した。平行してBトレンチ周辺墳墓群の写真撮影、実測、解体作業を行う。3日1日から井上が津山収蔵庫より帰って来たが、中林遺跡を担当するため、さらに一人の状態が続く。

3月8日～3月16日 Bトレンチ周辺墳墓群の実測を終了した。No.17の住居址状遺構の床面に箱式石棺墓と配石土括墓が検出された。住居址状遺構が廃棄されてから墳墓が作られたものと考えられた。

3月17日～3月27日 Hトレンチまで表土剥ぎを行い、1号墳を検出した。これらの斜面では細長い階段状の住居址状遺構が検出された。遺物の多くは流れ込んだ状態で発見された。

3月29日～3月31日、1号墳の実測を中心に住居址状遺構の検出作業を行う。

4月4日～4月10日、調査員の移動があり、4月から竹田勝、岡本寛久が担当することになった。1号墳の実測を中心に、周辺の住居址状遺構の検出作業、実測を行なった。

4月12～4月24日 住居址状遺構の実測と共に、柱穴の検出に努めたが不明のものが多かった。これらのものは急斜面のため残存状態が悪く、どのような構造を想定してよいのかわからない。しかし火所なども検出されたため、住居に関係する遺構と考えた。

山根屋遺跡(54)

4月25日～5月5日、東端の住居址と住居址状遺構を実測した。また遺構検出面での地形測量も行った。下の方では重機が忙がしそうに動いている。

5月6日 本日をもって林道より下側はすべて終了した。

5月20日 本日より林道から上側の発掘を開始した。調査は竹田、岡本であるが岡本は道上遺跡の発掘に専従することになった。

5月22～6月7日 北東側から表土剥ぎを開始した。意外と表土は浅く、№47、№48などの箱式石棺は蓋石が無くなっていた。№49、№50周辺は地表面から観察した時点では斜面がやや緩やかになっていた。表土剥ぎの際№51付近より鉄斧が出土した。

6月8日～6月12日 №51、52の検出清掃を行う。棺外に遺物の副葬が認められ、先に出土した鉄斧などはこれに伴うものと考えられる。

6月13日～6月26日 №51、52の実測を中心に北東部分の遺構検出作業を行う。

6月27日～7月7日、北東部の遺構検出を中心とし、西へ向って表土剥ぎを行う。ここも墳墓が多いが、林道下側で検出されたものに比較して、石材の選択がルーズになっているようであった。

7月8日～7月18日 №49の実測と№58の検出を行う。№58は住居址の周囲に大きな溝を有するものであった。№58の北側に3号墳が検出された。すでに墳丘は流失しており、表土剥ぎの段階で発見された。遺物の多くは№58の中にあった。

7月19日～7月27日 №59～62の検出作業や写真撮影を行う。表土剥ぎもかなり進行した。

7月28日～8月3日 №59～62の実測を行う。表土剥ぎはすべて終了し、作業員一同感概深げに語り合う。作業後懇親会を行う。

8月4日～8月17日 全員で検出作業を行い出したため忙がしくなったが、学生の参加があり助かった。2号墳、3号墳の検出作業終了。

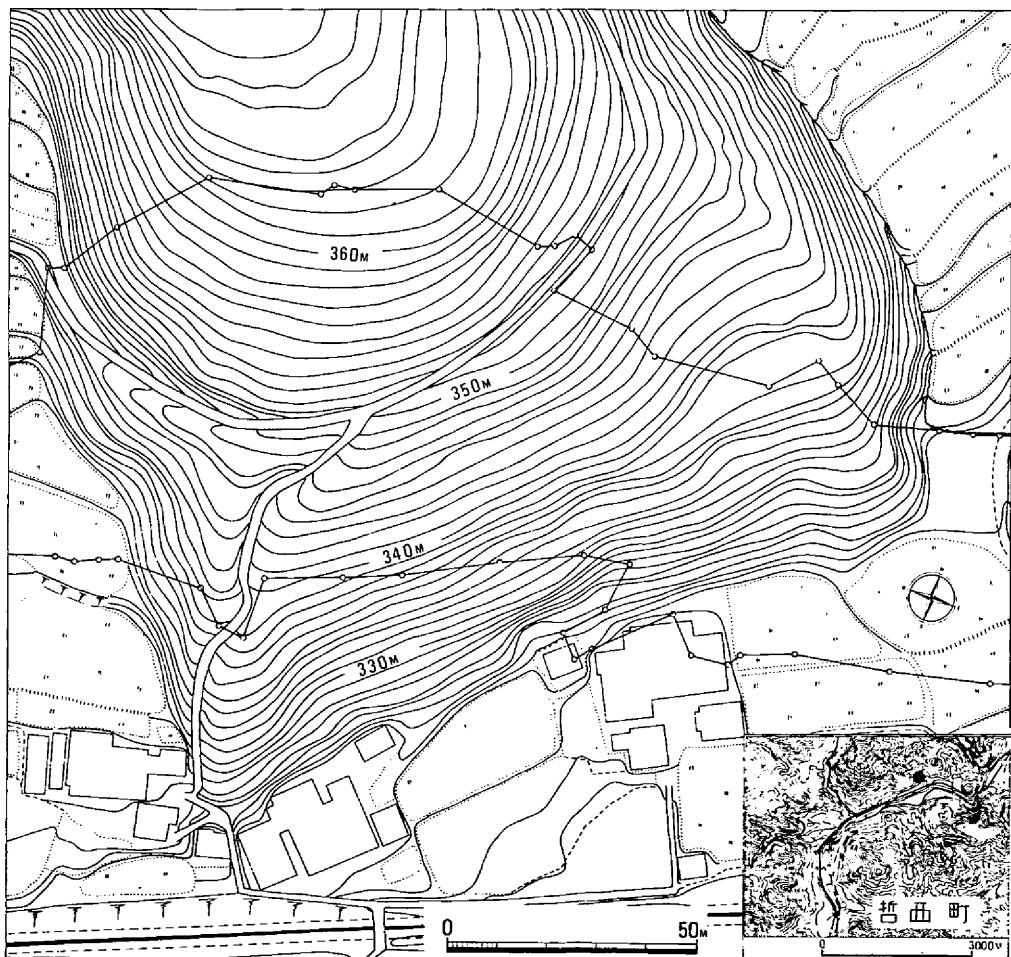
8月18日～8月31日 2号墳実測終了。№50の実測、3号墳の実測などを行う。検出作業はどんどん進行するが、実測が追いつかず苦労する。

9月1日～9月4日 地形測量を行う。3号墳実測終了。

9月5日 発掘調査完了。使いなれた作業小屋を解体する作業員も、時折手を休めては、下側で遺跡を崩している重機を眺めていた。

第2章 遺跡の環境と現状

山根屋遺跡は神代川に面した丘陵斜面に位置する。神代川は哲西町を二分するように北流しているが、その両岸には狭い沖積地が形成されている。この沖積地に向って丘陵が枝状に発達しているが、神代川の東側の山々は吉備高原の北端をなし、西側の山々は中国山地へ連なるものである。両岸とも比較的急峻な山に囲まれている神代川は、古代においては両岸の山際まで氾濫原であったと考えられる。したがって両岸の丘陵上に位置する弥生時代以後の集団は、水稻農耕の適地を、この神代川の沖積地に見いだすことはできなかったと思われる。そこで発達した開析谷を利用した谷水田などが考えられ、また緩斜面、あるいは丘陵平担部での畑作などを考えなければならないだろう。

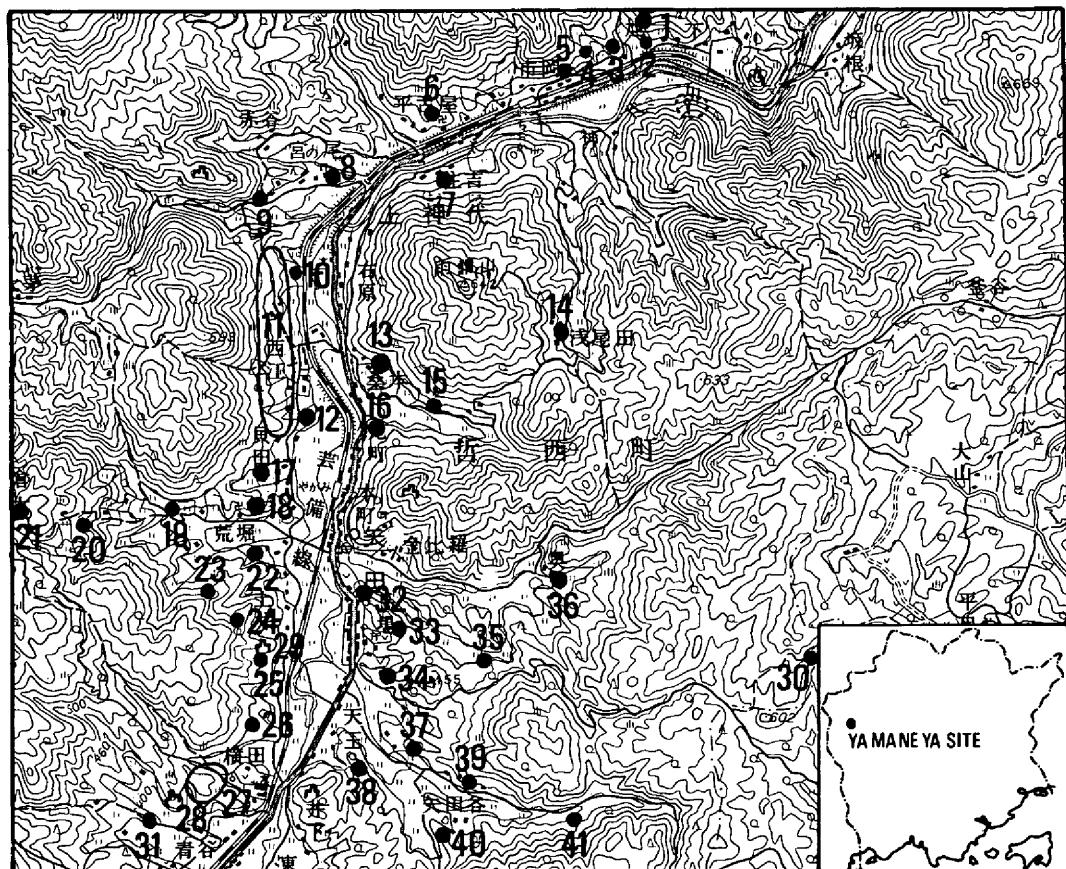


第2図 山根屋遺跡地形図

山根屋遺跡(54)

哲西地域の遺跡は、その多くが神代川両岸の丘陵上、あるいは扇状地上に認められるが、開析谷の奥部や、吉備高原上にも発見されている。これらの遺跡の多くは弥生時代以後のものであるが、それ以前の遺跡も中国縦貫道建設に伴う調査で明らかになりつつある。

哲西地域における最古の遺物は二野遺跡出土のナイフ型石器と尖頭器であろう(註1)。いずれも先土器時代に使用されていた狩猟具である。今日まで先土器時代の遺跡はほとんど瀬戸内海側でしか



第3図 遺跡分布図 (S:50,000分の1)

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 温光庵古墳群 | 12. 山王子丸古墳群 | 23. 竹川内横穴群 | 34. 武内古墳群 |
| 2. 佐藤遺跡 | 13. 桑本古墳群 | 24. 愛宕山横穴群 | 35. 郷ヶ鳴古墳群 |
| 3. 山根屋遺跡 | 14. 浅尾田古墳群 | 25. 鳴山古墳群 | 36. 奥古墳群 |
| 4. 道の上遺跡 | 15. 水江古墳群 | 26. 横田東古墳群 | 37. 室ヶ歎古墳群 |
| 5. 中林古墳群 | 16. 浪方古墳群 | 27. 横田遺跡 | 38. 天王奥古墳群 |
| 6. 野田畠遺跡 | 17. 二野遺跡 | 28. 藤木城址 | 39. 上川内古墳群 |
| 7. 実本古墳群 | 18. 光坊寺古墳群 | 29. 土井城址 | 40. 叶谷古墳群 |
| 8. 宮の尾遺跡 | 19. 塚原古墳群 | 30. 横路古墳 | 41. 腰刈古墳群 |
| 9. 宝堂古墳群 | 20. 家坂遺跡 | 31. 大倉遺跡 | |
| 10. ひきご塚古墳 | 21. 倉木古墳群 | 32. 馬場遺跡 | |
| 11. 西江遺跡 | 22. 土井遺跡 | 33. 登宇の畠古墳群 | |

山根屋遺跡(54)

発見されておらず、山間部での発見は注目されるものである。

縄文時代になるとかなりの遺跡が認められ、早期の押型文土器が土井上遺跡、馬場遺跡で出土している(註2)。一般的に早期は小さな集団と考えられており、移動の頻繁なことが知られている。これらの遺跡もそうしたもの一つで短期間の居住を示すものと考えられる。前期は塚の峯遺跡(註3)で土器が出土している。この土器はこれまで知られている土器とは異なっており、類例は少ない。おそらく山間部に分布するものと考えられるが、今後の課題であろう。後期では佐藤遺跡(註4)で住居址が1軒検出されている。その他二野遺跡でも土器が出土している。晩期になると少量ではあるが、多くの遺跡から土器片が出土しており、二野遺跡、清水谷遺跡(註5)、西江遺跡(註6)、佐藤遺跡(註7)などがある。これらの遺跡から出土する土器は黒土BⅡ式と言われているものである。晩期の遺物を出土する遺跡は中国縦貫道の調査によってかなり多く知られるようになり、またこれらの遺物が出土すると、しばしば弥生前期も出土している。

弥生時代では西江遺跡、大倉遺跡(註8)、清水谷遺跡において前期の土器が出土しているが、遺跡数や規模が拡大するのは中期の後半からである。山根屋遺跡をはじめとして、1km上流の野田畝遺跡(註9)、さらに上流の西江遺跡、二野遺跡、横田遺跡、大倉遺跡、清水谷遺跡、家坂遺跡(註10)、善光院裏山遺跡(註11)、三角高下遺跡(註12)などで住居址や遺物が出土している。これらの遺跡はすべて丘陵上に位置しており、周辺に良好な水田適地は認められない。後期ではこれらの遺跡に加えて土井遺跡(註13)、土井城址(註14)、横田遺跡(註15)、藤木城址(註16)、御供川遺跡(註17)、宮の尾遺跡(註18)などがある。これらは集落址あるいは遺物散布地であるが、西江遺跡では墳墓群が検出されている。

古墳時代の集落は山根屋遺跡の北側にある佐藤遺跡(註19)をはじめ、野田畝遺跡、西江遺跡、土井城址、横田遺跡、大倉遺跡、忠田山遺跡(註20)、清水谷遺跡、塚の峯遺跡などで確認されている。

古墳時代の墳墓は後期の横穴式石室が多く、6世紀の後半にはこの地域にも多く築かれている。前半期のものは西江遺跡の弥生時代以来の墳墓群の中にも認められ、山根屋遺跡、あるいは小形の珠文鏡などが出土した横田遺跡の墳墓群がある。光坊寺古墳群(註21)では円墳の主体部から古式土師器や珠文鏡などが出土し、この地域では最も古い古墳のグループであろう。

山根屋遺跡周辺では前期に属するような墳墓は確認されてはいないが、後期の横穴式石室はすぐ北側の丘陵上(温光庵古墳群)、あるいは西側の道上古墳、そして国鉄市岡駅の裏山にも数基認められる。山根屋遺跡の位置する丘陵上にも京の段古墳と呼ばれている(註22)横穴式石室がある。また古墳と断定できないが、山根屋遺跡の対面にもそれらしい盛土が数ヶ所認められる。

このように山根屋遺跡の所在する上神代には多くの後期古墳が存在するが、この地域は国鉄芸備線坂根駅の少し上流で、両側よりせり出した丘陵によって下神代地域と区分され、上流は神代川が南に向けて大きく屈曲する宮の尾で、上流の矢田地域と区分されている。古墳群が集中する矢田地域には前方後円墳と言われているひさご塚古墳などがあり、神代川流域の中心的地域と考えられる。上神代の地域も矢田地域と関係をもちつつも、ある程度自立した単位地域と考えられないだろうか。

山根屋遺跡(54)

古代、中世の遺跡に関しては中国縦貫道建設に伴う調査で断片的ではあるが資料の蓄積がなされてきている。特にこの地域では小さな山城が多いが、中縦においても哲西地域だけで3城跡が発掘されている。やがてこれらの資料が整理されれば古代・中世の実態も解明されてくるであろう。

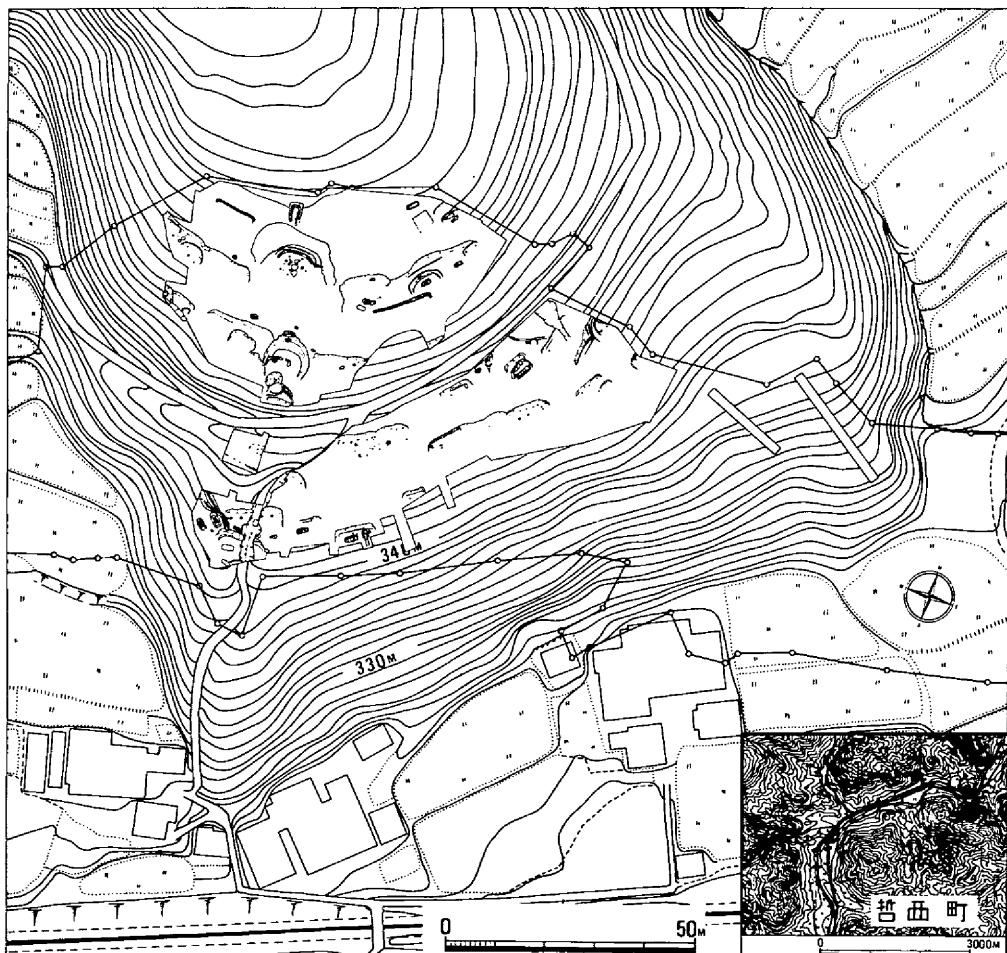
註

- 註1 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15』 岡山県教育委員会 1977年
- 註2 『岡山県埋蔵文化財報告7』 岡山県教育委員会 1977年
- 註3 中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。報告書近刊予定。
- 註4 中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。報告書近刊予定。
- 註5 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告22』 岡山県教育委員会 1977年
- 註6 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』 岡山県教育委員会 1977年
- 註7 中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。報告書近刊予定。
- 註8 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』 岡山県教育委員会 1977年
- 註9 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』 岡山県教育委員会 1977年
- 註10 藤田等 「備中哲西町弥生式遺跡」『古代吉備』第4集 1961年
- 註11 『哲西史』 哲西町 1963年
- 註12 『哲西史』 哲西町 1963年
- 註13 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』 岡山県教育委員会 1977年
- 註14 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』 岡山県教育委員会 1977年
- 註15 中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。報告書近刊予定
- 註16 中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。報告書近刊予定。
- 註17 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』 岡山県教育委員会 1977年
- 註18 哲西町遺跡台帳
- 註19 中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。報告書近刊予定。
- 註20 中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。報告書近刊予定。
- 註21 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15』 岡山県教育委員会 1977年
- 註22 『哲西史』 哲西町 1963年

第3章 遺 跡

第1節 遺 跡 の 概 要

山根屋遺跡は神代川に面した丘陵上に位置するが、今回の調査範囲は南面する斜面部分約6000m²が対象であった。遺跡はさらに丘陵頂部、あるいは東側斜面に広がるものと考えられる。しかし南側は急峻なためこれ以上広がるとは考えられず、西側も若干広がる可能性はあるが、すぐ急峻な地形になっている。したがって今回調査を実施した場所は遺跡の一部ではあるが、主要な部分があたったので

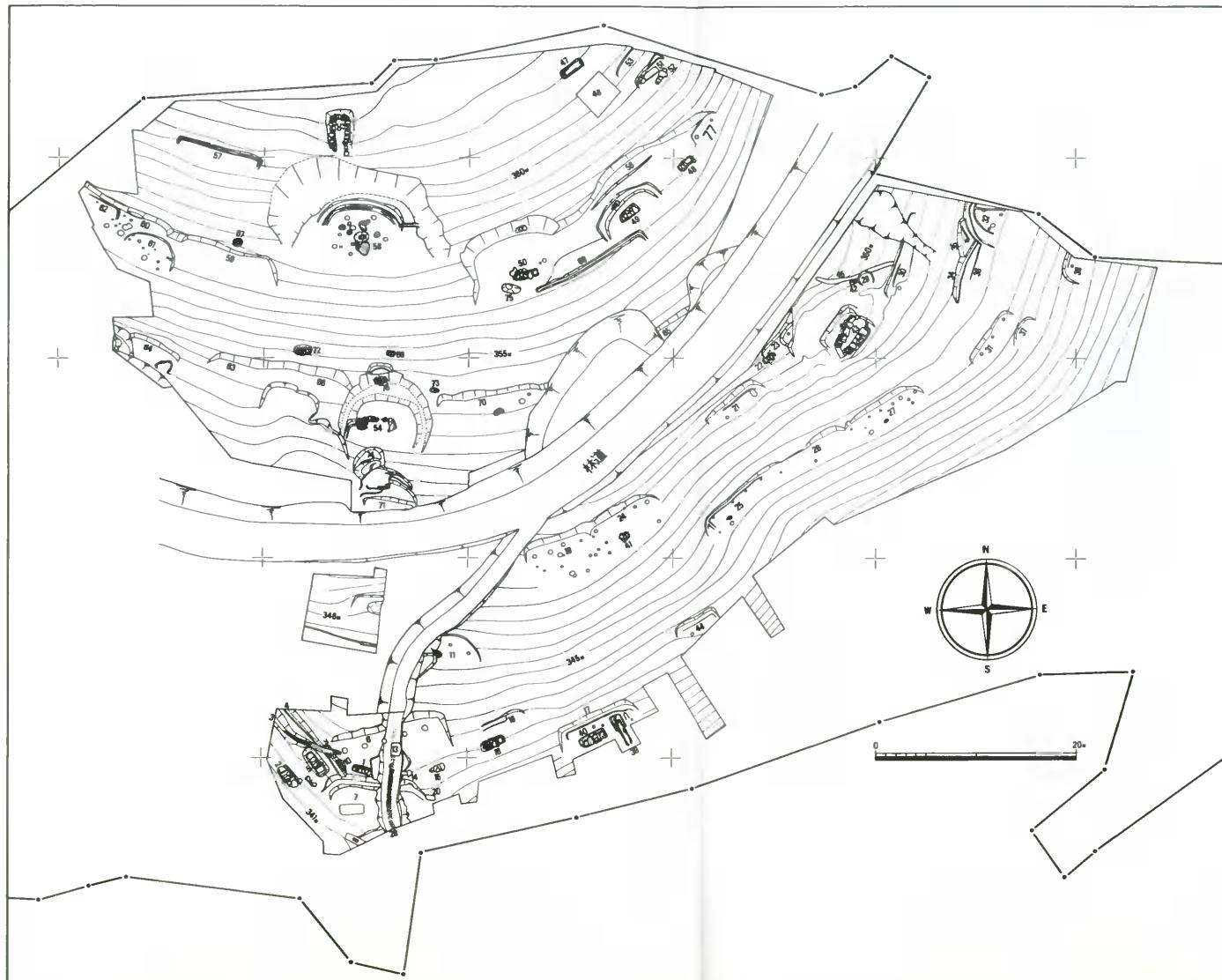


第4図 調査範囲と遺構全体図

山根屋遺跡(54)

表1 新旧遺構番号対比表

旧番号	新番号	遺構の種類	遺物	時期	備考
No.1	6号墓	石蓋土壙墓	なし	古墳前期	
No.2	1号墓	箱式石棺墓	なし	"	
No.3	1号古道	古道	なし	不明	砂利を敷いている
No.4	1号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	弥生中期	
No.5	2号墓	箱式石棺墓	刀子2本	古墳前期	墓壙内より土師器出土
No.6	2号住居址状遺構	住居址状遺構	土鍋	中世?	建物と考えられる 溝より土師器出土
No.7	4号墓	方形台状墓	主体部にはなし	古墳前期	
No.8	8号墓	土壙墓	なし	"?	
No.9	4号墓	箱式石棺墓	なし	古墳前期	上に古道がつくられている
No.10	5号墓	石蓋土壙墓	なし	"	
No.11	3号住居址	住居址	弥生式土器・石錐	弥生中期	
No.12	3号墓	箱式石棺墓	なし	古墳前期	
No.13	1号土壙	土壙	なし	不明	古道より新しい
No.14	7号墓	石蓋土壙墓	なし	古墳前期	一部古道によって破壊
No.15	10号墓	"	なし	"	
No.16	11号墓	箱式石棺墓	なし	"	
No.17	5号住居址状遺構	住居址状遺構	なし	弥生中期?	
No.18	4号住居址状遺構	"	弥生式土器	弥生中期	
No.19	7号住居址状遺構	"	弥生式土器	弥生中期	
No.20	9号墓	土壙墓	なし	古墳前期	
No.21	12号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	弥生中期	
No.22	15号墓	箱式石棺墓	須恵器	古墳後期	
No.23	13号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	弥生中期	1号墳の周溝に切られている
No.24	8号住居址状遺構	"	弥生式土器	弥生中期	
No.25	9号住居址状遺構	"	"	"	
No.26	10号住居址状遺構	"	"	"	
No.27	11号住居址状遺構	"	"	"	
No.28	2号古道	古道	なし	不明	砂利を敷いている
No.29	2号土壙	土壙	なし	不明	
No.30	14号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	弥生中期	
No.31	15号住居址状遺構	"	"	"	
No.32	21号住居址	住居址	"	"	
No.33	20号住居址状遺構	住居址状遺構	"	"	
No.34	17号住居址状遺構	"	"	"	
No.35	18号住居址状遺構	"	"	"	
No.36	19号住居址状遺構	"	"	"	
No.37	26号住居址状遺構	"	"	"	
No.38	22号住居址状遺構	"	"	"	
No.39	13号墓	配石土壙墓	刀子1	古墳前期	
No.40	12号墓	箱式石棺墓	鉈・剣	"	
No.41	14号墓	"	なし	古墳後期	
No.42	16号墓	石蓋土壙墓	なし	"	
No.43	1号墳	横穴式石室墳	須恵器・刀 鉈・金環・勾玉	"	棺外に鉄錐1刀子1
No.44	6号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	弥生中期	
No.45	1号溝	溝	なし	不明	
No.46	井戸	井戸	なし	不明	近代のものか?
No.47	17号墓	箱式石棺墓	なし	古墳前期	
No.48	18号墓	"	なし	"	
No.49	6号墳第1主体部	箱式石棺	なし	"	周溝内の箱式石棺を 第2主体部とする
No.50	5号墳第1主体部	"	鉄錐	"	周溝内の石蓋土壙を 第2主体部とする



第5図 遺構全体図

山根屋遺跡(54)

旧番号	新番号	遺構の種類	遺物	時期	備考
No.51	7号墳第1主体	箱式石棺		古墳前期	棺外より鉄斧2, 鉄鎌
No.52	7号墳第2主体	"	刀子・鎌・刀	"	
No.53	23号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	弥生中期	
No.54	2号墳	横穴式石室墳	須恵器	古墳後期	
No.55	3号墳	"	"	"	
No.56	2号溝状遺構	溝状遺構	弥生式土器	弥生中期	
No.57	28号住居址状遺構	住居址状遺構	なし	弥生?	
No.58	39号住居址	住居址	弥生式土器 石包丁・劔錐車	弥生中期	
No.59	29号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	"	
No.60	30号住居址状遺構	"	"	"	32号住居址を埋めてつくる
No.61	32号住居址	住居址	"	"	
No.62	31号住居址状遺構	住居址状遺構	"	"	
No.63	34号住居址状遺構	"	"	"	
No.64	33号住居址状遺構	"	"	"	
No.65	26号住居址状遺構	"	"	"	
No.66	35号住居址状遺構	"	"	"	
No.67	23号墓	火葬墓	なし	奈良時代	人骨残存
No.68	22号墓	箱式石棺墓	なし	古墳後期?	
No.69	25号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	弥生中期	5号, 6号墳丘下で検出
No.70	27号住居址状遺構	"	"	"	
No.71	37号住居址状遺構	"	なし	"	分布調査で発見した落込み
No.72	19号墓	箱式石棺墓	なし	古墳後期?	
No.73	21号墓	石蓋土壙墓	なし	"	
No.74	36号住居址状遺構	住居址状遺構	なし	不明	
No.75	38号住居址状遺構	"	弥生式土器	弥生中期	5号墳丘下より検出
No.76	20号墓	箱式石棺墓	なし	古墳後期	
No.77	24号住居址状遺構	住居址状遺構	弥生式土器	弥生中期	

はないかと考えられる。

遺構・遺物は弥生時代から近世に至るまで各時期のものが認められたが、主体は弥生時代の集落、古墳時代の墳墓群である。

弥生時代の遺構には住居址の他に、住居址状の遺構が多く出土した。これらは住居として機能していたものと考えられるものが多いが、柱穴のないもの、あるいは柱穴があっても壁体構のないものなどがあり、作業小屋や建物、倉庫などの可能性もある。したがってそういうものは一応住居址状遺構として記述した。

これらの住居址状遺構は等高線にそって階段状につくられており、弥生時代中期中葉から中期後半にかけての時期が考えられる。

古墳後代の墳墓群は各時期のものが認められ、形態も各種のものがある。4号墳周辺の箱式石棺墓、石蓋土壙墓、土壙墓、配石土壙墓などは古墳時代前期（註1）の中でも比較的古いものと考えられる。これに対して5号、6号墳やその周辺の箱式石棺墓は、5世紀でも比較的新しい時期の所産と考えられる。また1号墳や2号墳周辺にある小型の箱式石棺は古墳時代後期と考えられる。

奈良時代の火葬墓も一基検出され、表土剥ぎの時にも遺構は不明であるが蔵骨器が出土した。

時期は断定できないが、建物（2号住居址状遺構）が1棟検出された。これは斜面をカットし、その平坦部につくったものである。平坦部床面に接して土鍋が出土しているので、中世のものではないかと考えられる。

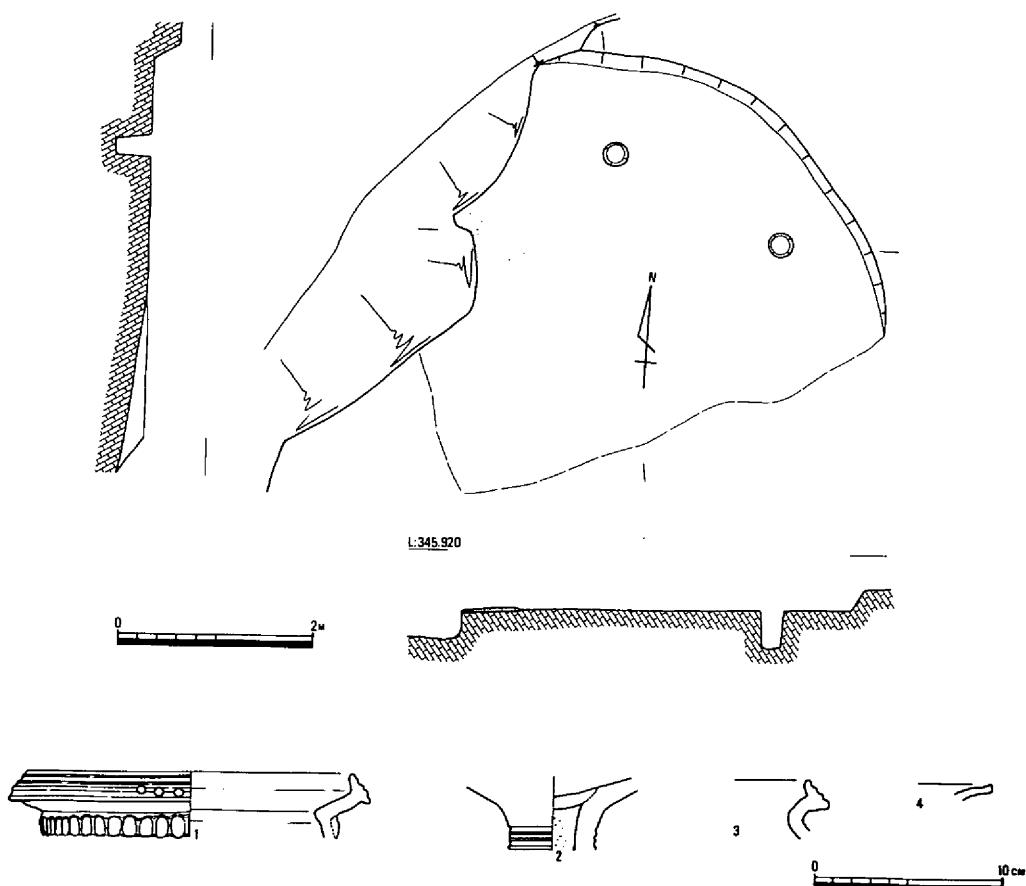
その他砂利を敷いた古道が検出されている。また井戸などもあるが、時期は不明である。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

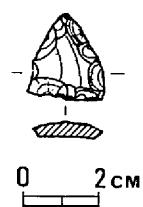
I 住居址

3号住居址<No11> (第6図)

円形を呈する住居址と考えられるが、一部は山道によって削られており、全形を知ることができない。第三紀層を掘り込んで床面を形成しているが、低い方は地山土を含む黒色土で盛土をおこない床



第6図 3号住居址<No11> 平面図・断面図と出土遺物



山根屋遺跡(54)

面にしている。柱穴は2本しか確認することができなかった。住居址の壁体に一般的に認められる溝はないが、中央には焼土があり、住居址と考えてよいだろう。遺物は黒色を呈する埋土中より、土器、石鏃、サヌカイト剝片などが少量出土している。

遺物（第6図）

1は甕で、口縁端部は上下に拡張され、円形浮文が3と1単位で施される。頸部には指頭圧痕文凸帯をもつ。3は口縁端部を上下に拡張し凹線文が3条施される。

2は高杯で、杯部に高い脚台部をもつものである。脚台部と杯部を連続して成形し、杯底部に円板を充填している。脚台の柱状部には断面が半円形を呈する沈線文が施される。

4は「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕である。口縁端部は少し上方へつまみあげている。

石鏃はサヌカイト製で、長さ2.2cm、幅2cm、重さ2.0gを測る。

これらの遺物から3号住居址は弥生時代中期後半に作られたものと考えられるが、4の土器はやや古い様相を呈している。

20号住居址<№32>（第7図）

ほぼ円形を呈する住居址と考えられ、斜面を2段に掘り込んで、一番内側に溝がつくられている。一般的には壁に接して付設されるのであるが、かなり内側になっている。またピットと連結する溝も認められる。この住居址は他の住居址状遺構を切ってつくられている。土層を観察した所見では建替の痕跡は認められず、当初から2段に掘り込まれていたものと思われる。

遺物（第8図）

出土した遺物はすべて弥生式土器で、埋土中より出土したものである。

1～5は甕である。口縁端部は上下に拡張され、凹線文が著しい。3は刻目文と円形浮文で飾られ、4は紐孔が認められる。器面調整は口縁部がヨコナデで、外面は口縁部屈曲部以下1cm以内、内面も1cm以内でしばしば面をなすことがある。胴部外面は最大径より上半が刷毛目調整、下半は笠磨きで仕上げている。内面は上半が刷毛目調整で、下半は下から上へ笠削りがなされている。色調は暗褐色、黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

6～7は脚台で、7は内面に笠削りが認められる。

8は高杯の脚部で、外面には丹が塗られている。拡張された脚端には凹線が施される。透孔はないが、線刻による三角形が施されている。内面は笠削りである。

これらの土器は凹線文が発達し、しかも甕の内面下半に笠削りが認められることから、中期後半の時期が考えられる。

32号住居址<№61>（第46図）

ほぼ円形を呈する住居址と考えられる。柱穴は不規則な配列で、壁体溝も認められない。中央には中央ピットがある。29・30号住居址状遺構はこの住居址を埋めてつくっている。

遺物（第9図）

すべて弥生式土器で、埋土中より出土した。

1～7は甕である。1～2は「く」の字状に外反する口縁をもち、端部をやや上方につまみ上げた

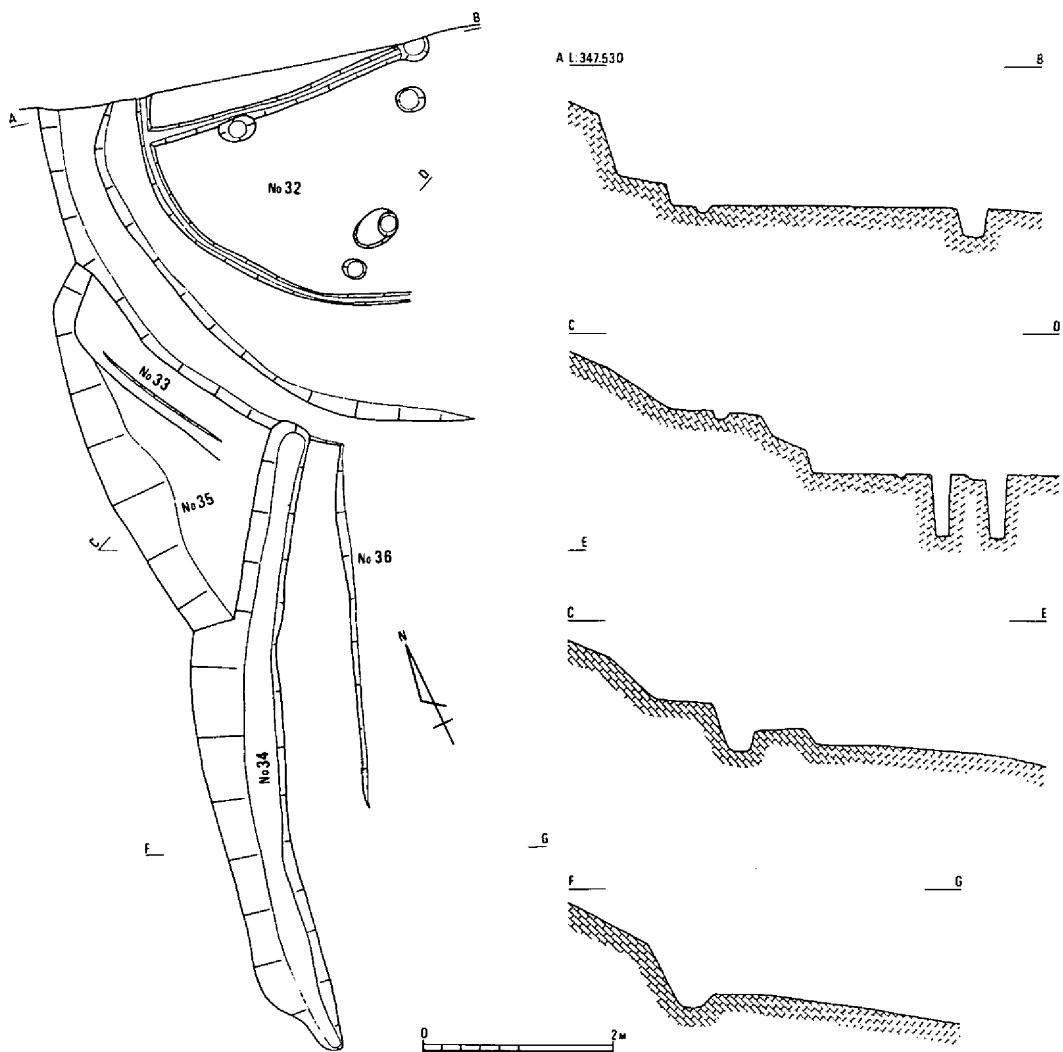
山根屋遺跡(54)

ものである。胴部内外面とも刷毛目調整が著しい。3～6は上下に拡張された口縁端面に凹線文を有するもので、胴外面は刷毛目調整、内面はナデによって仕上げられている。7は頸部に指頭圧痕文凸帯をもつもので、胴部内外とも刷毛目調整が認められる。

9はやや外反ぎみに直立した口頸部をもつもので、把手がつく。

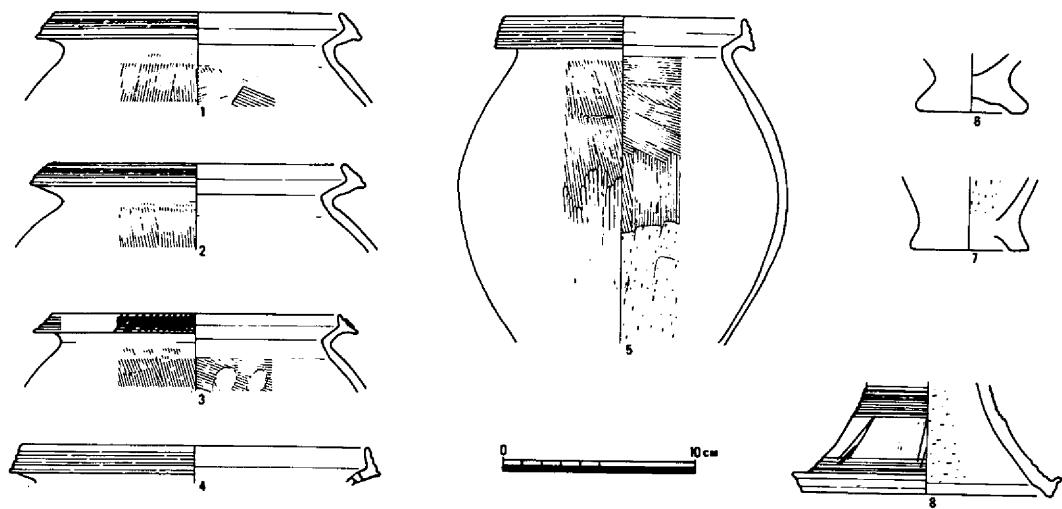
10～12は高杯である。10は口縁端部に刻目を施すものである。11も口縁部で、端部上面に浅い凹線が認められる。12は脚部で、鋸歯文が2段施される。内面は範削りである。

これらの土器は住居址の埋土より出土したものであるが、同時期とは考えられず、甕で言えば、凹線文の施されるものとないものがある。つまり1～2は凹線文が発達する以前のもので、10の高杯などもあわせ中期中葉に比定できる。その他のものは中期後半のものであり、住居址もほぼこの時期に

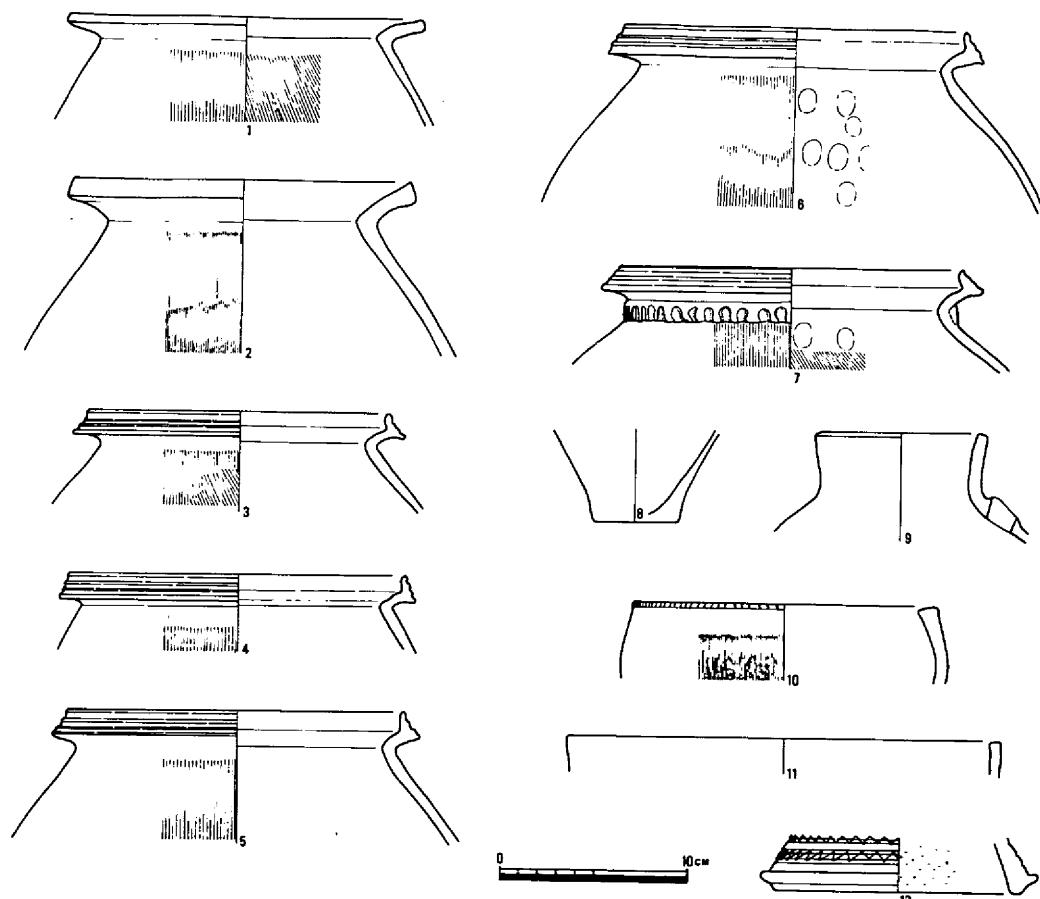


第7図 21号住居址〈No32〉平面図・断面図

山根屋遺跡(54)



第8図 21号住居址〈No32〉出土遺物



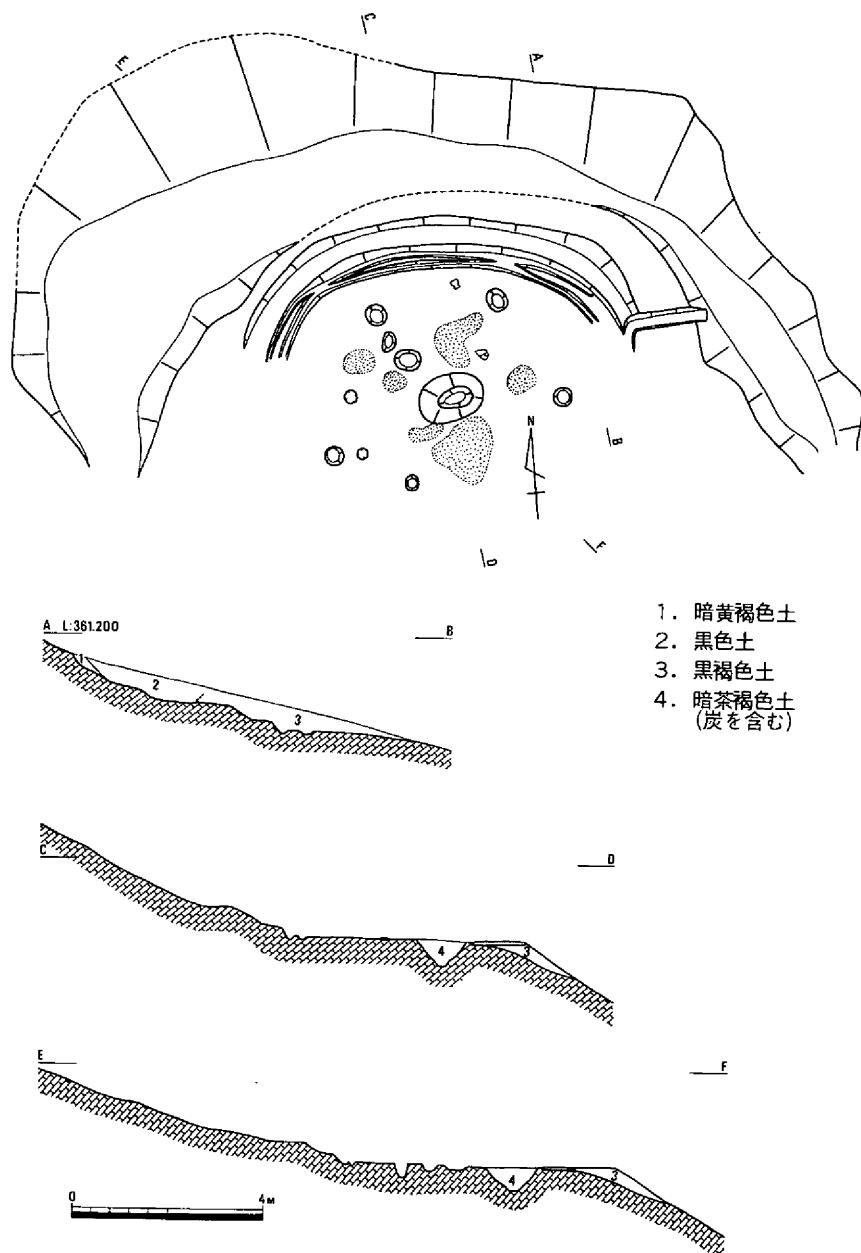
第9図 32号住居址〈No61〉出土遺物

山根屋遺跡(54)

つくられたものと考えたい。

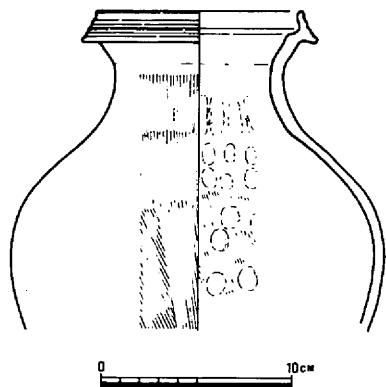
39号住居址<No58> (第10図)

ほぼ円形を呈する住居址で、周溝を有するものである。住居址は2段に掘り込まれており、壁体溝も存在する。中央ピット周辺には何か所も焼土が認められる。柱穴は五本柱ではないかと考えられ

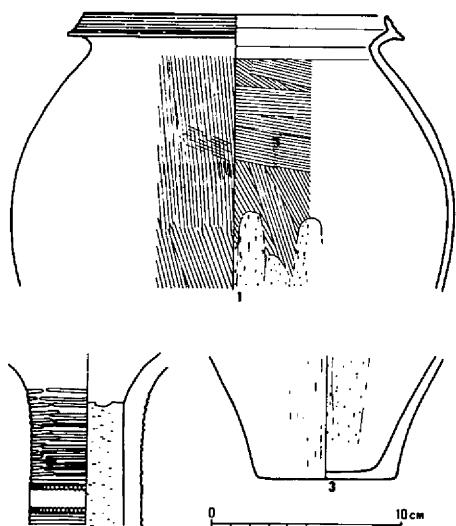


第10図 39号住居址<No58> 平面図・断面図

山根屋遺跡(54)



第11図 39号住居址床面出土遺物



第12図 39号住居址周溝出土遺物

る。周溝は斜面を緩かに切り込んでつくられ、低い方に向って流れるようにしてある。周溝の住居址側の堤防は盛土であったため検出できなかったが、土層でその痕跡を確認した。

この住居址は壁体溝が2本検出されていることから、建替が考えられる。

遺物（第11図～15図）

遺物は弥生式土器、石包丁、紡錘車が出土しており、これらは住居址床面や周溝内から出土したものもあるが、多くは住居址埋土からである。

床面からは壺が出土した。上下に拡張した口縁端部に凹線を有するもので、頸部から胴部外面は刷毛目調整、内面は押えつけの痕跡をよく残すが、刷毛目調整で仕上げている。口縁部のヨコナデは内外とも屈曲部より2cm内外である。

周溝出土の土器（第12図）は甕と高杯がある。1は甕で、胴部は内外面とも刷毛目調整であるが、内面下半は箆削りで仕上げられる。3は甕の底部で、外面箆磨き、内面箆削りで仕上げている。

2は脚の長い高杯の柱状部である。断面半円形の沈線が1本1本施されている。また沈線文帯を上下に区画する間帯には半截竹管による刺突文がめぐっている。

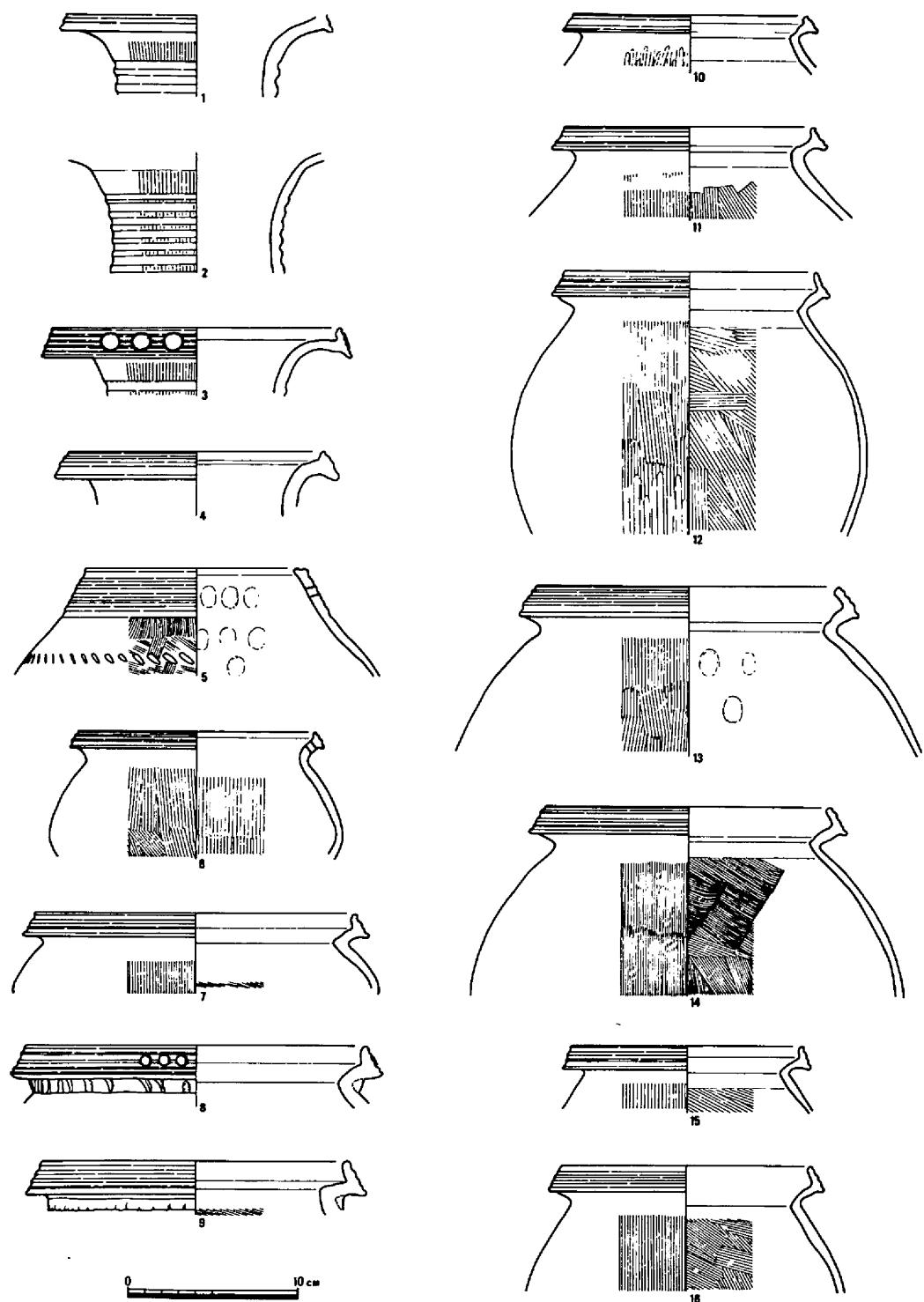
住居址埋土より出土した土器（第13図、14図）には、3号墳の流れ込みと考えられる須恵器などもあったが、これは3号墳の遺物として後節に記載した。

1～4は頸部の長い壺である。1は口縁端部に凹線文を有し、頸部にも凹線文を施すものである。2は沈線を施した後にヨコナデを行い、凹線的な感じをつくり出している。3は上下に拡張された口縁端部に凹線文と円形浮文を配している。頸部には刷毛目調整後に沈線を施している。4も口縁端部を上下に拡張しているが、その部分が重厚になっている。

5は無頸壺である。口縁部、あるいは端部上面に凹線文を施し、胴部には刷毛目調整後に刺突文がつく。内面は指頭圧痕が残っている。

6・7は胴部の最大径の部分から底部へむけて著しく屈曲し、器高の低い壺になると考えられる。

山根屋遺跡(54)



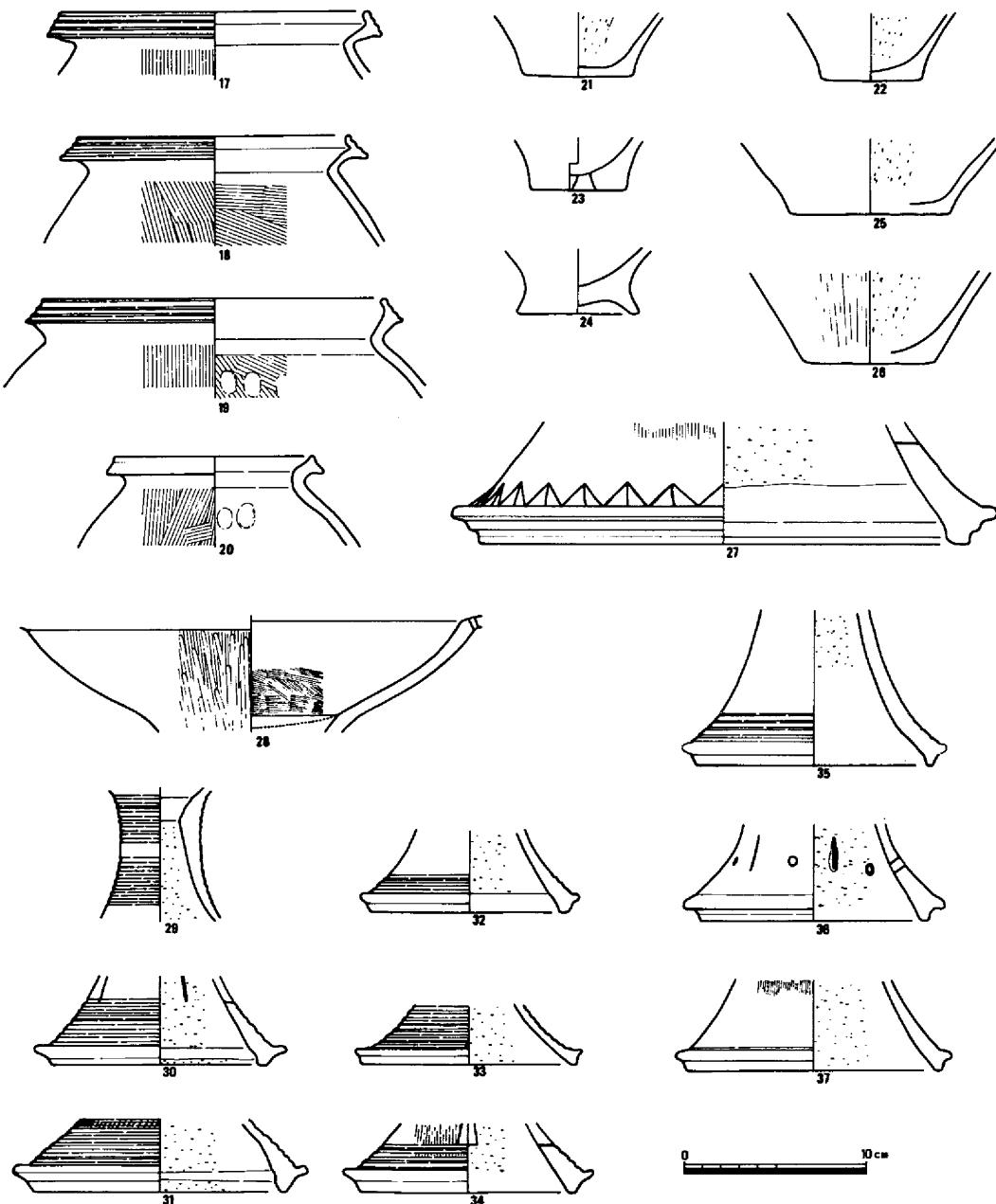
第13図 39号住居址出土遺物

山根屋遺跡(54)

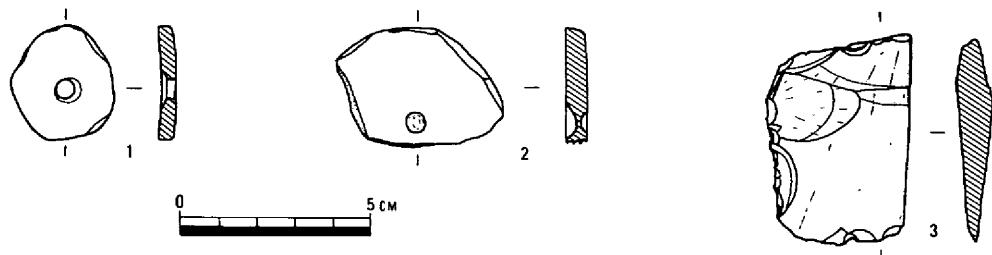
内外面とも刷毛目調整で仕上げられる。6には紐孔がある。

8・9は口縁端部を上下、とくに上方に拡張して凹線文をめぐらし、頸部に刻目凸帯をもつものである。9は内面を刷毛目で仕上げている。

10～20は甕である。10・11は上下に拡張された口縁端面に凹線文をめぐらすものである。10は胴部



第14図 39号住居址出土遺物



第15図 39号住居址出土遺物

上半まで箆磨きがなされている。12~19は口縁端部をより上方に拡張し、凹線文をめぐらしたものである。口縁部のヨコナデは内外とも屈曲部から1cm内外である。胴部外面上半は刷毛目調整、下半は箆磨き、内面は刷毛目調整であるが、底部を見ると下半は箆削りで仕上げられるようである。20は上下に拡張された口縁端面をヨコナデしたものである。

21~26は壺、甕の底部である。23は穿孔が見られる。多くは外面箆磨き、内面箆削りである。

27は器台の脚部で、鋸歯文がめぐる。透孔が認められるが形状は不明である。

28~37は高杯である。28は杯部で、外面は刷毛目後に箆磨がなされ、内面は細かな刷毛目調整によって丁寧に仕上げられている。29~37は脚部で、沈線が著しいものと、沈線のないものとがある。

土器以外の遺物(第15図)には紡錘車と石包丁がある。1・2は土器片を利用したもので、円形に成形したあと周辺を荒く磨いている。2は孔が貫通しておらず未製品であろう。

3はサヌカイト製の打製石包丁である。

さてこれらの遺物は多少の新旧はあるが、中期後半の特徴をよく示している。

II 住居址状遺構

ここに住居址状遺構としたものは、住居址と言ってよいものから、建物的なもの、あるいは鉤状になる溝、段状の掘込みなどが含まれている。したがってその性格が問題になるが、それに関しては後章で述べるとし、ここでは一応住居址状遺構として記述する。その際類似した遺構はなるべくまとめて記載することにしたため、遺構番号順になっていないことが多い。

1号住居址状遺構<No.4> (第16図)

急斜面をカットして平坦部をつくり、溝を有するものである。南端は7号墳の周溝に切断され、また溝の中には、溝に平行して4号墓と5号墓がつくられている。上面には古道が横断している。

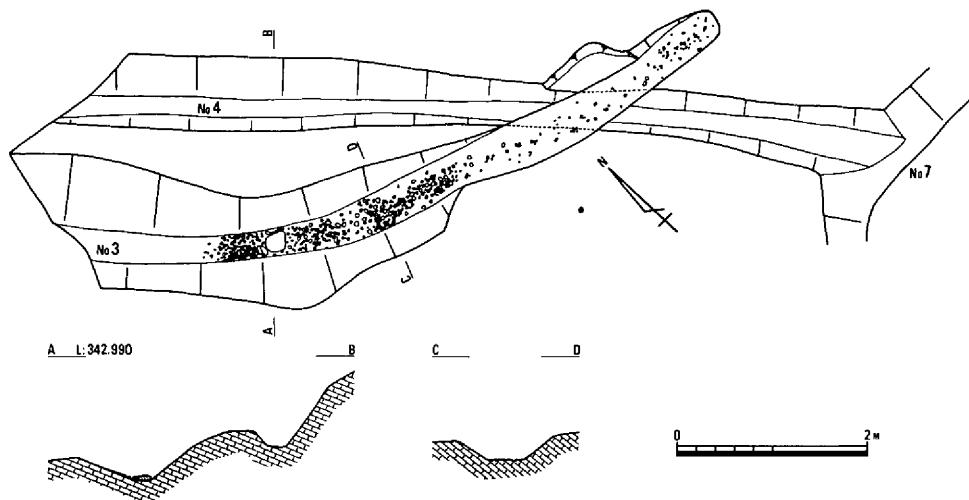
遺物は弥生式土器の細片が、溝の中より少量出土しており、中期後半の時期と考えられる。

25号住居址状遺構<No.69> (第17図)

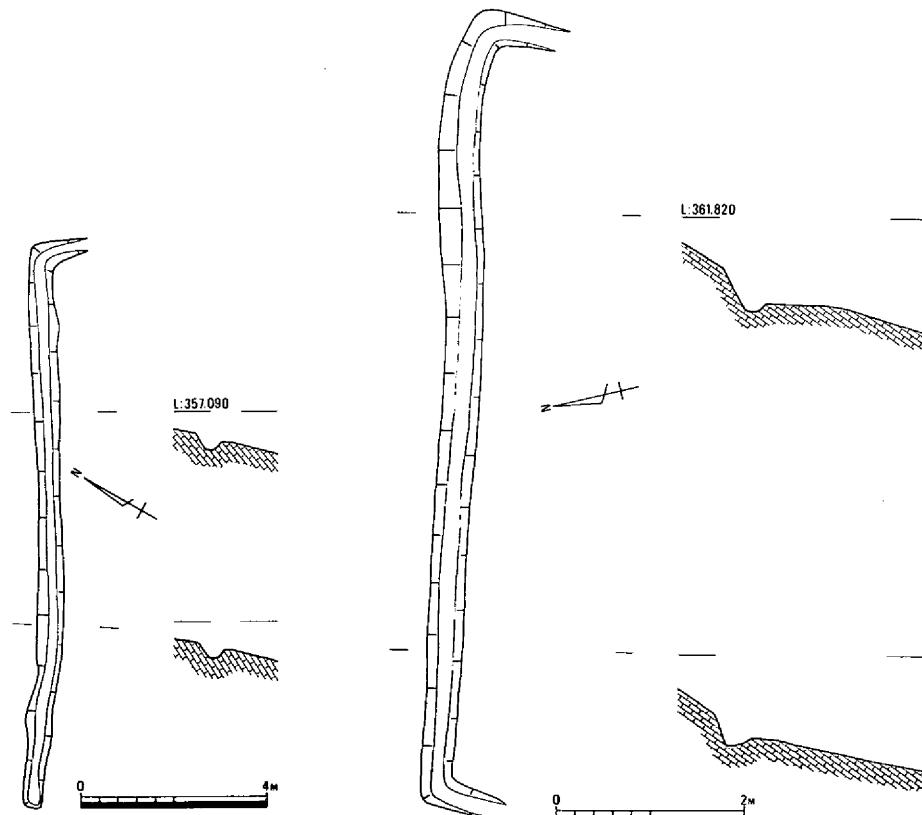
5号墳、6号墳の墳丘下より検出されたもので、一方が鉤状になる溝である。溝以外に柱穴らしきものは無く、遺物も弥生式土器の細片が、溝の中より少量出土しただけである。

28号住居址状遺構<No.57> (第18図)

山根屋遺跡(54)



第16図 1号住居址状遺構〈No.4〉平面図・断面図



第17図 25号住居址状遺構
〈No.69〉平面図・断面図

第18図 28号住居址状遺構〈No.57〉平面図・
断面図

山根屋遺跡(54)

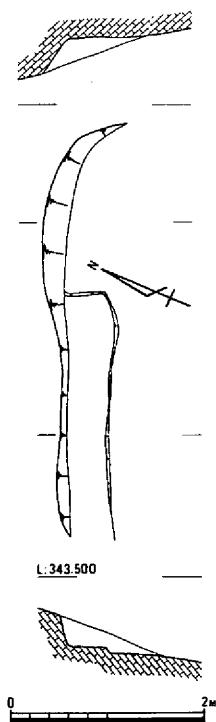
溝の両端は鉤状になり、前面に平坦部がつくられている。長方形の床面が考えられ、壁際に溝がめぐっていたものと考えられる。柱穴などは全く認められず、遺物も弥生式土器の細片が少量出土しただけである。時期は中期後半と考えられる。

4号住居址状遺構<No.18> (第19図)

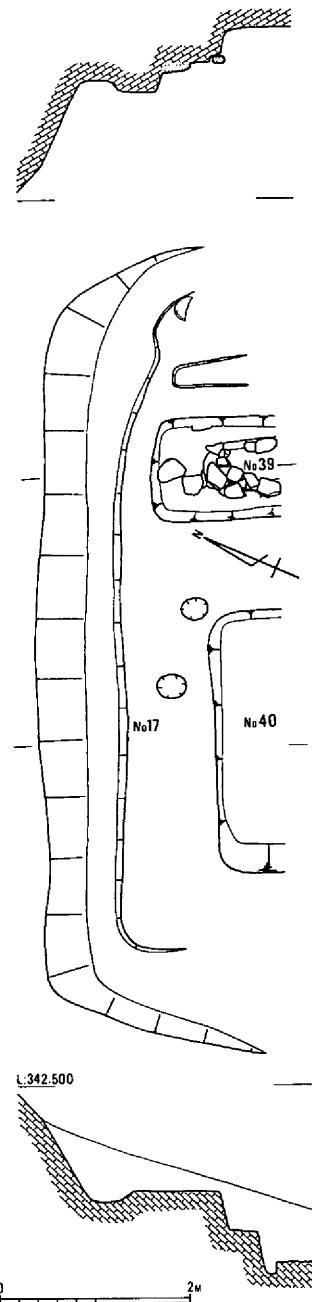
隅が丸みを有するが、ほぼ方形になると、考えられ、ベッド状の高まりが壁に接して認められる。柱穴は検出できなかった。遺構は第三紀層を掘り込んでつくられており、埋土は黒色土である。埋土中には少量の弥生式土器片が認められた。時期は中期後半のものである。

5号住居址状遺構<No.17> (第20図)

ほぼ方形を呈すると考えられ、壁体溝を有する。柱穴は無いが、床面に2か所落込みが検出され、発掘した結果箱式石棺と配石土壙が発見された。さらに住居址状遺構の埋土中より土鍋が出土したことか

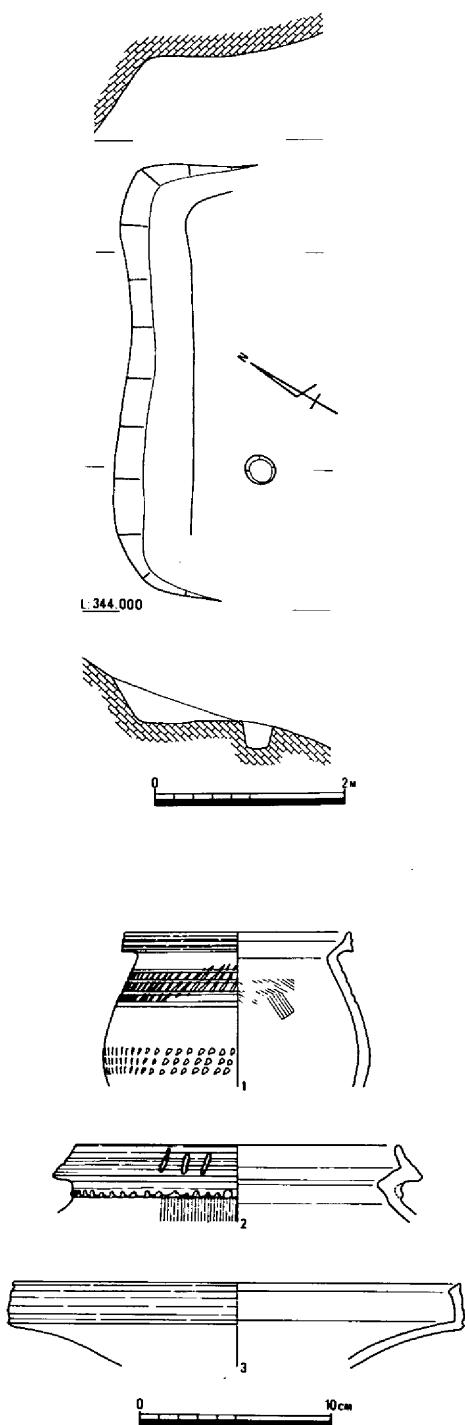


第19図 4号住居址状
遺構<No.18> 平面図・
断面図



第20図 5号住居址状遺構<No.17>
平面図・断面図

山根屋遺跡(54)



第21図 6号住居址状遺構〈No.44〉平面図・断面図と出土遺物

ら、これらの関係が問題になった。もし土鍋の時期、つまり中世の時期に住居址状遺構がつくられたとすれば、12号墓〈No.40〉の蓋石は破壊される位置にあり、すくなくとも墳墓と同時期かそれ以前と考えられる。土層観察用の土手の位置が、これらの関係を知る場所になかったため詳細は不明であるが、そこで観察によるかぎり盛土などはなく、上から床面まで黒色を呈する埋土であった。したがって周溝を有する墳墓と考えるより、住居址状遺構がある程度埋もれた段階で、その平坦な場所を選んで墓をつくったと考えられないだろうか。ただし確証はなく、全体を墳墓とする考え方も否定されるものではない。

6号住居址状遺構〈No.44〉 (第21図)

方形を呈すると考えられ、壁に接して浅くて広い溝が認められる。

遺物 (第21図)

遺物はすべて弥生式土器で、黒色を呈する埋土中より出土した。

1は甌で、上下に拡張された口縁端面に凹線文をめぐらし、肩の部分には沈線の上から斜行する刻目が施されるものである。胴部最大径の部分には櫛状の工具による刺突文がめぐっている。胴部内面上半は刷毛目が認められるが、下半は不明である。

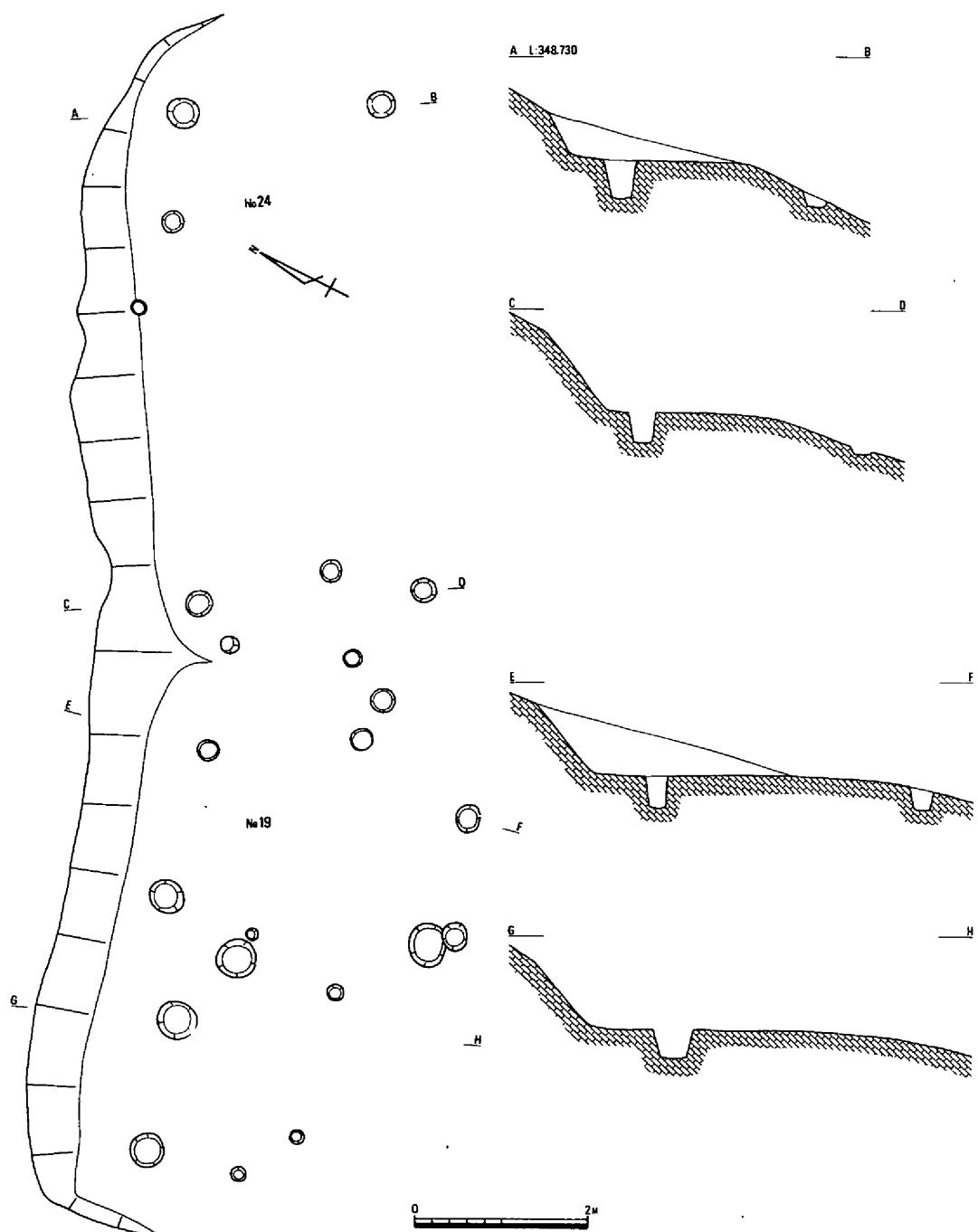
2は頸部に刻目凸帯をもつものである。口縁端部は上下に拡張され、端面に凹線文を施し、その上に3本一単位の棒状浮文がつく。

3は高杯の杯部で、口縁部外面にはヨコナデによってできたと考えられる浅い凹線状の凹みがある。口縁端部は内傾している。

7号住居址状遺構〈No.19〉 (第22図)

8号住居址状遺構〈No.24〉と切り合っているが、前後関係は明らかでない。第三紀層上面で検出した段階では、細長い落込みであり、埋土の黒

山根屋遺跡(54)



第22図 7号・8号住居址状遺構〈No19・24〉平面図・断面図

色土ではその識別は困難である。

柱穴は多数検出されたが、構造物を想定さすような配列は確認できなかった。しかしかなり立派なピットであり、何らかの建築物があったものと考えられる。

遺物（第23図）

遺物はすべて弥生式土器で、高い方から流れ込んだ状態で出土した。

1～2は上下に拡張した口縁端面に凹線文をめぐらす甕である。3も甕であるが、肩に沈線の上から刻目文を施し、胴部最大径の部分に櫛状工具による刺突文をめぐらす。

5、7、8は高杯である。5は杯部で、口縁外面、あるいは端部上面に凹線文をめぐらす。底部外面は篦磨き、内面は刷毛目によって仕上げられている。7も杯部であるが、口縁部は丸みをもってやや内傾ぎみに立上るものである。8も杯部で、やや外反ぎみに立上る口縁外面に凹線文をめぐらすものである。

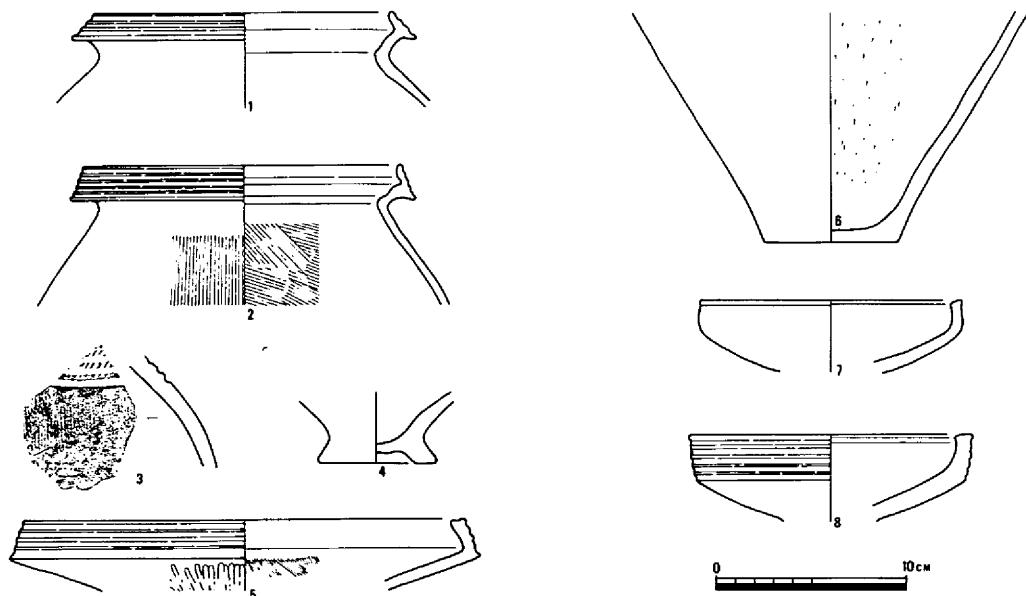
以上の土器は7以外すべて凹線文が認められ、また胴部内面下半に篦削りがなされるなど、中期後半の特徴をよく表わしている。7は凹線文が盛行する以前のものと考えられ、中期中葉と考えられる。

8号住居址状遺構<No.24>（第22図）

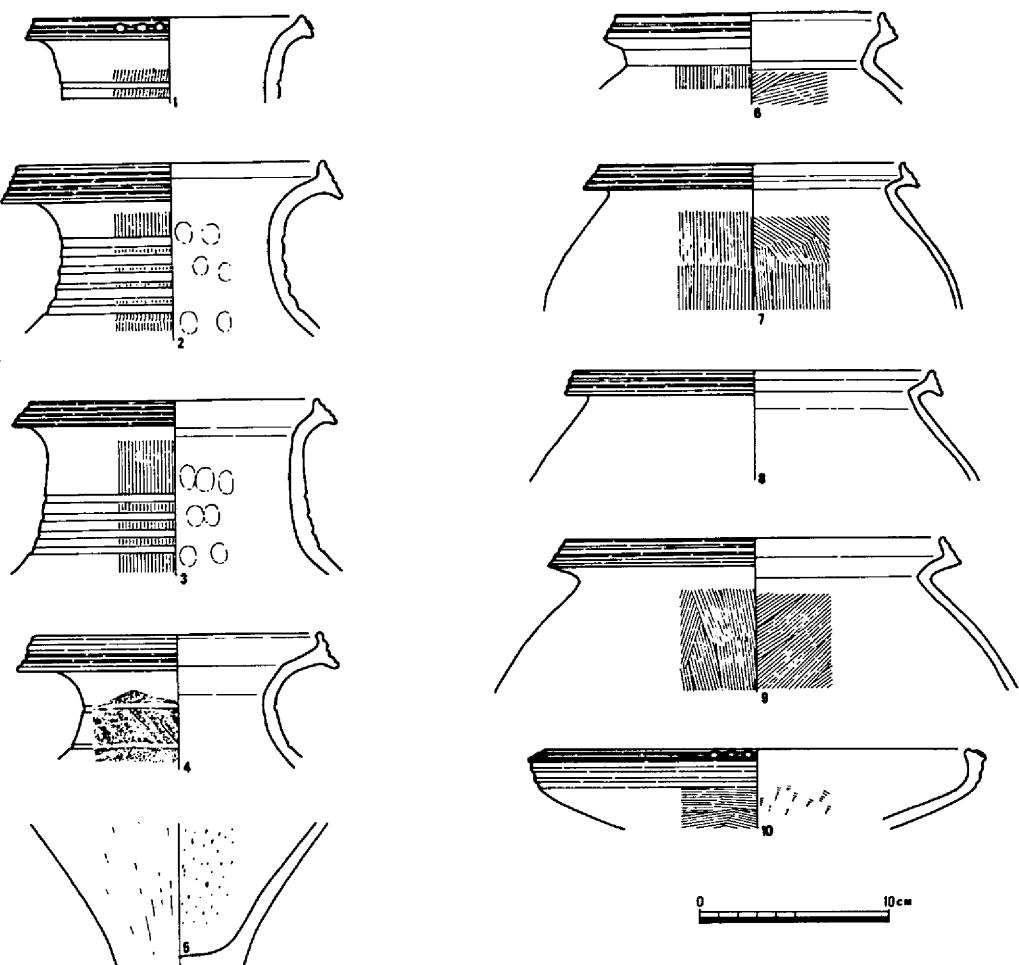
長方形を呈すると考えられ、柱穴は4本認められるが、横の柱穴の間隔が広すぎるので、普通の住居址や建物を想定するにはむずかしい。

遺物（第24図）

遺物はすべて弥生式土器で、壁側では高い位置で、谷側は低い位置で出土している。これは遺構があ



第23図 7号住居址状遺構<No.19>出土遺物



第24図 8号住居址状遺構〈No24〉出土遺物

る程度埋まった段階で、山側より廃棄したことを示していると考えられる。

1～4は壺である。1～3は上下に拡張された口縁部端面に凹線文をめぐらし、やや長めの頸部には数条の沈線が施されるものである。1は3こ一単位の円形浮文が凹線文の上に付される。2・3の頸部内面には指頭圧痕が認められる。4は短かい頸部に2本の沈線を施し、その間に櫛状工具による斜行する刻目がめぐる。

6～9は甕である。6・9は口縁端部が上方へ拡張されたもので、端面には凹線文がめぐる。胴部上半は内外とも刷毛目調整である。

7・8は口縁端部が上下に拡張されるもので、端面には凹線文がめぐる。

10は高杯の杯部で、口縁部はやや外反ぎみに立上り、外面に凹線文を施す。外傾する口縁端部はやや拡張され、端面には凹線文がめぐり、その上に3こ一単位の円形浮文が貼付けられる。底部外面は

山根屋遺跡(54)

刷毛目、内面は刷毛目の後に箒磨きがなされている。

これらの土器は中期後半に属すると考えられる。

9号住居址状遺構<No.25> (第25図)

9号から11号住居址状遺構は連続しているが、それぞれの前後関係は不明である。9号住居址状遺構は壁に接して溝を有し、その内側には2m前後の間隔で柱穴が5本配列されている。対になる柱穴は盛土のため流失してしまったものと考えられる。良く焼けた火所を有していることなどから住居址と考えてよいのではないかと思われる。

遺物 (第26図)

遺物はすべて弥生式土器で、埋土の中から出土したものである。

1は口縁端部を上下に拡張し、その端面に凹線文をめぐらすものである。口縁部のヨコナデは屈曲部以下1cm内外までおこなわれ、胴部上半は外面刷毛目、内面はナデによって仕上げられている。

2は上方に拡張が著しい口縁端面に、凹線文をめぐらせ、頸部には刻目凸帯を貼付けたものである。

3は高杯の脚部で、凹線文と透孔が認められる。内面は箒削りで仕上げられる。

これらの土器はいずれも中期後半の特徴をよく表わしている。

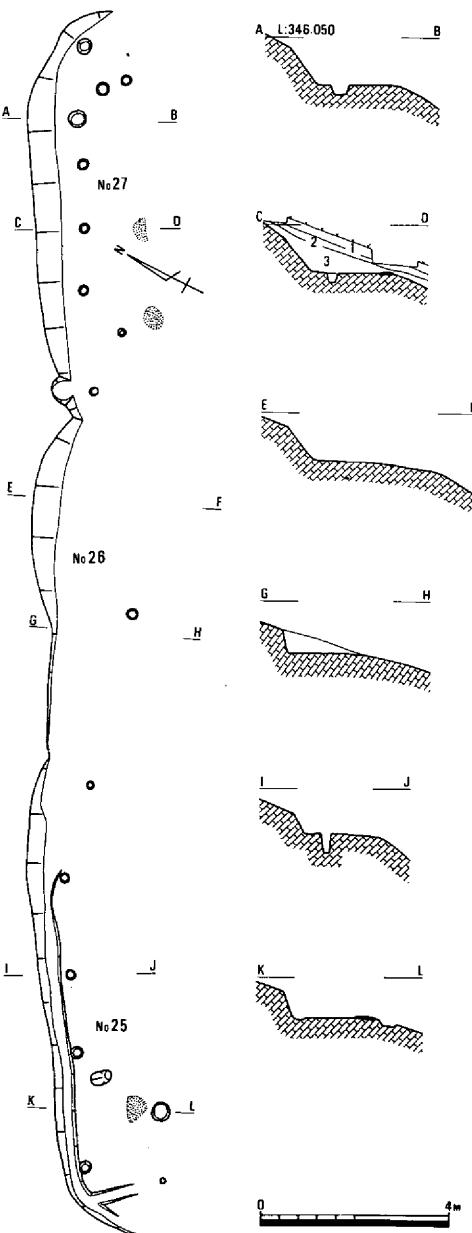
10号住居址状遺構<No.26> (第25図)

平坦部が形成されているが、柱穴などは検出されなかった。

遺物 (第27図)

遺物はすべて弥生式土器で、黒色を呈する埋土の中より出土した。

1～6は甕である。1は口縁端部をやや上下に拡張したもので、その端面に2条の凹線がめぐる。2は「く」の字状に外反した口縁部がやや丸みをもっており、端部は上方への拡張が著

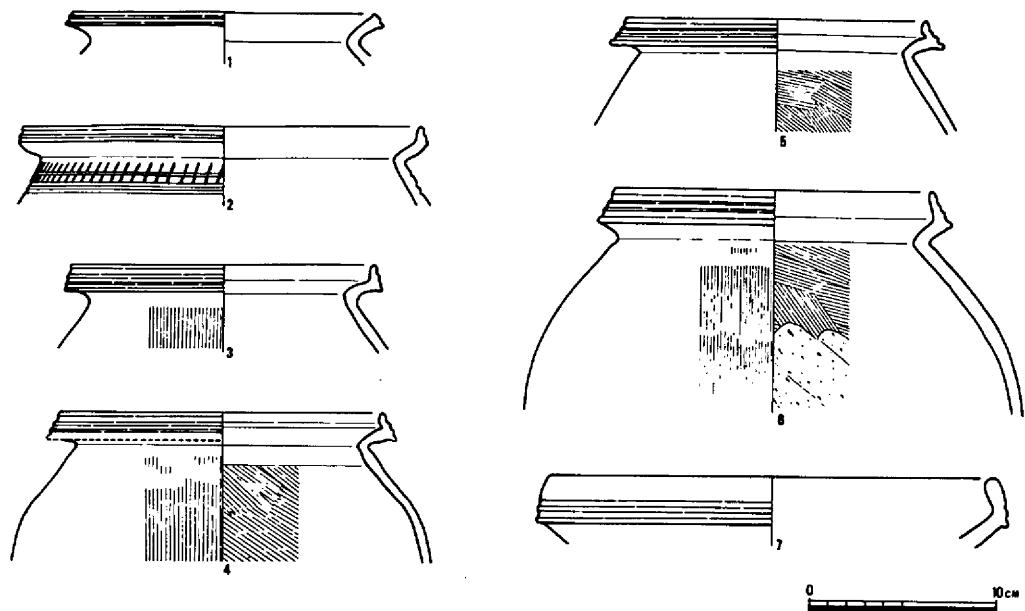


第25図 9号～11号住居址状遺構<No.25～27>
平面図・断面図

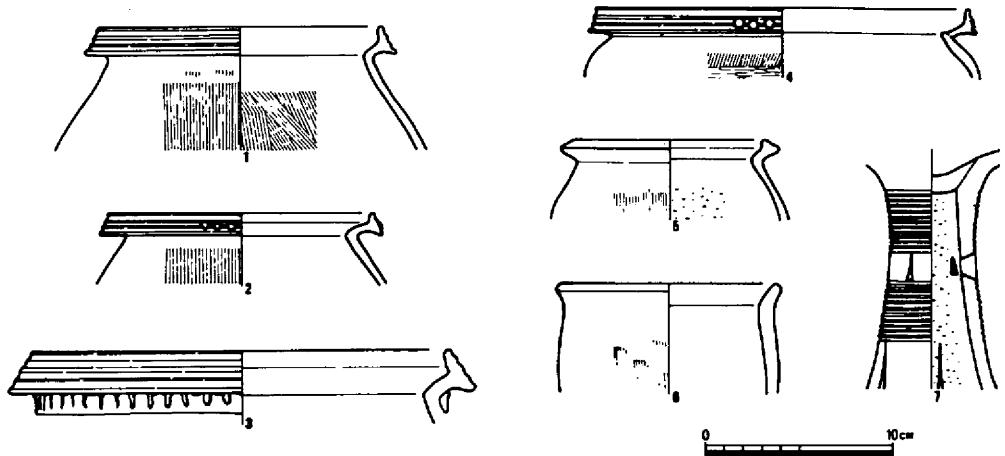
山根屋遺跡(54)



第26図 9号住居址状遺構〈No25〉出土遺物



第27図 10号住居址状遺構〈No26〉出土遺物



第28図 11号住居址状遺構〈No27〉出土遺物

山根屋遺跡(54)

しい。肩部には沈線が3本施され、斜行する刻目がめぐっている。3～6は上下に拡張された口縁端面に凹線文をめぐらしたものである。口縁部のヨコナデの範囲は、内外とも口縁部の屈曲部以下1cm内外である。これらの多くは屈曲部のヨコナデによって、肩部に若干の脹らみをもっている。胴部上半は内外とも刷毛目調整が多いが、6は内面に最大径より上位にまで箆削りが認められる。

7は高杯で、やや内傾ぎみに立上った口縁部外面下端に2条の凹線がめぐっている。底部外面は箆磨きで仕上げられている。

これらの土器は中期後半に属するものと考えられる。

11号住居址状遺構<No.27> (第25図)

壁に接近して柱穴が並ぶが、9号住居址状遺構に見られる溝はない。また柱の間隔も不規則である。火所は2か所あり、よく焼けている。

遺物 (第28図)

遺物はすべて弥生式土器で、7は柱穴の中から、その他は埋土の中から出土したものである。

1・2・5・6は甕である。1、2は上下に拡張された口縁端面に凹線をめぐらすもので、2はその上に3こ一単位の円形浮文を施している。5は肥厚した口縁端部をもち、端面はヨコナデによる浅い凹みがめぐる。外面は刷毛目、内面は箆削りで仕上げられる。6は少し外反する口縁部をもち、胴部はあまり脹らみをもたないようである。外面は部分的に刷毛目が認められる。

3は頸部に刻目凸帯をもつもので、上下に拡張された口縁端面に凹線文をめぐらしている。

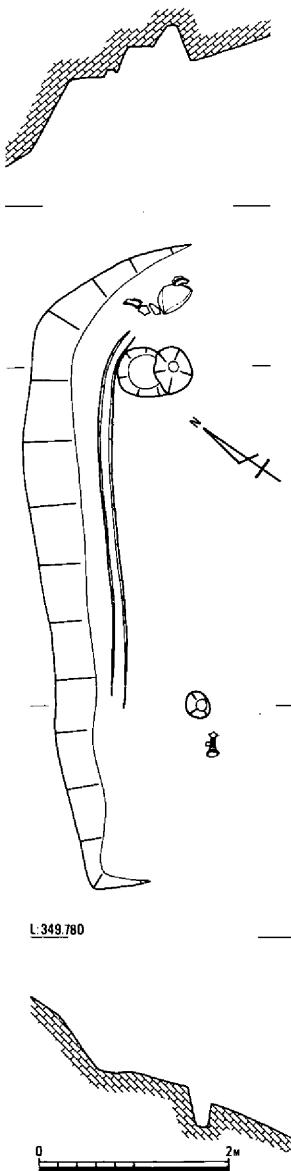
4は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文をめぐらし、その上に3こ一単位の円形浮文を施している。胴部は口縁屈曲部から強く広がり、すぐ内湾して底部に至るものである。胴部外面は刷毛目が認められるが、最大径を示す所から下は箆磨きで仕上げられている。

7は高杯の脚部で、高い脚台の柱状部である。断面半円状の沈線が密接に施され、間帯には細長い三角形の透孔がある。

これらの土器は6がやや古くて中期中葉になるとと思われるが、その他は中期後半に属するものと考えられる。

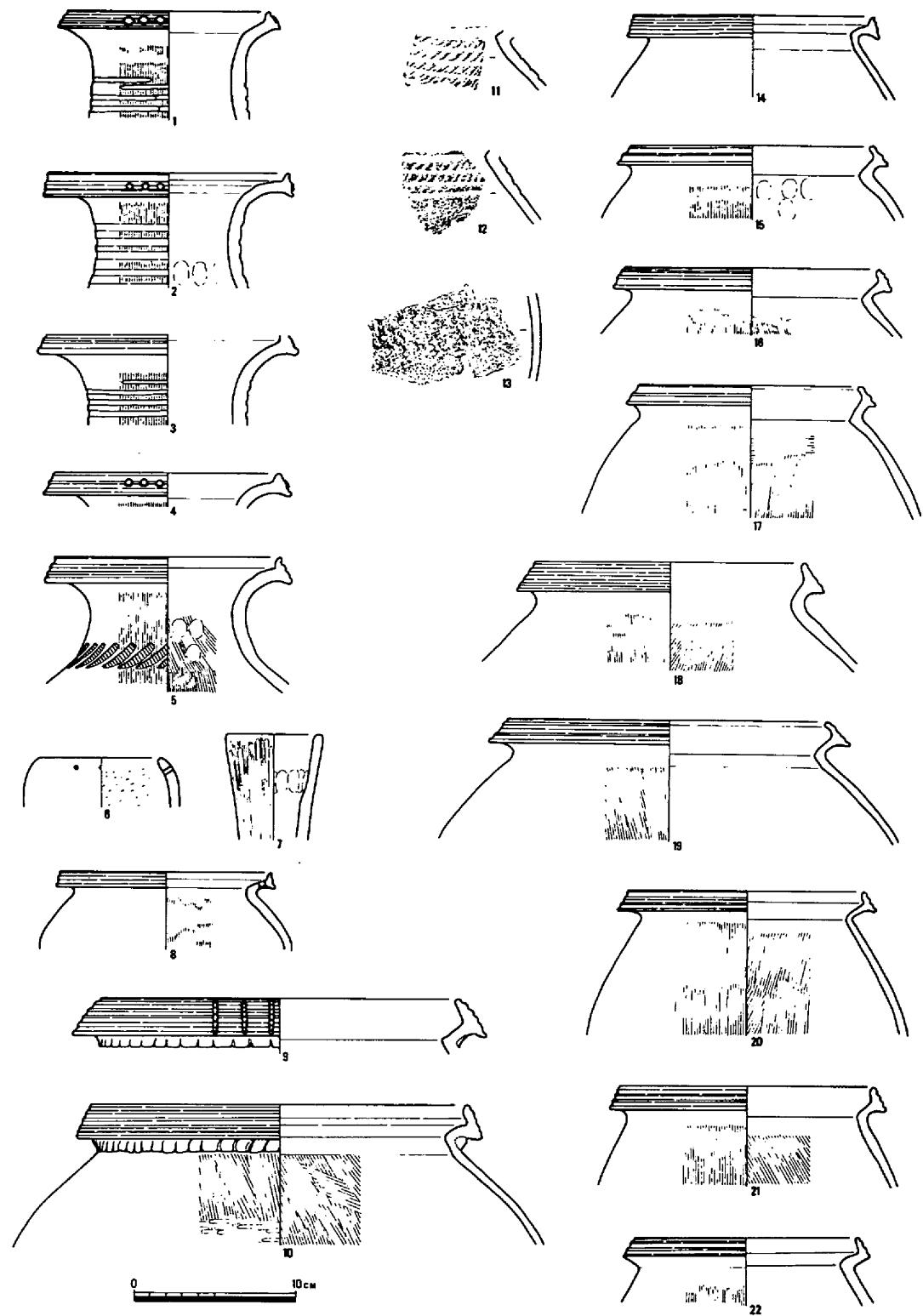
12号住居址状遺構<No.21> (第29図)

第三紀層を掘り込んでつくられ、方形を呈すると考えられる。溝は壁から離れて存在し、柱穴はやや片寄っているが2本



第29図 12号住居址状遺構<No.21>
平面図・断面図

山根屋遺跡(54)



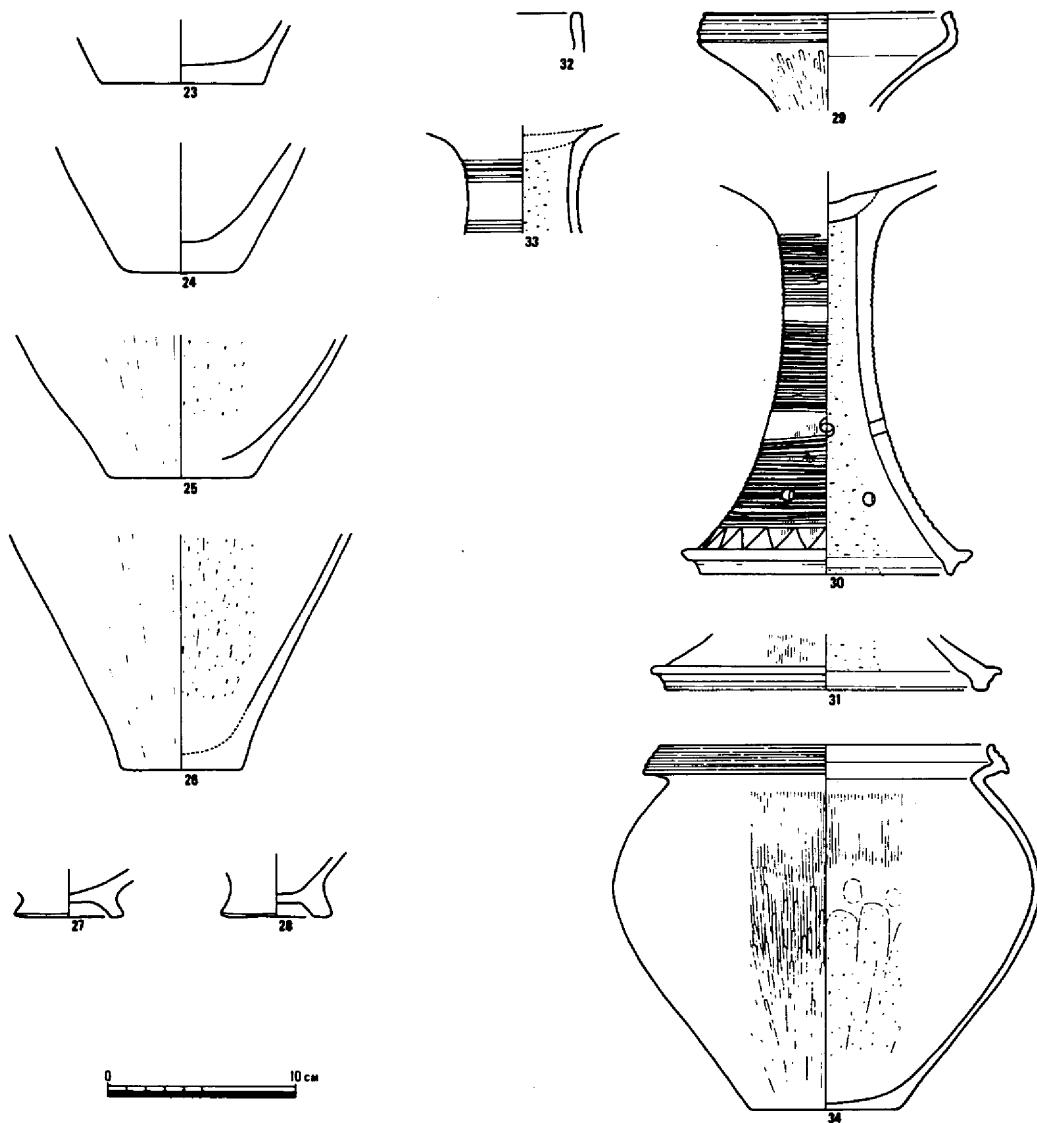
第30図 12号住居址状遺構〈No21〉出土遺物

認められる。

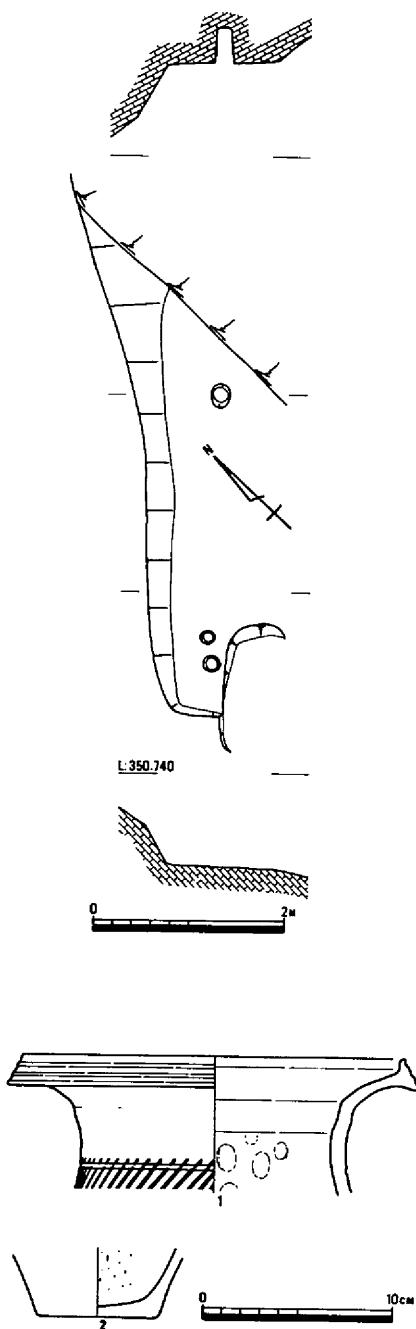
遺物（第30図、31図）

遺物はすべて弥生式土器で、30、34が床面から出土し、その他は黒色を呈する埋土の中より出土したものである。

1～7は壺である。1、2は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線をめぐらし、その上に3こ一単位の円形浮文が貼しきられる。頸部には刷毛目調整の後で沈線が施される。5は頸部に櫛状工具による刻目がめぐっている。頸部内面は押えつけの後で刷毛目調整を行っている。6は無頸の壺で、2こ



第31図 12号住居址状遺構〈No.21〉出土遺物



第32図 13号住居址状遺構〈No.23〉平面図・断面図と出土遺物

一組の紐孔がある。内面は箝削りで仕上げられている。7は細長く立上る口縁部をもつ壺で、外面は刷毛目の後を箝磨きしている。内面は抑えつけとナデによって仕上げられている。

8は口縁部に紐孔が認められ、上下に拡張された口縁端面には凹線文がめぐる。

9、10は頸部に刻目凸帯をもつもので、口縁端部の拡張が著しい。9は口縁端面の凹線文上に3本一単位の棒状浮文を貼付いている。10の胴部は内外面とも刷毛目調整であるが、外面は最大径を示す肩の部分から下を箝磨きしている。

12～13は壺の破片である。11、12は肩部に沈線をめぐらし、その上に斜行する刻目を施すものである。13はそれらの胴部最大径を示す部分で、櫛状工具による刺突文が認められる。

14～22、34は壺である。口縁端部を上下に、特に上方へ拡張し、その端面に凹線文をめぐらす。口縁部のヨコナデは口縁屈曲部以下1cm内外で、肩部にヨコナデによる脹らみをもつものが多い。胴部上半は内外面とも刷毛目調整を行い、下半は外面箝磨き、内面は箝削りによって位上げられている。

23～28は壺、甕の底部である。外面箝磨き、内面箝削りのものが多い。

29～33は高杯である。29は内湾した口縁部外面に凹線文がめぐるもので、底部外面は箝磨きによって仕上げられる。30は高い脚部で、断面半円形の密接した沈線文帯が3段認められる。脚端に近い間帯には鋸歯文がめぐり、沈線文帯とその上の間帯には円形の透孔がある。また鋸歯文の中は丹が塗られている。32は杯部の口縁で、ほぼ真直に立上るものと思われる。これらの土器は中期後半に比定されるであろう。

13号住居址状遺構〈No.23〉 (第32図)

ほぼ方形を呈すると考えられ、柱穴が2本認められた。一方は1号墳の周溝に切断され、もう一方は15号墓に切られている。壁体溝はないが、4本柱の住居址

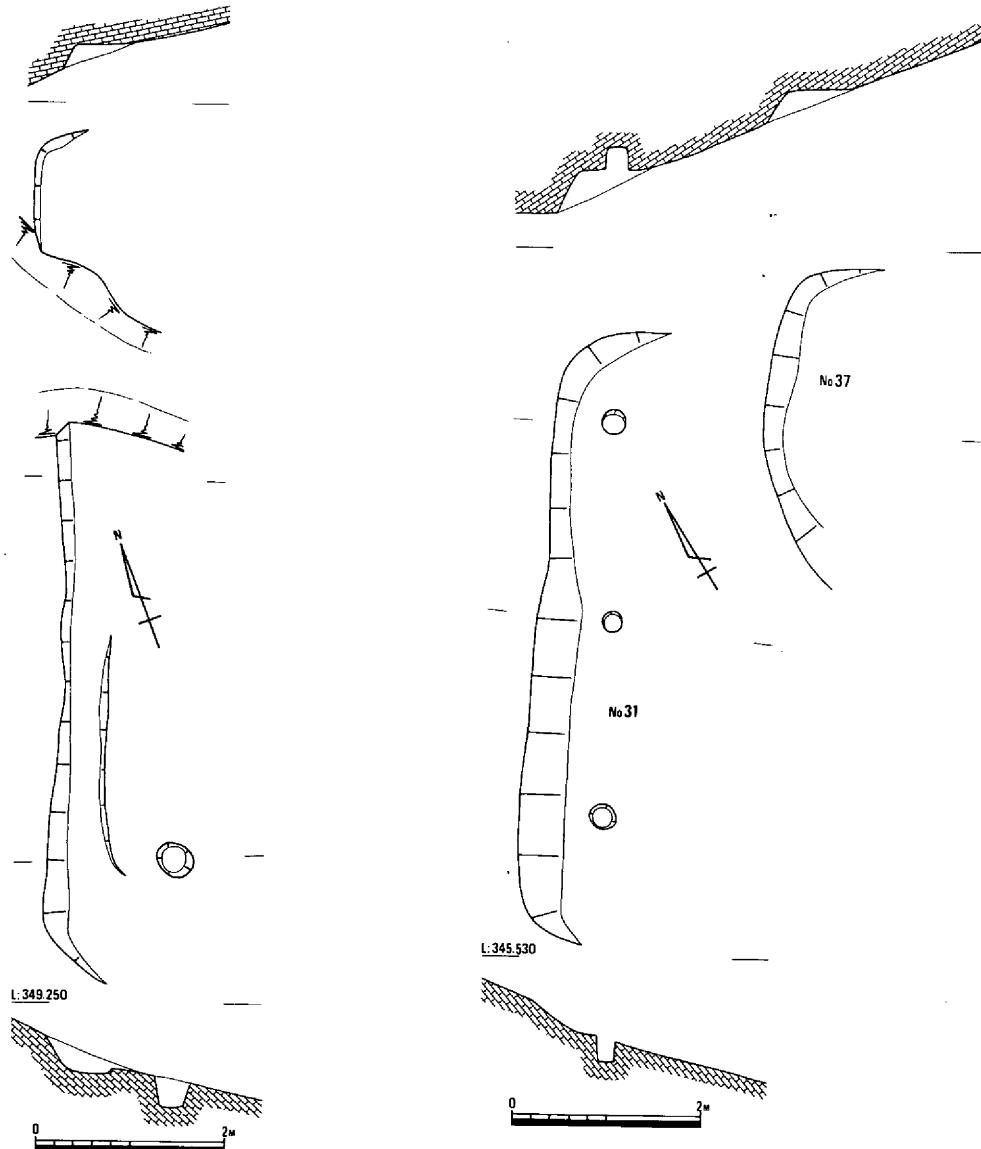
山根屋遺跡(54)

ではないかと考えられる。

遺物 (第32図)

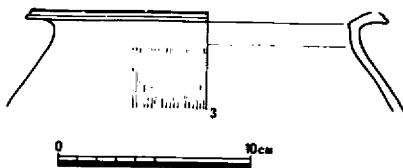
黒色を呈する埋土中より少量出土し、すべて弥生式土器である。

1は長い頸部から強く外反した口縁部をもつ壺である。口縁端部は上下に拡張され、端面には凹線が3条めぐる。頸部には沈線を施し、その上に斜行する刻目をめぐらしている。頸部内面には指頭圧

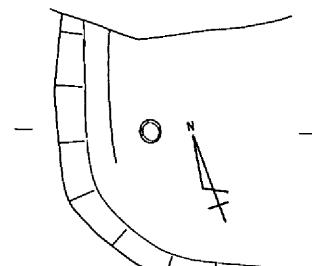


第33図 14号住居址状遺構
(No.30) 平面図・断面図

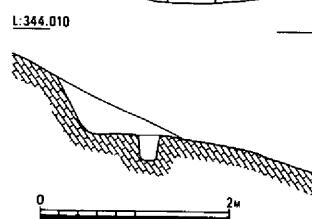
第34図 15号・16号住居址状遺構(No.31・37)
平面図・断面図



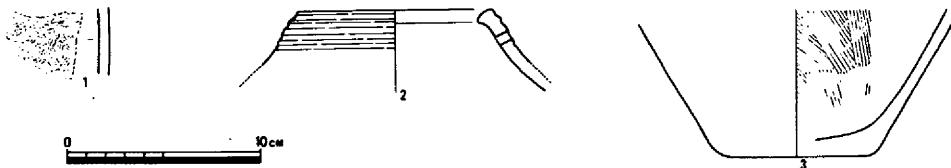
第35図 14号住居址状遺構出土遺物



第36図 17号住居址状遺構出土遺物



第37図 22号住居址状遺構〈No38〉平面図・断面図



第38図 22号住居址状遺構出土遺物

痕が残っている。

2は甕の底部と考えられ、外面は笠磨き、内面は笠削りで仕上げられている。

14号住居址状遺構<No.30> (第33図)

方形を呈すると考えられ、長さ 9m の長大なものである。壁に接して幅広い溝が一部認められ、ピットも検出された。

遺物 (第35図)

遺物は弥生式土器が少量埋土の中より出土した。

図示できるものは1点で、口縁端部が上下に拡張され、端面に凹線文をめぐらす甕である。胴部上半外面は刷毛目調整、内面はナデによって仕上げられている。

15号住居址状遺構<No.31> (第34図)

方形を呈すると考えられ、柱穴が3本並んでいる。対になる柱穴は斜面のため残存していないが、6本柱になると思われる。壁体溝がないので、1間×2間の建物を考えることもできるが、いずれも確証はない。

山根屋遺跡(54)

遺物は埋土の中より少量出土しており、弥生時代中期後半の時期に比定できるものである。

16号住居址状遺構<№37> (第34図)

丸みをもった方形の平面プランをもつもので、平坦部がつくられている。溝やピットは認められなかった。遺物は黒色を呈する埋土の中から細片が出土しており、弥生時代中期後半と考えられる。

17~20号住居址状遺構<№35~36> (第7図)

遺構が重なり合っているが、いずれも溝だけ、あるいは掘り込みだけである。ピットなどは検出できなかった。17号は18号を切っており、端部を21号に切られている。18号は21号に切られ、20号を埋めてつくったものと思われた。19号は壁だけである。

遺物 (第36図)

遺物は少なく、17号より少量出土した。他の遺構にも土器片が少量出土している。

17号出土の土器は、口縁端部を上下、ことに上方へ拡張し、端面に凹線をめぐらす甕である。胴部上半は内外とも刷毛目調整で仕上げている。

22号住居址状遺構<№38> (第37図)

隅丸方形的な平面プランを呈し、壁に接して浅い溝がある。柱穴も認められ、住居址ではないかと考えられる。

遺物 (38図)

遺物はすべて弥生式土器で、埋土の中より出土したものである。

1は胴部の破片で、櫛描の格子目文が認められる。

2は無頸壺で、口縁部外面には凹線文がめぐり、紐孔が認められる。

3は底部で、外面は鎧磨き、内面は刷毛目によって仕上げられている。

これらの土器は櫛描文が見られることや、胴部内面下半に鎧削りが見られないことなどから中期中葉に比定され、2はこれらより新しいものである。

23号住居址状遺構<№39> (第39図)

第三紀層を切り込んで、低い部分には盛土をおこない平坦部を形成している。前面は7号墳の溝に切られている。平坦部には何の遺構も検出できなかった。

遺物は埋土の中より弥生式土器の細片が出土し、中期後半に比定できる。

26号住居址状遺構<№65> (第40図)

林道に近い場所にあり、わずかに残存するだけである。27号などと同じレベルにあり、連続しているものと考えられる。

遺物 (第42図)

遺物は埋土の中から出土し、すべて弥生式土器である。

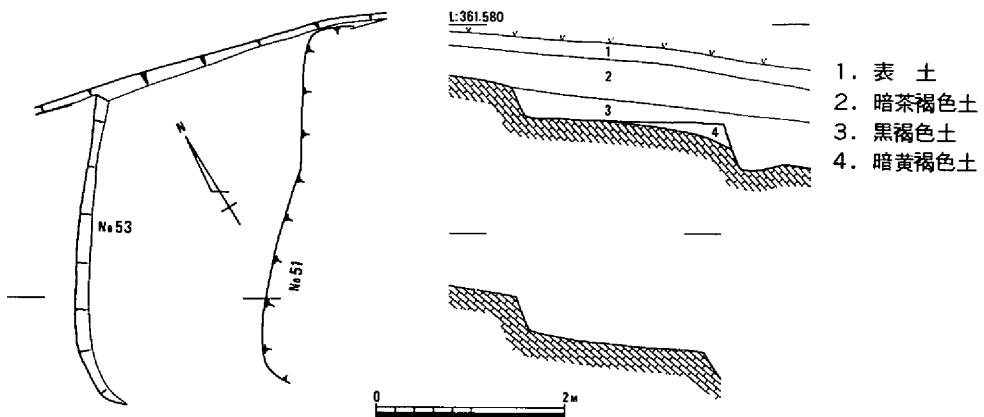
1は頸部に凸帯をもつものである。口縁端部は上方への拡張が著しく、端面に凹線文をめぐらす。

2は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文をめぐらす甕である。

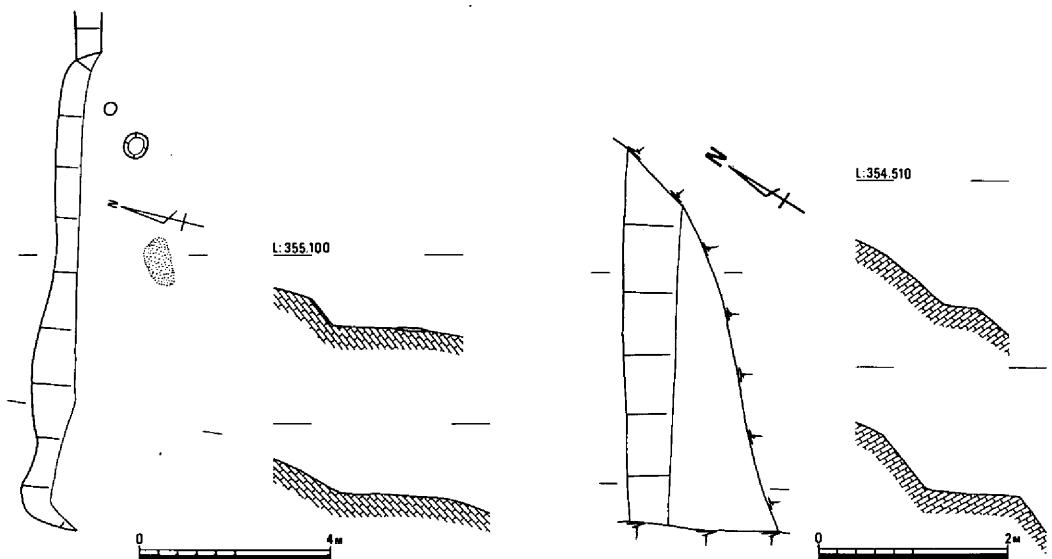
3は無頸壺で、口縁部外面、あるいは端部上面に凹線文をめぐらすものである。

27号住居址状遺構<№70> (第41図)

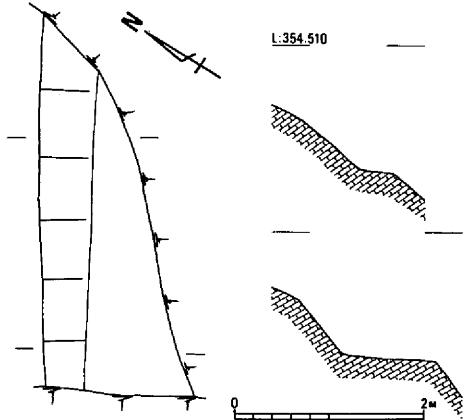
山根屋遺跡(54)



第39図 23号住居址状遺構〈No53〉平面図・断面図



第40図 26号住居址状遺構〈No65〉平面図・断面図



第41図 27号住居址状遺構〈No70〉平面図・断面図

1辺約10mで、長方形を呈すると考えられる。柱穴らしきピットも存在するが、1本しか検出されなかった。ほぼ中央にしっかり焼けた火所が存在し、住居址的な感じがする。

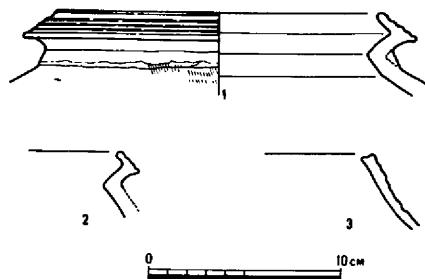
遺物は弥生式土器の細片が出土しており、ほぼ中期の後半と考えられる。

34号住居址状遺構〈No63〉 (第44図)

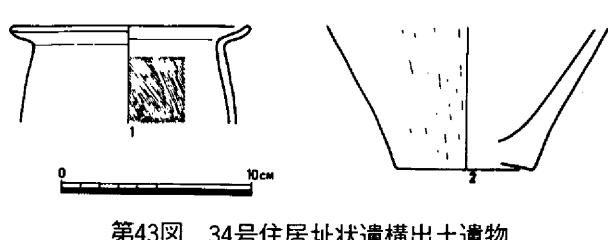
34号と35号とは連続しているものであるが、壁の下場の線で2遺構に分離した。床面のレベルは同じである。柱穴などの遺構はなく、平坦部だけが確認された。

遺物 (第43図)

山根屋遺跡(54)



第42図 26号住居址状遺構出土遺物



第43図 34号住居址状遺構出土遺物

黒色を呈する埋土の中から出土し、すべて弥生式土器であった。

1は「く」の字状に外反する口縁に、あまり脹らみをもたない胴部がつく甕である。胴部内面は刷毛目調整で仕上げられる。

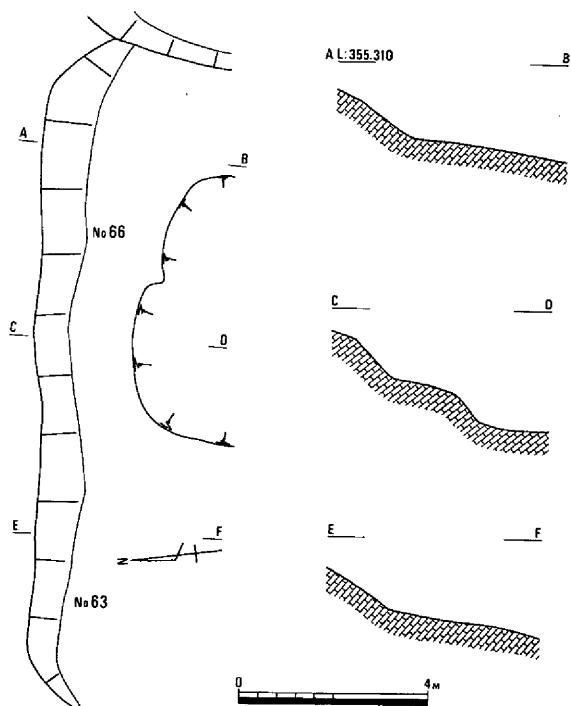
2は底部で、外面は笠磨きがなされるが、内面には笠削りが認められない。

これらの土器は中期中葉と考えられる。

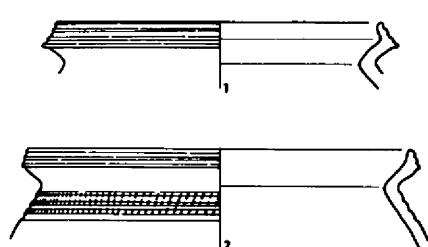
35号住居址状遺構<No.66>（第44図）

34号と連続しているが、一端は2号墳の周溝に切られている。平坦部も最近の土取りによって一部削られてはいるが、何の遺構も存在しなかったものと考えられる。

遺物（第45図）



第44図 34号・35号住居址状遺構<No.63・66>平面図・断面図



第45図 35号住居址状遺構出土遺物

山根屋遺跡(54)

すべて埋土の中より出土したもので、弥生式土器の細片が多かった。

1・2は甕である。1は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文をめぐらすものである。2は「く」の字状に外反する口縁部の端部を上方に拡張し、その端面に凹線を2条めぐらしている。肩部に3本の沈線をめぐらし、その上を斜行する刻目で飾っている。

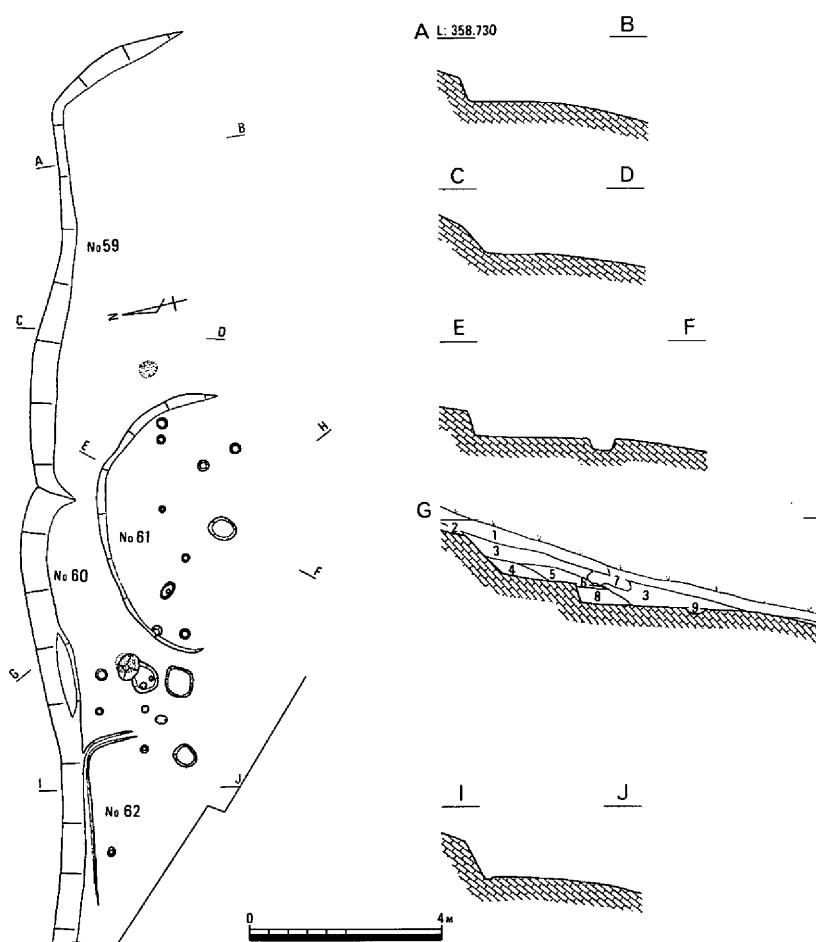
3は注口部であるが、どのような器形のものに付けられていたかは不明である。

4は大形の高杯と考えられる。口縁端部は肥厚しながら、水平に拡張され、その端面に櫛描による鋸歯文が施される。口縁部外面にも櫛描の波状文が施される。

5は壺の口縁部と思われる。上下に拡張された口縁面に凹線をめぐらし、端面下端には刻目が施されている。

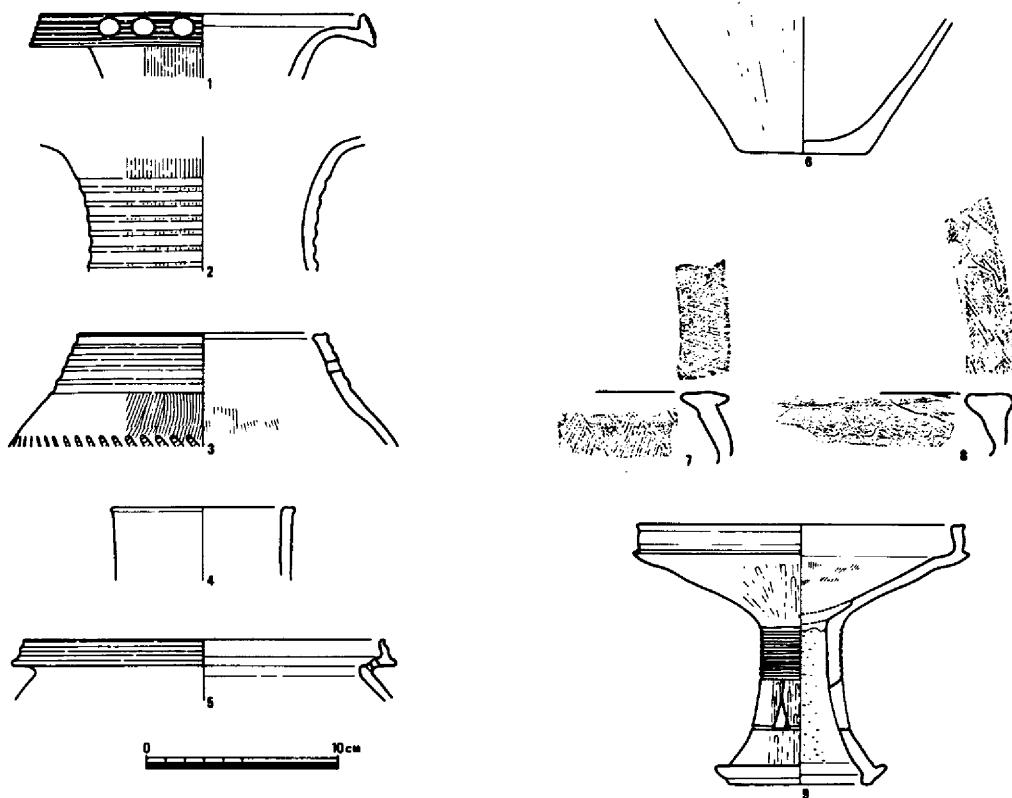
29号住居址状遺構<No59> (第46図)

壁はやや湾曲しているが、ほぼ長方形に近い平坦部を形成している。一部32号住居址を埋めて床面

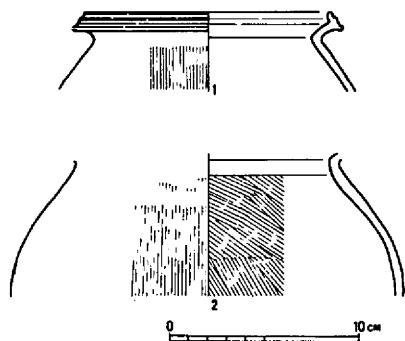


第46図 29号～31号住居址状遺構<No59・60・62> 32号住居址<No61> 平面図・断面図

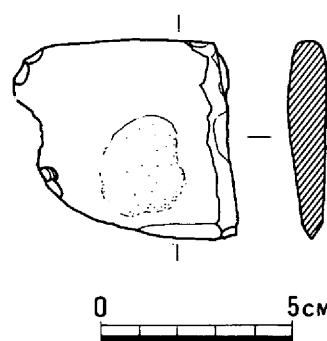
山根屋遺跡(54)



第47図 29号住居址状遺構〈No59〉出土遺物



第48図 30号住居址状遺構〈No60〉出土遺物



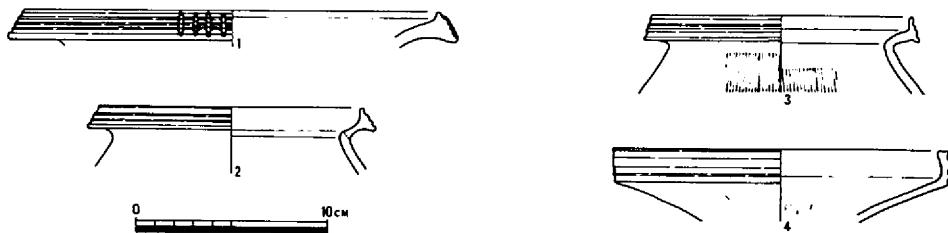
第49図 31号住居址状遺構〈No62〉出土遺物

をつくっている。よく焼けた火所が認められるが、その他の遺構は検出されなかった。

遺物（第47図）

出土した遺物はすべて弥生式土器で、黒色を呈する埋土の中より出土した。

1～4は壺である。1・2は長い頸部に沈線をめぐらし、上下に拡張された口縁端面に凹線文をも



第50図 31号住居址状遺構〈No.62〉出土遺物

つものである。1は凹線文の上に3こ一単位の円形浮文を施している。3は無頸壺で、口縁部外面と、やや水平に拡張された口縁端面に凹線文をめぐらしている。肩の部分には刷毛状工具による列点文がめぐっている。4はほぼ直立する口縁部をもち、口縁端面には凹線がめぐっている。

5は壺で、口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文をめぐらす。口縁部には紐孔がある。

7～9は高杯である。7は口縁端部が水平に拡張され、その端面と口縁部外面に鋸歯文が施される。8も口縁端部を水平に拡張し、その端面には櫛描による格子目が、また口縁部外面には櫛描の波状文が施されている。9は高い脚がつくもので、杯部とが連続してつくられている。口縁部はほぼ直立し、口縁端部には凹線がめぐる。底部外面は鎧磨き、内面は刷毛目調整の後で鎧磨きをおこなっている。脚には沈線が密接に施され、三角形の透孔が認められる。

これらの土器は7、8がやや古いものと考えられるが、その他は中期の後半に属する。

30号住居址状遺構〈No.60〉（第46図）

西端を31号に切られている。床面の一部は32号住居址を埋めてつくられ、また良く焼けた火所が残されている。ピットが検出されたが性格は不明である。

遺物（第48図）

1は「く」の字状に外反する口縁部をもち、口縁端部を上下に拡張し、その端面に凹線文をめぐらす壺である。口縁部のヨコナデは屈曲部以下1cm内外である。胴部外面上半は刷毛目、内面はナデによって仕上げられている。

2は壺の胴部で、内外面とも刷毛目調整によって仕上げられている。

31号住居址状遺構〈No.62〉（第46図）

完掘できなかったが、もう少し西側へ拡がると思われる。壁に接して溝が認められるが、西側では明確でない。ピットが検出されているが、性格は不明である。

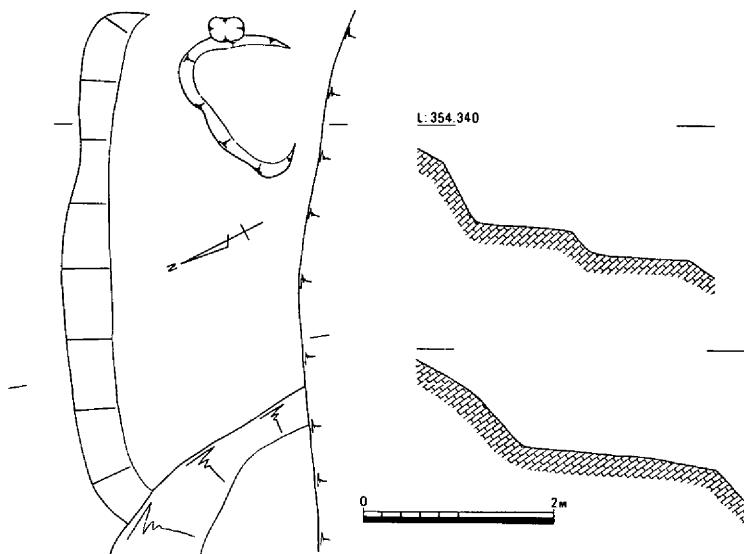
遺物（第49図、50図）

黒色を呈する埋土の中から出土したもので、弥生式土器と石包丁が認められた。

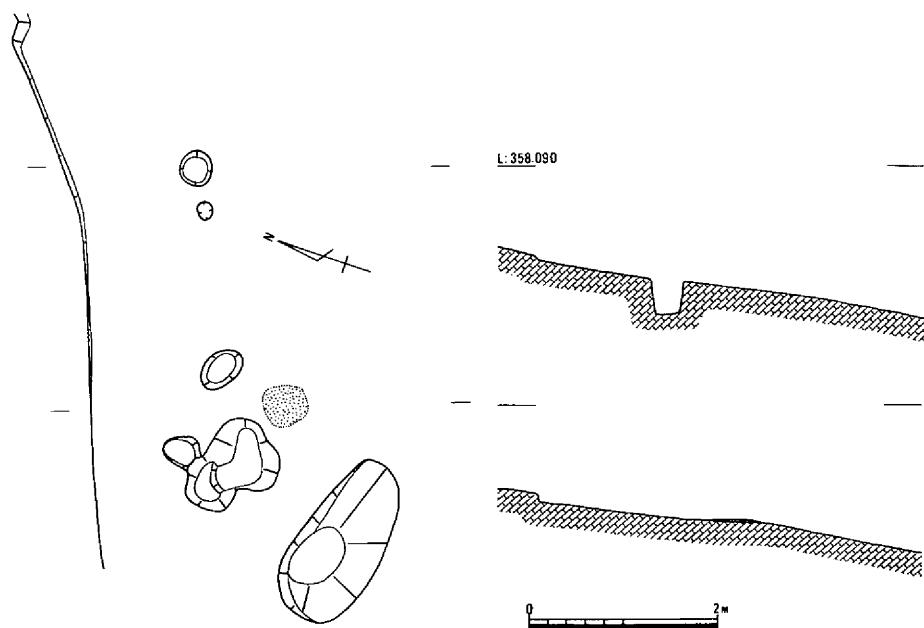
1は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文をめぐらし、その上に4本一単位の棒状浮文を貼付けた壺である。

2・3は壺である。口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文をめぐらす。胴部は内外面とも刷毛目調整、あるいはナデによって仕上げられる。

山根屋遺跡(54)

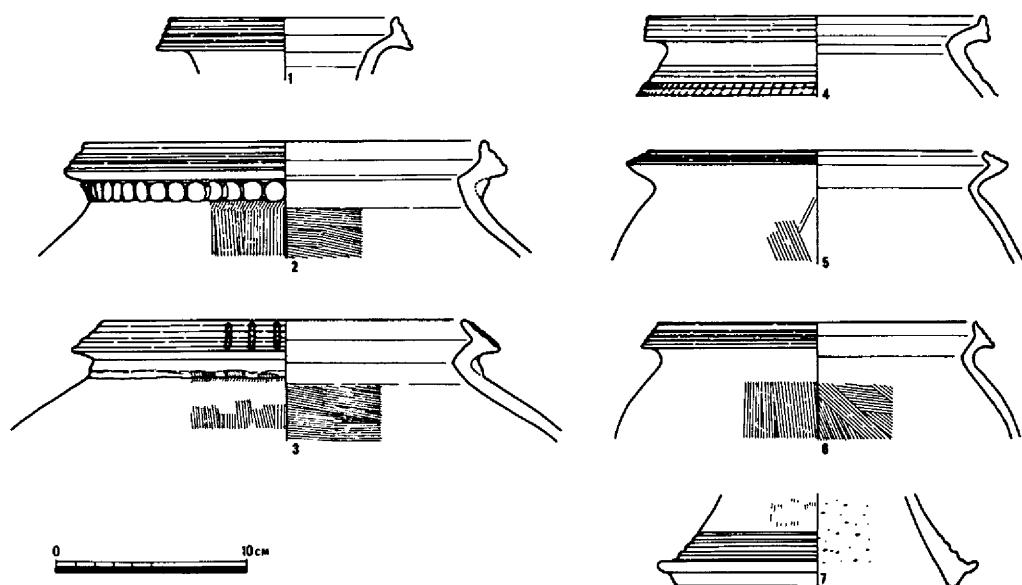


第51図 33号住居址状遺構〈No64〉平面図・断面図

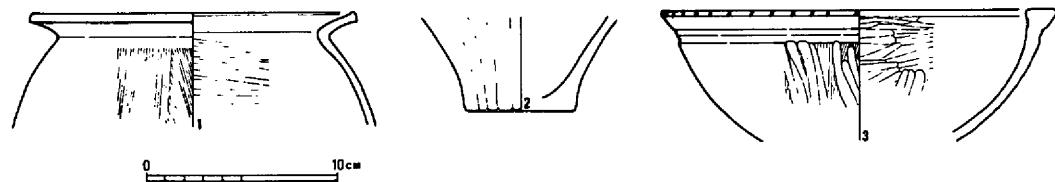


第52図 38号住居址状遺構〈No75〉平面図・断面図

山根屋遺跡(54)



第53図 33号住居址状遺構〈No64〉出土遺物



第54図 38号住居址状遺構〈No75〉出土遺物

4は高杯で、口縁部はほぼ直立し、外面には凹線文がめぐる。口縁端部上面にも凹線文がめぐっている。底部は内外面とも笠磨きで仕上げられている。

石包丁は磨製で、全体によく磨かれている。端部には紐かけと考えらるれくりこみが認められる。

33号住居址状遺構〈No64〉 (第51図)

ほぼ方形を呈すると考えられ、平坦部には何の遺構も検出されなかった。

遺物 (第53図)

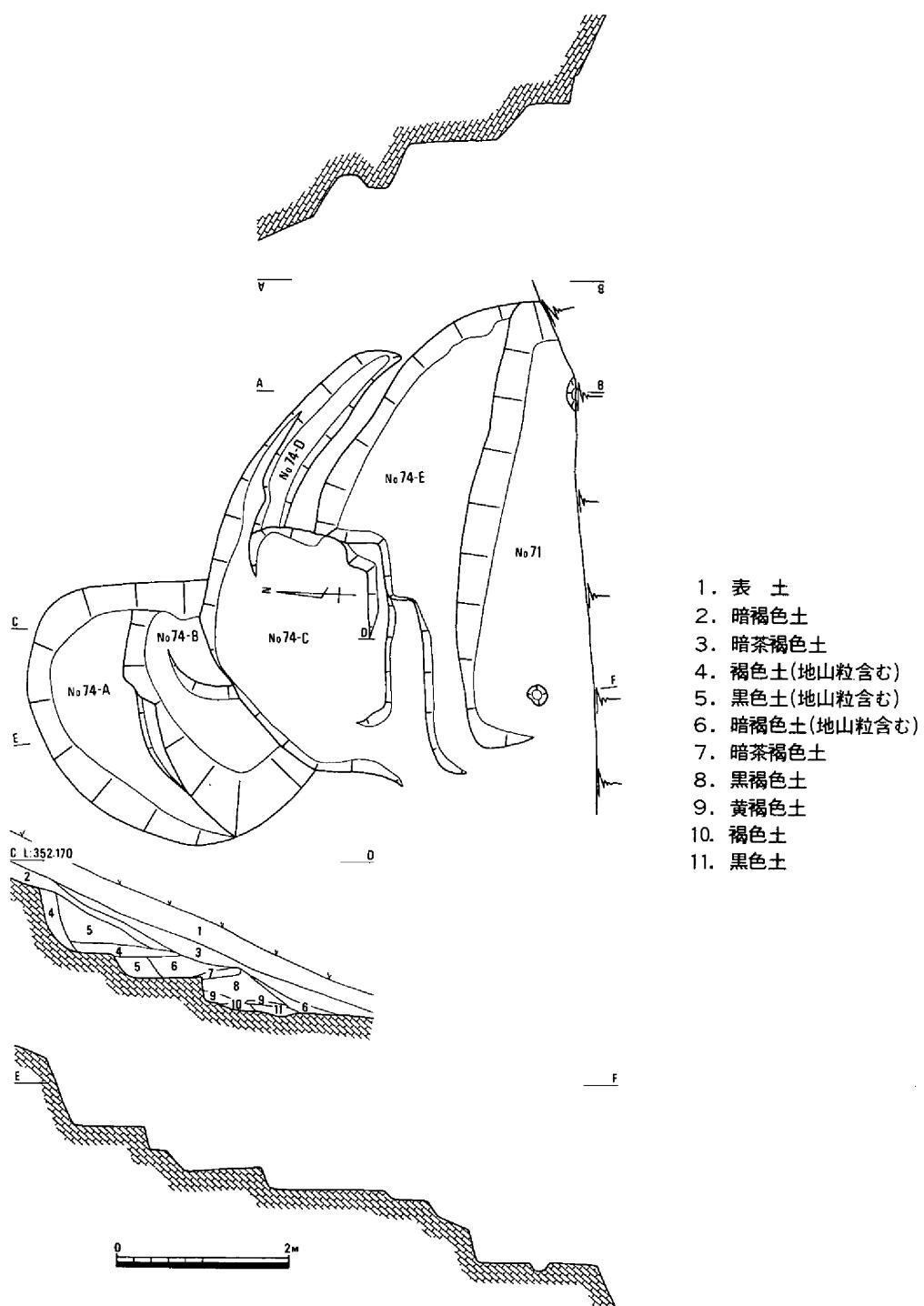
1は長い頸部をもつ壺で、口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文をめぐらす。

2は頸部に指頭圧痕文凸帯をもつもので、胴部は内外とも刷毛目によって仕上げられる。

3は頸部に凸帯をもち、口縁端部は上下、ことに上方へ拡張され、端面に凹線文がめぐる。その上に3本一単位の棒状浮文が貼付けられる。胴部は内外面とも刷毛目調整で仕上げられる。

4～6は「く」の字状に外反した口縁部をもち、口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文をめぐらす壺である。4は肩部に沈線をめぐらし、その上に斜行する刻目を施している。

山根屋遺跡(54)



第55図 36・37号住居址状遺構〈No.74・71〉平面図・断面図

山根屋遺跡(54)

7は高杯の脚部で、脚端近くに沈線が5条めぐる。外面は部分的に刷毛目が残っている。これらの土器は中期後半に属すると考えられる。

38号住居址状遺構<№75> (第52図)

5号墳の墳丘下より検出されたもので、壁は僅かしか残存しておらず、しかも屈曲している。床面もやや傾斜しているが、火所がある。また性格不明の不整形なピットなどが検出された。

遺物 (第54図)

1は甕で、「く」の字状に外反する口縁部をもち、端部はやや上方につまみ上げられている。胴部は内外とも刷毛目調整で仕上げられている。

2は底部で、外面は笠磨き、内面はナデによって仕上げられている。

3は高杯で、口縁端部は肥厚しつつ内外に拡張され、外側端部には刻目がめぐる。口縁部外面には沈線がめぐり、それ以下は刷毛目の後に笠磨き、内面は笠磨きによって仕上げられている。

24号住居址状遺構<№77> (第56図)

長方形を呈すると考えられ、柱穴が2本検出された。底い方の柱穴は検出できなかつたが、4本柱になるのではないかと思われる。

36号住居址状遺構<№74> (第55図)

遺構が重なり合っているが、土壙状のもの、あるいは溝状のものなどが認められる。遺物は全く出土せず、遺構の性格も不明であるが、弥生時代のものではないかと考えられる。

37号住居址状遺構<№71> (第55図)

山根屋遺跡発見の端緒になった遺構で、林道のカット面に表われていたものである。長方形を呈すると言われ、2本の柱穴が検出された。遺物はないが、弥生時代のものと考えられる。

III 溝状遺構

1号溝状遺構<№45>

1号墳の北側に検出されたもので、幅40cm程度の浅い溝である。遺物はなく、流入している土を観察しても、他の古い時期の遺構中にある黒色土（黒ボコ）とは異なるように思われ、新しいものと考えられる。

2号溝状遺構<№56> (第56図、57図)

住居址状遺構と同じような構造であるが、断面を観察すると溝状を呈している。斜面を等高線にとって掘り込んだものであるが、低い方には第三紀層ではなく、黒色土を掘り込んだものと考えられる。この溝状遺構の南側には平坦部、あるいは緩やかな斜面があり、そこに古墳がつくられている。

遺物 (第58図～60図)

遺物は溝状を呈する中に一括廃棄されたものと考えられ、高い方から流れ込んだような出土状態である。遺物はすべて弥生式土器であるが、石なども同時に捨てられている。

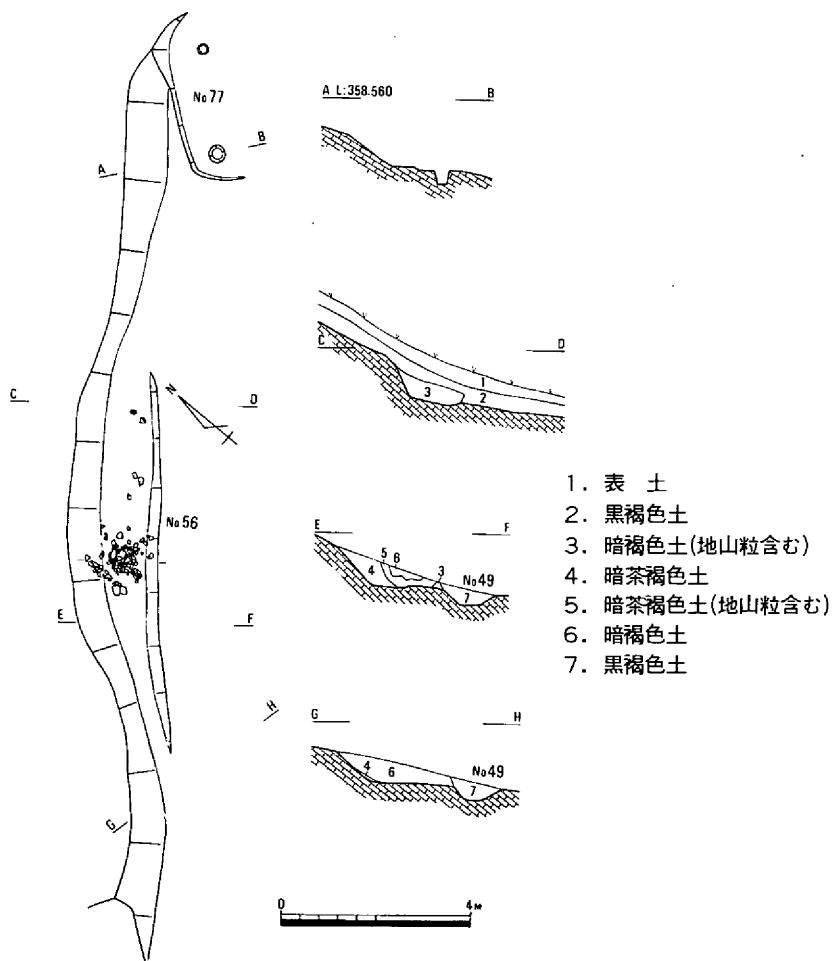
1～11は長い頸部を有する壺である。1の頸部には刷毛目調整後に沈線をめぐらし、その上をヨコナデした凹線的なものが認められる。内面には指頭圧痕が残る。2は口縁部が水平に外反し、口縁端

山根屋遺跡(54)

部は肥厚ぎみに上下に拡張され、端面に凹線文をめぐらす。さらにその上に3こ一単位の円形浮文を貼付ける。頸部には刷毛目の後に沈線がめぐり、内面は刷毛目調整である。4は上下に拡張された口縁端面に凹線文をめぐらし、その上に3本一単位の棒状浮文を施す。5は頸部に沈線文をもたず、刷毛目調整で仕上げられている。6～10は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文がめぐる。11は頸部下端に斜行する刻目がめぐる。

12、13は頸部に刻目凸帯をもつもので、口縁端部は上下に拡張され、端面には凹線文がめぐる。胴部は内外面とも刷毛目調整で仕上げられる。

14～33は甕である。14・15は「く」の字状に外反する口縁部をもち、胴部はイチジク形の器形になる。口縁端部は上方へ若干拡張され、その端面に凹線文を3条めぐらす。肩には3本の沈線をめぐらし、その上に籠状の工具で刻目を施す。胴部の最大径を示す部分には、櫛状工具による刺突文がめぐる。整形は、口縁部周辺のヨコナデが屈曲部以下1cm内外で、胴部外面上半は刷毛目、下半は籠磨き



第56図 2号溝状遺構〈No.56〉24号住居址状遺構〈No.77〉平面図・断面図

山根屋遺跡(54)

がなされる。内面上半は刷毛目、下半は箒削りによって仕上げられる。16~33は口縁端部を上下に拡張し、その端面に凹線文を数条めぐらすものである。口縁部周辺のヨコナデは狭く、屈曲部以下1cm内外である。胴部は内外とも上半は刷毛目調整であるが、下半は外面箒磨き、内面は箒削りで仕上げられる。32・33は胴部内面の箒削りが肩までおこなわれている。

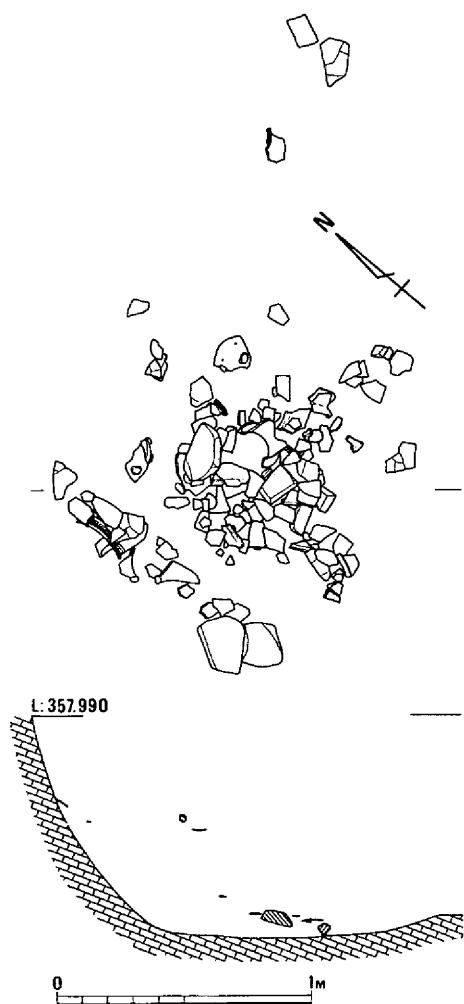
37~41は壺や甕の底部である。脹らんだ胴部から底部にかけてすぼみ、底部に近い所はクセをもっている。底部はナデられているものが多く、あげ底をなすものもある。外面は箒磨き、内面は箒削りによって仕上げられている。

34は蓋で、口縁部端面に凹線がめぐる。紐孔は4か所認められる。

35、36は高杯である。35はやや内傾ぎみに立上る口縁部をもち、端部は外側へ拡張され、その上端面には3条の凹線文がめぐる。36は脚部と杯部を連続して成形しており、底部を円板で充填している。口縁部はほぼ真直に立上り、上端面と外面に凹線文がめぐっている。脚部は、細長い柱状部から強く外反し、脚端部は上下に拡張される。外面には沈線が密に施され、三角形の透孔が4か所認められる。

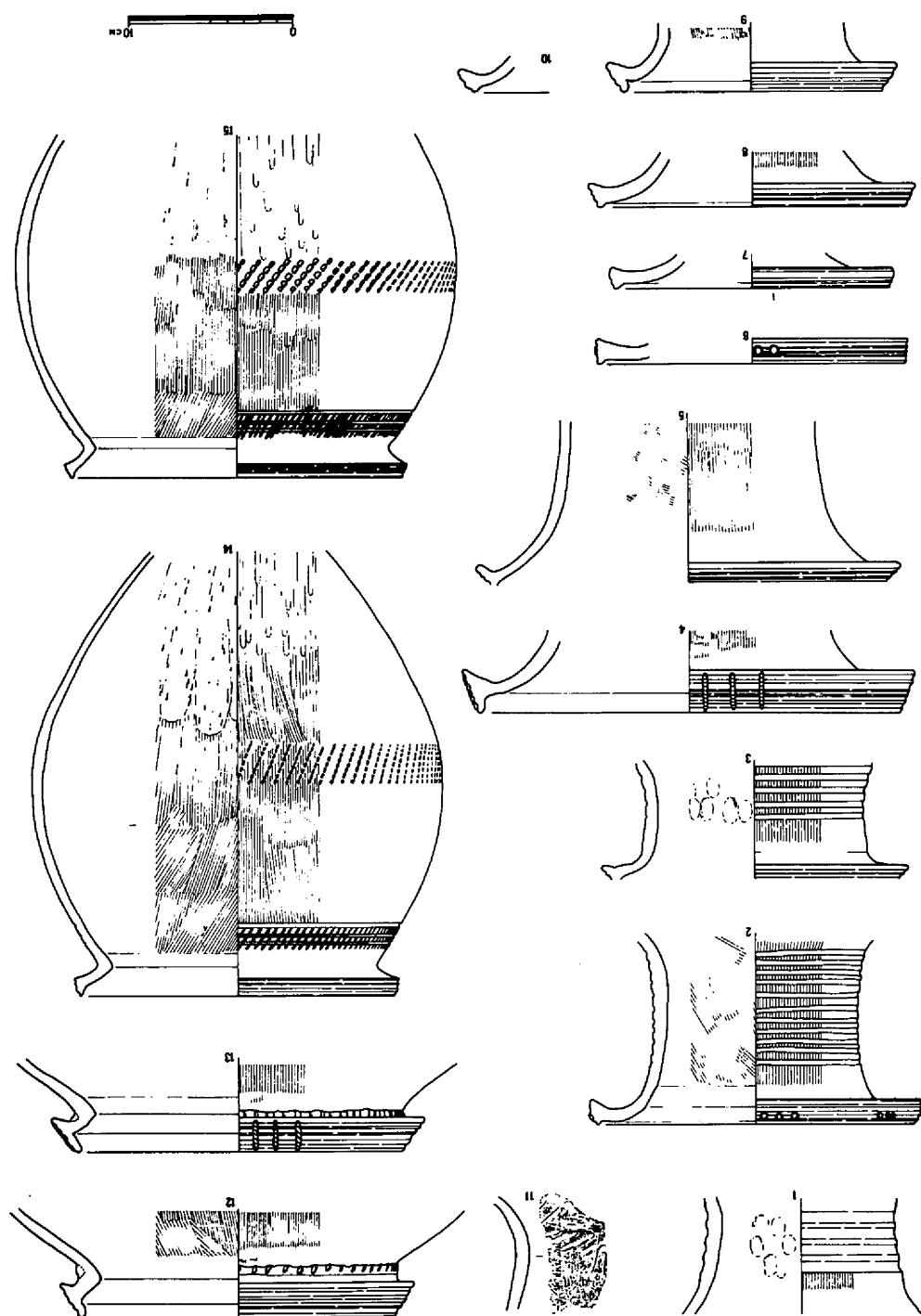
42~46は脚部である。脚端部は上下に拡張され、端面に凹線文をめぐらす。44は櫛状工具による波状文が、45は鋸歯文が認められる。44~46は高い脚になると考えられ、沈線が認められる。46は透孔がある。43は短い脚と考えられ、小型である。これら脚の調整は外面は一部刷毛目を残すものもあるが、ナデや箒磨きである。内面は43以外は箒削りで仕上げられている。脚端部周辺のヨコナデは、端面と内面1cm内外までである。

これらの土器は壺や甕、あるいは高杯などに凹線文が認められ、また整形技法においても、胴部内面下半に箒削りが認められる点など、中期後半の特徴をよく表わしている。しかしこれらの土器は同時期の瀬戸内側の土器とはかなり異なっている。特に14、15の甕、あるいは高杯などにそれが認められる。14、15の甕は広島県三次市の塩町遺跡(註2)より出土しており、山陰にも時々見られる。したがってこの土器は



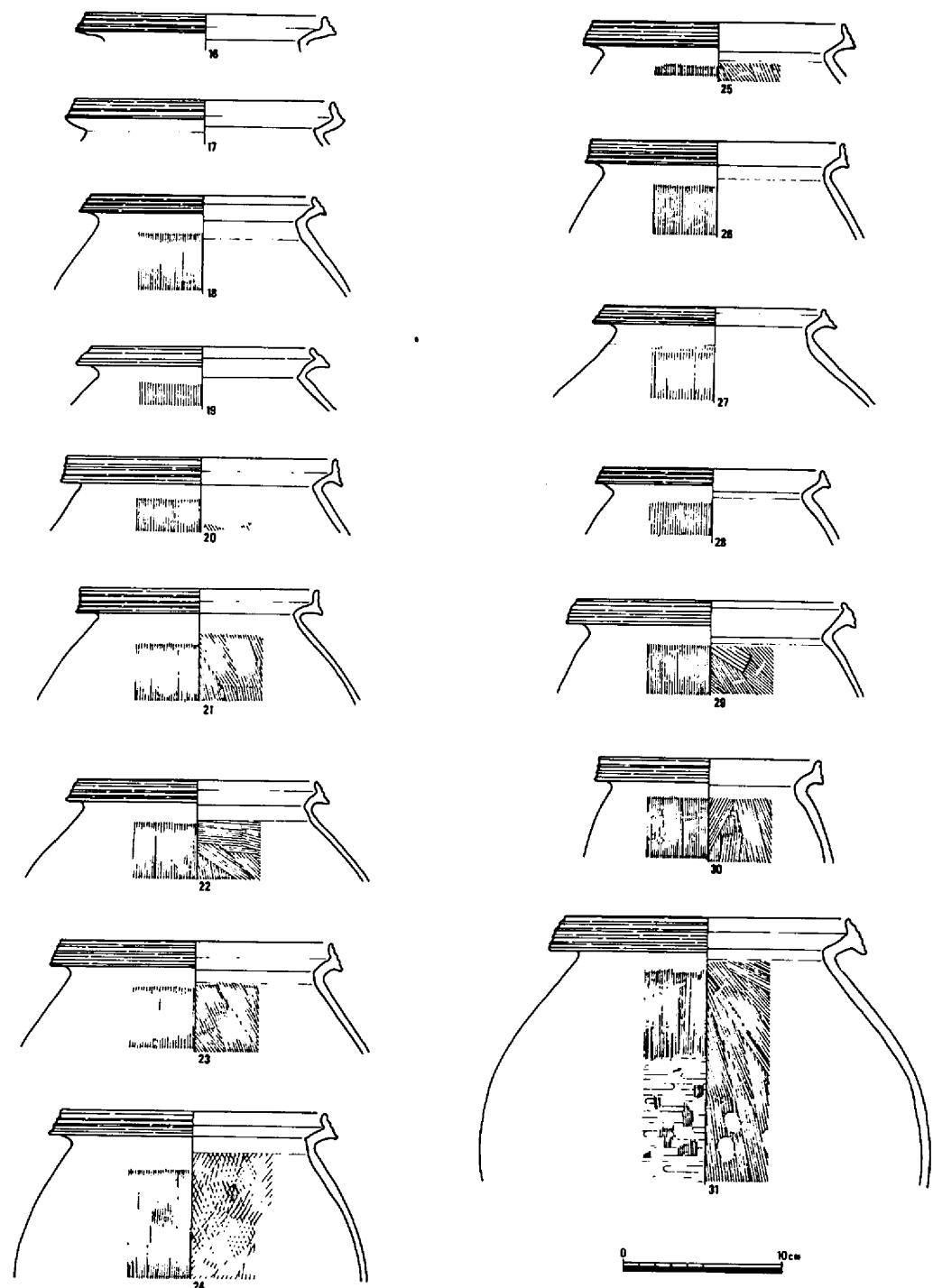
第57図 2号溝状遺構遺物出土状態

第58圖 乙號墓葬遺物 (No.56) 出土遺物



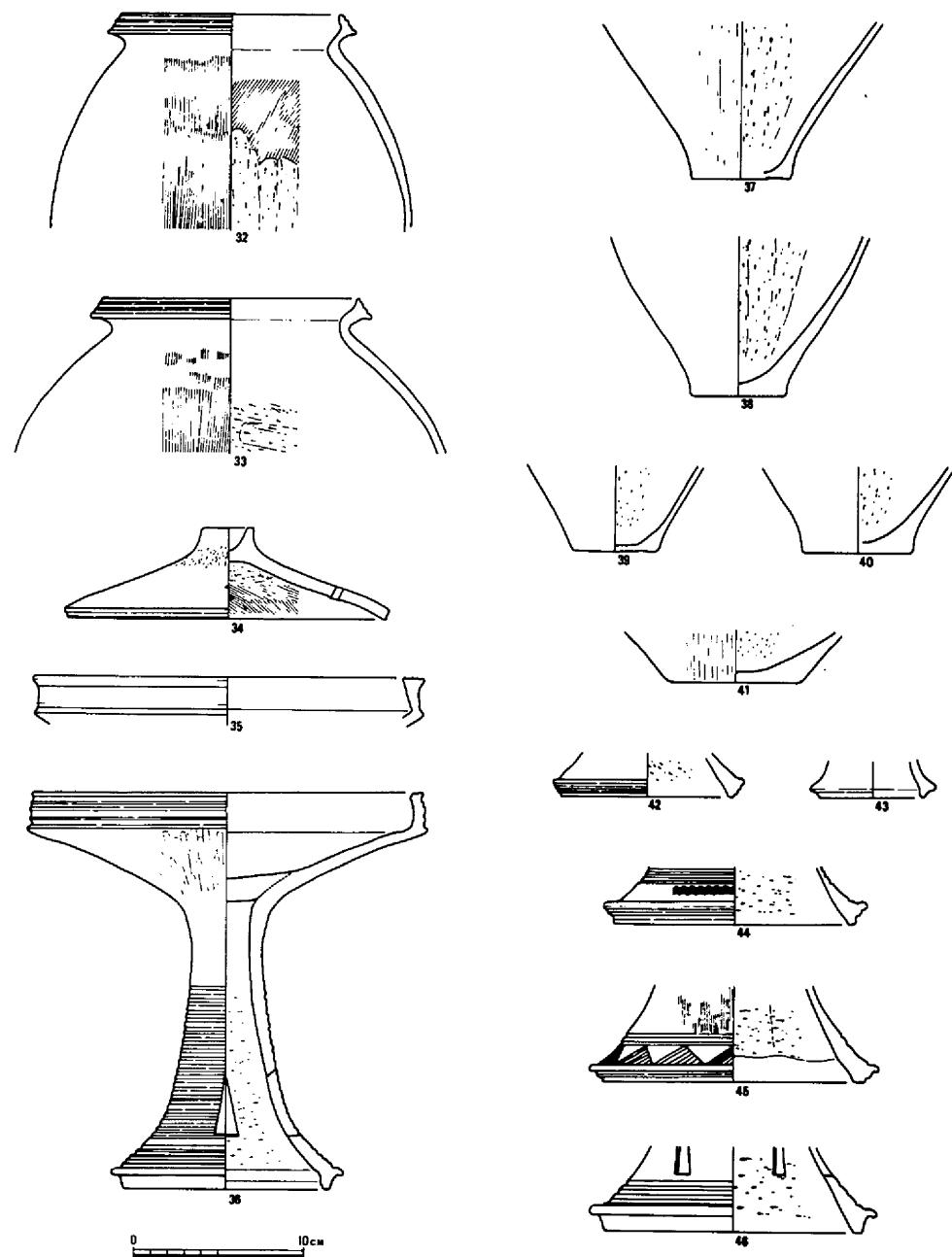
山銀屋遺跡 (54)

山根屋遺跡(54)



第59図 2号溝状遺構〈No56〉出土遺物

山根屋遺跡(54)



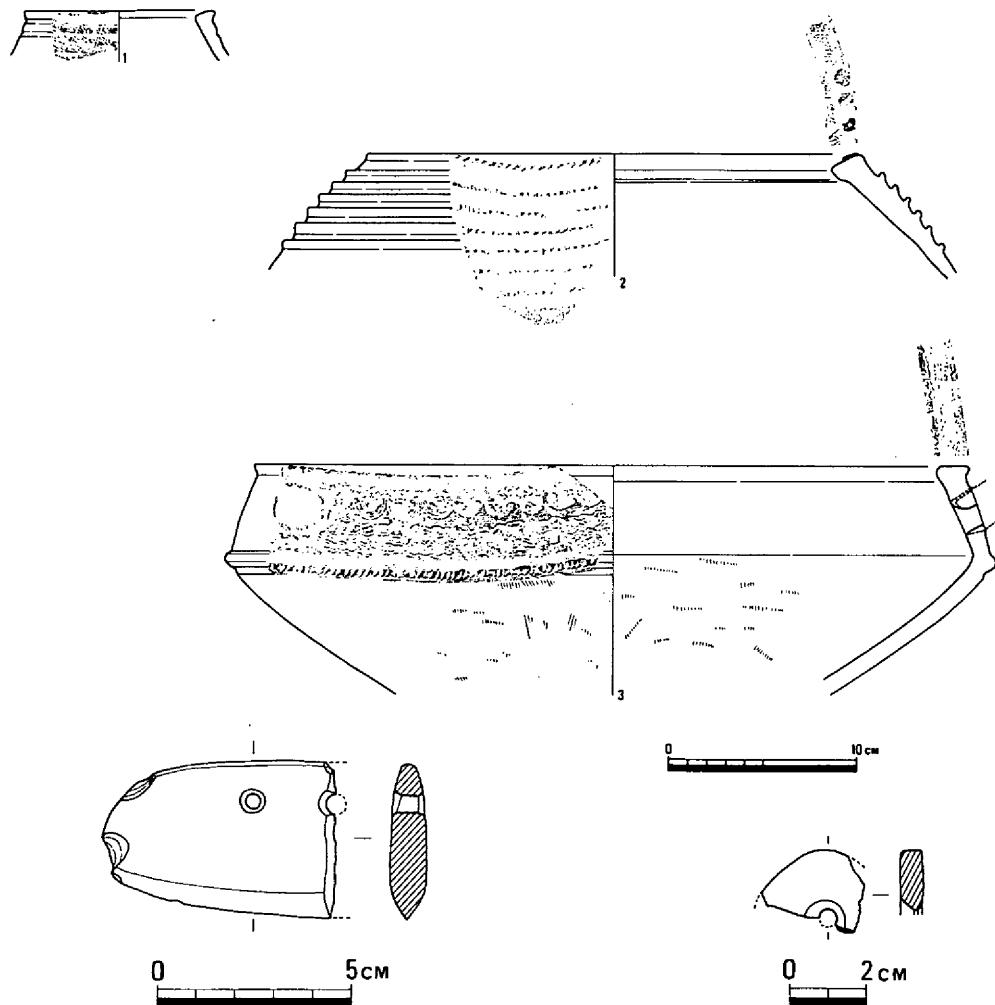
第60図 2号溝状遺構〈No56〉出土遺物

広島県東北部や岡山県の西北部、山陰などに分布するものと考えられる。また高杯の脚部の沈線は瀬戸内側と異なり、断面半円形の浅いものである。したがってこれらの土器も広島県北東部との関係が強いと考えられる。

IV 遺構に伴わない遺物 (第61図)

遺構に伴わない遺物は、ここに図示した磨製の石包丁と土製の紡錘車以外はすべて土器であるが、それらのすべてを図示することはできなかった。したがってここに図示したものは、遺構に伴って出土した土器に無いものを選んだ。その他の土器は大旨前述したものに類似し、中期中葉から後半にかけてのものであるが、中期後半が多い。

- 1は無頸壺で、口縁部外面には凹線文がめぐり、その上に鋸歯文が描かれる。
- 2は口縁部外面に6条の刻目凸帯をめぐらし、口縁端部上面には鋸歯文と円形浮文が認められる。
- 3は注口が付くもので、内傾する口縁部外面には同心円と波状文、端部上面には波状文が櫛状工具によって施される。



第61図 遺構に伴わない遺物

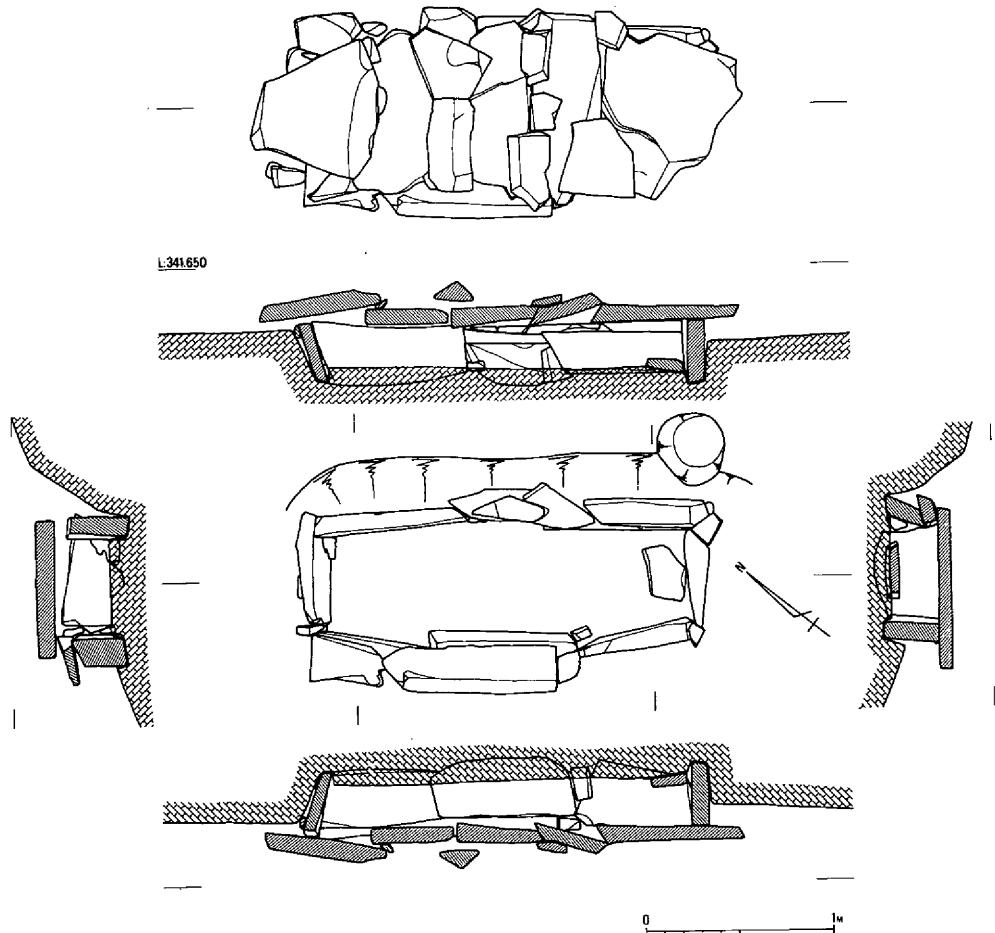
第3節 古墳時代の遺構と遺物

I 古墳時代前期の墳墓

(a) 箱式石棺墓

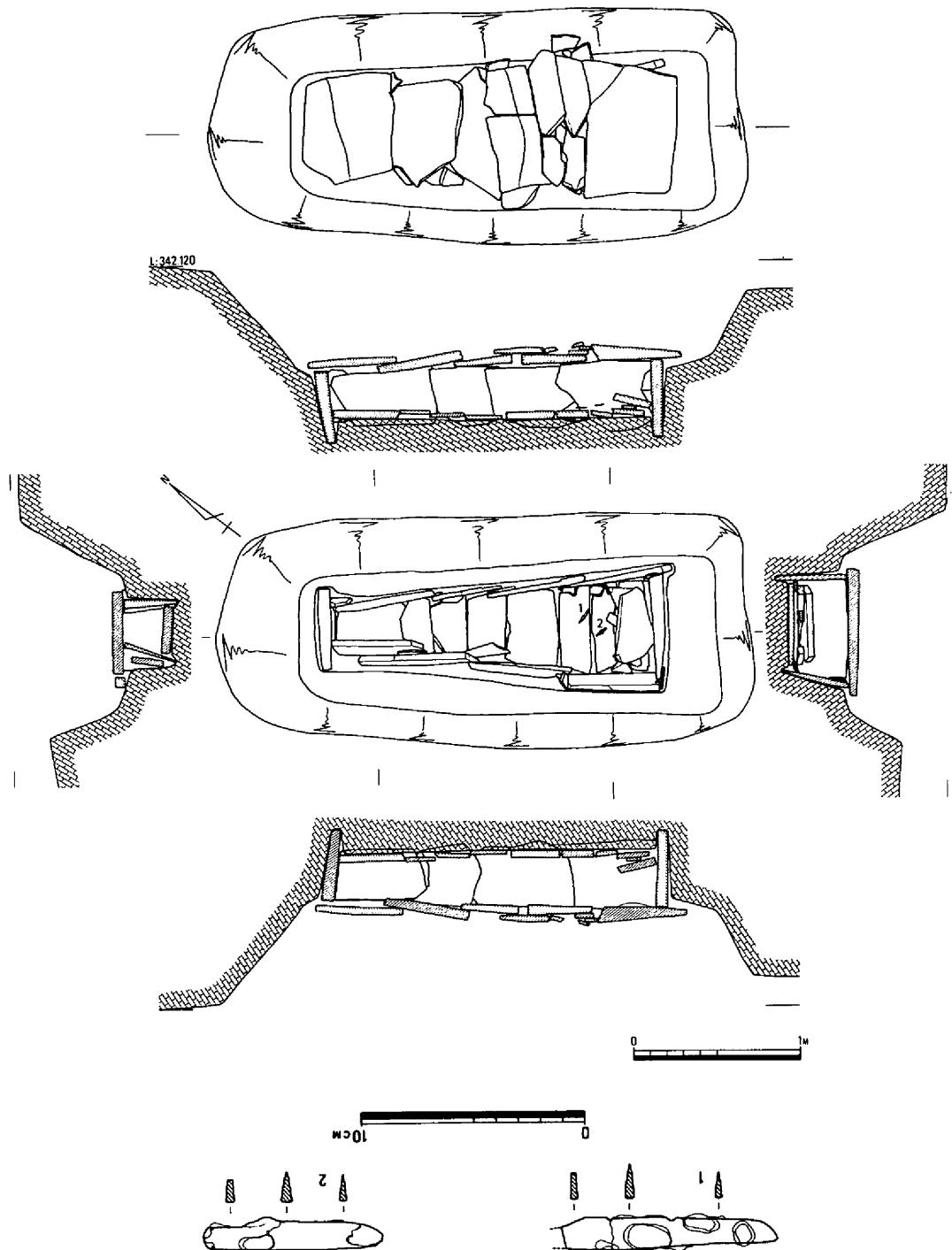
1号墓<No.2> (第62図)

1号墓は丘陵斜面西端の、尾根状を呈する所に位置する。この尾根状を呈する部分には、墳墓が集中して認められる。箱式石棺は、表土を剝ぐとすぐ蓋石が検出され、盛土の有無、掘方などは確認できなかった。地山まで掘り下げた段階で、高い部分から掘方が検出できたが、おそらく黒色土中から掘方が存在したと考えられる。箱式石棺は地山に掘り込んだ墓壙の中に築かれている。板石を使用し



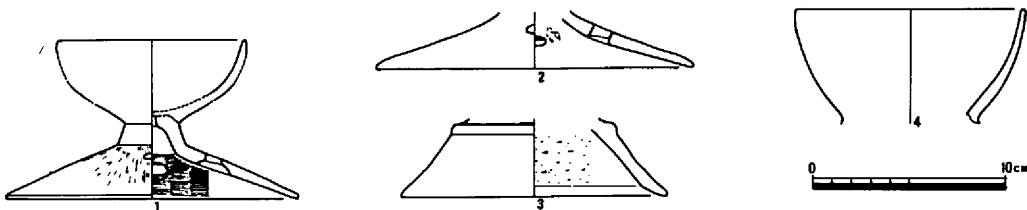
第62図 1号墓<No.2> 平面図・断面図

山根屋遺跡(54)



第63図 2号墓〈No.5〉平面図・断面図と出土遺物

山根屋遺跡(54)



第64図 2号墓〈No5〉墓壙内出土遺物

た丁寧な作りで、長さ1.90m、幅0.50mを測る。棺内には枕石が認められるが、遺物は全く無かった。

2号墓〈No5〉(第63図)

1号墓の西側に平行してつくられており、他の箱式石棺に比較して立派なものと言える。

墓壙は第三紀層上面で検出したが、墓壙内の埋土は第三紀層と同じような土質であったため手間どった。2段掘の墓壙内には、人工的に破碎されたと考えられる土師器が認められた。箱式石棺は板石を使用したもので、頭部と考えられる方は広く、足の方は側壁を両側とも外口板の内側にして狭くしている。床面にも板石を敷いており、頭部には板石を2枚重ねた枕石が認められる。棺内の遺物は頭部に近い所で刀子が2点認められた。

遺物(第63図、64図)

遺物は墓壙内より出土した土師器と、箱式石棺内より出土した刀子がある。

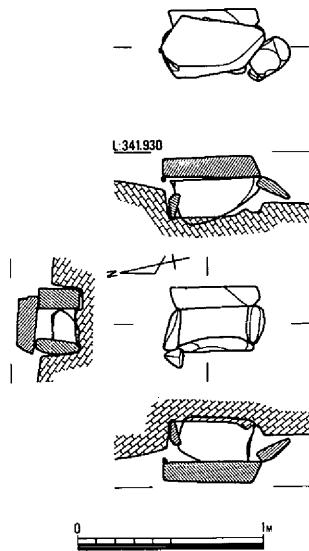
墓壙内出土の土師器はいずれも細片になっており、図示したもの以外にも壺か甕の胴部破片や高杯などの細片もあった。これらの土器は図示したものも含めて、例外はあるが、すべて丹が塗られているものである。

1は半球状の杯部をもつ高杯である。脚部は短い柱状部から外方へ強く屈曲して広がるもので、端部は丸くおさめる。杯部は内外面とも笠磨き、脚部外面は刷毛目の後で笠磨きがなされ、内面は刷毛目調整で仕上げられる。精選された粘土が使用され、丁寧な作りである。

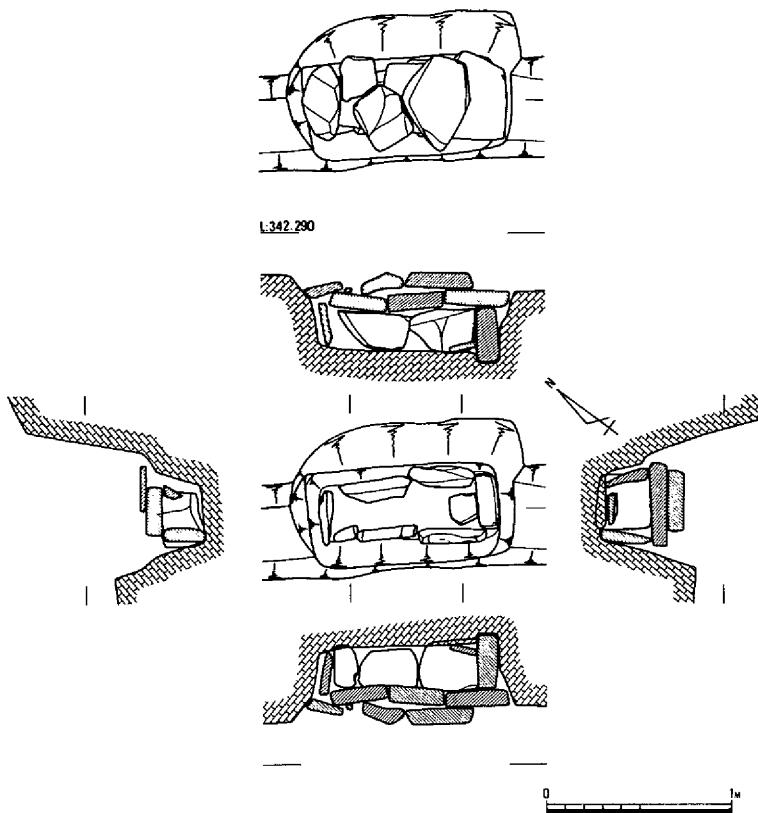
2は高杯の脚部で、円形の透孔が4か所認められる。胎土には砂粒を含み、丹は塗られていない。

3は鼓形器台の脚台部で、外面の整形は不明であるが、内面は笠削りがなされ、脚端部はヨコナデによって仕上げられている。外面は丹が塗られている。

4は丸底の壠になると見えられる。外面は細かい笠磨きがなされ、丹が塗られている。胎土には精選された粘土を使用している。



第65図 3号墓〈No12〉平面
図・断面図



第66図 4号墓〈No.9〉平面図・断面図

1、2とも小形の刀子である。1は茎の部分が欠損しているが、棺内には破片が認められなかつた。いずれも丹が付着しており、棺内に丹が塗られていたものと考えられる。

3号墓<No.12> (第65図)

3号墓は1号墓、2号墓に接近してつくられ、小児用の箱式石棺と考えられるものである。蓋石は一枚で、丸みをもった扁平な石で四方を囲んだものであるが、外口と側壁を意識して石を用いていいる。遺物は無かった。

4号墓<No.9> (第66図)

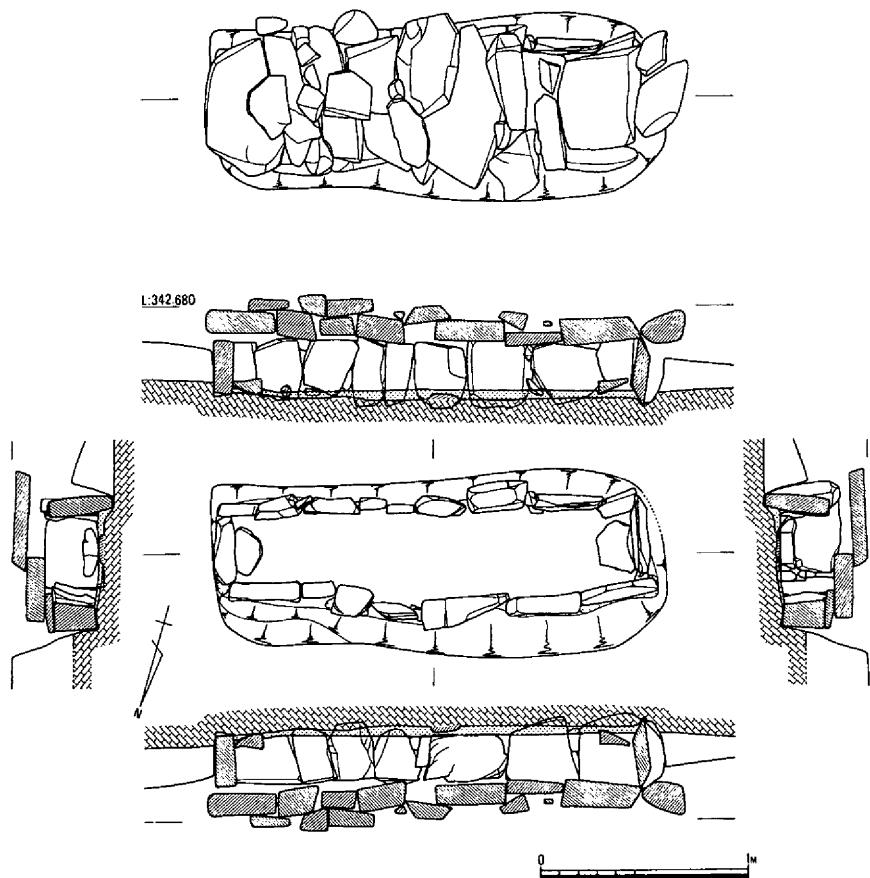
4号墓は2号墓の東側に平行してつくられており、弥生時代のものと考えられる住居址状の遺構を切ってつくられ、上部には砂利敷の古道が認められる。

箱式石棺は第三紀層に掘り込まれた墓壙の中につくられ、丸みをもった扁平な石を使用している。長さ0.75m、幅0.20mとやや小型で、棺内には枕石が認められただけで遺物は無かった。

11号墓<No.16> (第67図)

11号墓は4号住居址状遺構床面が広がる平坦部に、等高線と平行につくられている。尾根状を呈する所につくられた墳墓群からはやや距離をおいている。

山根屋遺跡(54)



第67図 11号墓〈No.16〉平面図・断面図

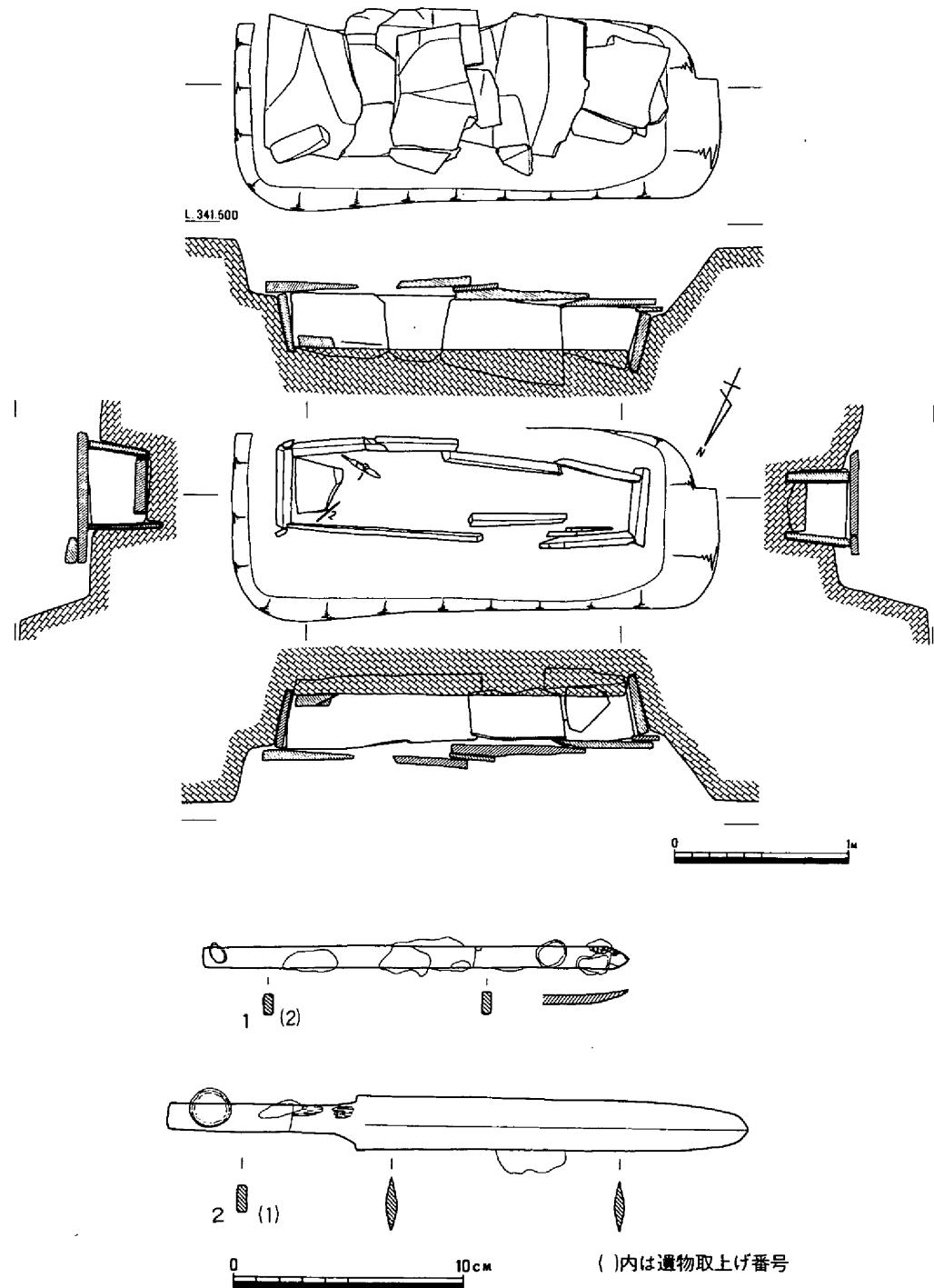
墓壇は第三紀層の上に堆積している暗灰茶褐色土層から掘り込まれており、第三紀層へはあまり掘り込まれていない。棺に使用された石材は、第三紀層中に含まれる丸みをもったものが目立つが、多くは扁平な石である。しかし1号墓、2号墓のような板石ではなく、周辺に散在する石を使用している。

長さ2.10m、幅0.50mを測り、両端に枕石が認められる所から、2人の埋葬が考えられる。遺物は全く認められなかった。

12号墓〈No.40〉(第68図)

12号墓は5号住居址状遺構が、ある程度埋れた後につくられたものと考えられる。当初方形台状墓的なものかとも考えてみたが、住居址状遺構の埋土は周囲の黒色土と異なる点はなかった。かと言つて黒色土中から掘方が確認されたわけではなく、極め手に欠けるものである。ただ5号住居址状遺構に類似したものが他の地点で出土していることから、弥生時代の住居址状遺構と考え、その平坦な所に墳墓をつくったものと考えたい。このような住居址の平坦部につくった例は11号墓、14号墓、15号墓などでも認められるものである。

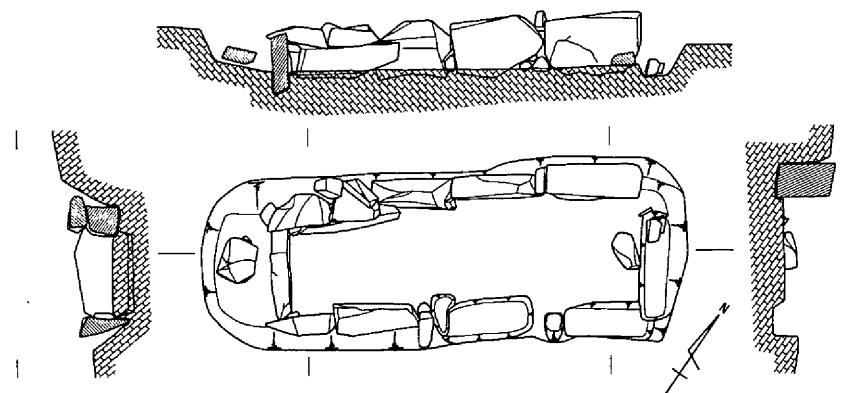
山根屋遺跡(54)



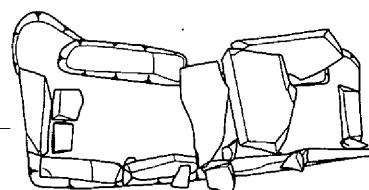
第68図 12号墓〈No40〉平面図・断面図と出土遺物

山根屋遺跡(54)

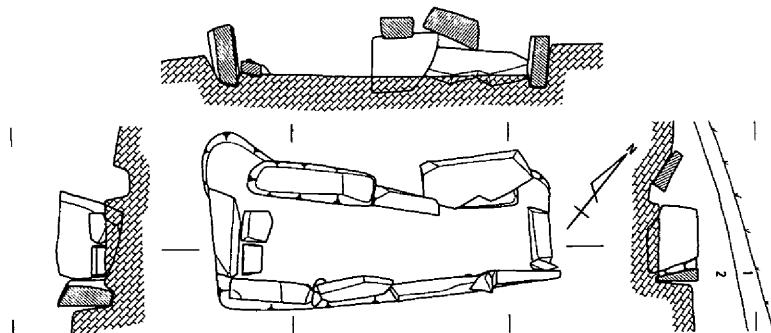
L361.780



0 1m



L357.430



1. 表土
2. 黒色土

0 1m

第69図 17号墓〈No47〉(上), 18号墓〈No48〉(下) 平面図・断面図

山根屋遺跡(54)

墓壙は上面で検出した。2段掘りで、箱式石棺は板石を使用している。棺内は枕石が認められ、両側に鉄劍と鉈があった。鉄製品には丹が付着しており、石棺内は丹塗りしていた可能性が強い。

遺物 (第68図)

枕石の付近に鉄製品が2点副葬されていた。1は鉈で、先端部は鋭角に尖って両刃をつけ、上反りになっている。2は劍で、全長25cm、茎の長さ8cm、身の幅2cmを測る。身の中央には鎬がある。茎には一部木質が残り、目釘孔は認められない。

17号墓<№47> (第69図)

17号墓は丘陵頂部近くの緩やかな斜面に、等高線と平行してつくられている。薄い表土を剥ぐとすぐ検出されたもので、蓋石はすでになかった。棺内には枕石が認められた。枕石の反対側は墓壙が広く掘られており、あたかも副室のような感じをうける。中には扁平な石が一個置かれていただけであったが、残存状態が良くないため遺物があったものかどうかは不明である。

18号墓<№48> (第69図)

18号墓も表土から浅く、蓋石は一部しか残存していないなかった。側壁、外口は板石を立ててつくっているが、これらの墓壙はあらかじめ石に合せて掘ったものではなく、打込んだような感じをうける。他のほとんどの箱式石棺も石を解体したとき、掘方のようなものではなく、石と同じ形の痕跡が残ることからも考えられる。

(b)石蓋土壙墓

5号墳<№10> (第71図)

4号墳<№7>の北側、1号住居址状遺構の溝を切ってつくられている。4号墓と接して一直線上に並んでいる。墓壙は2段掘りになっており、下段に蓋石がのる。やや丸みのある板石で丁寧に蓋をし、床面は一方の地山を削り出し、枕にしている。遺物は全く無かった。

6号墓<№1> (第70図)

4号墳<№7>の北側に、4号墳の周溝と平行につくられている。

墓壙は第三紀層を2段に掘り込んでおり、下段に石蓋がのる。蓋石は扁平な石であるが、1号墓や2号墓のような板石ではない。側壁には石が2枚だけ使用されている。遺物は無かった。

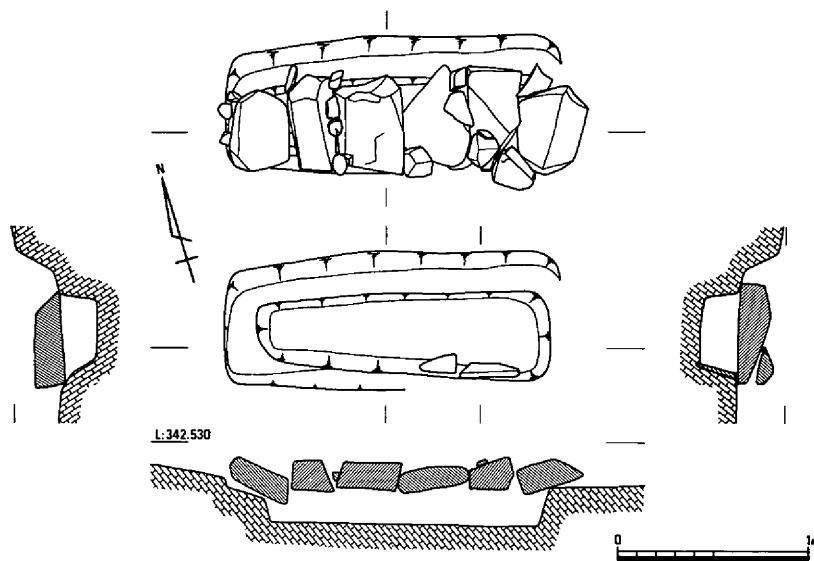
7号墓<№14> (第72図)

4号墳<№7>の北側に周溝と平行につくられている。一部古道によって壊されており、蓋石も一枚しか残存していないかった。蓋石は黒色土の中にあり、おそらく黒色土層のもっと上位から墓壙が掘られていたものと考えられる。板石が発見された段階では墓壙は検出できず、第三紀層上面において検出できた。遺物は無かった。

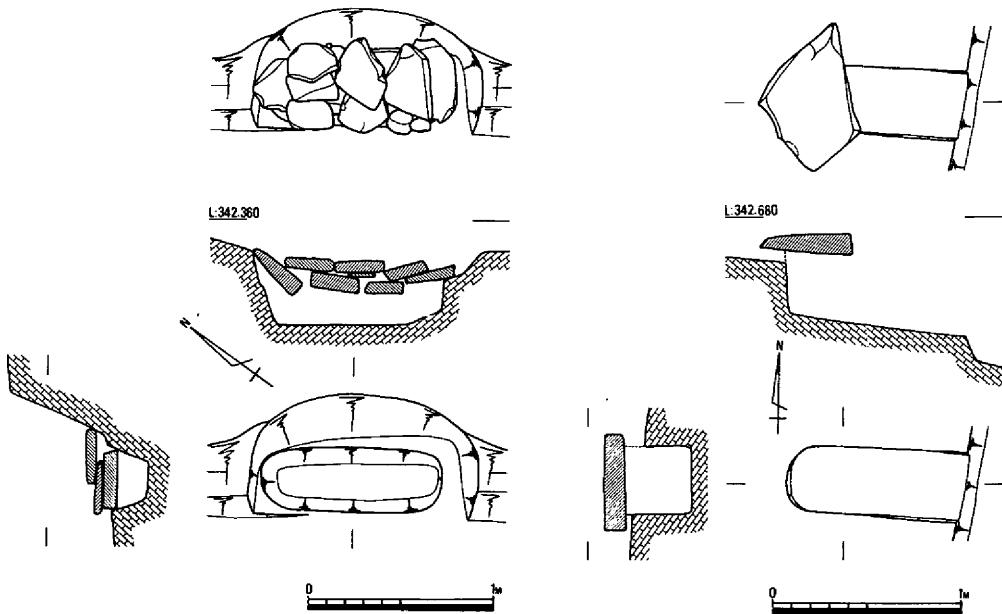
10号墓<№15> (第73図)

4号墳<№7>の北東部に位置している。蓋石は扁平な石を使用し、黒色土中で検出された。しかし墓壙は検出することができず、第三紀層上面で検出できた。おそらく黒色土中より墓壙を掘っているのであろうが、識別するのは困難である。第三紀層への掘り込み方は他の墳墓に比較して浅く、またつくりがやや粗雑である。遺物は全く認められなかった。

山根屋遺跡(54)

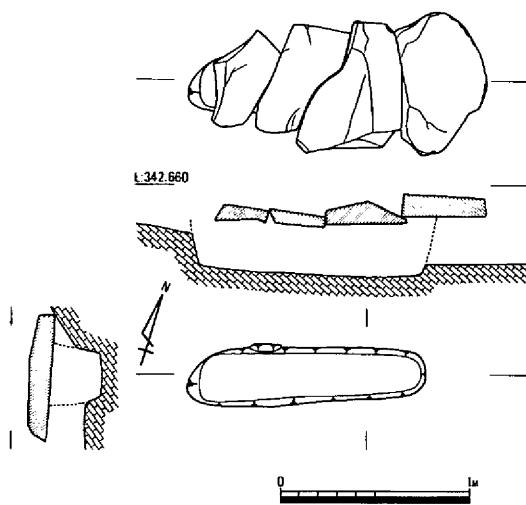


第70図 6号墓〈No.1〉平面図・断面図

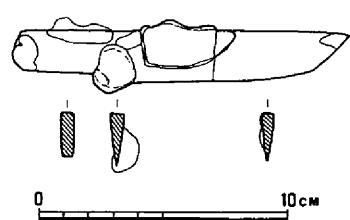
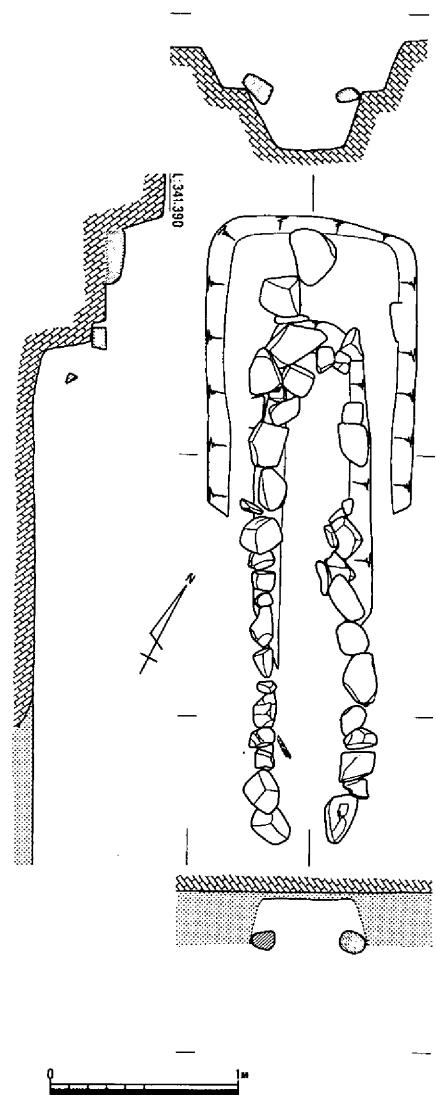


第71図 5号墓〈No.10〉平面図・断面図

第72図 7号墓〈No.14〉平面図・断面図



第73図 10号墓〈No15〉平面図・断面図



第74図 13号墓〈No39〉平面図・断面図
と出土遺物

(C) 配石土壙墓

13号墓〈No.39〉 (第74図)

5号住居址状遺構の平坦部につくられており、長大な2段掘りの墓壙内に配石が見られるものである。谷側の方は第三紀層がなく、黒色土の中に墓壙が掘られており、検出することができなかった。しかし配石があったため、ほぼ全形を知ることができる。

墓壙内には木棺があったものと考えられ、石はその木棺の周囲に並べられていたと思われる。墓壙内の土は黄褐色土であった。

遺物 (第73図)

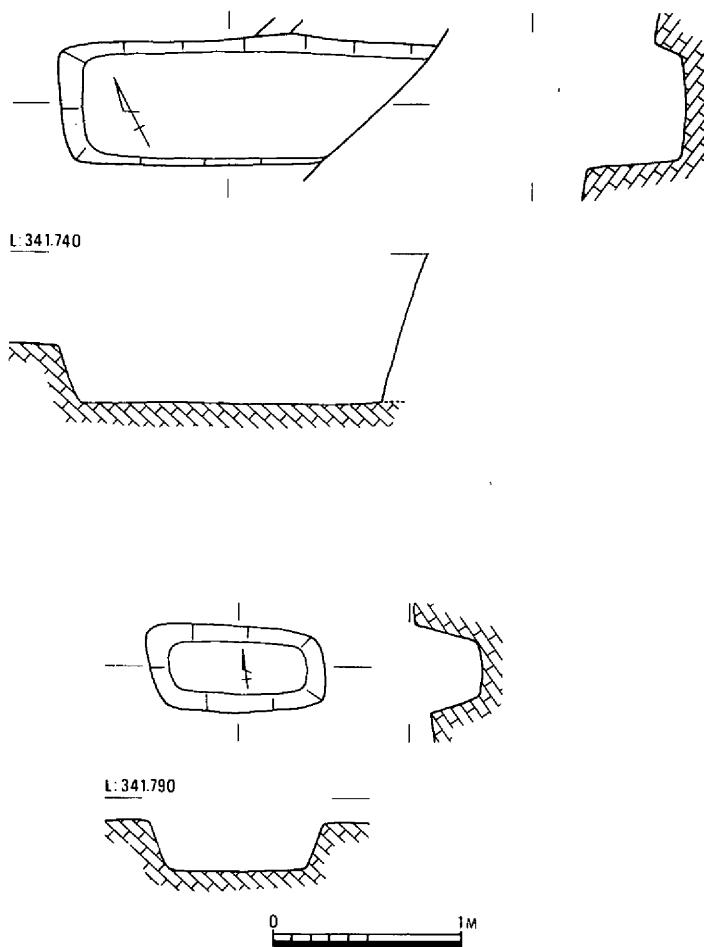
遺物は刀子が1点床面から出土しており、長さ13cmを測る。

(D) 土壙墓

8号墓〈No.8〉 (第75)

7号墳の墳丘内と考えられる位置にあり、主体部になる可能性がある。第三紀層上面で検出し、土壙内には黒色土が充填していた。全掘することができなかったが長さは2m以上あると考えられ

山根屋遺跡(54)



第75図 8号墓〈No.8〉(上), 9号墓〈No.20〉(下) 平面図・断面図

る。遺物は無かった。

9号墳〈No.20〉 (第75図)

4号墳〈No.7〉の周溝にかかる位置にあり、小さな土壙墓である。土壙内には黒色土が充填しており、遺物は無かった。

(e) 古墳

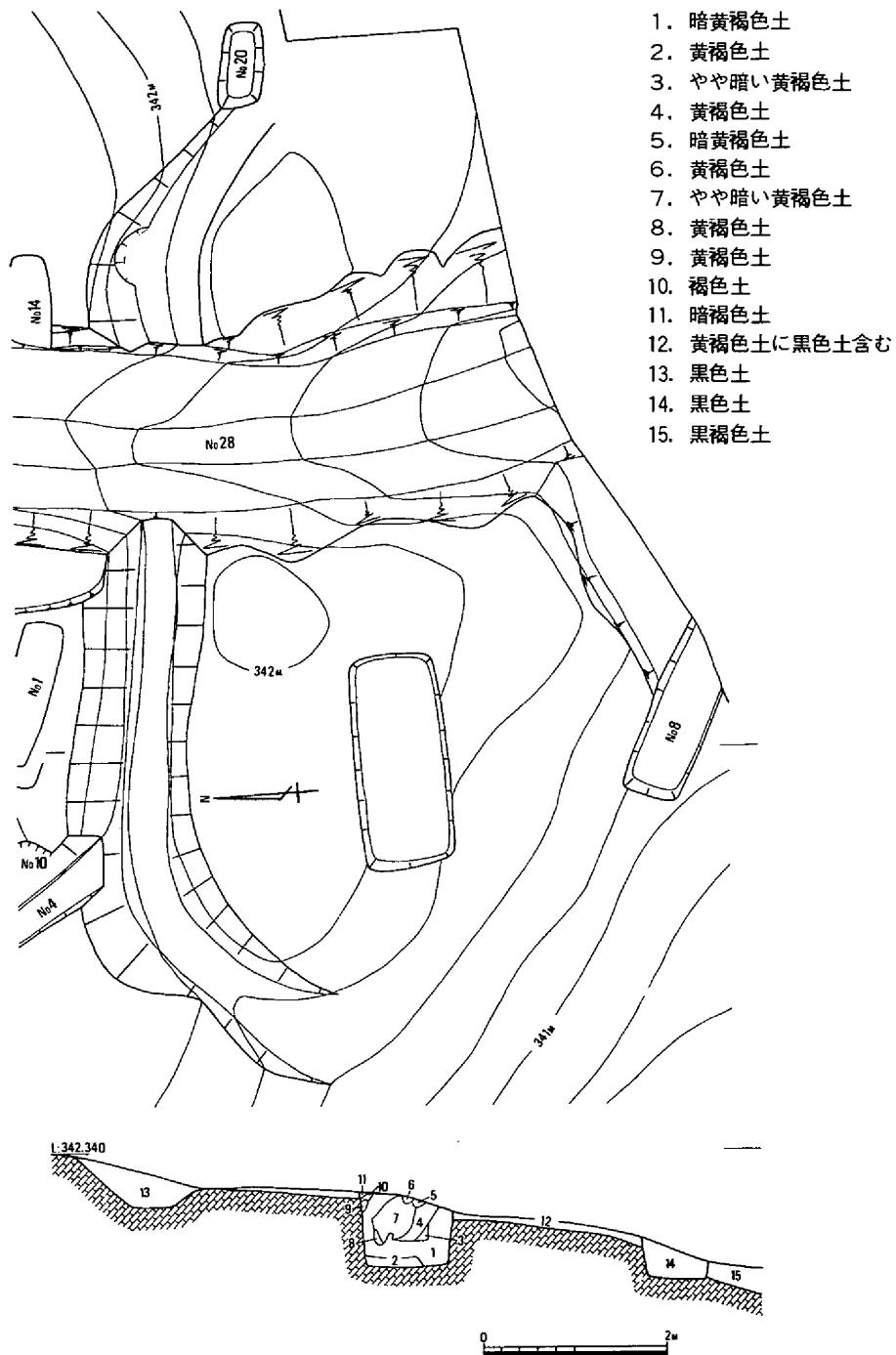
4号墳〈No.7〉 (第76, 77図)

方形台状墓と言われているものに類似したものであるが、方形台状墓の概念も不確定であり、古墳というにしても躊躇せざるをえないものであるが、一応暫定的に古墳として記述する。

一辺約9mの方形を呈すると考えられるが、斜面なので正方形の墓域と考えるにはやや無理があり、長方形の墓域と考えたい。周溝は隅が丸みをもっている。

主体部は中心から外れてつくられているが、一部古道によって切られているため、他に主体部があ

山根屋造跡 (54)



第76図 4号墳〈No.7〉平面図・断面図

山根屋遺跡(54)

った可能性が残る。検出された主体部は盛土と第三紀層を掘り込んだ土壙墓で、中には木棺があったと考えられる。主体部の断面を観察すると壁に接して黒っぽい土があり、中心は黄色っぽい土であることから、木棺痕跡ではないかと思われる。

墳丘は第三紀層の上に若干盛土が認められ、本来はもっと高い墳丘があったものと考えられる。

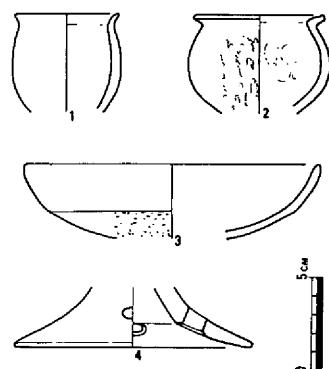
遺物（第77図）

遺物は主体部からは出土せず、周溝の中より土師器が出土した。

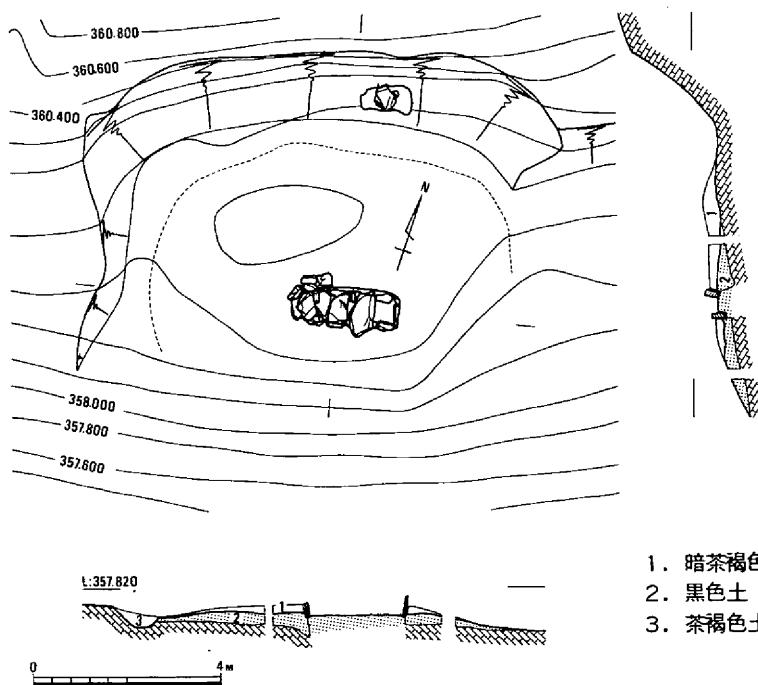
1は小型の甕であるが、いわゆる手捏ねの小型品と異なり、丁寧な作りであり、しかも大型品と整形技法まで同じである。このことは2の土器についても言える。

2は「く」の字状に外反する口縁部をもち、端部はやや上方につまみ上げられている。胴部外面は刷毛目の後を笠磨き、内面は抑えつけとナデによって仕上げられている。

3・4は高杯である。3は底部を笠削りしている。



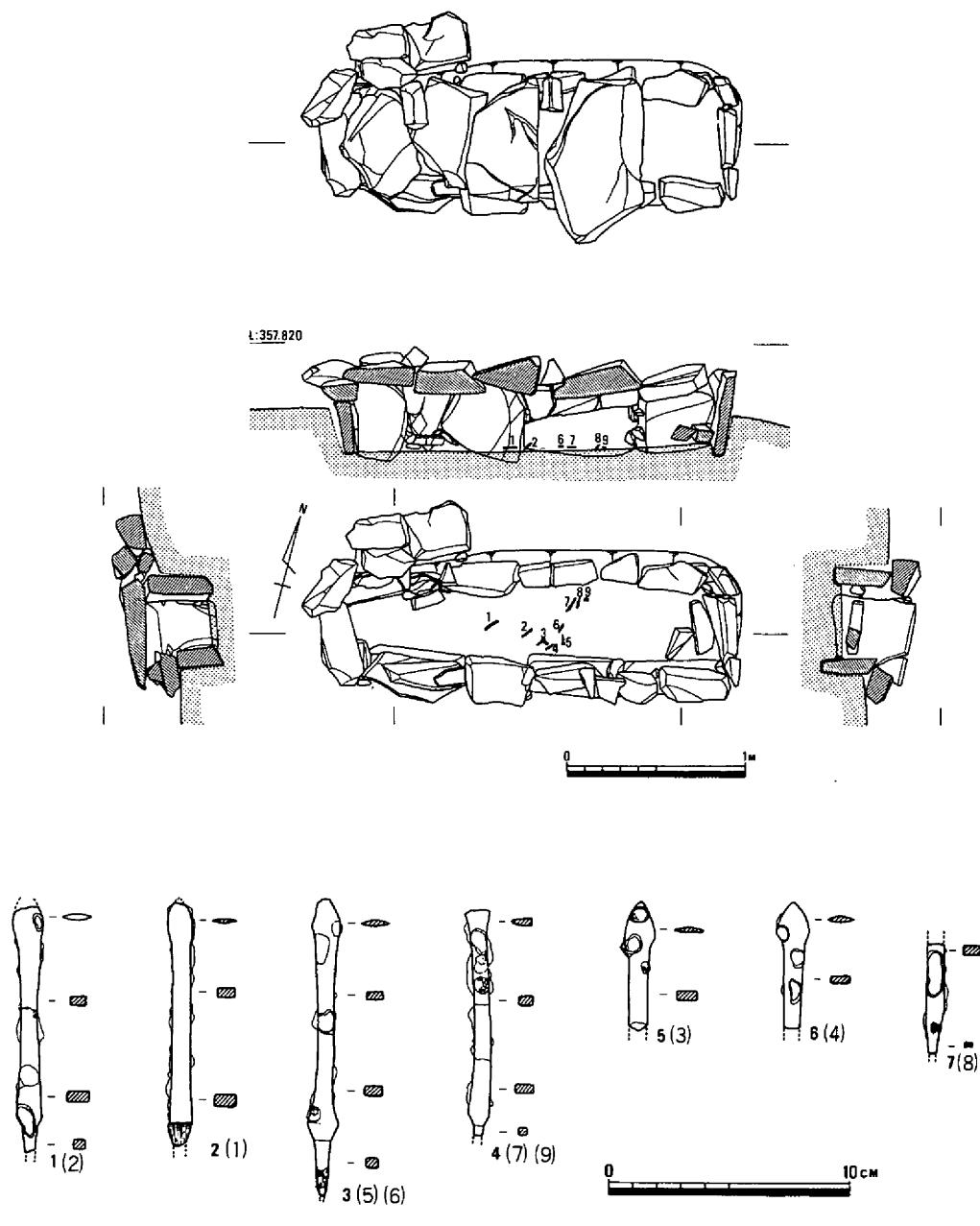
第77図 4号墳〈No.7〉周溝出土遺物



第78図 5号墳〈No.50〉平面図・断面図

- 1. 暗茶褐色土
- 2. 黒色土
- 3. 茶褐色土

山根屋遺跡(54)



()内は遺物取上げ番号

第79図 5号墳〈No.50〉第1主体部平面図・断面図と出土遺物

5号墳<No.50> (第78図)

墳形は方形に近いが、隅は丸みをもつている。墳端は周溝で区画されるが、谷側にまで回っていたかどうかは確認できなかった。

墳丘の構築法は、まず周溝を掘ると同時に、周溝の底部と同じレベルでその中に平坦部をつくり出すことである。この場合山側は第三紀層が基盤になるが、谷側は第三紀層の上に堆積している黒色土(黒ボコ)が基盤になっている。その上に土を盛ってゆくのであるが、盛土はほとんど流失しており、詳細はつかめない。

主体部は墳丘の中心に第1主体部があり、周構内にも主体部がつくられており、これを第2主体部とする。いずれも立地する斜面の等高線に平行してつくられている。

第1主体部 (第79図)

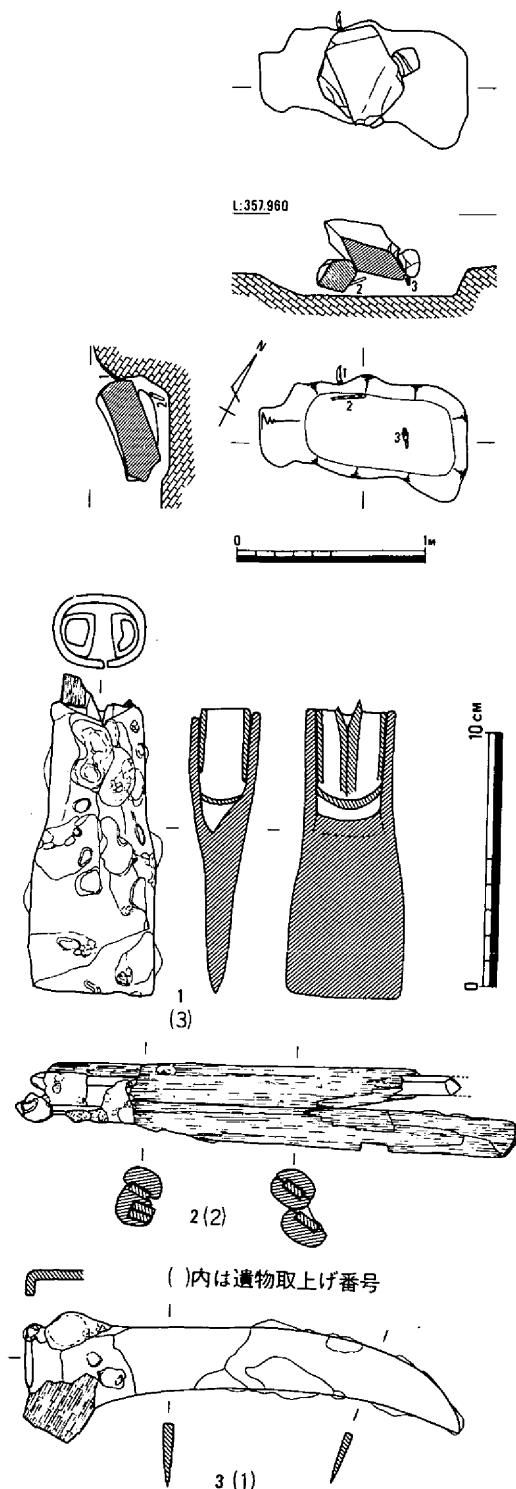
第1主体部は箱式石棺で、墳丘のほぼ中央にあり、黒色土の基盤層まで掘り込んでつくっている。

箱式石棺は扁平な石を使用し、側壁は2段あるいは3段に石を積む場合もある。その場合下段は石を立てて使用するが、2段目以上は横にして使用する。蓋石は重なり合うことなく並べられているが、一枚はなくなっている。棺内には枕石が認められる。

遺物 (第79図)

遺物は箱式石棺中央部床面に散乱しており、破損しているもののが多かった。

すべて細根式の鐵鏃である。1～3は鏃の身が小さく柳葉形を呈している。これらは笠の部が長頸状になり、ややふくらんで茎にいたる。身の断面は両丸である。4は先端が欠損しているが、片刃である。5・6は三角形を呈するもので、断面は両丸である。



第80図 5号墳第2主体部と出土遺物

第2主体部 (第80図)

第2主体部は石蓋土壙墓で、周溝内に存在した。蓋石は土壙全体を覆うものではなく、扁平な石が1枚だけである。土壙は長方形を呈するが、粗雑な掘方である。

遺物 (第80図)

遺物は棺外に鎌が1点、土壙内に斧と鉈があった。

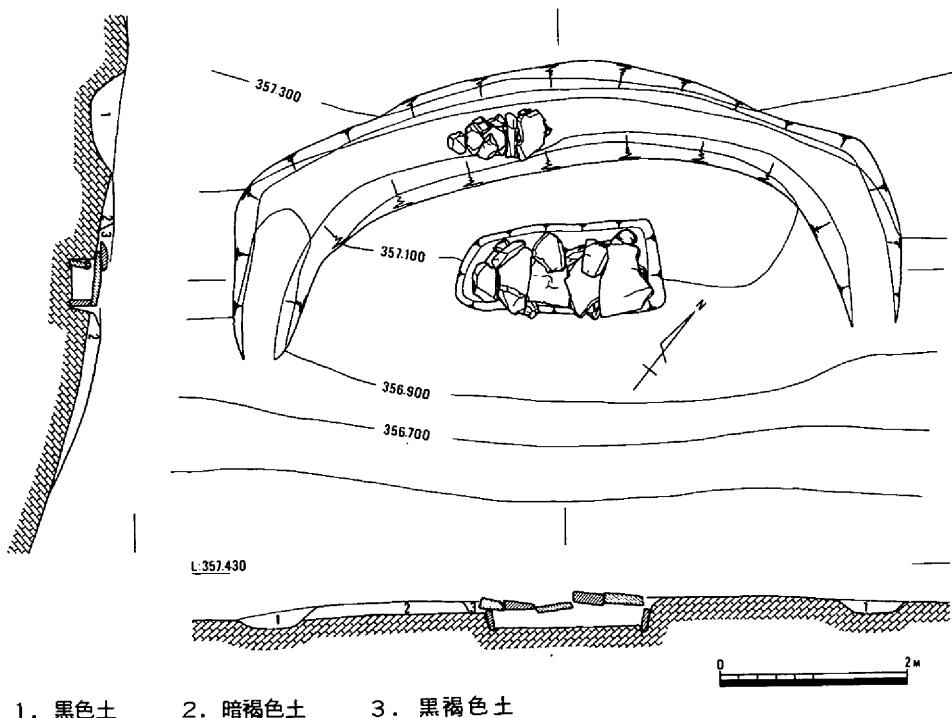
1は柄部と刀部との間に低い肩があり、刃部にむかってやや広がる型の鉄斧である。柄部は袋状になっており、中にはさらにパイプ状のものが2本差込まれ、その下端には鉄板が敷かれている。パイプ状のものは中に木質が残存している(註3)。

2は鉈で、3本が重なりあっている。これらは先端部が鋭角に尖って両刃をつけ、上反りになっているものである。柄の木質を良く残しており、岡山市金蔵山古墳出土の鉈と同じ装着方が考えられる(註4)。

3は身の長軸に対し折返しが直角につき、先端部は内反りになっている。柄は折返しが直角であるのに対し、残存している木質の木目の方向は斜めになっている。刃部はわずかに内反りになり、断面は脊より刃にかけて次第に薄くなっている。

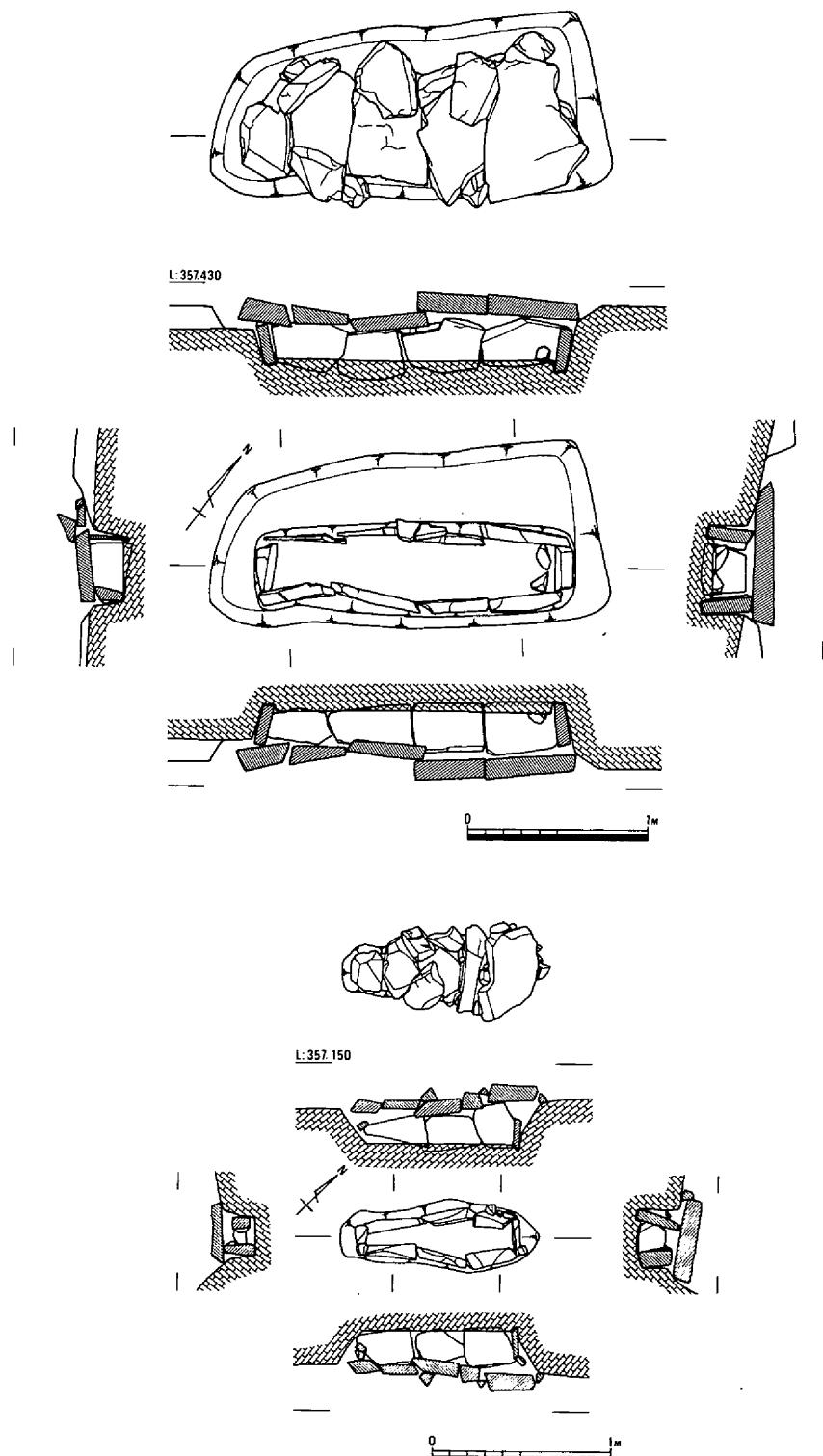
6号墳<No.49> (第81図)

5号墳の東側に接してつくりられており、墳形は方形を呈すると考えられる。周溝は第三紀層を掘り



第81図 6号墳<No.49> 平面図・断面図

山根屋遺跡(54)



第82図 6号墳第1主体部(上), 第2主体部(下) 平面図・断面図

込み、方形に回るものと思われるが、やや丸みをおびている。

墳丘はほとんど流失しているが、第三紀層を基盤にして、その上に土が盛られている。

主体部は箱式石棺（第1主体部）が1基と、周溝内にも箱式石棺（第2主体部）が存在した。

第1主体部（第82図上）

第1主体部は墳丘のほぼ中央に位置している。墓壙は2段掘りで、第三紀層まで掘り込み、箱式石棺をつくっている。両壁とも板石を4枚使用し、両端とも外口の石を挟むようにつくられている。棺内に遺物は認められなかったが、小礫2こを「ハ」の字状に置いた沈石があった。

第2主体部（第82図下）

周溝の中に存在し、小型の箱式石棺である。箱式石棺は扁平な石でつくられている。両壁は3枚の石を使用し、一方は広くつくられ、頭が位置していたと思われる。棺内に遺物は無かった。

7号墳<№51・52>（第83図）

7号墳としたものは、独立した2基の箱式石棺墓が接近してつくられたものである可能性もある。つまり第1主体部は斜面をカットした平坦部につくられ、第2主体部はその後に第1主体部に接し、溝を回らしてつくったとも考えられる。しかし溝の方向を見ると、明らかに第1主体部の上に重なり、第1主体部を破壊しないかぎり、第2主体部を囲うような周溝にはならない。ところが第1主体部は良好に残っており、溝は短かったものと考えられる。しかも第1主体部の棺外遺物は溝の上にもあり、第1主体部に伴う溝と考えたい。したがってこれらのカットされた平坦部や溝は、箱式石棺に伴う遺構と考えられ、一応古墳という名称を使用した。しかし墳丘の有無は不明であり、一般的な高塚とはイメージが異なるものである。

平坦部や溝は第三紀層を掘り込んでおり、中には黒色土が充填していた。

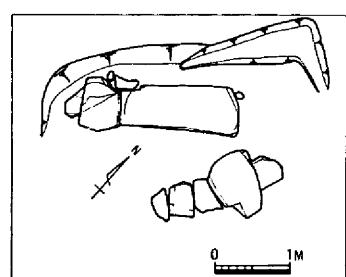
第1主体部<№51>（第84図）

第1主体部は箱式石棺で、蓋石は大きな板石を使用している。両壁は石を3枚立てて、蓋石との間に小礫をつめている。一方が広く、一方が狭くなるようにつくられ、広い方に頭があったと思われる。床面は第三紀層をそのまま利用しており、枕石も遺物も無かった。

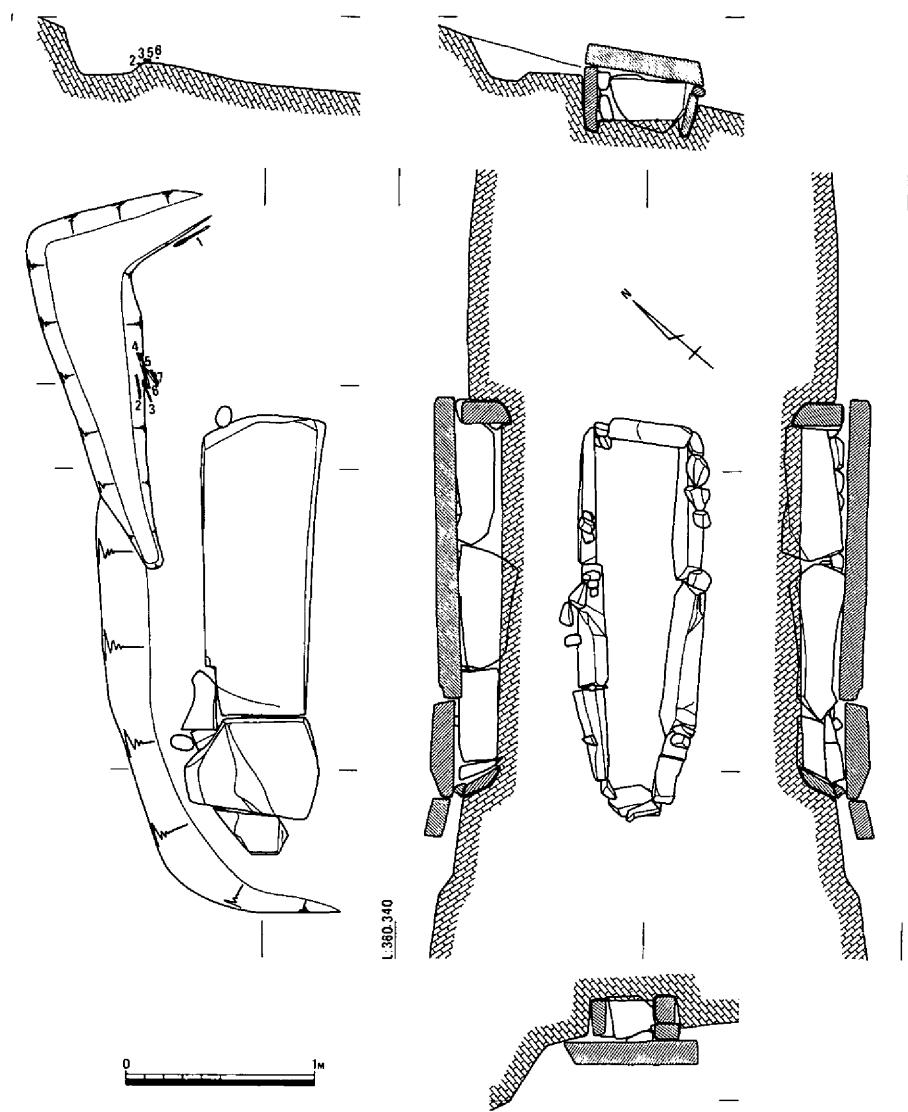
遺物（第85図）

遺物は、表土剥ぎの時に第1主体部周辺から鉄斧が2点出土しており、これも棺外遺物と考えられる。その他の棺外遺物は溝の肩にあったもので、第1主体部の棺外遺物とは断定できないが、第2主体部のものとするには離れすぎており、一応ここで説明を加える。

1・2は鉄斧である。1は柄を差込む袋部をもち、柄部から刃部にかけて肩をもたず、しだいに広くなってゆくものである。刃部は湾曲している。厚さは柄部から急激に減じて刃部にいたる。2は真直な柄部から鈎状に外反りした肩をもち、刃部にかけてやや広がってゆくものである。刃部は重厚で湾曲している。柄を差込む袋部は橢円形である。

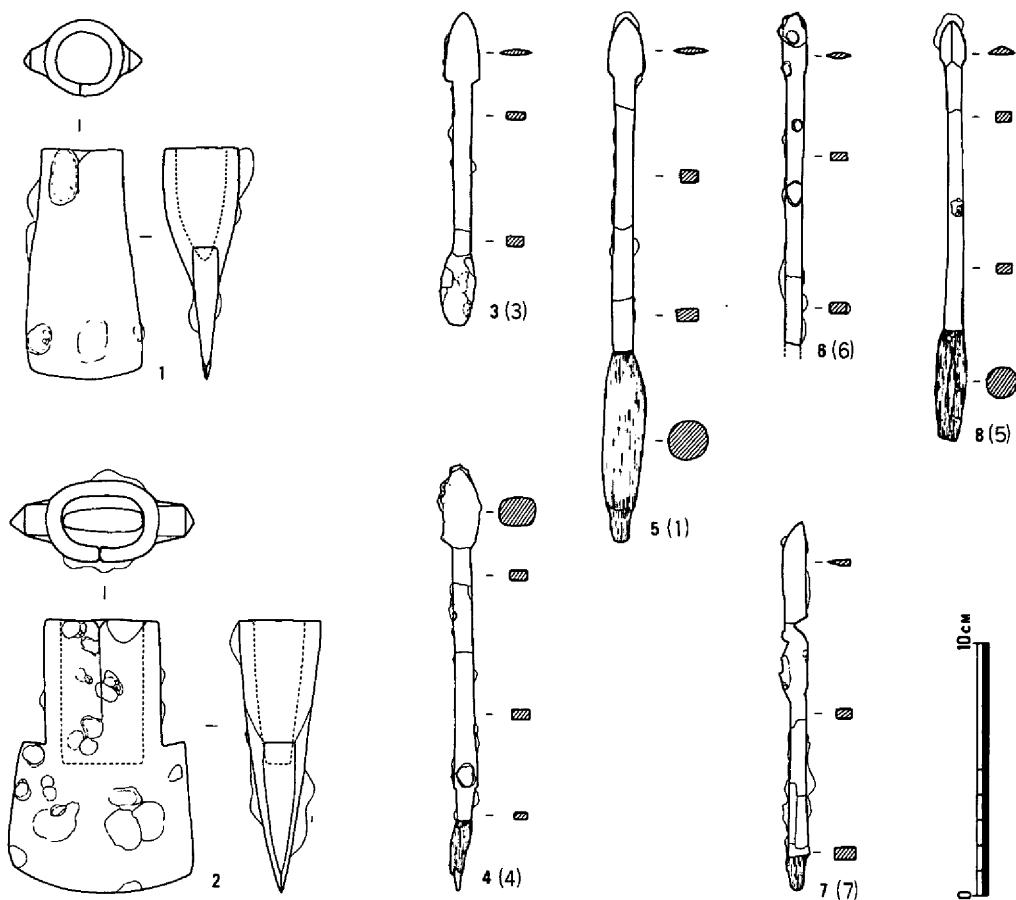


第83図 7号墳平面図



第84図 7号墳第1主体部〈No.51〉平面図・断面図

3～7は細根式の鉄鎌である。3は茎の部分が欠損しているが、刃部は小さく長三角形を呈し、長い柱状部がつくものである。断面は刃部が両丸造りで、柱状部は長方形を呈している。4は刃部が腐蝕しているが、長三角形を呈すると考えられ、細長い柱状部から茎にいたる。茎には木質が残存している。5も小さな長三角形の刃部をもつもので、茎には木質が残存している。この鉄鎌だけ離れた場所に存在した。6は細身の刃部で、長三角形に近いものである。茎は欠損している。断面は刃部が両丸造り、長い柱状部は長方形である。7は刃部が刀身状になるもので、茎には木質が残存している。断面は刃部が片刃で、長い柱状部は長方形である。8は刃部が小さな三角形を呈するもので、中央に鎬がある。刃部から長い柱状部がつき茎にいたる。茎には木質が残存している。断面は刃部が三角



第85図 7号墳第1主体部棺外出土遺物 ()内は遺物取上げ番号)

形・柱状部は長方形を呈する。

第2主体部 <No.52> (第86図)

第2主体部は箱式石棺で、第1主体部に対し斜めにつくられている。石棺は黒色土を掘り込み、一部は第三紀層まで達している。床面は黒色土で、ほぼ床面に接して遺物が認められた。また棺内には枕石が置かれている。

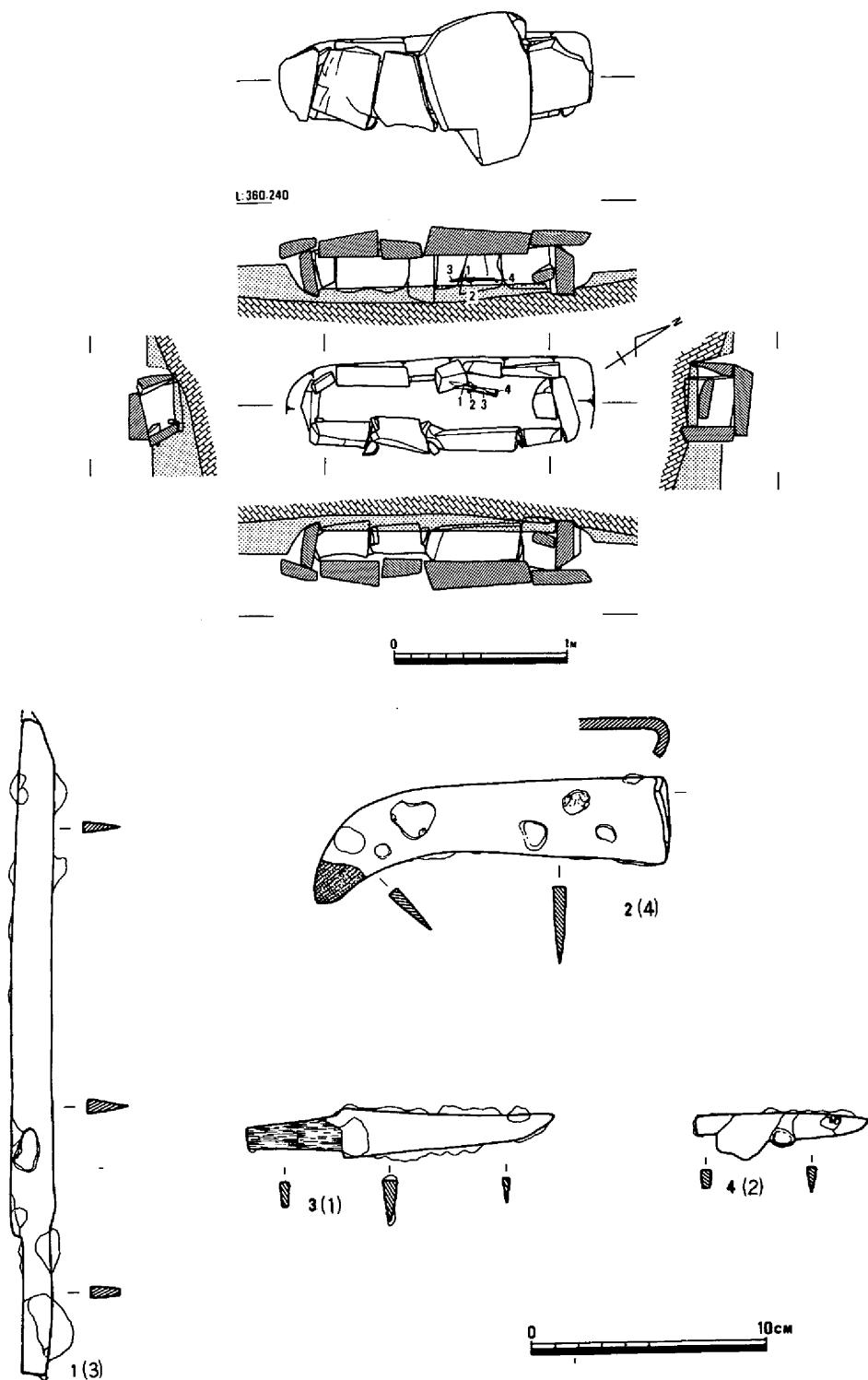
遺物 (第86図)

遺物はすべて棺内より出土したもので、重なり合って置かれていた。鎌などに布の痕跡が認められることから、これらの遺物は一括して布に包まれ、副葬されたのではないかと考えられる。

1はやや小型の刀である。両関造で、茎には目釘孔は認められない。刀身はほぼ真直である。
2は身の長軸に対し直角に折返しがつき、先端部は湾曲している鎌である。先端部には布の痕跡が認められる。

3、4は刀子である。3は両関造で、先端にむかって身の幅が狭くなっている。

山根屋遺跡(54)



第36図 7号墳第2主体部〈No.52〉(上) 平面図・断面図と出土遺物 (下)()内は遺物取上げ番号)

II 古墳時代後期の墳墓

(a) 箱式石棺墓

14号墓<No.41> (第87図)

14号墓は8号住居址状遺構の平坦部につくられている。長さ0.75m、幅0.25mと小形で、丸みをもった石を使用している。側壁は下段の石を立てて、その上に扁平な石を横積みしている。概してやや粗雑な感じをうける。

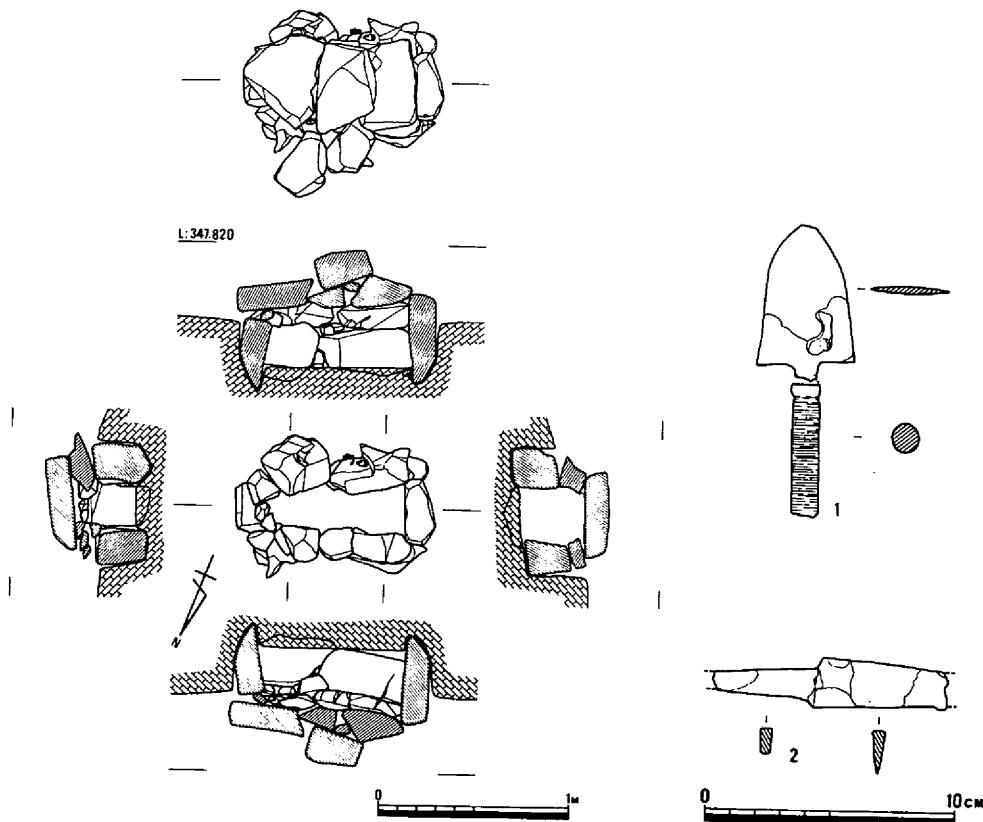
遺物 (第87図)

遺物は棺外より鉄製品が2点出土している。

1は平根式の有茎鎌である。三角形を呈するが、先端部は屈曲するクセをもつもので、茎には着柄竹材が残存している。

2は刀子で、棺外の側壁に接して出土し、茎と身の部分は直角に曲っていた。両関造で、身の先端にむかって細くなってゆくと思われるが、先端部と茎が一部欠損している。

15号墓<No.22> (第88図)



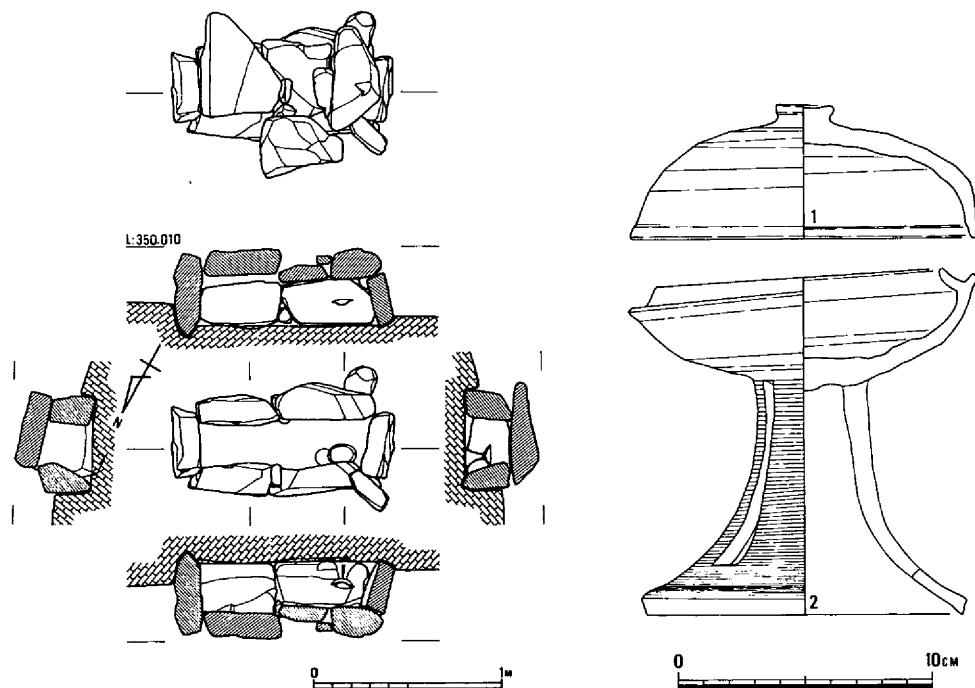
第87図 14号墓<No.41> 平面図・断面図と棺外遺物

山根屋遺跡(54)

15号墓は13号住居址状遺構の平坦部につくられている。丸みをもった石材が使用され、やや粗雑な感じをうける。長さ0.90m、幅0.25mと小形である。遺物は棺内より須恵器の有蓋高杯が1点出土している。

遺物（第88図）

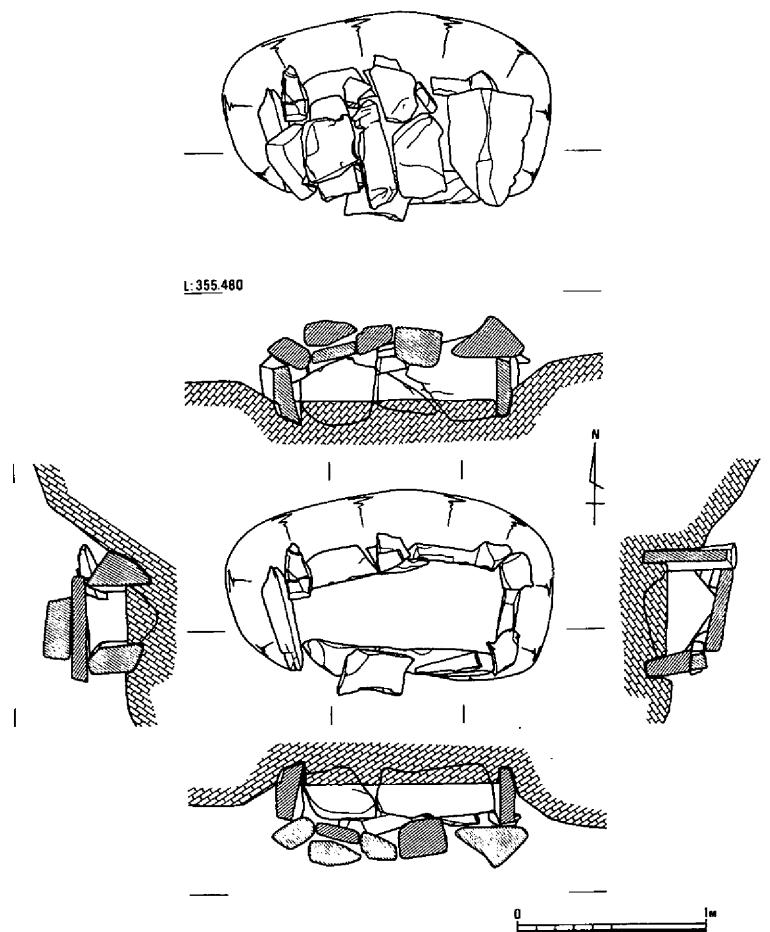
石棺内には一組の有蓋高杯が完形で副葬されていた。蓋（1）は天井部に中央の凹んだつまみを有する。口縁端はわずかに外反し、先端は丸くおさめる。内面口縁端直上に明瞭な段がめぐる。口縁部と天井部の境は不明瞭で鈍い陵線がみられる。内面には大きな凹凸はみられない。天井部には左回りのロクロ回転による箇削りが荒くなされているが、一回で削りきれていない。天井部内面には不定方向のやや荒い仕上げナデがみられる。他はヨコナデによって調整されている。全体にやや荒い仕上げである。かなり歪んでおり、口径は長径137mm、短径133mmを測り、器高は52.5mmで、口縁端は少し波打つ。胎土には石粒、砂粒を含む。焼成は良好で、淡青灰色の色調を呈する。内外面に黒色の小斑点がみられる。高杯（2）は長脚一段透しである。脚部には外面全面にカキ目を施している。杯部は、たちあがりは短く、外反するがかなり内傾している。先端は丸くおさめる。受部は短く、若干つまみ出し気味に突出する。先端は丸くおさめ、上面は平面になる。底部外面は脚部の接合によって盛り上がった感じになっている。外面たちあがりと受部の境には箇先によったような細い溝が全周に近くめぐ



第88図 15号墓〈No22〉平面図・断面図と出土遺物

る。内面たちあがりから底部への移行は強く屈折し、明瞭な線がめぐる。底部内面は少し凹凸を持ち、中央部は一段軽く凹む。底部には左回りのロクロ回転による箆削りがなされ、接合部分にはその後ヨコナデがなされている。底部内面には仕上げナデはみられずヨコナデのみで調整されている。脚部は、柱状部から裾部への移行は滑らかで明瞭な界線をみず、除々に外反して、脚先端部でかなり開く。柱状部には三方に長い透し孔を脚部接合後にあける。穿孔は外から内へなされる。面取りはない。脚端にはやや凹んだ脚端面をもつが、両線は鋭さを欠く。下端はわずかに下方へつまみ出した感じになる。脚部は焼成時にねじれたためか透し孔が歪んでいる。脚部内面は概して滑らかである。杯部は大きく歪み、口径は長径127mm、短径110mmを測る。胎土には石粒、砂粒を若干含む。焼成は良好で、色調は灰色～青黒を呈する。全体にやや荒いつくりである。器高は135.5mmある。なお、杯部には内外面に黒色小斑点がみられる。

この一組の有蓋高杯は、蓋と高杯双方の胎土、焼成、色調、整形等に類似するところが多く、セッ



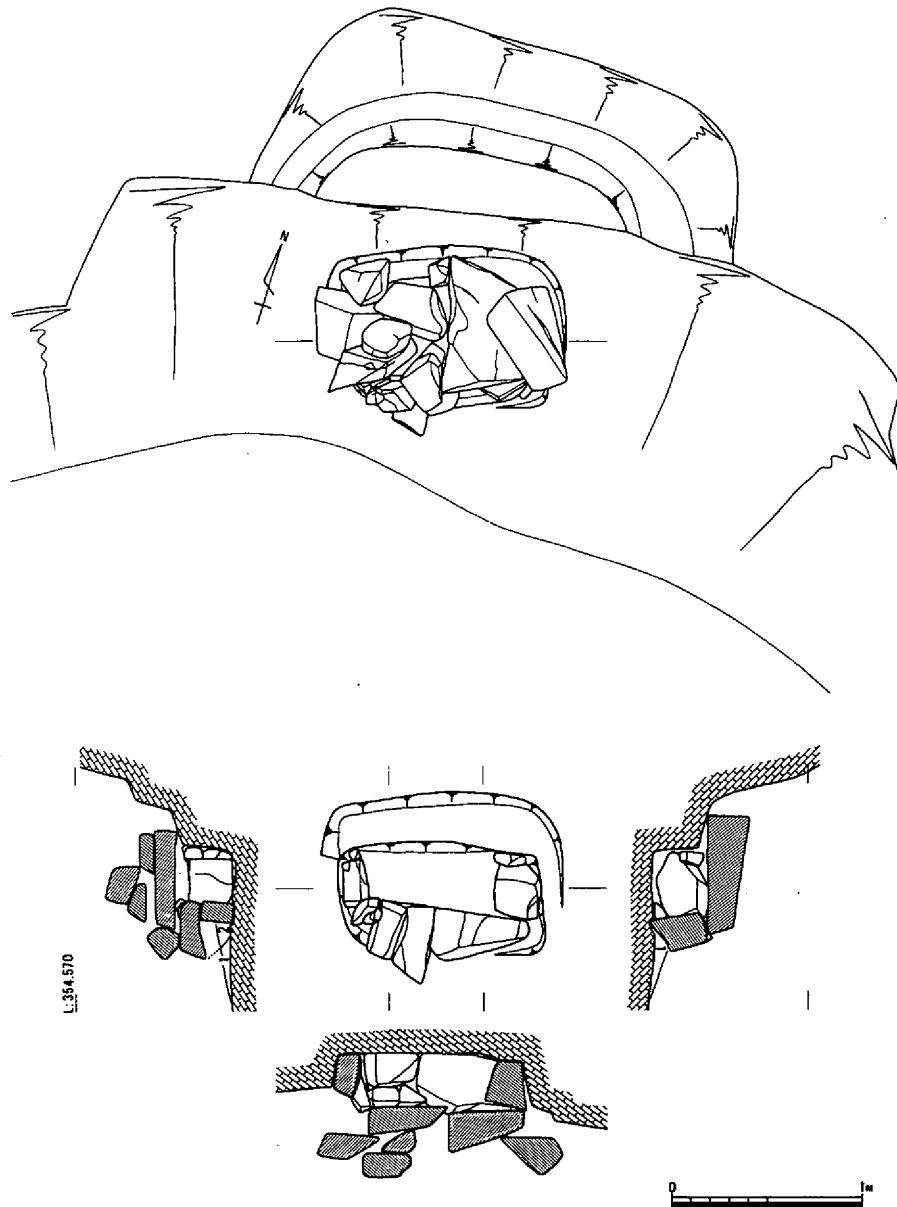
第89図 19号墓〈No.72〉平面図・断面図

山根屋遺跡(54)

トとして焼成されたものとみてよいと考えられる。

19号墓<No72> (第89図)

21号墓は2号墳の北西部斜面に位置し、等高線に平行してつくられている。丸みをもった扁平な石でつくられているが、やや粗雑な感じをうける。遺物は認められないが、2号墳と関係を有するような位置にあり、また他の前期古墳に比較して小形であり、石材も周辺で産出する丸みをもったものが使用されている点は、須恵器を副葬していた15号墓や、鉄鎌を副葬していた14号墓と同じであり、古



第90図 20号墓<No76> 平面図・断面図

墳時代後期のものと考えられる。

20号墓<No.76> (第90図)

20号墓は2号墳の周溝が一定程度埋った後につくられたものと考えられる。高い方に周溝をもち、2段掘の墓壙内に箱式石棺をつくりっている。しかし側壁の一面は地山を利用し、もう一方の側だけ石を使用している。遺物は認められなかった。

22号墓<No.68> (第91図)

22号墓は2号墳の北側に位置し、等高線に平行してつくられている。長さ0.65m、幅0.30mと小形であり、やや粗雑なつくりである。棺内には拳大の円碟を使用した枕がある。おそらく2号墳に相前後する時期の所産と考えられる。

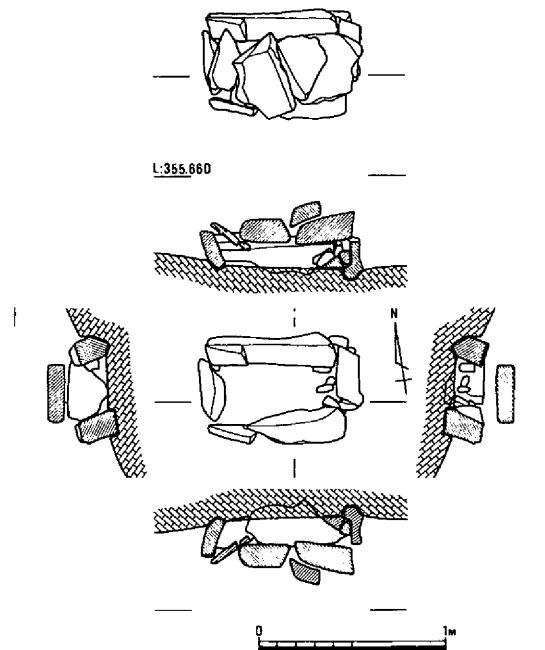
(b) 石蓋土壙墓

21号墓<No.73> (第92図)

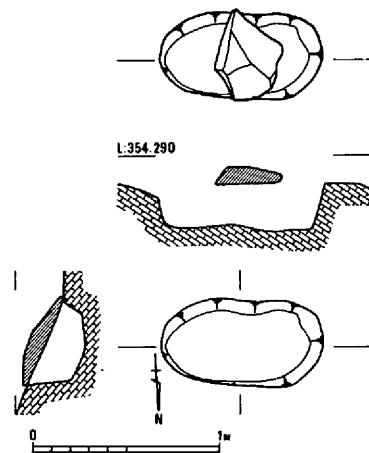
2号墳の東側、溝に近い所に位置し、等高線に長軸が平行してつくられている。蓋石は黒色土の中に存在し、土壙の輪郭は第三紀層の上面で検出した。

蓋石は扁平な石が1枚だけであった。これは破壊された結果ではなく、本来1枚だけであったと思われる。土壙は長楕円形を呈し、長さ0.80m、幅0.45mと小形である。土壙内の土は黒色土で、周囲の黒色土と識別はできなかった。床面は凹凸があり、やや粗雑な作りである。土壙内に遺物は認められなかった。

この石蓋土壙墓は2号墳に近い位置にあり、2号墳と関連する墓と考えられる。これに類似するものとして16号墓がある。16号墓も1号墳の周溝に接してつくられており、これらを一応古墳時代後期のものとして考えておきたい。



第91図 22号墓<No.68> 平面図・断面図



第92図 21号墓<No.73> 平面図
断面図

16号墓<No.42> (第93図)

1号墳の北側、周溝に接してつくられたものである。石蓋土壙の石蓋は黒色土の中にあったが、土壙の輪郭は第三紀層上面で確認できた。

蓋石は扁平な石を4枚用いているが、蓋石の両端が土壙上面にかかっていないため、土壙内へ落込んでいる。

土壙は第三紀層を掘り込んでつくられ、長さ0.70m、幅0.35mと小型で、長方形に近い平面プランを呈している。土壙内には黒色土が充填しているが、第三紀層の上に堆積している黒色土と同じものであった。

この石蓋土壙の築造時期であるが、遺物が無いため確定できない。しかし1号墳の周溝に接してつくられていることや、小型化していること、石を厳選していないこと、粗雑なつくりであることなどが、古墳時代後期の可能性を強くしている。

(c) 古墳

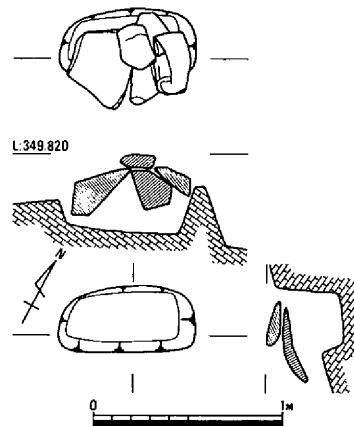
山根屋1号墳<No.43> (第94図～100図)

1号墳はD-2区にある横穴式石室を内部主体とする円墳である。立地点は傾斜角20°～30°の丘陵斜面であり、調査開始時点では古墳の北西(斜面上方)に幅3m程度の平坦面がみられたのみで、明瞭な墳丘は留めていなかった。当古墳の検出は調査の初期段階で行ったトレンチ調査によってなされた。すなわちHトレンチが古墳の羨道付近を通り石室の上面を検出することができ、またトレンチの斜面下方で須恵器片を多量に採集したことから、横穴式石室を内部主体とする古墳の存在が知られたのである。新発見の古墳であり遺跡名を冠して山根屋1号墳と命名した。

<外表施設> (第95・96図)

a. 墳丘 1号墳はかなり急な斜面に位置していたため、墳丘は大半流失してしまっていたが、わずかに痕跡を認めることができた。第95図の黒色土は地山に含まれている淡赤色や黄色の小礫を多く含むよくしまった土であり、一部石室掘り方内の上方にもその堆積がみられた。このことから、この黒色土は墳丘の盛土であることは確実であり、1号墳の墳丘はその大部分が盛土と考えられる。それゆえその流出もまたはなはだしかったのであろう。

b. 周溝 1号墳は墳丘の北西側、斜面上方に半円形の周溝をもつ。この周溝は、丘陵斜面の上方を削って幅6.5m以上の平坦面を形成した後に、斜面上方側では平坦面の端から1m弱の間隔をおいて墳丘を築成したために生じたものである。機能的には墳丘の高まりを丘陵斜面から突出させ視覚的により明瞭にするためのものであり、また墳丘の形状を均整のとれた半球形にするためのものであろう。このように考えるなら、同溝の存在は、1号墳が丘陵斜面に築造されたということにその必要性の大半を帰すことができよう。溝という語から連想する排水という機能については、実際にはそのような作用を行なうけれど、築造者にその意志があったかどうかは疑問である。ただ、周溝底に50cm程の



第93図 16号墓〈No.42〉平面図・断面図

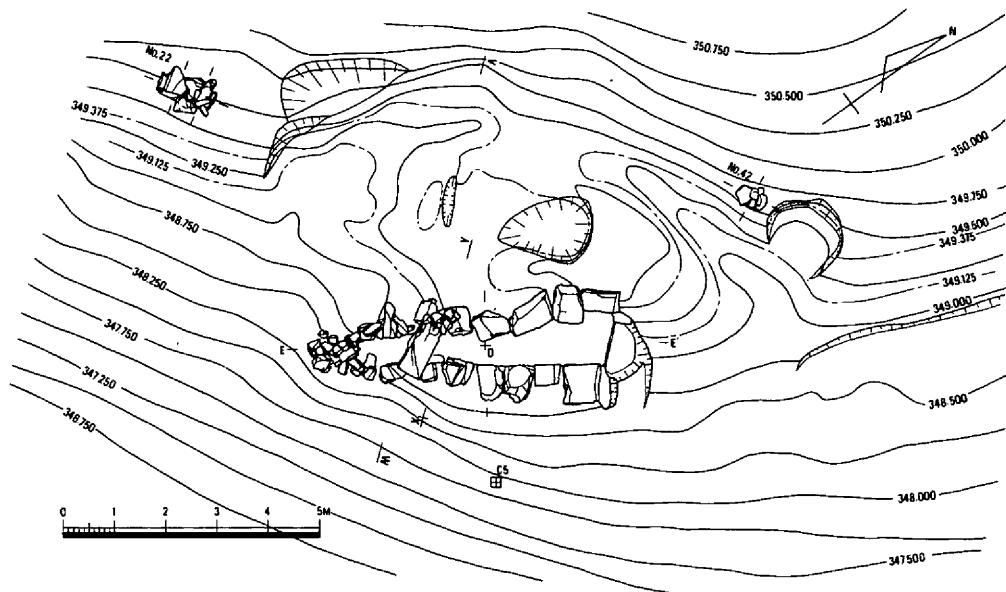
山根屋遺跡(54)

幅で更に細い溝状の落ち込みが部分的に認められるという事実はある。

以上から、1号墳はまず丘陵斜面を削って平坦面を造り、その平坦面に大きな墓壇を掘って墓壇内に石室を構築する。そして墳丘を盛るという経過によって築造されたものと考えられる。墳丘の築成にあたっては、墓壇の土層状況や、哲西町道上古墳(註5)の例からして、種々異なる土を使いわけ、薄層状に繰り返したきしめながら、積み上げていったと想像される。使用されていた土は最初の平坦面の削り出しによって供給されたものであろう。したがって、ここにも周溝の必要性の一端があるかもしれない。

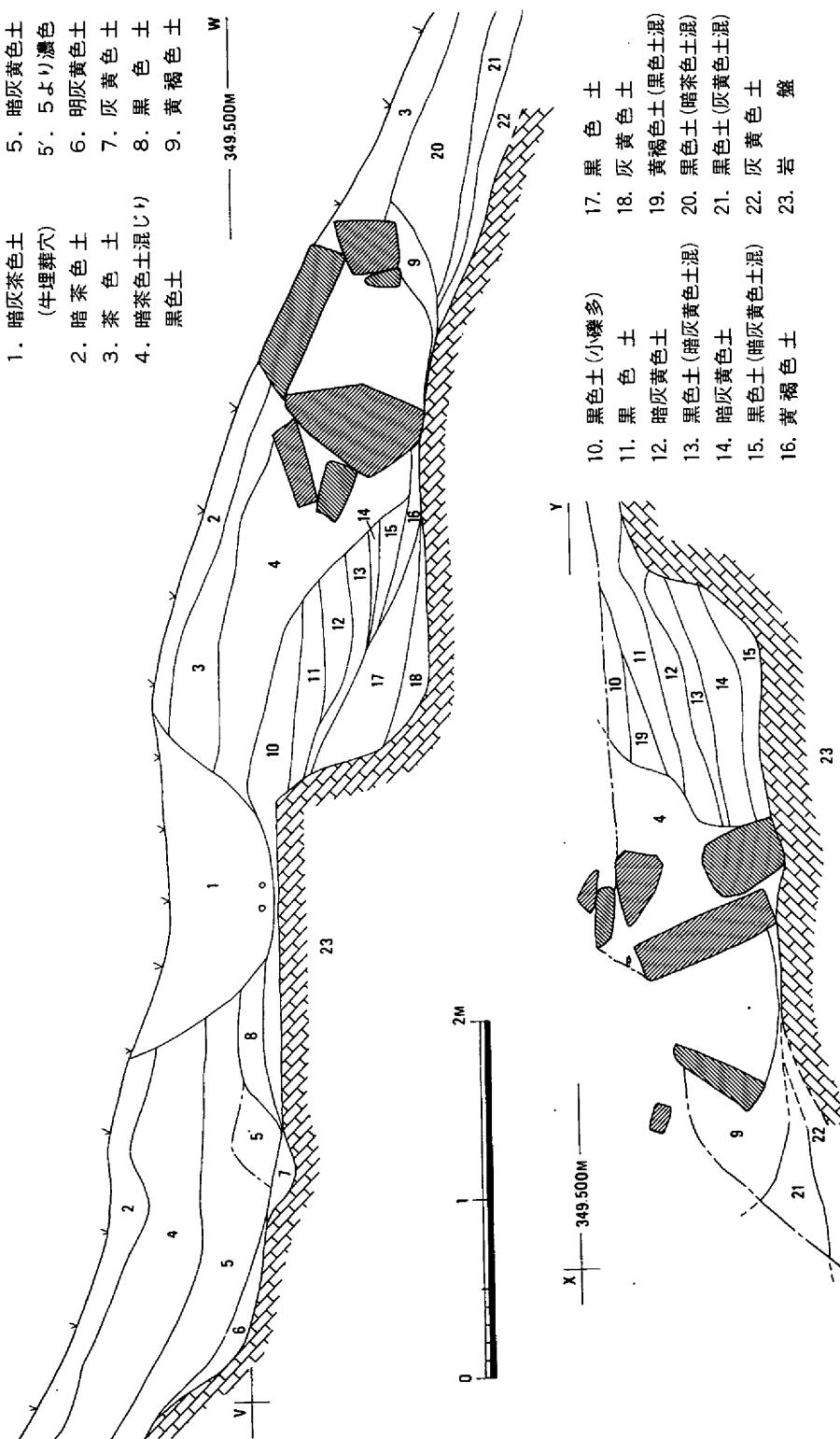
外部施設については、墳丘と周溝について述べたが、埴輪・葺石等他の施設についてはその痕跡すらまったく見い出せなかった。埴輪はもちろんあるが、他の古墳に時々見い出す外護列石も検出されなかった。古墳の残存状況から判断して、本来から1号墳にはそのような施設はなかつたと判断してよい。

墳丘の規模は、周溝底を墳端と考えれば直径10m前後と推定される。



第94図 1号墳墳丘測量図

丘 滾 岩 跡 (54)



第95図 1号墳横断面図 2~7流土 8~19盛土 20~23地山

<内部施設> (第96・100図)

a. 墓壙

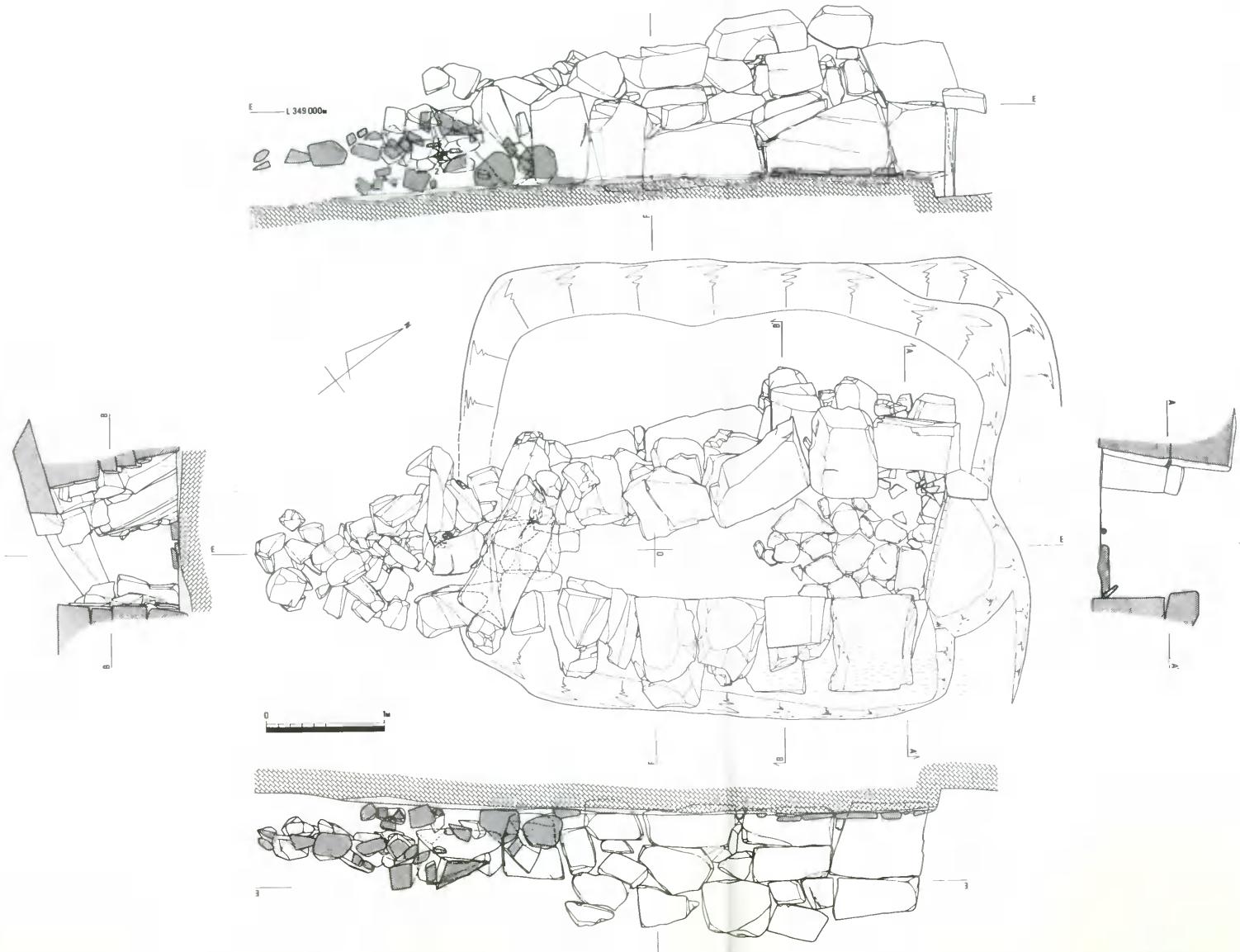
いわゆる石室掘り方である。検出部分で長さ4.6m、幅3.8m、深さ0.8m程度を測る。ほぼ長方形を呈する。主軸方位は、N—38°—Eであった。墓壙の東隅は過去の奥壁の抜き取りによって破壊されていた。前述したとおり、墳丘築成前、丘陵斜面を削り出した平坦面から掘り下げられていた。壙壁の傾斜はあまり急でなく、壙底の四周は角張らず、丸味をもっていた。墓壙底面の大部分は、地山の淡赤色土からなるが、主軸が丘陵斜面の等高線と平行しないため、石室羨道付近については、黒色土からなっている。また底面は一様に平坦ではなく、石室の根石の下方は一段凹んでおり、特に奥壁部では15cm程度凹めていた。

墓壙内の埋土の状態は石室を挟み、北西辺と南東辺では異なっている。北西辺では黄褐色土と黒色土の互層となっているが、南東辺では黄褐色土一層である。この相違が何にもとづくものであるかはよくわからないが、一つには石室が墓壙内でかなり片寄った位置にあることが関係し、また墓壙の南東壁が黒色土からなっていることも関係するかもしれない。ただ北西辺の埋土の状態から考えられることは、墓壙の埋め立てが一時ではなく、ある程度時間をかけて除々になされたのではなかろうかということであり、これは、石室の構築と墓壙の埋め立てが並行して進んだことを推察させる。

b. 石室

1号墳の内部主体は横穴式石室である。右片袖式で全長4.8m、うち羨道部は長さ2.2m、幅0.9m(玄門)～0.7m、玄室は長さ2.6m、幅1.35～1.15mを測る。石室の残存状況は、天井石の大半と奥壁の大部分を欠いてはいたが側壁についてはかなり良好で、原位置を動いているものと考えられるが天井石が一枚横架されており、あまり石を欠いていないと考えられる。北西壁の残存高は最高で石室床面から1.3mあり、かなり傾斜していることを考慮すれば1.4m程度になる。南東壁は1.1mを測る。北西壁は、丘陵斜面上方からの土圧でかなり石室内へ傾斜していたが、本来は両側壁とも垂直に近かったと考える。なお、石室の主軸方位は、N—36°—Eであったが、この方位は丘陵斜面の等高線とは平行しない。

両側壁ともかなり角張ったやや大きな石(長径50cm以上)を多く用いており、積み方にも大きな違いはない。すなわち、側壁の最下段にはやや扁平な石を使い、一番広い面を石室内に向けて立てる。二段目からは小口を石室内に向ける小口積みによっている。最上段は多く小口積みであるが、一部横口積みもみられるようである。しいて北西壁と南東壁の相違をあげるとすれば、北西壁の最下段の石が南東壁のそれに比して一まわり大きいことぐらいである。奥壁については抜き取りのため明瞭でないが、最下段は最低二枚の石を並べたものであったことは確かである。残存している片側の石は厚さ7cm程度のきわめて扁平なものであり、抜き取られた石も扁平なものであったかもしれない。二段目からは、やはり残存している石の在り方から判断して小口積みであったと考えられる。1号墳の石室の特徴の一つに袖をもつことがあげられるが、袖のつくり方はかなり特異なものである。北西壁では最下段に四段の扁平な石を置いているが、その羨道側の四枚目の石の内側に、縦長に石を二枚立て、石の厚さだけの袖をつくっている。つまり玄門付近では、北西壁は二重になっていることになる。な



第96図 1号墳石室実測図

お、北西壁羨道部前半のやや小さい石を積み上げている部分については、その積み方が閉塞石の積み上げと同時に行われたかのような荒いものであり、石室構築時からあったと考えるよりは、後に再構築あるいは付設されたかのような印象を与えるものである。

1号墳の玄室は中央部が膨んだ片側胴張りのプランをもち、奥壁の前面は、技取穴から判断する限り主軸とは直角にならず、105°程度の角度をもって斜交している。床面は地山の上に黄色礫まじりの黒色土を厚さ2~5cm程度敷いてつくられており、羨道部方向へ徐々に傾斜していく。玄室中央より奥の南東壁側には、扁平な長径25~50cmぐらいの石を1.5×0.9mの範囲にほぼ隙間なく貼り詰めており、一部では重なりもみられた。奥壁の中央から北西壁側の隅には須恵器の大甕の破片が敷き詰められていた。1号墳の位置する丘陵斜面の下方表土中からこの大甕と同一個体のものとみられる破片がかなり採集されていることから考えて、この大甕の破片を敷いた範囲は本来はもっと広かったとみられ、破片の中に内面を上にしたものが数片みられたこともその根拠の一つとなるだろう。あるいは貼石と北西壁の間の空白部分に敷かれてあったかもしれない。石を貼ることと甕片を敷くことではどちらが先に行われたかであるが、奥壁の中央に沿ったところでは甕片の上に貼石が部分的に重なっており、また敷石の下から須恵器の破片が数片出土したことから敷石が最初期からあったものではないと考えられ、敷甕が敷石より古い可能性が強い。

C、閉塞石

羨道部には閉塞石が良好な状態で残存していた。閉塞状況は、玄門から0.8m前方に羨道幅に近い長径50cm程度の大石を二つ並べて置き、その上にやや小形の石を二つ横に並べる。この石積みを開始として、羨道部前方へ徐々に低くなりながら石を積み上げていた。検出された閉塞石は調査の結果一時に積まれたものではなく第96図断面図からも明らかのように一度積み上げられた後、しばらくたってから二度目の積み上げがなされている。この上段と下段の閉塞石が一回の埋葬に伴うものか、それともそれぞれ別の埋葬に伴うものかを明確にする必要があるが、この上段と下段の閉塞石の間から須恵器が出土しており、これが問題解決の鍵になりそうである。上段と下段の閉塞石の間にはある厚さで土のみが堆積した薄層があり、その中から須恵器片(第98図2・9)が数片出土している。その中の一片は玄室床面の敷石下から出土した破片と同一の個体のものであり、本来玄室内にあったものが破碎され、その一部が下段閉塞石の上方へ移動させられたと考えられる。このような破碎・移動を伴う行為にはおそらく追葬の際の玄室内の整理・清掃を想定することが妥当と考える。したがって下段閉塞石はこの追葬を行う以前に存在していたもので、追葬に先立って閉塞石を除去する際、完全に取り除かずに一部を残存させた結果と考えられる。このように閉塞石の在り方から追葬の行われたことが確認される。このことは、北西壁羨道部前半部分の小さな石による壁の下端が下段閉塞石の上面附近に位置することからも考えられよう。すなわち北西壁羨道部前半の壁が積み上げられる際には、下段閉塞石の上面が、石室内へ至る道の上面として機能していたと考えられ、北西壁羨道部前半は追葬の際に新たに付設されたと考える。

なお、羨道部の調査においては墓道ないしは排水溝のような施設は検出されなかった。

<遺物出土状況>

1号墳は墳丘の位置する斜面の下方から多量の須恵器片が採集されたため、石室内はかなりの攪乱が予想された。発掘の結果はほぼ予想どおりであったが、幸い奥壁側では原位置で遺物を検出できた。

石室内から出土した遺物は須恵器、鉄刀二、金環、刀子、勾玉である。須恵器は前述したように奥壁の中央から北西壁側に敷きつめられていた大甕と敷石の南端付近に破碎されて散乱していた壺がある。大甕は一種類ではなく二種類の破片がみられたが、敷きつめられた状態からは区別の意識はみられず、一時に混然と敷いたものとみられる。大甕は石室内からかき出された同一個体の破片も合わせて復元を試みたが、まったく完形には復せず、量的にはよくあって $\frac{1}{3}$ 程度しかないとみられ、完形の大甕を埋葬にあたって破碎したとは考えられない。それゆえ二種の破片が混在しているものとも解釈しうる。壺は敷石の南端付近で数破片になっているのが検出された。多くは敷石に載っていたが、一部敷石の下に潜っているものもみられ、壺の副葬と敷石の時間的先後関係は、盗掘のこともあり、必ずしも明瞭とはいえない。なお、壺の破片は復原の結果、 $\frac{1}{3}$ 程度の残存にすぎなかった。大甕は第99図10、壺は第98図1である。

玄室北隅では敷甕の上から鉄刀二振が出土した。一振(第97図12)は北西壁に沿い、もう一振(第97図11)は奥壁に沿い、ともに切先を隅の方へ向けていた。敷石の北端、奥壁から20cm離れて金環(第97図14)が一個出土した。また金環のすぐ東隣の大きな敷石の上には大甕(第99図10)の口縁部破片がのっていた。敷石の南端付近では須恵器壺(第98図1)の破片が散乱しており、また刀子(第97図13)が一口南東壁に沿って、切先を羨道方向へ向け、床面下地山直上より出土した。羨道部では玄門から40cmの中央付近で勾玉(第97図16)が一個出土した。勾玉から15cm離れた羨道部前方寄りには長辺25cm程の台形の扁平な石が存在しており、一見枕石のような印象を与える。この石に接して閉塞石が置かれている。また前述したように、閉塞石の間からも須恵器片が出土している。

<遺物>

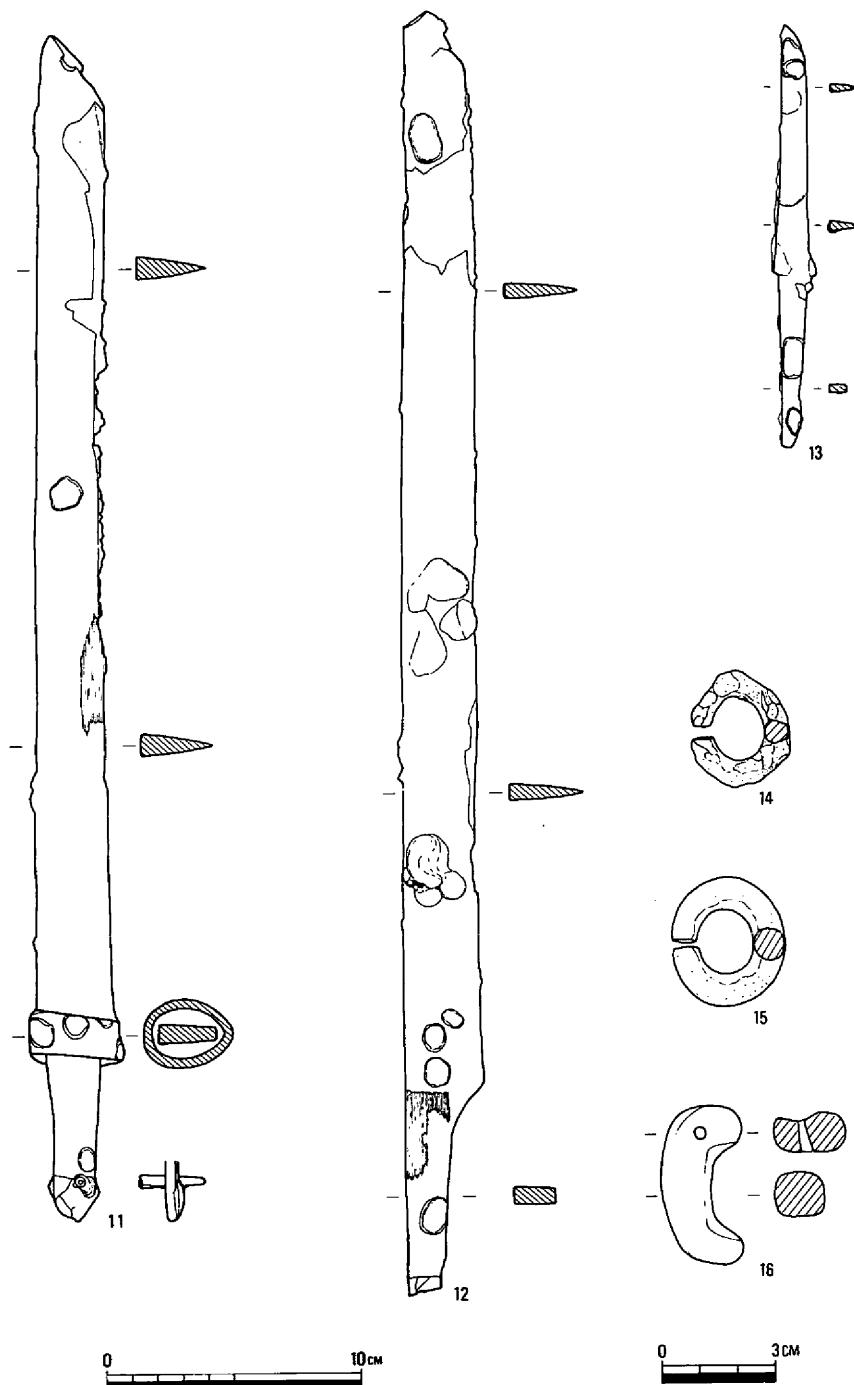
1号墳から出土した遺物は、鉄刀二、刀子一、金環二、勾玉一、須恵器である。このうち金環一(第97図15)と須恵器の多くは墳丘の位置する丘陵斜面下から採集されたものである。

鉄刀(第97図11・12)

11は全長470mm、刀身長390mm、刀身幅25(鋒)~30mm(関部)、背幅9mmを測り、完存品である。鋒は銳く、刃部との境はすこし角張るようである。関は刀側・背側両側にある。茎は徐々に細くなり、丸味をもった尻に終わる。茎には目釘孔が一孔あり、目釘が残存していた。目釘の長さは26mmであった。茎断面は長方形、刀身断面は三角形を呈する。わずかに内反りをもつ刀である。関部には鉄製の鉗(はばき)が残存していたが、鐔はなかった。刀身には所々木質が付着残存しており、鞘を装着した状態で副葬されていたと考えられる。

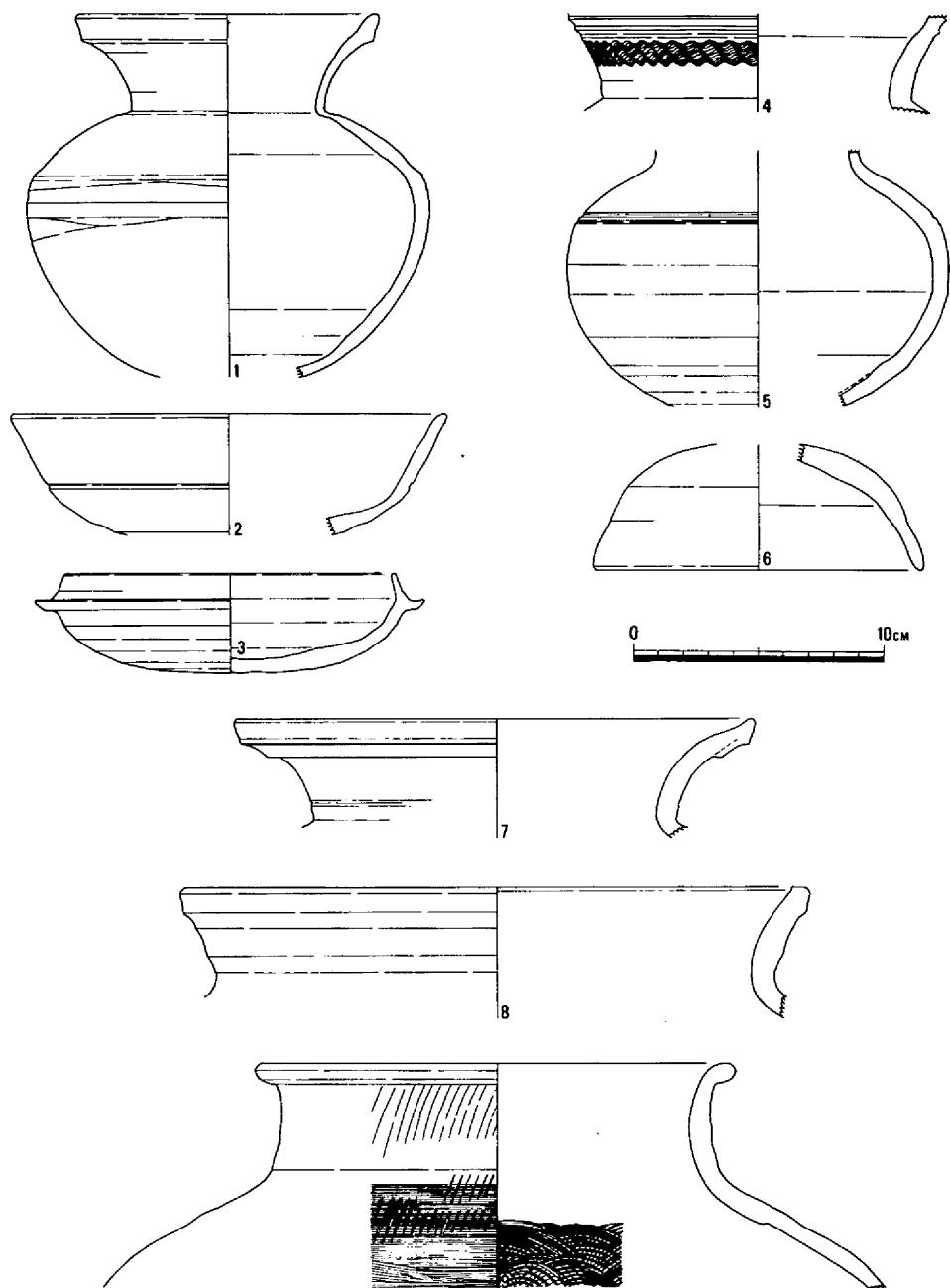
12は全長509mm、刀身長425mm、刀身幅25~30mm、背幅7mmを測る。鋒と茎尻の一部を欠損する他は完存である。鋒から刃部へは滑らかに湾曲して連続する。刃関をもち、茎は幅18mmから尻へ向かって徐々に細くなっていく。茎の現存部分には目釘孔はみられない。茎断面は長方形、刀身断面は三角形を呈する。刀はほとんど反りをもたない。所々に木質の残存を認めるが、特に茎に多くみられ、木

山根屋遺跡(54)



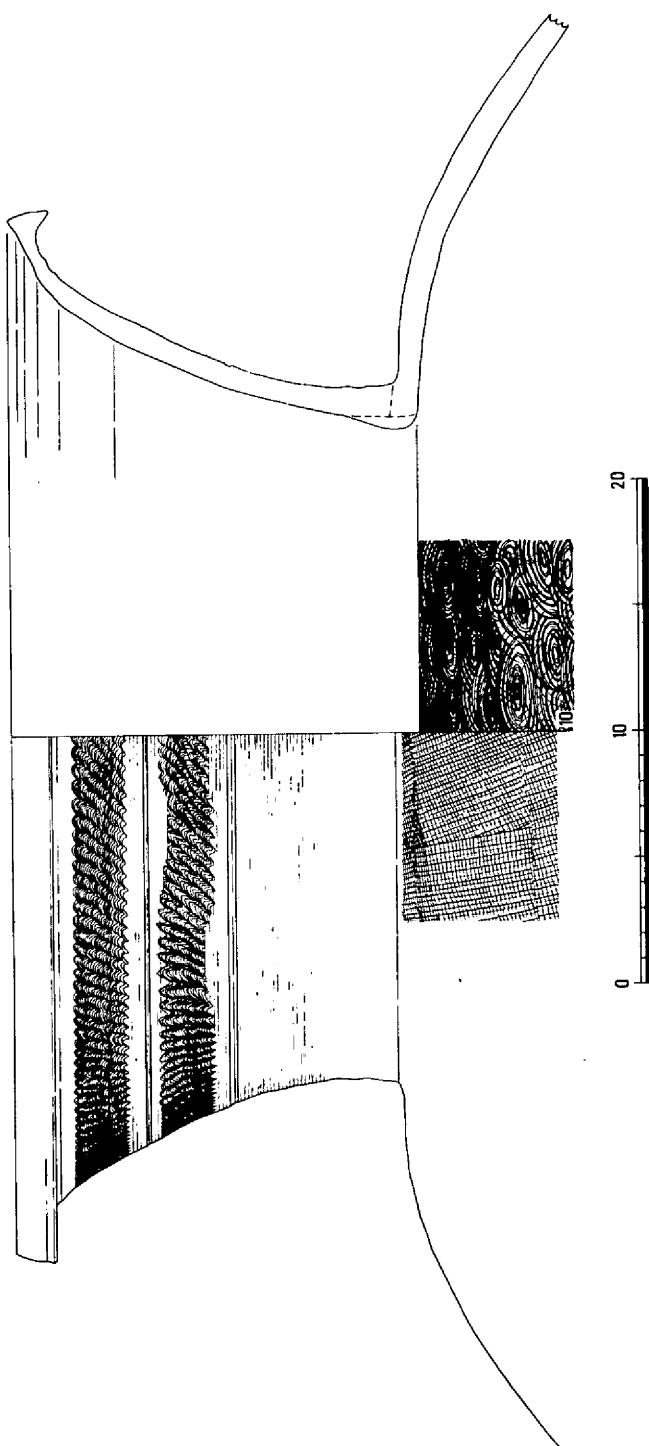
第97図 1号墳出土遺物 (11~13は $S=\frac{1}{3}$, 14~16は $S=\frac{1}{2}$)

山根屋遺跡(54)



第98図 1号墳出土の須恵器(1)

山根屋遺跡(54)



第99図 1号墳出土の須恵器(2)

製の把を装着していたと考えられる。

刀子(第97図13)

全長168mm、刀身長99mm、刀身幅13mm、背幅4mmを測る。かなり細身の刀子である。鋒から刃部へは滑らかに湾曲し、刀身はわずかに外反りをもつ。背闊をもち、直角に切られている。茎幅は関部で11mmあり、茎尻へ向かって細くなっていく。茎尻は丸くおさめている。茎には孔はみられない。茎に木質が多く付着残存し、木製の把があったと考えられる。

金環(第97図14・15)

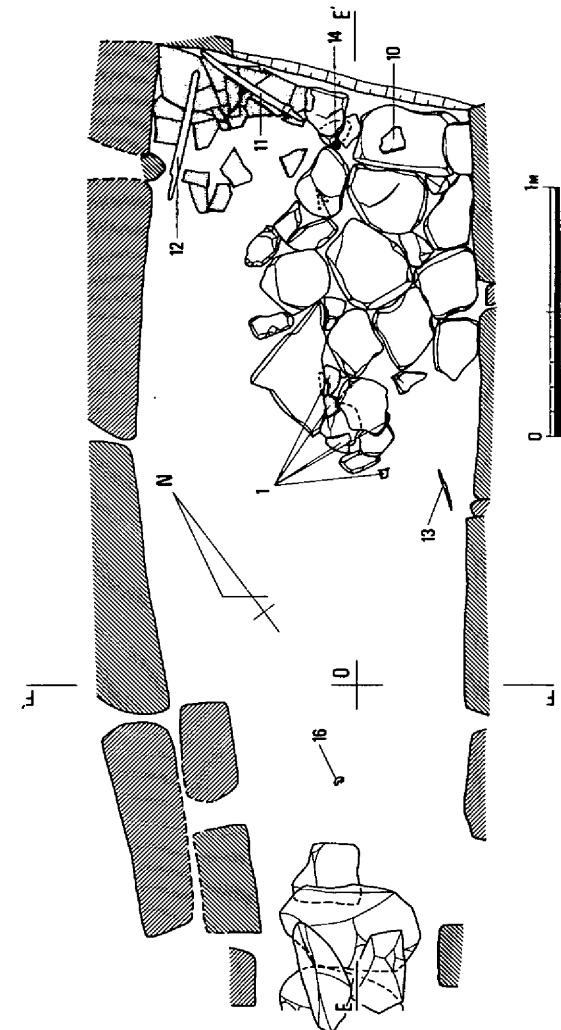
14は石室内から出土したものである。錆化が激しく、金箔は完全に剝離している。環の外径は30mm、芯部の径は7mmを測る。15は墳丘外の斜面下から出土したものである。内環部分に金箔が残存している。環の外径は30mm、芯部の径は8mmを測る。

勾玉(第97図16)

石室羨道部から出土した。長さ41mmを測り、縦長の「コ」の字形を呈する。穿孔は片側からなされ、反対側では孔の周囲を広く浅く抉っている。材質はメノウであり、乳褐色を呈する。

須恵器(第98・99図)

石室内からもいくらか出土したが、多くは墳丘外の斜面下から小破片となって採集された。1・2・9・10は石室内から破片の出土をみており1号墳出土品にまちがいないが、他のものについては厳密にいえば1号墳出土とは断定できない。しかし出土した地点の上方に位置する古墳は1号墳のみであり、1号墳出土品とみて誤まりはない。以下、個々については観察表を参照されたい。



第100図 1号墳石室床面平面図

表2 1号墳出土須恵器観察表

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径115mm 胴径158mm 残存高147mm	口頸部外反し、口縁端面はやや外傾して立ち、端面上縁はつまみ出し気味で丸くおさめる。頸部から胴部への移行はやや屈折的で、この部分胴部薄くなる。胴部は肩が張り、肩部から腹部への移行はやや屈折的で、その境にごく軽い凹線をめぐらせる。内面胴下部軽い凹凸あり。	腹部上端は回転によるヘラ削り(削り方向右回り) それ以下は不定方向のヘラ削りの後ナデで調整している。調整はやや雑である。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を若干含む 焼成：良好 色調：青灰色～青黒色 残存率：約1/3 肩部外面口縁部内面に自然釉が霜降状に付着
高杯	2	口径170mm 残存高49mm	口縁部は直線的でかなり外傾して伸び、先端は丸くおさめる。口縁部と杯底部の境には明瞭な凹線をめぐらす。	杯底部1/3程回転ヘラ削り(削り方向右回りか)	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を多く含む 焼成：不良軟弱 色調：外面灰黒色 内面白色 残存率：約1/4
杯	3	口径129mm 器高40.5mm	たちあがりは一段軽く屈折する感じで立ち、上半は直線的で、先端は丸くおさめる。受部は水平につまみ出され内湾する、先端は尖り氣味に丸くおさめる、薄手。内面たちあがりから体部への移行は屈折的ではなく、不明瞭な線をもつのみ。内面あまり凹凸なし。	底部外面大部分回転ヘラ削り(削り方向右回り)荒い。底部内面小範囲に仕上げナデを施す。丁寧でない。ヘラ削り部分の端はヘラ削り後ヨコナデによって調整されている。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を含む 焼成：良好 色調：青灰色 残存率：約1/3
壺	4	頸部下端径123mm 残存高34.5mm	口頸部外面上半に突帯を二条以上めぐらせる。突帯の間は凹線状になる。突帯はかなり鋭い。頸部から胴部への移行は屈折的。	口頸部外面下半、突帯下に横描波状文を施す。波状文は丁寧で細かい。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒・細砂を含む 焼成：良好 色調：灰黒色・断面灰赤紫色 残存率：約1/3 頸部内面・胴部外面霜降状に自然釉付着
壺	5	胴径152mm 残存高99mm	頸部から胴部への移行は滑らか。胴部は球形を呈し、肩部にごく軽い凹線を二条めぐらせる。胴部内面はおおむね滑らか。	底部かなり広範囲に回転ヘラ削り(削り方向左回り)。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を若干含む 焼成：良好 色調：青灰色・灰紫色 断面赤紫色 残存率：小破片

山根屋遺跡(54)

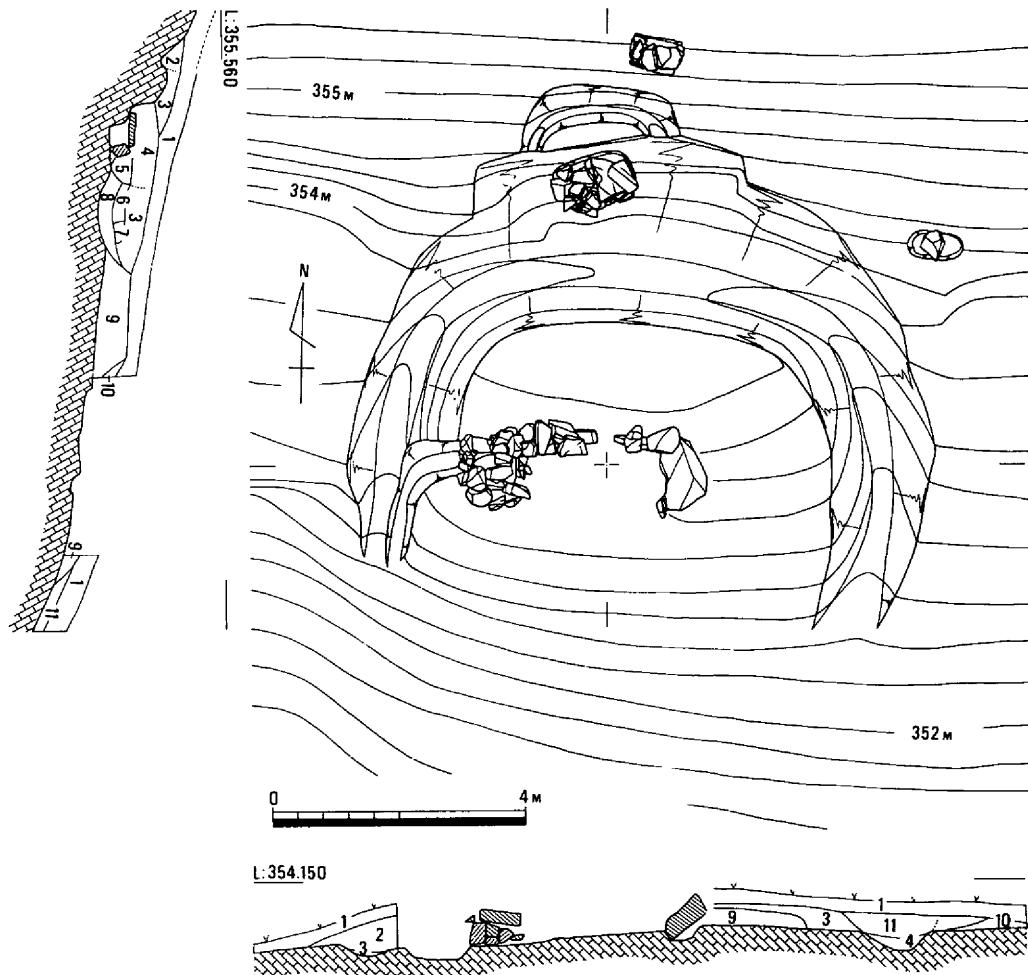
蓋	6	口径129mm 残存高51mm	口縁部は直線的に伸び、先端は丸くおさめる。口縁部先でやや厚くなる。天井部は丸くなる。天井部と口縁部の境は不明瞭。	天井部外面不定方向へラ削りか強いナデによって調整。天井部内面広範囲に仕上げナデを施す。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒をかなり含む 砂質 焼成：不良若干甘い 色調：外面灰黄色～灰紫色 小破片のために口径等不完全
甕	7	口径204mm 残存高48mm	口頸部は胴部から屈折して大きく外反する。口頸部下半に凹線らしきものがみられるが、全周するかどうか疑問。口頸部上方外面に粘土帯の貼り付けがあり、明瞭な段をもつ。口頸部先端はややつまみあげ、丸くおさめる。口縁端面は明瞭であり、下縁はやや鋭い。	ヨコナデはそれほど丁寧でなく、器表は一様に滑らかではない。口頸部外面の突帶は貼り付けによる。同一個体と推定される胴部破片は外面細かい平行叩目、内面同心円文叩目で、内外面ともに所々叩目をナデによって消している部分あり、内面に顯著。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を若干含む 繊密 焼成：良好きわめて堅い 色調：外面淡青黒色、内面灰黄色 断面赤紫色 残存率：きわめて小破片 口径外傾度等不完全、ひすみがみられる
甕	8	口径236mm 残存高53mm	口頸部はわずかに外反する。外面軽い凹凸があり、鈍い稜をいくらかもつ。外面先端に近く垂直に近い平面をもつ。口縁端面をもたら、それは水平になる。先端内面に若干肥厚する。頸部から胴部への移行は滑らか。	同一個体と推定される胴部破片は外面平行叩目、内面同心円文叩目で、同心円文は大きく粗い。口頸部先端内面の肥厚は端面のヨコナデによって生じたか。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を若干含む 焼成：良 色調：灰黄色・黒色 残存率：少弱 歪みあり。霜降状に自然釉が付着し多孔質になった部分あり。
甕	9	口径186mm 残存高91mm	口頸部はわずかに内傾する形で直立し、先端は屈折して外方へ肥厚する。頸部から胴部への移行は滑らか。	口縁端は折り返しによる。口頸部外面には叩目の痕跡らしきものが認められ、口頸部は叩き伸ばしたものを持つて形成したか。胴部外面はカキ目によって平行叩目をほとんど消している。胴部内面はやや粗い同心円文叩目の上を全面ナデであり、叩目が所々消えている。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を若干含む 焼成：良好 色調：青灰色～青黒色 残存率：小破片
甕	10	口径411mm 残存高220.5mm	口頸部は長く外反して伸びる。先端に明瞭な口縁端面をもち、拡張された両縁はかなり鋭い。端面の拡張は下方で大きく断面三角形をなす。口頸部内面は滑らかで大きな凹凸はない。外面は先端に近く鈍い凸帯を二条めぐらせる。中程にはごく浅い凹線を二条めぐらせ、口頸部を三倍に分つ。口頸部内面下端は内側へ厚くなる。頸部から胴部への移行は屈折的。胴部は肩が張る感じ。	口頸部外面、上下端を除き全面にカキ目を施し、その後三帯に区画したうちの上二帯に櫛描波状文を施す。波状文はそう大きな乱れはなく、かなり丁寧。口頸部の接合は胴部上端に口頸部をのせ、内面に粘土を付加している。胴部接着部位にも叩目があり、胴部叩きしめの後に接合したと考える。胴部外面は格子目風の平行叩目、内面は同心円文叩目、かなり細かい。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を若干含む 焼成：良好 色調：灰色～灰黒色・淡青灰色 残存率：口頸部約1/4

山根屋遺跡(54)

2号墳<No.54> (第101~103図)

2号墳は林道の上側にあり、発掘調査前には知られていなかった。発掘調査開始後、調査範囲内の清掃を行ったところ、斜面がわずかに盛上がった部分が認められた。さっそくボーリングをしたところ、石室が確認され、2号墳とした。

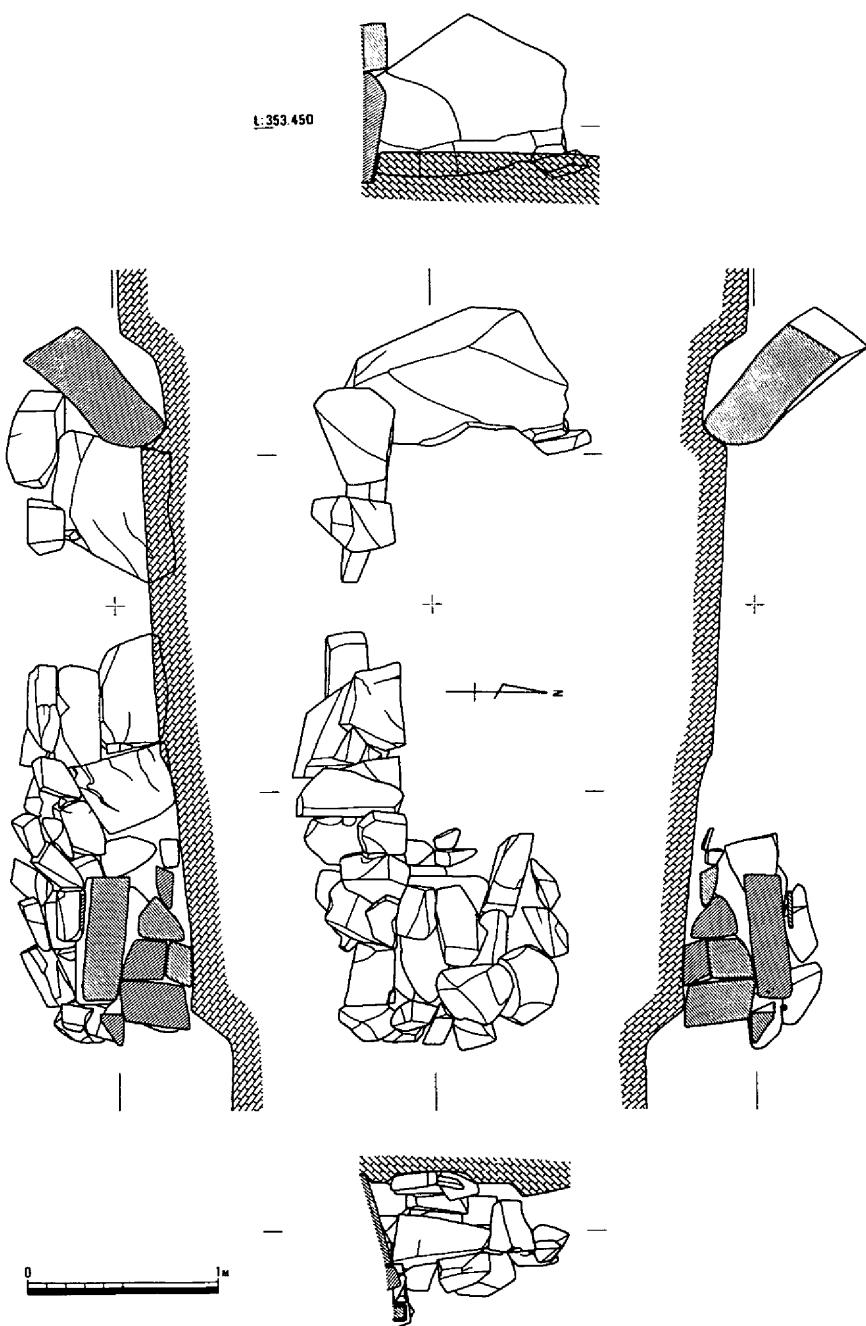
調査は横穴式石室に対し、十字に土層観察用の畦を設定した。この畦を残して墳丘の全面を表土剝ぎました。



- | | | |
|----------------|-----------------|---------------|
| 1. 表土 | 5. 褐色土(地山粒多く含む) | 9. 黒色土(地山粒含む) |
| 2. 黒褐色土 | 6. 暗褐色土 | 10. 暗茶褐色土 |
| 3. 暗褐色土(地山粒含む) | 7. 褐色土(地山粒多く含む) | 11. 暗褐色土 |
| 4. 黒褐色土(地山粒含む) | 8. 黒褐色土 | |

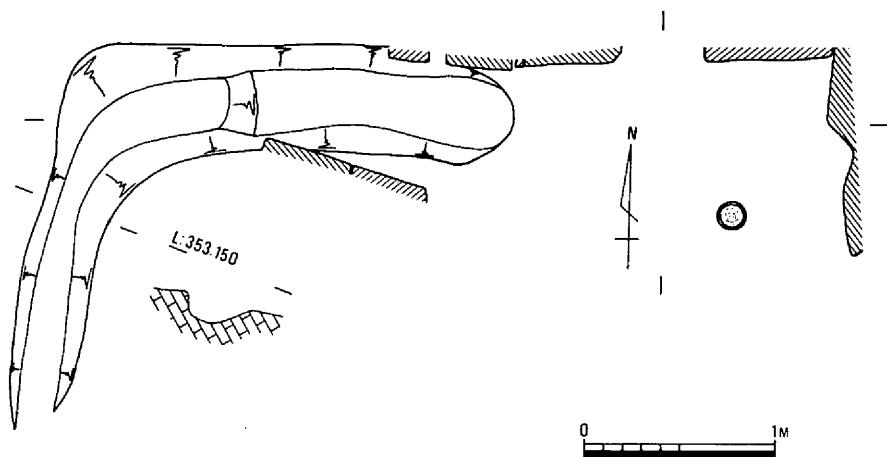
第101図 2号墳<No.54> 平面図・断面図

山根屋遺跡(54)



第102図 2号墳〈No54〉石室実測図

山根屋遺跡(54)



第103図 2号墳〈No54〉石室平面図

墳丘・外部施設

墳丘の平面プランは円形というより、隅丸方形に近い形を呈している。墳丘の構築は、第三紀層を削って平坦部をつくり、その上に土を盛っている。盛土は黒色土で、特に版築状にはなっていないようであるが黒色土のため判断が困難である。

墳端には周溝がめぐり、墓域を区画している。周溝の底部は山側が高く、谷側にむかって低くなっている。周溝が墳端を一周するかどうか確認できなかったが、おそらく山側だけであった可能性が強い。周溝の山側は一部長方形に広く掘られているが、これは20号墓をつくる時になったと考えられる。20号墓は山側に周溝をもつが、2号墳の周溝が一定程度埋まつた後につくられたものである。その他周溝より外側になるが、19号墓、21号墓、22号墓なども2号墳との関係が考えられ、これらは2号墳を中心にして相前後する時期につくられたものと考えられる。

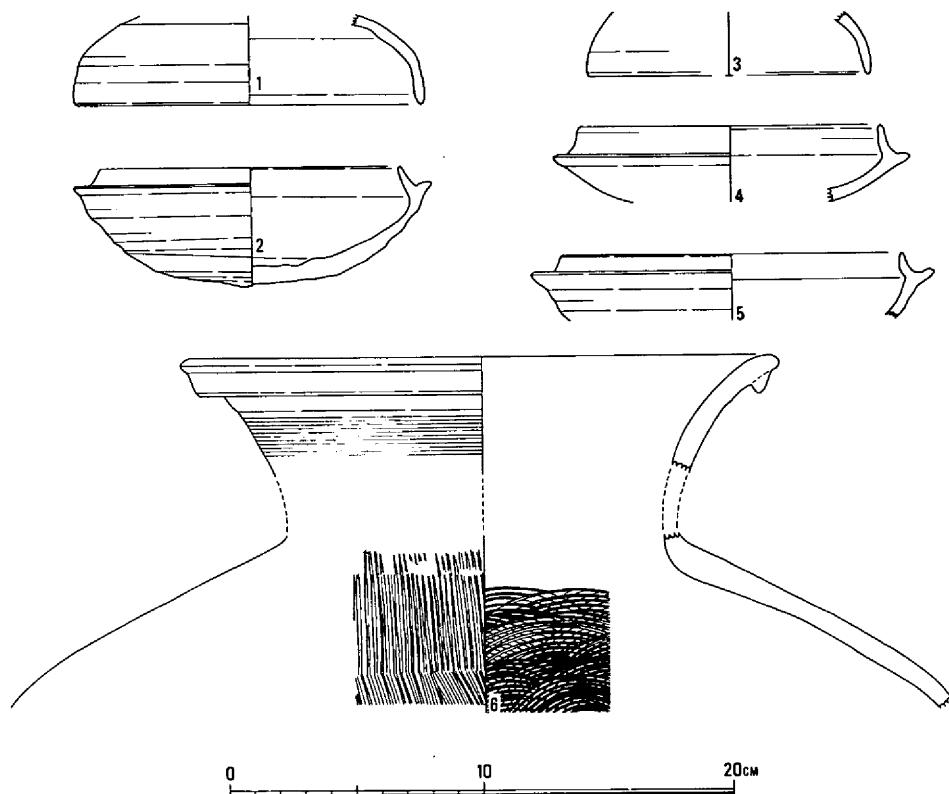
石室（第102図・103図）

横穴式石室は墳丘のほぼ中央につくられている。墳丘と第三紀層を掘り込んでつくられているが、墳丘上面ではその掘方は確認できなかった。

石室は入口の周辺と、山側の側壁の一部、それに奥壁を残すのみであった。石室の全長3.20m、玄室幅約1mで、玄室から入口にむけてだいに幅を減じてゆく。玄室と羨道部を区別するような施設はないが、閉塞石のある少し玄室寄りの所から、側壁の石の積み方が乱れている。玄室では最下段に、大きな石の広い面を内側にして立てている。その上は石を横にして用いている。閉塞石は面の整った石を使用し、丁寧に積まれている。この部分の側壁は、むしろ閉塞石を覆うようにつくられており、追葬する時は一部入口の側壁までも取り外したものと思われる。床面は掘り込んだ第三紀層のままで、特に床面をつくってはいない。

石室入口部から周溝にむけて溝が掘り込まれていた。石室内と閉塞石の部分は浅く掘られているが、石室入口から急に深くなり、周溝にむかうが、途中直角に曲り、周溝と平行しながら谷側へ続い

山根屋遺跡(54)



第104図 2号墳出土遺物

てゆく。この溝は排水溝でもあるが、埋葬時の通路としてつくられたものではなかろうか。

遺物（第104図）

遺物は石室内中央部に須恵器の杯が一点認められたのみで、その他は石室外へ流出したものや、石室内埋土の中にあったものである。須恵器以外の遺物は確認することができなかった。

表 3 2号墳出土須恵器観察表

器種	番号	法 量	形態の特徴	手法の特徴	備 考
蓋	1	口径135mm 残存高35mm	口縁部は直線的に伸び、先端は尖り気味に丸くおさめる。口縁部内面に正面の名残りのようなものがみられるが稜はきわめて鈍い。口縁部から天井部への移行はやや屈折的で鈍い稜をもつ。	天井部回転ヘラ削り（削り方向左回わり）。ヨコナデはやや荒い。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒を含む 焼成：良好 色調：外面青黒色 内面青灰色 ・残存率：約%
杯	2	口径137.5mm 器高47mm	たちあがりはごく軽く外反気味に伸び、内傾する。先端は尖り気味に丸くおさめる。受部は短く水平に近く突出し、上面は平坦面をなし、先端は尖り気味に丸くおさめる。たちあがりと受部の境には凹線がめぐる。内面たちあがりから底部への移行はかすかに屈折的。外面かなり凹凸あり。内面ラセン状に凹部がめぐる。	底部回転ヘラ削り（削り方向左回わり）。底部内面の仕上げナデはほとんど認められず、ほんの指先一ナデにすぎない。ヘラ削りは削り残しがかなりある。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒をわずかに含む 焼成：良好 色調：内面青灰色 外面青灰色～青黒色 口縁端はすこし歪み、水平面からはずれています。
蓋	3	口径不明 推定残存高 25mm	口縁部は天井部からわずかに屈折し、直線的に伸びる。口縁部先端は丸くおさめる。		<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒・細砂をかなり含む（石英粒） 焼成：良好 色調：灰白色 極小破片のため口径傾き等完全ではない
杯	4	口径119mm 残存高30mm	たちあがりは軽く外反したのちかすかに内湾し、先端は尖り気味に丸くおさめる。受部は短く水平に突出し、上面は平坦になる。先端は尖り気味におさめる。たちあがりと受部の境にごく浅い凹線がめぐる。内面たちあがりから底部への移行はやや屈折的であるが線はあまり明瞭でない。		<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒・細砂を含む 焼成：良好 色調：外面青黒色 内面青灰色 小破片の残存
杯	5	口径135mm 残存高26mm	たちあがりは外反しつつ内傾し、先端は尖り気味に丸くおさめる。受部は斜上方に伸び、上面は丸くなり、端部は丸くおさめる。たちあがりから受部への移行は滑らか。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で明瞭な線をもつ。		<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を含む（石英粒） 焼成：良好 色調：青黒色～暗青灰色 ・残存率：約% 体部外面に自然釉薄く付着するか。（灰白色）
蓋	6	口径230mm 残存高 (口縁)46.5mm	口縁外面先端に近く垂下する突帯を貼り付ける。突帯の稜は鈍く丸い。口縁先端丸くおさめる。頸部中央よりや上方に軽い屈折部あり。	頸部上半、屈折部より下にカキ目を施す。頸部外面平行叩目、内面同心円文叩目	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：石粒・砂粒を若干含む 焼成：良好 色調：灰色～灰黄色 残存は口縁部小片、他に胸部破片多し、口縁部胸部上半に多量に自然釉付着し、流れ落ちている。

山根屋遺跡(54)

3号墳<No.56>(第105図)

3号墳は丘陵頂部に近い所に位置し、表土を剥ぐまで全くその存在に気付かなかった。したがって土層観察用の畦などは十分に設定することができなかった。しかし残された部分の土層観察では、すでに墳丘は流失していた。石室の長軸に平行する畦では周溝と考えられる落込みが確認されたが、第三紀層まで達していないため、平面的には検出することができなかった。

石室(第106図・107図)

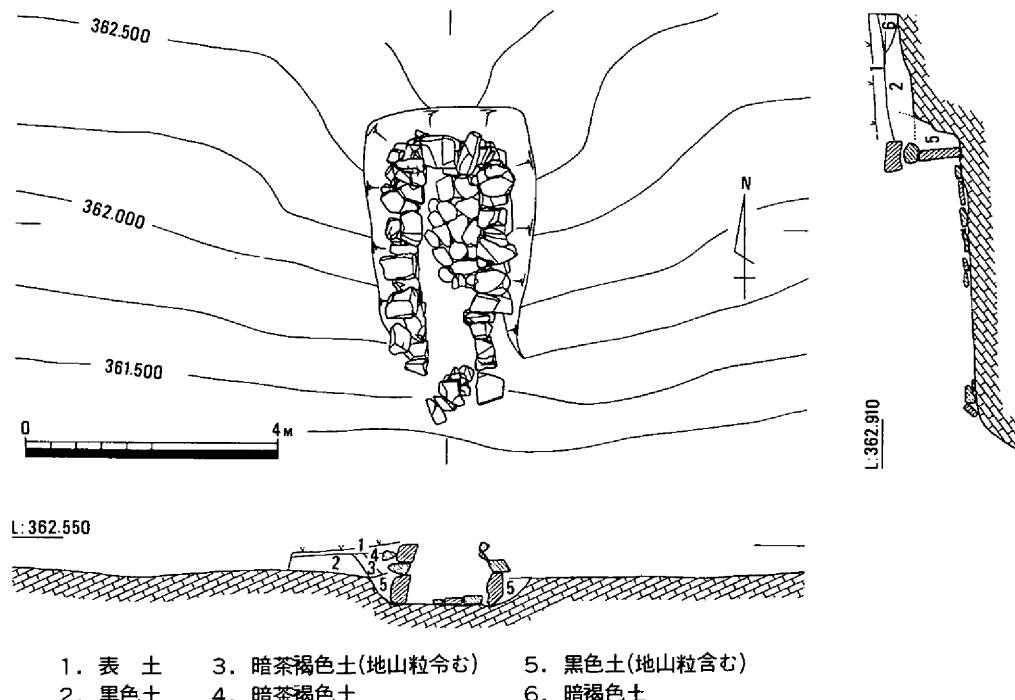
横穴式石室は、黒色土と第三紀層を「コ」の字状に深く掘り込んで、その中に構築している。すでに天井石はなく、羨道部側壁もかなり流失している。石室は全長4m、玄室幅1m、羨道幅80cmを測る。

石室は片袖で、入口から向って右側に大きな石を立てている。側壁は下段に大きな石の広い面を内側に立てて使用し、2段目以上は横に積むものと、一番狭い外口を内側にして積むものとが見られる。側壁の下段は第三紀層をさらに掘り込むことはせず、ほぼ掘方の底部にあわせている。平面プランは玄室中央部が広くなる胴張り型を呈している。入口には閉塞石が一部残存している。

床面には扁平な石が敷かれている。敷石は全面にわたって見られるのではなく、おそらく一人分と考えられるくらいの広さである。奥壁に近い位置にある細長い石は棺台と考えられるものである。

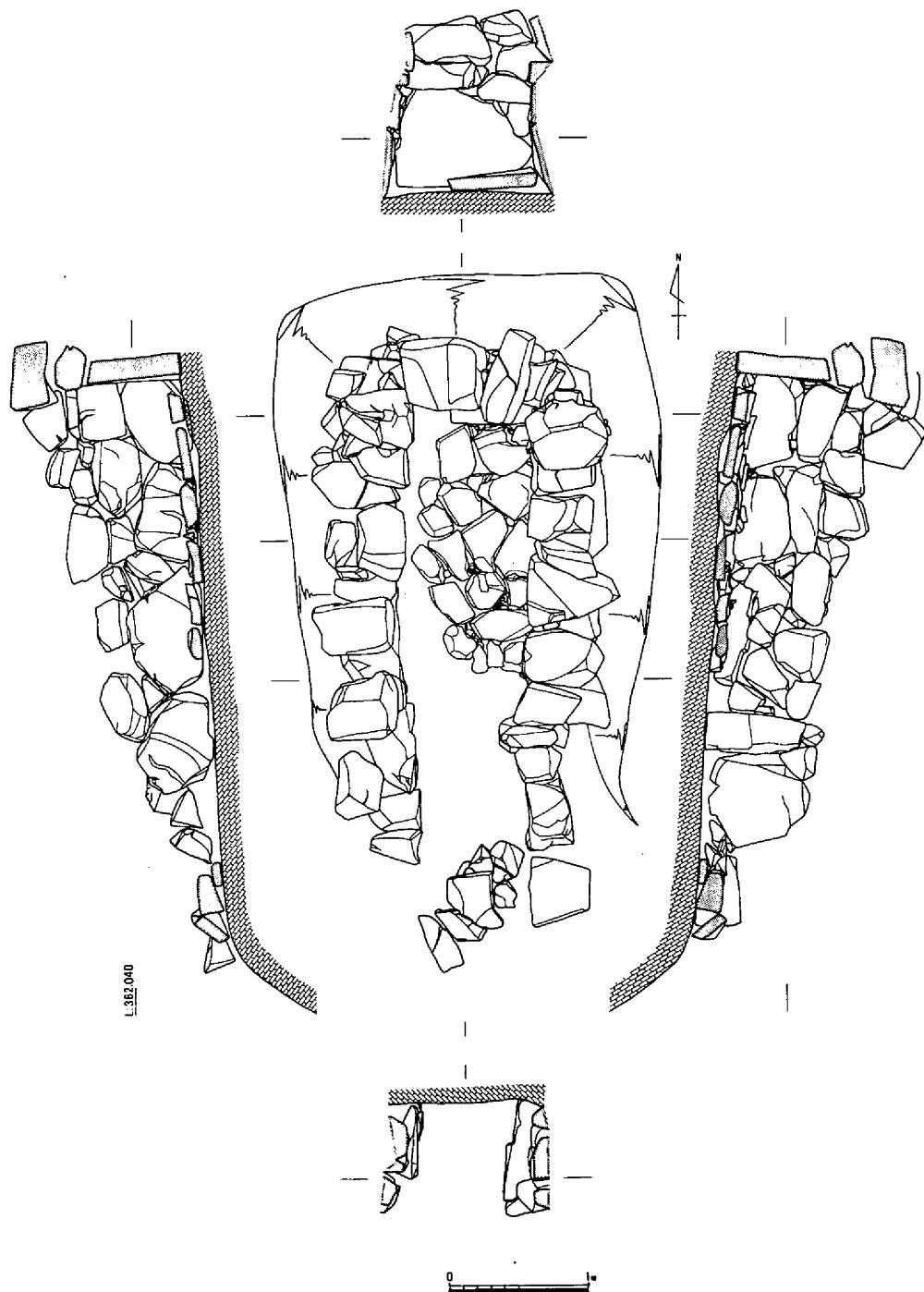
遺物(第108図・109図)

遺物は玄室内には全く残存しておらず、直下の39号住居址の上部で、須恵器や鉄片が多く出土し



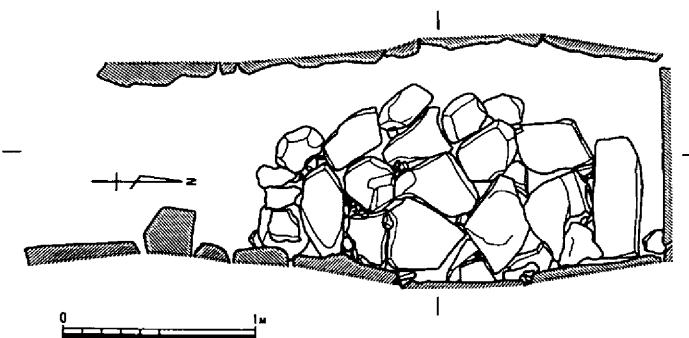
第105図 3号墳<No.55> 平面図・断面図

山根屋遺跡(54)

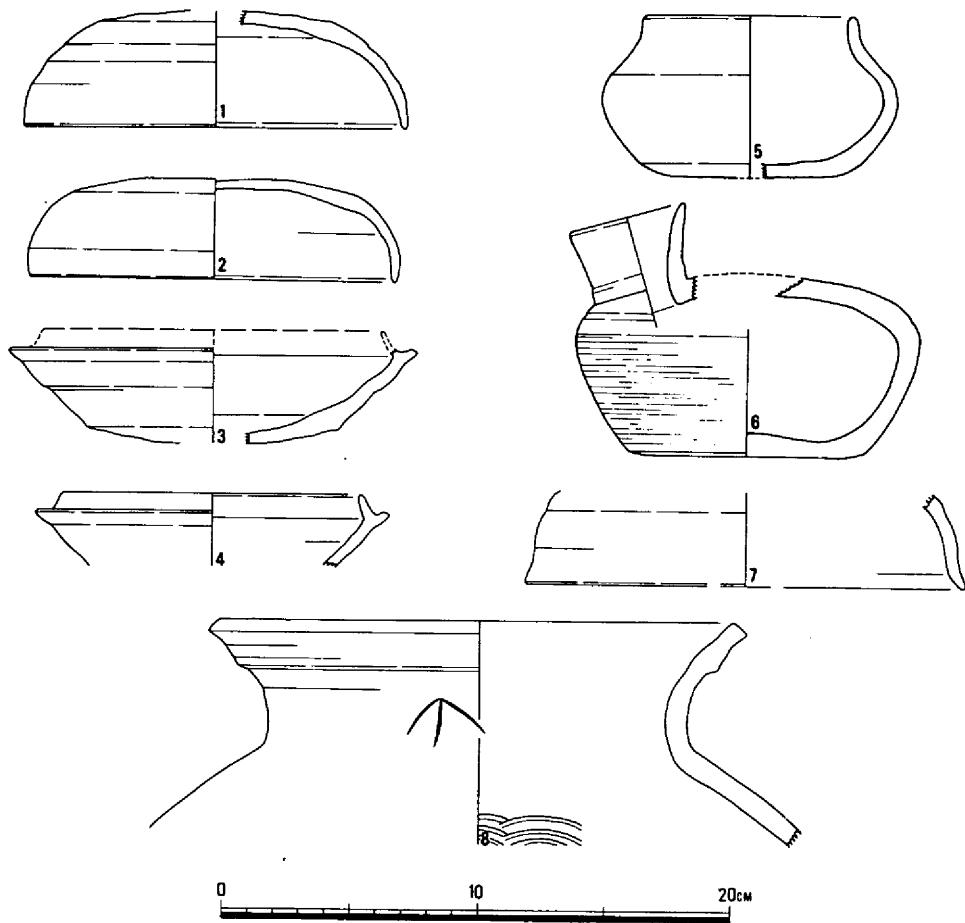


第106図 3号墳〈No56〉石室実測図

山根屋遺跡(54)



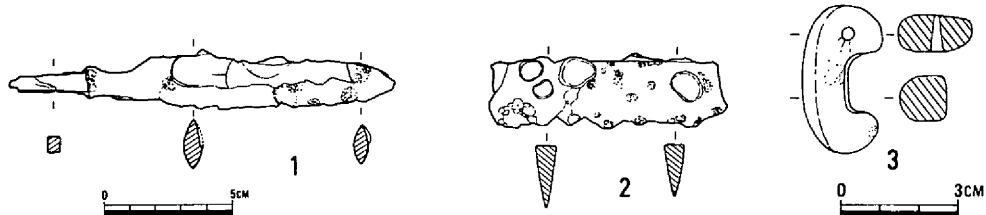
第107図 3号墳〈No56〉石室平面図



第108図 3号墳出土の須恵器

山根屋遺跡(54)

た。これらの遺物は、3号墳から流れ出したものと考え、すべて3号墳に伴うものとして記述した。遺物は須恵器のほかに、勾玉と槍先と刀の小破片が認められた。勾玉は瑪瑙でつくられている。



第109図 3号墳出土の遺物

表 4 3号墳出土須恵器観察表

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	1	口径148mm 残存高46.5mm	口縁部は内湾しつつ伸び、先端は丸くおさめる。口縁部・天井部境は不明瞭。天井部外面平坦面をもつが、丸味をもつ。天井部内面ごく軽く一段凹む。	天井部平坦面およびその周辺は不定方向のナデで調整する。平坦面周縁に面らしきものがめぐるが、顯著な砂粒の移動痕は認められず。天井部内面やや陥に仕上げナデを施す。多方向で執拗。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒を若干含む（やや砂質） 焼成：良（やや甘い） 色調：灰色 残存率：約1/3
蓋	2	口径142mm 器高40mm	口縁部は天井部からかすかに屈折し、内湾しつつ垂下する。先端は丸くおさめる。天井部外面に広い面をもつ、丸味をもつ。面の周縁は不明瞭で滑らかに体部に続く。内面は滑らかに仕上げられており、ラセン状の軽い凹部を残すのみ。	天井部は不定方向のナデで調整されているが明瞭な調整痕はない。かなり平滑にされているが軽い凹凸をもつ。天井部内面やや広範囲に仕上げナデを施す。軽いもの。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒を多く含む（石英粒） 焼成：良好 色調：灰色～暗灰色 残存率：約強
杯	3	受部径159mm 残存高38mm	受部はつまみ出し気味に水平に出て、先端は丸くおさめる。底部に平坦面らしきものをもつが、中央がかなり突出する。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で明瞭な線をもつ。	底部平坦面は不定方向のナデで調整するが、やや荒い仕上げ、砂粒の回転移動痕をかすかに認めるが、ヘラ削りの痕跡ではない。底部内面に不定方向のナデをかなり密に施す。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒をわずかに含む（やや砂質） 焼成：不良（内面生焼け）軟 色調：外側暗灰色 内側淡灰青紫色 残存率：約2/3

山根屋遺跡(54)

杯	4	口径116mm 残存高29mm	たちあがりはわずかに外反しつつ内傾し、先端は丸くおさめる。受部はつまみ出し気味に斜上方に内湾気味に伸び、先端は丸くおさめる。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で明瞭な線をもつ。同一個体と推定される底部破片は底部に平坦面をもつ。中央が突出し、丸味をもつ。	ヨコナデはやや荒い感じ。底部平坦面(推定同一個体)は不定方向のナデで調整する。底部内面も不定方向のやや疎な仕上げナデを行う。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒を含む(石英粒) 焼成：良好 色調：淡青灰色 残存率：小破片
短頸壺	5	口径81mm 胴径117mm 残存高45.5mm	口頸部はかすかに内傾して立つ、先端は丸くおさめる。口頸部から肩部への移行は滑らか。肩部・腹部境に鈍い稜をもつ。	内面底から脇部への移行部分には斜方向の仕上げナデがみられ、指圧によるとみられる凹凸あり。底部外面は不調整、	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：細砂を多く含む。やや砂質 焼成：良好 色調：内面灰色 外面暗灰色 残存率：口縁強
平瓶	6	口径46mm 最大腹径136mm 底径93mm	口頸部は下端近くで軽い段をもち、先端は外反した後丸くおさめる。肩部と腹部の境は不明瞭でごく鈍い稜となる。底部平坦面をもつ。内面は滑らかで凹凸はない。底部中央が少し盛り上がる(内面)。	外面肩部以下はハケ状工具によって回転を利用して調整されている。底部外面は擦痕のような砂粒移動痕のみでへラ削りの明瞭な痕跡なし、ナデで調整したか。底部内面は何かで押圧したような調整痕あり。口頸部はおそらくさし込み式にて接合している。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒をわずかに含むも緻密 焼成：良好 色調：青灰色 断面中央赤紫色
蓋	7	口径193mm? 残存高37.5mm	口縁部は強く外反し、先端は丸くおさめる。同一個体と推定される天井部破片があり、蓋口縁部と考えられる。	同一個体と推定される天井部破片は外面不定方向へラ削り。内面不定方向仕上げナデ	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒を多量に含む 焼成：良好 色調：外面灰色～淡灰色 内面淡灰黄色 極小破片のため口径・内傾度等不正確
甕	8	口径200mm 残存高89mm	口頸部は垂直に近く立ちあがった後大きく外反する。しっかりした口縁端面をもつが、両縁はやや鋸さに欠ける。口縁部外面の段は鈍い。	同一個体の脇部破片外面は叩目をハケ状工具によって消している。内面の同心円文叩目は粗い。頸部にへラ記号あり。	<ul style="list-style-type: none"> 胎土：砂粒を含む 焼成：良好 色調：黒色～灰黒色 小破片残存、口縁内外面霜降り状に自然釉、外面特に厚く多孔質状になる。

第4節 古代・中世の遺構と遺物

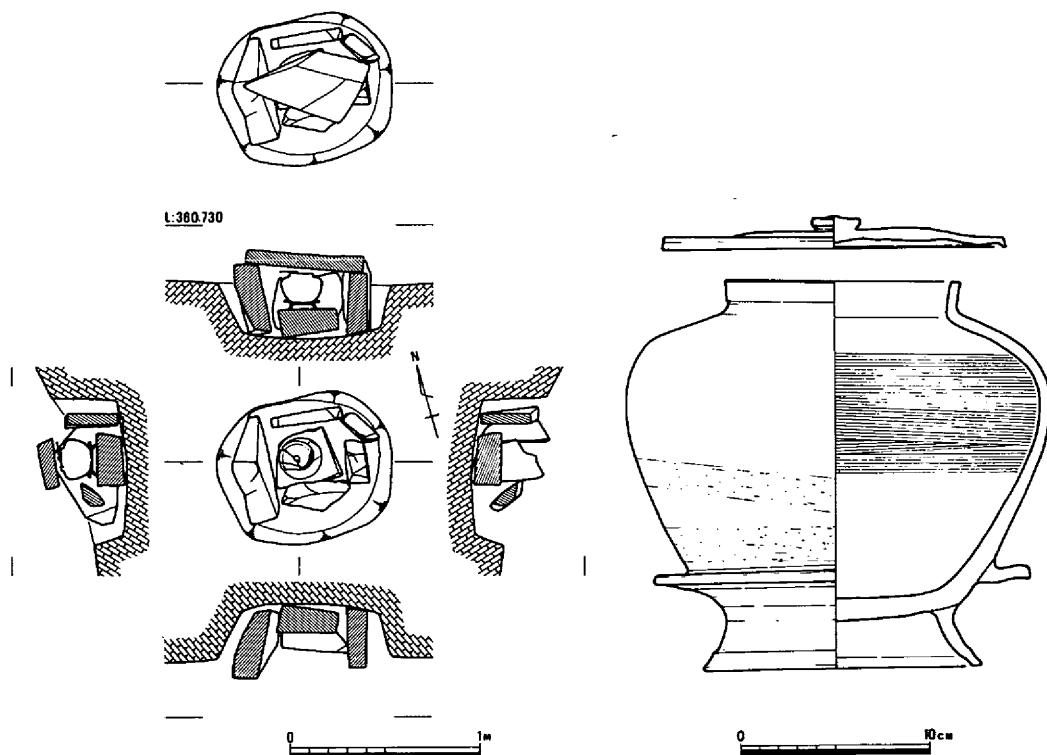
I 火葬墓

23号墓<Na67> (第110図)

23号墓は林道より上側の斜面、29号住居址状遺構の北側に位置している。第三紀層上面で検出したが、蓋石は黒色土層の中にあった。しかし墓壇の輪郭は不明で、第三紀層まで下げるを得なかった。墓壇は第三紀層を円形に掘り込み、その中を板石で四角に囲む。床にも板石を敷き、蔵骨器を収める室をつくっている。蔵骨器の周囲には炭を多く含んだ黒色土が認められ、炭で蔵骨器を覆っていたと考えられる。また炭は蔵骨器の周囲だけではなく、板石の裏側土壌内にも認められる。蓋石は石室よりやや小さなもので、蔵骨器を押し潰す原因となっている。

蔵骨器 (第110図)

蔵骨器には須恵器の壺と、杯蓋を用いている。壺はやや外反しながら立上る短い口縁部に、肩のはる胴部がつく、奈良時代に一般的なものである。しかし底部に至っては異質な形をしている。底部よ



第110図 23号墓と蔵骨器

山根屋遺跡(54)

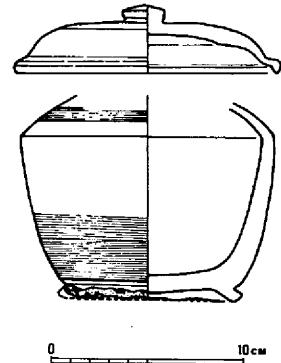
り少し高い位置には鍔状の張出しが貼付けられ、さらに低い脚台がつくものである。整形は、外面が口縁部から肩までヨコナデ、それ以下はナデと一部笠削りで仕上げられる。鍔の部分から脚台の内面までヨコナデ、底部は笠削りである。内面は口縁部から肩の一部までヨコナデ、それ以下はカキ目とナデによる調整がおこなわれている。色調は灰白褐色を呈する。

蓋は杯蓋を転用したもので、全体が平らになり、扁平な擬宝珠様のつまみがつく。色調は青灰色を呈する。

蔵骨器 (第111図)

この蔵骨器は表土剥ぎの段階で、23号墓に近い黒色土の中より出土したものである。遺構は確認することができなかったが、黒色土中にピットがあったものと考えられる。その下の第三紀層に達するような掘り込みではなかったと思われ、浅い位置から出土した。いずれにしても火葬墓に伴う蔵骨器と考えられるものである。

蔵骨器は壺の口縁部を打ち欠いたもので、角ばった肩をもち、底部には摩滅の著しい高台がつくものである。整形は、外面が肩部にカキ目が認められ、角ばった肩以下はナデと下半はカキ目によって仕上げられる。内面は胴部上半までヨコナデ、下半はナデによって仕上げられる。蓋には杯蓋を転用しており、天井部に宝珠状のつまみがつくものである。



第111図 蔵骨器

II 住居址状遺構

2号住居址状遺構<No.6> (第112図)

遺跡の東南、尾根状を呈する斜面に位置している。遺構は第三紀層を掘り込み、矩形の平坦部をつくりだしている。その平坦部に五本の柱穴列が認められ、対になる柱穴は検出できなかったが、建物になる可能性が強い。ほぼ中央を古道が通っており、古道より古い時期のものである。

平坦部には黒色土が埋まっていたが、柱穴内は第三紀層と同じ色調の土が埋まっていた。このため柱穴の検出は困難を要した。柱穴間の距離は2.10mで、建物を想定すると、南側は斜面になるので、おそらく1間までと考えられ、1間×5間になると思われる。

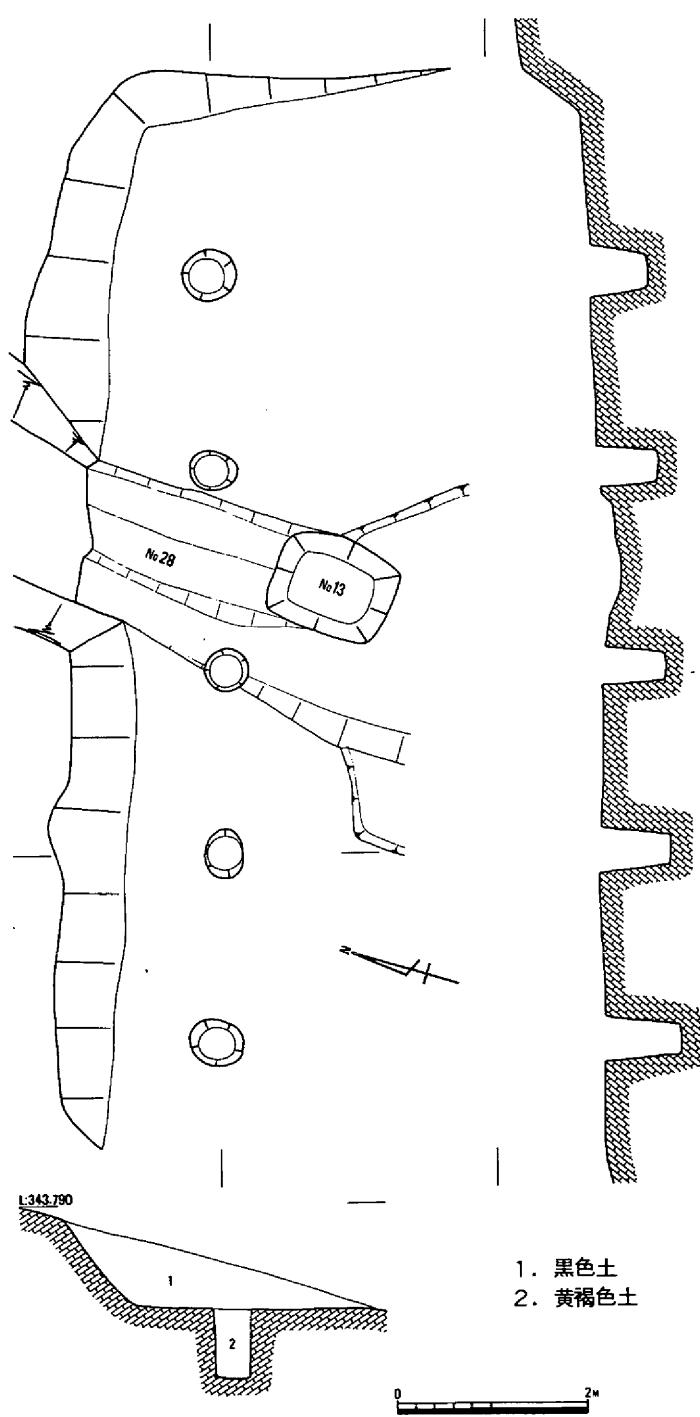
この遺構の時期であるが、遺物をみると、埋土の中から鉄鋸が、平坦部床面から土鍋が出土している。したがって土鍋の時期、つまり鎌倉時代と言えなくはないが、僅かな遺物であるので断定しがたい。しかし弥生式土器は出土していないことと、古道より古い時期であることは確認できる。

遺物 (第113図)

遺物は平坦部の埋土の中から鉄鋸が1点と、平坦部床面から土鍋が1点出土しただけである。

土鍋はヘルメット状の概観を呈するもので、口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや肥厚する。外面は口縁部から底部にいたるまで指頭圧痕が著しく認められ、刷毛目も部分的に残っている。

山根屋遺跡(54)

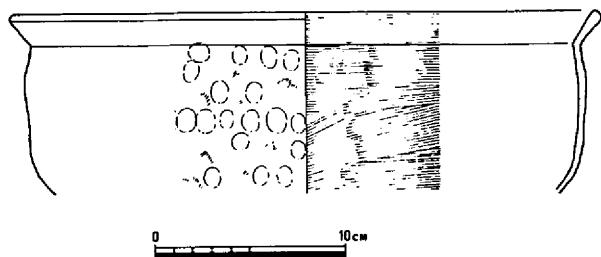


第112図 2号住居址状遺構〈No6〉平面図・断面図

山根屋遺跡(54)

煤の付着も著しく認められ、煮炊に使用されていたものである。内面は口縁部に横方向の刷毛目、胴部も刷毛目で仕上げられている。外面に比格して内面は特に丁寧につくられている。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。

土鍋の時期は鎌倉時代のものと考えられる。



第113図 2号住居址状遺構出土遺物

III 古道 (第16図)

古道は、林道から枝分かれした山道の下から検出されたもの（2号古道<№28>）と、おそらく2号古道に接続すると考えられる1号古道<№3>がある。1号古道は丘陵西側の谷から登って来るもので、2号古道は斜面を直に登って来る。いずれも第三紀層を溝状に掘り込み、底面は平らにし、2～3cm大の砂利を敷いている。

古道の時期は不明であるが、2号住居址状遺構を切ってつくられており、それ以後と考えられる。

IV その他の遺物 (第114図)

古代・中世の遺物はほとんど出土しておらず、ここに図示した中世の土鍋は5号住居址状遺構の埋土上部より出土したものである。

土鍋はヘルメット状の概観を呈しており、外面には指頭圧痕が著しく認められる。内面は細い刷毛状工具で丁寧に仕上げられる。外面には煤が付着している。色調は淡黄褐色を呈する。

註

- 註1 本報告書で使用する古墳時代前期、あるいは後期という時代区分は、古墳時代を前・後の2時期に大別したものである。近藤義郎、藤沢長治編「古墳時代上」日本の考古学Ⅳ 1966年
- 註2 潮見浩「山陽地方1」「弥生式土器集成」本編1 1964年
- 註3 岡山県工業技術センターにおいて、X線投下写真を用いて内部を観察した。
- 註4 西谷真治、鎌木義昌「金蔵山古墳」 1959年
- 註5 中国縦貫自動車道の建設に伴い1976年度に発掘調査がなされ、「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」(23)に報告を予定している。

第4章 総括

第1節 弥生式土器について

I 弥生式土器の分類

山根屋遺跡の遺構から出土した弥生式土器は、大別すると壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、蓋形土器などの器種が認められる。これらの各器種は器形、文様、整形技法などから、さらに細分することができる。山根屋遺跡出土の土器は細片が多く、器形の全体を知る資料に乏しいが、主に口縁部を中心として分類を試みた。

壺形土器

壺形土器A

長短はあるが、筒状の頸部をもち、口縁部が大きくひらくものである。すべて口縁端面に凹線文をめぐらすが、口縁部や頸部の形状、頸部の文様などによってさらに細分される。

壺Aa 長い頸部に凹線文がめぐるものである。口縁部のヨコナデは、外面が口縁下端から2cm内外、内面においては頸部にまでおよぶものがある。

壺Ab 口縁端部は上下にほぼ同じ程度に拡張され、その端面に凹線文をめぐらす。頸部はやや短く、沈線と斜行する笠圧痕文がめぐる。ヨコナデの範囲はひろく、口縁上端・下端から内外面にむかって4cm内外にわたっている。頸部から口縁部へ移行する屈曲部には、ヨコナデの際の力が強く加わって、外面に脹らみが作りだされている。頸部内面には指頭圧痕が認められる。

壺Ac 短い頸部に笠圧痕文をめぐらすものである。ヨコナデの範囲は口縁上端・下端から、外面2cm、内面は4cmである。

壺Ad 短い頸部に文様をもたないものである。胴部は球形に近いものと考えられる。ヨコナデの範囲は、口縁部上端・下端から内外面にむかって3cm内外である。

壺Ae 比較的短い頸部に5条の沈線がめぐる。口縁端部は上下に等しく拡張され、その端面に凹線文を5条めぐらす。ヨコナデの範囲は、口縁部上端・下端から内外面にむかって3cmである。

壺Af 頸部は真直で長く、大きくひらく口縁部は先端がさらに下方に屈曲している。口縁端部は肥厚し、その端面には凹線文がめぐり、その上に3こ一単位の円形浮文を貼付ける。長い頸部には10条前後の沈線がめぐる。ヨコナデの範囲は、口縁部上端・下端より、内外面にむかって4cm内外である。

壺Ag 頸部が内傾ぎみに口縁部にいたり、「く」の字状に屈曲する短い口縁部がつくものである。ヨコナデの範囲は狭く、口縁部上端・下端から、内外面へむかって2cm内外である。

山根屋遺跡(54)

壺Ah ラッパ状に開く長い頸部をもつが、無文のものである。

壺形土器B

いわゆる無頸壺で、口縁部上端面と口縁部外面とに凹線文をめぐらす。口縁部には紐孔がうがってある。口縁部のヨコナデはひろく、口縁端部から内外面にむかって4cm前後である。胴部内面はナデ、あるいは刷毛目調整、外面は刷毛目調整で仕上げられている。肩には刷毛状工具による圧痕文がめぐる。

壺形土器C

口縁部は内湾して、端部は丸くおさめている。2孔一組の紐孔が認められ、内面は箒削りによって仕上げられている。

壺形土器D

外反ぎみに立上る長い口縁部をもつものである。外面は刷毛目調整の後を箒磨きしている。

壺形土器E

肩に把手のつく、いわゆる水差形の土器である。ほぼ真直に立上る口縁部をもち、口縁端部上面に凹線文がめぐるものもある。

甕形土器

甕形土器A

「く」の字状に外反する口縁部に、いちじく状の胴部がつくものである。口縁端部は拡張されるとなく、凹線文も認められない。

甕Aa 口縁端部は面をもたず、ヨコナデによって丸くおさめている。胴部はあまり脹らむことなく底部にいたる。口縁部周辺のヨコナデは狭く、口縁屈曲部から内外面にむかって1cm内外である。胴部は内外面とも刷毛目、あるいはナデによって仕上げられる。

甕Ab 口縁端部はヨコナデによって、やや上下につまみ出され面をもつ。ヨコナデは口縁屈曲部より、内外面にむけて1cm以内が多い。胴部は内外面とも刷毛目調整が認められる。

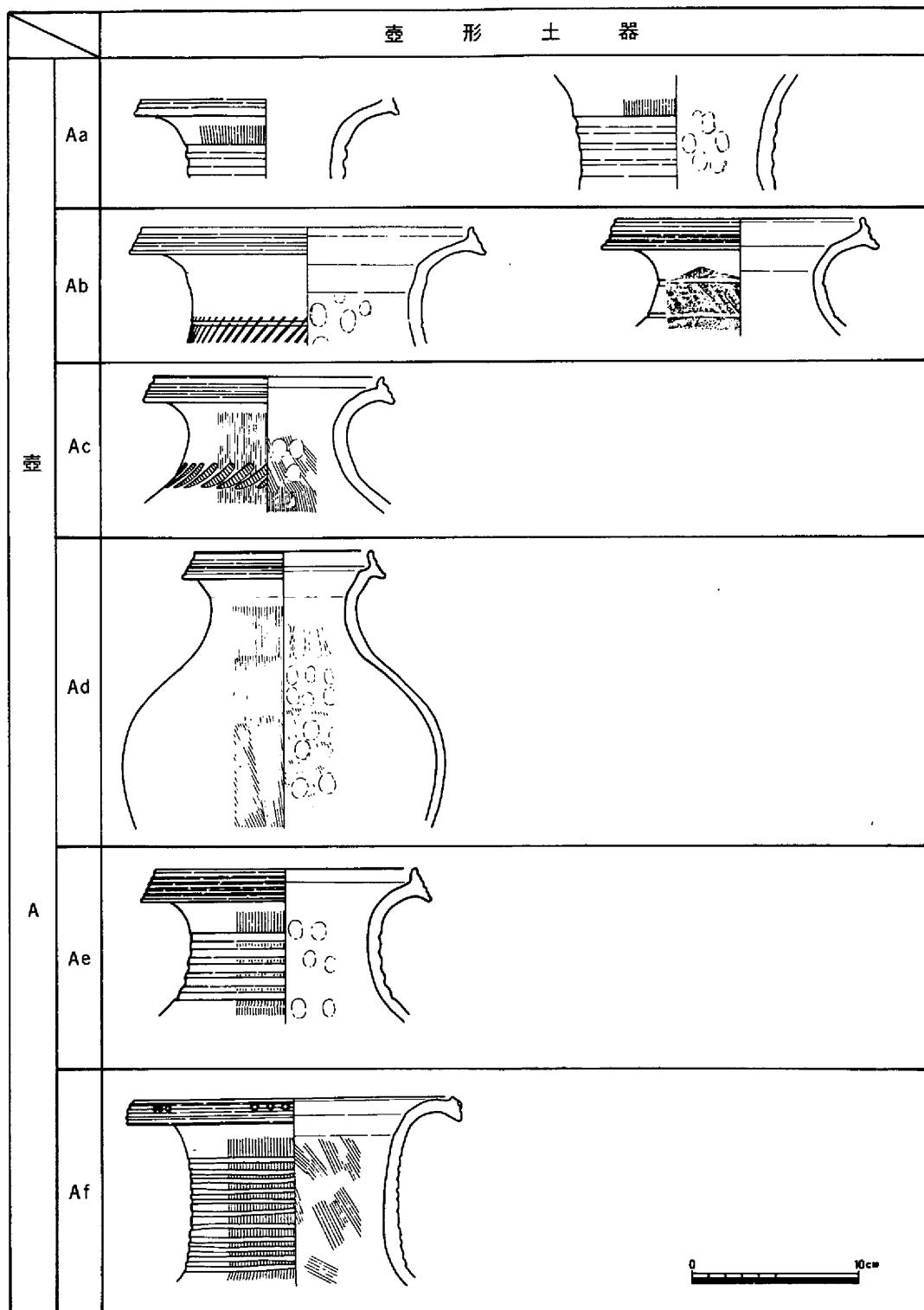
甕Ac 口縁端部は肥厚し、広い面をもつ。ヨコナデは口縁屈曲部より、内外面にむけて1cm内外である。胴部は内外面とも刷毛目、あるいはナデによって仕上げられる。

甕形土器B

「く」の字状に外反する口縁部に、いちじく状の胴部をもつものであるが、上下に拡張された口縁端面に凹線文をめぐらすことや、胴部内面下半に箒削りの手法が認められることが特徴である。さらに口縁部の形態によって細分できる。

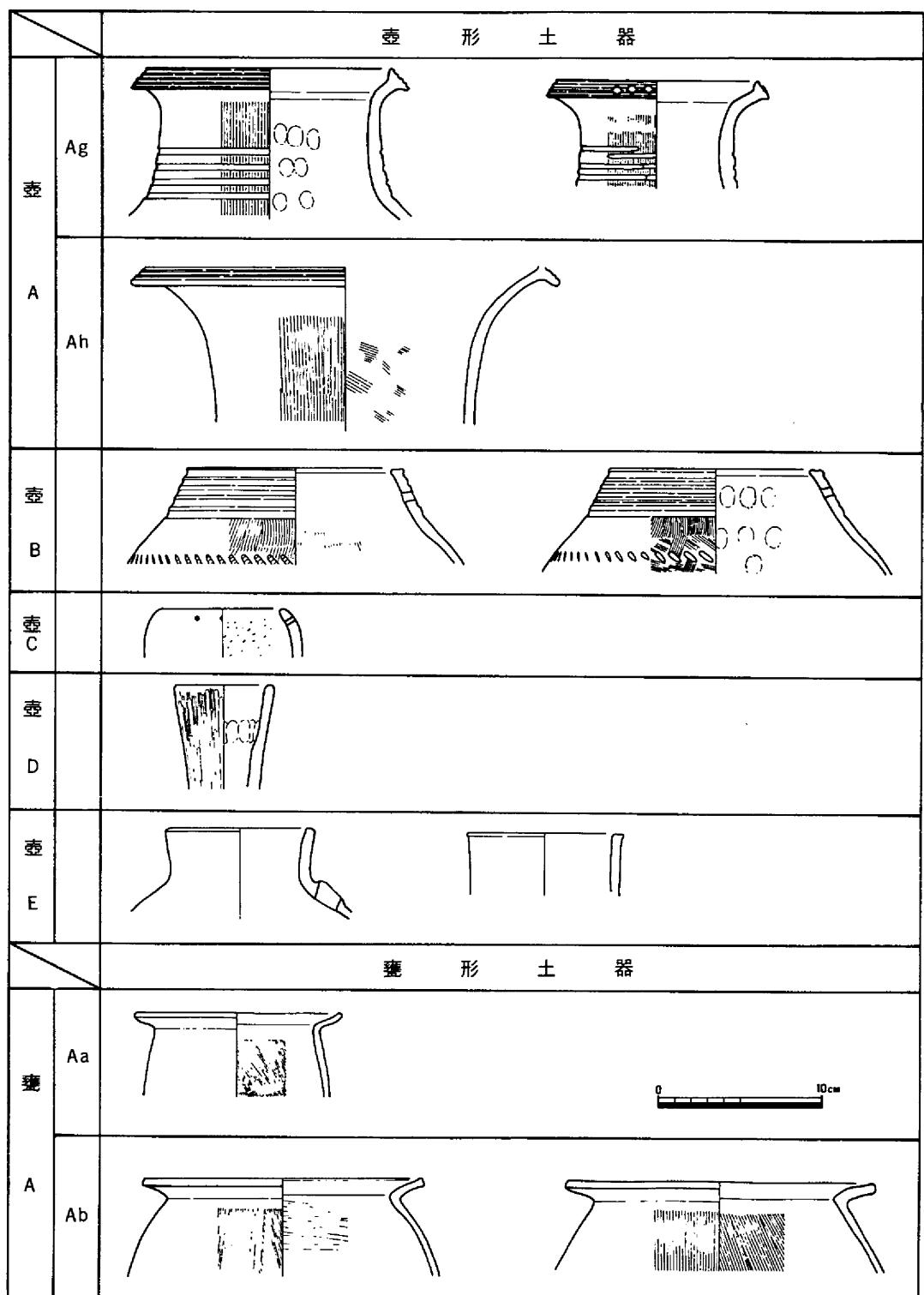
甕Ba 口縁端部はやや上下に拡張され、その端面に凹線文が2条めぐる。口縁部周辺のヨコナデの範囲は狭く、口縁屈曲部より内外面にむかって1cm内外である。

甕Bb 口縁端部は上下、とくに上方への拡張が著しく、端面には2~3条の凹線文がめぐる。肩には3~4条の沈線をめぐらし、その上を箒状工具による、斜行刻目文が施される。胴部にも櫛状工具による列点文がめぐっている。他の甕とは異なり、装飾が著しい。ヨコナデの範囲は、口縁屈曲部

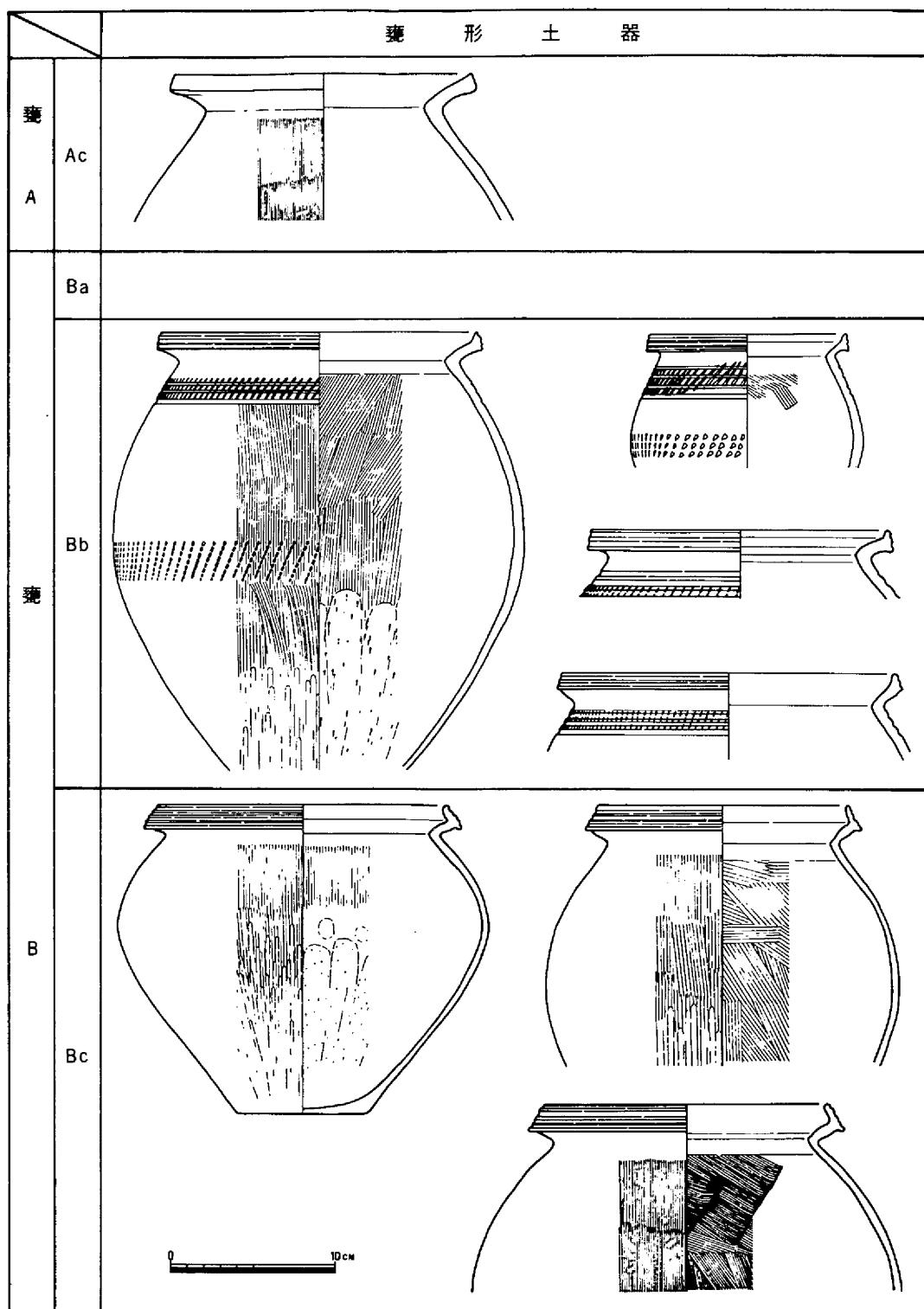


第115図 弥生式土器分類図(1)

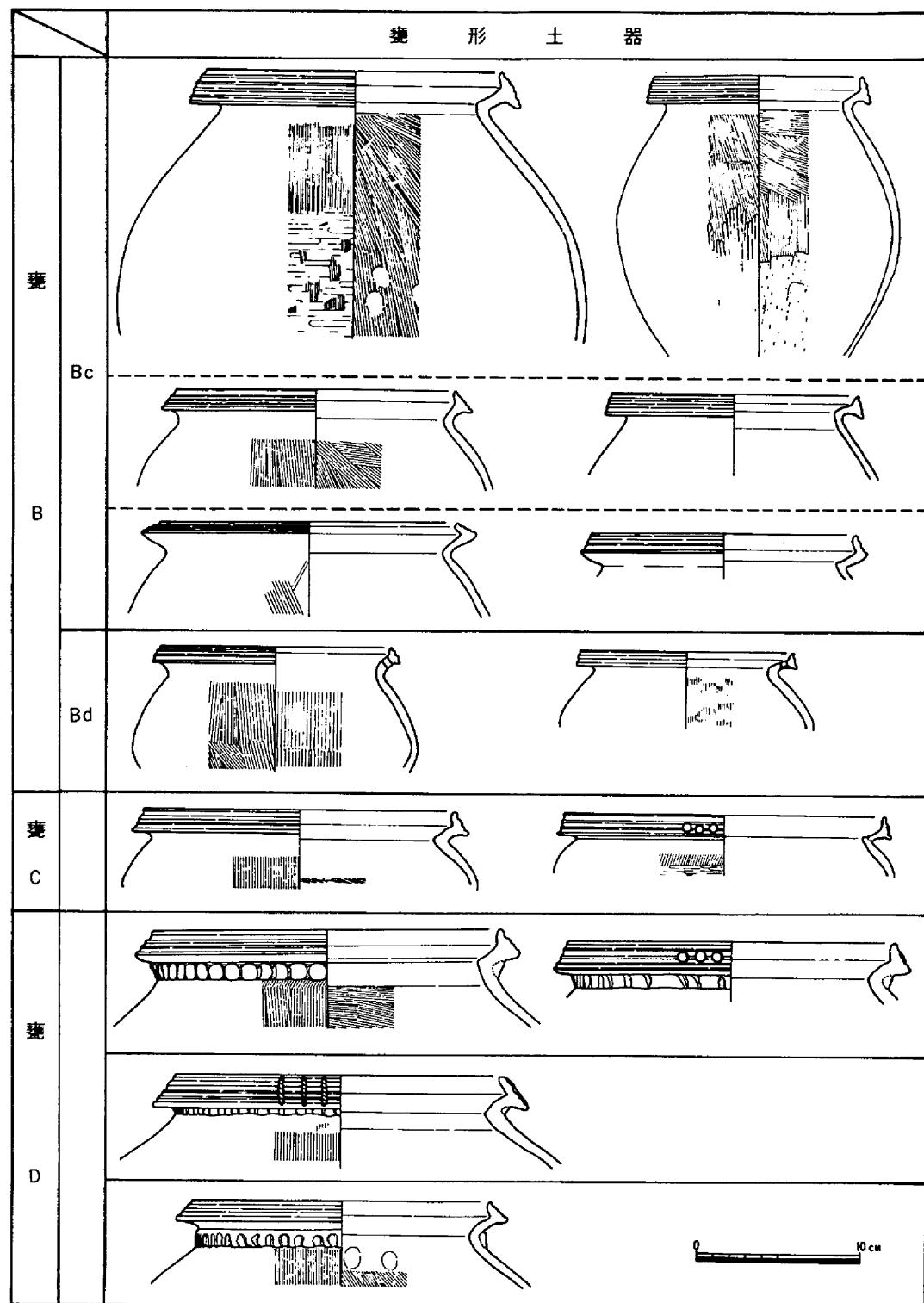
山根屋遺跡(54)



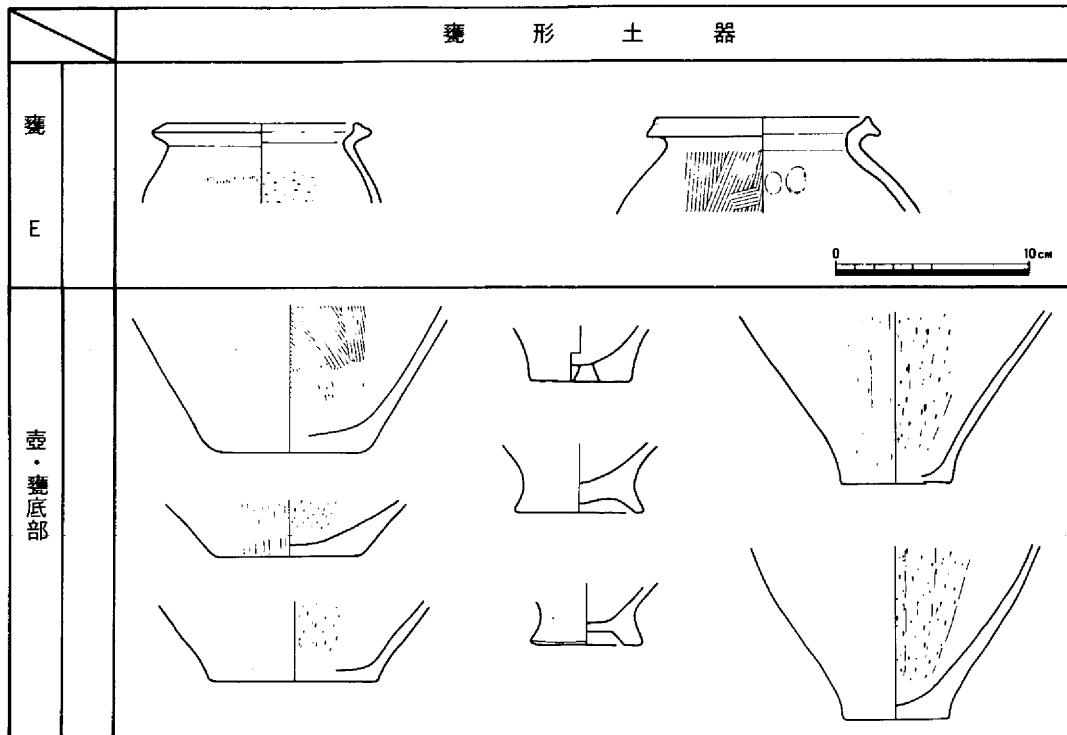
第116図 弥生式土器分類図(2)



第117図 弥生式土器分類図(3)



第118図 弥生式土器分類図(4)



第119図 弥生式土器分類図(5)

より内外面にむかって1cm内外であるが、外面は肩の沈線まで行うものもある。胴部は外面上半が刷毛目、下半は笠磨き、内面は上半が刷毛目、下半は笠削りによって仕上げられる。

壺Bc 口縁端部は上下へ拡張され、その広い端面には3～5条の凹線文がめぐるものであるが、口縁端部の形状には4種類のものが認められる。①口縁端部は上方へ著しく拡張され、口縁部は、下端部と口縁屈曲部とのヨコナデによって脹らみをもつ。ヨコナデの範囲は、口縁部屈曲部より1cm内外である。胴部は内外面とも上半は刷毛目調整、下半は外面が笠磨き、内面は笠削りがなされる。②口縁部端部は上下に著しく拡張され、その広い端面には凹線文が多くめぐる。ヨコナデの範囲は狭く、口縁部屈曲部から、内外面にむかって1cm内外である。③口縁端部は上下等しく拡張され、口縁部は屈曲部から端部までが短い。ヨコナデの範囲は、口縁屈曲部から内外面にむかって1.5cm内外である。屈曲部の内面は、ヨコナデによる面をもつものが多い。④口縁端部は上方へだけ拡張されるものであるが、他のものに比較して数は少い。

壺Bd 口縁部には蓋をつけるための紐孔があり、胴部は最大径を示す部分から、底部にむけて急激にせばまる器高の低いものである。

壺形土器C

口縁端部は上下に拡張され、端面には凹線文がめぐる。胴部は肩がはり、底部にむけて急激にせばまる、脚台がつくものと考えられる。口縁部周辺のヨコネデの範囲は、口縁屈曲部から内外面にむけて1cm内外である。

甕形土器D

口縁屈曲部に指頭圧痕、あるいは刻目のつく凸帯をめぐらすもので、肩のはったいちじく状の胴部がつく。これには口縁端部の形状によって3種類が認められる。①口縁端部は肥厚し、上方への拡張が著しく、端面に凹線文をめぐらす。口縁部周辺のヨコナデの範囲は狭い。②口縁端部は上下に著しく拡張され、凹線文をめぐらす。③口縁部はやや長く、端部は上下にほぼ等しく拡張されている。

甕形土器E

口縁部の屈曲部が丸みをもち、口縁端部はやや上下に拡張されるが、その端面に凹線文ではなく、ヨコナデによる浅い凹みが認められる。口縁部周辺のヨコナデの範囲は狭い。胴部内面は肩まで箒削りが認められる。

底部

壺・甕の底部を一括した。外面は多くが箒磨きで仕上げられ、内面も箒削りが大部分をしめる。しかし内面を刷毛目調整で仕上げているものも少量認められる。また低い脚台状の底部もかなり出土している。

鉢形土器

鉢形土器は少量しか出土しなかった。しかも小破片のため不明な点が多く、大形高杯になる可能性もある。いずれも口縁端部を内外に拡張し、その上端面と口縁部外面に、鋸歯文、あるいは波状文・格子目文などを施している。

高杯形土器

高杯形土器A

椀形を呈し、口縁端部は肥厚し水平面をもつ。端部外面には刻目がめぐる。口縁部周辺のヨコナデの範囲は狭い。内外面とも箒磨きで仕上げられる。

高杯形土器B

椀状を呈するが、口縁部は内湾している。やや肥厚する口縁端部外面には刻目がめぐる。ヨコナデは、口縁端部から外面は2cm、内面は0.5cmである。

高杯形土器C

水平にのびる口縁部をもつもので、紐孔が認められる。内面は刷毛目、外面は刷毛目の後で箒磨きをおこなっている。

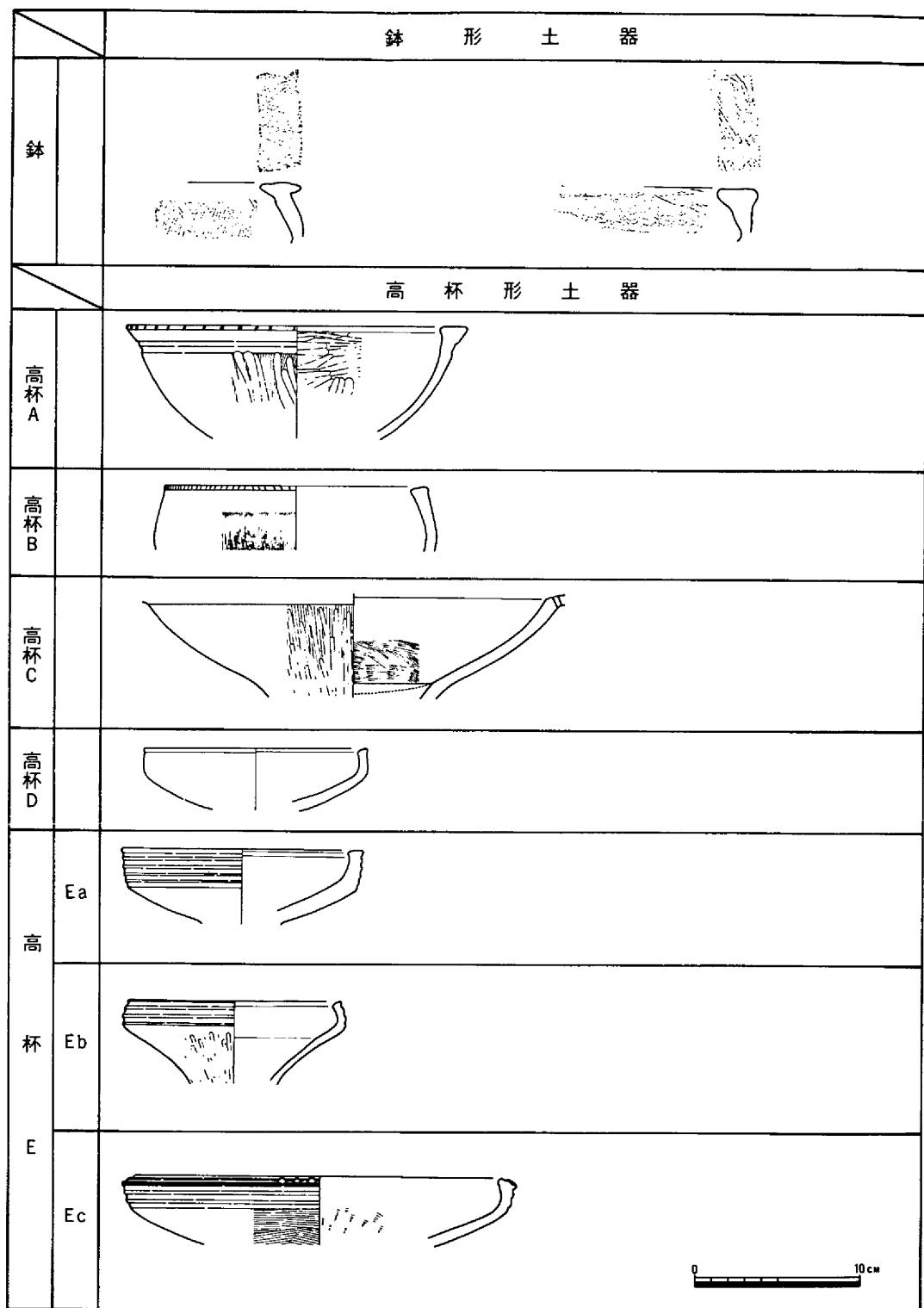
高杯形土器D

口縁部はやや内傾ぎみに立上る皿状の杯部をもつものである。口縁端部は少し外へつまみ出され、内傾する端面をつくりだしている。

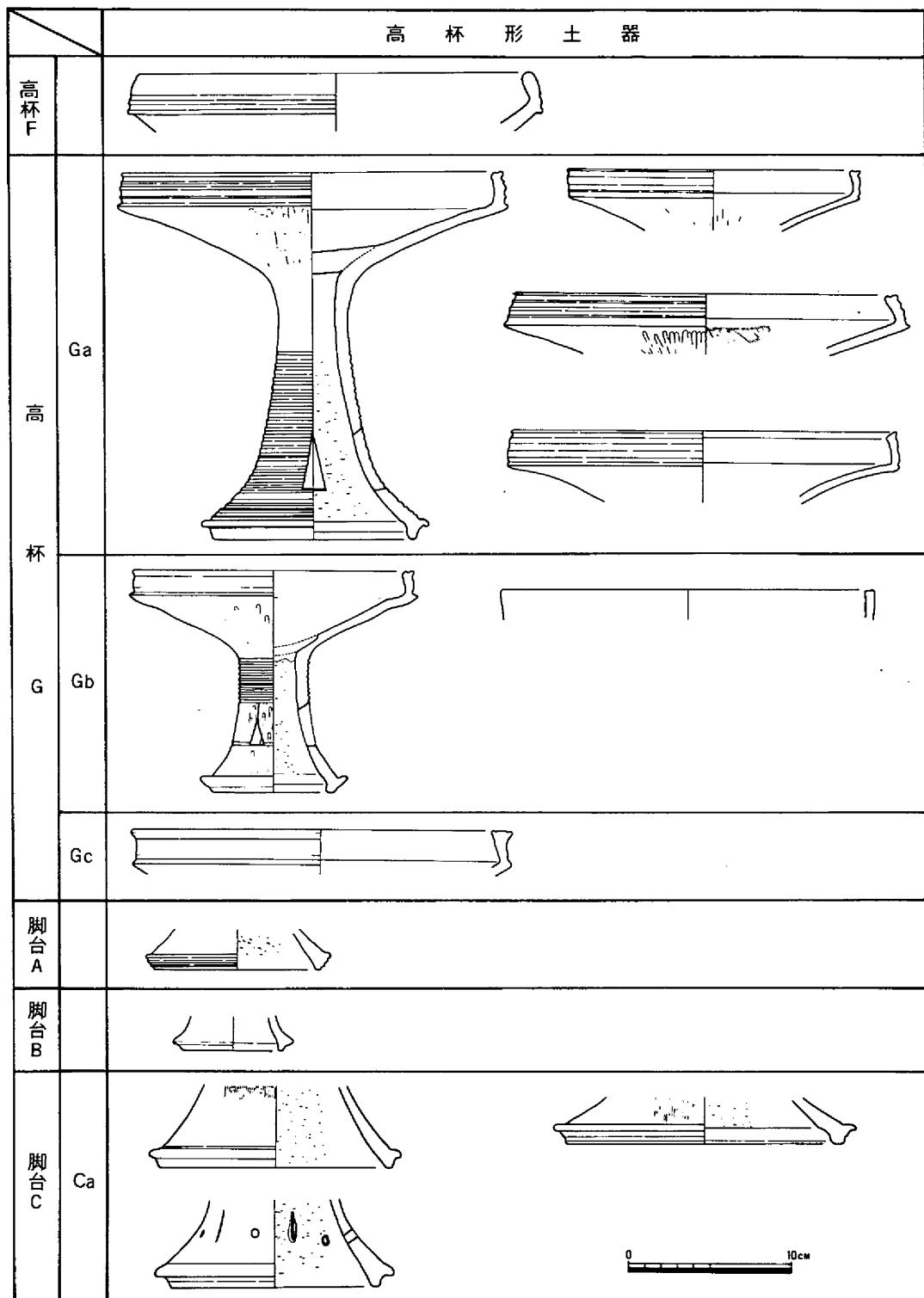
高杯形土器E

口縁部に凹線文が発達し、皿状の杯部をもつが、口縁部の形状によってさらに分類できる。

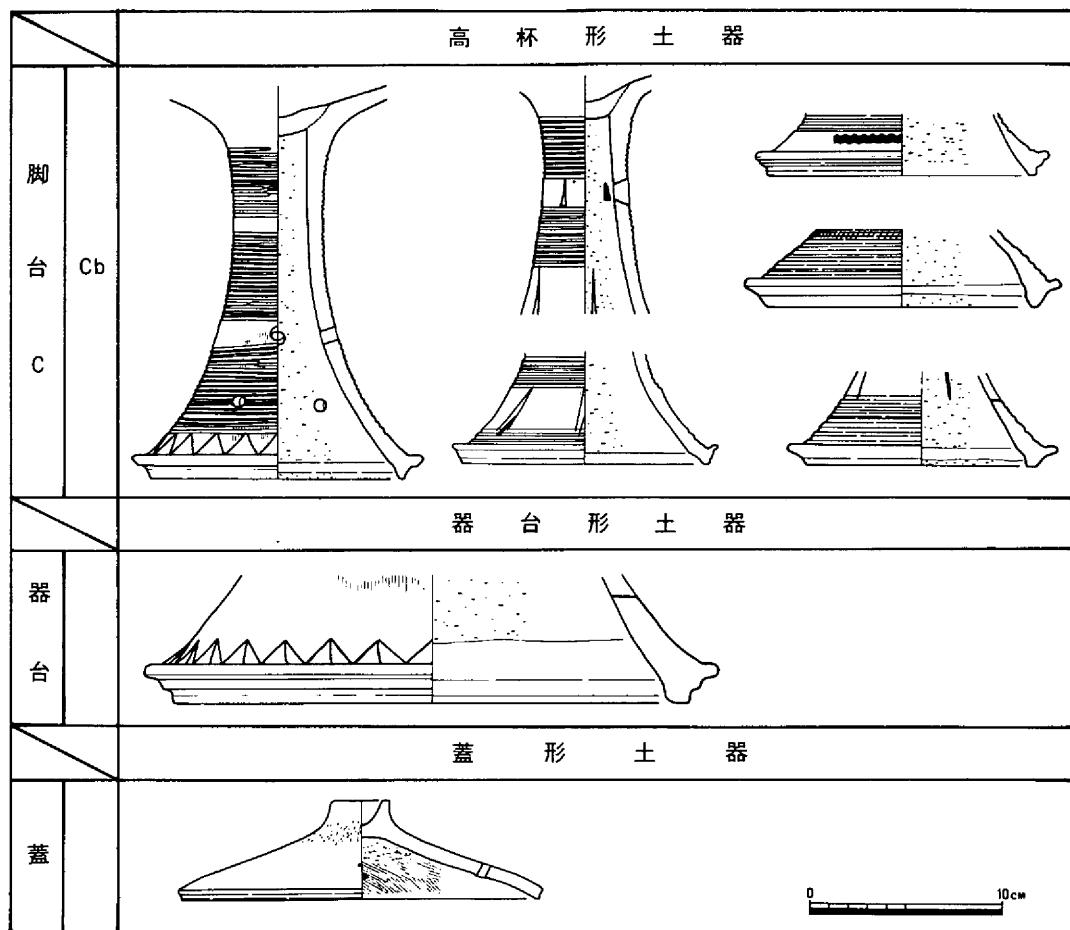
高杯Ea やや外反ぎみに立上る口縁部外面には凹線文がめぐる。口縁端部は内外に少し拡張され、水平面をもつ。ヨコナデの範囲は、外面においては凹線文のめぐる所まで、内面は口縁屈曲部ま



第120図 弥生式土器分類図(6)



第121図 弥生式土器分類図(7)



第122図 弥生式土器分類図(8)

でおこなわれている。

高杯Eb 「C」字状に内湾する口縁部をもつ。ヨコナデの範囲は口縁屈曲部以下1.5cm内外である。

高杯Ec やや外反ぎみの口縁部をもち、端部は少し肥厚し、その端面に凹線文をめぐらすものである。ヨコナデの範囲は、口縁端部から、内外面にむかって1.5cm内外である。

高杯形土器F

「く」の字形に内傾する口縁部をもつものである。口縁の屈曲部は下方へも若干つまみ出されている。口縁部外面には2条の凹線文がめぐる。

高杯形土器G

口縁部は「く」の字状に内傾、あるいはほぼ真直に立上り、皿状の杯部をもつものである。口縁端部の形状、凹線文の有無によってさらに分類できる。

高杯Ga 内傾ぎみに立上る口縁部外面に凹線文をもつものである。口縁端部上面にも凹線文をめぐらすものもある。脚台部から杯部は連続してつくられており、底部は円盤を充填している。脚台は柱状部からラッパ状にひらくもので、断面半円形を呈する沈線が多く用いられる。脚端は上下に拡張され、ヨコナデによる凹みをもつ。

高杯Gb ほぼ直に立上る口縁部をもつが、その外面には凹線文は認められず、ヨコナデによる凹凸がみられる。端部上面に凹線文をめぐらすものもある。その他はGaと異なるところはない。

高杯Gc 口縁端部が内外に拡張され、その上端面に凹線文を2条めぐらすものである。

高杯脚台A

脚端は肥厚し、その端面に3条の凹線文をめぐらしている。脚端部のヨコナデの範囲は狭く、脚端より内外面にむかって1cm以内である。内面は笠削りによって仕上げられる。

高杯脚台B

低い脚台と考えられ、端部は上下に拡張され、端面にはヨコナデによる凹みがめぐる。

高杯脚台C

柱状部からラッパ状にひらく高い脚台である。無文のものと、沈線が多く用いられるものとに分類できる。

脚台Ca 脚部に沈線文を用いないものである。透孔のないものもあるが、円形、あるいは内面にやっと達する程度の細いものが多い。脚端部は上下に拡張され、ヨコナデによる凹みをもつ。外面は刷毛目や笠磨き、内面はすべて笠削りである。

脚台Cb 高い脚台には沈線文が帯状に施され、無文部には透孔がある。脚端は上下に拡張され、その端面にはヨコナデによる凹みがめぐる。丹を塗ったものが多く、概して丁寧なつくりである。

器台形土器

器台の脚部であるが、壺の大型口縁部のうちに、器台の受部になると考えられるものがある。脚端部は上下に拡張され、端面には凹線文がめぐる。外面には刷毛目が残り、内面は笠削りで仕上げられる。

蓋形土器

口縁端面には凹線文がめぐる。つまみに近い部分は内外面とも笠削りがなされている。口縁部周辺のヨコナデの範囲は、口縁端部から内外面にむかって1cm内外である。

以上弥生式土器の分類を試みたが、甕に分類したものの中でも、壺としての可能性が強いものもある。しかし細片のため全体の形状を知ることができないことから、口縁部を中心としたため、胴部の形状や整形技法などはあまり考慮されていない。ここでは壺と甕の分類は単純に頸部の有無でおこなったものである。

II 編 年

岡山県の弥生時代中期後半の土器は、凹線文の発達によって特徴づけられる。山根屋遺跡の弥生式土器を概観するとき、ほとんどの土器に凹線文が認められる。しかし少量ではあるが、凹線文の認められないもの、あるいは凹線文が退化してしまったものなどがある。このような凹線文の有無、発展、退化はこれまでの研究によって、時期差を示すものと考えられる。このことは山根屋遺跡の弥生式土器においても例外ではないと思われ、凹線文の認められないものをⅠ期、凹線文のあるものをⅡ期、凹線文の退化したものをⅢ期とした。

Ⅰ期は壺形土器を欠くが、甕Aa・Ab・Ac、鉢形土器、高杯A・B・C・Dなどで構成される。これらの土器が純粹に凹線文をもたないものかどうかは、山根屋遺跡での出土状態では断定することはできない。甕Aa・Ab・Acなどは、戸津田遺跡(註1)や前山遺跡北斜面(註2)、菰池遺跡(註3)において凹線文のめぐるものと共に伴している。ここでは一応このような可能性を残しながら、凹線文出現以前の土器として一括し、香川県北谷遺跡(註4)、紫雲出山遺跡の紫雲出山I式(註5)、岡山県の菰池式などの時期に比定しておきたい。

Ⅱ期に属するものは、Ⅰ期のものと、甕Eをのぞいたものすべてである。しかしこのⅡ期の中でも古いグループと新しいグループとが存在すると思われる。古いグループは量が少なく、壺形土器では頸部に凹線文を残すもので、壺Aaがこれに相当する。甕形土器では口縁端部の拡張がほとんど認められない甕Baがある。高杯形土器ではEc・Ea・Ebなどであるが、これらがかならずしも同一時期とは考えられない。特に高杯においては多くの変化が認められるが、それに対応する壺・甕がよくわからない。したがって多少の時期差はあるがⅡ期の古い段階として一括しておきたい。

Ⅱ期の新しい段階のものは、壺では頸部の凹線にかわって沈線が認められるものである。壺Ab・Ac・Ad・Ae・Af・Ag・Ah、壺Bなどもこの時期と考えられる。ただし壺Agは後期の長頸壺に近いものであり、後期のものであるのか、この地域の特徴であるのか判断に苦しむものである。甕形土器では、甕Bb・Bc・Bd、甕C、甕Dなどがある。甕Bbについては広島県塩町遺跡(註6)で認められ、肩の文様などは、時期が異なるが波良浜遺跡(註7)の土器などにも類似し、広島県北東部、山陰西部を中心をもつものと考えられる。高杯形土器では、高杯F・G、脚台B・Cなどがある。これらの高杯は断面半円形の沈線で飾られるものが多く、県南のV字状を呈する断面とは異なり、広島県北東部のものに類似している。高杯は口縁部に凹線文があるもの(Ga)と、ないもの(Gb)、さらに口縁部が水平に拡張されたもの(Gc)がある。これらは時期差を示すものであるが、これに対応する壺や甕を抽出することができない。これらⅡ期の新しい時期のものは、後期的な感じがするものもあるが、仁伍式と言われている時期のものに相当するのではなかろうか。そしてⅡ期の古い段階はほぼ前山Ⅱ式に併行する時期と考えられる。

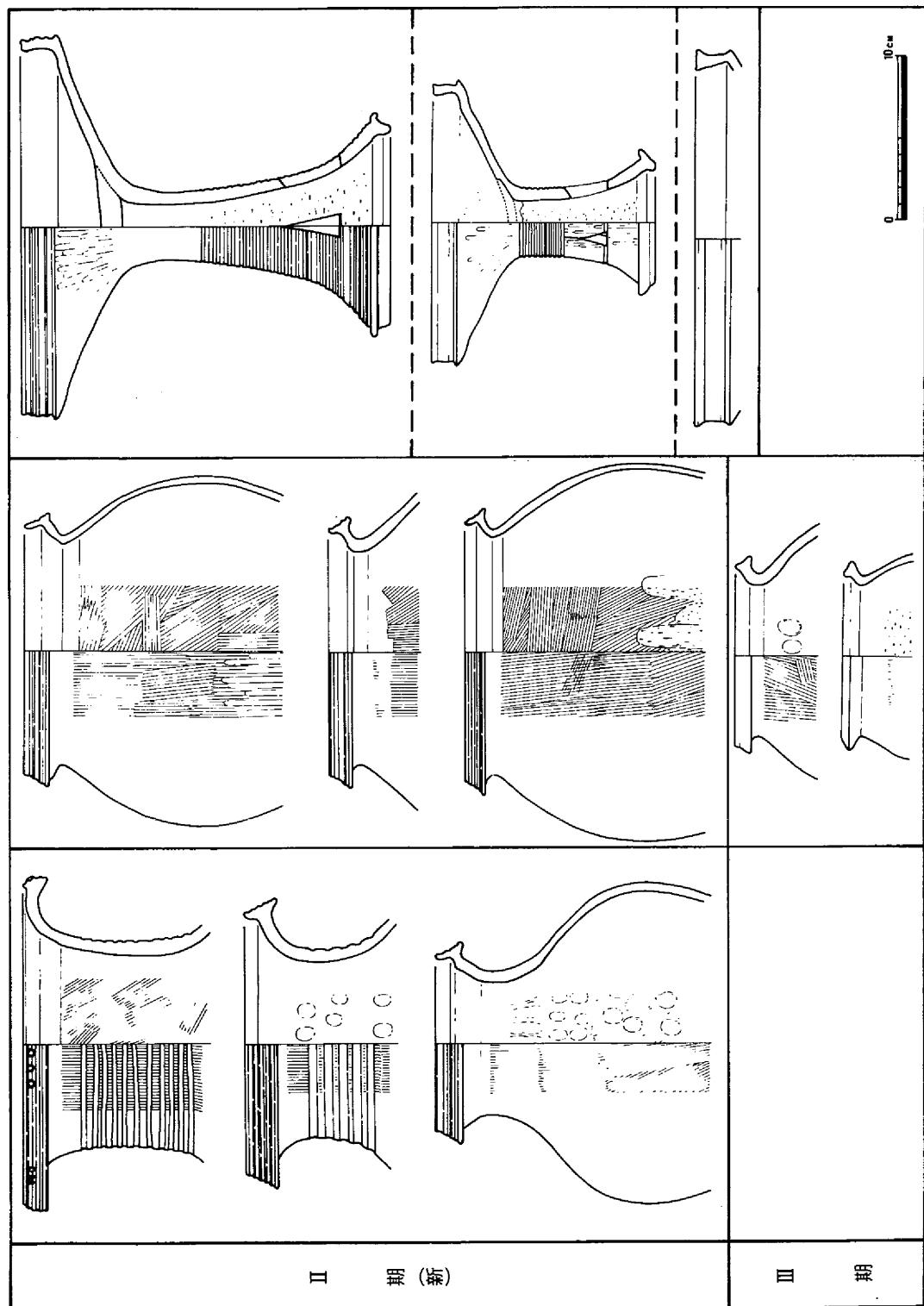
Ⅲ期は、凹線文が退化した甕Eが認められるだけである。後期の前半に比定できる。

以上山根屋遺跡の弥生式土器を3期に分類したが、出土状態が良好でないため、器種の組合せが明確でない。しかし大略の変遷はつかめたものと考えられ、今後周辺地域との詳細な比較検討がなされることによって、この地域の土器編年も完成してくるであろう。

山根屋遺跡(54)

壺形土器	罐形土器	高杯形土器	高杯形土器

山根屋遺跡(54)

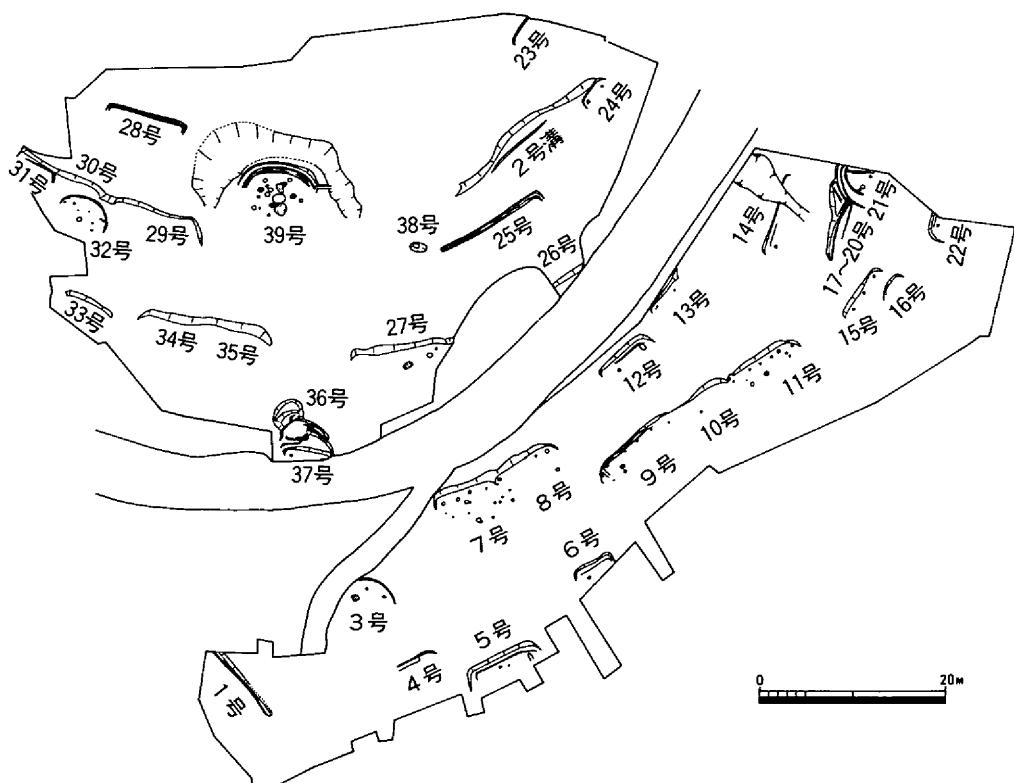


第123図 山根屋遺跡出土弥生式土器編年表

第2節 弥生時代の住居址・住居址状遺構について

山根屋遺跡において検出された住居址・住居址状遺構は37にのぼる。このうち一般的に住居址と断定できるのは4軒（3号、21号、39号、32号）であり、その他は住居址の可能性が強いものも含めて、暫定的に住居址状遺構と呼称したものである。住居址と断定したものは平面プランがほぼ円形を呈し、壁体溝、柱穴、火所、中央ピットなどが認められる。しかし住居址が急斜面に形成されているため、残存状態が悪く、住居址の構造、上屋構造などについては不明な点が多い。遺存している部分だけで判断するならば、当該時期の他遺跡での例と異なる点はないようと思われる。住居址の大きさは39号住居址以外は径が4～5mであるが、39号住居址は他の住居址に比較して大形であり、しかも周囲に溝を有し、特異な存在である。こうした集落の中に普通の住居址と大形住居址が並存する例は各地の遺跡で知られるようになり、その意義についても最近論考が多くなっている。（註8）

さて住居址状遺構としたものであるが、類似したものは山間部の丘陵上に位置する遺跡や、南部でも丘陵上にある山陽町用木山遺跡（註9）などで認められる。これらは丘陵の地形によって多少の差があり、個々の遺構についても差が認められる。山根屋遺跡の住居址状遺構では3つのタイプが認められる。



第124図 弥生時代の遺構

山根屋遺跡(54)

A類、10mに近い矩形の溝だけが認められるもので、第三紀層を整地した狭い平坦部が形成される。平坦部からは柱穴などは検出されず、住居址の壁溝と断定するには躊躇するものである。(1号、25号、28号住居址状遺構)

B類、おそらく平面プランは長方形になると推定され、柱穴が壁にそって2本～6本並ぶものである。火所をもつもの、壁溝をもつものなどがあり、住居址の可能性が強い。(7号、8号、9号、11号、12号、13号、15号、22号、24号住居址状遺構)

C類、平面プランは長方形を呈すると考えられるが、柱穴はない。27号、30号住居址状遺構では火所がある。(29号、30号、31号、33号、34号、35号、27号住居址状遺構)

A類に関しては不明な部分が多く、類例の増加をまちたい。B類は用木山遺跡(註10)において長方形長屋状住居址とされたものに類似する。山根屋遺跡においても、低い部分への土盛は急斜面のため広くすることができず、結局横へ広くならざるを得ないものと考えられる。このB類は火所をもつものなどがあり、倉庫と考えるには問題が残る。さらにこの平坦部が直接床面であったと考えられ、形状は異なるが円形を呈する住居址と同じものではなかろうか。もしこれらの円形、方形住居址が同時期のものとすれば、なぜこのような構造の差ができるのであろうか。これは地形によって規定されるのではないだろうか。今までこの方形の住居址は丘陵上の斜面発見例が多く、山根屋遺跡でも、ゆるやかな斜面、とりわけ床面が半分以上地山にのっているものはすべて円形であり、方形ではす、すと、わずかに床面がのるものばかりである。このことは急斜面においては、円形よりは方形がつくりやすいのではなかろうか。低い方に土を盛る場合、広くすれば膨大な土量になるところから横に長くなると考えられる。そして同じレベルで長いテラスをつくっておき、その上に数軒の住居址を作ったのであろう。

C類についても火所などがあるところから住居址と考えられなくもないが、柱穴の存在が明確でなく、現在の資料では断定できないと思われる。

集落には集団の生活を保障してゆくさまざまな機能を有した遺構が存在する。それらは基本的には住居址、倉庫、作業小屋などであろう。したがってA～C類の中にもこうした機能的な差によってつくりだされたものも存在すると思われる。

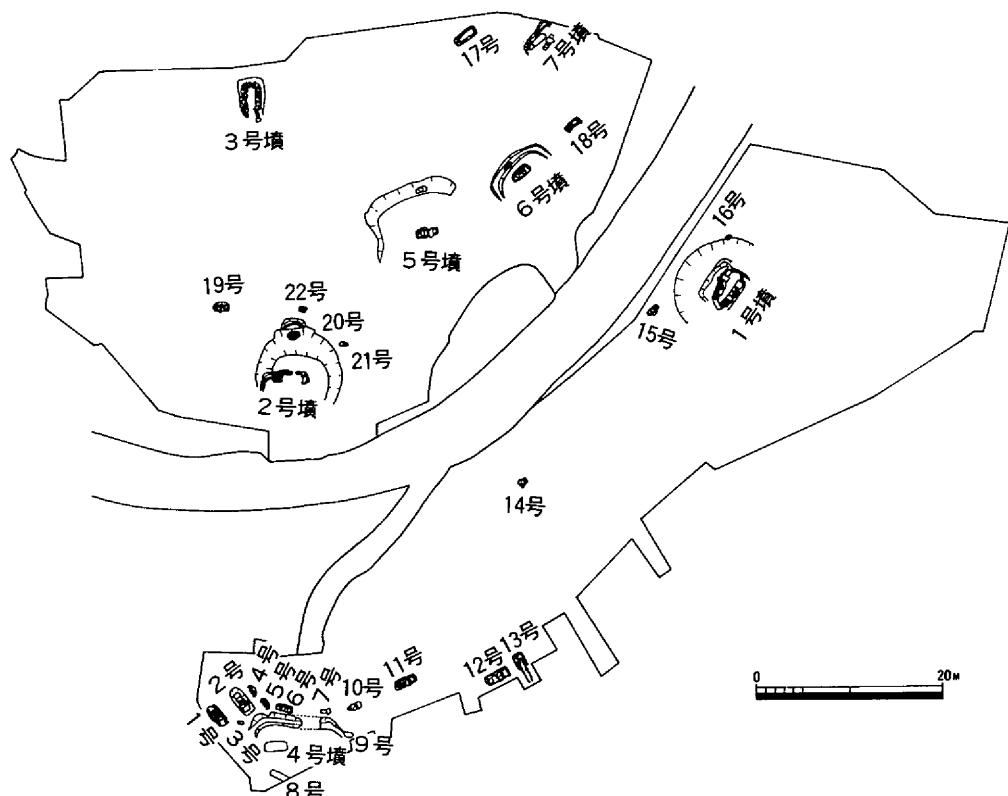
次に集落の立地について考えてみよう。

山根屋遺跡は神代川に面した丘陵斜面に形成されているが、沖積地では遺跡は全く確認されていない。このことは現在の山際まで氾濫原であったことが、遺跡を丘陵上に形成させた要因として考えられる。つまり高地性集落(註11)などのように政治的な要因から丘陵上の不便な所に集落を形成したものではなく、地理的条件が大きかったものと思われる。このような斜面の集落を支えた生産基盤は何であったのだろうか。この時期の主要な生産が稻作であり、この地域でもそうであるとすれば、いったいどこに水田を作ったのであろうか。両側にある谷水田にしても狭小であり、むしろ丘陵平坦部での畑作の方が可能性が高いと考えられる。これと関連して石包丁が少ないことがあげられ、同時期の南部の遺跡に比較して異質であることが指摘できるのである。

第3節 古墳時代前期の墳墓について

古墳時代前期の墳墓とした19基（1号～13号、17号～18号、4号墳～7号墳）について、その築造時期を問題にするとき、時期を推定するに必要な遺物を出土した墳墓は僅かしかない。したがってまず、遺物の出土した墳墓の時期を決定し、それとの関係、類似性などから遺物をもたない墳墓についても論及してみたい。

2号墓は箱式石棺で、墓壇内の破碎された土師器と、棺内の刀子2点が出土している。刀子については、小型であるという以外に特徴はなく、時期を決定することはできない。土師器については、量は多くないが時期を推察するに可能なものが出土している。これらの土師器を概観すると、ほとんど丹塗りであり、器種も高杯、器台、丸底壺と、集落から出土する様相とは異なっている。したがってこれらの土器は送葬義礼に使用された後に、墓壇内に破碎して埋められたものと推察される。こうした土器を集落の土器と直接比較するには問題はあるが、大略においては異なるところはないと考えられる。1は丸い椀状の杯部と、短小な支柱に屈折して広がる脚部をもつ高杯であるが、岡山県内では川入遺跡、上東遺跡で出土している。川入遺跡では溝314（註12）に見られるが、杯部の形状が多少



第125図 古墳時代の墳墓

異なる。上東遺跡では才の元P—1(註13)に認められ、才の町II=酒津式に編年されている。畿内では上田町遺跡、纏向遺跡に類例が認められる。上田町遺跡(註14)では第II層から出土している。纏向遺跡(註15)では高杯C₃と分類されており、纏向3式に特徴的なものとされている。この纏向3式には、山根屋遺跡2号墓の4なども認められる。纏向3式はほぼ上田町遺跡II層の時期に近いものであり、これらはほぼ庄内式(註16)に比定できるであろう。県内では上東遺跡<1977年>(註17)の報告書において下田所式とされたものに相当するのではなかろうか。

以上の類例から2号墓はほぼ庄内式の時期に築造されたものと推察される。

4号墳は2号墳に近い位置に存在し、周溝の中より土師器が少量出土している。この土師器も日常的な土器ではなく、小形の祭祀用土器と言えるようなものも認められる。これらの土器は甕の口縁部、高杯の脚台部の形状からほぼ庄内式の時期と考えられるものである。したがって4号墳は2号墓に相前後する時期に築造されたものであろう。

さらにこれら4号墳、2号墓とその周辺に存在する墳墓との関係はどうであろうか。1号墓から13号墓は近接した位置にあり、一群を形成しているように思われる。この中で2号墓と同じ流紋岩の板石を使用して箱式石棺や石蓋土壙をつくったものは、1号墓、6号墓、12号墓である。特に1号墓、12号墓は、2号墓との類似点が多く、同時代のものと考えられる。いずれにしても1号墓～13号墓、4号墳など的一群はほぼ4世紀代に築造されたものではなかろうか。

さて、これらの一群に対して5号墳～7号墳、17号墓、18号墓などの一群が認められる。これを仮に前者をA群とし後者をB群とする。B群の墳墓では土器が出土していないため、築造の時期を詳細に検討することができないが、5号墳や7号墳から出土している鉄製品によってその大略の時期を知ることができる。

5号墳では第1主体部から鉄鎌、第2主体部から鉄斧、鉈、鉄鎌などが出土した。これらの鉄製品の中でも鉄鎌などは先端部が湾曲していることなどから、5世紀後半から6世紀初頭のものと考えられる。さらに須恵器が副葬されていないこと、主体部が箱式石棺であることなどからも妥当なことと思われる。このことは7号墳出土の鉄製品などからもうかがわれる。したがってB群はほぼ5世紀代に築造されたものと推察され、A群からB群へと変遷していったものと考えられる。

かかる山根屋遺跡の墳墓群と神代川流域の前期古墳との関係を概観してみよう。まず下流の下神代地域には特殊器台が出土した古坊遺跡(註18)の土壙墓群が存在する。この土壙墓群は下神代地域の古墳形成の先駆的なものであるが、これに続く墳墓は実態が不明である。上流の矢田地域では西江遺跡(註19)において土壙墓、方形台状墓が特殊器台を伴って出土している。これに続く墳墓には光坊寺古墳(註20)、横田遺跡(註21)の墳墓などが認められる。古坊遺跡や西江遺跡の墳墓は山根屋遺跡の墳墓に先行するものと考えられるが、これら神代川流域の自然地形によって区画されたそれぞれの地域に、古墳に先行する墳墓群が弥生後期から形成されてゆくのであろう。こうした基盤の上に古墳は成立すると考えられるが、山根屋遺跡では光坊寺古墳のような墳丘を有したものは認められず、小さな低墳丘墓や箱式石棺が、横穴式石室墳の出現まで続くのである。

第4節 古墳時代後期の墳墓について

古墳時代後期の墳墓は横穴式石室を内部主体とする古墳三基と箱式石棺墓・石蓋土墳墓である。箱式石棺墓については副葬品を欠くものが多いが、型式から後期の構築と判断できるものがみられる。箱式石棺墓は側石のあり方と石材の二点から五つの型式に分類することが可能である。第1型式は扁平で整った形の石材を使用し、側石上端を削えるもの。第2型式は板状でやや不整形な石を使用し、側石上端は削えずに凹凸をなすもの。第3型式は板状でやや不整形な石を使用するが、側石上端の凹部に小石を積み上端を削えるもの。第4型式はかなり厚い不整な石を使用し、側壁が二段積みになるもの。第5型式は第4型式と同様の石を使用しているが、側壁が二段積みになっていないものである。これら五型式のうち、第1型式から第4型式までは一つの変化の流れとして、捉えることができるようであるが、より具体的な資料から、これら五型式が単なる型式的な相違にとどまらず、時期差をも示しうるものであるかどうかを検討したい。第1型式の2号墓からは前期に属する古式土師器の出土をみており、また12号墓副葬遺物も前期の可能性が強いため、第1型式は前期と判断される。第3型式の5号墳、7号墳からは共に鉄器の出土があり、中期それも後半の時期が考えられる。第4型式の20号墓は2号墳の周溝埋土中に構築されており、後期のものである。第5型式の15号墓からは須恵器の出土をみており後期と判断される。このような時期判断と先にあげた型式変化の流れ（石材の粗雑化・構築の乱雑化）を考え合わせれば、これらの型式は時期差をも示すと考えられる。したがって、第1型式は前期、第2・第3型式は中期、第4・第5型式は後期とおおまかに比定しうる。このことから、14号墓・15号墓・19号墓・20号墓・22号墓を後期の箱式石棺墓と考える。

石蓋土墳墓については、16号墓が1号墳の周溝埋土を切って構築されており後期と判断され、また21号墓も2号墳との位置関係が16号墓と1号墳の関係に類似することから後期と判断される。

1号墳・2号墳・3号墳の建造時期についてその先後関係を考えてみたい。三古墳に共通する遺物として須恵器がある。神代川流域出土の須恵器蓋杯は大きく三期に分けることが可能であると考える。ここでは詳しく述べる余裕をもたないが、かつて指摘されたように（註22）回転ヘラ削り技法の有無によって二つの系譜の存在が考えられ、この二系譜の共伴関係から、第1期は回転ヘラ削り技法の蓋杯のみがみられる時期、第2期は二系譜が混在する時期、第3期はヘラ削り技法をもたない蓋杯のみがみられる時期と概括される。第1期の例としては哲西町野田畠1号墳出土品（註23）がある。第2期は横穴式石室古墳の盛行期にあたり、神代川流域に所在する多くの古墳がこの時期に築造されている。それらの古墳の初期副葬品が例として挙げられる。神郷町門前中屋古墳出土品（註24）等がある。第3期の例としては神郷町塚谷古墳（註25）・追三方塚古墳（註26）出土品がある。この編年に山根屋古墳群出土品を対比させると、1号墳・2号墳出土品は第2期に、3号墳は第3期に対応する。1号墳と2号墳についてさらに詳細な比較を行うと、1号墳の杯（第98図3）は受部がやや長く内湾しつつ伸び、器体が扁平であるのに対し、2号墳の杯（第104図2）は受部が短くつまみ出し気味に突出して上面が平坦になり、器体はかなり丸味をもち、2号墳の方がより古い傾向をもつ。その

山根屋遺跡(54)

他1号墳出土品の多くは2号墳出土品より新しい傾向をもつようであるが、甕一点(第99図10)のみ口縁部の形態や口頸部外面のカキ目調整が2号墳出土品と類似し、鋭さにおいて2号墳にまさり、むしろ2号墳出土甕より先行する可能性がある。いずれも出土点数が少ないと出土状態が不完全なため確定的とはいえないが、須恵器については2号墳がもっとも古く、それに接近して1号墳が続き、3号墳はかなり新しくなるものと考えられる。

次に石室について考える。2号墳の石室は、基底部は箱式石棺のように板状の石を立て、その上に小形の石を小口積みにする築造法をもっており、平面プランは不明であるが、石室床面積は狭く、神郷町安信3号墳(註27)とよく類似する。三古墳の中ではもっとも古いものと考えられる。1号墳の石室は、北西側壁の基底部にはやはり板状の石を立てているが、その上に積まれた石は2号墳にくらべてかなり大きく、小口積みだけではなく横口積みもみられ、また袖部には縦長に石を置くなど2号墳よりは明らかに新しい傾向をもっている。平面プランは右片袖式であり、定式化した石室の一つと考えられる。3号墳の石室は、まずその石材がかなり丸味をもったものであり、1号墳や2号墳の角張ったものとは異なる。また石の積み方にもかなり横口積みがみられる。東側壁の玄室と羨道の境として立てられた縦長の石は1号墳の袖石が変化したものと考えられる。これらのことから三古墳中もっとも新しいものである。

以上のような出土遺物と石室の検討から、三古墳の築造は2号墳・1号墳・3号墳の順になされたと判断でき、しいて絶対年代をあてはめるとすれば、2号墳は六世紀中葉、1号墳は六世紀後葉、3号墳は六世紀末頃になるのではないかと考える。

遺跡内における古墳時代後期の墳墓の分布を時間の流れに従ってながめてみると、まず遺跡中央部西半に2号墳が築造され、続いて中央部東半に1号墳が、最後に遺跡上端部西半に3号墳が築造され、箱式石棺墓・石蓋土壙墓の多くは2号墳・1号墳の周辺に各古墳築造後に構築されている。ただし14号墓・15号墓の二基については他の石棺墓とは性格を異にするものとして分離して考える必要がある。15号墓出土の須恵器は編年からは2号墳出土品と併行するかあるいは若干先行する可能性があり、1号墳よりは先行すると考えられる。14号墓もその立地と副葬品をもつことから15号墓と時期的に近接した構築と考えられ、これら二基は2号墳築造後の構築となる他の石棺墓よりは一段階古いものである。このような墳墓のあり方から、古墳についてはそれらを一つの系列の時間的に連続した造墓活動の結果と推定しうる。

二基の石棺墓と他の石棺墓の相違は時期的なものもそうであるが、それ以上に重要なのは古墳との位置関係である。二基の石棺墓は遺跡内においては独立した形で存在しているが、他の石棺墓は古墳周辺に従属するような形で存在している。二基の石棺墓は2号墳に前後する時期のものであり、その規模から考えて2号墳と同一の系列の被葬者とは考えられない。石棺の被葬者は古墳の被葬者とは階層的に異なる者であったように思うが、自己の墓域をもつことに独立性を認めることができる。古墳時代中期における5号墳・6号墳に対する17号墓や18号墓のような存在ではないかと考える。これに対して他の石棺墓は古墳の周辺に構築されており、古墳を中心とした一定の墓域内に存在するような印象を与え、その被葬者と古墳の被葬者との間の密接な関係を考えさせる。その規模の差からすれ

ば、それは従属的なものと考えられるが、これらの石棺墓が構築される時には1号墳ないしは3号墳での埋葬が行われていたと考えられることから、一つの系列の中の一個人に対する従属と考えるべきではなかろうか。二基の石棺墓の被葬者と他の石棺墓の被葬者はその石棺の規模や構造の類似から、同階層の者さらには同一系列の者である可能性が考えられる。もしそうだとすれば、二基の石棺墓の構築後他の石棺墓の構築にいたるまで(2号墳築造前後)に、支配権力の強化・支配構造の変革がなされたのではないかと考えられる。しかしこのような変革は急激になされたのではなく、二基の石棺の規模の小ささからすでにこの頃から開始され、さらには中期にまで遡って始まっており、時代と共に徐々に進行しつつあったものが、決定的になったのが2号墳築造前後ではなかったかと考えられる。

註

- 註1 高橋護「戸津田遺跡出土の弥生式土器」『遺跡』26号 1957年
- 註2 鎌木義昌「岡山県郷内村前山の弥生式遺跡」『吉備考古』第80号 1950年
鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成』資料編2 1961年
- 註3 鎌木義昌「山陽地方II」『弥生式土器集成』本編1 1964年
- 註4 前田雄三、松本豊胤「詫間町北谷出土の弥生式土器」『香川県考古学会報告』1 1961年
- 註5 小林行雄『紫雲出』 1964年
- 註6 潮見浩「山陽地方I」『弥生式土器集成』本編1 1964年
- 註7 門脇俊彦「波来浜遺跡発掘調査報告書」江津市教育委員会 1973年
- 註8 最近では考古学研究会第23回総会の研究報告と討議によって問題が深化されてきている。
- 註9 神原英郎「用木山遺跡」岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(4) 岡山県山陽町教育委員会 1977年
- 註10 註9に同じ
- 註11 小野忠熙「島田川流域の遺跡」『島田川』 1953年
間壁忠彦「高地性集落の謎」『古代の日本』4 1970年
- 春成秀爾「「倭国乱」の歴史的意義」『日本史を学ぶ』1 1975年
- 註12 正岡陸夫他「川入遺跡の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査』II 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1974年
- 註13 伊藤晃、柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査』II・岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1974年
- 註14 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高校研究報告』 1965年
原口正三「上田町遺跡出土の土器」『土師式土器集成』本編1 1971年
- 註15 石野博信、関川尚功「經向」奈良県桜井市教育委員会 1976年
- 註16 田中琢「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号 1965年
- 註17 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(16) 岡山県教育委員会 1977年
- 註18 井上弘・竹田勝「下神代の遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(15) 岡山県教育委員会 1977年
- 註19 正岡陸夫・田仲満雄「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(20) 岡山県教育委員会 1977年
- 註20 高畠知功・福田正継「光坊寺古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(15) 岡山県教育委員会 1977年
- 註21 中国縦貫自動車道路建設に伴い発掘調査を実施した。土壙墓や、低墳丘を有する古墳が検出されている。
- 註22 竹田勝・井上弘「安信古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(14) 岡山県教育委員会 1977年
- 註23 高畠知功・福田正継「野田畠遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(21) 岡山県教育委員会 1977年
- 註24 井上弘「門前中屋古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(21) 岡山県教育委員会 1977年
- 註25 正岡睦夫・二宮治夫「塚谷古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(14) 岡山県教育委員会 1977年
- 註26 竹田勝「追三方塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(15) 岡山県教育委員会 1977年
- 註27 註22に同じ

図版1



上神代地域の航空写真

図版2



1. 遺跡遠景（南より）



2. 遺跡遠景（林道より下側の調査終了後）



1. 上神代の風景（南から上流を望む）



2. 上神代の風景（山根屋遺跡より下流を望む）

図版4



1. 3号住居址



2. 21号住居址

図版5



1. 39号住居址



2. 32号住居址

図版6



1. 1号住居址状遺構



2. 28号住居址状遺構

図版 7



1. 7・8号住居址状遺構 (西より)



2. 7・8号住居址状遺構 (南より)

図版8



1. 14号住居址状遺構



2. 15号住居址状遺構

図版9



1. 12号住居址状遺構

2. 9～11号住居址状遺構



図版10



1. 17~20号住居址状遺構



2. 22号住居址状遺構



1. 23号住居址状遺構



2. 27号住居址状遺構

図版12



1. 29~31号住居址状遺構



2. 30・31号住居址状遺構



1. 33号住居址状遺構



2. 34・35号住居址状遺構（手前が35号）

図版14



1. 2号溝状遺構



2. 2号溝状遺構遺物出土状態



1. 39号住居址出土遺物

図版16



1. 12号住居址状遺構出土遺物

図版17



1. 2号溝状遺構出土遺（1）

図版18



1. 2号溝状遺構出土遺物（2）



1. 1号墓



2. 1号墓蓋石除去

图版20



1. 2号墓



2. 2号墓蓋石除去



1. 2号墓石棺内出土遺物



2. 2号墓墓壙内出土遺物

図版22



1. 3号墓



2. 3号墓蓋石除去



1. 4号墓



2. 4号墓蓋石除去

図版24



1. 5号墓



2. 5号墓蓋石除去



1. 6号墓



2. 6号墓蓋石除去

図版26



1. 2号墓周辺の墳墓群（東から）



2. 2号墓周辺の墳墓群（北から）



1. 7号墓



2. 7号墓蓋石除去

図版28



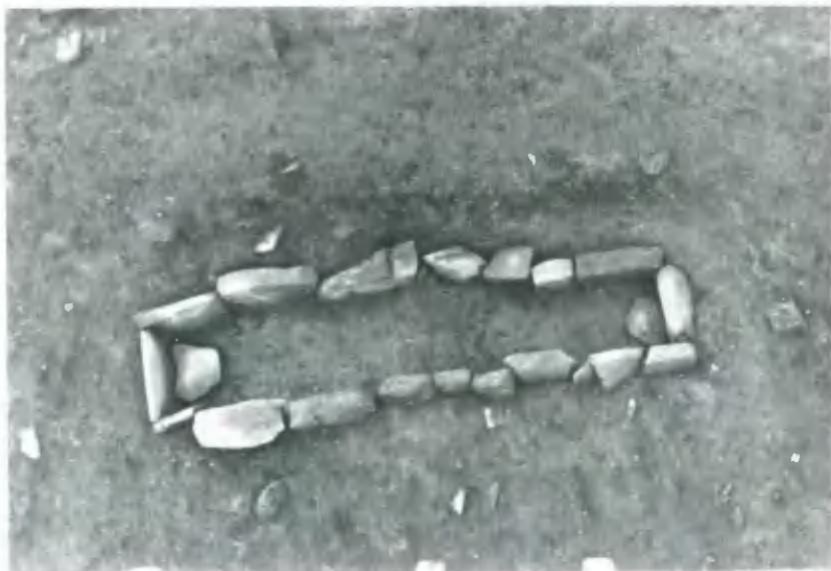
1. 10号墓



2. 4号墳周辺の全景 (北より)



1. 11号墓



2. 11号墓蓋石除去

図版30



1. 12号墓



2. 12号墓蓋石除去



3. 12号墓出土遺物



1. 13号墓断面



2. 13号墓



3. 13号墓出土遺物

図版32



1. 13号墓遺物出土状態



2. 17号墓



1. 18号墓



2. 18号墓蓋石除去

图版34



1. 4号墳全景



2. 4号墳周溝内出土遺物

図版35



1. 4号墳主体部

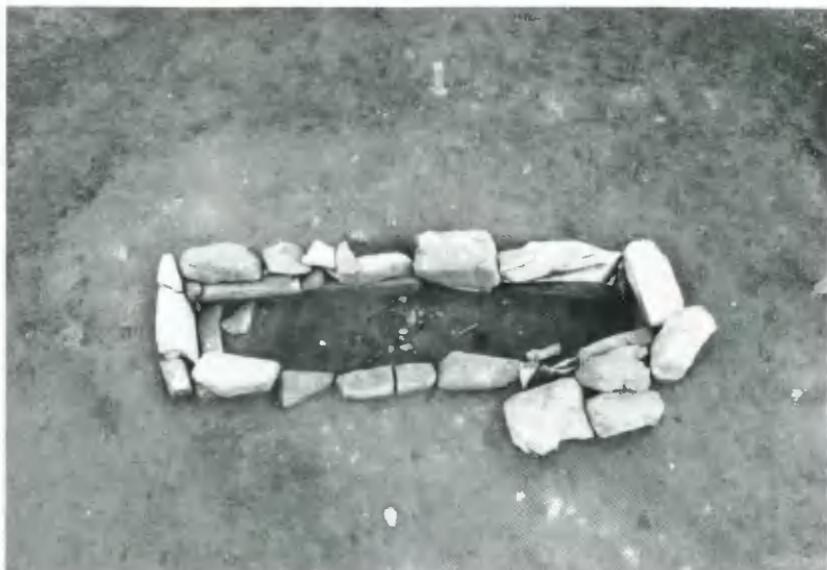


2. 4号墳主体部横断面

図版36



1. 5号墳全景（西より）



1. 5号墳第1主体部蓋石除去



2. 第1主体部出土遺物

図版38



1. 5号墳第2主体部



2. 第2主体部出土遺物



1. 6号墳検出状態



2. 6号墳全景

図版40



1. 6号墳第1主体部蓋石除去



2. 6号墳第2主体部



1. 6号墳第2主体部蓋石除去



2. 7号墳全景

図版42



1. 7号填棺外遺物出土状態



2. 7号填蓋石除去



1. 7号墳蓋石除去

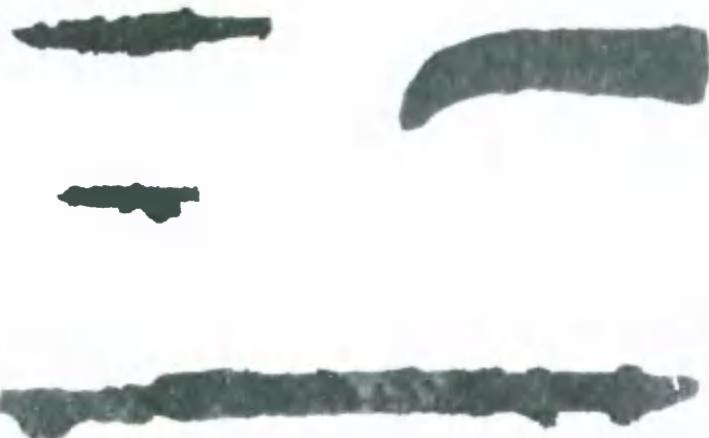


2. 7号墳第2主体部遺物出土状態

図版44



1. 7号墳棺外遺物



2. 7号墳第2主体部出土遺物



1. 14号墓



2. 14号墓棺外遺物

图版46



1. 15号墓



2. 15号墓盖石除去



3. 15号墓出土遗物



1. 16号墓



2. 16号墓蓋石除去

図版48



1. 19号墓



2. 19号墓蓋石除去



1. 20号墓



2. 20号墓蓋石除去

図版50



1. 22号墓



2. 22号墓蓋石除去



1. 1号墳全景（南東より）



2. 1号墳全景（北西より）

図版52



1. 1号墳周溝・墳丘断面（南西より）



2. 1号墳羨道部閉塞石検出状況（北西より）



1. 1号墳横穴式石室北西側壁（東より）



2. 1号墳横穴式石室南東側壁（北より）

図版54



2. 1号墳横穴式石室羨道閉塞状況（北東より）



2. 1号墳玄室内遺物出土状況（南東より）



1. 1号墳墓壙断面（北東より）



2. 1号墳墓壙断面（南西より）

図版56



1. 1号墳墓壇全景（北東より）



2. 1号墳横穴式石室北西側壁裏側（北西より）



1. 2号墳全景（北より）



2. 2号墳全景（西より）

図版58



1. 2号墳南北断面と20号墓



2. 2号墳東西断面



1. 2号墳墳丘除去後の全景



2. 2号墳閉塞石（石室内から）

図版60



1. 2号墳墓道



2. 2号墳石室内的遺物出土状態



1. 3号墳全景（南より）



2. 3号墳主軸断面（奥壁後方）

図版62



1. 3号墳横断面



2. 3号墳敷石除去



1. 3号墳石室内



2. 3号墳実測風景

図版64



1



2



3



10



9



8

1. 1号墳出土須恵器



2



2



1



1



2



6



8



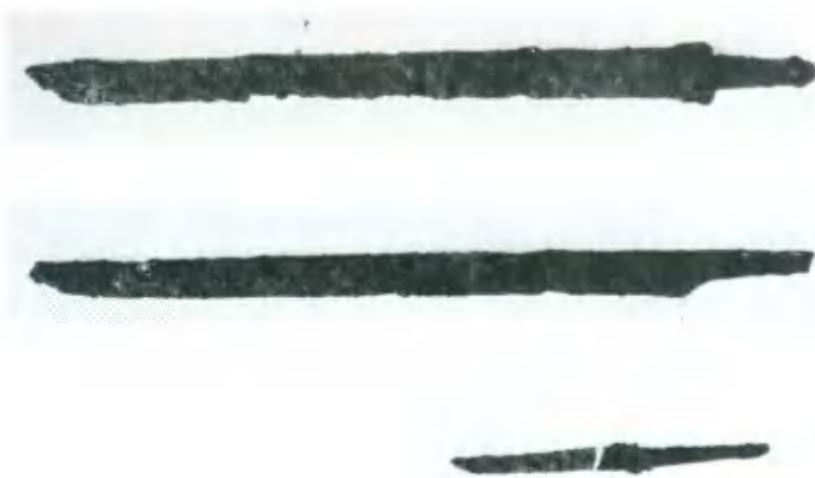
8



6

1. 2号墳(左上2・右下6)・15号墳(左中1・2)・3号墳(その他)出土須恵器

図版66



1. 1号墳出土の鉄器



2. 1号墳出土遺物

3. 3号墳出土遺物



1. 23号墓（火葬墓）



2. 23号墓蓋石除去

図版68



1. 23号墓蔵骨器取り上げ後



2. 23号墓蔵骨器



1. 2号住居址状遺構

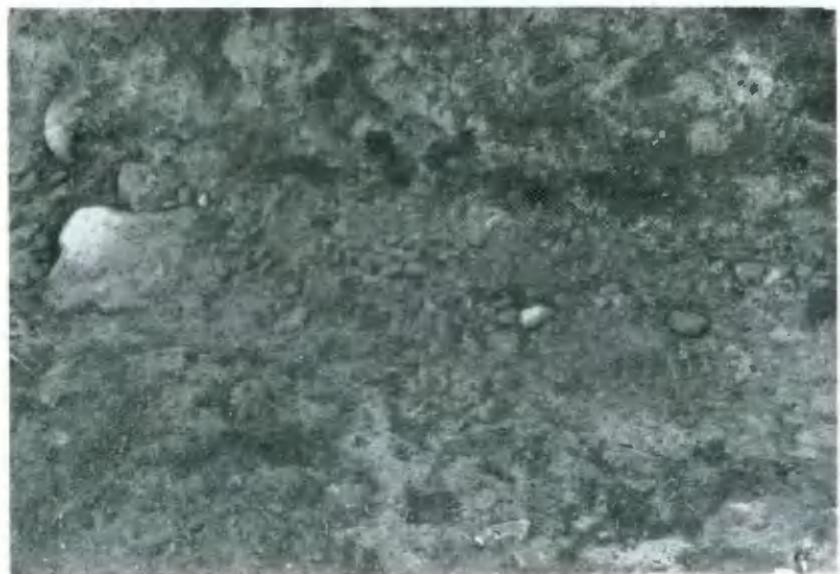


2. 2号古道

図版70



1. 1号古道



2. 1号古道敷石



1. 蔽骨器



2. 発掘調査終了後の遺跡遠景（南より）

図版72



1. 作業風景



2. 調査参加者

四日市古墳 (70)

例　　言

遺跡名	四日市古墳(よっかいいちこふん)
所在地	岡山県阿哲郡哲西町畠木
発掘調査期間	昭和51年4月19日(月)～7月9日(金)
整理期間	昭和52年9月21日(火)～12月20日(火)
発掘調査担当者	下澤公明・浅倉秀昭
報告書担当	〃　　〃
図面縮尺	遺物は3分の1、他は個々にスケールを付した。
遺物保管場所	岡山県教育庁文化課西古松分室
第1図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭52中複、第200号	

発掘調査期間中は下記の人々の協力を得た。

黒瀬義雄・藤村利雄・胡重寿美雄・実原慧喜雄・石迫操・村上整・西川道証・藤村吉久・原田忠一・西川英一・児玉熊雄・藤枝ヒサヨ・藤村艶子・藤間登美子・西川愛子・藤村富枝・佐々木ツチエ・胡重富貴子・土屋民子

日誌抄

4月19日(月)～22日(木) 清水谷遺跡と併行して調査に入る。清水谷遺跡より数名の作業員を除き、立木伐採をおこなう。

5月1日(土)～8日(土) 墳丘測量・写真撮影をおこなう。

5月10日(月)～15日(土) 磁北に沿い十文字の土層観察用土手を残し、表土剝ぎをおこなう。

5月17日(月)～22日(土) 一部において石室の掘り方を確認するが、盜掘によりかなりいたんでいる。北側部分に浅い周溝を検出する。

5月24日(月)～29日(土) 石室掘り方確認と墳端検出作業

5月31日(月)～5日(土) 石室掘り方および盜掘壙掘り上げ後、写真撮影

6月7日(月)～12日(土) 土層観察用土手を残し、墳丘排土作業

6月14日(月)～19日(土) 土層観察用土手写真撮影

7月8日(水)～9日(金) 墳丘下検出の柱穴、土層観察用土手の実測を終了し、調査を完了する。

本文目次

例 言

日誌抄

I 古墳の位置と概要.....	155
II 発掘調査.....	157
墳丘下の遺構.....	159
III まとめにかえて.....	159

図 目 次

第1図 四日市古墳周辺遺跡分布図.....	155
第2図 四日市古墳位置図.....	156
第3図 四日市古墳墳丘・断面図.....	157
第4図 墳丘下の遺構.....	158

図 版 目 次

図版 1—1 四日市古墳遠影(南より)

2 " "

図版 2—1 四日市古墳(南より)

2 " "(北より)

図版 3—1 南—北土層断面

2 "

図版 4—1 東—西土層断面

2 "

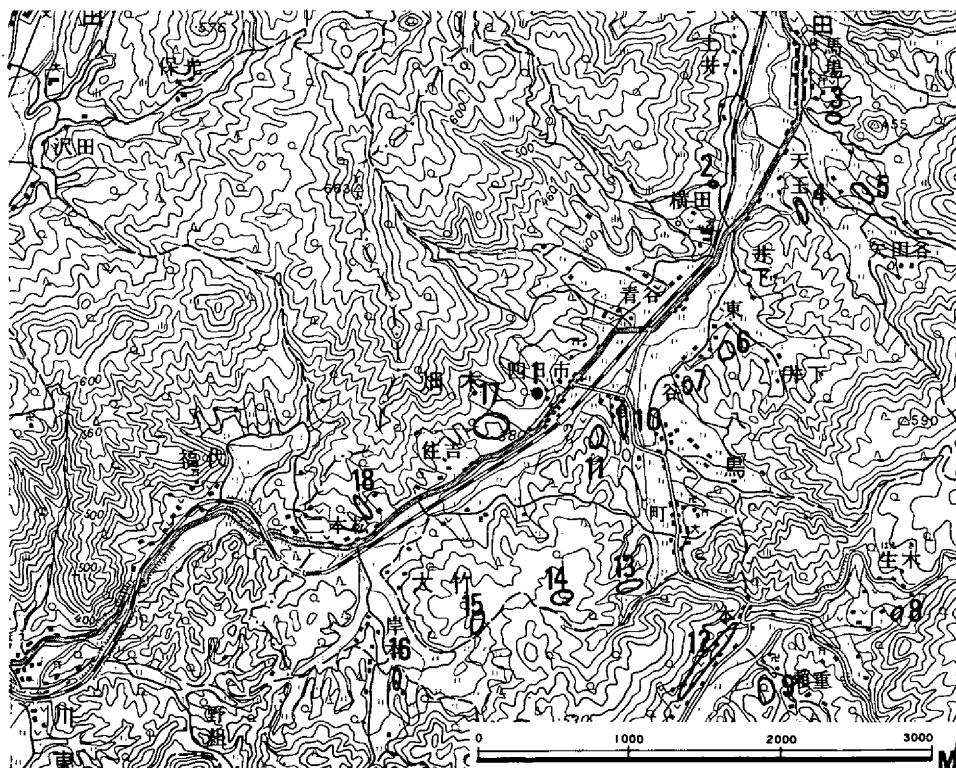
図版 5—1 墳丘及び石室掘り方

2 墳丘下遺構

I 古墳の位置と概要

岡山県阿哲郡哲西町畠木に所在する。神代川に東西に張り出す第3紀層の小さな舌状の尾根部分に位置する。尾根頂部はなだらかな平坦部状となり、東に行くにつれて傾斜を強くする、その先端部近くに墳丘をつくる。哲西町内において最も広い沖積地を形成する野馳地区を望むことができる地点である。

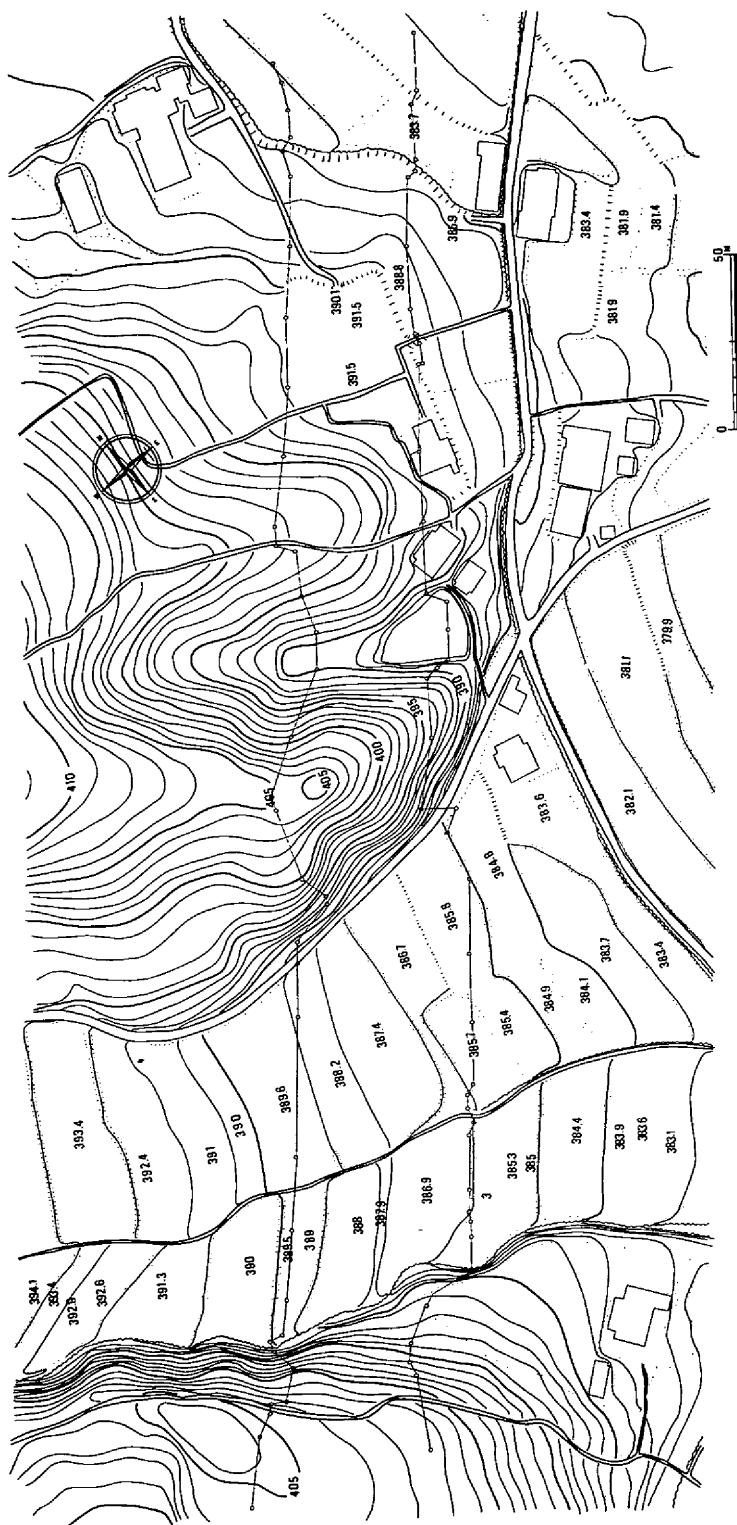
古墳は、墳頂部に盗掘痕がみられ、旧地権者の話によれば、多くの遺物と石材が持ち出されたとのことである。したがって、かなりの部分にわたって内部が荒されていることが予想された。



第1図 四日市古墳周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|------------|
| 1. 四日市古墳 | 6. 塚の段古墳群 | 11. 鳴木山古墳群 | 16. 岸本古墳群 |
| 2. 横田東古墳群 | 7. 茶筌田古墳群 | 12. 日の本古墳群 | 17. 住吉古墳群 |
| 3. 武内古墳群 | 8. 林古墳群 | 13. 小釜谷古墳群 | 18. 塚の峯古墳群 |
| 4. 天王奥古墳群 | 9. 賴重古墳群 | 14. 上室古墳群 | |
| 5. 室ヶ畠古墳群 | 10. 鳴木山東古墳群 | 15. 岸本東古墳群 | |

四日市古墳(70)

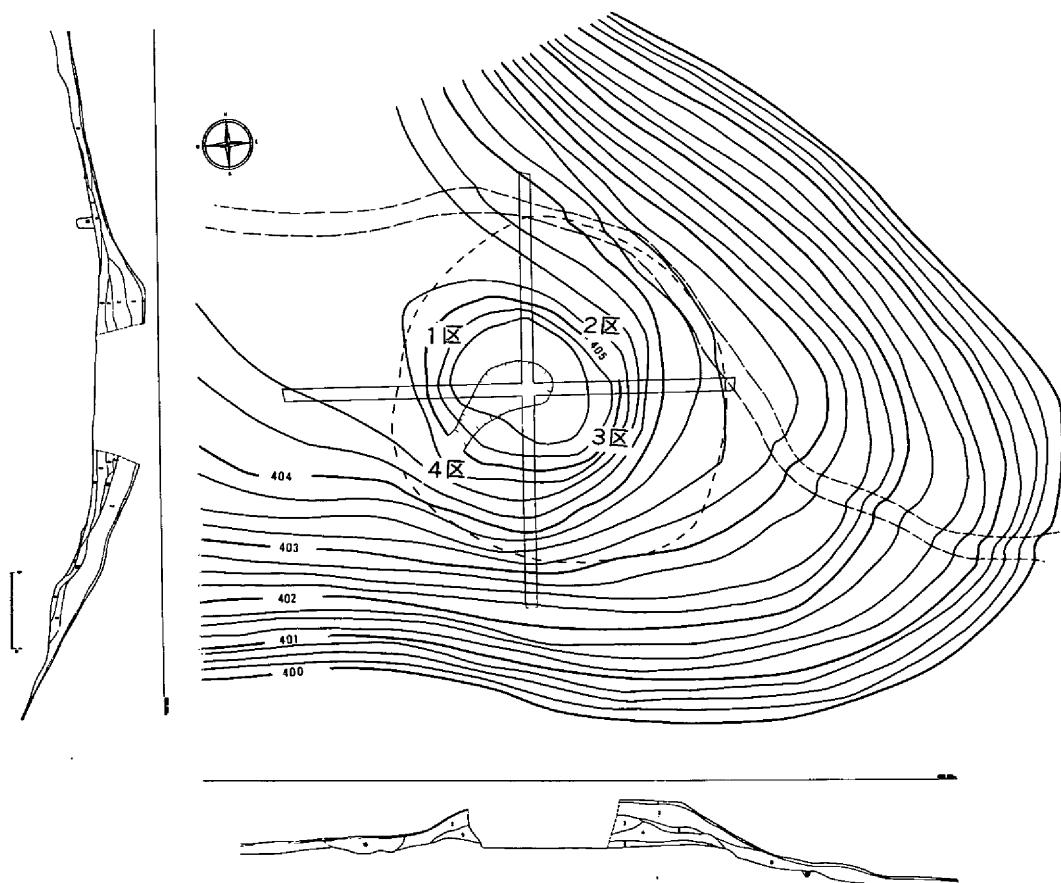


第2圖 四日市古墳位置圖

II 発掘調査

既に指適した如く、墳頂部から4区にかけて盗掘痕がみられており、その深さはほぼ第3紀層の面まで達しているようであった。盗掘時に石材が持ち出されたということから、石材を用いた内部主体を想定し磁北に沿い、2本の土層観察用土堤を残しながら調査を開始する。

墳頂より約20cm掘り下げた所で1区部分において石室の掘り方と考えられるのを認め、その面にお



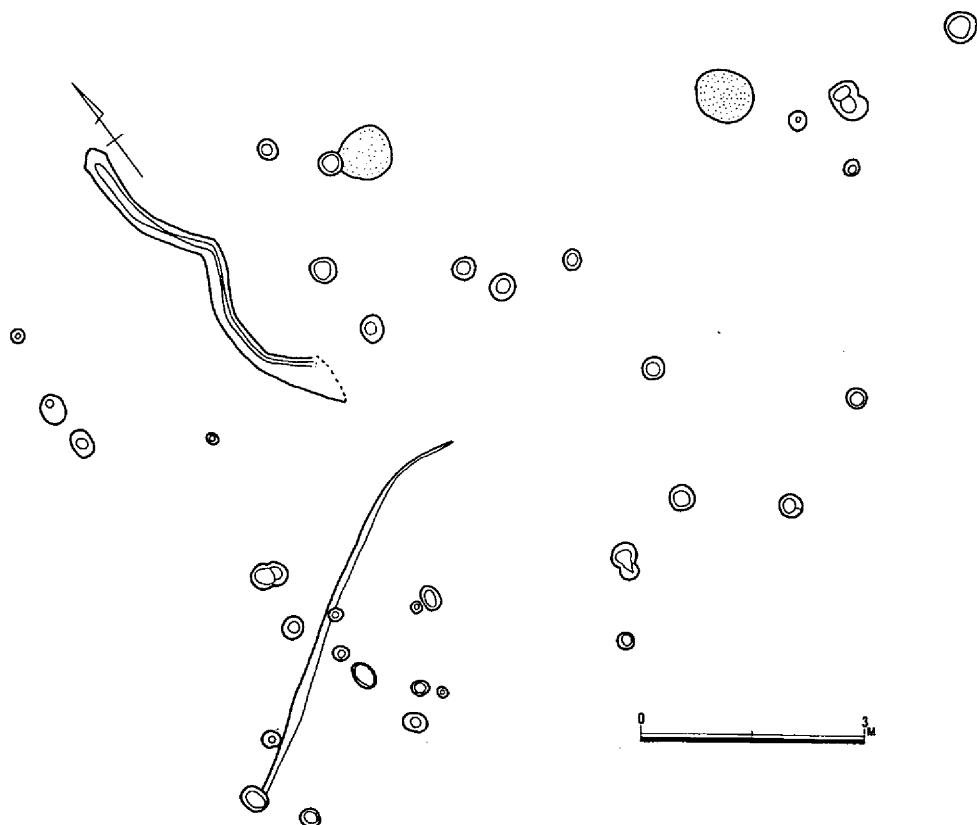
- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1. 表土 | 9. 地山ブロック |
| 2. 茶褐色土層（地山ブロックを含む） | 10. 茶褐色土層（黑色ブロックを含む） |
| 3. 茶褐色土層（地山ブロック・黒色ブロックを含む） | 11. 茶褐色土層（地山ブロックを多く含む） |
| 4. 褐色粘質土層（地山ブロックを多く含む） | 12. 褐色粘質土層（地山ブロックを含む） |
| 5. 黒色粘質土層（地山ブロックを含む） | 13. 褐色土層（弥生期の柱穴） |
| 6. 灰褐色土層 | 14. 溝 |
| 7. 灰褐色土層（地山ブロックを含む） | 15. 暗茶褐色土層（周溝） |
| 8. 茶褐色土層 | |

第3図 墳丘断面図

四日市古墳(70)

いて一応全体の掘り方を把握するため精査をおこなったが、盗掘によりかなり荒らされている為全体プランをつかむことはできなかった。このことから、この部分を除く他について、盗掘痕を掘り上げることとした。盗掘痕は、第3紀層上面に堆積する黒色土層（旧地表？）まで達していたが、この黒色土層上面に石材が遺存していた。石室掘り方は、盗掘により明確に出来なかつたが、掘り方の認められた部分から推定するならば、長軸4m10cm、短軸3m30cmをほぼ測り、方向は北東に向くものと考えられる。

墳丘基底部は南北9m50cm、東西9mを測る高さ20cmほどの円形の台部を造り、その上に現状で75cmほどの盛土をおこなっている。3区および4区にかけては、1m～2mほどのフラット面を設けているが、4区中ごろからしだいに斜面に向かって流れでゆく。周溝は、西土層断面に示した如く1区と4区にかけて、幅1m80cm、長さ3mに渡って存在する。



第4図 墳丘下遺構

墳丘下の遺構

墳丘を完全に取り除いた後検出された遺構は、20本以上の柱穴と焼土、炭の入った円形土壙2個及び溝状遺構である。遺物は、弥生後期前半のものが数点認められたにすぎない。柱穴は、直径22m～30mの1群と10cm前後の1群に分けられるが、いずれも住居址関係のものと考えられる。円形土壙は、墳丘直下ではなく、墳丘周辺に位置する。直径70cm、深さ10cmを測り炭が多量に含まれている。しばしば古墳の周辺にこのような炭の入った円形土壙が見られることから、この種のものと同類とするならば、当古墳に伴うことがいえるであろう。

Ⅲ まとめにかえて

当古墳は、野馳の沖積地を望む尾根先端部に一基のみ存在し、同一尾根上においては墳丘は認められなかった。出土遺物からして大略6世紀後半と想定できるが、図示可能な状態では検出されなかった。この時期においては、当地域で円墳が単独で営まれていることは極くめずらしく、他が群を形成していることからすれば注目される。

盗掘により内部主体の構造や内容について十分な調査ができなかつたため具体的な比較検討ができなかつた。しかしながら同じ中国縦貫自動車道路により発掘調査された、塚の峯古墳群・横田東古墳群・西江遺跡における安信丘腹部調査区の古墳群等の資料的な集積が重ねられており周辺部分からの研究により、四日市古墳の位置付けも次第に明らかになってくるものと考えるのである。

墳丘下の遺構についてそのほとんどが柱穴であり、出土遺物から弥生後期前半に伴うものと考えられる。これらの柱穴は住居地を構成するものであると考えられるが、具体的な形で柱穴の組み合せを把握することはできなかつた。ただ、尾根北西方向に向ってやや広い平坦部を形成していることから、より奥に集落が営まれていることがうかがえるのである。

図版 1



1-1 四日市古墳遠影（南より）



1-2 四日市古墳遠影（南より）

図版2



2-1 四日市古墳（南より）



2-2 四日市古墳（北より）

図版3



3-1 南北土層断面



3-2 南北土層断面

図版4



4-1 東西土層断面



4-2 東西土層断面

図版5



5-1 土質及び石室堀り方



5-2 填丘下遺構

し みず だに
清 水 谷 遺 跡 (71)

例 言

遺 踪 名 清水谷遺跡（しみずだにいせき）

所 在 地 岡山県阿哲郡哲西町住吉

発掘調査期間 昭和51年3月10日（水）～同7月3日（土）

発掘調査面積 I区—508m²・II区—863m²・III区—627m²

発掘調査担当者 下澤公明・浅倉秀昭・友成誠司

報告書作成期間 昭和52年9月21日（水）～同12月20日（火）

報告書担当者 下澤公明・浅倉秀昭

図 縮 尺 遺物は3分の1、他は個々にスケールを付した。

遺物・図面保管場所 岡山県教育庁文化課西古松分室

第1図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50.000分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭52中複、第200号

発掘調査期間中は下記の人々の協力を得た。

黒雀義雄・藤村利夫・胡重寿美雄・実原慧喜雄・石追操・村上整・西川道証・藤村吉久・原田忠一・西川英一・児玉熊雄・藤枝ヒサヨ・藤村艶子・藤間登美子・西川愛子・藤村富枝・佐々木ツチエ・胡重富貴子・土屋民子。

本文目次

例 言

第1章 調査の概要.....	167
第1節 遺跡の位置.....	167
第2節 調査の概要.....	168
第3節 日誌抄.....	168
第2章 発掘調査.....	171
第1節 I区の調査.....	171
第2節 II区の調査.....	171
第3節 III区の調査.....	174
第4節 出土遺物.....	184
1 II区出土遺物.....	184
2 III区出土遺物.....	184
まとめにかえて.....	186

図 目 次

第1図 清水谷遺跡周辺遺跡分布図.....	167
第2図 地形図.....	170
第3図 I区遺構図.....	172
第4図 I区東西土層断面図.....	173
第5図 I区南北土層断面図.....	173
第6図 II区遺構図.....	175
第7図 II区南北土層断面図.....	176
第8図 II区東西土層断面図.....	176
第9図 II区近世墓.....	177
第10図 II区近世墓.....	178
第11図 III区トレンチ設定図.....	179
第12図 III区トレンチ断面図.....	180
第13図 III区遺構図.....	181
第14図 III区東西土層断面図.....	182
第15図 III区南北土層断面図.....	182
第16図 III区包含層平面・垂直分布図.....	183

清水谷遺跡(71)

第17図 分銅形土製品	185
第18図 銅鐸形土製品	188
第19図 出土遺物	189
第20図 出土遺物	190
第21図 出土遺物	191
第22図 出土遺物	192

図版目次

図版 1—1 清水谷遺跡遠景(北より)

2 " " (南より)

図版 2—1 " " (東より)

2 " " (" ")

図版 3—1 I区東西トレンチ(東より)

2 I区南北トレンチ(南より)

図版 4—1 I区遺構検出状態(西より)

2 I区遺構掘り上げ(西より)

図版 5—1 III区包含層排土状態

2 III区南北土層断面

図版 6—1 III区包含層排土状態

2 III区東西土層断面

図版 7—1 II区全景(南より)

2 III区全景(西より)

図版 8—1 III区包含層排土状態

2 III区包含層排土状態

図版 9—1 銅鐸形土製品出土状態

2 " " "

図版10—1 " " "

2 " " "

図版11—1 II区近世墓

2 "

図版12—1 "

2 "

清 水 谷 遺 跡 (71)

図版13 銅鐸形土製品

図版14 III区出土遺物

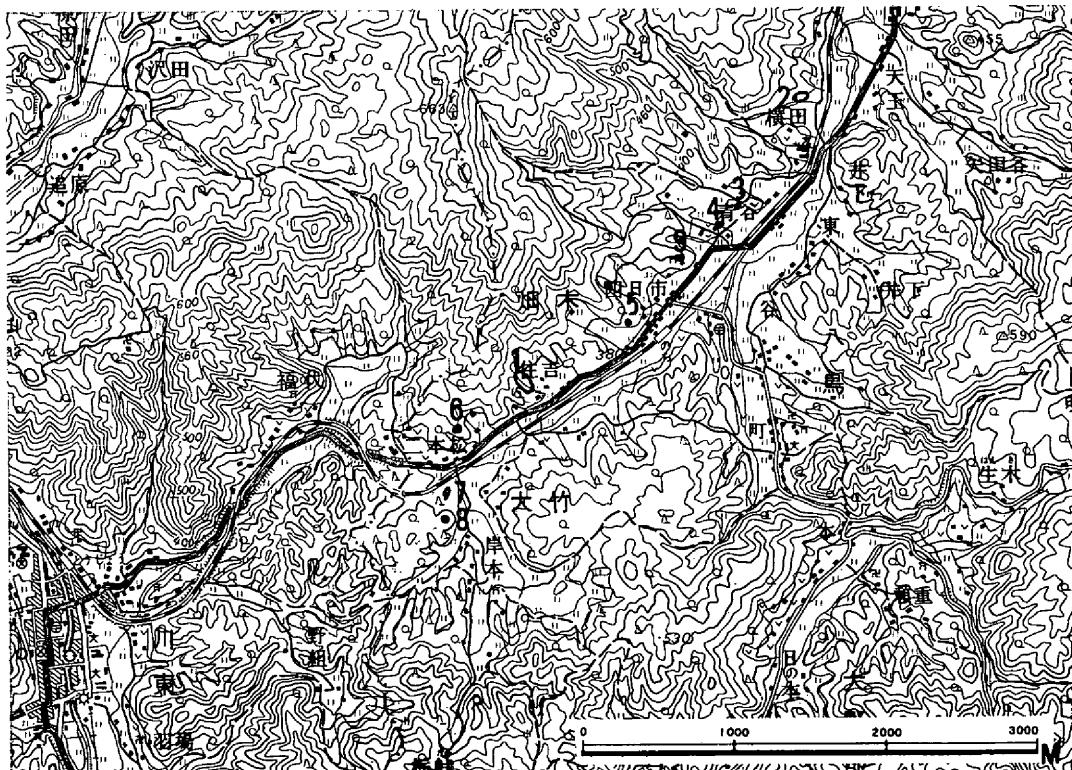
図版15 II区・III区出土遺物

図版16 近世墓出土遺物

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置

岡山県阿哲郡哲西町住吉に所在する。遺跡は神代川が西流し、北西から南東へ張り出す舌状の丘陵上にある。標高395mの等高線より南東斜面に向けてなだらかに移行してゆき、同方向に形成された幅約100mの谷水田に達する。このような状態からして清水谷遺跡は標高395m～39cmの等高線の丘陵部と神代川によって形成された沖積地の水田までのなだらかな斜面によって構成される。斜面先端



第1図 清水谷遺跡周辺遺跡分布図

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| 1. 清水谷遺跡 | 4. 忠田山遺跡 | 7. 岸本下遺跡 |
| 2. 横田東古墳群 | 5. 四日市古墳 | 8. 岸本城址 |
| 3. 大倉遺跡 | 6. 塚の峯遺跡 | 9. 御供川遺跡 |

清水谷遺跡(71)

部の高さは標高382mほどで、標高約380mで水田が広がって行く。

地勢の状態からすれば、同様に縦貫道関係で調査された野田畠遺跡・塚の峯遺跡などからすれば条件的にすぐれていることがいえよう。特に西斜面においては、現在畑になっているがかなりの量の遺物が表採される。

弥生前期の遺物を出土する西江遺跡は5km、横田東古墳群2.7km、岸本下遺跡へは1kmほどの距離に所在する。中期には、野田畠遺跡6.5km、西江遺跡、二野遺跡4km、大倉遺跡1.8km、家坂遺跡3.2kmなどが調査されている。後期に入ると神代川沿いに張り出す第3紀層の舌状丘陵上においては、かならずといってよいほどその存在が知られる。

第2節 調査の概要

遺跡は丘陵部となだらかな丘陵裾部によって形成されている。当初の調査対象地はSTA 19+20～STA 20+50の丘陵裾部であった。調査時においてその地形的状況から、遺構が存在するものと考えられ、さらに用地外ではあるがこの丘陵に沿って80mほど谷を登った丘陵斜面に住居址の断面が露出しているのが認められた。

調査は遺跡の地形的条件によりI区一丘陵部・II区一丘陵裾部・III区一町道から谷水田までとした。I区は、トレンチによる調査をおこない柱穴および住居址、土壌等が確認された。その遺存の状態はよくなく、柱穴においては、そのまとまりを把握できなかった。II区は、包含層・柱穴・近世墓が確認され、柱穴群は近世墓と時期的に大差ないものと考えられ、それ以外の遺構はL字状に残された溝状遺構である。包含層は用地北端に存在し、黒色土上面より縄文晩期～弥生前期の土器片を出土している。III区は、その2分の1ほどが宅地となっており、第3紀層が露出している状況であり、トレンチによる確認においても遺構は認められなかった。残りの東側部分については中世の柱穴群および弥生中期の包含層が確認された。この包含層から銅鐸形土製品・分銅形土製品を検出している。

第3節 日誌抄

3月10日（水）～11日（木）土井城址の調査が完了していないため、男作業員による調査開始となった。遺跡周辺のあとかたづけのあと、全景写真の撮影。

3月15日（月）19日（金）

工事用道路部分のトレンチ調査。第II区のトレンチに柱穴を検出する。第I区に2本のトレンチを設定する。

3月22日（月）～27日（土）

II区トレンチ調査から遺構の存在が認められたため、全面調査をおこなうことにした。調査開始時に要請のあった工事用道路部分の早期明渡しについては、II区の調査が終った時点で判断することとした。

清 水 谷 遺 踪 (71)

3月29日（月）～4月3日（土）

II区表土剥ぎ

4月5日（月）～10日（土）

II区表土剥ぎ、南東部分に寛永通寶を伴う近世墓を検出する。

4月12日（月）～17日（土）

II区表土剥ぎ、I区の株抜き

4月19日（月）～24日（土）

II区柱穴列検出及び掘り下げ

4月26日（月）～5月1日（土）

I区表土剥ぎ、II区柱穴掘り下げ

5月3日（月）～8日（土）

I区表土剥ぎ、近世墓掘り下げ

5月10日（月）～15日（土）

I区トレンチ掘り下げ、遺構検出作業、II区50分の1平板測量、III区トレンチ設定。

5月17日（月）～22日（土）

III区トレンチ掘り下げ

5月24日（月）～29（土）

I区50分の1による平板実測。III区トレンチ掘り下げ。

5月31日（月）～6月5日（土）

III区トレンチ調査の結果、柱穴が認められたため全面調査をおこなうこととした。黒色土上面まで掘り下げ、弥生中期の土器片を多く出土する。

6月7日（月）～12日（土）

III区北側部分の基盤層露出作業

6月14日（月）～19日（土）

III区黒色土層掘り下げ。

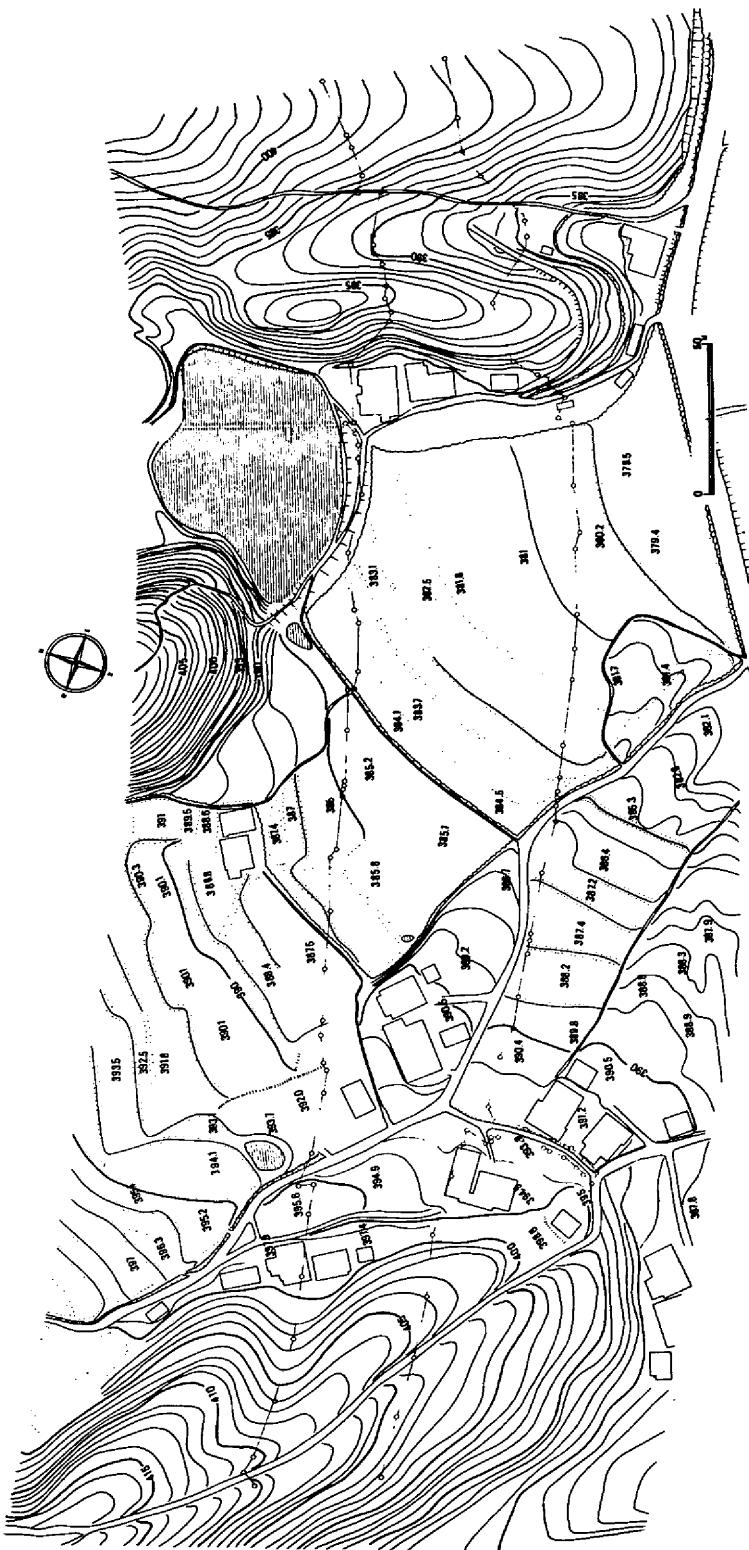
6月21日（月）～26日（土）

III区黒色土層掘り下げ完了。セクション図作成、写真撮影。

6月20日（月）～7月3日（土）

III区セクション土手撤去。3日をもって調査を終る。

清 水 谷 遺 跡 (71)



第2圖 地形圖

第2章 発掘調査

第1節 I区の調査

I区は、西から東にゆるやかに下がる舌状丘陵上にあり、II区との比高約6mを測る。この丘陵のほぼ中央部分に林道が縦断しているが、調査区内ではやや西寄りを通る。丘陵は平坦部と斜面に分けることができ、調査はT字形のトレンチを設けることにした。層序は、表土、黄褐色土層が25~30cmの厚さで堆積している。南北トレンチにおいては、黒色土の堆積がみられ、その上面で土器片が検出されている。丘陵平坦部に設けた東西トレンチでは、柱穴等が確認されたことから全面発掘をおこなうこととした。

その結果、I区では住居址1、土壙6、柱穴などを検出した。以下各遺構について若干の説明を加えたい。

住居址は、東西トレンチ西端に位置する。壁帶溝と炉を認める。壁帶溝は、L字状に残存し東西2m、南北1.5m、深さ5cmを測り、断面はU字状を呈する。炉は、住居址コーナーより約1mの所に位置し、規模は50×40cmの楕円形を示す。炉の中央部はやや高くなっている。なお、住居址からの遺物は認められなかった。

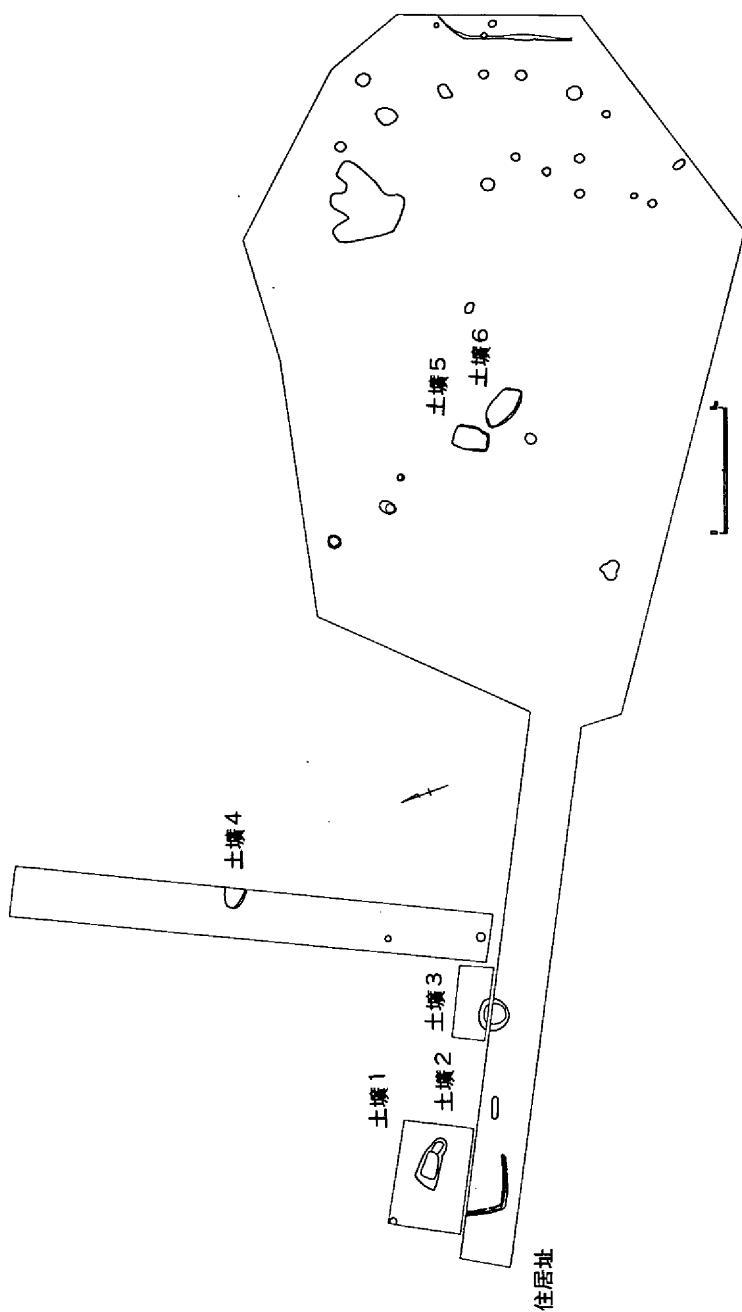
土壙1は、住居址の北にあって二つの土壙が切り合っている。いずれも長方形を示し、1つは1.5m×90cm、深さ30cm~50cmを測り、他は、短辺60cm、深さ20cmを測る。土壙2は長楕円形を示すもので、規模は、90cm×25cm、深さ10cmを測る。土壙3は、円形を示し、規模は1.2m、深さ28cmを測る。断面は台形を示し、埋土は、黒褐色砂質土で灰褐色砂質土がレンズ状に堆積している。土壙4は、南北トレンチに検出された楕円形のものである。土壙5は、長方形を示すもので、規模は、1.2m×50cm、深さ10cmを測る。土壙6は、楕円形のもので、規模は、1.8m×90cmを、深さ10cmを測る。

柱穴群は、直径20cm~40cm、深さ10cm~20cmのもので、建物としてまとまるものは認められなかつた。

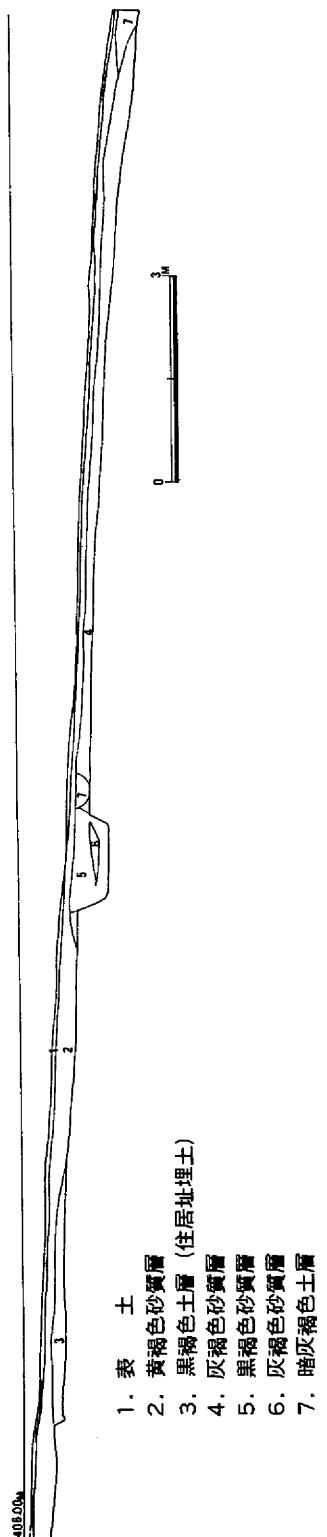
第2節 II区の調査

II区は、I区の丘陵の北側に位置し、西から東へ、また南から北へ徐々に傾斜する畠地である。トレンチによると、基本的にこの区の土層は、第1層が黄灰褐色の耕作土、第2層が黒色土（黒ぼこ）で、その下は黄褐色土の基盤層になっている。II区はほぼ全面を発掘した。発掘面積は、863m²を測る。検出できた遺構は、溝状遺構2本・掘立柱建物2棟・その他柱穴20数本・近世墓13等である。溝状遺構は掘立柱建物Iと同時期のものとやや古いものがあり、掘立柱建物Iは近世墓と同時期に比定

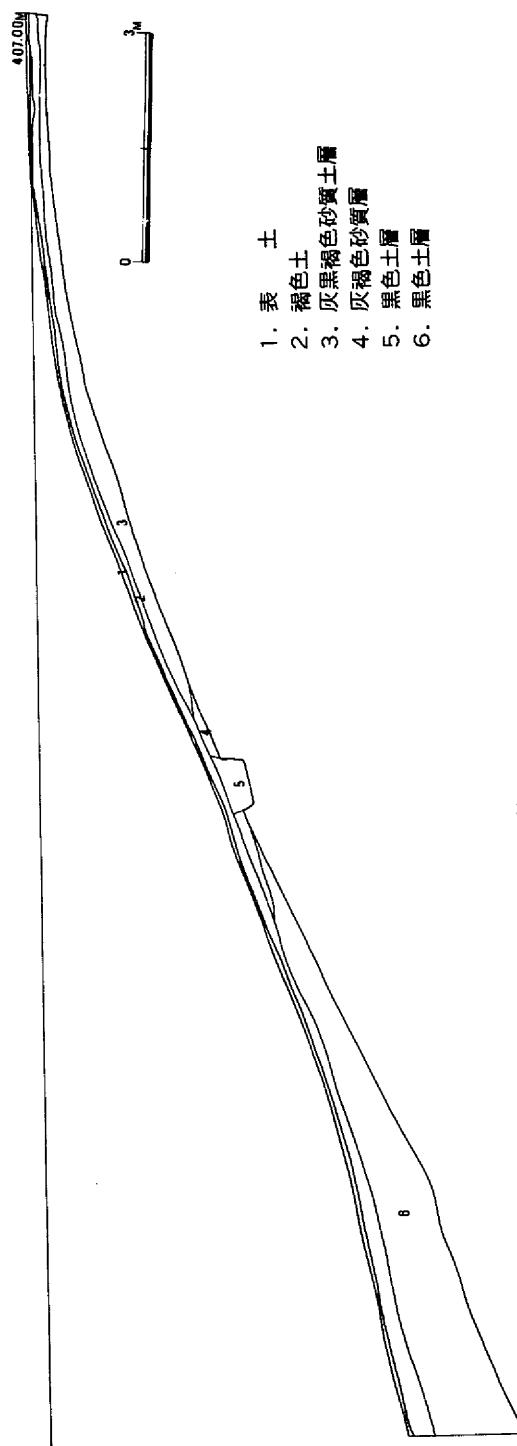
清水谷遺跡(71)



第3図 I区遺構図



第4図 I区東西土層断面図



第5図 I区南北土層断面図

清水谷遺跡(71)

できる。遺物は、西端の谷部を埋める黒色土上層から縄文晩期の土器数片と木葉文・沈線文のある弥生前期の土器片が出土している。また東端の黒色土中から弥生中期の土器が数片出土している。これら遺物については後で述べることにして、ここでは遺構の説明を加えたい。

溝状遺構1は、西端谷部に近い所で検出したL字状を呈する溝で、全長8m・巾70cm・深さ14cmを測り、黒褐色の埋土中から赤褐色の土器片を出土している。他の遺構より幾つか古いと考えられる。溝状遺構2は、溝1の東にあって東西に一直線に伸び、両端が人為的に終息している。長さ8.8m・巾50cm・深さ40cmを測り、断面は逆台形を呈している。建物Iに伴なう溝と考えられる。

掘立柱建物Iは、溝2の北側で検出した。桁行1間・梁行3間の建物で、桁行の心々距離が3.5m、梁行の心々距離が2.3mと2.7mを測る。梁行の中央の心々距離が長い。この建物の面積は、 $3.5m \times 7.3m = 25.55m^2$ である。柱穴は、8本ともほぼ同じ大きさであり、直径30~35cmを測る。深さは南の方が残りがよくて50cm、北が20cmになっている。近世墓と同質の灰褐色粘土を含む。

掘立柱建物IIは、建物Iと重なって検出した桁行1間・梁行2間の建物で、桁行1間の心々距離が4m、梁行1間の心々距離が2.5mと2.8mを測る。この建物の面積は、 $4m \times 5.3m = 21.2m^2$ になる。柱穴は、北西隅の1本を除いてほぼ同大で、直径60~70cmを測る。深さは南がよく残っており42cm、北東隅のものが37cmである。北東隅の柱穴は長方形プランを呈し長辺60cm・短辺40cmを測る。北西隅の柱穴から青磁片が出土していることから中世の建物だと考えることができる。

近世墓群はII区の北東隅及び建物の東で検出した。2つの墓群の中間にても存在していたことが推定できる。後世の畑作で浅い墓壙は削平されたのであろう。建物周辺の1群には石組みが認められるが人骨・副葬品等は出土していない。北東隅の1群では約半分の墓壙に寛永通寶が埋納されていた。墓壙のプランは円形・方形の2種があり、大きさ・深さは様々である。寛永通寶は、最高100枚も藁に通しているのが認められた。その他木櫛・煙管・伊万里焼の湯飲み等が出土している。人骨も1部だが残っていた。寛永通寶がいつ頃まで使用されたものか分からぬが、これらの墓は江戸時代から明治の初頭まで存在していたものであろう。哲西町内では、最近まで民家の近辺に土葬が行なわれていたと聞いている。

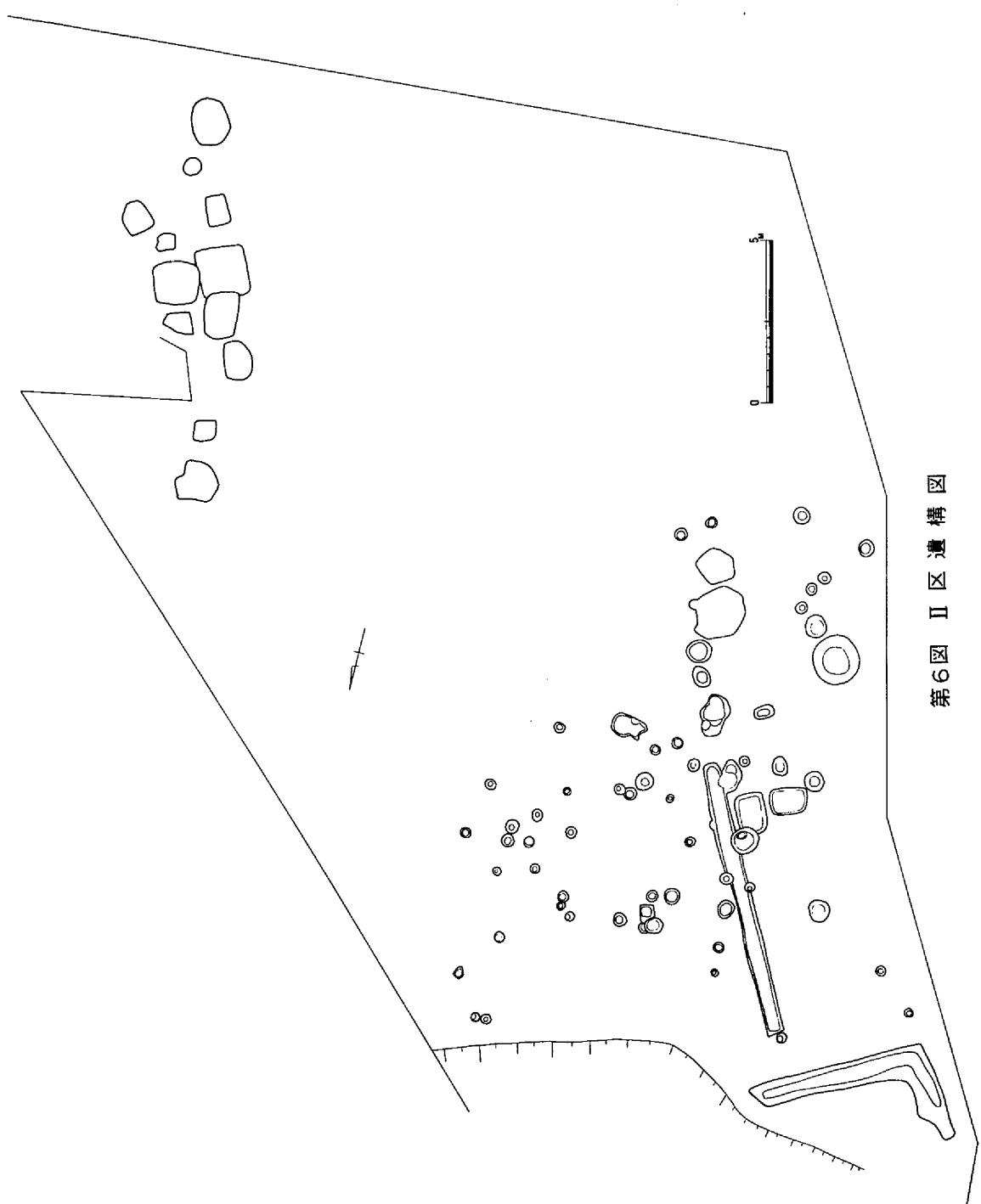
その他無数の柱穴を建物周辺で検出しているが、大きさ、深さとも様々で、建物にまとめることが出来なかった。これらの柱穴の時期は、近世のものとして相違ないであろう。また畠地のため削平された遺構も多いし、黒色土(黒ぼこ)を掘り込んで、黄褐色土まで達していない遺構は検出不可能である。

第3節 III区の調査

III区は、町道より北側部分で北端は谷川および谷水田となる。この丘陵部と谷水田の比高は約4mである。丘陵中央より西側部分は宅地となっており、トレンチ調査において表土下約20cmで第3紀層に達する。第3紀層は宅地造成によりかなり削平されている状態を示し、家の基礎部分が深く入り込んでおり、遺構の遺存は認められなかった。東側部分においては、中世の柱穴群・弥生中期の包含層

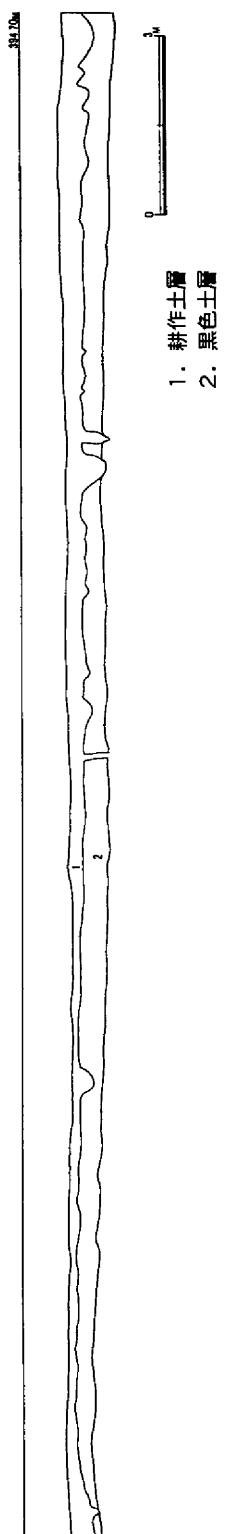
清 水 谷 遺 蹤 (71)

第6図 II区遺構図



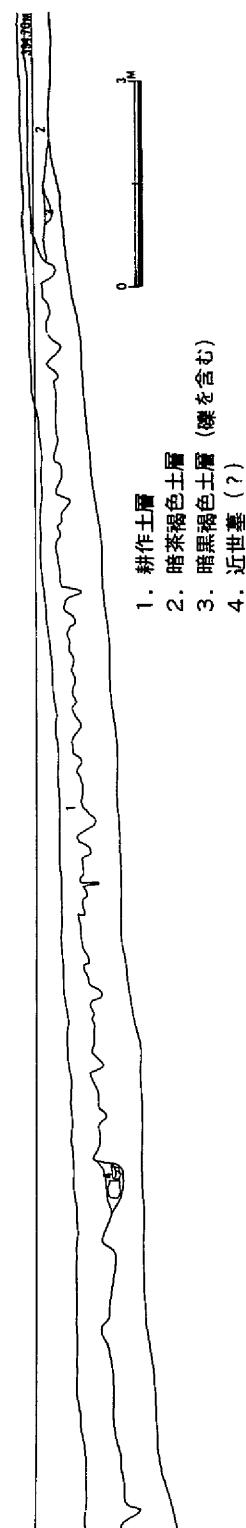
清水谷遺跡(71)

第7図 II区南北土層断面図



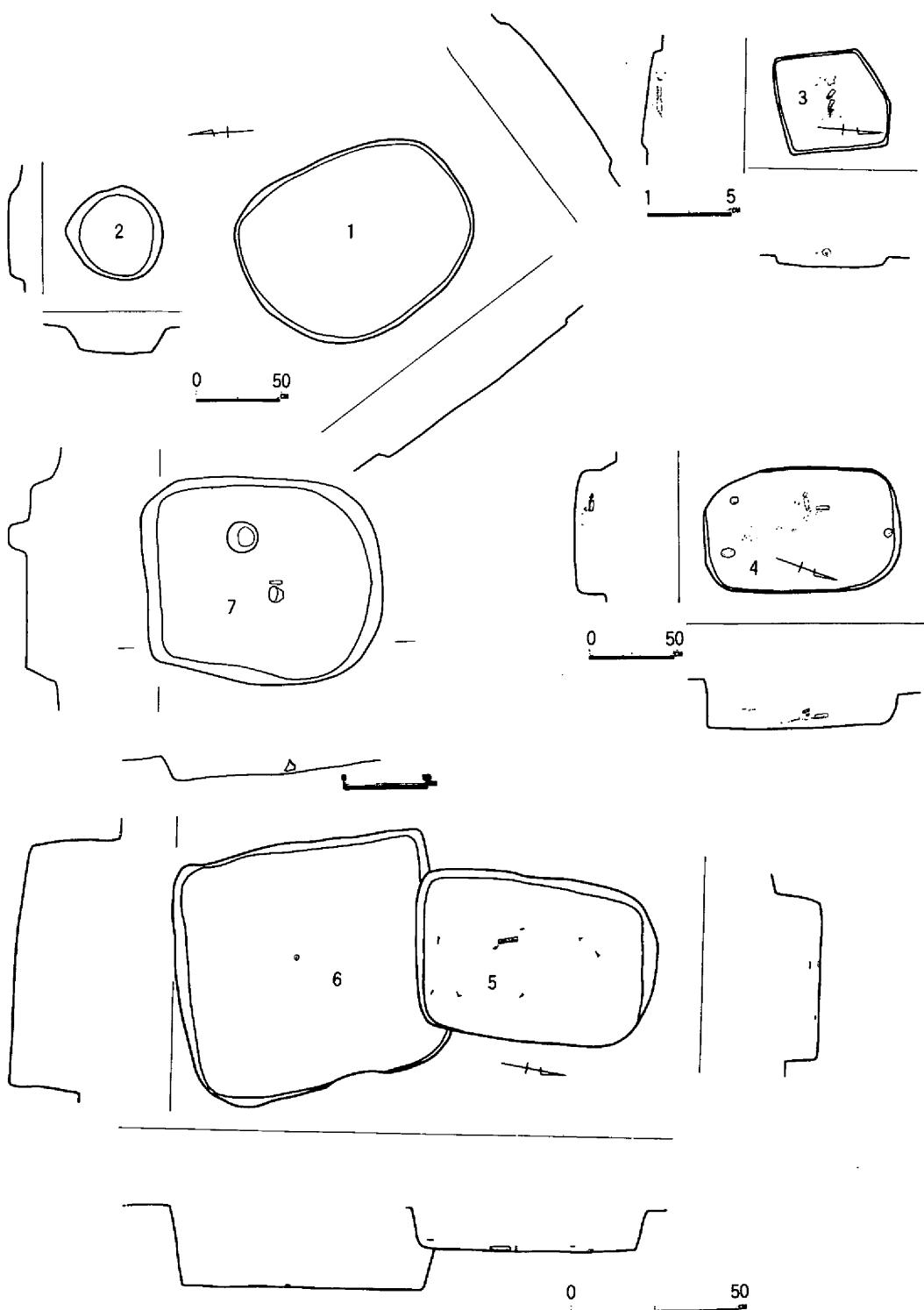
1. 耕作土層
2. 黒色土層

第8図 II区東西土層断面図



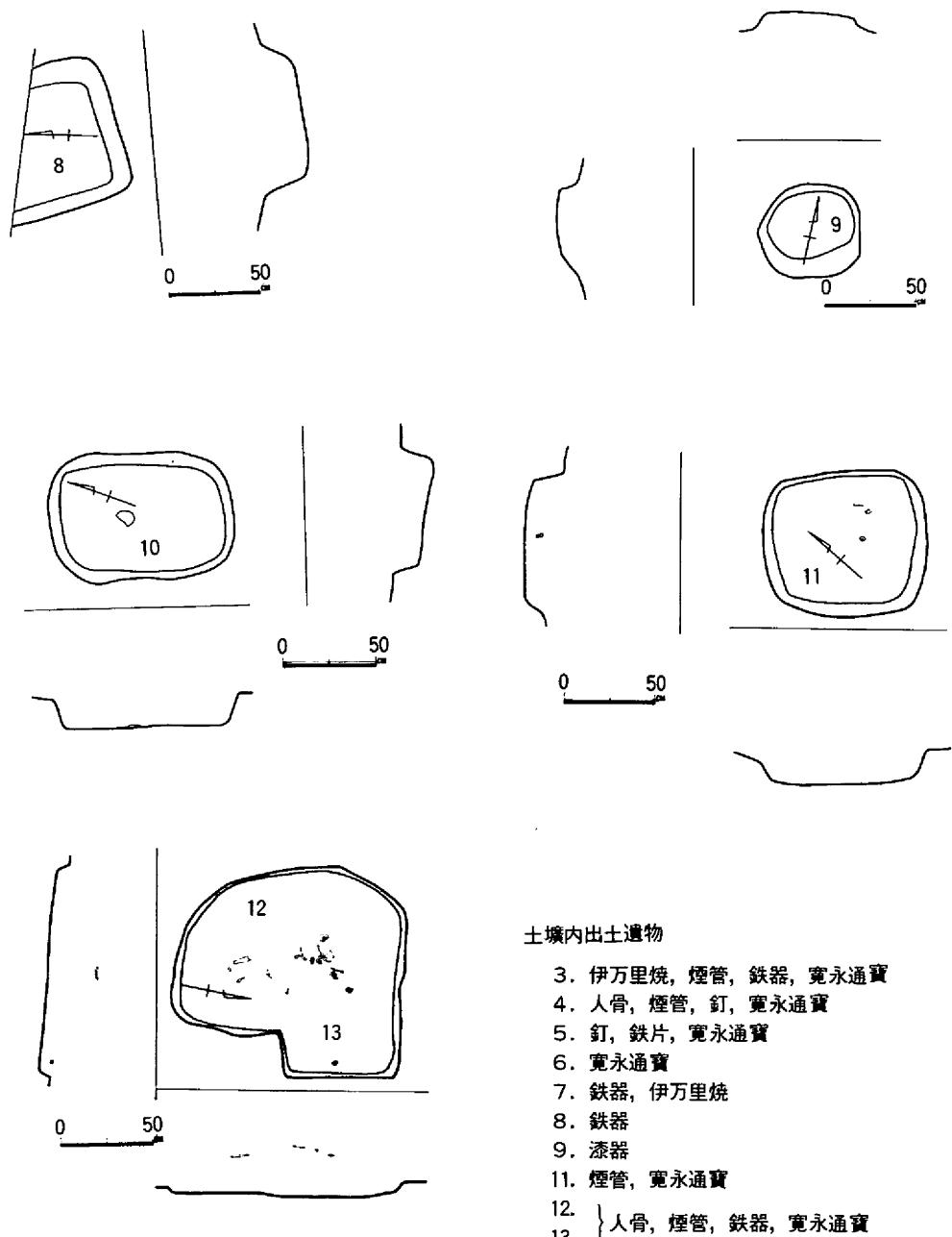
1. 耕作土層
2. 暗茶褐色土層
3. 暗黒褐色土層 (礫を含む)
4. 近世墓 (?)

清 水 谷 遺 踪 (71)



第9図 II区近世土壤墓

清水谷遺跡(71)

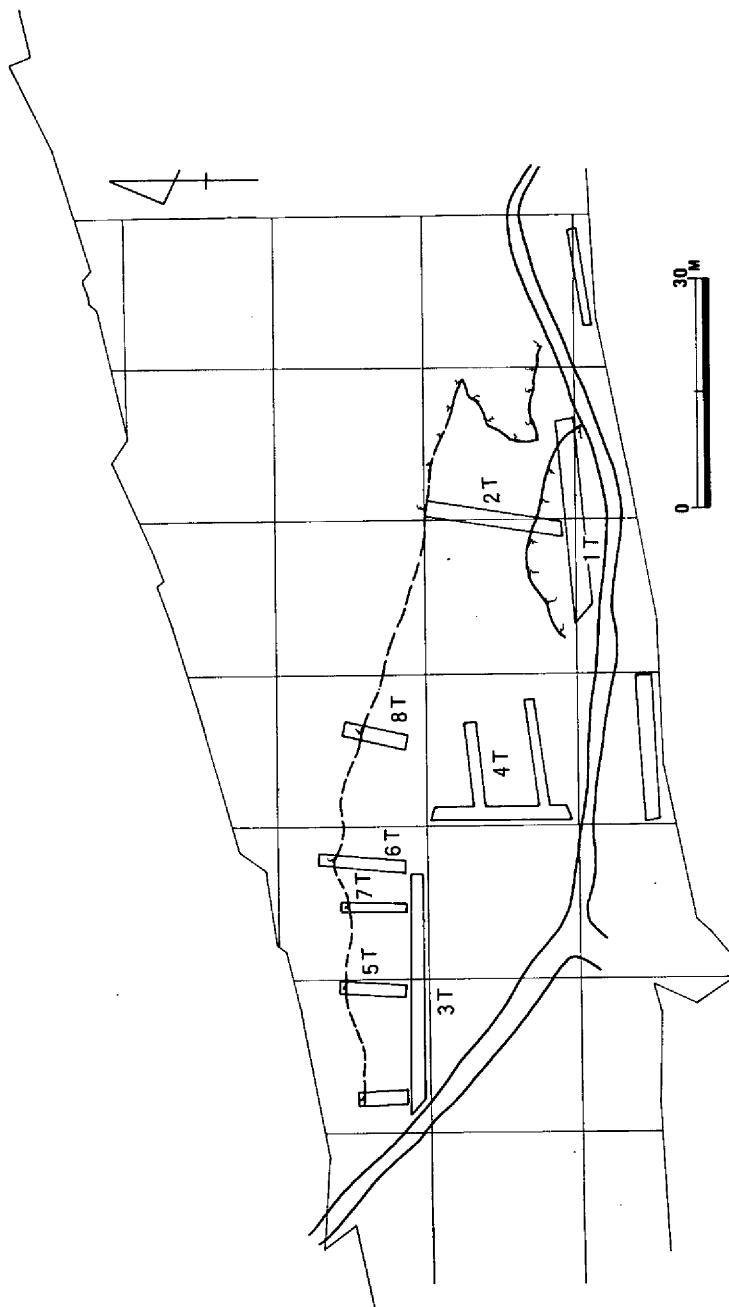


土壤内出土遺物

- 3. 伊万里焼, 煙管, 鉄器, 寛永通寶
- 4. 人骨, 煙管, 鉄, 寛永通寶
- 5. 鉄, 鉄片, 寛永通寶
- 6. 寛永通寶
- 7. 鉄器, 伊万里焼
- 8. 鉄器
- 9. 漆器
- 11. 煙管, 寛永通寶
- 12. } 人骨, 煙管, 鉄器, 寛永通寶
- 13. }

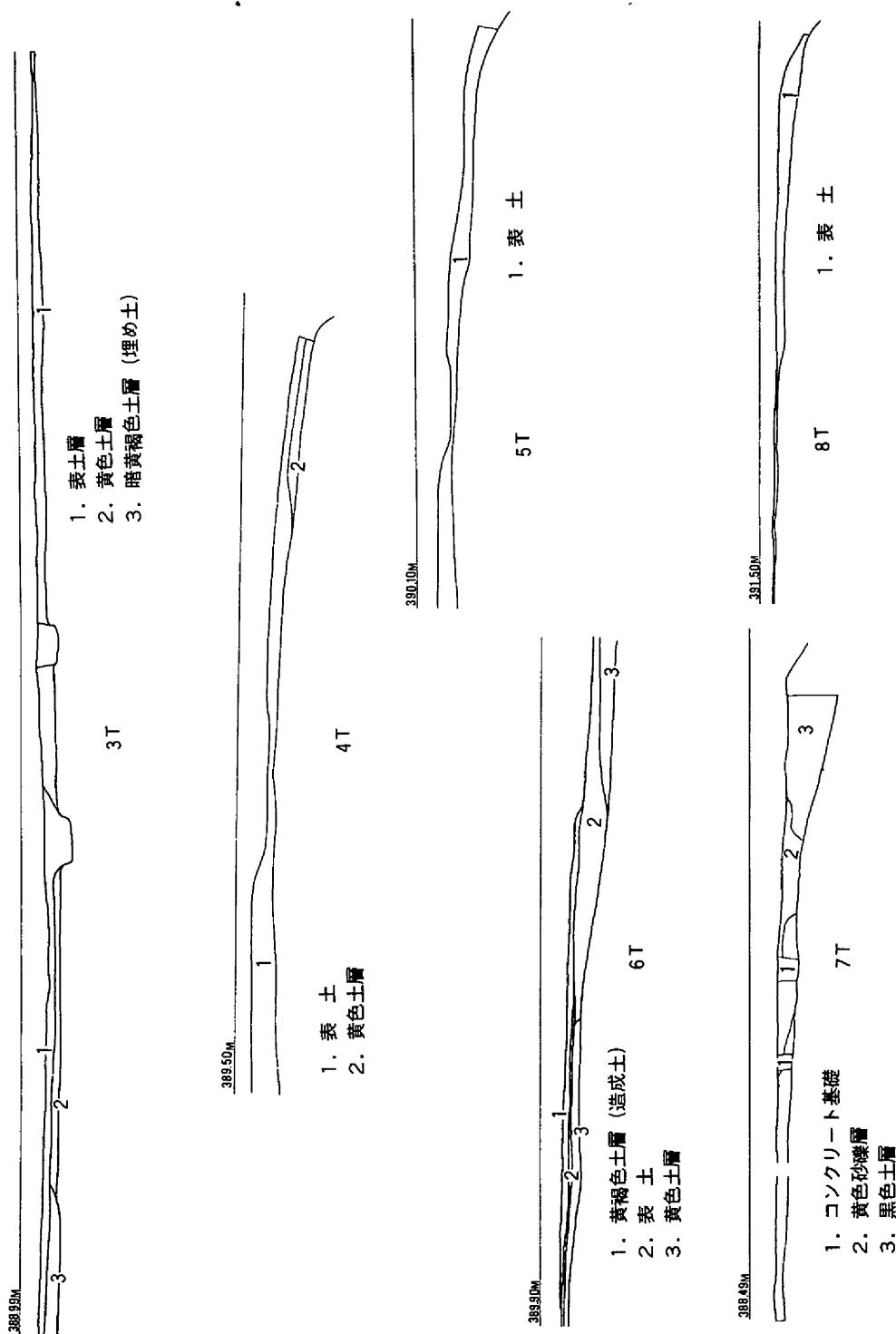
第10図 II区近世墓

清水谷遺跡(71)



第11図 Ⅲ区トレソチ設定図

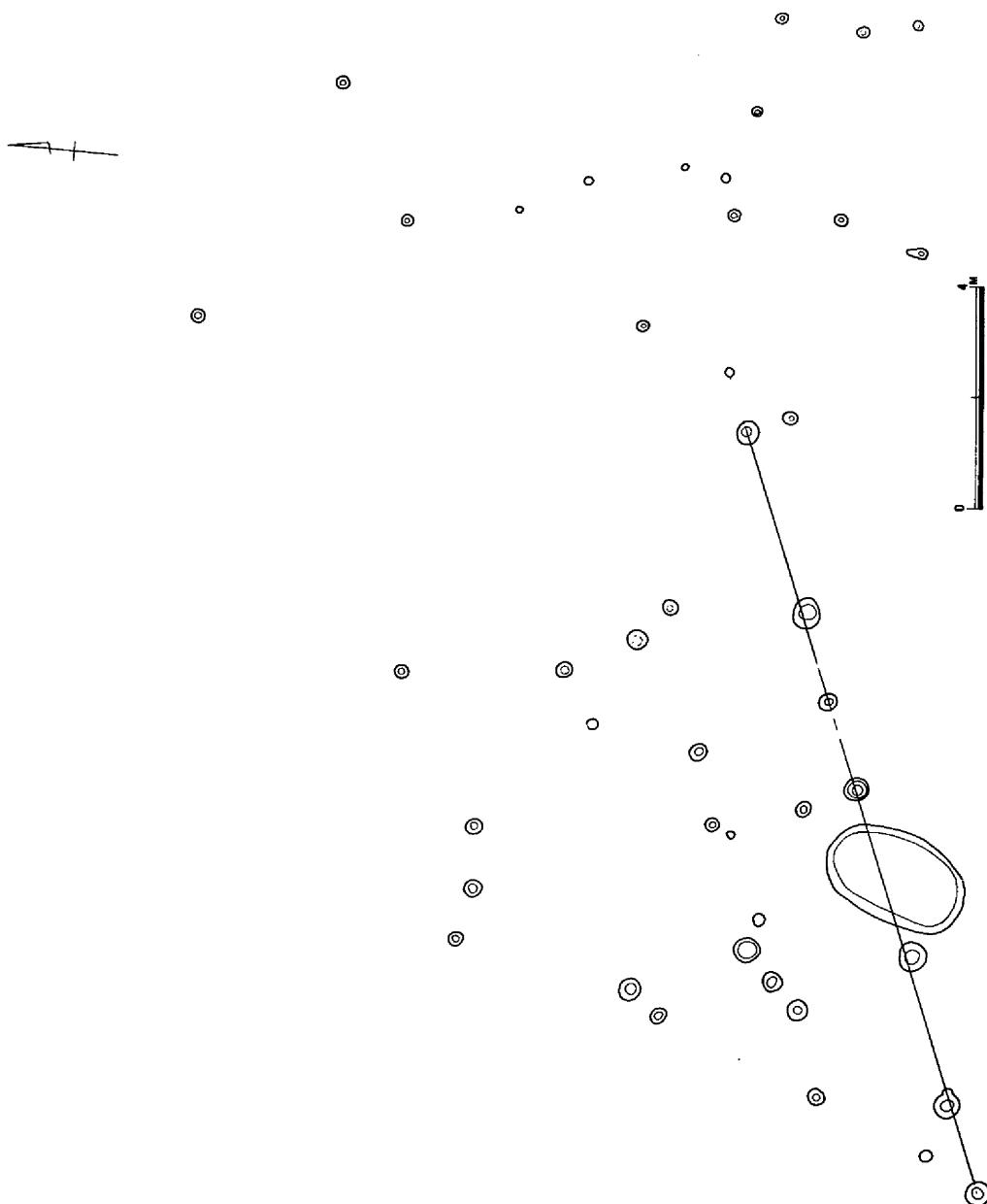
清水谷遺跡(71)



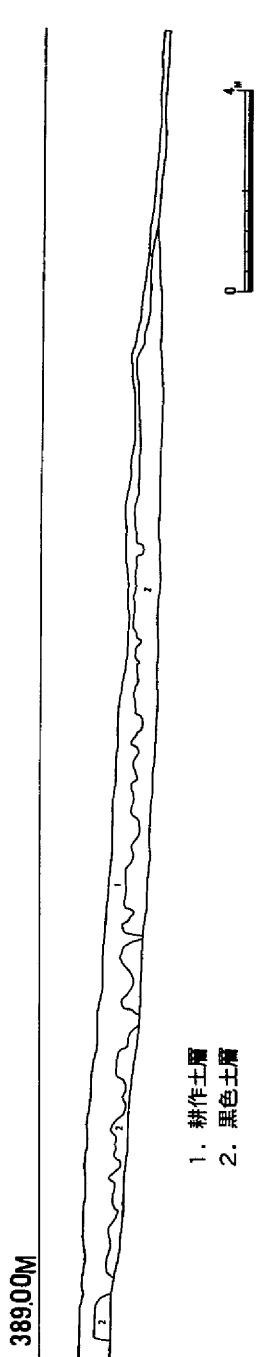
第12図 III区トレシチ断面図

清 水 谷 遺 蹤 (71)

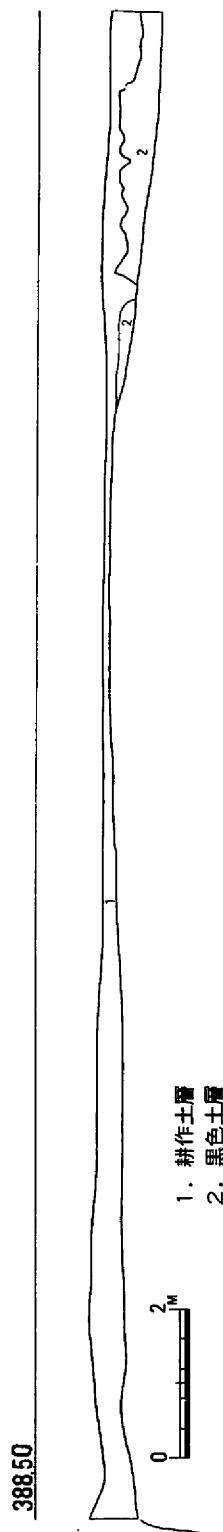
第13図 Ⅲ区遺構図



清 水 谷 遺 踪 (71)

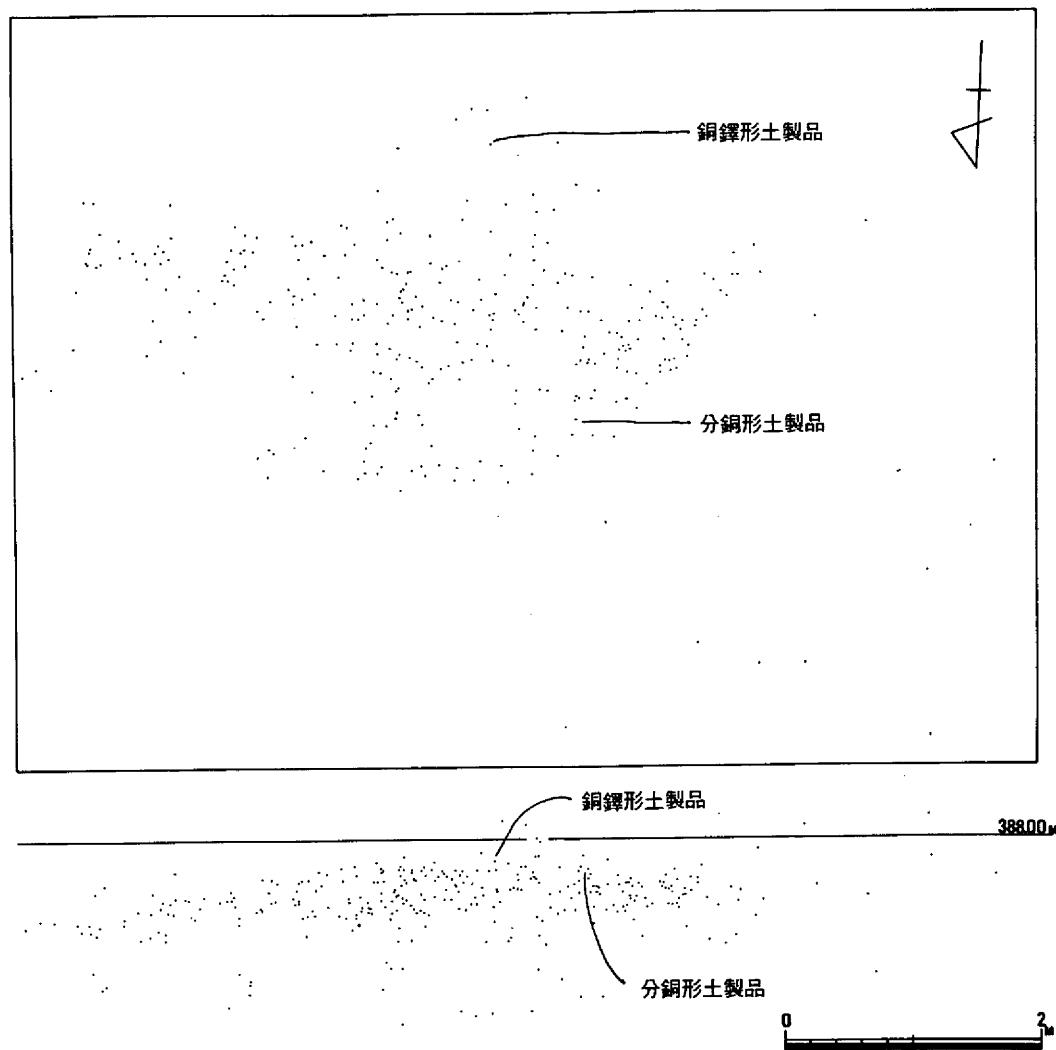


第14図 III区東西土層断面図（第1トレンチ）



第15図 III区南北土層断面図（第2トレンチ）

清水谷遺跡(71)



第16図 II区包含層平面・垂直分布図

が認められた。

遺跡の北端は北西から南東にかけての谷川と谷水田に落ち込み、Ⅱ区北端に認められた谷部へ移行してゆくものと考えられる。南東部については、国道182号線により切られている。

弥生期の包含層は、第1トレンチにおいて認められ、幅約28mを測り南方向に向かってゆるやかに落ち込んでゆく部分に堆積する黒色土中に包含されている。第11図に示した如く、耕作土と黒色土の堆積が認められ、遺物は耕作土直下より検出されている。

第16図は、Ⅲ区における遺物の平面及び垂直分布図である。黒色土層の堆積は約60cmであり、この黒色土層中と黄褐色土上面にわたって遺物が認められる。遺物は、第21図の12の1点を除き、他は県南部において中期中葉とされる孤池式（註1）に属し、縦貫道関係では二野遺跡（註2）のものとほぼ同時期に含まれるものである。この包含層中より銅鐸形土製品および分銅形土製品が出土し、いずれもその出土状態からこの包含層の時期に伴うものである。この他に、灰色粘土塊、サヌカイト剝片、紡垂車などが伴出している。

中世柱穴群は、弥生の包含層より北西よりに存在している。建物となるものは認められず6間の柵列状のものが1列認められたにすぎず、時期は柱穴より照寧通宝が出土している。

註1 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」弥生式土器集成・本篇I 1964年

註2 福田正継・高畠知功「二野遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21,1977年

第4節 出土遺物

1. Ⅱ区出土遺物

図21—1～11、図22—12～15はⅡ区北西端に確認された谷部の黒色土層より出土したものである。出土状態は表土直下より出土し、約20cmほどの間に認められ、層位的観察は出来なかった。図21—1～6は、口縁部近くに凸帯を有し、凸帯の上に刻み目を施している。胎土は石英粒・石粒を含み、焼成は良好である。色調は暗茶褐色を示す。図21—8～11は、前期弥生式土器に含まれるものである。8は有軸の木葉文がみられ、10は2本の凸帯部に円形の刺突文及び、その凸帯部の下に同様の刺突文を施している。

図22—13～15は土師器で、15は内面に顕著な押圧痕を残し、14は底部の欠落の状態から脚部が付されたものと推定される。

図22—12は、結晶片岩系の磨製石庖丁の破片である。

2. Ⅲ区出土遺物

壺の出土は極めて少なく図19—11はその内の1つである。頸部に凸帯を付し、口唇部には刻み目を付す。他の資料においては、口縁部端面に横書き波状文を施文しているのがみられる。甕は、口縁端部を肥厚させ刺突を加え、頸部屈曲部には、粘土帶を持ち、その上から刺突を加えるもの（図19—9・8）、頸部をくの字状に外反させるだけのもの（図19—1～8）がみられる。他の器種と合せ全容がわかるのは（図19—1）のみであり、約3分の1が遺存している。これによると、頸部はくの字状に屈曲し、口縁部内面はナデによる凹部がみられる。胴部最大径は、上半にあり、底部は、横ナデにより直立気味となる。胴部中位やや下に刺突文がみられ、これより下は笠、上は刷毛による調整がみ

清水谷遺跡(71)

られる。内面は、胴部下半において、横位の箒削りが認められる。他の破片も大略これと同一様相を示すが、図22—7のように胴部の刺突が貝によるものがみられる。底部内面の整形は図20—2の刷毛、同11の刷毛→箒削りなどがみられる。

図19—12～14は、高杯で、12は三角形の透しになるものと考えられる。

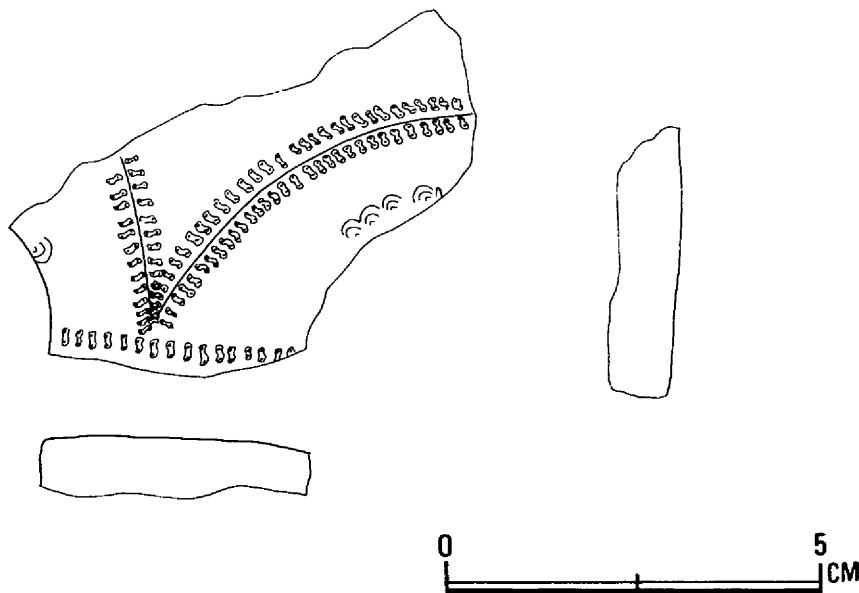
紡垂車(図22—9～11)は3点出土し、10・11は甕の胴部破片を利用し製作され、11は裏面よりの穿孔の途中で破損したものと考えられる。

銅鐸形土製品(図18)(図版14)現残高66cm、舞の長径2.5cm、同短径2.3cm、身中央部幅2.6cm、身の双孔は0.45cm～0.44cmを測る。厚さは、身中央位0.75cmと0.9cmを測る。銅鐸形土製品は、身の3分の1程度を欠失している。舞は充填した粘土が欠落した状態を示し、鰭は、裾部まで造らず身の上端部に粘土を貼り付けた状態で終っている。身の双孔は、いずれも斜め下に向ってあけられている。なお、裾部は、やや外開き気味に終るものと考えられるが、面は認められない。

胎土・焼成は、伴出の土器群と同一の内容を示している。

分銅形土製品(図7)(図版15)胴部の幅3.4cmを測るものである。胴部には先端が二叉に分岐する刺突具で縦列に施文される。胴部中央から左右の抉り部とに空間をもって一本の沈線を施す。この沈線の両側に胴部と同様の刺突文を施す。左右の抉り部の空間部分には、重弧文が施文され、右抉り部には、正面より抉り端面に抜ける穴が設けられる。断面形は、やや反り気味である。

内面は、箒磨きを、裏面は剥離により観察できず、胎土には微砂を含み、焼成堅緻、色調は淡褐色を示す。



第17図 分銅形土製品

ま と め に か え て

水谷遺跡は、縄文晚期・弥生前期～中期そして近世墓より構成されている。柱穴および近世墓は遺構として確認されているが、他の出土時期を示す土器を伴う遺構はA地区における土壤状のものを除き検出されなかった。これらの土器の出土状態は、いずれも包含層中のものであり黑色土の堆積土中であったため層位的な検出はできなかった。ただ、Ⅲ区に認められた包含層については、中期中葉の単純包含層であることが認められた。この包含層中より銅鐸形土製品および分銅形土製品が出土している。分銅形土製品については、住居址・包含層などの他の遺物と伴出することが多く時期的な問題について次代に明らかになってきている。(註1) これに対し銅鐸形土製品については、居住空間からの出土が認められるが時期を明らかにするような状態での出土は認められていないようである。

銅鐸が居住空間とは全くことなる地において、人為的に埋納された状態での出土が普遍的に認められる。その為に、時期を判断する伴出遺物がなく、概して銅鐸の形態的・文様的傾面から年代へのアプローチが試みられている。銅鐸の模倣と考えられる銅鐸形土製品あるいは石製品は、銅鐸よりも実年代が下がることが考えられる。清水谷遺跡の出土状態からして、中期中葉の段階に属する包含層より出土したことは、銅鐸の製作開始の実年代がそれ以前という時期を想定することを可能にする内容を含んでいる。

さらに、清水谷遺跡においては、中四国地方に分布の中心をもつと考えられる分銅形土製品が伴出している。この両者の伴出がみられる遺跡は、赤磐郡山陽町門前池遺跡(註2)、岡山市上伊福遺跡(註3)と合せ3遺跡において認められる。

このことは、銅鐸と異なり銅鐸形土製品は、分銅形土製品と共にその出土状態が居住空間において検出されることと合せて、祭祀の面についても相互に関係する部分を共有する可能性が考えられる。

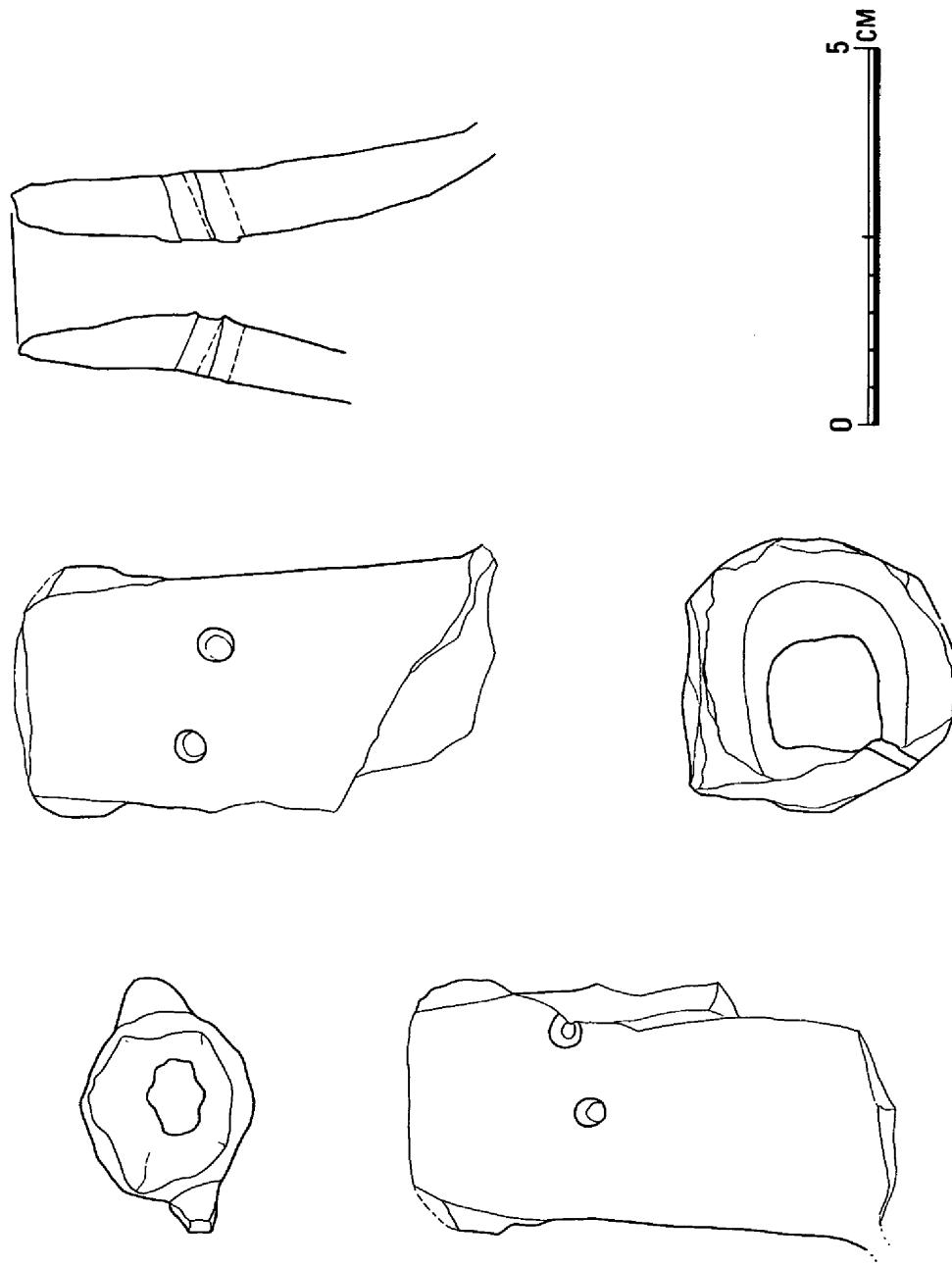
分銅形土製品が、「住居ごと、もしくは個人的な所有物としての可能性がつよく、呪術的性格の遺物」(註4)として考えられる側面からすれば、銅鐸が共同体祭祀として成立した時点から大きなギャップが存在することがいえよう。反面において、銅鐸が土製あるいは石製(註5)により模倣された段階においてより個々の共同体内における祭祀の実体に近づいたと考えられよう。銅鐸が農耕祭祀と深くかかわった側面が強い考え方(註6)が多くみられており、模倣としての製品に対しこれと全く異なる内容を求ることはさらに資料の集積をまたねばならないであろう。

清 水 谷 遺 跡 (71)

参 考 文 献

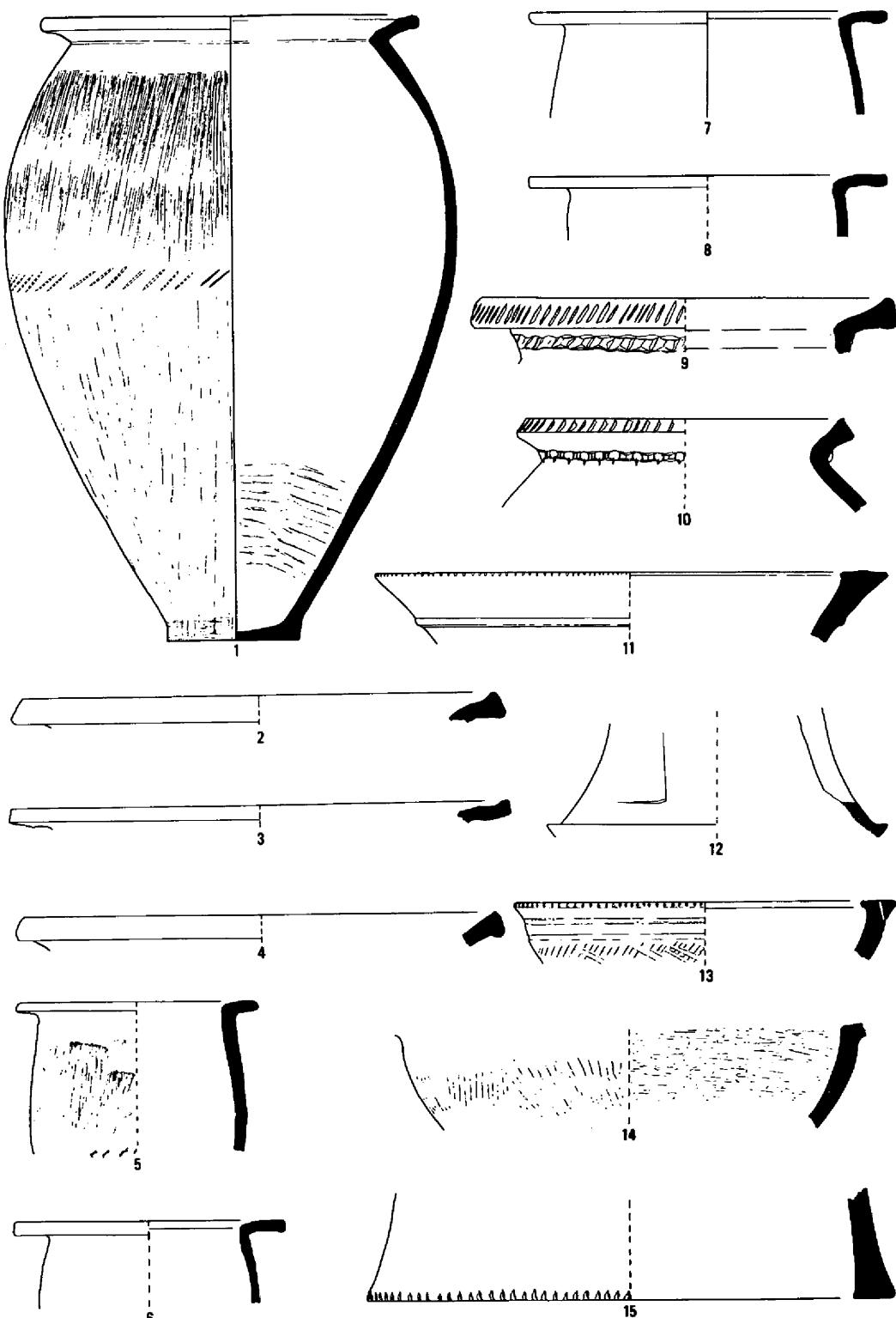
- 註1 東潮「分銅形土製品の研究」『古代吉備7』 1971年・東潮「東高月遺跡群出土の分銅形土製品」『用木山遺跡』山陽町教育委員会1977年2月
- 註2 枝川陽・池畠耕一・新東晃一・松本和男「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9』岡山県教育委員会1975年3月
- 註3 佐原真「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系2』平凡社1960年4月
- 註4 潮見浩・藤田等「中国・四国」「日本の考古学III」河出書房 1966年1月
- 註5 「古代人のいのり」奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館 1977年10月
- 註6 三木文雄「銅鐸」「日本の美術9」・佐原真「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系II』などにみられる。

清 水 谷 遺 蹤 (71)



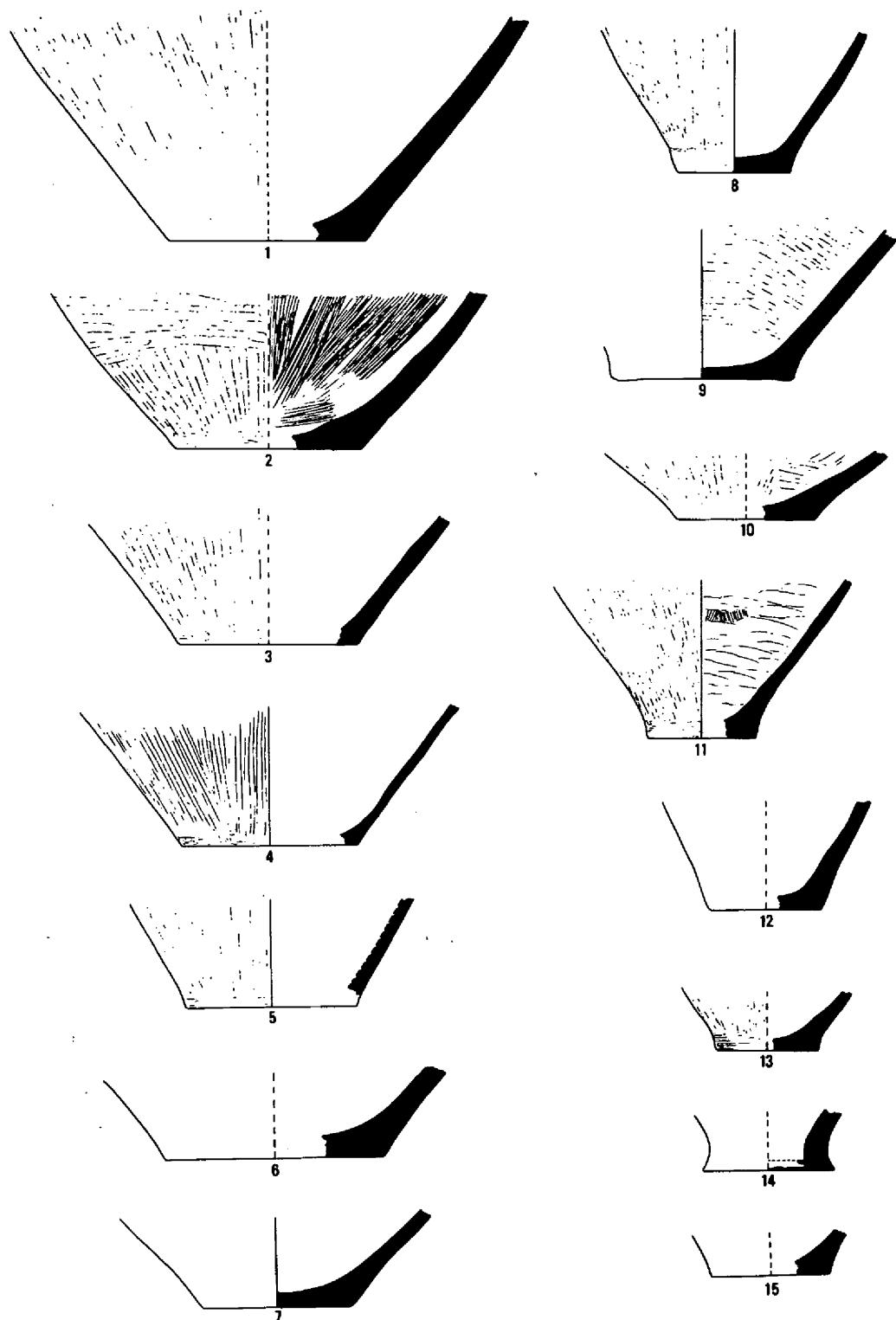
第18図 銅鐘形土製品

清水谷遺跡(71)



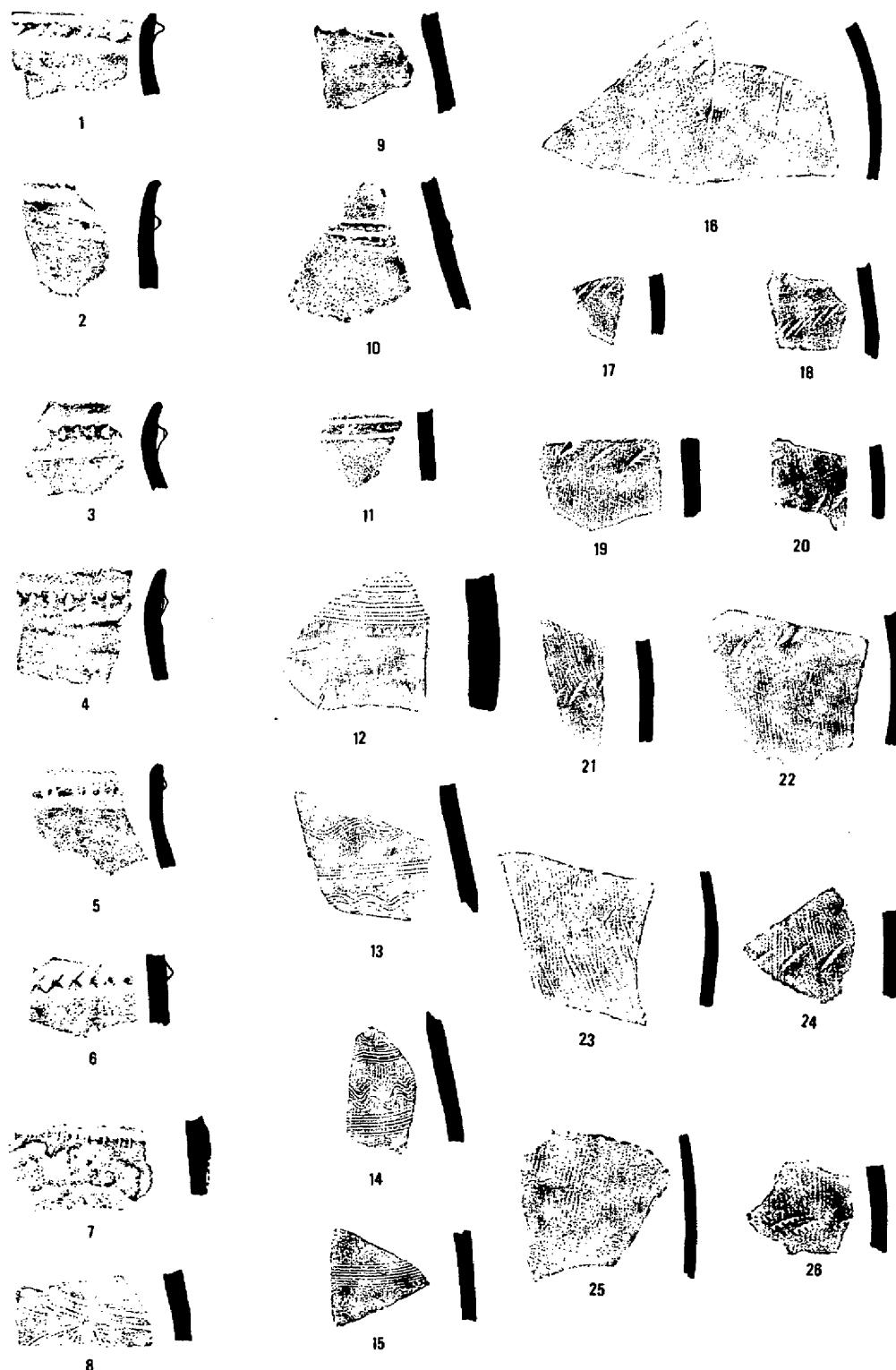
第19図 出土遺物

清水谷遺跡(71)



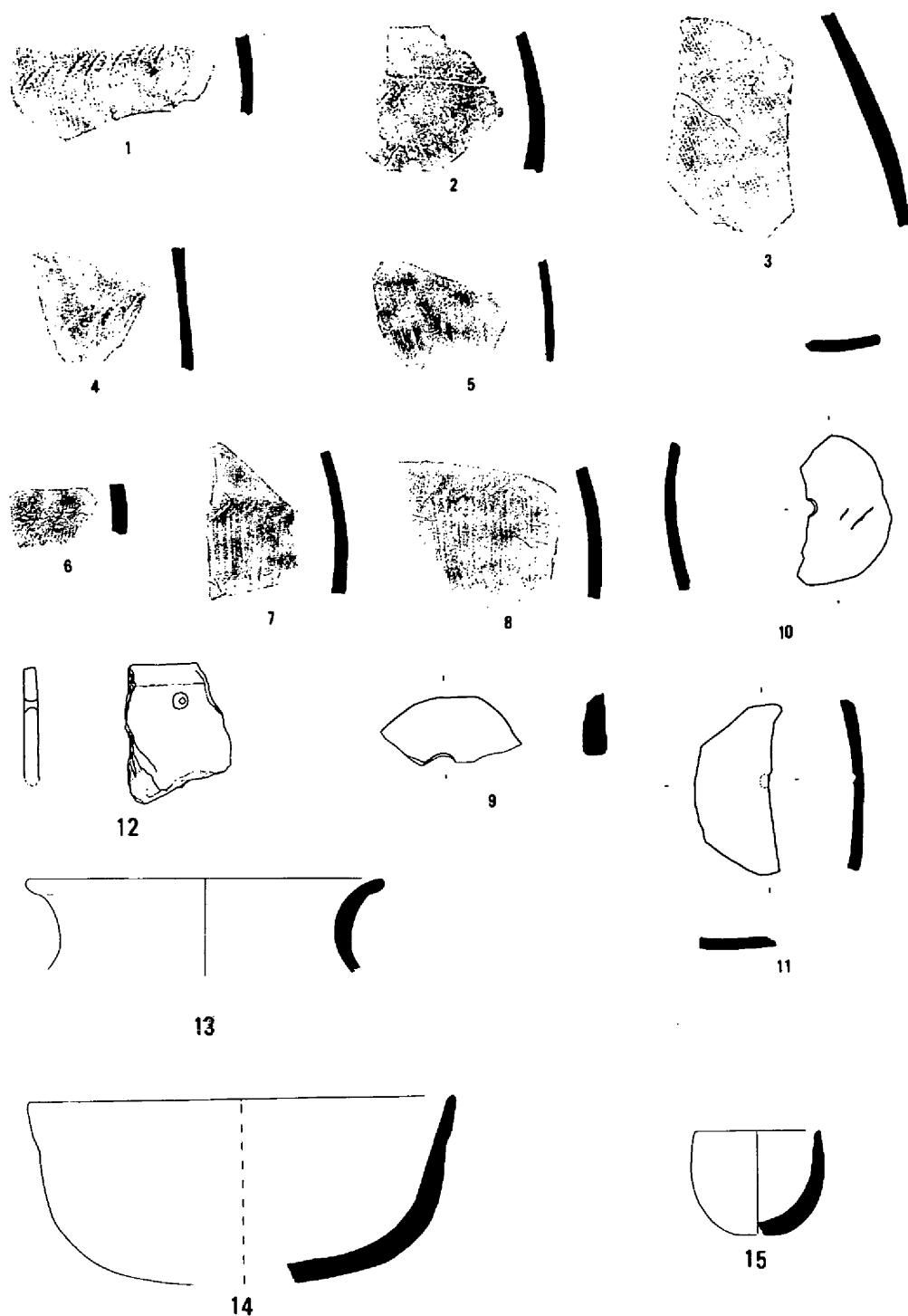
第20図 出土遺物

清 水 谷 遺 跡 (71)



第21図 出 土 遺 物

清水谷遺跡(71)



第22図 出土遺物

図版 1



1-1 清水谷遺跡遠影（北より）



1-2 清水谷遺跡遠影（南より）

図版2



2-1 清水谷遺跡遠影（東より）



2-2 清水谷遺跡遠影（東より）

図版3



3-1 I区東西トレンチ（東より）



3-2 I区南北トレンチ（南より）

図版4



4-1 I区遺構検出状態（西より）



4-2 I区遺構掘り上げ（西より）

図版5



5-1 III区包含層排土状態



5-2 III区南北土層断面

図版6



6-1 III区包含層排土状態



6-2 III区東西土層断面



7-1 II区全景（南より）



7-2 III区全景（西より）

図版8



8-1 III区包含層排土状態



8-2 III区包含層排土状態



9-1 銅鐸形土製品出土状態



9-2 銅鐸形土製品出土状態

図版10



10-1 銅鐸形土製品出土状態



10-2 銅鐸形土製品出土状態

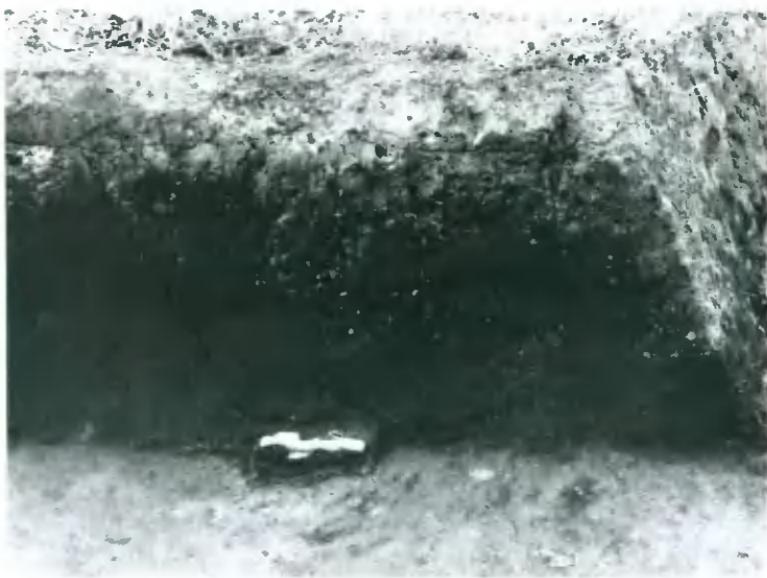


11-1 II区近世墓



11-2 II区近世墓

図版12



12-1 II 区 近世 墓

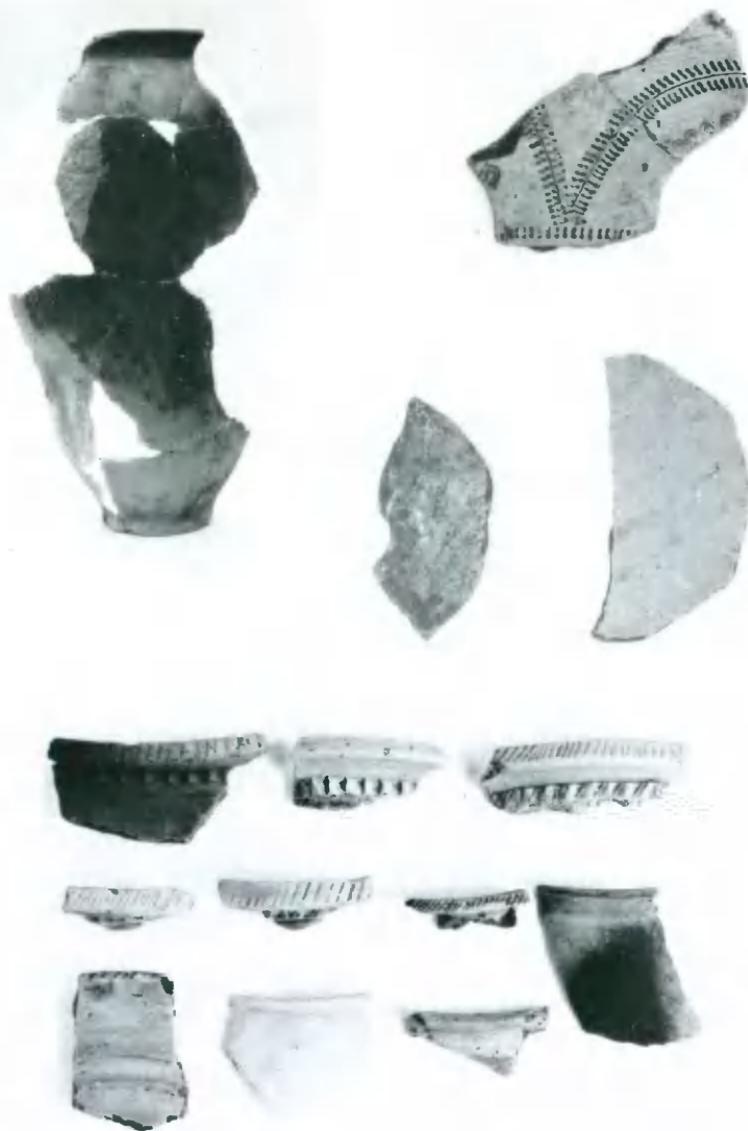


12-2 II 区 近世 墓



銅鐸形土製品

図版14



II区出土遺物



II区・III区包含層出土遺物

图版16



近世墓出土遺物

塚 の 峯 遺 跡 (72)

塚の峯遺跡(72)

例　　言

遺跡の所在地 岡山県阿哲郡哲西町大字大竹字塚の峯

調査期間 昭和51年3月6日～昭和51年8月11日

5月上旬までは野田畠遺跡の調査と並行して行った。5月中旬以降は忠田山遺跡の調査と並行して行った。

塚の峯遺跡の調査と並行して、横田遺跡と岸本城址の下草刈りを行った。

塚の峯遺跡の調査と並行して、岸本下遺跡と二本松遺跡の確認調査を行った。

調査担当者 高畠知功・福田正継・中野雅美

4月から高畠は、津山市の国道179号バイパス関連遺跡である二宮遺跡の調査を担当することになり、後任の中野と交替した。

現地の調査では、二宮治夫・秀島貞康・正岡陸夫各氏の応援を得た。

発掘調査面積 約3000m²

発掘調査予定地内の北東斜面は、トレンチ調査で遺構が存在しないことを確認して排土置場にした。

報告書担当者 高畠知功・福田正継・中野雅美

第1章は福田が執筆した。第2章は高畠と福田が協議を行って執筆した。第3章と第4章は福田と中野が執筆した。

高畠は津山市の二宮遺跡の発掘調査を継続中なので、やむおえず仕事を分担した。

中野は岡山市の百間川遺跡の発掘調査を担当しながら、報告書の作成を行った。

遺物の実測・製図では、竹田 勝氏の応援を得た。

遺構・遺物の考察では、葛原克人・高橋 譲・竹田 勝・正岡陸夫各氏から、有意義な御教示をいただきました。

遺物の整理・復原・原稿の清書は、主として横田益代・坪井和江・細田美代子・近藤友子・村岡久子各氏にお世話になりました。

図面遺物管理 岡山市西古松265 岡山県教育庁文化課分室にて保管している。

石材の鑑定 石庵丁の石材鑑定では、岡山理科大学理学部教授理学博士三宅 寛氏にお世話になりました。

調査参加者 麻月千代・生熊武夫・生熊寿子・井上和夫・井上嘉弥代・小川恒雄・小田艶子・川上好友・川上初子・佐々木文一・渋川雅雄・竹本久人・立川一重・田辺淨二・津田正志・土屋トヨ子・南部誠吉・三上愛恵・村上高代・森島幹子・安田一之・安田三四子・山本美夫・横田愛子・横田益代・横山勲恵・横山正美・横山道子各氏にお世話になりました。なお哲西町教育委員会には、種々の点でお世話になりました。

調査中には、地元の水池憲宗・長谷川正人両氏から御支援をたまわりました。

塚の峯遺跡(72)

総 目 次

第1章 遺跡の地理的環境.....	201
第2章 調査の経過.....	203
第3章 遺構・遺物について.....	207
第1節 塚の峯2号墳.....	207
第2節 塚の峯3号墳.....	211
第3節 住居址.....	219
第4節 土壌.....	247
第5節 遺構に伴わない遺物.....	255
第4章 まとめにかえて.....	266
第1節 弥生時代の遺構・遺物について.....	266
第2節 古墳時代の遺構・遺物について.....	272

表 目 次

表一1 遺構一覧表.....	205～206
表一2 須恵器観察表.....	217
表一3 土師器観察表.....	218

図 目 次

第1図 塚の峯遺跡周辺地形図.....	202
第2図 塚の峯遺跡遺構配置図.....	204・205
第3図 塚の峯2・3号墳墳丘測量図.....	208
第4図 塚の峯2号墳断面図.....	208・209
第5図 塚の峯3号墳断面図.....	208・209
第6図 塚の峯2・3号墳断面図.....	208・209
第7図 塚の峯2号墳主体部.....	209
第8図 塚の峯2号墳主体部敷石状況.....	210
第9図 塚の峯3号墳第I・II主体部配置図.....	210
第10図 塚の峯3号墳第I主体部.....	212
第11図 塚の峯3号墳第II主体部.....	213
第12図 塚の峯3号墳第III主体部.....	214
第13図 №39土壙墓.....	215
第14図 墓出土遺物.....	216
第15図 №1住居址.....	220

塚の峯遺跡(72)

第16図	No.1住居址出土遺物	221
第17図	No.2住居址	222
第18図	No.2住居址出土遺物	223
第19図	No.3住居址	225
第20図	No.4住居址	226
第21図	No.4住居址出土遺物	226
第22図	No.5住居址	227
第23図	No.5住居址出土遺物	228
第24図	No.6・7住居址	230
第25図	No.6住居址出土遺物	231
第26図	No.7住居址出土遺物	231
第27図	No.7住居址出土石庖丁	233
第28図	No.8・9住居址	234
第29図	No.8住居址出土遺物	235
第30図	No.9住居址出土遺物	235
第31図	No.10・11住居址	237
第32図	No.10住居址出土遺物	238
第33図	No.12・13住居址、No.24・25遺構	239
第34図	No.12住居址出土遺物	240
第35図	No.14住居址	241
第36図	No.14住居址出土遺物	241
第37図	No.15住居址	242
第38図	No.15住居址出土遺物	242
第39図	No.17・18・19・20・21住居址	243
第40図	No.22住居址	245
第41図	No.22住居址出土遺物	246
第42図	No.23遺構	247
第43図	No.26土壤	248
第44図	No.26土壤出土遺物	248
第45図	No.27土壤	249
第46図	No.27土壤出土遺物	249
第47図	No.32土壤	251
第48図	No.38鍛冶炉	253
第49図	No.40集石遺構	253
第50図	風倒木痕	254

塚の峯遺跡(72)

第51図 遺構に伴わない遺物(1).....	255
第52図 遺構に伴わない遺物(2).....	257
第53図 遺構に伴わない遺物(3).....	259
第54図 遺構に伴わない遺物(4).....	262
第55図 遺構に伴わない遺物(5).....	264

図版目次

- 図版1—1 塚の峯遺跡調査前遠景（南より）
 2 塚の峯2・3号墳調査前遠景（北西より）
- 図版2—1 尾根上トレンチ内の№1住居址検出状況（南東より）
 2 尾根上トレンチ全景（南東より）
- 図版3—1 御立山古墳群遠景（南西より）
 2 御立山古墳群遠景（南東より）
- 図版4—1 塚の峯2号墳調査前全景（西より）
 2 塚の峯3号墳調査前全景（西より）
- 図版5—1 塚の峯2号墳墳丘全景（北西より）
 2 塚の峯3号墳墳丘全景（北西より）
- 図版6—1 塚の峯2・3号墳墳丘全景（北西より）
 2 塚の峯2・3号墳調査後全景（北西より）
- 図版7—1 塚の峯2号墳墳丘断面（北西より）
 2 塚の峯3号墳墳丘断面（北東より）
- 図版8—1 塚の峯2号墳主体部（北より）
 2 塚の峯2号墳主体部（東より）
- 図版9—1 塚の峯2号墳主体部掘り方（北より）
 2 塚の峯2号墳主体部掘り方（西より）
- 図版10—1 塚の峯3号墳第I・II主体部検出状況（北西より）
 2 塚の峯3号墳第I・II主体部木棺痕跡（北西より）
- 図版11—1 塚の峯3号墳第I・II主体部木棺痕跡検出状況（北西より）
 2 塚の峯3号墳第I主体部木棺痕跡検出状況（南西より）
- 図版12—1 塚の峯3号墳第I・II主体部掘り方（北西より）
 2 塚の峯3号墳第II主体部外遺物出土状況（南西より）
- 図版13—1 塚の峯3号墳第III主体部の天井石と遺物出土状況（北西より）
 2 塚の峯3号墳第III主体部天井石除去後状況（北西より）
- 図版14—1 塚の峯3号墳橋梁（南西より）
 2 №40集石遺構（南西より）

塚の峯遺跡(72)

- 図版15—1 №39土墳墓(北東より)
2 №39土墳墓遺物出土状況(南東より)
- 図版16—1 塚の峯遺跡調査後遠景(南より)
2 塚の峯遺跡調査後近景(西より)
- 図版17—1 №1住居址調査状況(西より)
2 №1住居址全景(南東より)
- 図版18—1 №2住居址調査状況(南東より)
2 №2住居址全景(南東より)
- 図版19—1 №3住居址全景(北西より)
2 №4・5住居址調査状況(南東より)
- 図版20—1 №4・5・6・7・10・11住居址全景(北西より)
2 №4・5・6・7・10・11住居址全景(南東より)
- 図版21—1 №5住居址調査状況(西より)
2 №10・11住居址調査状況(南東より)
- 図版22—1 №4住居址遺物出土状況(南より)
2 №5住居址遺物出土状況(南西より)
- 図版23—1 №8・9住居址全景(南東より)
2 №8・9住居址全景(北西より)
- 図版24—1 №14住居址調査状況(北西より)
2 №14住居址調査状況(南東より)
- 図版25—1 №22住居址調査状況(北西より)
2 №22住居址調査状況(南東より)
- 図版26—1 №1住居址西側周辺近景(西東より)
2 №2住居址北西側周辺近景(南東より)
- 図版27—1 №16・17・18・19・20・21住居址近景(南より)
2 №27土墳、№12住居址遺物出土状況(北西より)
- 図版28—1 №26土墳調査状況(南東より)
2 №30土墳調査状況(南西より)
- 図版29—1 塚の峯遺跡調査状況近景(南より)
2 塚の峯遺跡調査後近景(北東より)
- 図版30—1 塚の峯2・3号墳調査風景(北西より)
2 塚の峯遺跡住居址調査風景(東より)
- 図版31 出土遺物(縄文式土器)
- 図版32 出土遺物(弥生式土器)
- 図版33 出土遺物(弥生式土器)

塚の峯遺跡(72)

- 図版34 出土遺物（弥生式土器）
図版35 出土遺物（弥生式土器）
図版36 出土遺物（弥生式土器）
図版37 出土遺物（弥生式土器）
図版38 出土遺物（弥生式土器・土師器）
図版39—1 №7住居址出土石庖丁
2 2号墳出土馬具
3 表面採集鉄滓
図版40 墳墓出土遺物（須恵器・土師器）

第1章 遺跡の地理的環境

塚の峯遺跡は岡山県阿哲郡哲西町大字大竹字塚の峯に所在する。調査予定地はなだらかな丘陵で、近所の人が共同経営を行っている栗園になっていた。この塚の峯遺跡の北東側の丘陵上には、9基の円墳からなる御立山古墳群（註1）が所在し、南西側には二本松遺跡（註2）が所在する。今度の塚の峯遺跡の調査対象は2基の円墳に限定されていたが、この丘陵上には調査対象になっている2基の円墳も含めて、総計4基の円墳が確認されている（第1図）。だから調査予定地外の丘陵の低い位置に存在する円墳を1号墳、調査予定地外の丘陵の高い位置に存在する円墳を4号墳にして、調査対象の2基の円墳を2号墳、3号墳にした。

1号墳は2号墳の南西方向約25mの位置に存在する径約10mの円墳で、処女墳と考えられる。ボーリング棒で内部主体を確認した結果、石室または石棺を有することを確認した。

4号墳は3号墳の北東方向約120mの位置に存在する。径約12~16mの円墳で、栗園を造成する時点に墳頂部が削平されて、内部主体の石材が露出している。

塚の峯遺跡と二本松遺跡の中間の深い谷部分には、南東から北西方向に幅約3mの旧道が存在するが、実はこの道は、古代において備中国と備後国を結ぶ主要道で、塚の峯遺跡から北西方向へ約200m寄った地点には、国境を示す石碑が残っている。「從是備後國」と刻まれている。また後世には、歌人の若山牧水が、学生時代に九州へ帰省する途中にこの地を訪れて詠んだという『幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく』の歌碑が建立されている。

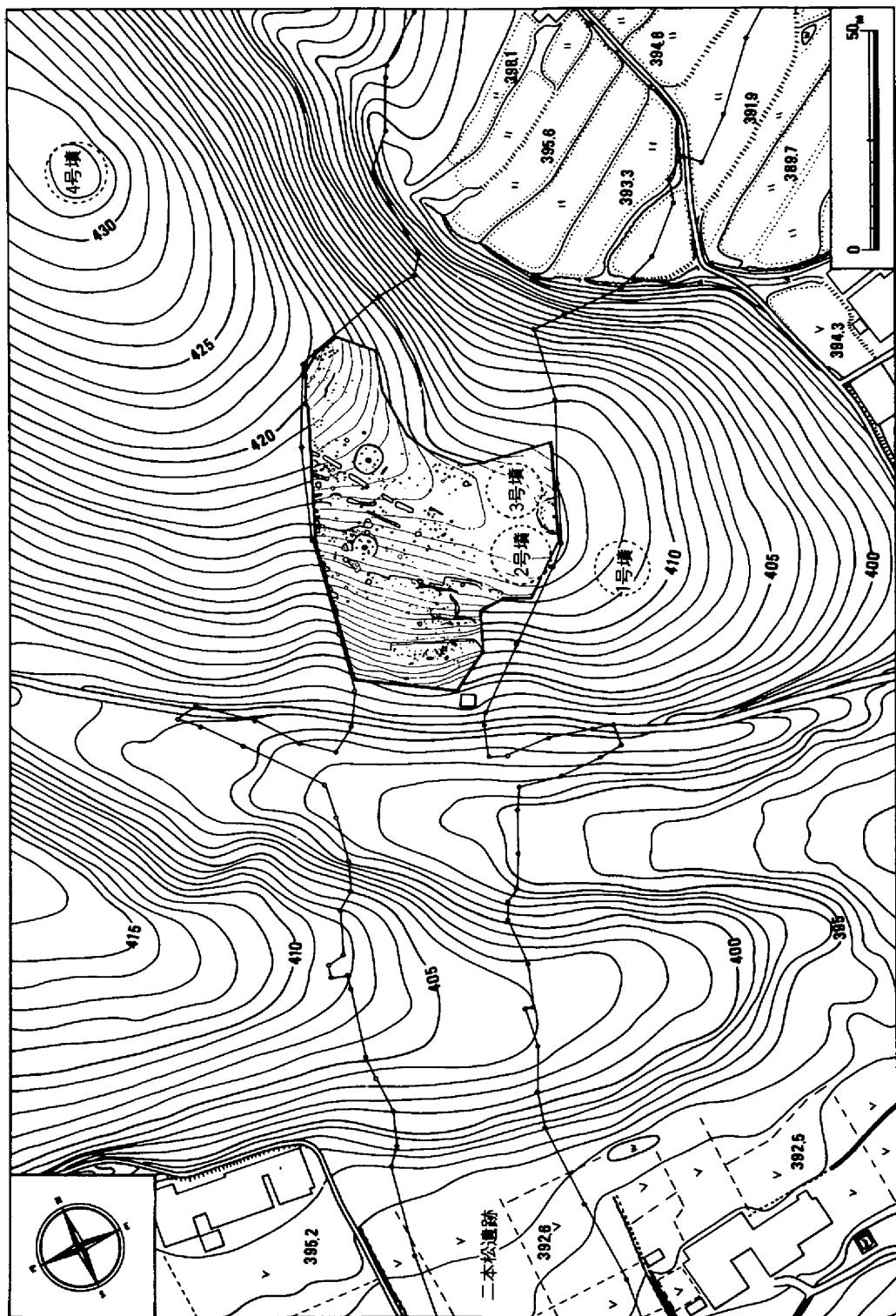
この塚の峯遺跡が所在する丘陵の東方向に面した眼下には、哲西町野馳地区の水田が展開する。哲西町を北流して、やがて高梁川に合流する神代川の水源はこの地域で、分水嶺が現在の岡山県と広島県の県境になっているのである。したがって、塚の峯遺跡は山間部の遺跡であるから、山陽地方、山陰地方および広島県北部地方の文化的影響を、少なからず受けていることが予想された。

哲西町内における遺跡の分布調査結果によると、塚の峯遺跡周辺には丘陵または台地上に所在する古墳群が多い。それに比して集落遺跡の存在は皆無に等しい状況である（註3）。この様相は、遺跡の分布調査の限界に起因すると考える。阿哲郡哲西町大字上神代字平古屋に所在する野田畝遺跡（註4）や、阿哲郡哲西町大字上神代字山根屋に所在する山根屋遺跡（註5）では、古墳が存在する地点に重複して、急斜面であるにもかかわらず弥生時代の集落を形成していたから、塚の峯遺跡にも古墳群と重複して、集落址が存在する可能性が考えられた。

註

- (1) 田仲満雄「阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(15) 岡山県教育委員会 1977年 図版3を参照。
- (2) 伊藤 晃・山崎康平「二本松遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(22) 岡山県教育委員会 1977年
- (3) 註1と同じ。
- (4) 高畑知功・福田正継「野田畝遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(21) 岡山県教育委員会 1977年
- (5) 竹田 勝・岡本寛久「山根屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(22) 岡山県教育委員会 1977年

塚の峯遺跡(72)



第1図 塚の峯遺跡周辺地形図 ($S = \frac{1}{1500}$)

第2章 調査の経過

塚の峯遺跡は、調査実施以前に行われた遺跡の分布調査で『尾根上に2基の円墳が存在する。未調査。』という結果が提示されていた遺跡である。だから、当初の調査対象は、2基の円墳に限定されていたのである。

阿哲郡哲西町大字上神代字平古屋に所在する野田畝遺跡（註1）の調査では、予想外に多数の遺構が検出されたため、調査期間が長期に及ぶ結果になった。したがって、野田畝遺跡の調査作業が表土除去を終了した途中段階の時点で、やむをえず男性の作業員の人を主体にした班を構成して、塚の峯遺跡の調査に着手することにした。2人の調査員が野田畝遺跡と塚の峯遺跡とを別々に担当し、並行して調査を行うことになったのである。

調査に必要な器材の一部を野田畝遺跡より運搬してから、調査予定地の境界を確認して下草刈りを行った。その後、調査予定地内全体にグリッドを設定して、調査前の全体地形測量と2基の円墳を主体にした測量を、西江遺跡を担当していた二宮治夫氏の応援を求めて実施した。作業員の人が2遺跡に別々になって人数が半減してしまったから、2基の円墳の調査をのちに行う計画で、グリッドを基準にしてトレンチ調査を実施することにした。尾根の頂上部の南北方向と東西方向の斜面に、幅4mのトレンチを設定して掘開を行った（図版2）。その結果、北東方向の御立山古墳群（註2）の所在する丘陵に面した斜面には、火山灰性土壤が厚く堆積して遺構は存在しなかったが、尾根の頂上部と南西方向の二本松遺跡（註3）の所在する位置に面した斜面には、弥生時代後期に属する土器片を含む住居址や、遺物を伴わない柱穴状の土壤が検出された。塚の峯遺跡の調査対象が2基の円墳に限定されていたとはいえ、北東斜面を除いた範囲には古墳以外の遺構も存在することが判明したのである。作業員の人が少ない現状も考慮して、2基の円墳以外に新しく検出された遺構の調査では、表土除去作業に重機を導入することにした。そして排土置場を北東斜面の遺構が存在しない場所にした。

塚の峯遺跡と岸本城址（註4）の中間地点は、分布調査では遺跡が確認されていない地点であった。ところが、この地点の中国縦貫自動車道建設工事が開始されることになったので、調査員の高畠は塚の峯遺跡を担当しながら工事に立会うことになった。そして、工事中に新しく岸本下遺跡（註5）と二本松遺跡を発見したのである。だから発掘調査が実施されるまでの間には、遺跡を破壊しないように幾度も工事関係者に指示をしなければならない状況であった。

御立山古墳群は中国縦貫自動車道の路線が決定される以前に、古墳群全体が完全に保存されるよう協議されたものである。ところが工事の設計図によると、1基の円墳の一部が削平されてしまう可能性が考えられたため、塚の峯遺跡を担当していた調査員で現地を確認するとともに、周辺地域の道路予定地内における遺跡の分布調査も行った。

塚の峯遺跡の調査に並行して岸本城址と横田遺跡（註6）の地形測量が行われることになった。そのため作業員の人が確保できない状況が生じ、塚の峯遺跡の作業員の人々によって両遺跡の下草刈りを行うこととしたのである。

塚の峯遺跡(72)

4月になると、塚の峯遺跡の調査が途中の段階で調査員の移動が行われた。高畠は津山市の国道179号バイパス関連遺跡である二宮遺跡(註7)の調査を担当することになった。後任として岡山市と倉敷市の都市計画道路(富本町・三田線)建設に伴って発掘調査が行われていた川入遺跡と上東遺跡(註8)を担当していた中野が、塚の峯遺跡の調査を担当することになった。したがって、4月上旬に塚の峯遺跡で仕事の引継ぎを行った。

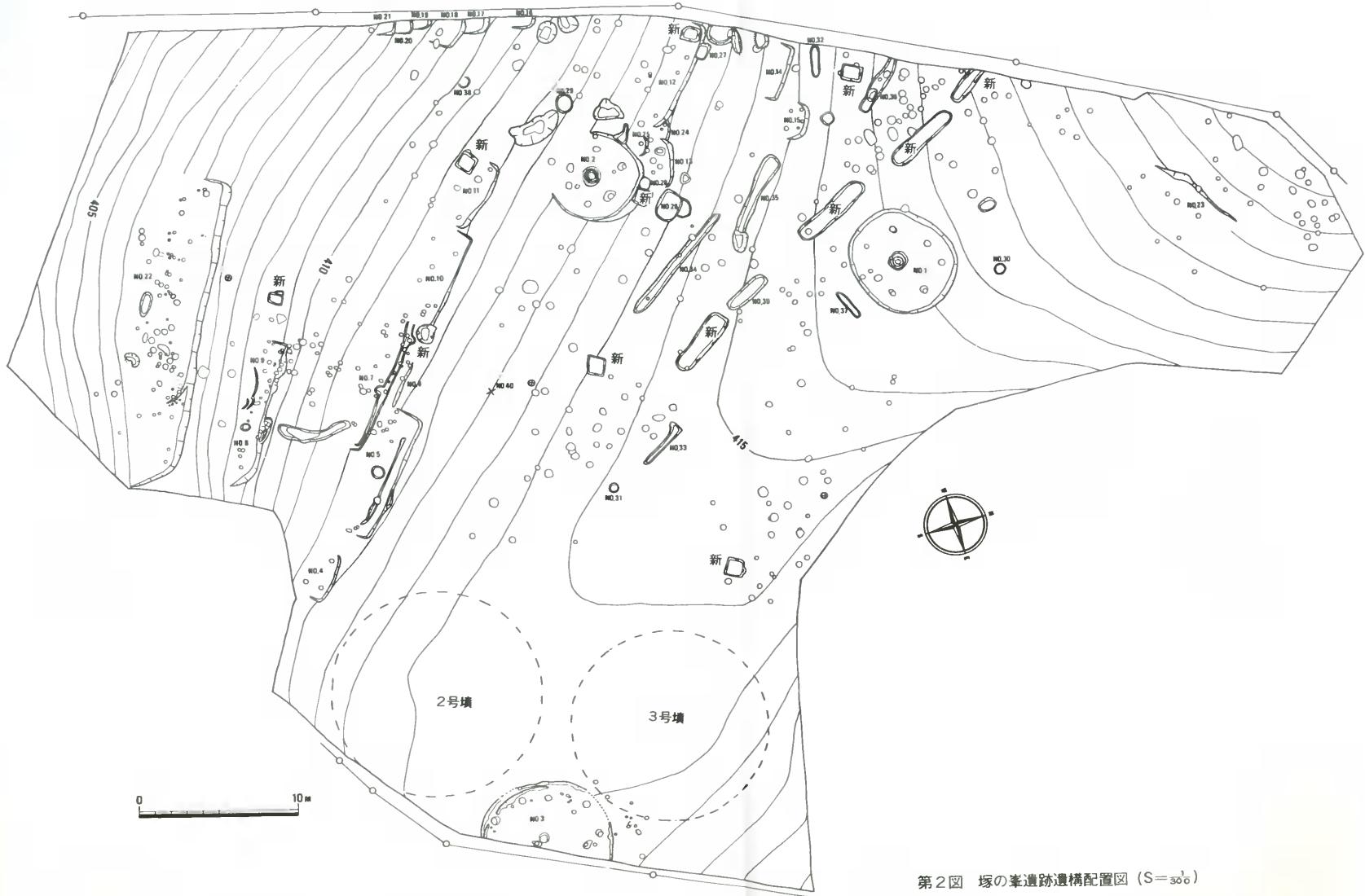
二本松遺跡の調査が開始されてからは、塚の峯遺跡と近接していることもあって、器材を運搬したり幾多の作業員の人が応援に出かけたりして、共同で作業を行なった。

野田畝遺跡の調査が完了し、塚の峯遺跡へすべての作業員の人が合流して発掘作業が急激に進行するようになると、阿哲郡哲西町大字畠木字四日市に所在する忠田山遺跡(註9)の調査に着手しなければならなくなつた。そこでやむおえず男性の作業員の人を主体にした班を構成して、忠田山遺跡の調査を塚の峯遺跡と並行して進めることにした。このような状況から、2人の調査員も塚の峯遺跡と忠田山遺跡を別々に担当することになったのである。

以上のように塚の峯遺跡の調査は、ほかの遺跡の発掘調査を応援しながら、野田畝遺跡または忠田山遺跡の調査と並行して行ったため、作業員の人が減少するという結果が生じ、重機を導入して表土除去作業を行なつたにもかかわらず、調査期間が長期になってしまったのである。

註

- (1) 高畠知功・福田正継「野田畝遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(21) 岡山県教育委員会 1977年
- (2) 田仲満雄「阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(15) 岡山県教育委員会 1977年
- (3) 伊藤 晃・山磨康平「二本松遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(22) 岡山県教育委員会 1977年
- (4) 松本和男「岸本城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(22) 岡山県教育委員会 1977年
- (5) 伊藤 晃・山磨康平「岸本下遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(21) 岡山県教育委員会 1977年
- (6) 岡田 博・秀島貞康他「横田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(23) 岡山県教育委員会 1978年
発掘調査報告書が近刊の予定である。
- (7) 岡山県教育委員会が1976年4月から発掘調査を継続中である。
- (8) 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(16) 岡山県教育委員会 1977年
- (9) 福田正継・中野雅美「忠田山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(23) 岡山県教育委員会 1978年
発掘調査報告書が近刊の予定である。



第2図 塚の峯遺跡遺構配置図 ($S=30^{\circ}$)

塚の峯遺跡(72)

遺構一覧表(表-1)

遺構番号	遺構の種類	図番号	図版番号	出土遺物	備考
1	住居址	15	17	土器	円形 7本柱で中央ピットが存在する。
2	住居址	17	18	土器	円形 5本柱で中央ピットが存在する。
3	住居址	19	19-1	土器	円形 建て直しを行っている。
4	住居址	20	19-2・20	土器	小型で4本柱を有する。
5	住居址	22	20・21-1	土器	3軒の住居址が重複している。
6	住居址	24	20	土器	№5・7住居址と重複している。
7	住居址	24	20	石庖丁・土器	幅の広い壁体溝が存在するだけである。
8	住居址	28	23	土器	№9住居址と重複する。
9	住居址	28	23	土器	№8住居址と重複する。
10	住居址	31	20	土器	№7・11住居址の中間に存在する。
11	住居址	31	20	土器	№10住居址脇に存在し、4本柱である。
12	住居址	33	26-2・27-2	土器	2軒の住居址かもしれない。
13	住居址	33	26-2	土器	№2住居址の北方向に存在する。
14	住居址	35	24	土器	小型で柱穴は検出できなかった。
15	住居址	37	26-1	土器	№14住居址の東方向に存在する。
16	住居址	2	27-1	—	壁体の一部を検出しただけである。
17	住居址	39	27-1	—	壁体の一部を検出しただけである。
18	住居址	39	27-1	—	壁体の一部を検出しただけである。
19	住居址	39	27-1	—	壁体の一部を検出しただけである。
20	住居址	39	27-1	—	壁体の一部を検出しただけである。
21	住居址	39	27-1	—	壁体の一部を検出しただけである。
22	住居址	40	25	土器	数軒の住居址が重複している。
23	不明	2	29-2	—	住居址になるのかもしれない。
24	不明	33	26-2	—	住居址になるのかもしれない。
25	不明	33	26-2	—	住居址になるのかもしれない。
26	土壙	43	28-1	土器	大型で隅丸長方形を呈する。
27	土壙	45	27-2	土器	隅丸長方形で袋状を呈する。
28	土壙	17	26-2	—	楕円形で袋状を呈する。
29	土壙	2	29-1	—	楕円形で№2住居址の西方向に存在する。
30	土壙	2	—	—	円形で№1住居址の北方向に存在する。
31	土壙	2	6	—	円形で尾根上に存在する。

塚の峯遺跡(72)

遺構番号	遺構の種類	図番号	図版番号	出土遺物	備考
32	土壙	47	26-1	—	土壙墓になるのかもしれない。
33	溝状遺構	2	—	—	尾根に平行して直線状を呈する。
34	溝状遺構	2	26-1	—	尾根に平行して直線状を呈する。
35	溝状遺構	2	26-1	—	尾根に平行して直線状を呈する。
36	溝状遺構	2	26-1	—	尾根に平行して直線状を呈する。
37	溝状遺構	2	26-1	—	尾根に直交して直線状を呈する。
38	鍛冶炉	48	—	炭	炭と焼土が堆積している。
39	土壙墓	13	15	鉈・土器	長大な隅丸長方形を呈する。
40	集石遺構	49	14-2	土器	土器棺墓になるのかもしれない。

塚の峯2号墳

円墳

周辺が存在する。

主体部1基

竪穴式石室

盗掘をうけている。

天井石は存在しない。

側壁には柱状の石を使用している。

床面には砂利を敷いている。

出土遺物……須恵器・土師器・馬具

塚の峯3号墳

円墳

周辺と橋梁が存在する。

主体部3基

第Ⅰ主体部

土壙

木棺痕跡が存在する。

出土遺物なし。

第Ⅱ主体部

土壙

木棺痕跡が存在する。

出土遺物……土師器

第Ⅲ主体部

石蓋土壙

削り痕跡が存在する。

蓋石1枚

小口部分に石を立てている。

出土遺物……須恵器・土師器

第3章 遺構・遺物について

塚の峯遺跡の調査対象は、2基の古墳に限定されていたのであるが、調査開始当初に実施したトレーニング調査によって、弥生時代に属する遺構も存在していることが判明したのである。中国縦貫自動車道予定地内で検出した遺構は、住居址22以上、土壙7、集石遺構1、溝状遺構5、住居址になる可能性を有する遺構3、古墳2基（塚の峯2号墳・塚の峯3号墳）、土壙墓1、鍛冶炉1である。出土遺物は、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、石庖丁、鉈、馬具、鉄滓である。個々の遺構・遺物について説明したい。なお、古墳と土壙墓から出土した遺物は、まとめて観察表にした。

第1節 塚の峯2号墳

塚の峯遺跡の所在する丘陵上には、4基の古墳が確認されている。中国縦貫自動車道予定地内に存在するのは、2号墳と3号墳である。両古墳とも調査を行った範囲の東端に位置し、2号墳の周辺の一部は道路予定地外の部分になるため、調査ができなかった。2号墳と3号墳の墳丘の中心を結んで、土層を観察する畦（A—B）を残し、その畦に直交するように、2号墳と3号墳の墳丘の中心を通る畦（C—D、E—F）を設定して調査を進めた。2号墳の主体部は、後世に盗掘をうけている。

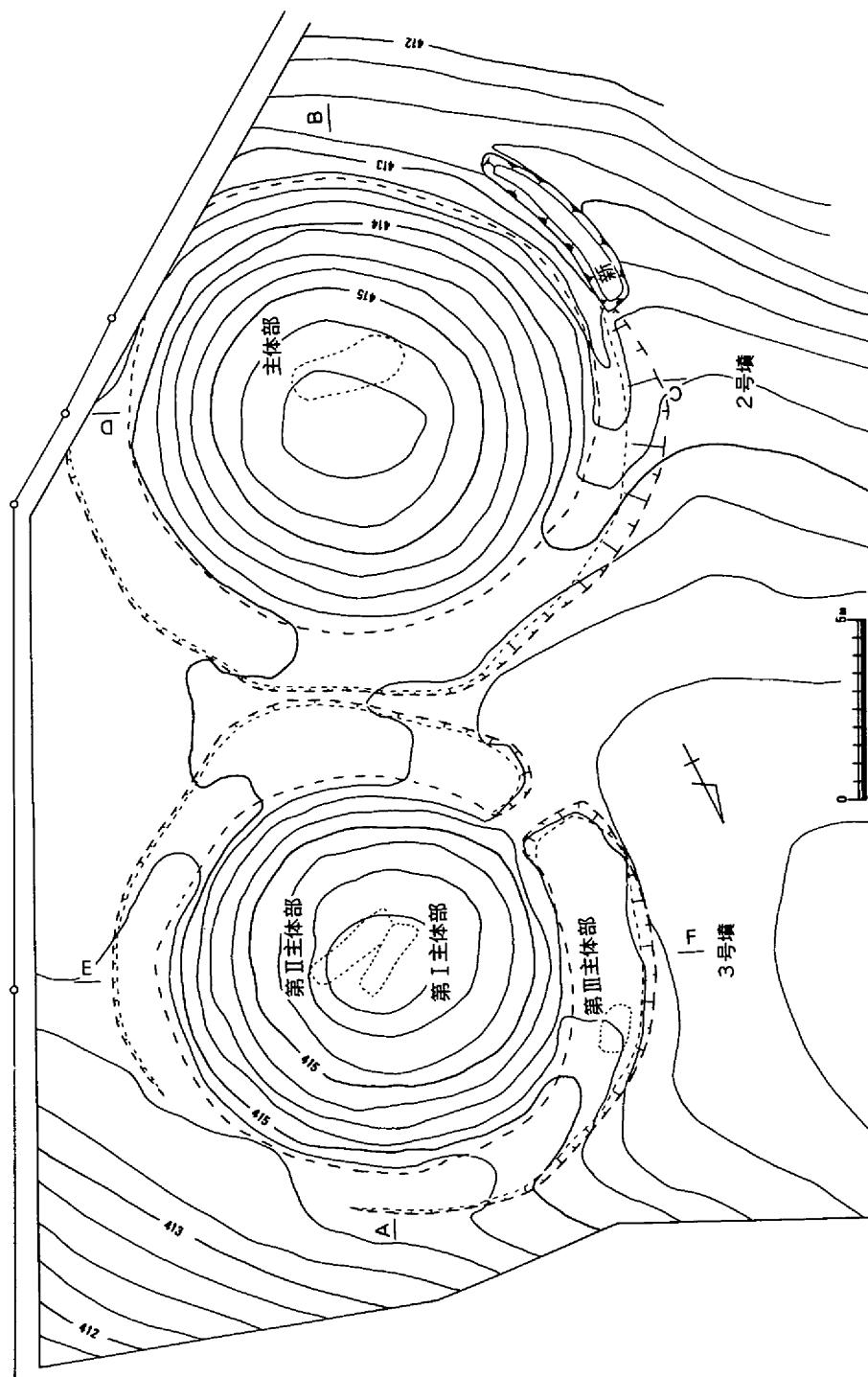
墳丘（第3・4・6図、図版5—1・6・7—1）

直径が1250～1300cm（周辺内周）を測る円墳である。墳丘の高さは、旧地表面から約140cmを測る。墳丘の断面には、帯状を呈する層序が認められた。主体部は1基で、盛土を行って墳丘の形状を整えたのちに構築している。墳頂部の表土から、須恵器・土師器の破片と、馬具になるとされる鉄製品を採集した。盗掘されたときに、主体部から掘出されたものと考える。墳丘には、埴輪や葺石等の外部構造物は存在しなかった。

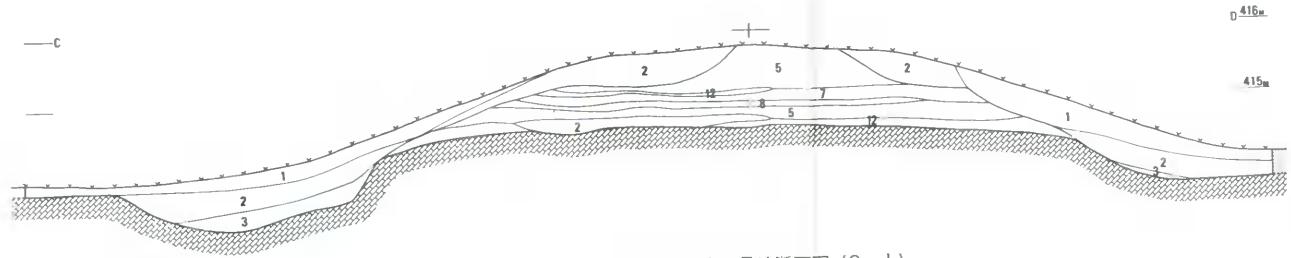
主体部（第7・8図、図版8・9）

ほぼ東西方向に主軸を置く竪穴式石室である。後世に盗掘をうけていたから、床面が大きく抉られていた。主体部の掘り方を表土直下で検出したが、墳丘の中央からやや南方向にずれた位置になっていた。掘り方の断面は、上位では約45°の傾斜になっていたが、下位ではほぼ垂直になって床面へ到達していた。石室の側壁は、柱状を呈する大きな石を2段に積上げていた。南側壁は、基底部に長さ約220cm、厚さ15×20cmを測る柱状を呈する石を置き、さらにその上に長さ約170cm、厚さ12×12cmを測る石を据えていた。北側壁は、基底部に厚さ12×20cmを測る2石を組合せて置き、さらにその上に長さ200cm、厚さ15×25cmを測る柱状を呈する石を据えていた。南北両側石とも、基底部に置かれた石の面が垂直になるようにしていたものの、上位に据えられた石は、わずかに持送り状になっていた。小口部分の石は、盗掘をうけたときに1～2段の石材が除去されて、基底部の石が残存しているだけであった。東小口部分には、側壁に使用しているものと同質の石を並べていた。どちらも長さ約30cmを測る。西小口部分には、1個の石を検出しただけであった。長さ約40cmを測る。天井石は確認できなかった。盗掘されたときに持去られたのか、石室を構築した当時から天井石を有しなかった

塚の峯遺跡(72)

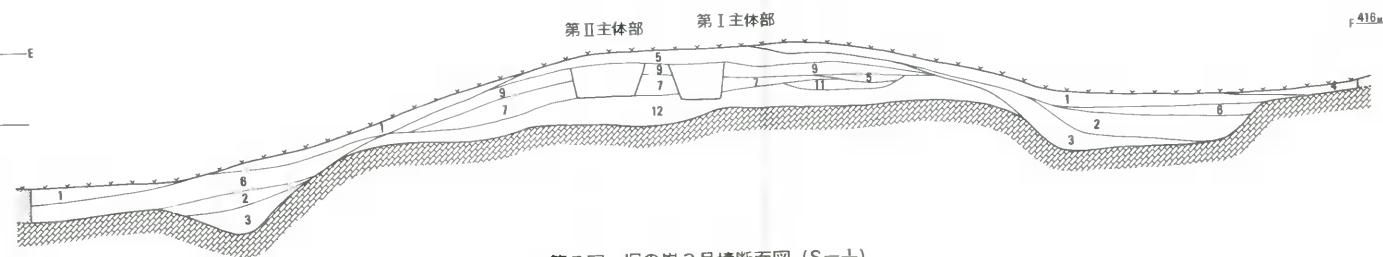


第3図 塚の峯2・3号墳丘測量図 ($S= \frac{1}{250}$)

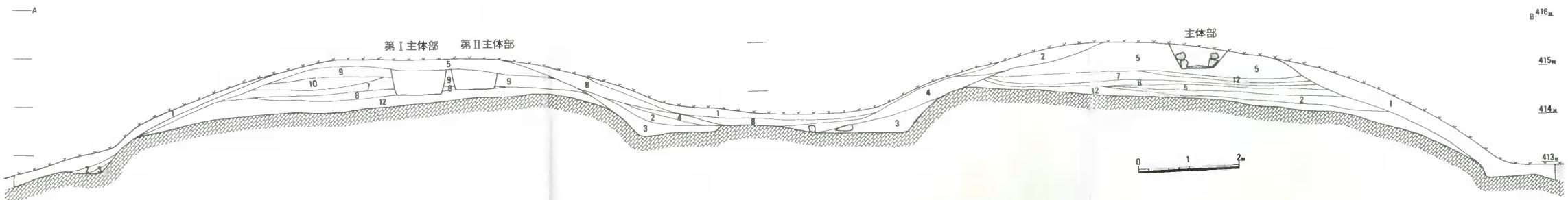


第4図 塚の峯2号墳断面図 ($S=\frac{1}{80}$)

1. 褐色土
2. 暗褐色土
3. 淡褐色土
4. 暗褐色土
5. 黄灰色土
6. 淡黄褐色土
7. 黄灰褐色土
8. 暗黄灰色土
9. 灰褐色土
10. 黄褐色土
11. 暗黄褐色土
12. 黑褐色土

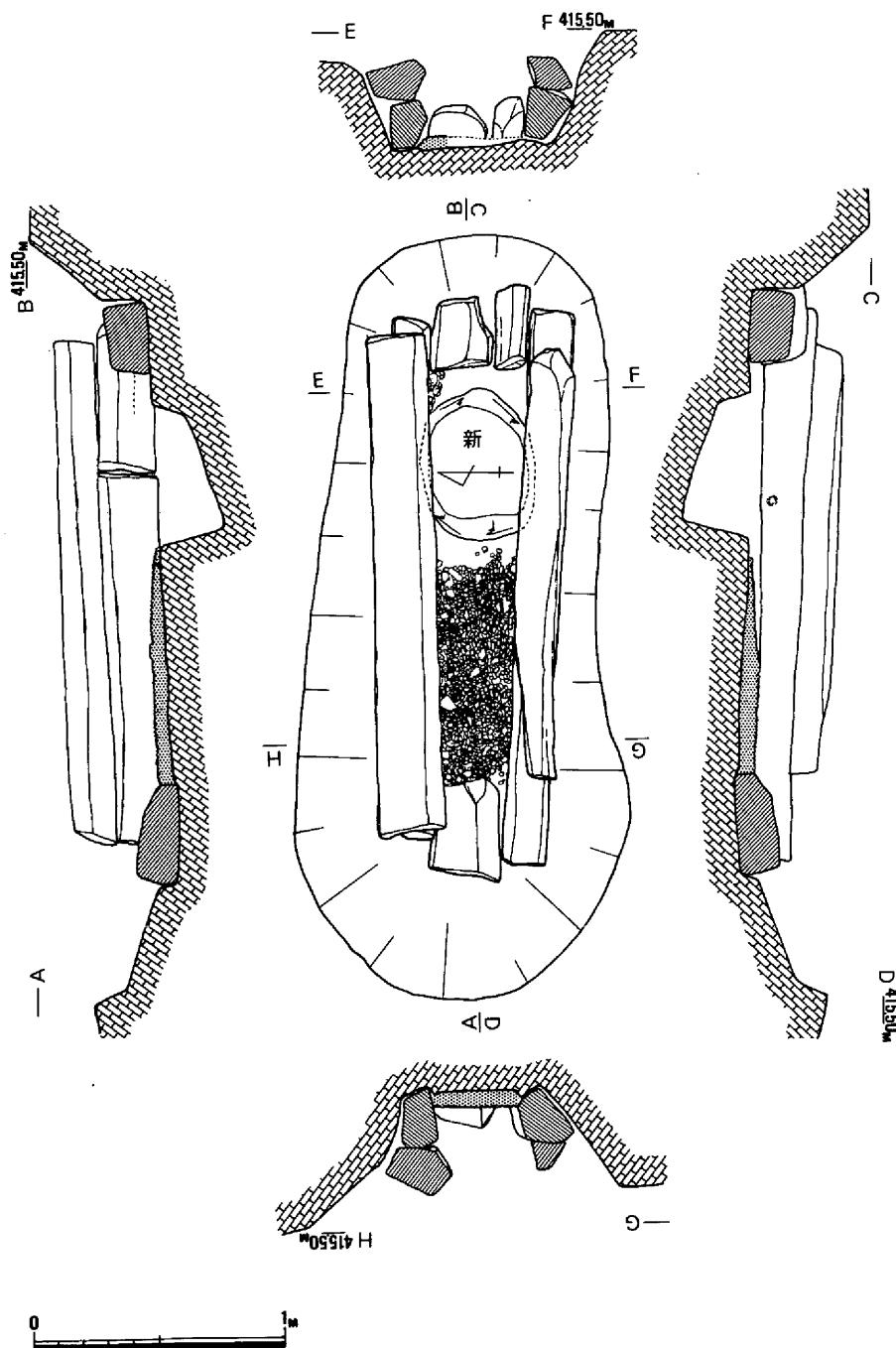


第5図 塚の峯3号墳断面図 ($S=\frac{1}{80}$)



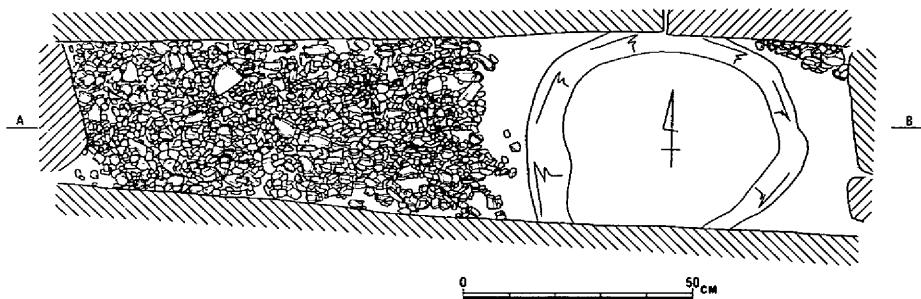
第6図 塚の峯2・3号墳断面図 ($S=\frac{1}{80}$)

塚の峯 遺 跡 (72)



第7図 塚の峯2号墳主体部 ($S=\frac{1}{30}$)

塚の峯 遺跡 (72)

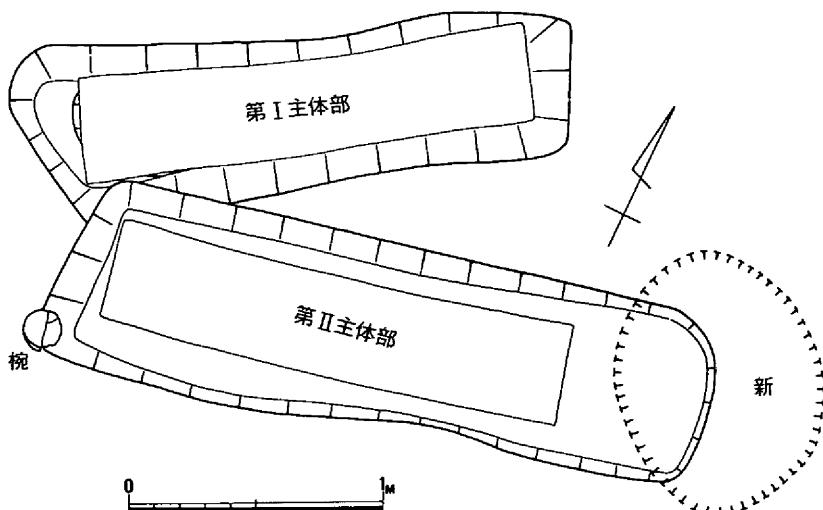


第8図 塚の峯2号墳主体部敷石状況 ($S=\frac{3}{50}$)

のか不明である。石室の内法は、長軸 250 cm、短軸 45~65 cm を測り、東小口部分が西小口部分よりも約 20 cm 広くなっていた。被葬者の頭位は、東方向になると見える。石室の高さは、天井石が存在しないのではっきり断定できないが、約 35 cm を測るであろう。床面の一部には、盗掘された痕跡を残していたが、床面全体に 1~5 cm 大の砂利を約 5 cm の厚さに敷かれていた。盗掘をうけていたから、石室内の遺物は、器形の判明しない土師器片を数点検出したにすぎない。

周溝 (第 3・4・6 図、図版 5—1・6)

丘陵の稜線付近の残存状態は良好であるが、南方向は丘陵の斜面に位置するため、確認できなかつた。一部が道路予定地外の範囲になるから、調査することができない部分が存在した。南西方向の周溝内には、後世に掘開された新しい溝が存在していた。周溝の幅は、検出面で 70~110 cm、底部で 30~100 cm を測る。断面は U 字形を呈し、検出面からの深さは約 60 cm である。周溝をめぐらせて生じた土砂を、墳丘に利用したと考える。周溝内に遺物は存在しなかつた。



第9図 塚の峯3号墳第I・II主体部配置図 ($S=\frac{1}{30}$)

第2節 塚の峯3号墳

塚の峯2号墳の北東方向に存在する。2号墳に酷似した形状を呈するが、2号墳よりもわずかに規模が小さい。墳丘内から2基の主体部を検出したが、一部には盜掘痕が認められた。北西方向の周溝内には、石蓋土壙墓が存在した。この3号墳には周溝を横断する橋梁(図版14-1)が存在したが、2号墳では確認できなかったものである。

墳丘(第3・5・6図、図版5-2・6・7-2)

直径が1100~1140cm(周溝内周)を測る円墳である。墳丘の高さは、旧地表面から約130cmを測る。墳丘の断面には、2号墳と同様に帯状を呈する層序が認められた。墳丘内の主体部は2基で、どちらも盛土を行って墳丘の形状を整えたのちに構築していた。墳丘には2号墳と同様に埴輪や葺石等の外部構造物は存在しない。2号墳と3号墳を結ぶA-B断面で、両古墳の新旧関係を追求したにもかかわらず、確認することができなかった。墳丘の形状から推察して、3号墳は2号墳とほぼ同時期に構築されたと考える。

第I主体部(第9・10図、図版10・11・12-1)

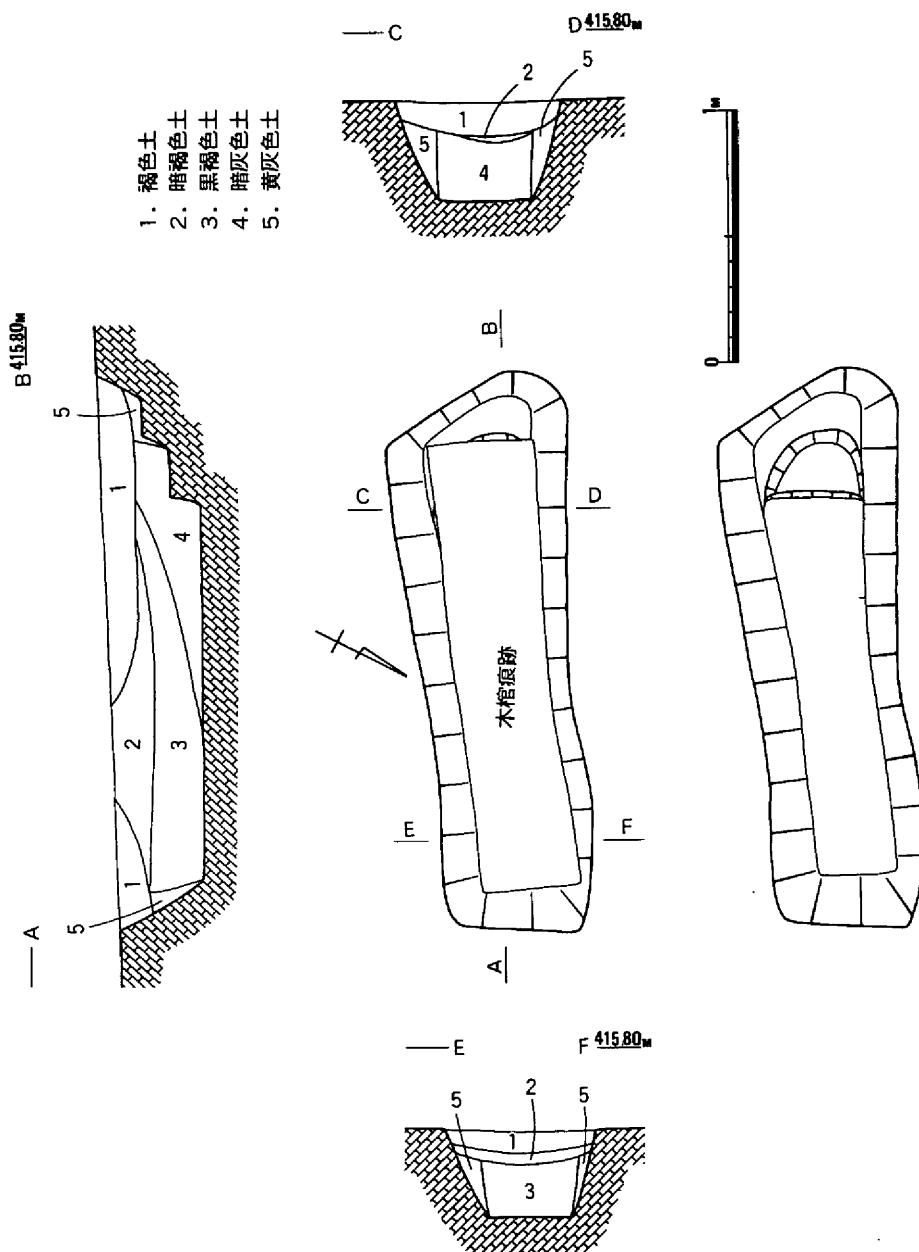
3号墳の墳丘内からは、一部分を接する状態で2基の主体部を検出した。どちらも木棺直葬の土壙である。北側に位置するものを第I主体部、南側に位置するものを第II主体部とした。

第I主体部の主軸方向は、N-57°-Eである。第II主体部よりも古い段階に構築されたものである。平面形は長大な隅丸長方形を呈し、木棺痕跡を検出した。木棺痕跡の平面形は、縦179cm、横37~42cmを測る長方形を呈する。わずかに彎曲しているのは、土圧の影響によると考える。断面形は、上面がわずかに凹んで開いていた。木棺痕跡の立上がりの最大値は、28cmを測る。木棺痕跡の底部の幅は、土壙の床面の幅に一致する。木棺痕跡内には、斜め方向の層序が認められ、北東小口部分から埋没した状況を呈していた。土壙の南西端は、西方向へ張出していた。検出面での長軸は219cm、短軸は53~72cmを測る。検出面から床面までの深さは38cmを測り、南西端は3段掘りになっていた。床面の長軸は150cm、短軸は31~39cmを測り、南西小口部分がわずかに広くなっていた。土壙内を精査したにもかかわらず、遺物は検出できなかった。

第II主体部(第9・11図、図版10・11・12-1)

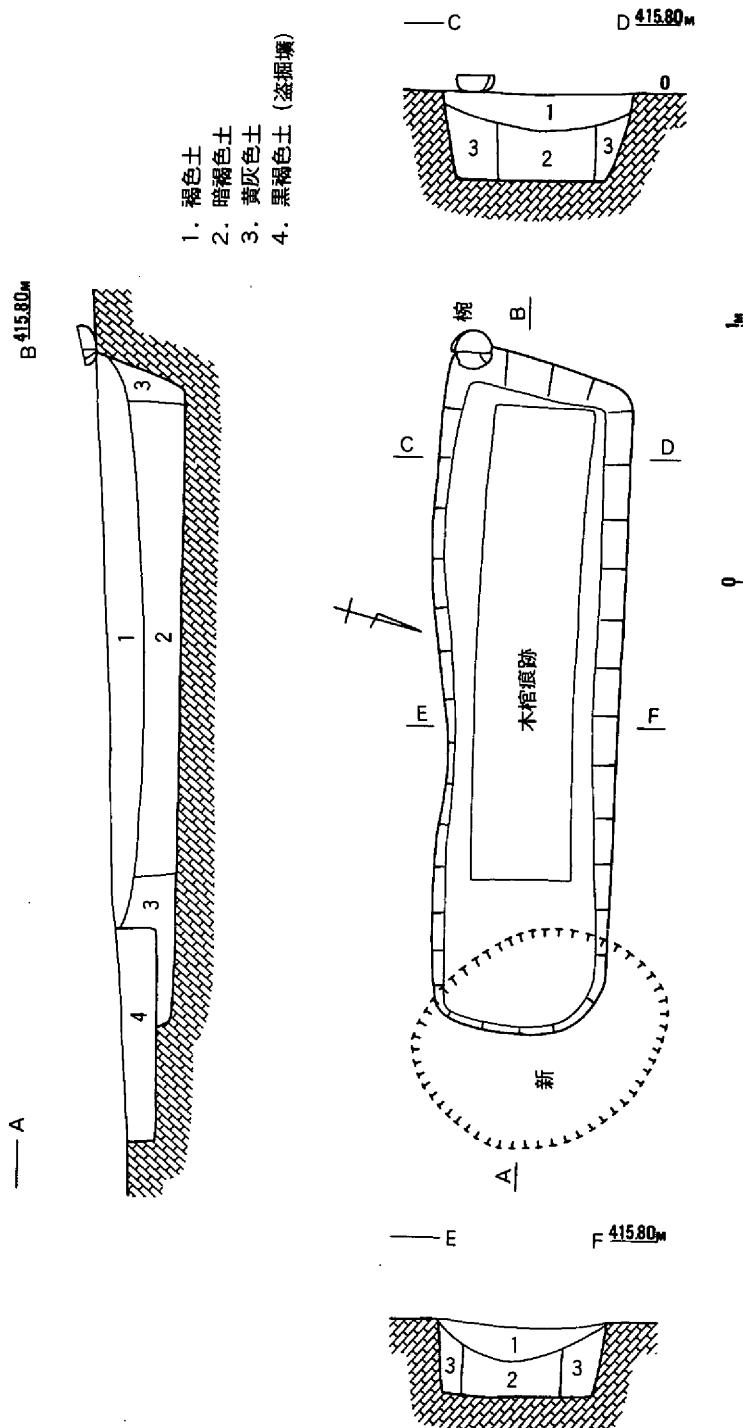
主軸方向はN-79°-Eである。東小口部分には、盜掘痕が認められた。第I主体部よりも新しい段階に構築されたものである。平面形は長大な隅丸長方形を呈し、西小口部分へ片寄った位置に木棺痕跡を検出した。木棺痕跡の平面形は、縦187cm、横39~40cmを測る長方形を呈する。第I主体部と同様にわずかに彎曲しているのは、土圧の影響によると考える。断面形は、上面がわずかに凹んだ長方形を呈する。木棺痕跡の立上がりの最大値は22cmを測る。土壙の西小口部分は南西方向へ張出し、掘り方に接して土師器の椀が出土した(図版12-2)。土壙の検出面での長軸は268cm、短軸は66~75cmを測る。検出面から床面までの深さは、西小口部分で35cmを測る。床面の長軸は250cm、短軸は54~60cmを測り、西小口部分がわずかに広くなっていた。土壙内を精査したにもかかわらず、遺物は検出できなかった。

塚の峯遺跡(72)



第10図 塚の峯3号墳第I主体部 ($S=\frac{1}{3}S$)

塚の跡遺跡(72)



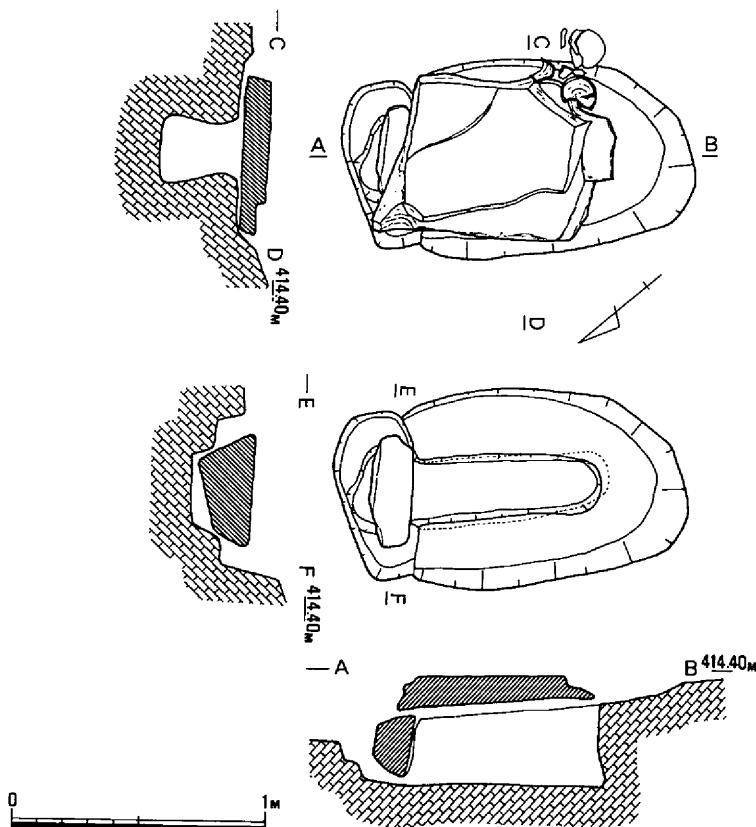
第11図 塚の跡3号墳第II主体部 ($S = \frac{1}{30}$)

塚の峯遺跡(72)

第Ⅲ主体部(第12図、図版13)

3号墳北西の周溝内に位置する石蓋土壙である。主体部の主軸方向は南西—北東で、基盤層の黄褐色土面を2段掘りにしていた。上段の平面形は約80×140cmの楕円形を呈し、検出面からの深さが30~35cmを測る。この掘り方内に1枚の天井石が存在した。約60×80×10cmの板石を使用していた。主軸の南西側は地形がわずかに低いため、小口部分の石で高さを調整していた。墓壙内の床面の計測値は、長軸約80cm、短軸約35cm、天井石からの深さ約30cmを測り、断面が袋状を呈する。側壁には、のみ状工具で掘られたと思われる幅約3cmの痕跡が認められた。墓壙内に遺物は存在しなかったが、天井石上面の掘り方に接して、須恵器の杯身1、土師器の壺1が出土した。

この石蓋土壙の埋葬施設と3号墳の関係は、3号墳の周溝がすでに存在している段階で、新しく石蓋土壙を構築していた。したがって、3号墳の第Ⅲ主体部とせずに、3号墳とは別の埋葬施設とすべきかもしれない。



第12図 塚の峯3号墳第Ⅲ主体部($S=\frac{1}{30}$)

塚の峯遺跡(72)

周溝(第3・5・6図、図版5—2・6・14—1)

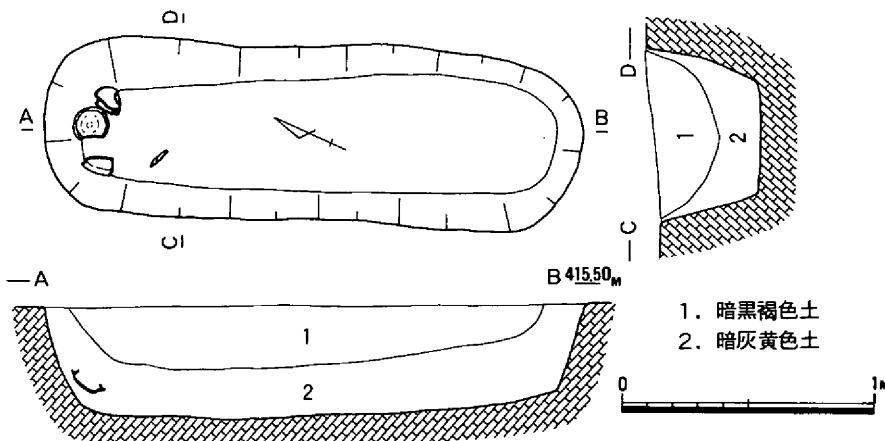
2号墳に面した丘陵稜線付近の残存状態は良好であるが、東方向は丘陵の斜面に位置するため、確認することができなかつた。周溝の幅は、検出面で100~240cm、底部で90~220cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは約60cmである。周溝をめぐらせて生じた土砂を、墳丘に利用したと考える。周溝内には、先に記した石蓋土壙墓(第Ⅲ主体部)が存在した。また西方面には、周溝を横断する橋梁を検出している。

No.39土壙墓

遺構(第13図、図版15)

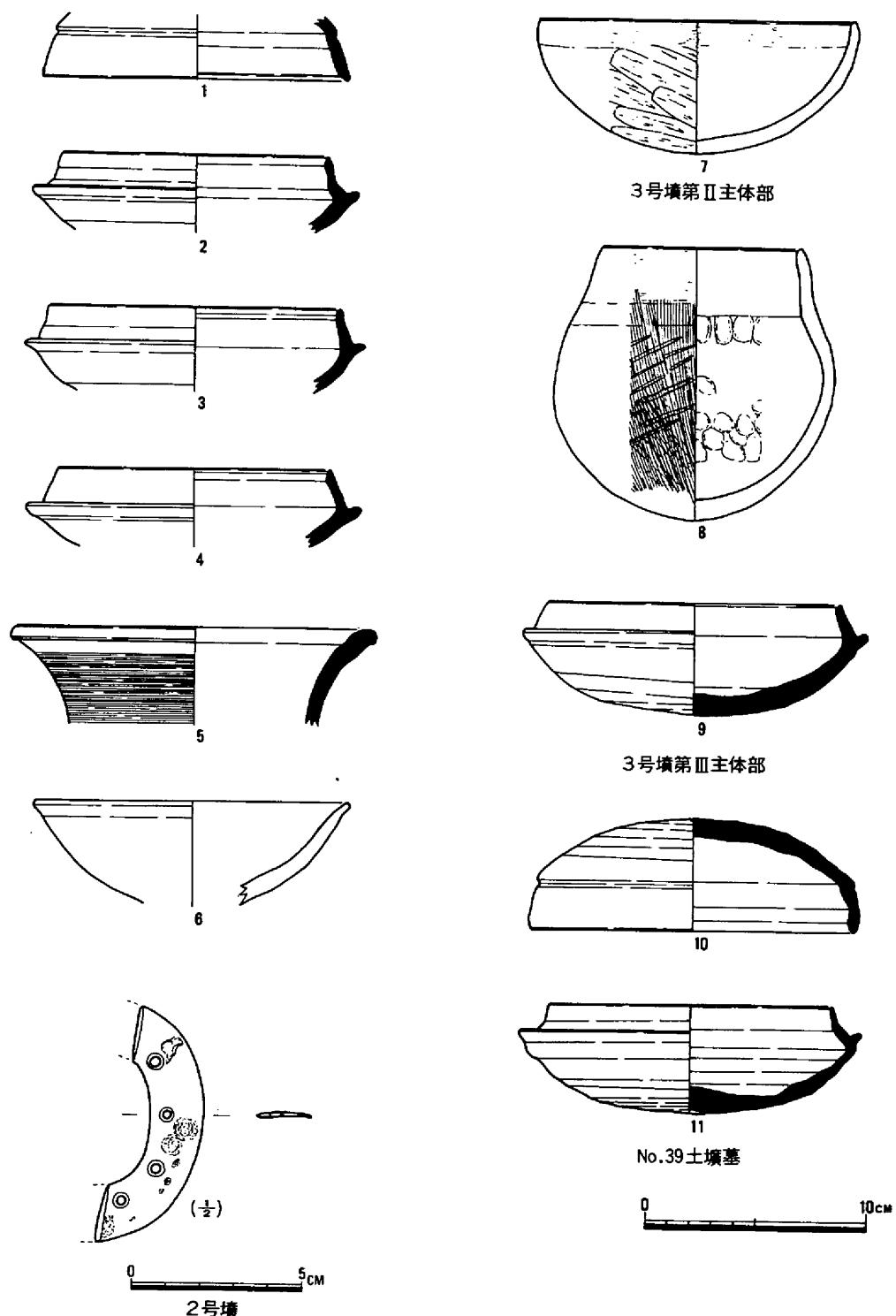
丘陵の稜線上よりやや南西方向に下った斜面で、No.33溝状遺構とNo.35溝状遺構の中間に存在する。平面形は長大な隅丸長方形を呈し、主軸方向が丘陵の稜線に平行していた。検出面では長軸が215cm、短軸の最大幅が70cmを測る。床面では長軸が188cm、短軸の最大幅が43cmを測り、南東方向がわずかに広くなっていた。検出面から床面までの深さは、45cmである。土壙内の覆土は2層で、上位には暗黒褐色、下位には暗灰褐色土が堆積していた。土壙内の北西端から、須恵器の杯1対と鉈1が出土した。いずれも床面から数cm浮いた状態で検出したのである。須恵器の杯は、塚の峯2号墳と塚の峯3号墳から出土したものより後出的な要素が認められる。鉈は全長12cmを測るが、腐蝕が著しくて詳細は不明である。

以上に説明した塚の峯2号墳、塚の峯3号墳、No.39土壙墓の出土遺物については、のちに記載している観察表(表—2・3)を参照願いたい。



第13図 No. 39土壙墓 ($S=\frac{1}{30}$)

塚の峯遺跡(72)



第14図 墳墓出土遺物 ($S = \frac{1}{3}$)

塚の峯遺跡(72)

須恵器観察表(表-2)

器形	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	1	口径 13.6cm	天井部と口縁を区別している稜線は、やや丸味をおびるもの、外方に突出している。口縁部は外方向に開き、端部内側には凹線を有する。	口縁部内外面とも横ナデを施している。	色調：灰色 胎土：3.0mm以下の石英、長石粒を含み、粗い。 焼成：良好
杯	2	口径 11.8cm	立上がりは、最初に内傾して途中で垂直に延びる。口縁端部の内側に稜をわずかに残す。		色調：暗灰色 胎土：0.5mm以下の砂粒を含み、精良堅緻。 焼成：良好 ロクロ：右回り
杯	3	口径 13.0cm	立上がりは、ほぼ垂直に延びる。立上がり端部、受部端部は丸くおさめる。		色調：灰色 胎土：2.0mm以下の石英、長石：黒色粒を含む。 焼成：良好
杯	4	口径 12.2cm	立上がりは、内傾の度合が大きい。口縁端部には、稜線が残る。	同一破片から観察すると、底部の内側中央に、仕上げナデを施している。	色調：灰色 胎土：焼成は、1と類似。 ロクロ：右回り
広口壺	5	口径 15.8cm	口縁部はゆるやかに外反し、端部は下方にやや突出させている。	口縁部から頸部外面には、カキ目を施している。	色調：暗灰色 胎土：1.5mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好
杯	9	口径 13.2cm 器高 5.0cm	立上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめている。全体的に器壁が厚い。	底部の内面中央は仕上げナデ、ほかは横ナデを施している。	色調：暗灰色 胎土：1.0mm以下の石英、長石：黒色粒を含む。 焼成：やや不良 ロクロ：右回り 体部の一部にススの付着を有する。
蓋	10	口径 14.6cm 器高 5.0cm	口縁部はやや内傾し、端部内側に稜線を残す。天井部と口縁部を区別する稜は丸くなり、ほとんど突出しない。全体的に器壁が厚い。		色調：暗灰色 胎土：2.0mm以下の石英、長石粒を含み、精良である。 焼成：良好 ロクロ：右回り 11とセット
杯	11	口径 12.8cm 器高 4.8cm	口径・形態は、蓋(10)に類似して大型である。立上がりは最初に内傾し、途中で垂直に延びる(2と類似)。立上がり端部と受部端部は、丸くおさめている。全体的に凹凸が著しい。	底部中央部は、ヘラ削りをせず未調整(径2~2.5cm)。底部の内側中央は、仕上げナデを施している。	色調 胎土 焼成 } 10と類似する。 ロクロ：右回り

塚の峯遺跡(72)

土師器観察表(表-3)

器形	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	6	口径 14.0cm	杯部は、底部から内巣しながら立上がり、口縁端部で外反している。	口縁端部は横ナデを施し、そのほかは観察不可能である。	色調：褐色 胎土：0.5mm以下の雲母、石英、長石を多く含む。 焼成：不良
碗	7	口径 14.2cm 器高 5.9cm	やや偏平な底部から、上方へ彎曲し、口縁部では内巣する。口縁端部には、面を有する。	外面は、口縁直下の体部から底部にかけて、手持ちによるヘラ削りを行っている。 口縁部および内面は、布か皮によるていねいなナデを施している。	色調：淡赤褐色 胎土：0.5mm以下の雲母、石英、長石類を多く含む。 焼成：良好 胴部下半に1箇所黒斑を有する。
壺	8	口径 9.4cm 器高 12.2cm	口縁部は、頸部からやや内傾気味に立上がる。 口縁端部は丸くおさめている。胴部は球形で、底部は丸底である。	口縁部外面は、ていねいなナデを施し、胴部外面は、右上がりの叩きで整形したのちに、細かい縦方向の刷毛で調整している。	色調：褐色 胎土：3.0mm以下の雲母、石英、長石粒を含む。 焼成：良好 胴部下半に1箇所黒斑を有する。

第3節 住居址

塚の峯遺跡で検出した住居址には、円形を呈するものと、短冊形または半月形を呈するものがある。後者の住居址は丘陵の斜面に位置するため、削平されて詳細は不明である。

No.1 住居址

遺構(第15図、図版17)

この住居址は、発掘調査開始当初に掘開した丘陵上のトレンチで確認したものである。丘陵稜線上の海拔416mラインに位置し、径620~690cmを測る歪んだ円形の竪穴住居址である。丘陵稜線に直交する方向が若干間のびする。柱穴はP₁~P₇の7本柱で、柱間は160~240cmである。柱穴の深さは、80~90cmと深くてしっかりしている。住居址の中央部には、径約70cmの中央ピットを検出した。中央ピットの周囲には、基盤層である黄褐色土を削り出して幅15~20cmの円堤がある。中央ピットの深さは約50cmで、内部には炭化物や焼土の混入が認められた。壁体溝は幅10~20cm、深さ約10cmであった。遺物として床面で若干量の土器片が出土した。

遺物(第16図)

1は壺形土器の口縁部と考える。比較的器壁の厚い頸部から口縁部にかけて斜め上方へ外反し、口縁端部は斜め上下へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線状の凹みを2条有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた凹凸が認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

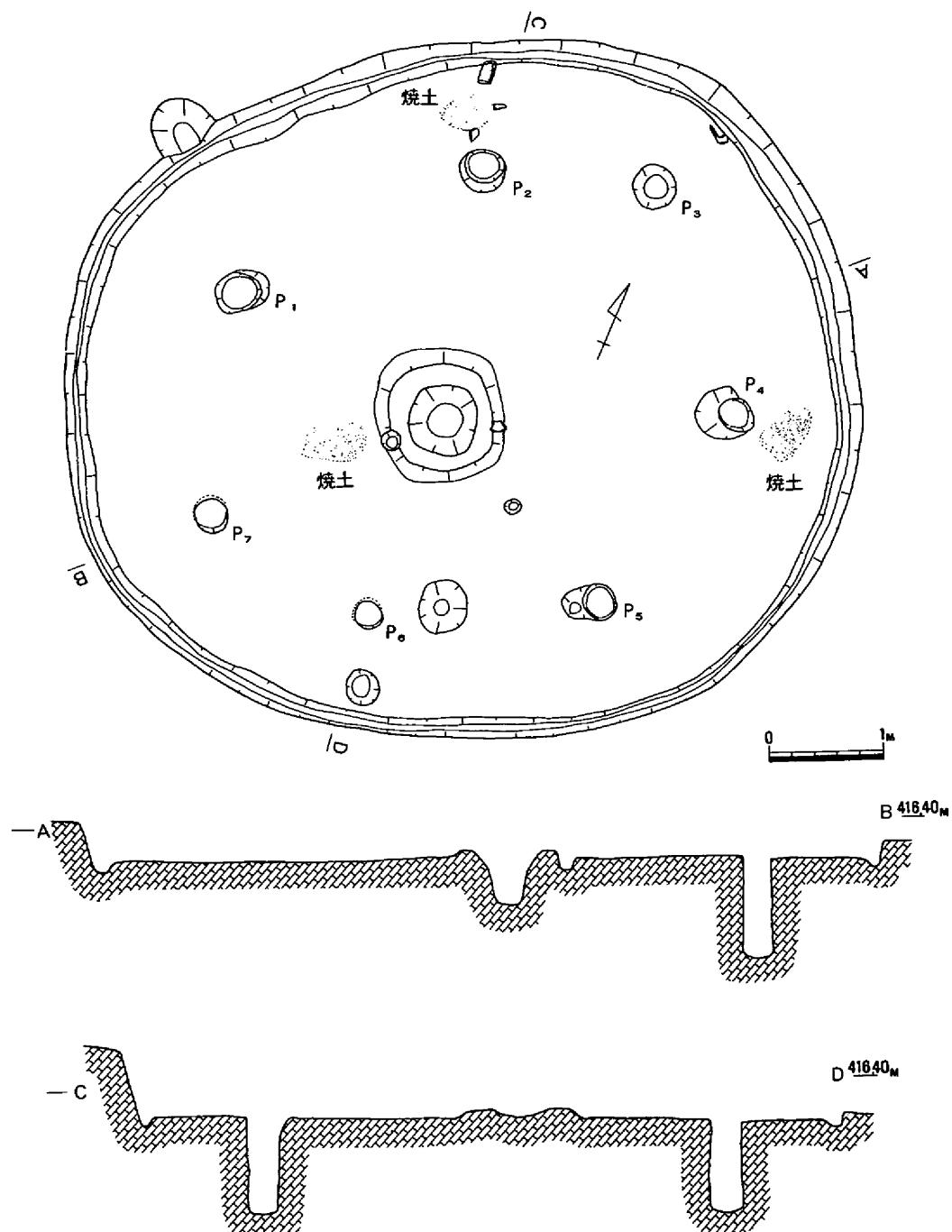
2は頸部から口縁部にかけて肥厚しながら外反し、口縁端部は上方へ立上がる。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線状の凹みを1条有する。内面の頸部と口縁部の境目には、角張った張出しが認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

3は胴部が球形を呈する土器である。内彎しながら立上った胴部は、頸部へ移行するにしたがって器壁が厚くなっている。短かく外反した口縁の端部は、斜め下方へ張出している。口縁部と頸部の外面は、全体に横ナデを行っている。胴部の外面は縦ナデを行い、内面は横方向の粗いヘラ削りを施している。胴部の最大径はほぼ中位に存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。外面には黒斑が存在する。

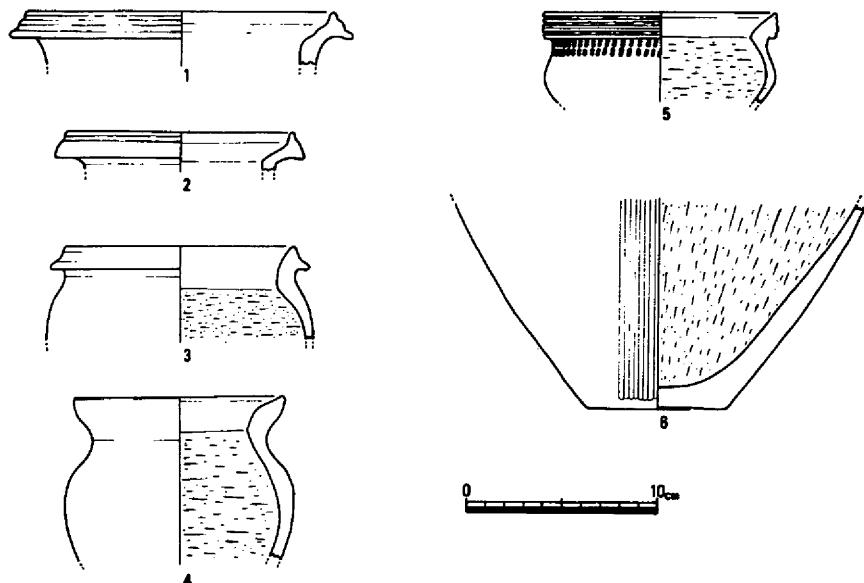
4は小型の土器であるにもかかわらず器壁が厚い。胴部は内彎して立上がり、ほぼ球形を呈する。頸部から口縁部にかけて斜め上方へ立上がるが、口縁の端部は肥厚せずに器壁が薄くなるだけで丸く仕上げている。口縁部と頸部の外面は、全体に横ナデを行っている。胴部の外面は全体に縦ナデを行い、内面は横方向の粗いヘラ削りを施している。胴部の最大径はほぼ中位に存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で黒褐色を呈する。外面にはスヌの付着が認められる。

5は小型の壺形土器または鉢形土器である。胴部は内彎して立上がり、頸部と口縁部の器壁が著しく厚くなっている。頸部から口縁部にかけてく字状に短く外反し、口縁の端部には、直立した幅の広い面を有する。頸部の外面には、2個を単位にした小さい竹管文を2列にめぐらせていている。口縁部と頸部

塚の峯遺跡(72)



第15図 No.1住居址 ($S=\frac{1}{60}$)

第16図 No.1住居址出土遺物 ($S=\frac{1}{4}$)

の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には3条の凹線を有する。内面の頸部と口縁部の境目には、角張った張出しが認められる。胴部の外面は全体に縦ナデを行い、内面は横方向の粗いヘラ削りを施しているため、器壁が薄くなっている。胴部の最大径は中位よりやや上方に存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

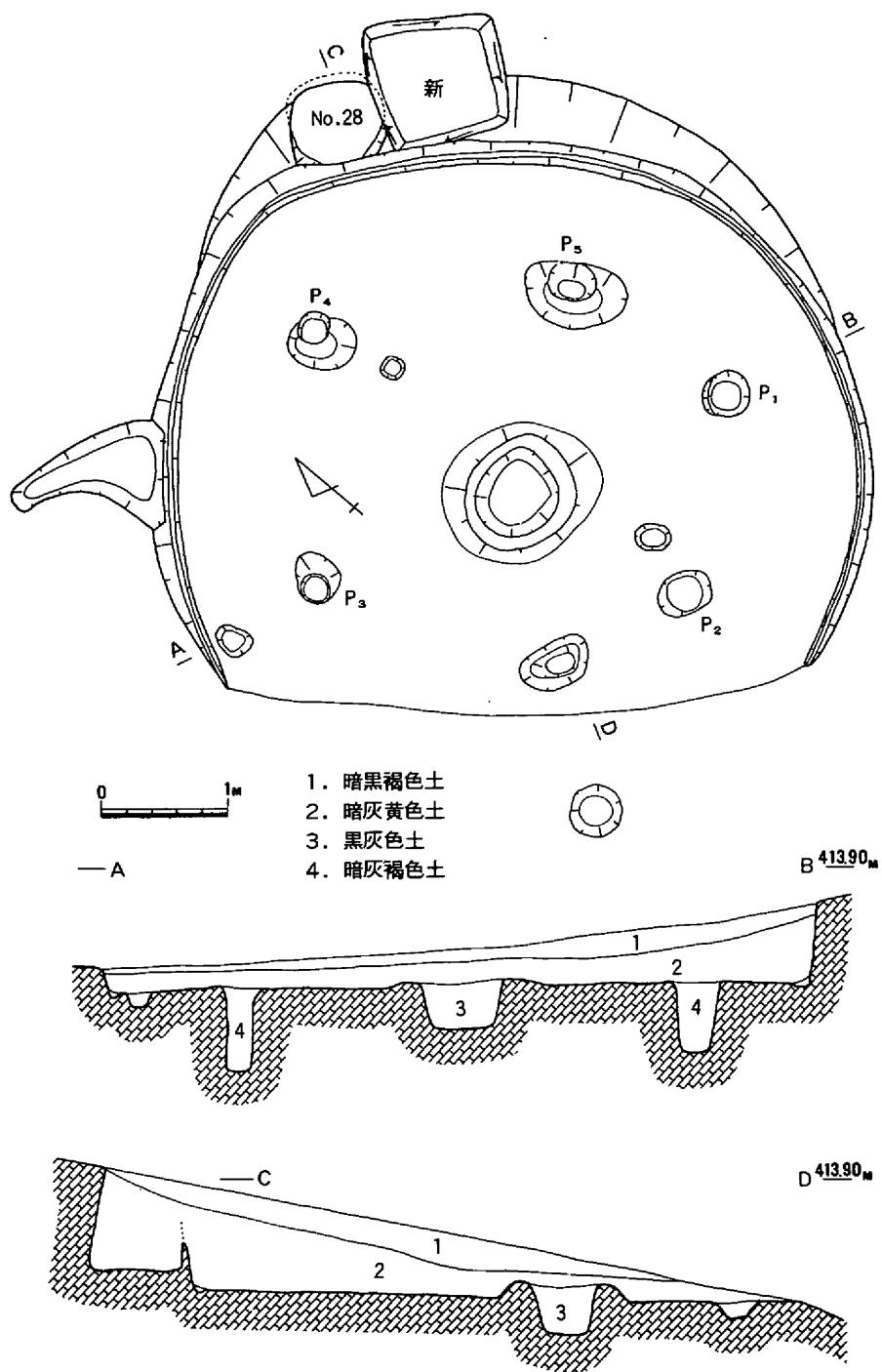
6は壺形土器または甕形土器の底部である。外面は全体に縦方向のヘラ磨きを行い、内面は縦方向の粗いヘラ削りを施している。底はわずかに上底になっている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面は褐色を呈するが、内面は黒褐色を呈する。外面には黒斑が存在する。

No.2住居址

遺構(第17図、図版18)

この住居址は、No.1住居址の南西約20mの丘陵斜面に位置する。住居址南西部は、斜面下方になるために流出しているものの、径約580cmを測る円形の竪穴住居址である。住居址内の床面積(壁体溝を除く)は、約15.92m²を測る。柱穴は10箇所で検出したが、住居址に伴うものは、覆土(暗灰褐色土)および深さから見てP₁～P₅であろう。この住居址がP₁～P₅の5本柱とすると、P₂～P₃の柱間が300cmとほかの150～210cmに比して著しく広い。このことは、P₂～P₃が玄間部もしくは斜面下方につき出た施設と考えられる。また、中央ピットを通る対角線上に位置するP₁～P₄を柱穴とする4本柱の可能性も考えられる。住居址中央部には、中央ピットを検出した。中央ピットの周囲には、No.1住居址と同様に基盤層である黄褐色土を幅約20cm、高さ約10cmに削り出した円堤が存在する。埋土中には、炭

冢の峯遺跡(72)



第17図 No.2住居址 ($S = \frac{1}{60}$)

塚の峯遺跡(72)

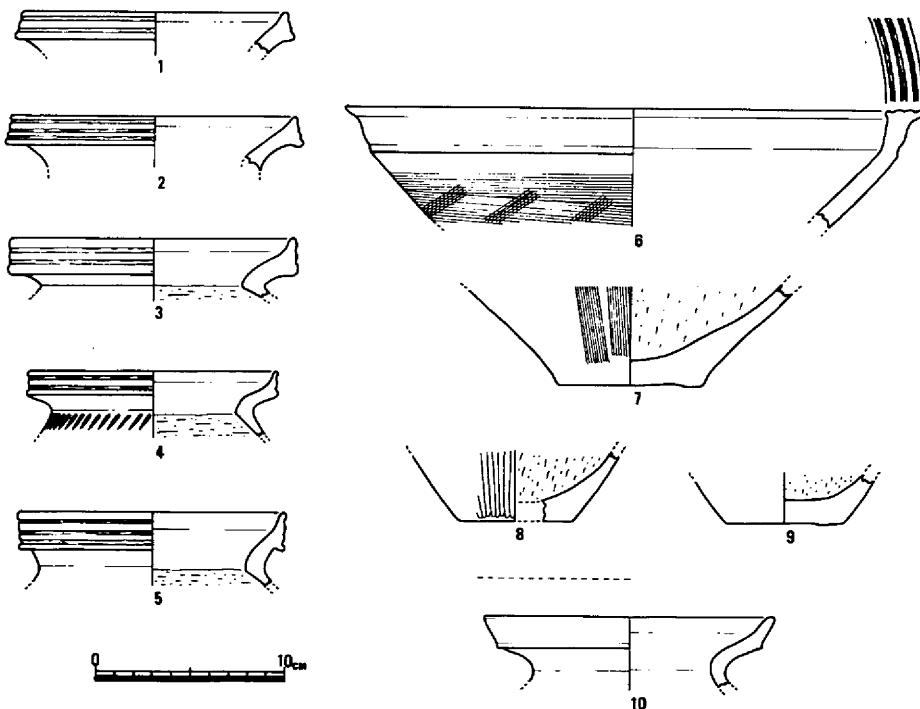
化物および焼土が少量混入していた。壁体溝は幅約15cm、深さ5～8cmを測り、断面がU字形を呈する。床面には、貼床は認められず、床面が斜面下方に若干傾斜している。遺物として、床面に接して少量の土器片が出土した。

遺物(第18図)

1と2は壺形土器の口縁部と考える。肥厚しながら外反した口縁の端部は、斜め上下へわずかに張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には2条または3条の凹線状の凹みを有する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

3は頸部から口縁部にかけて肥厚しながら字状に外反し、口縁の端部は上方へ立上がる。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には2条の凹線状の凹みを有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、瘤状の張出しが存在する。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

4は比較的器壁の薄い壺形土器である。く字状に外反した口縁の端部は、器壁が著しく薄くなつて上方へ立上がる。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には2条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、角



第18図 No.2住居址出土遺物 (S=1/4)

張った張出しが存在する。外面の頸部直下には、刷毛状工具の先端で描いた刺突文が全体にめぐらされている。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

5の壺形土器は頸部から口縁部にかけてく字状に大きく外反し、口縁の端部は器壁が薄くなつて直立する。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には3条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、角張った張出しが存在する。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

6は大型の鉢形土器である。胴部は朝顔形に内彎して大きく開くが、口縁部は端部へ移行するにしたがって肥厚して立上がり、上位に3条の凹線状の凹みを有する面が存在する。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、外面には横ナデによって生じた凹凸が認められる。胴部の外面は櫛状工具によつて描いた横または斜め方向の痕跡を有するが、内面は全体に縦ナデを行つてある。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。外面には黒斑が存在する。

7から9は壺形土器または壺形土器の底部である。7の外面は縦方向の刷毛目を施しているが、内面は縦方向のヘラ削りを行つてある。8の外面は縦方向のヘラ磨きを行い、内面は縦方向のヘラ削りを施している。9の外面は縦ナデを行い、内面は縦方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。7の外面には黒斑が存在する。8の外面にはスヌの付着が認められる。

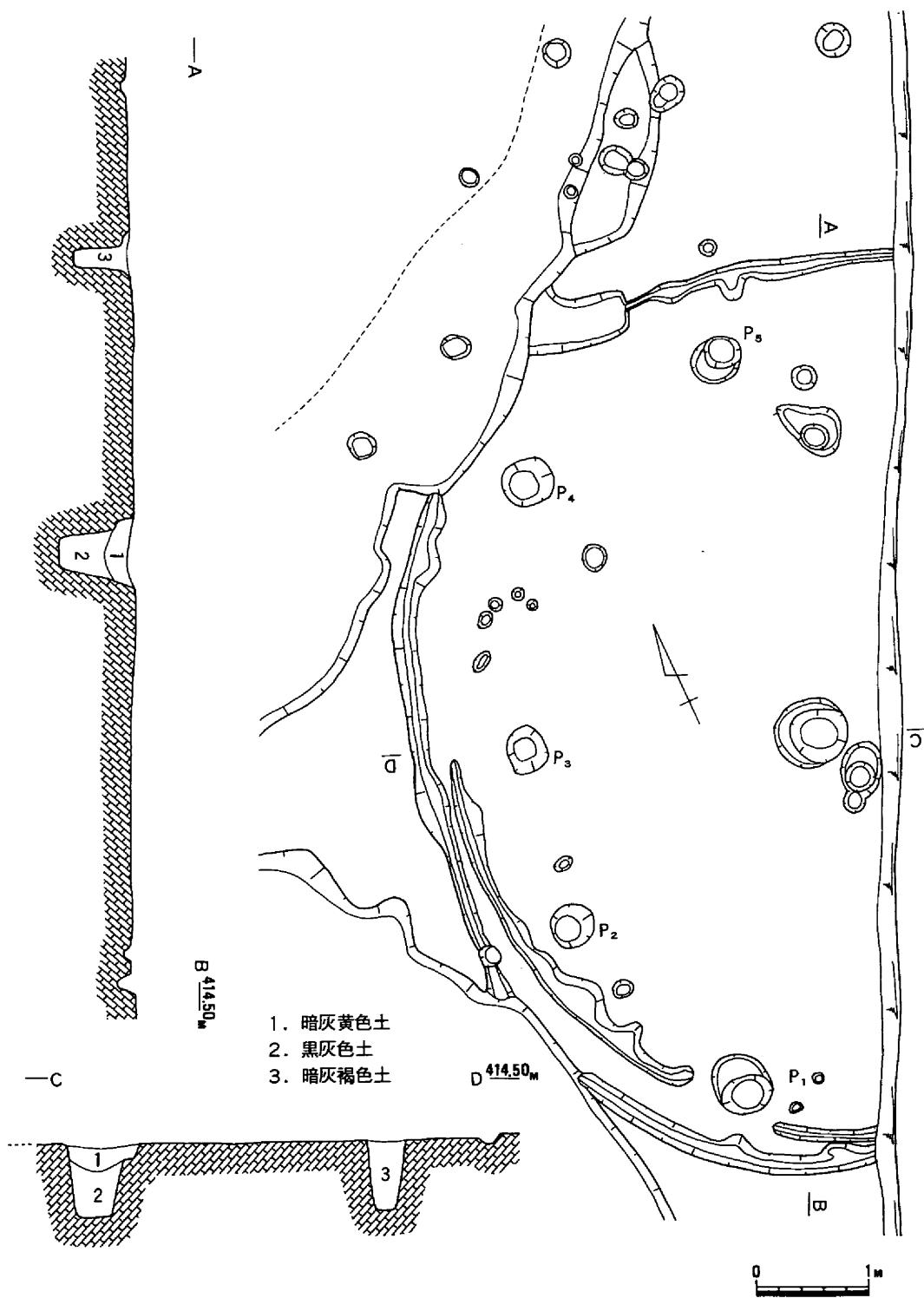
10は頸部から口縁部にかけて、肥厚しながら外彎して斜め上方に立上がり、さらに屈曲して立上がる複合口縁の土器である。口縁の端部は丸く仕上げられている。内外面とも全体に横ナデを行い、内面の口縁部には横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

N_o 3 住居址

遺構(第19図、図版19—1)

この住居址は、調査区南東端の丘陵上の平坦部に位置する。床面積の約半分を検出したが、一部は2号墳と3号墳の周溝によって切られている。推定径830~840cmの円形竪穴住居址である。住居址に伴う柱穴はP₁~P₅で、柱間は170~220cm、深さ約50~60cmである。柱穴の総数は、10箇所前後になると推定する。さらに、床面積も推定約50m²となり、N_o1・2円形住居址に比して大きい。中央ピットは径約65cmで、内部には炭化物が多量に混入していた。また、N_o1・2円形住居址で認められた中央ピットの周囲に存在する削り出しの凸帯は、痕跡らしきものを検出したものの、明確な形で残存していないかった。前述したように、壁体溝は一部が削平をうけていたが、幅10~20cm、深さ約10cmである。また、住居址南半分の内側には、別の壁体溝が認められた。この壁体溝に対応する柱穴は検出できないから、建て直されたものと考えられる。遺物は、中央ピット内で若干出土したものの、床面には土器の細片が数点出土しただけで、皆無に等しい状況であった。

塚の峯遺跡(72)



第19図 No.3住居址 ($S=\frac{1}{60}$)

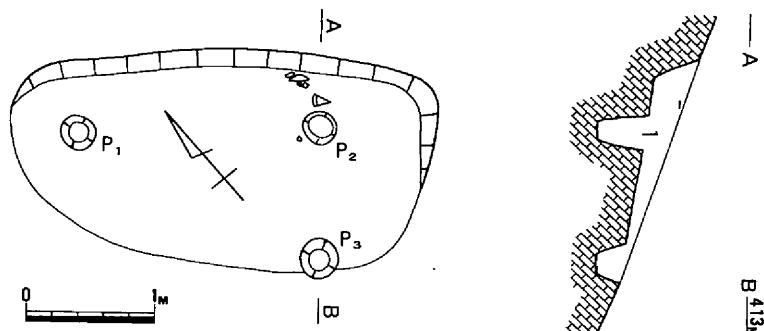
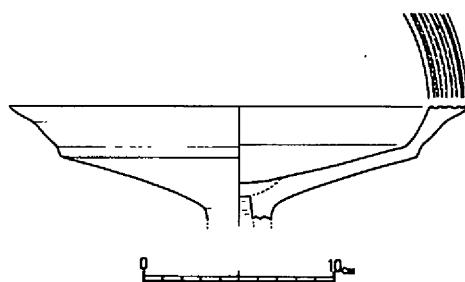
No.4住居址

遺構(第20図、図版19—2・20)

2号墳の西側方向の斜面に存在する。壁体と3箇所の柱穴が存在するだけで、壁体溝は検出できなかった。壁体は地形の高い位置に残存しているだけである。柱穴間の距離はP₁—P₂が191cm、P₂—P₃が96cmを測る。柱穴の底はほぼ同一のレベルになっている。精査したにもかかわらず、柱穴は3箇所以外に検出できなかった。斜面に存在する住居址であるから、削平されてしまったと考える。本来の形態は、隅丸長方形を呈する4本柱の住居址になると見える。P₂周辺では、床面の上位から土器片が出土している。

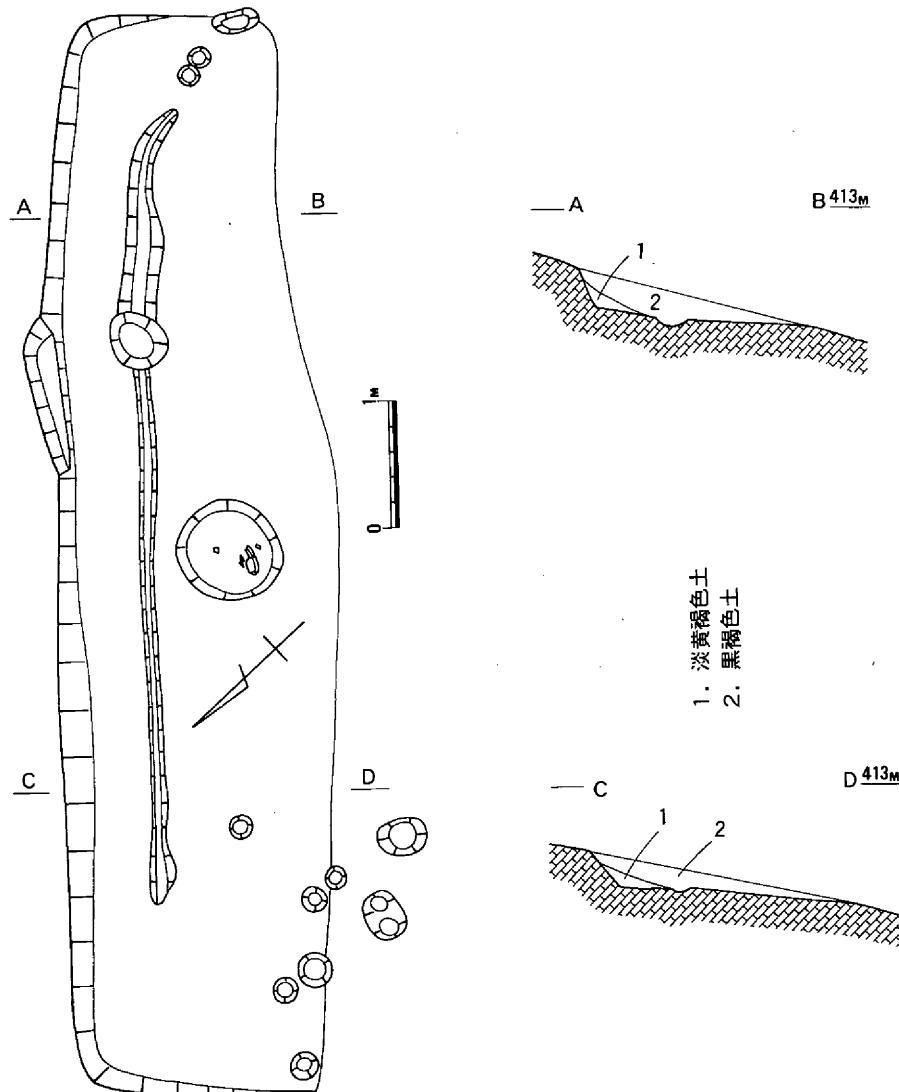
遺物(第21図)

脚部を欠損した高杯形土器である。杯部は口縁部へ移行するにしたがって、器壁が薄くなつて斜め上方へ張出し、口縁部との境目で屈曲している。口縁部は肥厚しながら斜め上方へ立上がり、端部は横方向へ張出して、上位に4条の凹線状の凹みを有する面が存在する。内面の杯部と脚部の境目は、上から粘土を貼付けて蓋をしている。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、外面には横ナデによつ

第20図 No.4住居址 ($S=\frac{1}{60}$)第21図 No.4住居址出土遺物 ($S=\frac{1}{2}$)

塚の峯遺跡(72)

て生じた凹凸が認められる。杯部は内外面とも縦ナデを行っている。脚部上位の外面は縦ナデを行い、内面は横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。内外面とも全体に丹塗りを施しているため赤色を呈し、焼成は良好である。



第22図 No.5住居址 ($S = \frac{1}{60}$)

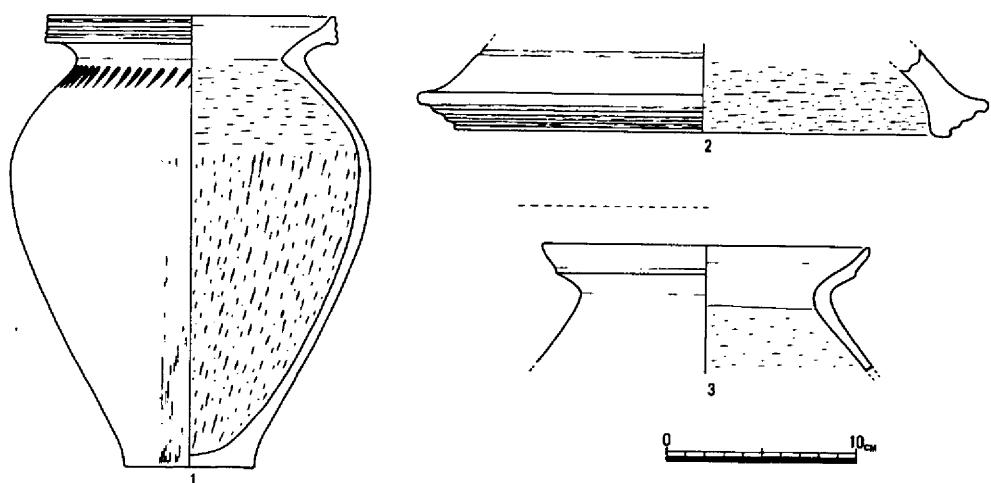
No.5住居址

遺構(第22図、図版20・21—1)

No.4住居址の北西側に存在する。地形の高い位置に等高線に平行して、コ字状を呈する壁体が存在する。床面には壁体に平行して壁体溝を検出した。壁体と壁体溝の間には、約50cmの間隔を有する。精査したにもかかわらず、この住居址に確実に伴うと考えられる柱穴は検出できなかった。床面のほぼ中央部分には、底の径が約60cmを測る円形の土壙が存在する。内部から出土遺物として図示した3の甕形土器が出土している。この住居址に伴う中央ピットになるのか、住居址が放棄されてしまったのちの土壙であるのか不明である。この住居址の等高線に平行する方向の壁体は、約820cmを測る長大なものである。しかも、壁体の中央部分がわずかに彎曲している。したがって壁体の形状から判断すれば、2軒の住居址が重複している可能性が強い。壁体溝は壁体方向に平行しているとはいえ、この塚の峯遺跡で検出した住居址では、壁体との間に間隔を有するものは存在しない。だからこの壁体溝は、先に記した重複している可能性を有する住居址とは別のものになるのかもしれない。このようにNo.5住居址は、3軒の住居址が重複していることが考えられるが、詳細については確実に把握することができなかった。

遺物(第23図)

1の甕形土器は胴部から上位の部分と底部が別々に出土したが、胎土や整形技法が同じであったため、合成して図化したものである。頸部から口縁部にかけては肥厚しながら字状に鋭く外反し、口縁端部は上下へわずかに張出している。胴部は内彎して立上がり、最大径が上位の肩部に存在する。底部は下位へ移行するにしたがってすぼまり、角張って安定している。外面の頸部直下には、刷毛状工具の先端で描いた斜め方向の刺突文を全体にめぐらせている。口縁部と頸部の外面は、全体に横ナデ

第23図 No.5住居址出土遺物 ($S=\frac{1}{4}$)

塚の峯遺跡(72)

を行い、口縁の外面には3条の凹線を有する。胴部上位の外面は横ナデを行い、内面は横方向のヘラ削りを施している。胴部下位から底部にかけての外面は、縦方向の刷毛目を施し、内面は縦方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

2は器台形土器の脚部である。裾端部は肥厚して斜め上方へ立上がる面を有する。外面は全体に横ナデを行い、横ナデによって生じた凹線状の凹みが認められる。内面は横方向の粗いヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

3は複合口縁を有する甕形土器である。胴部から口縁部にかけては、肥厚しながら内巣して立上がる。口縁部と頸部外面は全体に横ナデを行い、内面の口縁部には彎曲面が認められる。胴部の外面は全体に縦ナデを行い、内面は横方向のヘラ削りを施している。胴部の最大径は中位よりも下方に存在するようである。胎土中に砂粒は少なく、良質の粘土を使用している。焼成は悪くてもろい。全体に赤褐色を呈するが、外面にはススの付着が認められる。

No.6 住居址

遺構(第24図、図版20)

No.5 住居址の西側に、No.7 住居址と重複して存在する。地形の高い位置に、等高線に平行して壁体が存在するだけである。床面に柱穴が存在するが、この住居址に確実に伴うと断定できるものは認められない。No.7 住居址と重複していることもある、詳細は不明である。またこの住居址とNo.7 住居址の切合の関係は、精査したにもかかわらず把握することができなかった。

遺物(第25図)

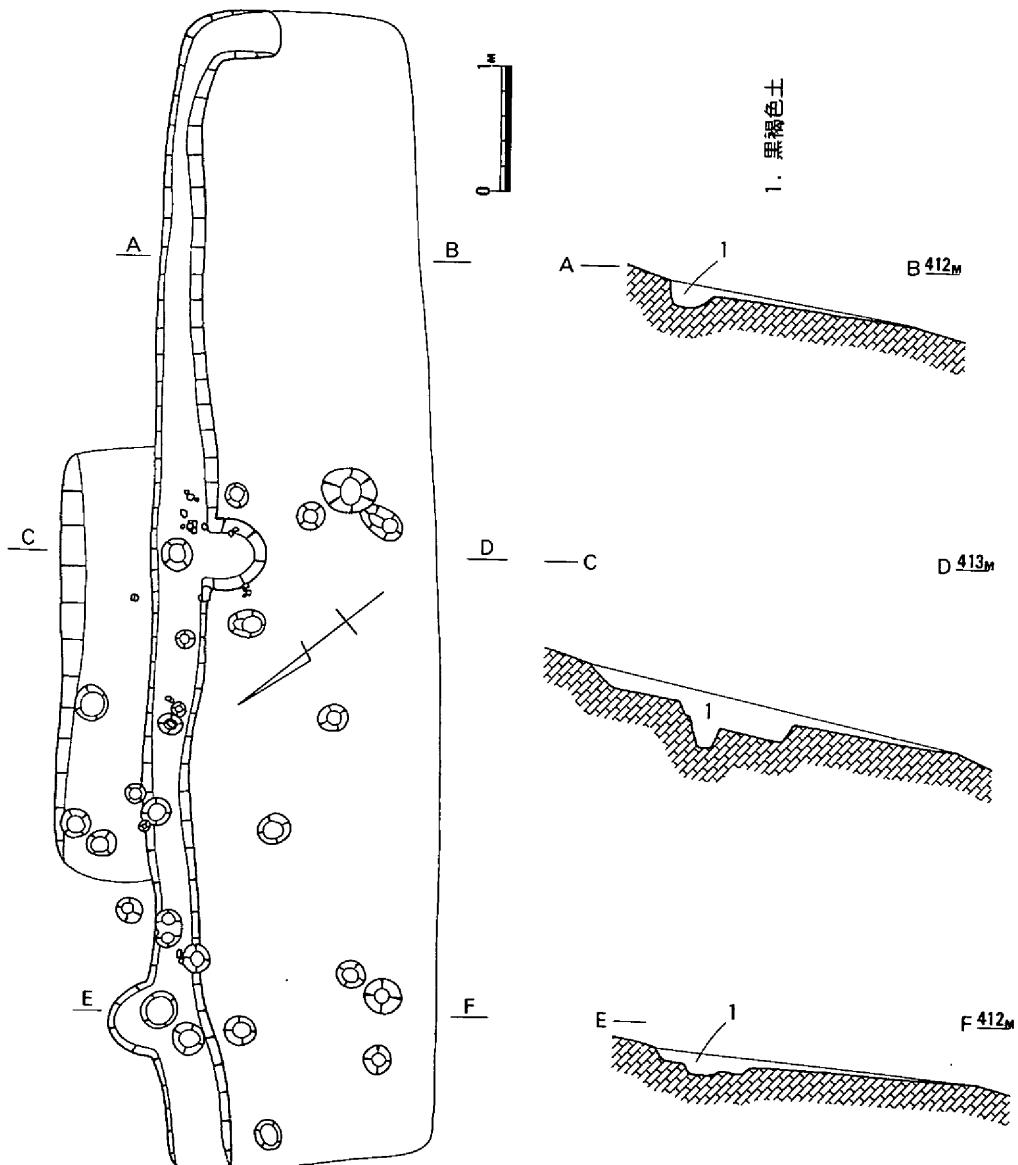
1は器壁の厚い甕形土器の口縁部である。外反した口縁の端部は、上方へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には5条の凹線を有する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

2は比較的口径の大きい甕形土器の口縁部である。頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、口縁の端部は肥厚して上下へ大きく張出している。頸部に比して口縁部の器壁が著しく厚い。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には4条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、断面が三角形を呈する張出しが存在する。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

3は頸部の器壁が著しく厚くなっている小型の甕形土器である。頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、口縁の端部は斜め上下へ張出している。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には幅の広い凹線状の凹みを2条有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、断面が三角形を呈する張出しが存在する。内面の頸部下位は横方向の粗いヘラ削りを行っているため、器壁が薄くなっている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で乳褐色を呈する。

塚の峯遺跡(72)

4は底部へ移行するにしたがってすぼまった形態を呈する甕形土器の底部である。外面は縦方向の刷毛目を施し、内面は縦方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。



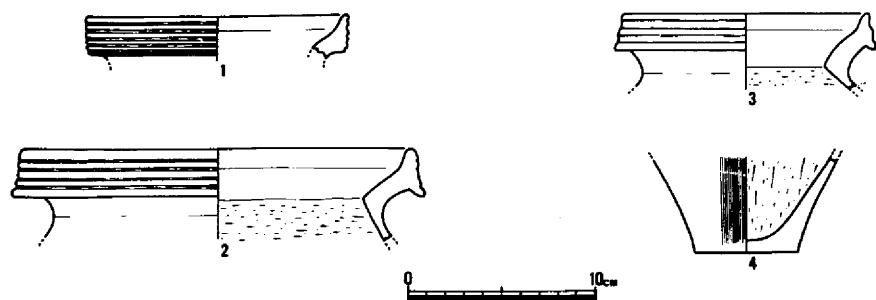
1. 黒褐色土

B 412m

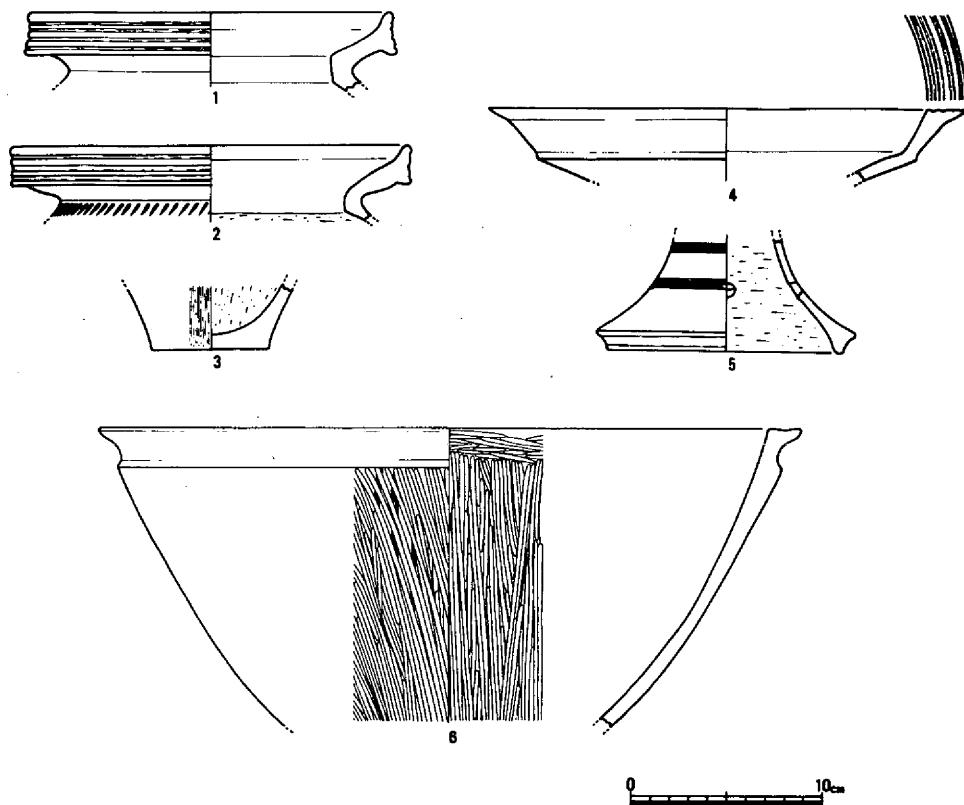
D 413m

F 412m

塚の峯遺跡(72)



第25図 No.6住居址出土遺物 ($S=\frac{1}{4}$)



第26図 No.7住居址出土遺物 ($S=\frac{1}{4}$)

No.7 住居址

遺構(第24図、図版20)

No.6 住居址と重複して存在する住居址である。底部の幅が8~38cmを測る溝が存在するだけで、壁体は検出できなかった。床面または溝内に柱穴を検出したが、この住居址に確実に伴うと断定できる柱穴は存在しない。等高線に平行する方向の溝は、延長約920cmも測るから、C—D断面の位置を境にして2軒の住居址が重複しているのかもしれない。いずれにしても、斜面に存在する住居址であるから、詳細は不明である。この住居址の床面から、土器片以外に石庖丁1点が出土している。

遺物(第26・27図)

1の壺形土器は頸部から口縁部にかけてく字状に斜め上方へ大きく外反し、端部は上下へ張出している。内面の頸部には立上がる面を有する。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には4条の凹線が存在する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

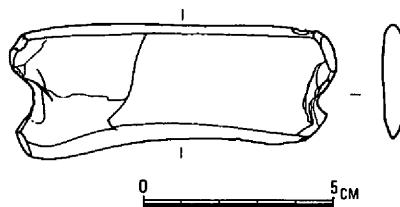
2は比較的口径の大きい壺形土器である。く字状に肥厚しながら斜め上方へ大きく立上がった口縁の端部は、上方へ張出している。頸部の外面には、刷毛状工具の先端で描いた刺突文を全体にめぐらせている。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には3条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。

3は壺形土器または壺形土器の底部である。外面は縦方向の刷毛目を施したのちに、縦ナデを行っている。内面は縦方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。外面には黒斑が存在する。

4は高杯形土器の口縁部である。口縁部は肥厚しながら斜め上方へ立上がり、端部が横方向へ大きく張出して、上位に凹線状の凹みを4条有する面が存在する。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、外面には横ナデによって生じた凹みが認められる。杯部は内外面とも縦ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似している。内外面とも全体に丹塗りを施しているため赤色を呈し、焼成は良好である。

5は高杯形土器の脚部である。ハ字状に開いた裾端部には、肥厚して斜め方向に立上がる面を有する。外面には櫛状工具で6条を単位に描いた浅い平行沈線を、横方向に施している。また外から内方向へ刺突した円孔を、4箇所に配している。外面の斜め方向に立上がる面は横ナデを行い、横ナデによって生じた浅い凹みが認められる。内面は全体に横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。外面の全体に丹塗りを施しているため赤色を呈し、焼成は良好である。4の高杯形土器の口縁部と、同一個体になるのかもしれない。

6は大型の鉢形土器である。胴部は口縁部へ移行するにしたがって、わずかに肥厚しながら朝顔形に開いている。口縁の端部は横方向へ張出して、上位に中央が浅く凹んだ面を有する。口縁部の外面

第27図 No.7住居址出土石庖丁 ($S=\frac{1}{2}$)

は横ナデを行い、内面は短い単位のヘラ磨きを横方向に施している。胴部は、内外面とも縦方向のヘラ磨きを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

土器以外の出土遺物として石庖丁（第27図、図版19—1）が存在する。扁平な短冊形を呈して、両端に敲打による抉りを有する。紐孔は存在しない。石材は結晶片岩で、重さ 27.50 g を測る。形態は、岡山県南部に広く分布しているサヌカイト製の打製石庖丁に酷似している。図示した状態の上位と下位は、両面から研磨が施されてわずかに彎曲している。塚の峯遺跡周辺では、磨製の石庖丁での住居址から出土したものとの形態を有するのは知られていない。

No.8 住居址

遺構（第28図、図版23）

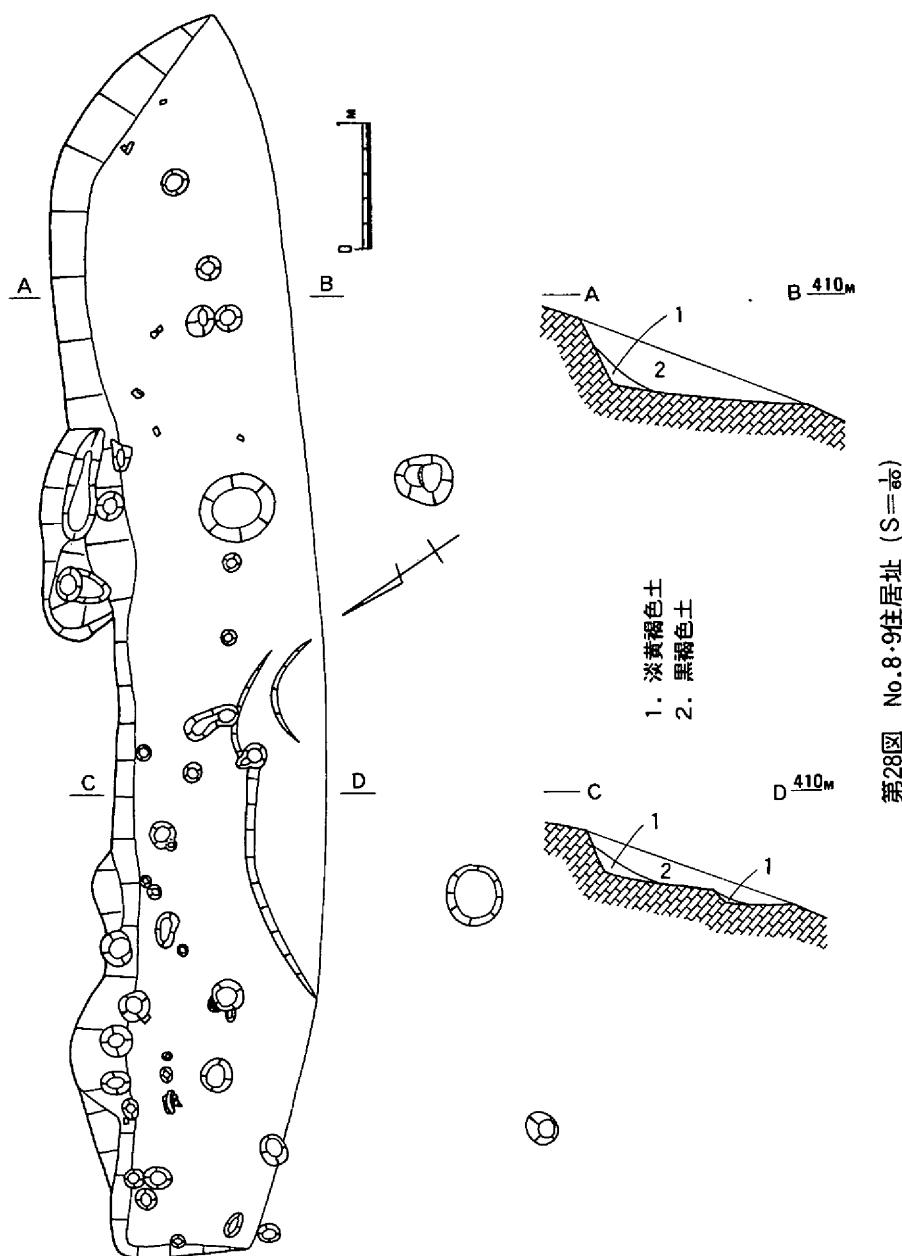
No.9 住居址と重複して存在する。地形の高い位置に壁体が存在するだけで、壁体溝は検出できなかった。床面に柱穴を検出したが、この住居址に確実に伴うと断定できるものはない。No.9 住居址に近接した位置の床面には、底部の径が約30×40cmを測る梢円形の土壙を検出したが、この住居址の中央ピットになるのかもしれない。斜面に存在する住居址であり、No.9 住居址と重複しているから、詳細は不明である。

遺物（第29図）

1と2は酷似した形態を呈する甕形土器である。く字状に肥厚しながら、外彎した口縁の端部は、上下へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には2条または4条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。どちらも胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好である。1の外面にはススの付着が認められ、黒褐色を呈する。2は明るい褐色を呈する。

3は壺形土器または甕形土器の底部である。外面は縦方向のヘラ磨きを行い、内面は縦方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。外面には黒斑が存在する。

塚の峯遺跡(72)



第28図 No.8・9住居址 ($S = \frac{1}{60}$)

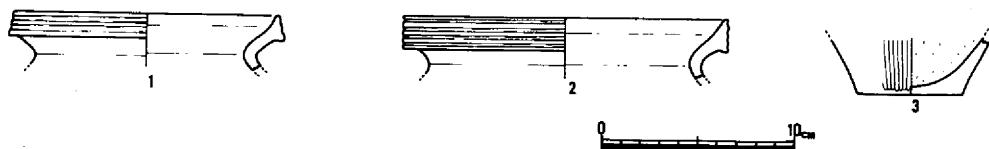
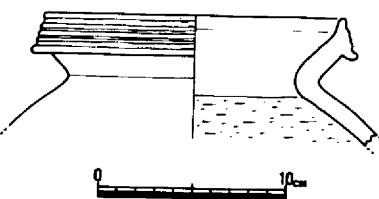
No.9住居址

遺構(第28図、図版23)

No.8住居址と重複して存在する。地形の高い位置に壁体が存在するが、北西の隅はほぼ直角に屈曲している。No.8住居址の北東隅がゆるやかに彎曲しているのとは、形態が異なっている。No.9住居址の壁体は急角度に掘込んでいるが、No.8住居址では、No.9住居址の壁体よりもゆるやかな角度になっている。壁体溝は検出できなかった。床面には多数の柱穴を検出したが、この住居址に確実に伴うと断定できるものは存在しない。No.8住居址に近接した位置の床面は、三日月形を呈する段を検出したが、別の住居址の壁体とは考えられなかった。斜面に存在する住居址であり、No.8住居址と重複しているから、詳細は不明であるが、本来の形態が隅丸方形または隅丸長方形になると考える。

遺物(第30図)

胴部が球形を呈する比較的器壁の厚い甕形土器である。内彎しながら立上がった胴部が、頸部でく字状に外反して口縁端部へ移行する。口縁部は斜め上方へ大きく立上がり、端部が上下へ張出している。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線状の凹みを4条有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。胴部の外面は縦ナデを行い、内面は横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で乳褐色を呈する。

第29図 No.8住居址土遺物($S=\frac{1}{4}$)第30図 No.9住居址出土遺物($S=\frac{1}{4}$)

No.10住居址

遺構(第31図、図版20)

No.7住居址とNo.11住居址の中間に存在する。地形の高い位置に壁体が存在するが、壁体溝は検出できなかった。北西隅の壁体はほぼ直交しているが、北東隅の壁体は後世の土壌に削平されて不明である。壁体溝は検出できなかった。この住居址に確実に伴う柱穴は、A—B断面の1箇所だけである。本来の形態は、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると考えるが、残存している状況が悪いため詳細は不明である。

遺物(第32図)

1は口縁部の器壁が比較的厚い壺形土器である。頸部から口縁部にかけてく字状に鋭く外反し、端部の器壁が薄くなつて斜め上下へ張出している。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には浅い凹みが認められるだけである。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が存在する。内面の頸部と口縁部の境目には、断面が三角形を呈する張出しが認められる。内面の頸部下位は横方向に粗いヘラ削りを行い、器壁が薄くなっている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

2はく字状に外反した口縁の端部が、肥厚して上方へ立上がる。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には3条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められる。内面の頸部下位は横方向の粗いヘラ削りを行い、器壁が著しく薄くなっている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

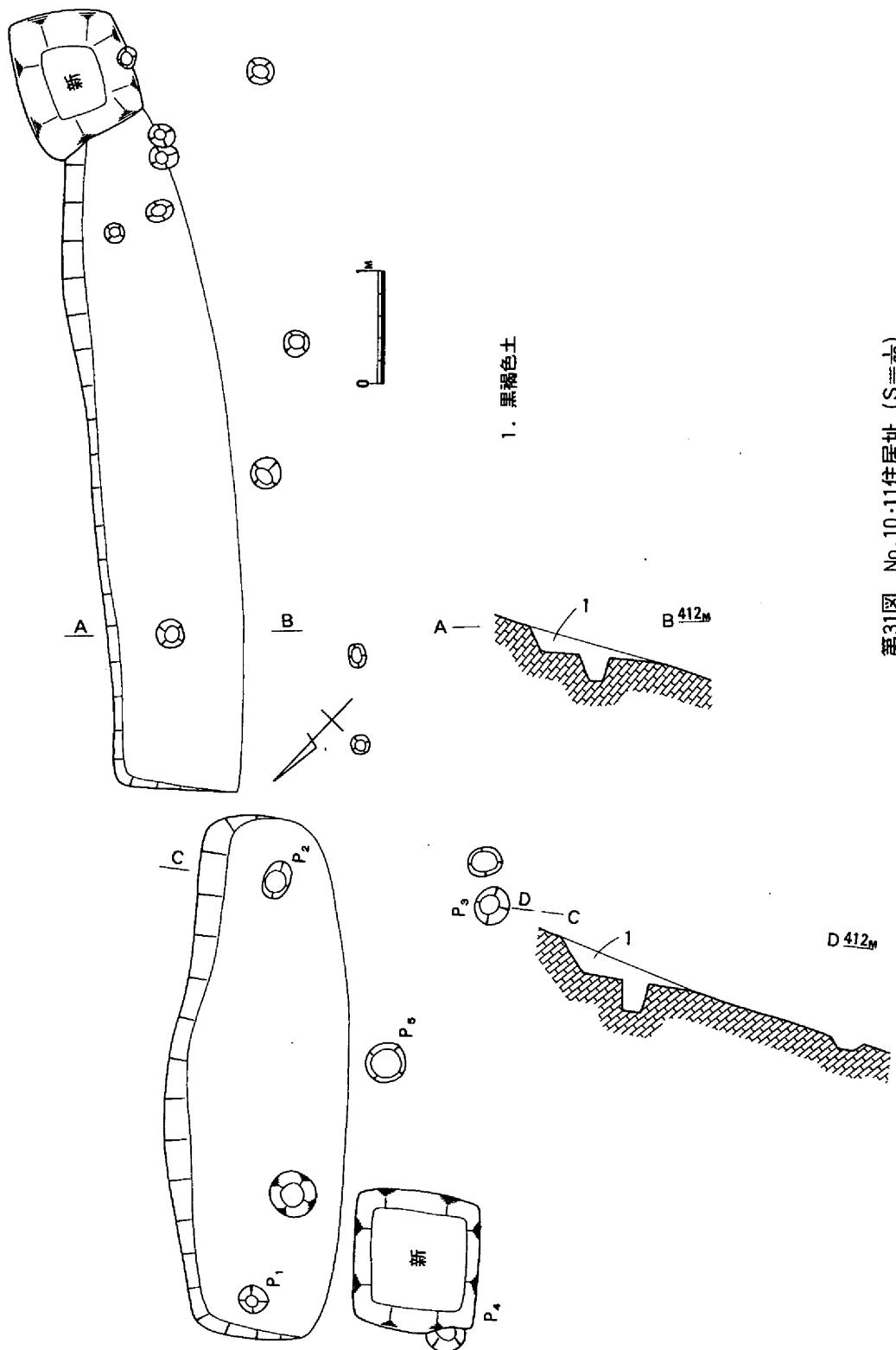
3は脛部が外へ大きく張出す壺形土器である。頸部から口縁部にかけてゆるやかに肥厚しながら斜め上方へ大きく外反し、口縁の端部は斜め上下へ著しく張出している。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には3条の凹線状の凹みを有する。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行つてゐる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は非常に良好で赤褐色を呈する。

4と5は壺形土器または壺形土器の底部である。どちらも外面は縦ナデを行い、内面は縦方向のヘラ削りを施してゐる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好である。4の外面は丹塗りを施してゐるため赤色を呈するが、内面は褐色を呈する。5は内外面とも褐色を呈する。5はわずかに上底になつてゐる。どちらも外面に黒斑が存在する。

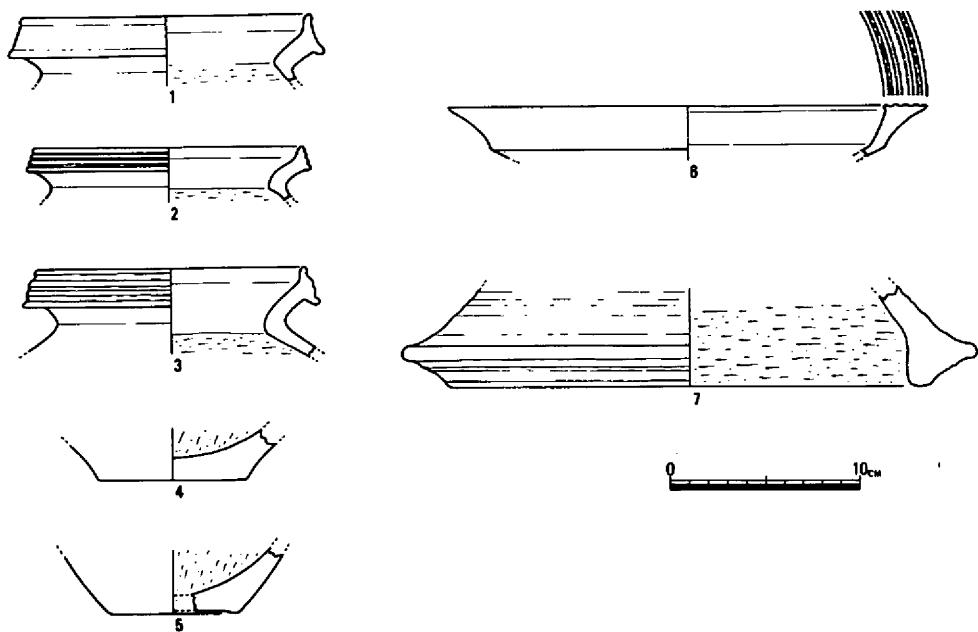
6は高杯形土器の口縁部である。斜め上方へ肥厚しながら立上がつた口縁の端部は、横方向へ大きく張出して上位に凹線状の凹みを4条有する面が存在する。内外面とも全体に横ナデを行い、外面には横ナデによって生じた彎曲面が認められる。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。内外面とも全体に丹塗りを施してゐるため赤色を呈し、焼成は良好である。

7は器台形土器の脚部である。裾端部は肥厚して、斜め上方へ立上がる面を有する。外面は全体に横ナデを行い、横ナデによって生じた凹凸が残つてゐる。内面は全体に横方向の粗いヘラ削りを行つてゐる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。

塚の峯遺跡(72)



第31図 No.10・11住居址 ($S= \frac{1}{500}$)

第32図 No.10住居址出土遺物 ($S=\frac{1}{4}$)

No.11住居址

遺構(第31図、図版20)

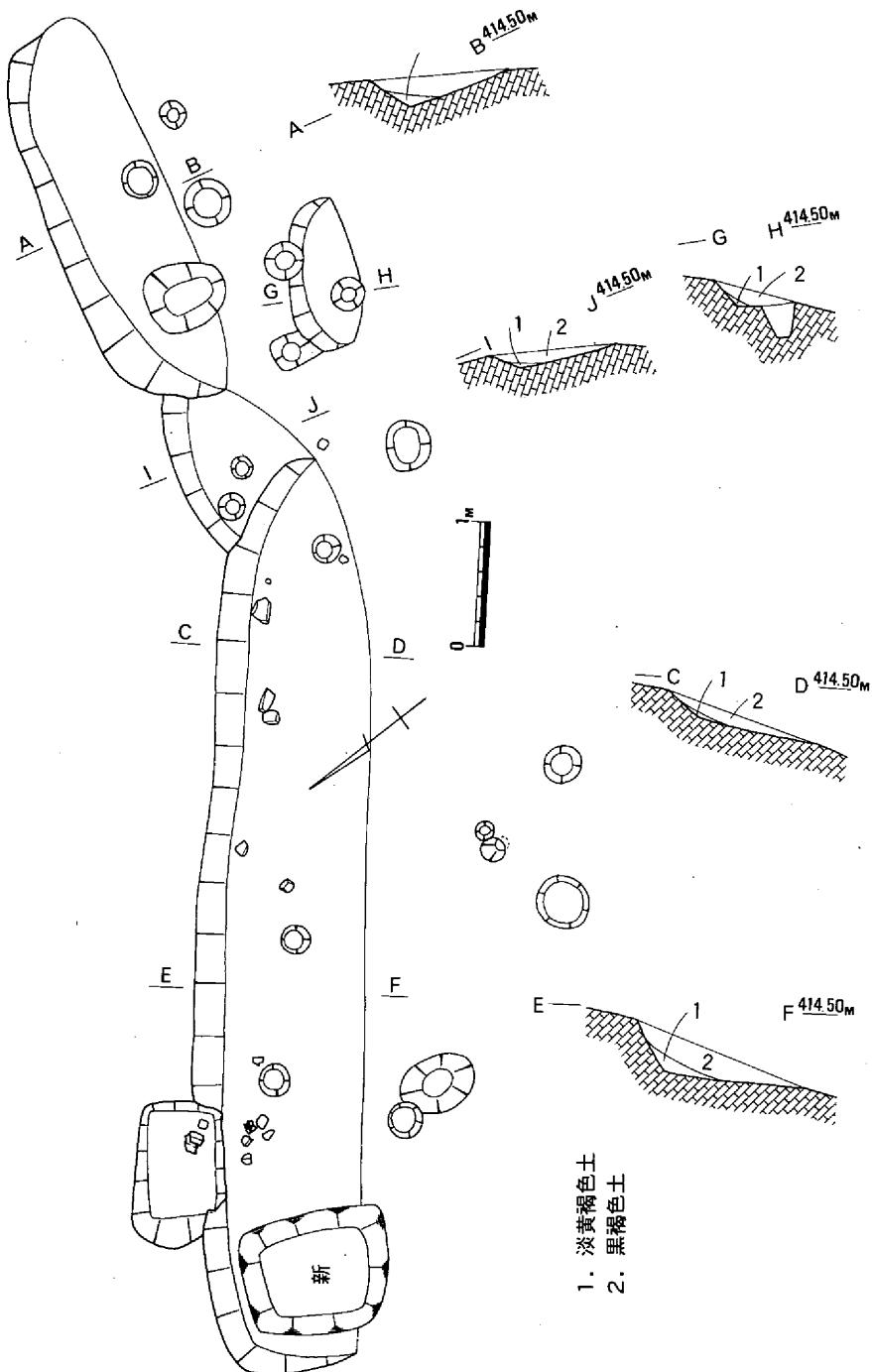
No.10住居址の西側に存在する。地形の高い位置に壁体が存在するが、壁体溝は検出できなかった。この住居址に伴う柱穴を4箇所で検出した。柱穴間の距離はP₁—P₂が324cm、P₂—P₃が201cm、P₃—P₄が415cm、P₄—P₁が185cmを測り、一定の値になっていない。柱穴の底部は、ほぼ一定のレベルになっている。P₅は中央ピットになるのかもしれない。斜面に存在する住居址であるから、削平されても詳細は不明であるが、本来の形態は4本柱を有する隅丸長方形を呈する住居址になると見える。南西端の床面には、平面形が正方形を呈する後世の土壙が存在している。床面から土器片が出土したが、図化することができなかった。

No.12住居址

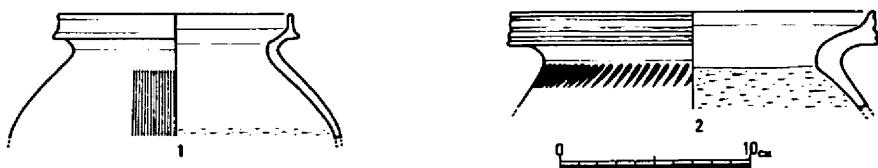
遺構(第33図、図版26—2・27—2)

No.24遺構とNo.27土壙に重複して存在する。No.24遺構を新しく切って構築しているが、のちにNo.27土壙に切られている。地形の高い位置に壁体が存在するが、壁体溝は検出できなかった。削平されずに残存している床面には、3箇所の柱穴を検出している。北西端の床面には、後世の土壙が存在する。等高線に平行する方向に残存する壁体は約720cmも測るから、P₂とP₃を柱穴にした住居址とP₁を柱穴にした住居址との2軒が重複しているのかもしれない。精査したにもかかわらず詳細は不明であった。

塚の峯遺跡(72)



第33図 No.12・13住居址, No.24・25遺構 ($S = \frac{1}{60}$)

第34図 No.12住居址出土遺物 ($S=\frac{1}{4}$)

遺物（第34図）

1は器壁が薄くて胴部が球形を呈する甕形土器である。胴部は肥厚しながら内彎して立上がり、頸部で屈曲して口縁端部へ移行する。斜め上方へ張出した口縁の端部は、わずかに内傾して立上がる。口縁の端部は丸く仕上げられている。口縁部と頸部は内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には浅い凹みが存在するだけである。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い凹みが認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、瘤状の張出しが存在する。胴部の外面は全体に縦方向の刷毛目を施しているが、内面の上位は不規則なナデを行い、下位は横方向のヘラ削りを施している。胴部的最大径はほぼ中位に存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

2の甕形土器は、頸部から口縁部にかけて肥厚しながら字状に外反し、端部は上方へ張出している。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面に3条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。外面の頸部直下には、刷毛状工具の先端で描いた斜め方向の刺突文を全体にめぐらせてている。内面の頸部直下は横方向の粗いヘラ削りを行い、器壁が著しく薄くなっている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

No.13住居址

遺構（第33図、図版26—2）

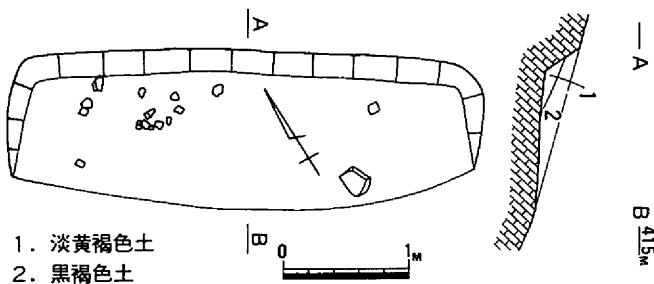
No.24遺構とNo.26土壙の中間に存在する。No.24遺構を新しく切って構築している。地形の高い位置に両端が彎曲した壁体が存在するが、壁体溝は検出できなかった。床面に柱穴を検出したが、この住居址に確実に伴うと断定できるものは存在しない。小型の住居址になると想るが、詳細は不明である。床面から土器片が出土したが、図化することができなかった。

No.14住居址

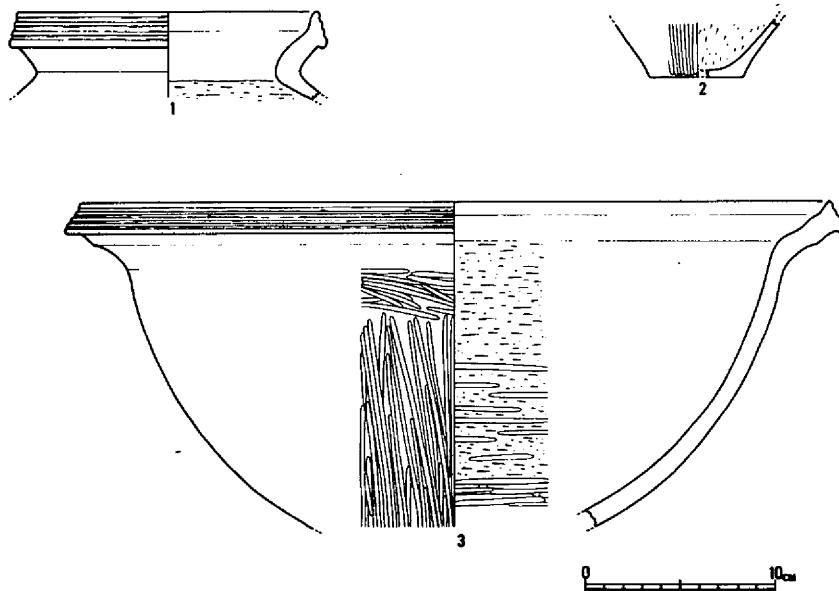
遺構（第35図、図版24）

No.15住居址の西側に調査範囲の境界に接して存在する。地形の高い位置にコ字状を呈する壁体が存在するだけで、精査したにもかかわらず壁体溝や柱穴は検出できなかった。壁体の残存形態から、1辺が約340cmを測る隅丸方形または隅丸長方形を呈する小型住居址になると想る。斜面に存在する住居址であるから詳細は不明であるが、柱穴を有したとしても2箇所であろう。

塚の峯遺跡(72)



第35図 No.14住居址 ($S=\frac{1}{60}$)



第36図 No.14住居址出土遺物

遺物(第36図)

1は器壁の厚い壺形土器の口縁部である。頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、口縁の端部は斜め上下へ張出している。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線状の凹みを3条有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められる。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

2は器壁の薄い壺形土器の底部である。外面は縦方向のヘラ磨きを施し、内面は縦方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。

塚の峯遺跡(72)

3は大型の鉢形土器である。胴部は内彎しながら朝顔形に大きく開いている。口縁部は肥厚しながら斜め上方へ立上がり、端部が斜め上下に張出している。口縁部は内外面とも横ナデを行い、外面には4条の凹線を有する。口縁部の内外面とも、横ナデによって生じた凹凸が認められる。胴部の上位では外面は横方向のヘラ磨きを行い、内面は横方向の粗いヘラ削りを行っている。胴部の下位では、外面は縦方向のヘラ磨きを施し、内面は横方向の粗いヘラ削りを行ったのちに、部分的に横方向のヘラ磨きを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で乳褐色を呈する。

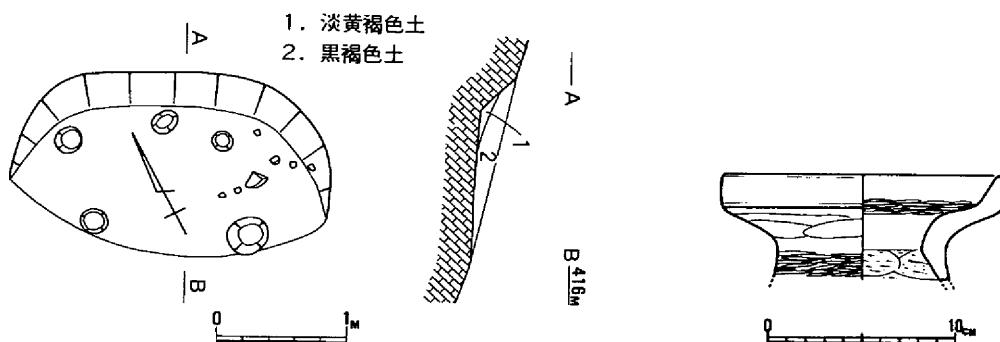
No.15住居址

遺構(第37図、図版26—1)

No.14住居址の東側に存在する。地形の高い位置に彎曲した壁体が存在するが、壁体溝は検出できなかった。床面に柱穴5を検出したが、この住居址に確実に伴うと断定できる柱穴は存在しない。したがって何本柱を有するのか不明である。壁体の残存形態によると、きわめて小型の住居址になると考える。住居址以外の遺構になるのかもしれない。

遺物(第38図)

比較的器壁の厚い壺形土器である。頸部から外彎して立上がった口縁の端部は、断面が三角形を呈している。口縁端部は内外面とも横ナデを行い、外面には何も施していない。口縁部の外面には、横方向に施したヘラ削りの痕跡が残っている。内面には、横方向に施した短い単位のヘラ磨きが認められる。頸部の外面は、横方向に短い単位のヘラ磨きを行っている。内面の頸部と口縁部の境目は、横ナデを行っているが、内面の頸部下位は横方向の粗いヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。内面の口縁部と外面全体に丹塗りを施しているため赤色を呈し、焼成は良好である。



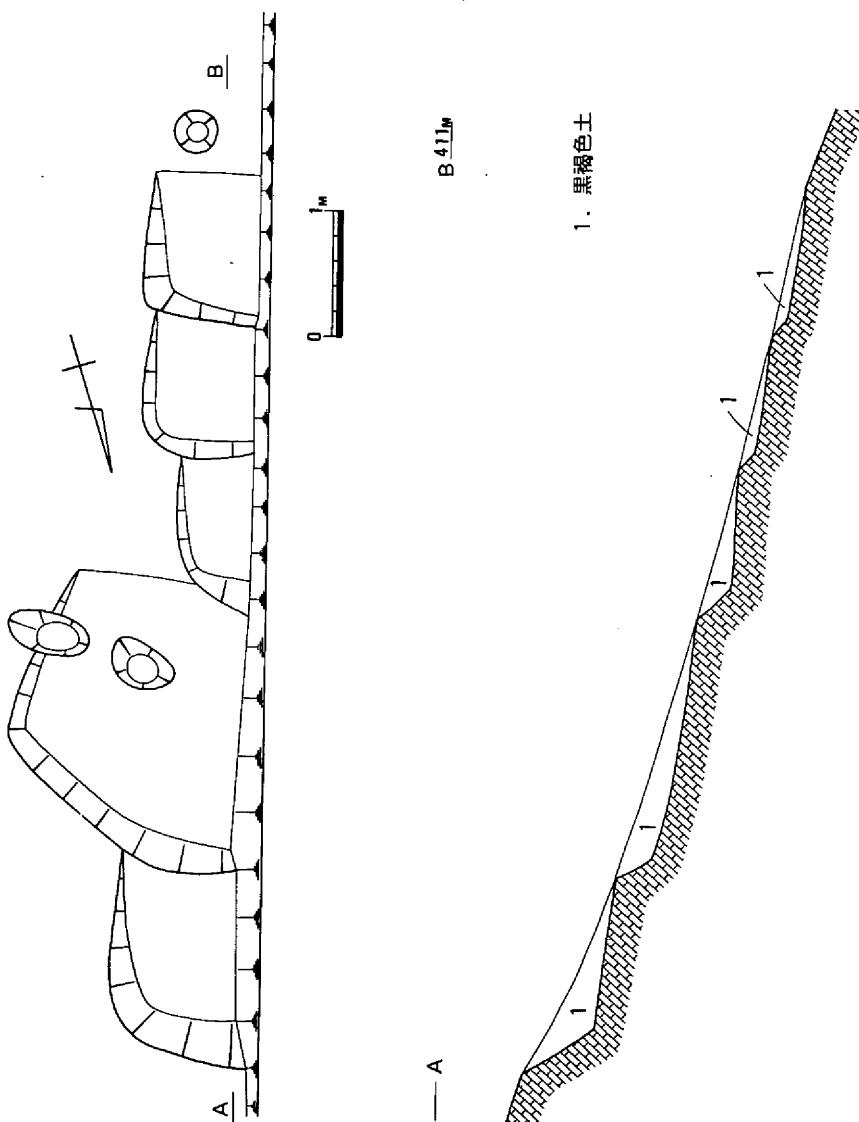
第37図 No. 15住居址 ($S = \frac{1}{60}$)

第38図 No. 15住居址出土遺物 ($S = \frac{1}{4}$)

No.16住居址

遺構(第2図、図版27—1)

No.17住居址の北側に存在する。壁体の一部を検出しただけで、ほとんどの部分が調査予定地外の未調査部分の範囲になっているから、詳細は不明である。検出した壁体の残存形態によると、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると考える。壁体溝と柱穴は、精査したが検出できなかった。住居址内から遺物は出土しなかった。



第39図 No.17・18・19・20・21住居址 (S=1/50)

No.17住居址

遺構(第39図、図版27—1)

No.18住居址の北側にNo.18住居址に接して存在する。壁体の一部を検出しただけで、ほとんどの部分が調査予定地外の未調査部分の範囲になっているから、詳細は不明である。壁体溝と柱穴は検出できなかった。検出した壁体の残存形態によると、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると考える。住居址内から遺物は何も確認できなかった。

No.18住居址

遺構(第39図、図版27—1)

No.17住居址とNo.19住居址の中間に存在する。歪んだ形態を呈する壁体の一部を検出したが、ほとんどの部分が調査予定地外の未調査部分の範囲になっているから、詳細は不明である。壁体溝は検出できなかったが、床面からこの住居址に伴う柱穴1を確認している。壁体を新しく切って、この住居址には伴わない別の柱穴が存在する。検出した壁体の残存形態によると、歪んだ形の住居址になると考える。柱が何本になるのか不明である。住居址内から遺物は出土していない。

No.19住居址

遺構(第39図、図版27—1)

No.18住居址とNo.20住居址の中間に存在する。壁体の一部を検出しただけで、ほとんどの部分が調査予定地外の未調査部分の範囲になっているから、詳細は不明である。検出した壁体の残存形態は、先に記したNo.16住居址とNo.17住居址に酷似している。壁体溝や柱穴は検出できなかった。住居址の本来の形態は、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると考える。住居址内から遺物は出土していない。

No.20住居址

遺構(第39図、図版27—1)

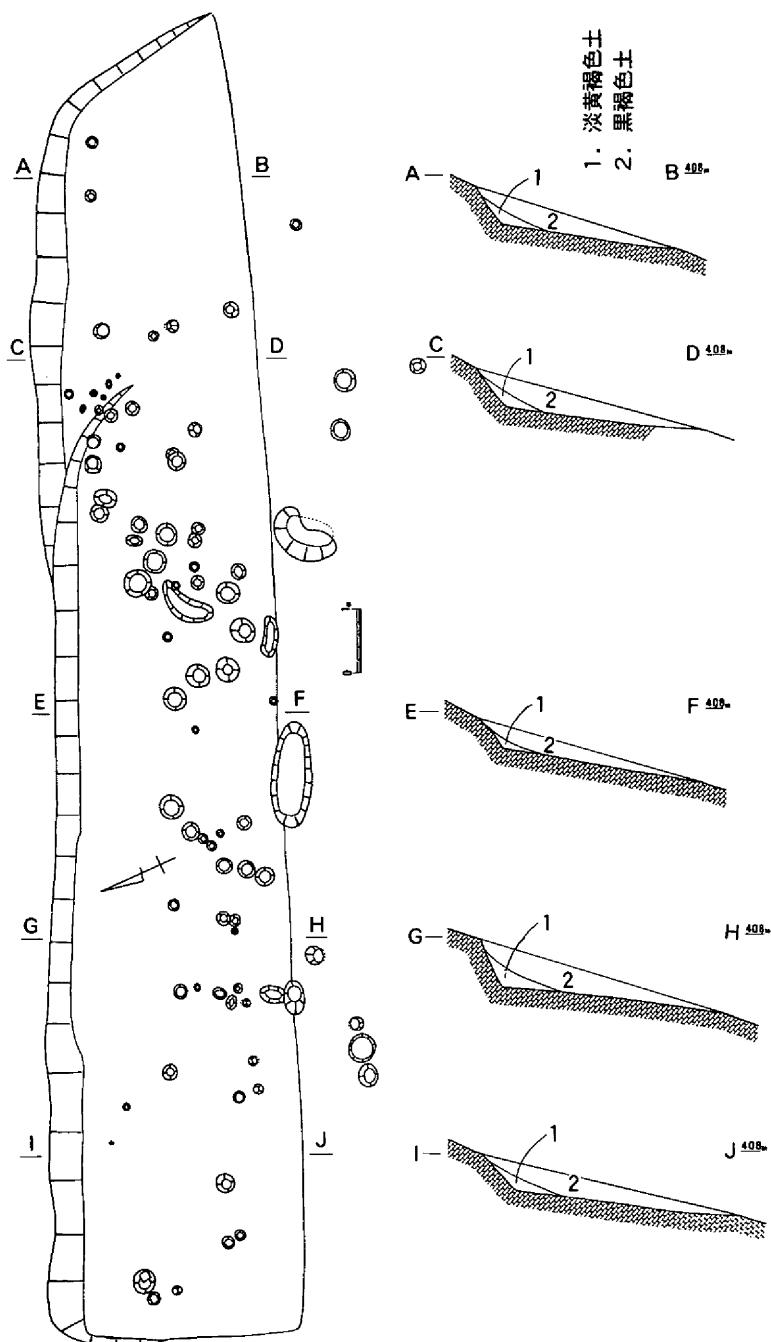
No.19住居址とNo.21住居址の中間に存在する。この住居址も壁体の一部を検出しただけである。壁体の残存形態はNo.19住居址に酷似しているから、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると考える。壁体溝と柱穴は、No.19住居址と同様に検出できなかった。住居址内から遺物は出土していない。

No.21住居址

遺構(第39図、図版27—1)

No.20住居址の南側に存在する。この住居址も壁体の一部を検出しただけである。ほとんどの部分が調査予定地外の未調査部分の範囲になっている。壁体溝は検出できなかった。南東端の床面が削平されている位置に柱穴が存在するが、この住居址に伴うものではない。検出した壁体の残存形態によると、隅丸方形または隅丸長方形を呈すると考える。住居址内から遺物は出土しなかった。

家 の 墓 遺 跡 (72)



第40図 No.22住居址 ($S = \frac{1}{120}$)

No.22住居址

遺構(第40図、図版25)

今度調査を行った範囲では、斜面の最も下位に存在する住居址である。斜面の高い位置に壁体が存在するが、壁体溝は検出できなかった。壁体の残存形態は、北西の隅では壁体がほぼ直角に屈曲しているが、北東の隅や床面に張出した壁体はゆるやかに彎曲している。また等高線に平行する方向の壁体は、わずかに屈曲しているのが認められる。このような状況から判断するならば、断面を図示した5軒の住居址が重複しているのではないかろうか。床面には多数の柱穴を検出したが、住居址に確実に伴うと断定できる柱穴はわずかであった。このように柱穴の配置を把握することができなかつたので、平面形や規模は不明な点が多い。住居址の切合い関係が確認できたのは、1箇所だけであった。数軒の住居址が重複して長大な短冊形を呈するにもかかわらず、出土遺物が著しく少ない。ほかの住居址と同様に斜面に存在するから、地形の低い部分は削平されてしまつて不明である。

遺物(第41図)

甕形土器の口縁部である。頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、口縁の端部は斜め上下へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には3条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い凹みが認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、角張った張出しが存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

第41図 No.22住居址出土遺物 ($S = \frac{1}{4}$)

No.23遺構

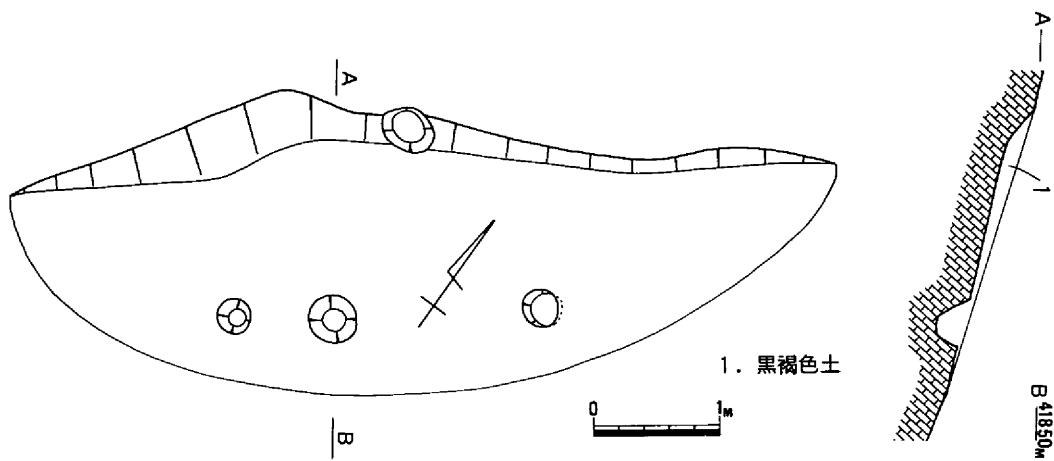
遺構(第2図、図版29—2)

今度調査を行った範囲の北端に存在する。住居址の可能性が考えられるとはいゝ、等高線に平行する方向に存在する壁体に似た段は、直線的にならずに屈曲している。しかも、住居址の柱穴と断定できるものが存在しない。したがつて、住居址以外の遺構になることも考えられる。いずれにしても残存している部分がわずかであるから、詳細は不明である。

No.24遺構

遺構(第33図、図版26—2)

No.12住居址とNo.13住居址の中間に存在する。両端をNo.12住居址とNo.13住居址に新しく切られているから、両住居址よりも古い時期に属する遺構である。残存している部分がわずかであるから、詳細は不明であるが、住居址になるのかもしれない。床面には柱穴2が存在するが、この遺構に伴うかどうかは不明である。遺構内から遺物は出土していない。

第42図 No.23遺構 ($S=\frac{1}{50}$)**No.25遺構****遺構 (第33図、図版26—2)**

No.13住居址とNo.1住居址の中間に存在する。浅い土壙になるのか、住居址の一部になるのか不明である。床面に柱穴1が存在する。住居址であれば、著しく小型のものになると考える。遺構内から遺物は出土していない。この遺構は残存部分がわずかであるため、詳細は不明である。

第4節 土 壙

塚の峯遺跡で検出した土壙には、貯蔵穴になる可能性のものと、土壙墓になる可能性のものがある。形態では、隅丸長方形を呈するものと、円形または楕円形を呈するものがある。断面形が袋状を呈する土壙も存在する。

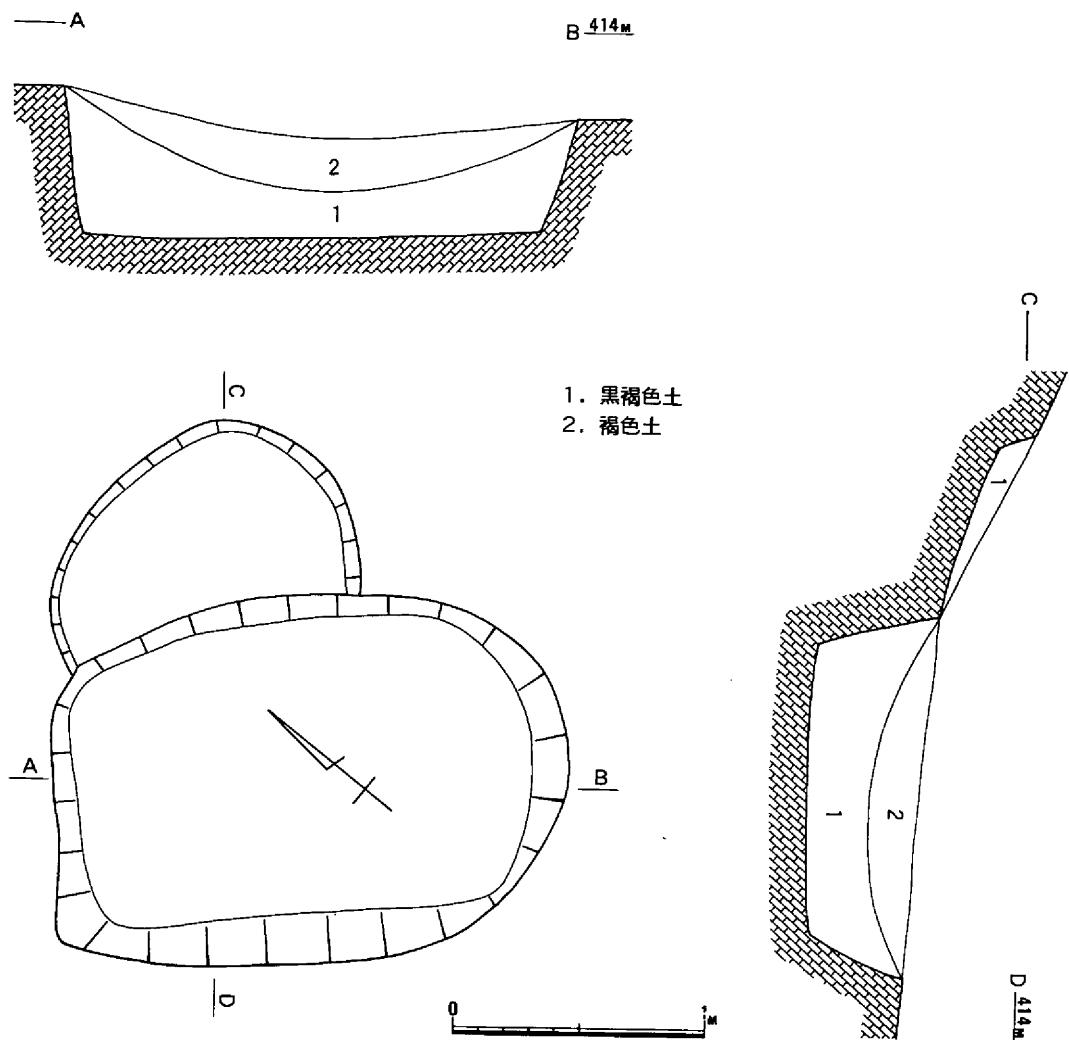
No.26土壙**遺構 (第43図、図版28—1)**

No.13住居址の東側に存在する。楕円形を呈する土壙を切って構築している。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面では長軸が201cm、短軸が143cmを測る。床面では長軸が179cm、短軸が115cmを測る。土壙内の覆土は2層で、黒褐色土の上位に褐色土が堆積している。土壙内の黒褐色土中から土器片が出土している。

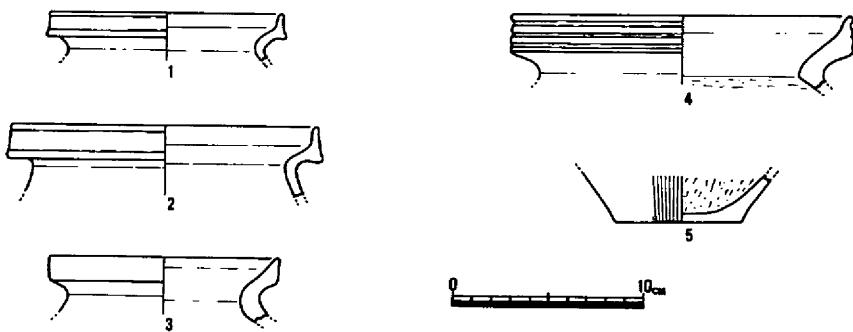
遺物 (第44図)

1と2は口径に大小の違いがあるとはいって、酷似した形態を呈する壺形土器である。肥厚しながら

塚の峯遺跡(72)



第43図 No.26土壤 ($S=\frac{1}{30}$)



第44図 No.26土壤出土遺物 ($S=\frac{1}{4}$)

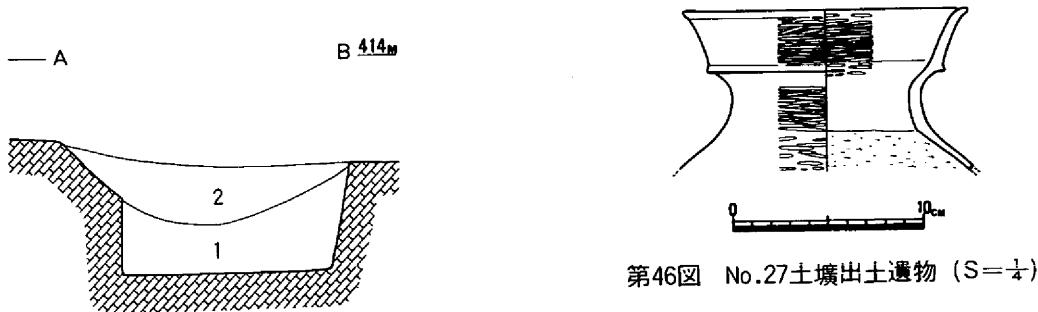
塚の峯遺跡(72)

外反した口縁の端部は、器壁が薄くなつて上方へ立上がる。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には浅い凹みが認められる。どちらも胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。1の外面にはススの付着が認められる。

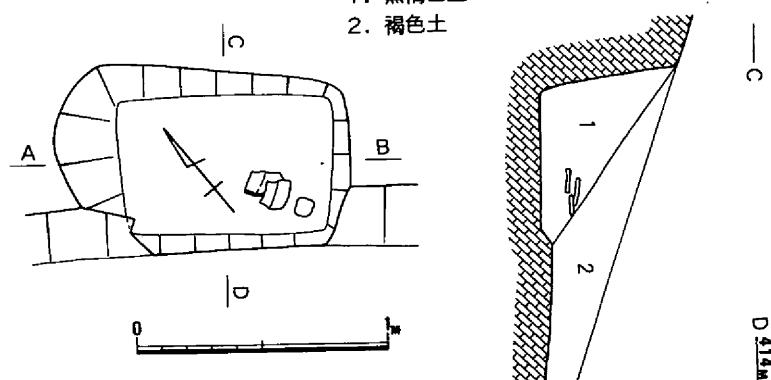
3は口径が比較的小さいにもかかわらず、器壁の厚い甕形土器である。外彎して斜め上方へ立上がつた口縁の端部は、断面が三角形を呈して上方へ立上がる。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には何も施していない。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

4の甕形土器は、頸部から口縁部にかけて肥厚しながら字状に外反し、端部は上方へ立上がる。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には3条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められる。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行つてゐる。胎土中には細かい砂粒を含むが量が少なく、良質の粘土を使用してゐる。焼成は良好で乳褐色を呈する。外面には黒斑が存在する。

5は壺形土器または甕形土器の底部である。外面は縦方向のヘラ磨きを行い、内面は縦方向のヘラ削りを施してゐる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。外面には黒斑が存在する。



第46図 No.27土壤出土遺物 ($S=\frac{1}{4}$)



第45図 No.27土壤 ($S=\frac{1}{30}$)

N_o27土壙

遺構(第45図、図版27—2)

N_o12住居址の壁体に接して存在する土壙である。平面形は隅丸長方形を呈し、西端の隅が袋状になっている。検出面では長軸が117cm、短軸が70cmを測る。N_o12住居址の壁体を切って新しく構築しているため、地形の低い位置の壁は著しく削平されている。北西側の壁には段が認められる。床面では長軸が84cm、短軸が54cmを測る。床面からわずかに浮いた状態で土器片が出土している。

遺物(第46図)

いわゆる複合口縁を有する器壁の薄い土器である。胴部から頸部にかけて肥厚しながら内彎して立上がり、直立した短い頸部を有する。斜め上方へ外反した口縁部は、さらに屈曲して斜め上方へ立上がる。口縁端部の器壁は薄くなつてわずかに外反する。口縁部は内外面とも短い単位のヘラ磨きを、横方向に施している。頸部の外面は短い単位のヘラ磨きを横方向に施しているが、内面は横ナデを行っている。胴部の外面には、横方向に施した短い単位のヘラ磨きの痕跡が存在するが、内面は横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は非常に良好で赤褐色を呈する。内面の胴部を除いて全体に丹塗りの痕跡が認められる。外面にはススが付着している。

この土器は、古墳時代前期の時期に属する古式土師器と考える。

N_o28土壙

遺構(第17図、図版26—2)

N_o2住居址の壁体に接して存在する土壙である。N_o26土壙から西側の位置になる。東脇は後世の土壙が新しく切っている。平面形は歪んだ橢円形を呈する小型の土壙である。袋状を呈し、底部は水平になっている。土壙内から遺物は出土していない。N_o2住居址とN_o28土壙の切合の関係を精査したにもかかわらず、確認することができなかった。貯蔵穴の可能性が強い土壙である。

N_o29土壙

遺構(第2図、図版29—1)

N_o2住居址の西側に存在する。平面形は小規模な橢円形を呈する。検出面からの深さは約30cmを測り、底部は水平になっている。土壙内から遺物は出土していない。貯蔵穴の可能性が考えられる。

N_o30土壙

遺構(第2図)

N_o1住居址の北側の尾根に存在する。N_o1住居址の壁体から約250cmの距離を測る。平面形は径約60cmを測る小規模な円形を呈する。検出面からの深さは約30cmを測り、底部は水平になっている。土壙内から遺物は出土していない。貯蔵穴の可能性が考えられる。

No.31土壙

遺構(第2図、図版6)

No.33溝状遺構の南西方向に存在する。発掘調査実施当初に掘開したトレンチの断面で、検出した土壙である。平面形は小規模な円形を呈し、No.30土壙に酷似する。検出面からの深さは約40cmを測り、底部は水平になっている。土壙内から遺物は出土していない。貯蔵穴の可能性が考えられる。

No.32土壙

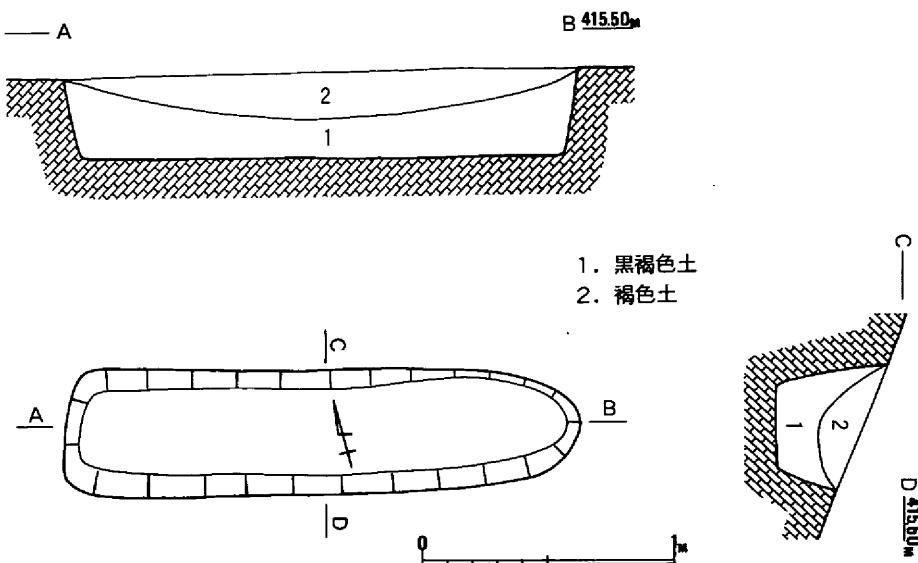
遺構(第47図、図版26—1)

No.14住居址の北側に、調査範囲の境界に接して存在する。平面形は長大な隅丸長方形を呈し、主軸方向が等高線に平行している。検出面では長軸が204cm、短軸の最大幅が50cmを測る。床面では長軸が193cm、短軸の最大幅が32cmを測り、西方向がわずかに広くなっている。検出面から床面までの最大値は43cmを測る。土壙内の覆土は2層で、黒褐色土の上位に褐色土が堆積していた。土壙内から遺物は出土していないが、No.39土壙墓の形態に酷似しているから、土壙墓の可能性が強い。

No.33 溝状遺構

遺構(第2図)

No.31土壙とNo.39土壙墓の中間に存在する。尾根に平行して直線状を呈するが、北西端はわずかに屈曲している。検出面と底部の幅は約40cmと約20cmを測るが、断面がU字形を呈して著しく浅い。内部から遺物は検出できなかった。この溝状遺構の性格は不明である。

第47図 No.32土壙 ($S=\frac{1}{30}$)

No.34溝状遺構

遺構(第2図、図版26—1)

No.26土壙とNo.39土壙墓の中間に存在する。No.33溝状遺構と平行する方向に、延長約850cmまで確認している。南東端がわずかに広くなっている。検出面と底部の幅は40~80cmと20~40cmを測るが、断面がU字形を呈して著しく浅い。内部から遺物は出土していない。住居址の壁体溝とは考えられない遺構で、性格は不明である。

No.35溝状遺構

遺構(第2図、図版26—1)

No.15住居址とNo.34溝状遺構の中間に存在する。等高線に平行して延長約540cmまで確認している。南東端は、平面形が歪んだ橢円形を呈する浅い土壙によって、新しく切られている。北西端は幅が広くなっている。この溝状遺構は、断面がU字形を呈して著しく浅く、遺物は出土していない。ほかの溝状遺構と同様に、性格は不明である。

No.36溝状遺構

遺構(第2図、図版26—1)

No.15住居址の北方向に存在する。一部が調査予定地外の範囲に存在するため、全体を把握することはできなかった。尾根に平行して直線状を呈するが、調査範囲の境界部分で幅が狭くなっている。この遺構内に柱穴状の土壙が存在しているが、前後関係を確認することができなかった。断面はU字形を呈して著しく浅い。内部から遺物は検出できなかった。この溝状遺構の性格は不明である。

No.37溝状遺構

遺構(第2図、図版26—1)

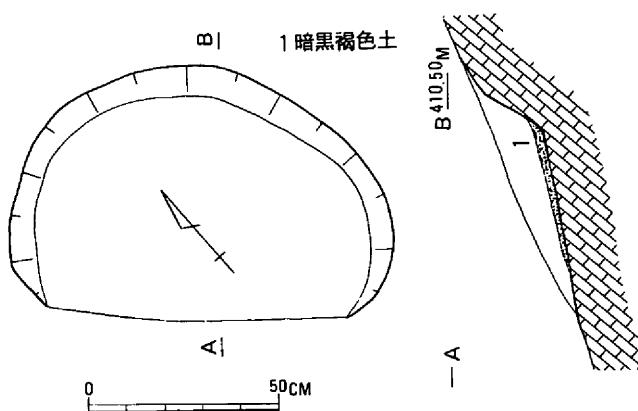
No.1住居址の南側に存在する。この溝状遺構だけが尾根に直交する方向になっている。長軸が約200cm、短軸の最大幅が約30cmを測る。断面はU字形を呈して、検出面からの深さが約5cmと非常に浅いものである。No.1住居址に近接した位置に存在するから、住居址に伴う遺構になるのかもしれないが、詳細は不明である。内部から遺物は出土していない。

No.38鍛冶炉

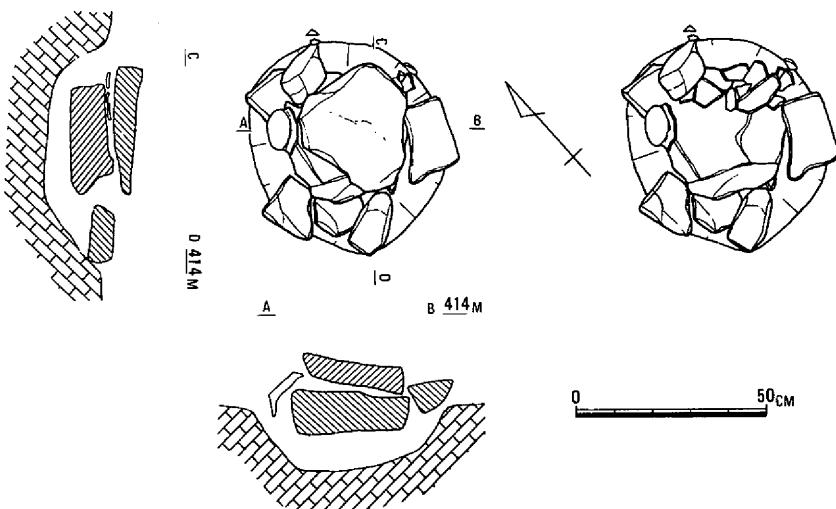
遺構(第48図)

No.2住居址の南西約20mの丘陵斜面に位置する。長軸約150cm、短軸約100cmの橢円形を呈する。斜面下方は流失していた。壁面は、部分的に焼けた面が残存しているだけであった。床面は全体に焼けており、その上に2~3cmの炭化物や焼土が堆積していた。出土遺物はなく、時期は不明であるが、奈良時代以降の時期になるであろう。

塚の峯 遺跡 (72)



第48図 No.38鍛冶炉 ($S=\frac{1}{20}$)



第49図 No.40集石遺構 ($S=\frac{1}{20}$)

No.40集石遺構

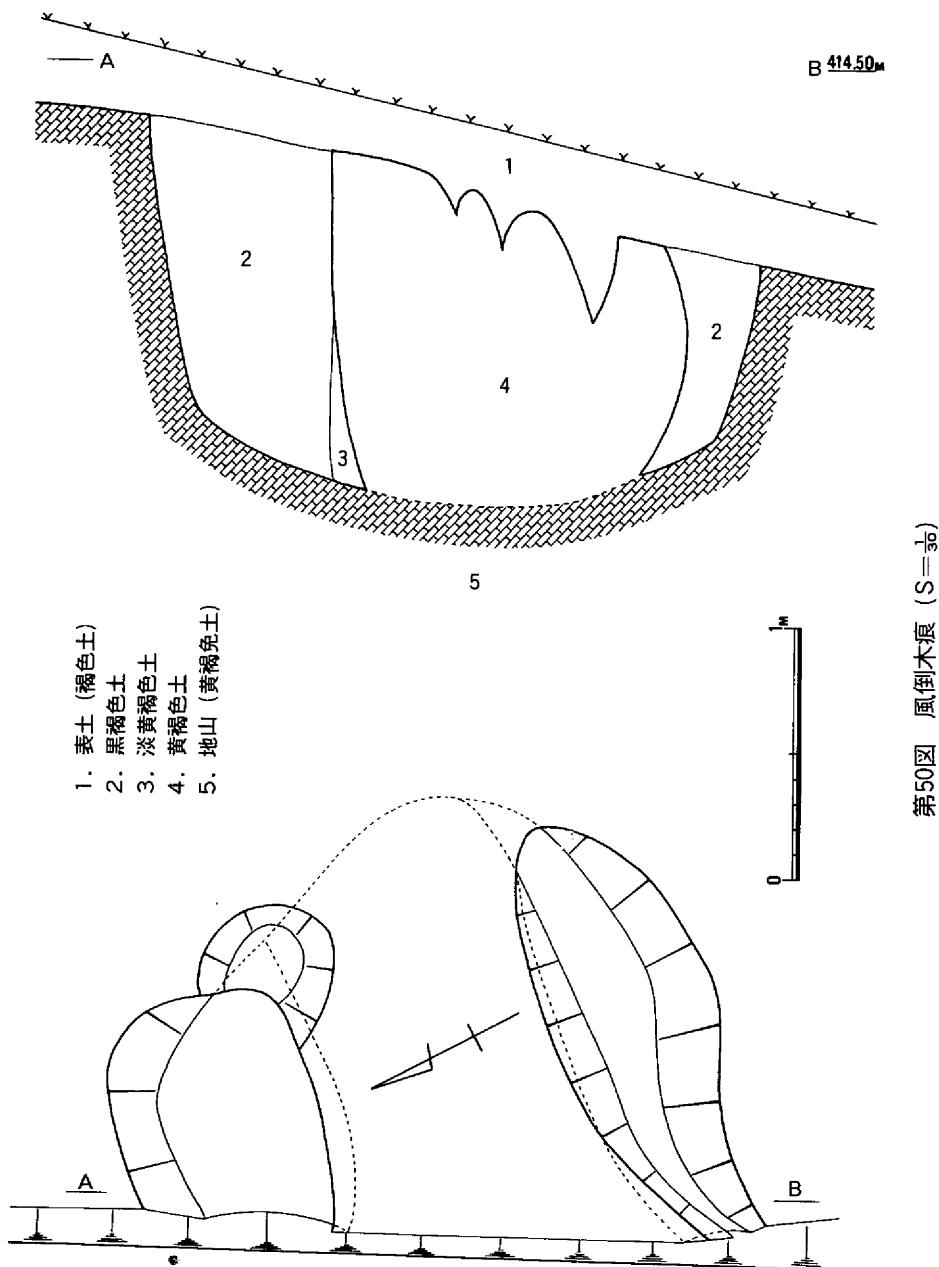
遺構 (第49図、図版14—2)

塚の峯2号墳とNo.2住居址の中間に存在する。周辺には遺構が存在しない。平面形が $50\times 55\text{cm}$ の楕円形を呈する浅い土壙の中心に板石を重ねて置き、その周囲に拳大の石を並べているだけである。石の間からは小破片の弥生式土器に混在して、壺形土器または甕形土器の底部が出土したが、土壙内には遺物は存在しなかった。この遺構は、土器棺墓になるのかもしれないが、はっきり断定できない状況であった。

塚の峯遺跡(72)

風倒木痕(第50図)

№12住居址と№27土壙の北側に存在する。調査予定地外の範囲にまたがって存在しているため、全体を把握することができない。地山面で確認した黒褐色土を追求すると、黒褐色の斑点を含んだ地山に酷似している土の下位へ到達する。断面の層序は不規則で、平面形が歪んだ形を呈する。だから人工の遺構ではないと判断した。図化したもの以外にも、数箇所で検出している。



第5節 遺構に伴わない遺物

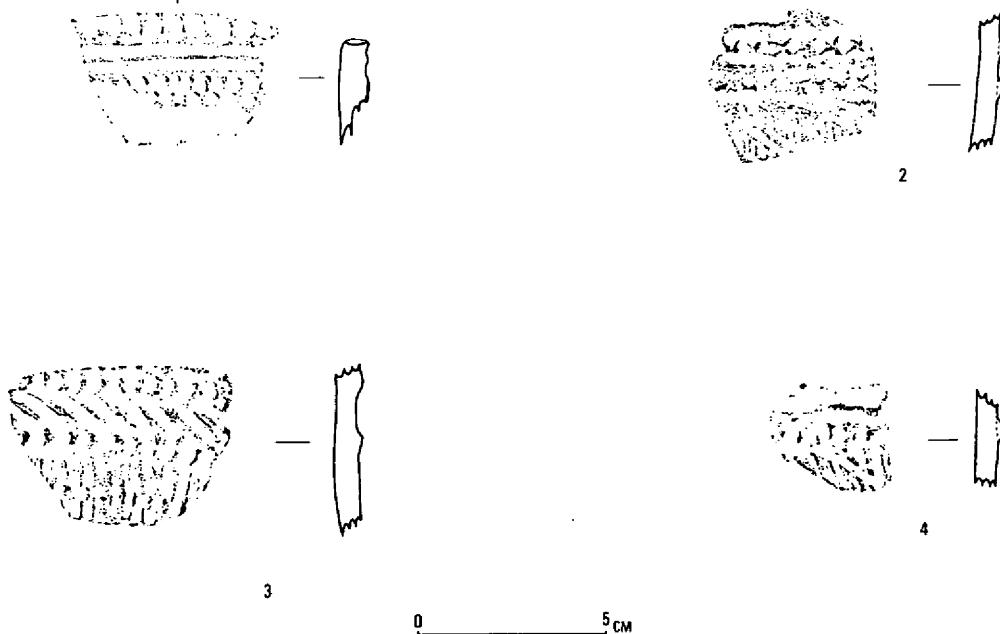
遺構に伴わない遺物には、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、鉄滓がある。個々の遺物について説明したい。

縄文式土器（第51図、図版31）

No.33溝状遺構とNo.37溝状遺構のほぼ中間の位置に、調査開始当初に掘開したトレンチ内の地山面に密着して出土したものである。

出土した土器片は4片であるが、いずれも同一個体の破片と考えられる。器形は深鉢になるであろう。1は口縁部である。2、3、4は、口縁に近い文様帯を構成する部分であろう。口縁の上端面には、指頭による刻目の文様がめぐらされている。口縁部の外面には、半截竹管による横方向の沈線と連続刺突文が施されている。口縁部より下位の外面には、刻目を有する横方向の凸帯と、縦または斜め方向に施した半截竹管による沈線を組合せた文様になると考へられる。この沈線は、底部に近い部分にも施されているのである。内面には、全体にていねいなナデが認められる。胎土中には白色の細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で黒褐色を呈する。

このような縄文式土器は、岡山県南部では現在のところ出土していない。県北部では中国縦貫自動車道沿線の戸谷墳跡（註1）と青地遺跡（註2）に、わずかながら類例が求められる。青地遺跡出土の土器は、丸底になる可能性が強く、縄文時代前期でも最も古いグループに属すると考へられる。い



第51図 遺構に伴わない遺物(1) ($S = \frac{1}{2}$)

すれにしても、出土例が少ないので現在では多くを語ることができないが、中国山地の地域に広く分布している土器で、岡山県南部の羽島下層式（註3）に併行する時期に属すると推定される。

弦生式土器・土師器（第52～55図、図版32～38）

1は口径が比較的小さい壺形土器の口縁部と考える。ゆるやかに外彎しながら斜め上方へ立上がった口縁端部は、わずかに斜め上下へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線状の凹みを2条有する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

2の壺形土器の口縁部は、肥厚しながら外彎して斜め上方へ立上がり、端部がT字状に斜め上下へ大きく張出して器壁が薄くなっている。口縁端部は粘土を貼付けずに、つまみ上げて整形している。内外面とも全体に横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。内外面とも丹塗りを施しているから赤色を呈し、焼成は良好である。

3は器壁の厚い壺形土器の口縁部である。肥厚しながら斜め上方へ立上がった口縁の端部は、わずかに斜め上下へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には1条の凹線と、幅の広い凹線状の凹みを有する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

4は直立した頸部を有する壺形土器である。頸部から口縁部にかけて肥厚しながら斜め上方へ立上がり、端部の器壁が薄くなって斜め上下へ大きく張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線状の凹みを2条有する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好である。内外面とも全体に丹塗りを施しているため、赤色を呈する。

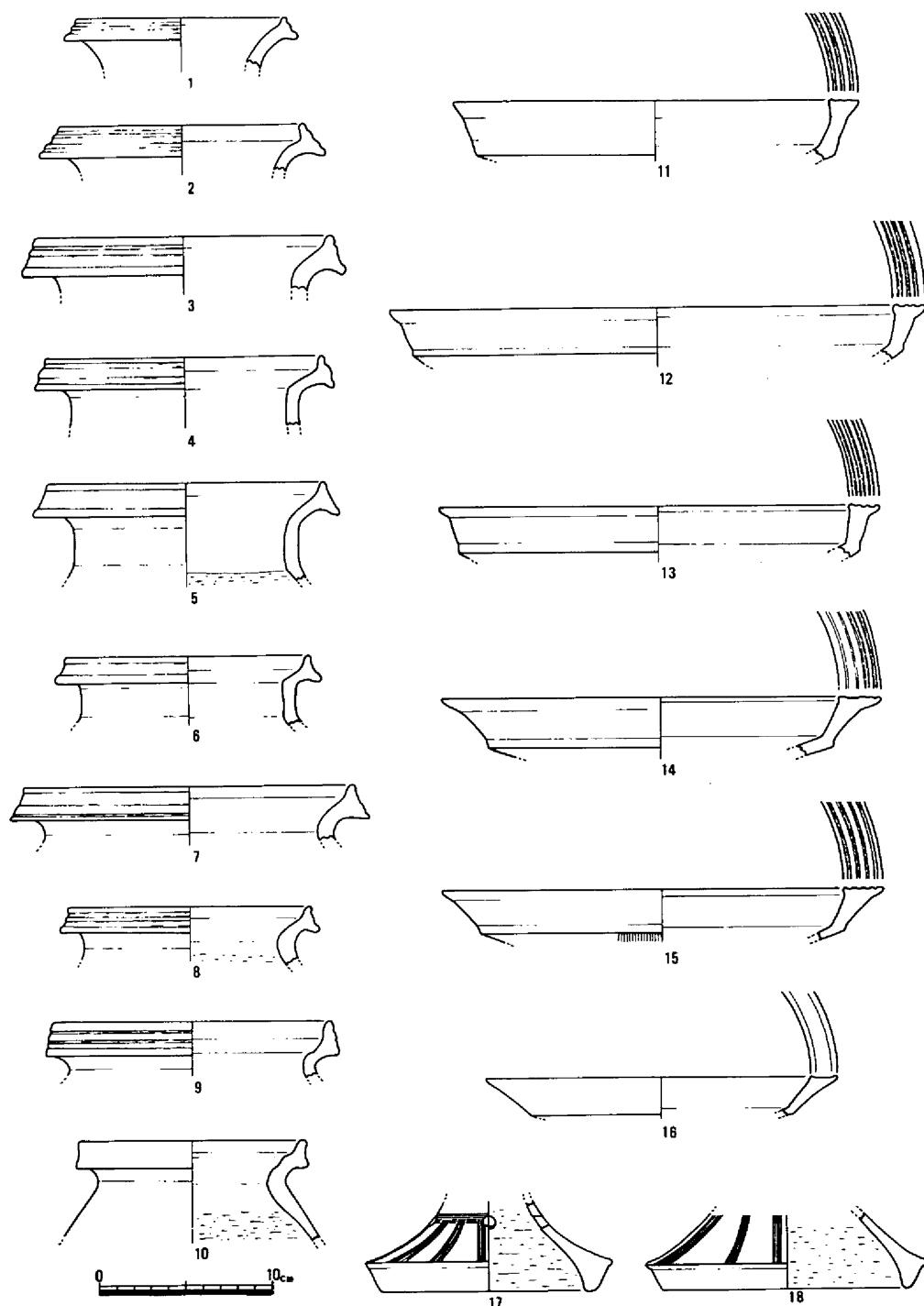
5の壺形土器は、直立した頸部が肥厚しながら斜め上方へ外反し、端部は斜め上下へ大きく張出している。頸部と口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には浅い凹みが認められるだけである。口縁部の内面には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が存在する。内面の頸部直下は、横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

6は直立した頸部を有する比較的口径の小さい壺形土器である。口縁部は、肥厚しながら斜め上方へ短く外反し、端部が斜め上下へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には浅い凹みを有するだけである。口縁部と頸部の内面には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、瘤状の張出しが存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。

7は比較的口径が大きくて、器壁の厚い壺形土器の口縁部である。肥厚しながら斜め上方へ外彎した口縁の端部は、わずかに上方へ立上がる。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には1条の凹線と幅の広い凹みを有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面を有する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。

8は頸部の器壁が著しく肥厚している土器である。く字状に外彎した口縁の端部は斜め上下へ張出している。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線状の凹みを2条有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削

塚の峯遺跡(72)



第52図 遺構に伴わない遺物(2) ($S = \frac{1}{4}$)

りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。

9は頸部から口縁部にかけて肥厚しながら字状に外反し、端部の器壁が厚くなつて上方へ立上がる。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には1条の沈線と2条の凹線を有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた凹みが認められる。内面の頸部と口縁部の境目には、瘤状の張出しが存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

10の甕形土器は、胸部から頸部にかけて肥厚しながら内彎して立上がる。頸部から口縁部にかけて字状に外反し、端部は上方へ立上がる。頸部と口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には横ナデを行つてゐるだけで何も施していない。内面の口縁部には、横ナデによって生じた凹凸が認められる。胸部の外面は縦ナデを行い、内面は横方向の粗いヘラ削りを施してゐる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で乳褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

11から13は高杯形土器の口縁部である。口径に大小の違いがあるとはいゝえ、立上がつた口縁の端部は横方向へわずかに張出して、上位に凹線状の凹みを3条有する面が存在する。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には横ナデによって生じた凹凸が認められる。いずれも胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色または赤緑色を呈する。

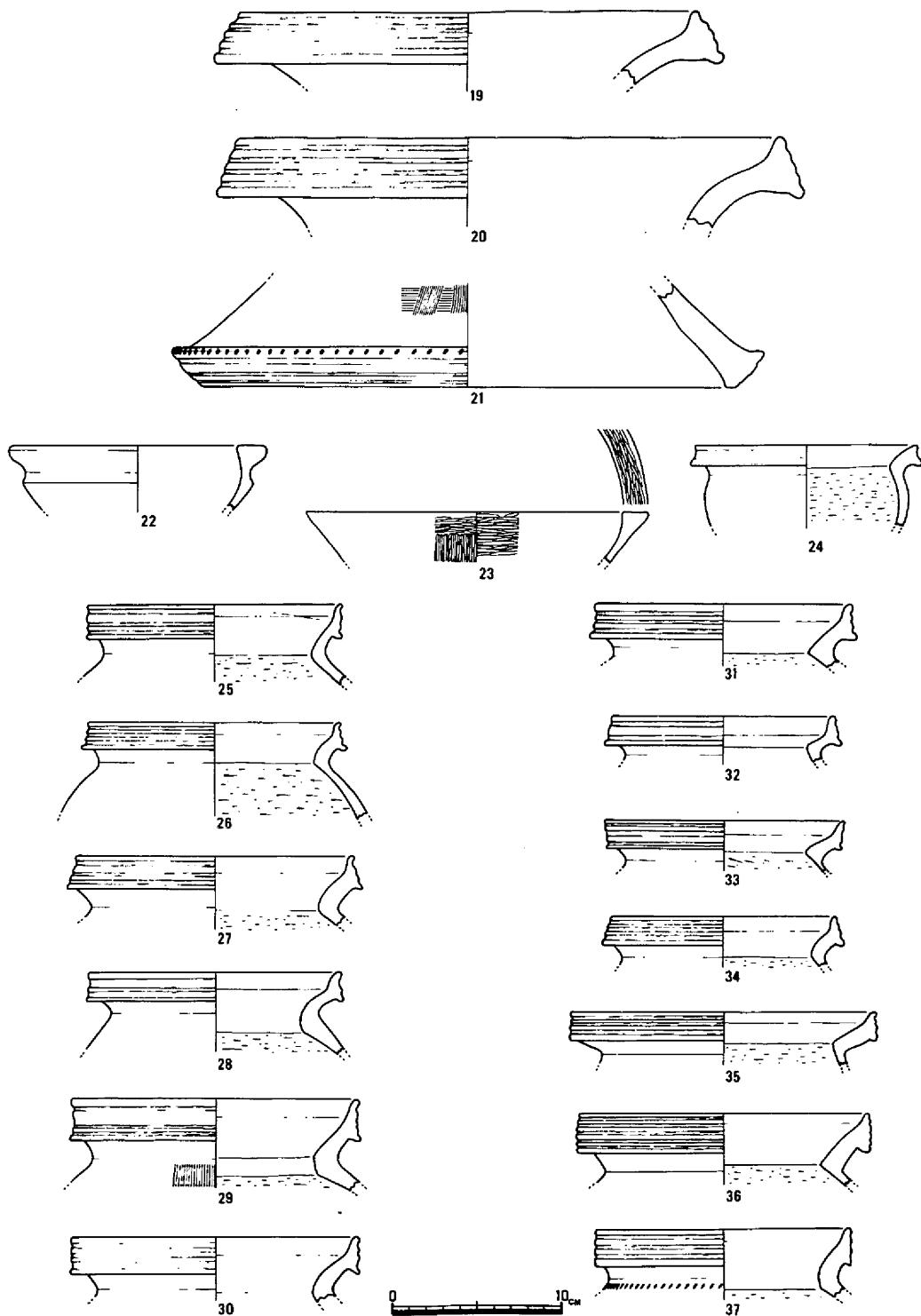
14と15も高杯形土器の口縁部である。口縁部は肥厚しながら斜め上方へ立上がり、端部が横方向へ大きく張出して、上位に凹線状の凹みを4条有する面が存在する。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には横ナデによって生じた凹みを有する。杯部下位の外面は縦ナデまたは縦方向のヘラ磨きを施し、内面は縦ナデを行つてゐる。どちらも胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。どちらも内外面とも全体に丹塗りを施してゐるから赤色を呈し、焼成は良好である。

16は小型の高杯形土器の口縁部である。肥厚しながら斜め上方へ立上がつた口縁の端部は、横方向へ張出して上位に浅い凹みを有する面が存在する。内外面とも全体に横ナデを行つてゐる。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の砂粒が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。内外面とも全体に丹塗りを施してゐるから赤色を呈し、焼成は良好である。

17と18は高杯形土器の脚部である。裾部はハ字状を呈して開いてゐる。端部は著しく肥厚して斜め上方へ立上がる面を有する。外面には5条または6条を単位に櫛状工具で施した浅い沈線を、縦または横方向に描いてゐる。17では外から内方向へ刺突した円孔が、4箇所に認められる。端部の斜め上方へ立上がる面は横ナデを行つてゐるが、内面は全体に横方向の粗いヘラ削りを施してゐる。どちらも胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母や黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。外面は全体に丹塗りを施してゐるから赤色を呈し、焼成は良好である。

19と20は器台形土器の口縁部である。斜め上方へ外彎しながら立上がつた口縁の端部は、斜め上下へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線または凹線状の凹みを4条有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。19の胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。20の胎土は一般的の土器に認められるものである。どちらも内面の口縁部には丹塗りの痕跡が認められるが、外面は

塚の峯遺跡(72)



第53図 遺構に伴わない遺物(3) ($S = \frac{1}{4}$)

褐色を呈している。

21は器台形土器の脚部である。裾部はハ字状を呈して開いている。端部は肥厚して斜め上方へ立上がる面を有する。外面の上位には、縦または横方向の刷毛目が認められる。外面の下位は、斜め上方へ立上がる面も含めて横ナデを行っている。下位の斜め上方へ立上がる面には、凹線または凹線状の凹みが認められ、上端にはヘラ状工具で刺突した文様をめぐらせてている。内面は横方向のヘラ削りを行ったのちに、横ナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面には丹塗りを施した痕跡が認められるが、内面は褐色を呈する。

22は鉢形土器の破片である。胴部は肥厚しながら内彎して立上がり、頸部の器壁が著しく薄くなっている。口縁部は横方向へ肥厚して立上がり、上位に面を有する。外面は全体に横ナデを行い、内面はヘラ削りを行ったのちに横ナデを施している。口縁の上面は、横ナデを行っているだけで何も施していない。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。

23は鉢形土器か、小型の高杯形土器の口縁部と考える。内彎しながら立上がった口縁の端部は、横方向へ肥厚して、上位に浅い凹みを有する面が存在する。外面の上位は、横方向の短い単位のヘラ磨きを施し、下位は縦方向の短い単位のヘラ磨きを施している。内面は、全体に横方向の短い単位のヘラ磨きを施している。口縁の上面は、横方向の短い単位のヘラ磨きを施している。胎土中には細かい砂粒を含むが量が少なく、良質の粘土を使用している。内外面とも全体に丹塗りを施しているから赤色を呈し、焼成は良好である。

24の胴部は肥厚しながら内彎して立上がり、頸部で屈曲して口縁の端部へ移行する。口縁部は肥厚しているだけで、端部の張出しあはほとんど認められない。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹みを有する。胴部の外面は縦ナデを行い、内面は横方向の粗いヘラ削りを施している。胴部の最大径は中位よりやや上方に存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

25から43はいずれも甕形土器の口縁部である。口径の大小および器壁の厚い薄いの違いがあるとはいえ、塚の峯遺跡から出土した弥生式土器で最も出土量が多い器形である。胴部から頸部にかけて内彎しながら立上がり、頸部で鋭く外反して口縁端部へ移行する。口縁端部の下方への張出しあはわずかであるが、上方へは器壁が薄くなって大きく立上がる。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線または凹線状の凹みを2条から5条有する。内面の口縁部には横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。37と38の外面の頸部には、刺突文を全体にめぐらせてている。29の内面の頸部には、立上がる面が認められる。外面の胴部はほとんどが縦ナデを行っているが、29は縦方向の刷毛目を施している。内面の頸部下位は横方向の粗いヘラ削りを行い、器壁が薄くなっている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色または赤褐色を呈するが、31は口縁部の内面と外面全体に丹塗りを施しているため、赤色を呈する。33、39、40の外面にはススの付着が認められる。26の外面には黒斑が存在する。

44は比較的口径が大きくて器壁の厚い甕形土器である。頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、口縁端部は上下へわずかに張出すだけである。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁外の

塚の峯遺跡(72)

面には3条の凹線を有する。内面の頸部下位は横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

45は頸部から口縁部にかけてく字状に鋭く外反し、口縁端部は上下へ張出している。外面の頸部直下には、斜め方向に描いた刺突文を全体にめぐらせてている。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線状の凹みを2条有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。内面の頸部と口縁部の境目は、断面が三角形を呈して張出している。内面の頸部直下は、横方向のヘラ削を施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

46は頸部から口縁部にかけて逆L字状に鋭く外反し、口縁端部は断面が三角形を呈して上方へ立上がる。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には2条の凹線を有する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、吸水性に富んでいる。焼成は良好で、明るい褐色を呈する。

47は頸部から口縁部にかけて肥厚しながら短く外反し、口縁端部の張出しはほとんど認められない。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には浅い凹みを有するだけで何も施していない。外面の頸部直下には、斜め方向に描いた刺突文を全体にめぐらせてている。内面の頸部直下は横方向のヘラ削りを行い、器壁が著しく薄くなっている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で黒褐色を呈する。

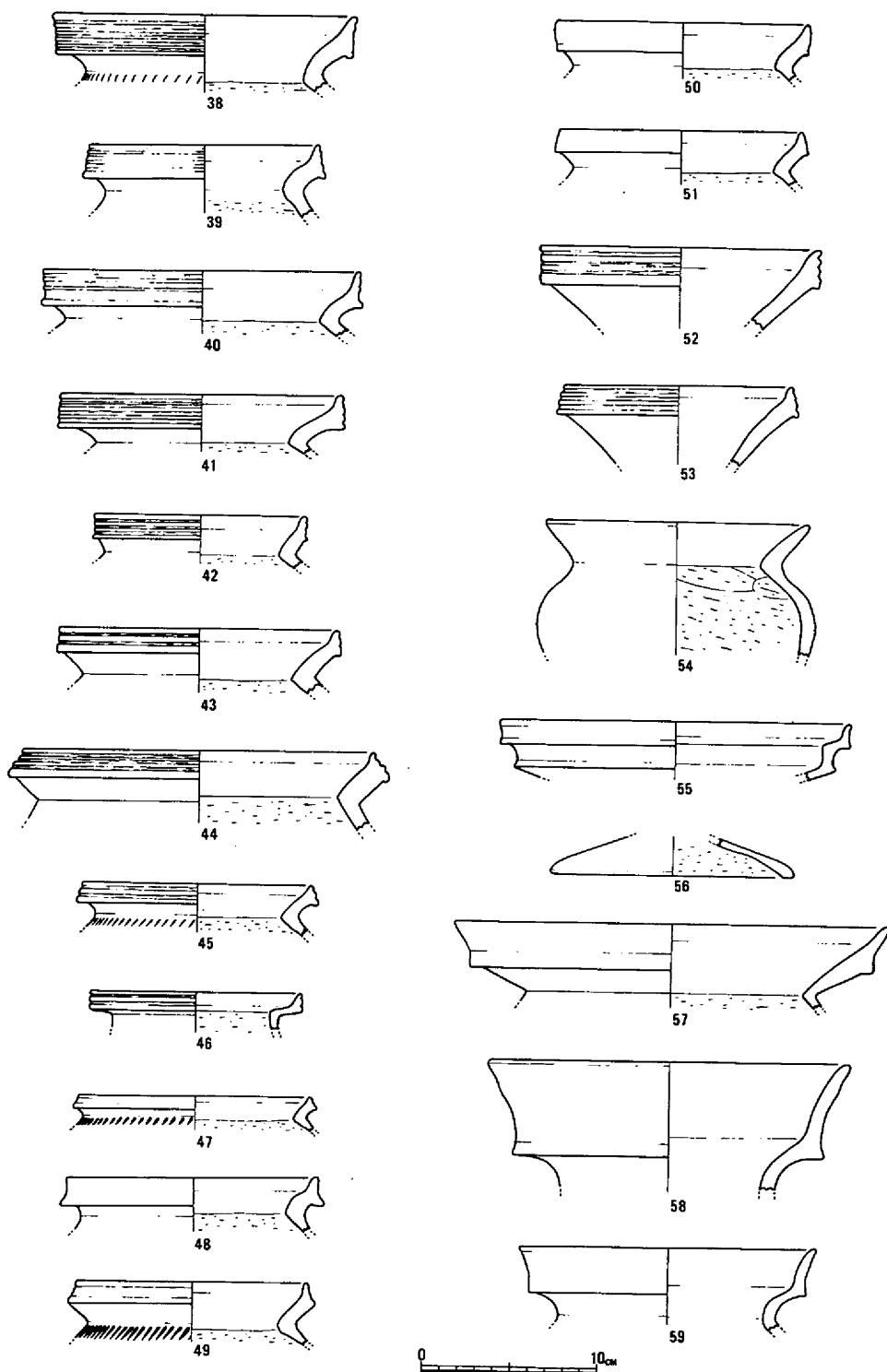
48は口縁部の器壁が、比較的厚い甕形土器である。頸部から口縁部は、器壁が著しく厚くなってくれ字状に外反し、口縁端部は上下へ大きく張出している。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面は浅く彎曲しているだけで何も施していない。内面の口縁部には、横ナデによって生じた凹凸が認められる。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で黒褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

49は頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、わずかに肥厚しながら斜め上方へ立上がる。口縁端部の器壁は薄くなっている、上方へ大きく立上がる。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には浅い凹みを有する。外面の頸部直下には、刷毛状工具で斜め方向に描いた刺突文を全体にめぐらせてている。内面の頸部直下は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で明るい褐色を呈する。

50と51は頸部から口縁部にかけて、わずかに肥厚しながらく字状に外反する。口縁端部は上方へ大きく立上がり、上端は丸く仕上げられている。下方への張出しは、わずかに認められるだけである。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には何も施していない。内面の口縁部には、横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。内面の頸部下位は横方向の粗いヘラ削りを行い、器壁が薄くなっている。いずれも胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好である。50は口縁部の内面と外面全体に丹塗りを施しているから赤色を呈するが、51は褐色を呈する。51の外面には、ススの付着が認められる。

52と53は器形がはっきりしない土器である。どちらも朝顔形に開いた形態を呈する。口縁端部は肥厚して上下へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には3条の凹線を有する。

塚の峯遺跡(72)



第54図 遺構に伴わない遺物(4) ($S = \frac{1}{4}$)

塚の峯遺跡(72)

胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。この器形を呈する土器は、西江遺跡(註4)の安信丘陵部調査区で、土墳墓周辺から出土している。

54は胴部が球形を呈する土器で、口縁端部は著しく肥厚しない。胴部から頸部にかけて内彎して立上がり、頸部でく字状に鋭く外反する。口縁部は端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなり、端部は丸く仕上げている。口縁部と頸部の外面は、全体に横ナデを行っている。胴部の外面は縦ナデを行い、内面は横方向の粗いヘラ削りを施している。胴部の最大径はほぼ中位に存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で黒褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

55は高杯形土器の口縁部である。杯部から屈曲して立上がった口縁部は、さらに外反して口縁端部へ移行する。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には横ナデによって生じた彎曲面を有する。杯部は内外面とも縦ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母と黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。内外面とも全体に丹塗りを施しているから赤色を呈し、焼成は良好である。

56は高杯形土器の脚部と考える。ハ字状に開いた据端部は、肥厚して丸く仕上げている。外面は不規則なナデを行い、内面は横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

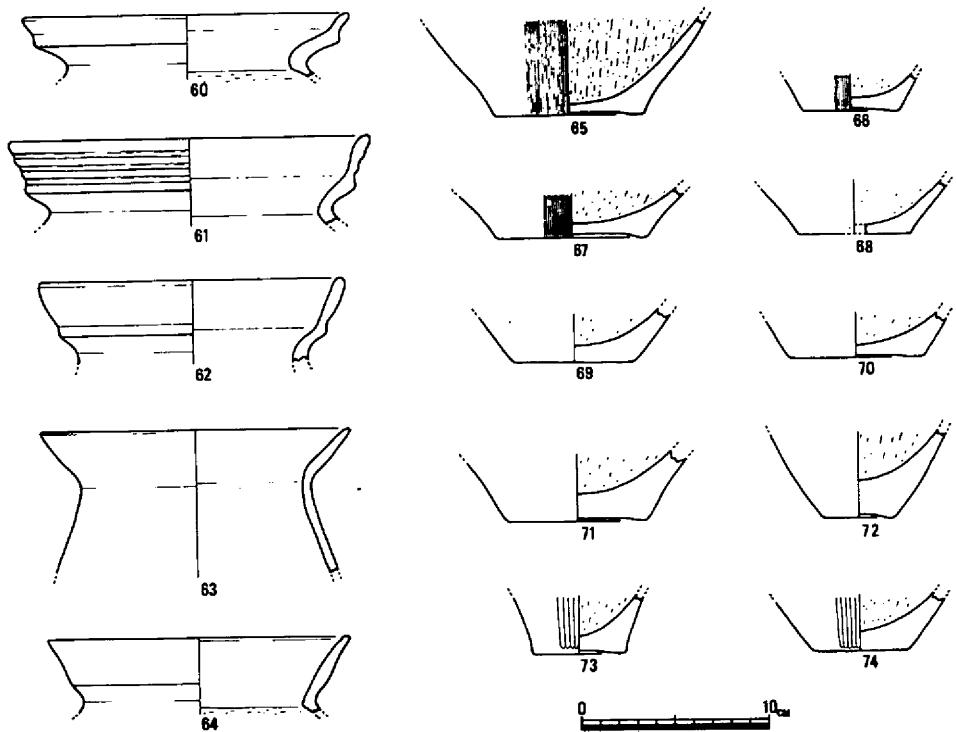
57は口径が大きい甕形土器である。頸部から肥厚しながらく字状に外反した口縁部は、さらに斜め上方へ立上がる複合口縁になっている。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、内面の口縁部には横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

58から60はいわゆる複合口縁を有する土器である。頸部から外彎して斜め上方へ張出した口縁は、さらに屈曲して斜め上方へ外彎しながら立上がる。口縁端部は丸く仕上げている。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、58の口縁外面には横ナデによって生じた凹凸が認められる。60の内面頸部下位は、横方向のヘラ削りを施している。胎土には砂粒の少ない良質の粘土を使用している。いずれも全体に丹塗りを施しているから赤色を呈し、焼成は良好である。

61と62も複合口縁を有する土器であるが、屈曲して斜め上方へ立上がった口縁の端部は肥厚している。内外面とも全体に横ナデを行い、内面の口縁部には横ナデによって生じた彎曲面が存在する。61の口縁部外面には、凹線状の凹みが3条認められる。どちらも胎土中には細かい砂粒を多く含んで吸水性に富み、焼成は良好で乳褐色を呈する。

63は胴部から頸部にかけて内傾して立上がる。頸部から口縁部にかけては、ゆるやかにく字状を呈して外反する。口縁部はわずかに内彎している。口縁端部は肥厚せずに、器壁が薄くなっているだけである。口縁部と頸部は、内外面とも横ナデを行っている。胴部の外面は縦ナデを行い、内面は不規則なナデを施している。胎土中には細かい砂粒に混在して、径が約5mmを測る石も認められる。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

64はわずかな複合口縁を呈する土器である。頸部から口縁部にかけてく字状に外反し、口縁端部の上位にはわずかな面が存在する。口縁端部の内面には、浅い凹みが認められる。口縁部と頸部の外面

第55図 遺構に伴わない遺物(5) ($S = \frac{1}{4}$)

は、全体に横ナデを行っている。内面の頸部下位は、横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で黒褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

65から74は壺形土器または甕形土器の底部である。65から67の外面は縦方向の刷毛目が存在し、内面は縦方向のヘラ削りを行っている。68から72の外面は縦ナデを行い、内面は縦方向のヘラ削りを施している。73と74の外面は縦方向のヘラ磨きを施し、内面は縦方向のヘラ削りを行っている。65から67と70から73は、わずかに上底になっている。いずれも胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色または黒褐色を呈する。65と72の外面には、ススの付着が認められる。66と70の外面には、黒斑が存在する。

須恵器

塚の峯遺跡の南端の位置に、休憩小屋を建てた時点に出土したものである。大甕の胴部の破片と考えられるもので、図化することはできなかった。内外面とも全体に叩きの痕跡が認められ、焼成は良好で灰色を呈する。破片が出土した地点の周辺を精査したにもかかわらず、遺構と認められるものは検出できなかった。塚の峯遺跡で、須恵器が伴う時期に属する墳墓以外の遺構は、検出できなかった。塚の峯遺跡で須恵器が伴う時期に属する遺構は、尾根上に存在する墳墓だけである。したがって、この大甕と考えられる須恵器の破片は、塚の峯古墳群に関係があるのではなかろうか。

塚の峯遺跡(72)

鉄滓(図版19—3)

旧道に面した南西斜面から出土したものである。指頭大のものに混在して、拳大の規模を有するものを3個採集している。造構に伴わないばかりか、共伴遺物も確認できなかったので、時期は不明である。№38鍛冶炉に関係があるかもしれないが、詳細は不明である。

註

- (1) 橋本惣司「戸谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(11) 岡山県教育委員会 1976年
- (2) 浅倉秀昭「青地遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(11) 岡山県教育委員会 1976年
- (3) 鎌木義昌・木村幹夫「中国地方の縄文文化」『日本考古学講座』3 河出書房 1956年
- 藤田憲司・間壁葭子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号 倉敷考古館 1975年
- (4) 正岡睦夫・田仲満雄・二宮治夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(20) 岡山県教育委員会
1977年

第4章 まとめにかえて

塚の峯遺跡は、中国山地の分水嶺に所在する遺跡である。中国縦貫自動車道建設予定地内に限定された範囲の発掘調査であるから、解明できなかつたことも多いと考えられるが、知り得た事実をもとに、各時代における遺跡の変遷を簡単にまとめてみたい。

縄文時代に属する遺物は、同一個体の縄文式土器片が4片出土しているだけである。前期の古い段階のもので、鉢形を呈すると考えられる。縄文時代に属する遺構は、何も存在しない。

弥生時代になると、後期に属する住居址や土墳と、それに伴う土器や石庖丁を検出した。丘陵の尾根部分から斜面にかけて、集落を形成しているのである。中期以前の遺構や遺物は存在しない。

古墳時代になると、前期の段階には土墳を検出しているとはいゝ、遺構の存在は稀薄で若干の土師器が出土したにすぎない。後期になると尾根上に古墳群を形成し、墳丘を有しない土墳墓も存在しているが、住居址等の日常生活址は皆無であった。弥生時代後期に立地していた集落は、古墳時代になると別の地点へ移動し、古墳時代後期の段階になって新しく古墳群を形成しているのである。

古墳時代が終ると、南西方向の谷部分に備中國と備後國を結ぶ主要道が開通している。遺跡内には鍛冶炉が構築され、鉄滓を探集した。鍛冶炉の属する時代は不明であるとはいゝ、塚の峯遺跡で検出した遺構では最も新しいものと考える。鍛冶炉を構築したのちには、遺構や遺物は存在していない。

このように、塚の峯遺跡の最盛期は、弥生時代後期の集落址と古墳時代後期の古墳群に代表されることが判明したのである。したがって、弥生時代と古墳時代の遺構や遺物を、項目別に検討してまとめにかえたい。

第1節 弥生時代の遺構・遺物について

弥生時代に属する塚の峯遺跡の遺構として、住居址と土墳について検討したい。遺物では、弥生式土器と石庖丁について考えてみたい。

住居址

塚の峯遺跡の住居址は、平面形態によって円形を呈する大型の住居址と、南西斜面に存在して短冊形または半月形を呈する住居址の2種に分類することが可能である。

円形を呈する大型の住居址は、壁体および壁体溝を有し、中央ピットが存在する。柱穴は、壁体と壁体溝に平行して環状に配している。4箇所以上を有するのが基本的な形態である。

斜面に存在して短冊形または半月形を呈する住居址は、地形の高い位置に壁体または壁体溝が残存しているだけで、詳細は不明な点が多い。確実に中央ピットと断定できるものは存在しない。柱穴は、No.4住居址、No.11住居址、No.15住居址が本来4箇所であったことが推察されるが、No.14住居址は精査したにもかかわらず、柱穴は検出できなかった。これらの住居址は、壁体の方向が等高線にほぼ

塚の峯遺跡(72)

平行し、複雑に切合っているものが多い。平面形態が短冊形を呈しているのは、斜面の位置ができるだけ広い床面を確保しようとした結果によるのであろう。

円形を呈する大型の住居址と、斜面に存在する短冊形または半月形を呈する住居址とは、壁体・壁体溝・柱穴の配置から推察して、構造が異なっていることが考えられる。ところが、出土遺物によると、時期的な差異は認められないである。したがって、本来は残存形態が円形の住居址を意図したにもかかわらず、立地する位置が斜面であるために、やむおえず短冊形または半月形を呈する結果になったのであろう。

この塚の峯遺跡のように、斜面に多くの住居址が存在する遺跡は、同じ哲西町内では、山根屋遺跡(註1)と野田畠遺跡(註2)がある。山根屋遺跡の最盛期は、弥生時代中期後半の時期である。野田畠遺跡の最盛期は、弥生時代後期初頭から後期前半の時期である。塚の峯遺跡の最盛期は、両遺跡よりもちの時期になると見えるから、住居址の存在する地点が移動しているとはいえる。塚の峯遺跡周辺では、弥生時代中期後半から丘陵の斜面を利用して集落を形成する状況が存在したことを、知ることができる。それではなぜ比較的立地条件が悪いと考えられる丘陵の斜面に、集落を形成しなければならなかったのであろうか。この問題は、生産活動を営む可耕地と深い関係があると考える。塚の峯遺跡周辺の地理的環境(註3)を概観すると、水田が存在するのは、現在になっても神代川流域に限定されている。神代川は谷地形の間隙を蛇行しながら流れているから、水田面積は非常に少ない。したがって弥生時代においては、集落に適した地形は、生産活動を営む可耕地にも利用できる場所であるから、その選択が非常に重要である。ところが塚の峯遺跡周辺では、集落を形成したり可耕地として利用できる場所は、岡山県南部の地方に比較すると著しく限定される。生産活動を優先させなければならない集団内の必須条件から、比較的立地条件が悪いと考えられる丘陵の斜面に、集落を形成しなければならなかったのであろう。

土壙

塚の峯遺跡で検出した土壙には、貯蔵穴と考えられるものと、土壙墓になる可能性のものとが存在する。ここでは貯蔵穴と考えられるものについて検討したい。

貯蔵穴と考えられる土壙には、平面形が隅丸長方形を呈するもの(N_o26・27土壙)と、円形または橢円形を呈するもの(N_o28・29・30・31土壙)との相違が認められる。N_o27土壙とN_o28土壙は、断面形が袋状を呈している。N_o27土壙からは、古墳時代前期に属する古式土師器が出土しているが、調査した範囲内では、この時期に属する住居址は検出できなかった。N_o26土壙は、塚の峯遺跡で検出した土壙では最も規模が大きくて、内部から土器片が出土している。平面形が円形または橢円形を呈する土壙内からは、遺物が全く出土していない。したがって、土壙の属する時期に幅があるとはいえる。平面形が隅丸長方形を呈するものと、円形または橢円形を呈するものでは、貯蔵するものに違いがあったのではなかろうか。赤磐郡山陽町に所在する門前池遺跡の報告書(註4)では、貯蔵穴の容量を計測して貯蔵したものを探査している。塚の峯遺跡の貯蔵穴は、食物の備蓄に利用したことが考えられるが、調査の結果でははっきり断定できなかった。

塚の峯遺跡(72)

No.29土壙は、No.2住居址に近接した位置に存在している。No.30土壙は、No.1住居址に近接した位置に存在している。このNo.29土壙とNo.30土壙は、遺物が全く出土していないから時期が不明であるとはいえる、どちらも近接した住居址と関係があるのではないかろうか。No.28土壙はNo.2住居址の壁体に接して存在しているから、No.2住居址と同時期のものとは考えられない。おそらく周辺の斜面に存在している、短冊形または半月形を呈する住居址に関係があるのではないかろうか。No.2住居址の位置よりも地形が低い方向に存在している住居址は、平面形が短冊形または半月形を呈するもので、赤磐郡山陽町に所在する用木山遺跡の報告書(註5)で、「長方形長屋状住居址」と称されているものに酷似している。周辺に貯蔵穴と考えられる土壙が検出できなかったので、津山市に所在する押入西遺跡(註6)の建物IIや、上房郡北房町に所在する桃山遺跡(註7)のNo.808住居址のように、倉庫としての機能を有する構造物になるものが存在している可能性が考えられるのである。

弥生式土器

塚の峯遺跡の所在する位置は、岡山県北西部の広島県境に接した中国山地の分水嶺の地点であるから、塚の峯遺跡から出土した弥生式土器には、周辺地域の岡山県南部地方、山陰地方、広島県地方の影響を認めることができる。造構に伴う土器は非常に少なくて、完形に復原実測できたのは、No.5住居址から出土した壺形土器(第23図1)だけである。

塚の峯遺跡と同じ哲西町内に所在する遺跡で、比較的多くの弥生式土器が造構に伴って出土しているのは、山根屋遺跡(註8)と野田畠遺跡(註9)である。山根屋遺跡からは、弥生時代中期後半の時期に属する土器が多く出土している。野田畠遺跡からは、弥生時代後期初頭から後期前半の時期に属する土器が多く出土している。塚の峯遺跡から出土した土器を、山根屋遺跡と野田畠遺跡から出土したものと比較対照すると、塚の峯遺跡から出土した土器が、相対的に後出の要素を有していることが認められる。しかしながら、同じ住居址の床面から出土した土器でも、個々の器種によっては時期差があるのでないかと考えられる土器も存在している。したがって、塚の峯遺跡から出土した土器を器種別に分類して、その代表的なものの特徴について考えてみたい。

壺形土器であるとはっきりと断定できる土器は、ほかの器種に比して非常に少ない。わずかに口縁部と底部の破片が存在するだけで、頸部から胴部については不明である。ほとんどの口縁部が、わずかに肥厚しながら斜め上方へ外反し、端部が上下に張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、外面には凹線または凹線状の凹みを有する。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色または赤褐色を呈している。底部については、壺形土器の底部と同じ特徴が認められる。

塚の峯遺跡から出土した弥生式土器で、圧倒的多数を占めるのは壺形土器である。器形は、No.5住居址から出土したもの(第23図1)に代表される。頸部から口縁部にかけてく字状に鋭く外反し、口縁端部は上下に張出している。口縁部と頸部の外面は全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線または凹線状の凹みを有する。内面の口縁部には、横ナデによって生じた彎曲面が認められるものも存在する。外面の頸部直下に刺突文を有するものが多い。胴部の最大径は、上位の肩部分に存在する。外

塚の峯遺跡(72)

面の胴部には、縦ナデを行っているものが多いが、上位に横ナデを行って下位に縦方向のヘラ磨きまたは刷毛目を施しているものも存在する。内面の胴部は、頸部直下から肩部分にかけて横方向のヘラ削りを行い、下位は底部まで縦方向のヘラ削りが認められる。底部の形態は、下位へ移行するにしたがってすばまり、安定した平底になっている。底の部分が、わずかに上底になっているものも存在する。外面は縦ナデまたは縦方向のヘラ磨きや刷毛目を施し、内面は全体に縦方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色または赤褐色を呈する。外面には、ススの付着や黒斑が認められるものが多い。

塚の峯遺跡から出土した甕形土器の一般的な形態は、壺形土器も含めて岡山県南部地方にはほとんど存在しないものである。むしろ山陰地方や広島県地方に、広く分布している土器に酷似している。山陰地方の江津市に所在する波来浜遺跡(註10)から出土した土器は、砂丘上に存在する墳墓に伴うものであるから、塚の峯遺跡の住居址等の日常生活遺構に伴う土器と比較対照するのは、適当でないかもしれないが、調査担当者は、波来浜遺跡から出土した土器を、九重式土器(註11)と的場式土器(註12)の中間に位置づけている。広島県地方の広島市高陽町に所在する上深川遺跡(註13)から出土した土器は、大きく2時期に分類されている。塚の峯遺跡から出土した土器に酷似しているのは、新しい時期に属する土器である。波来浜遺跡と上深川遺跡の新しい時期は、弥生時代後期後半の時期に比定されると考えられるのである。

高杯形土器の杯部には、2種類の形態が認められる。遺構に伴わない遺物に図示(第52図)した、11から13の一群と、14から16の一群である。前者は立上がった口縁の端部が、横方向へわずかに張出して上位に凹線状の凹みを有する面が存在する。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には横ナデによって生じた凹凸が認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色または赤褐色を呈する。後者は肥厚しながら斜め上方へ立上がった口縁の端部が、前者の杯部よりも大きく張出して、上位に凹線状の凹みを有する広い面が存在する。口縁部は内外面とも全体に横ナデを行い、外面には横ナデによって生じた凹みが認められる。口縁部下位の杯部外面は、縦ナデまたは縦方向のヘラ磨きを施し、内面は全体に縦ナデを行っている。前者の杯部と根本的に相違するのは、胎土中に金雲母や黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似し、全体に丹塗りを施していることである。塚の峯遺跡の遺構に伴って出土したのは、後者の杯部だけである。

前者と後者の杯部の形態は、岡山県南部地方の沖積平野に所在する、上東遺跡(註14)や雄町遺跡(註15)から出土している高杯形土器に酷似している。岡山県南部地方では、前者の杯部の形態は、弥生時代後期初頭に属する時期と考えられている。後者の杯部の形態は、弥生時代後期前半に属する時期と考えられている。胎土は塚の峯遺跡から出土した土器とは、全く異質のものである。塚の峯遺跡から出土した高杯形土器で、後者の杯部の形態を有して特殊器台や特殊壺に胎土が酷似しているものは、岡山県西部の高梁川流域に広く分布していることが知られている(註16)。

高杯形土器の脚部の形態は、いずれもよく似た形態を呈している。柱状部から裾部にかけてハ字状に開き、端部が著しく肥厚して斜め上方へ立上がる面を有する。外面には櫛状工具で描いた浅い沈線が認められ、円孔を有するものも存在する。外面は全体に丹塗りを施し、内面は横方向のヘラ削りを行

っている。胎土中には細かい砂粒に混在して金雲母や黒雲母の粒子が認められ、特殊器台や特殊壺の胎土に酷似している。この脚部に伴う杯部の形態は、胎土や外面に丹塗りを施していることから、先に記した高杯形土器の杯部で、後者に相当すると考える。

鉢形土器は、No.7住居址から出土したもの（第26図、図版37）とNo.14住居址から出土したもの（第36図、図版37）に代表される。前者は胴部が口縁部へ移行するにしたがって、わずかに肥厚しながら内弯して朝顔形に開いている。口縁端部は、短く横方向へ張出して、上位に中央が凹んだ面を有する。口縁部の外面は全体に横ナデを行い、内面は短い単位のヘラ磨きを施している。胎土中には、細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈している。後者は胴部が内弯しながら朝顔形に大きく開いているが、口縁部の形態が前者と著しく異なっている。胴部から屈曲した口縁部は、肥厚しながら斜め上方へ大きく立上がり、端部が斜め上下に張出している。口縁部は内外面とも横ナデを行い、外面には凹線を有する。口縁部の内外面とも、横ナデによって生じた凹凸が認められる。胴部の外面は、前者の鉢形土器と同様にヘラ磨きを行っているが、内面は横方向のヘラ削りを行ったのちに、部分的に横方向のヘラ磨きを加えている。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で乳褐色を呈している。

弥生時代の鉢形土器は、塚の峯遺跡周辺の地域においても、ほかの器種より比較的出土例が少ない。後者の鉢形土器は、岡山県南部地方でわずかに認められるが、前者の器形は類例に乏しい。前者の鉢形土器は、内外面ともていねいなヘラ磨きを施しているから、弥生時代中期の手法が認められる。したがって、弥生時代後期初頭よりも新しい時期に属するものではないと考える。後者の鉢形土器は、前者の土器よりも後出的な要素を有しているから、弥生時代後期前半の時期に属するであろう。なおNo.2住居址から出土した鉢形土器（第18図、図版37）は、胴部の外面に櫛状工具の痕跡が認められ、内面にナデを施している。おそらく前者と後者の鉢形土器の中間時期に属するであろう。

塚の峯遺跡から出土した弥生式土器には、大型の器台形土器が存在している。いずれも口縁部または脚部の破片で類似の形態を呈しているが、中間の柱状部は欠如している。口縁部は外弯しながら斜め上方へ大きく立上がり、端部が上下に張出している。内外面とも全体に横ナデを行い、口縁の外面には凹線または凹線状の凹みを有する。脚部下位へ移行するにしたがってハ字状に大きく開き、裾端部が著しく肥厚して斜め上方へ立上がる面を有する。外面はナデを施し、内面は横方向の粗いヘラ削りを行っている。口縁部と脚部の胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色または赤褐色を呈している。

この器台形土器の口縁部と脚部は、岡山県南部地方に広く分布している形態を呈している。欠如して不明である柱状部には、円孔または長方形の透穴を有するであろう。いずれも弥生時代後期前半の時期に属すると考える。

以上のように、塚の峯遺跡から出土した弥生式土器を器種別に分類して、出土量が多数を占める形態の特徴について検討した。岡山県南部地方で出土している土器と比較対照すると、壺形土器と甕形土器は、弥生時代後期後半の時期に属する様相を呈し、高杯形土器と鉢形土器は、弥生時代後期初頭から後期前半の時期に属する様相を呈している。器台形土器は、弥生時代後期前半の時期に属する様

塚の峯遺跡(72)

相を呈している。このように塚の峯遺跡から出土した土器は、器種によって属する時期が相違するという珍妙な結果になるのである。ところが、住居址に伴う土器はいずれも破片で量的に少ないという欠点はあるが、異なった器種のものが床面に密着した状態で、近接した位置から出土しているのであるから、まぎれもなく同時性を呈していると考えられる出土状況である。

塚の峯遺跡から出土した土器は、壺形土器と甕形土器を中心と考えると、高杯形土器、鉢形土器、器台形土器が古く感じられ、逆に高杯形土器、鉢形土器、器台形土器を中心と考えると、壺形土器と甕形土器が新しく感じられるのである。壺形土器と甕形土器だけを取出して、塚の峯遺跡に近接した山根屋遺跡(註17)と野田畠遺跡(註18)から出土したものと対比すると、山根屋遺跡→野田畠遺跡→塚の峯遺跡の流れが考えられる。ところが、胴部の最大径が上方の肩部分に存在し、底部が下位へ移行するにしたがってすばまり、安定した平底やわずかに上底を呈して外面にヘラ磨きを施している形狀は、弥生時代後期後半よりも古い時期に属する様相であろう。岡山県南部地方では、高杯形土器や器台形土器の脚端部が著しく肥厚して、斜め上方へ立上がる面が弥生時代後期前半から後期中葉の時期まで存在しているが、弥生時代後期後半以降には斜め上方へ立上がる面が消滅して、脚部分全体の短脚化が、古墳時代の直前の時期まで進行するのが原則である。ところが、備中山間部の上房郡北房町に所在する谷尻遺跡(註19)や、塚の峯遺跡と同じ哲西町に所在する西江遺跡(註20)では、弥生時代後期後半の時期になっても、高杯形土器や器台形土器の脚端部に、斜め上方へ立上がる面が残って、器形にあまり変化が認められないことが知られている。したがって、岡山県南部地方の弥生時代後期前半から後期中葉の時期に属する高杯形土器や器台形土器の器形は、備中山間部地方では、弥生時代後期後半の時期になっても、あまり変化せずに残っている可能性が強い。塚の峯遺跡から出土した土器には、岡山県南部地方、山陰地方、広島県地方の影響が認められるとはいえ、岡山県北西部の分水嶺に接した地域の特殊な様相も存在しているであろう。

塚の峯遺跡では、遺構に伴う土器がいずれも破片できわめて少なかったから、器種のセット関係を確実に把握することができない状態で、時期の相違する土器が混在していることも考えられるが、野田畠遺跡から出土した最盛期の土器に継続する様相を呈し、地域性が強く感じられる土器が多いことは指摘できるであろう。塚の峯遺跡から出土した弥生式土器については、未解決の問題を多く残したままである。今後も周辺地方の弥生式土器と比較検討したい。

石庖丁

№7 住居址から出土した石庖丁は、石材が結晶片岩の磨製石庖丁である。ところが、扁平な短冊形を呈して、両端に敲打による抉りが認められ、紐孔が存在しない。したがって、磨製の石庖丁であるにもかかわらず、岡山県南部地方に広く分布している、サヌカイト製の打製石庖丁の形態に酷似しているのである。

岡山県の石庖丁については、従来から南部に出土するサヌカイト製の打製石庖丁と、北部から出土する磨製石庖丁が注目されていた。赤磐郡山陽町に所在する門前池遺跡の調査担当者は、『大勢においては県南の打製石庖丁、県北の磨製石庖丁というふうに分かれるが、県北においても北房町・哲西

塚の峯遺跡(72)

町においては打製石庖丁がみられること、津山市においては打製石庖丁がほとんどなく磨製石庖丁の分布地域となることなどを考えると、その分布には単純な南と北の差とか、距離や水系の違だけでなく、技術伝播のルートなど複雑な関係が入り交っているものと思われる。こうした中で打製石庖丁を主とし磨製石庖丁を従とする地域は、邑久郡・赤磐郡で、磨製石庖丁を主として打製石庖丁を従とする範囲は小田郡である。こうした関係は、土器型式においてもそれぞれ県南・県北の影響を残しており、土器型式と石器(形態)とが互いに関連しながら発達していることを暗示し、一つの文化圏あるいは地域集団の単位を物語っているようである。』(註21)と指摘している。塚の峯遺跡の所在する哲西町内で、磨製石庖丁が出土した遺跡は、山根屋遺跡(註22)、西江遺跡(註23)、二野遺跡(註24)、清水谷遺跡(註25)である。打製石庖丁が出土した遺跡は、山根屋遺跡と野田畠遺跡(註26)である。打製石庖丁の石材は、いずれもサヌカイトである。このように、哲西町内では量的に磨製石庖丁が多いとはいえ、磨製石庖丁と打製石庖丁が混在して出土している。したがって、石庖丁が使用された時期に幅があることは否定できないが、磨製石庖丁と打製石庖丁を同時期に使用していることが考えられる。塚の峯遺跡のNo.7住居址から出土した石庖丁が、磨製でありながらサヌカイト製の打製石庖丁の形態を呈しているのは、哲西町内の地域では、磨製石庖丁も打製石庖丁も併用していた状況を反映していると考えるのである。

第2節 古墳時代の遺構・遺物について

今回の調査で検出した古墳時代後期の遺構は、前述した塚の峯2号墳、塚の峯3号墳およびNo.39土壙墓である。塚の峯2号墳と塚の峯3号墳は、部分的に盗掘にあっているため、全容を明らかにするには至らなかった。しかし、塚の峯2号墳と塚の峯3号墳の調査が、数々の矛盾を含みながら行われた調査ながら、当地域における古墳研究の一端を成すと信じつつ、以下に浅学ながら項目を設けて、若干の問題点について検討してみたい。

位置 規模

塚の峯2号墳と塚の峯3号墳は、海拔415mの丘陵稜線の先端部に位置する。水田面との比高は約25mで、周辺地域を一望できる好条件の位置に存在する。塚の峯1号墳は、塚の峯2号墳と塚の峯3号墳の南西方向約10mの丘陵稜線と、斜面との接点に位置する。したがって塚の峯1号墳、塚の峯2号墳、塚の峯3号墳は、丘陵稜線の先端部の狭い地点に集中している。特に塚の峯2号墳と塚の峯3号墳は、隣接した位置に存在し、各々の周溝は重複せずに意識的、計画的に築造されたものと考えられる。また塚の峯2号墳と塚の峯3号墳の南西約120mの丘陵稜線を登りきった頂部には、塚の峯4号墳が存在する。この塚の峯4号墳は、塚の峯1号墳、塚の峯2号墳、塚の峯3号墳と同一丘陵稜線上に存在するものの、距離が120mも離れており、同時期の古墳群として取扱うには多少の疑問が残る。しかし規模は塚の峯1号墳が約10m、塚の峯2号墳が約12m、塚の峯3号墳が約14m、塚の峯4号墳が約12~16mの円墳ではほぼ酷似した大きさを示す。また塚の峯1号墳と塚の峯4号墳は、表面観

察ながら、墳丘裾部に若干の凹みが認められ、周溝の存在が考えられる。さらに塚の峯1号墳と塚の峯4号墳には、ボーリング調査で主体部に石材の使用が考えられる。以上のことから推測して、4基の古墳は立地、規模、形態などが酷似した様相を有する古墳であるといえよう。

橋 梁

塚の峯3号墳の北西部の周溝には、幅約100~150cmの橋梁が存在する。この橋梁は、墳形を整えるための周溝を掘る際に、基盤層である黄褐色土を削り残したものである。このような橋梁は、方形周溝墓によくみうけられるが、後期古墳で検出された報告例は、現在のところ知られていない。

ここで注目すべきことは、橋梁が塚の峯3号墳の築造時に、意識されて計画的に通路として残された点である。この橋梁が通路として利用された事象を抽出してみると、以下のことが考えられる。

- 1、古墳築造の際の周辺からの盛土の運搬
- 2、埋葬時の棺の運搬および、送葬者の通路
- 3、埋葬後の「墓参り」的的な二次的祭祀行為のための通路

1については、利用された事は考えられるものの、このことが本来の橋梁を削り残した主目的とは考え難い。2の埋葬時の通路としての機能は十分考えられる。この塚の峯古墳群が存在する丘陵は、東側が急斜面で西側は緩斜面(第1図)になっている。西側緩斜面には、前述したように弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構を多数検出した。さらに後年には、丘陵の裾部に備中国と備後国とを結ぶ街道が走る。このように地理的、歴史的に推察して、丘陵西側部が正面にあたるであろう。この塚の峯3号墳の橋梁も、丘陵西側の緩斜面を登りきった正面に位置している。近年、畿内を中心に群集墳と墓道の実態が報告(註27)されているが、3号墳の橋梁も埋葬主体に通じる墓道の一部と考えられるのではなかろうか。しかし橋梁が、埋葬時の通路としての利用目的のためだけに、残されたのであろうか。後期古墳では、古墳外表面や周溝に、土器類が置かれていた例(註28)がよく報告されている。塚の峯3号墳の頂部は、一部に盜掘痕が存在してその実態が明らかではなかった。しかしながら、美作地方での古墳外表面への土器類の供献が、5世紀後半から6世紀前半の限られた時期に比定されると報告(註29)されている。またほかの地域では、6世紀後半の古墳にもその例が報告されている。したがって、塚の峯3号墳でもその実例が十分に考えられるところである。古墳外表面や周溝への土器の供献が、埋葬直後に限られずに、一定期間および一定期日が経過してのちに、二次的な祭祀行為が当時に通常的な行為として意識されていたとすれば、先に挙げた3の二次的な祭祀行為のための通路として、利用されたものと考えられる。

また塚の峯2号墳では、橋梁のような施設が検出されなかった。通常塚の峯3号墳の橋梁のようなものは、群集墳では報告されていない。普通には、木や板が通路として使用されたと考えられる。したがって、塚の峯3号墳の橋梁は、当時通路の必要性が意識されていたという前提で、労働の省略と相まって、削り残されたと考えられる。

埋葬主体部

前述したように塚の峯2号墳と塚の峯3号墳の埋葬主体部は、塚の峯2号墳が竪穴式石室、塚の峯3号墳の第I主体部と第II主体部が木棺直葬の土壙、周辺内の第III主体部が石蓋土壙である。

まず塚の峯3号墳の木棺直葬の埋葬主体部は、橋梁と墳頂部を結ぶ直線上に位置している。第I主体部と第II主体部は、主軸方向をほぼ東西方向に有して、一部が重複している。このような後期古墳での木棺直葬墓は、哲西町や神郷町を中心とする神代川流域には、いまだ確認されていない。県内全域にその類例を求めるに、真庭郡八束村に所在する四ツ塚第13号墳(註30)、英田郡美作町に所在する北山古墳群の1号墳から4号墳(註31)、津山市に所在する押入西1号墳(註32)などに、その好例が認められる。特に四ツ塚第13号墳と北山1号墳は、塚の峯3号墳と同様に2基の木棺直葬を有する複数葬である。しかし両古墳の埋葬主体部は、塚の峯3号墳の第I主体部と第II主体部に比して掘り方が大きくてしっかりしている。さらに、埴輪や豊富な副葬品が検出されており、塚の峯3号墳の被葬者との性格の差違を認めるのである。

次に塚の峯2号墳の竪穴式石室であるが、この石室は哲西町内の東の山麗に産出する(註33)という、柱状の石材を使用したものである。その構造は、小口部分に1~2列に2~3段積上げ、側石は長い石材を2段に積上げている。さらに床面には、河原石を敷きつめている。このような形態で特異な石材を使用した主体部は、当地域での調査例が少ないためか、ほかに例をみなかったものである。しかし、塚の峯1号墳と塚の峯4号墳は、前述したように埋葬主体部に石材が使用されているのを確認している。塚の峯1号墳と塚の峯4号墳が、塚の峯2号墳とさほど時期差がない古墳であることが推察され、この時期には神代川流域では、いまだ横穴式石室が採用されていない可能性が強いから、塚の峯1号墳と塚の峯4号墳の埋葬主体部も、塚の峯2号墳の竪穴式石室に類似した石材使用の埋葬主体部が考えられる。以上のように石材使用の埋葬主体部は、塚の峯古墳群を構成する塚の峯1号墳から4号墳の4基の古墳のうちで、3号墳を除く3基におよぶであろう。

以上のことから推察して、神代川流域では横穴式石室の採用以前の埋葬主体部の構造が、在地産出の石材を使用した、竪穴式石室を中心としたものが普遍的であったと考えられる。このことは、横穴式石室が当地域で採用されてからも、竪穴式石室が埋葬主体部として普遍的に存在していることからも、十分想起できることである。

副葬品

各埋葬主体部とも予想外に副葬品が少なかった。もう一度各埋葬主体部の副葬品を列挙してみると、以下のようなのであった。

塚の峯2号墳竪穴式石室：馬具の一部、須恵器杯身3、杯蓋1、広口壺1、土師器壇1。

塚の峯3号墳第I主体部：副葬品なし。

第II主体部：土師器碗1。

第III主体部：須恵器杯身1、土師器壇1。

塚の峯 遺跡 (72)

塚の峯 2 号墳の堅穴式石室から出土した遺物は、盗掘を受けていていずれも破片であり、これが副葬品の全部ではないにしろ、馬具や須恵器の杯や壺などから推察して、ある一定量の遺物が副葬されていた可能性が強い。

塚の峯 3 号墳では、第Ⅱ主体部に土師器の椀が 1 個体だけであった。椀は、掘り方の東方向の角部で検出され、棺外に添えて置かれたものと思われる。第Ⅱ主体の木棺の位置は、掘り方の東方向に寄っており、西方向では棺と掘り方の端に約 50cm の空間が存在する。通常の木棺直葬墓では、その空間部分に棺外遺物として多くの副葬品が見出せるのであるが、塚の峯 3 号墳の第Ⅱ主体部は異なっていた。塚の峯 3 号墳の第Ⅰ主体部には、一部に攪乱を受けているため、当初から副葬品が存在しなかったのか 1 片の土器片さえ検出できなかったのである。第Ⅱ主体部の状況から推察して、第Ⅰ主体部には当初から副葬品がなかった可能性が強い。また木棺内からも、遺物は出土しなかった。このように塚の峯 3 号墳の第Ⅰ主体部では、掘り方、木棺内のいずれかも、副葬品らしきものは認められなかったのである。また塚の峯 3 号墳の周溝内の第Ⅲ主体部である石蓋土壙墓には、須恵器の杯身、土師器の壺が各々 1 個体出土したが、これらの土器は、棺外の石蓋のかたわらに置かれていた。

以上のように、塚の峯 3 号墳の主体部の特徴として、極めて副葬品が少ないことが指摘できた。また、先に述べた塚の峯 3 号墳の埋葬主体部と共通点を有する四ツ塚第 13 号墳や北山 1 号墳と比較しても、その量的な差は歴然としている。さらに塚の峯 2 号墳との比較においても、塚の峯 2 号墳の堅穴式石室は、馬具の一部や一定量の土器類が副葬されていたと考えられ、塚の峯 2 号墳と塚の峯 3 号墳との被葬者の性格の差異を示すものであろう。

築造年代

塚の峯 2 号墳と塚の峯 3 号墳および各埋葬主体部の築造順序を検討してみたい。

まず、塚の峯 3 号墳の 3 基の埋葬主体部の関係は、切合い関係によって第Ⅰ主体部の方が第Ⅱ主体部より古いことが明らかである。さらに第Ⅲ主体部は、周溝内に構築されていることからみて最も新しいといえる。よって、第Ⅰ主体部の被葬者の死を契機として塚の峯 3 号墳が築造され、その後に第Ⅱ主体部が埋置され、最後に小堀墓と思われる第Ⅲ主体部が周溝内に造られたと考えられる。

次に塚の峯 2 号墳と塚の峯 3 号墳の新旧関係について考えてみたい。塚の峯 2 号墳と塚の峯 3 号墳の切合い関係は、断面図（第 4・5・6 図）からでは判断しがたい。しかし、塚の峯 2 号墳出土の須恵器と塚の峯 3 号墳の第Ⅲ主体部出土の須恵器を比較した場合、やや塚の峯 2 号墳出土の須恵器の方が古い様相を示している（第 14 図）。以下、具体的に示したい。

塚の峯 2 号墳堅穴式石室

杯蓋：大型化が著しい。天井部と口縁部を分ける稜線はやや丸くなっているが、外方に突出している。口縁端部の内側には、端面の退化したものを残す。

杯身：立上がりはまだしっかりしており、内傾度も塚の峯 3 号墳のものに比べて大きくない。また、立上がり端部はやや丸くなりつつあるが、まだ端面を残すものもある。

塚の峯 3 号墳第Ⅲ主体部

塚の峯遺跡(72)

杯身：立上がりはやや内傾しており、端部は丸くおさめている。また、器高も低くなっている。

以上のように、塚の峯3号墳第Ⅲ主体部の須恵器の方が新しい要素がみとめられるが、それほどの時期差はない。また、塚の峯2号墳の堅穴式石室と、塚の峯3号墳の第Ⅰ主体部と第Ⅱ主体部の前後関係は、前述したように塚の峯2号墳の堅穴式石室が塚の峯3号墳の第Ⅲ主体部よりも古いことからみて、古墳内の埋置の時期差よりも、古墳間の時期差の方が大きいと考えられるから、塚の峯2号墳の堅穴式石室の方が古いであろう。さらに、位置的にも塚の峯2号墳の方が好条件の位置を占めている。したがって、塚の峯2号墳が築造されたのちに、さほど時期的な差がないころに塚の峯2号墳の位置を意識して、塚の峯3号墳が築造されたものと考えられる。

さて、塚の峯2号墳と塚の峯3号墳の築造時期であるが、前述した塚の峯2号墳から出土した須恵器を「陶邑」（註34）の編年に時期を求めるとき、陶邑のMT15とTK10の中間的な要素が認められる。また、塚の峯3号墳の第Ⅲ主体部とNo.39土壙墓出土の須恵器は、TK10に近い様相を示す。

したがって、塚の峯2号墳と塚の峯3号墳は、6世紀中頃を中心とする時期に築造されたと考えられるのである。

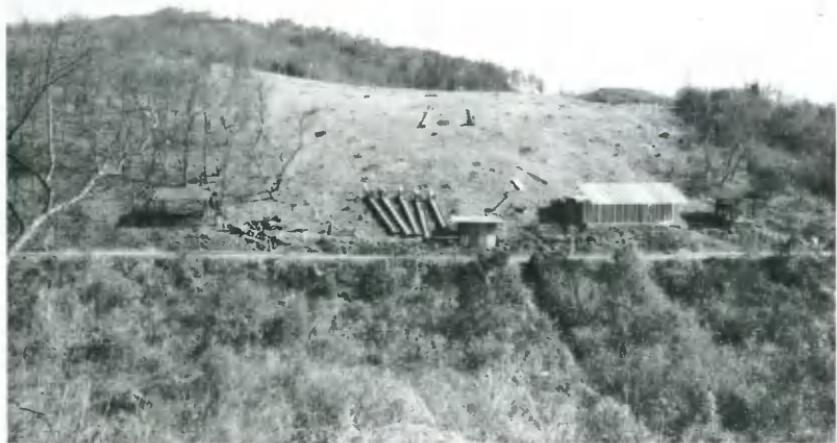
註

- (1) 竹田 勝・岡本寛久「山根屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(22) 岡山県教育委員会 1977年
- (2) 高畠知功・福田正継「野田畠遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(21) 岡山県教育委員会 1977年
- (3) 田中満雄「阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(15) 岡山県教育委員会 1977年
- (4) 新東晃一・松本和男・池畠耕一・枝川 陽「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(9) 岡山県教育委員会 1975年の253ページ参照。
- (5) 神原英朗・則武忠直・国安敏樹・太田耕一「用木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(4) 岡山県山陽町教育委員会 1977年
- (6) 河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦・下澤公明・井上 弘「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 岡山県教育委員会 1973年
- (7) 田仲満雄・二宮治夫・福田正継・竹田 勝「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(12) 岡山県教育委員会 1976年
- (8) 註1と同じ。
- (9) 註2と同じ。
- (10) 門脇俊彦編「波来浜遺跡発掘調査報告」島根県江津市 1973年
- (11) 東森市良「九重式土器について」『考古学雑誌』第57巻第1号 日本考古学会 1971年
- (12) 近藤 正・前島己基「島根県松江市の場土壙墓」『考古学雑誌』第57巻第4号 日本考古学会 1972年
- (13) 潮見 浩「広島県安佐郡高陽町上深川遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』日本考古学協会弥生式土器文化総合研究所特別委員会 弥生式土器集成刊行会 1968年
- (14) 伊藤 晃・柳瀬昭彦・池畠耕一・藤田憲司他「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 岡山県教育委員会 1974年

塚の峯遺跡(72)

- (15) 高橋 譲・葛原克人・正岡睦夫・中力 昭・泉本知秀・伊藤 晃・栗野克己他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 岡山県教育委員会 1972年
- (16) 註2と同じ。
- (17) 註1と同じ。
- (18) 註2と同じ。
- (19) 高畠知功・山磨康平・井上 弘他「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(11) 岡山県教育委員会 1976年
- (20) 正岡睦夫・田仲満雄・二宮治夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(20) 岡山県教育委員会 1977年
- (21) 注4の255ページ参照。
- (22) 註1と同じ。
- (23) 註20と同じ。
- (24) 高畠知功・福田正継「二野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(15) 岡山県教育委員会 1977年
- (25) 下澤公明・浅倉秀昭「清水谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(22) 岡山県教育委員会 1977年
- (26) 註2と同じ。
- (27) 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本5近畿』角川書店 1970年
- (28) 近藤義郎「中宮一号墳発掘調査報告」「佐良山古墳群の研究」津山市 1952年
近藤義郎・神原英朗・岡本明郎「四ツ塚十三号墳の発掘」『蒜山原一その考古学的調査』 1957年
- (29) 神原英朗・今井 喬・渡辺健治「古墳外表の土器群」『考古学研究』62第16巻第2号 考古学研究会 1969年
- (30) 註28と同じ。
- (31) 松本和男・二宮治夫「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(4) 岡山県教育委員会 1973年
- (32) 河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦・下澤公明・井上 弘「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 岡山県教育委員会 1973年
- (33) 塚の峯遺跡の発掘調査に参加した人々の御教示による。
- (34) 田辺昭三「陶邑古窯址群1」『平安学園創立九十周年記念・研究論集』第10号 平安学園 1966年

図版1



1. 塚の峯遺跡調査前遠景（南より）



2. 塚の峯2・3号墳調査前遠景（北西より）

図版2



1. 尾根上トレンチ内のNo. 1住居址検出状況（南東より）



2. 尾根上トレンチ全景（南東より）



1. 御立山古墳群遠景（南西より）



2. 御立山古墳群遠景（南東より）

図版4



1. 塚の峯2号墳調査前全景（西より）



2. 塚の峯3号墳調査前全景（西より）



1. 塚の峯2号墳墳丘全景（北西より）



2. 塚の峯3号墳墳丘全景（北西より）

図版6



1. 塚の峯2・3号墳墳丘全景（北西より）



2. 塚の峯2・3号墳調査後全景（北西より）



1. 塚の峯2号墳墳丘断面（北西より）



2. 塚の峯3号墳墳丘断面（北東より）

図版8



1. 塚の峯2号墳主体部（北より）



2. 塚の峯2号墳主体部（東より）

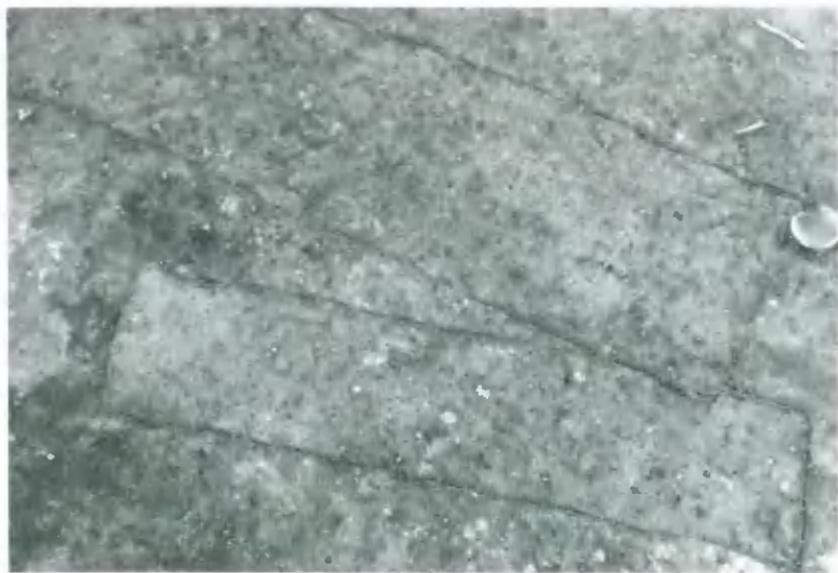


1. 塚の峯2号墳主体部掘り方（北より）



2. 塚の峯2号墳主体部掘り方（西より）

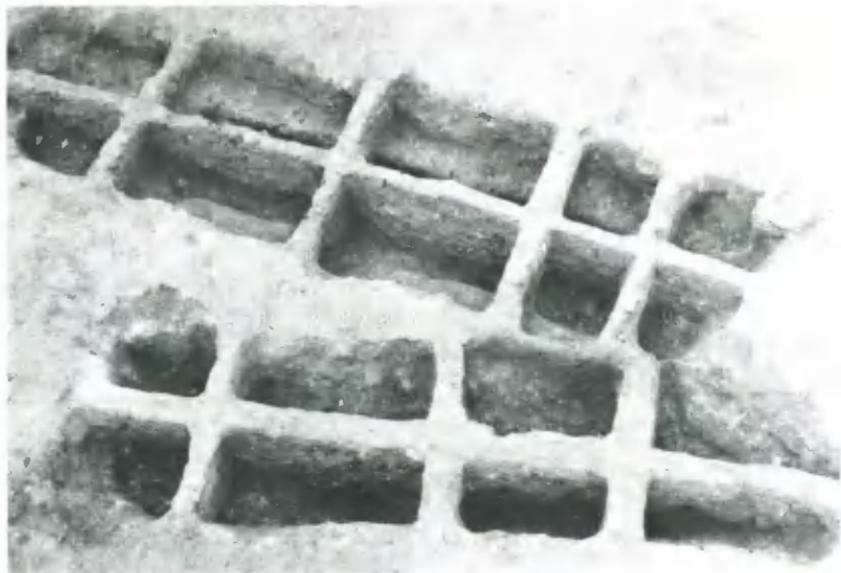
図版10



1. 塚の峯 3号墳第I・II主体部検出状況（北西より）



2. 塚の峯 3号墳第I・II主体部木棺痕跡（北西より）



1. 塚の峯3号墳第I・II主体部木棺痕跡検出状況（北西より）



2. 塚の峯第I主体部木棺痕跡検出状況（南西より）

図版12



1. 塚の峯3号墳第I・II主体部掘り方（北西より）



2. 塚の峯3号墳第II主体部外遺物出土状況（南西より）



1. 塚の峯3号墳第Ⅲ主体部の天井石と遺物出土状況（北西より）



2. 塚の峯3号墳第Ⅲ主体部天井石除去後状況（北西より）

図版14



1. 塚の峯3号墳橋梁（南西より）



2. No. 40集石遺構（南西より）



1. No. 39土 墓（北東より）



2. No. 39土壤墓遺物出土状況（南東より）

図版16



1. 塚の峯遺跡調査後遠景（南より）



2. 塚の峯遺跡調査後近景（西より）

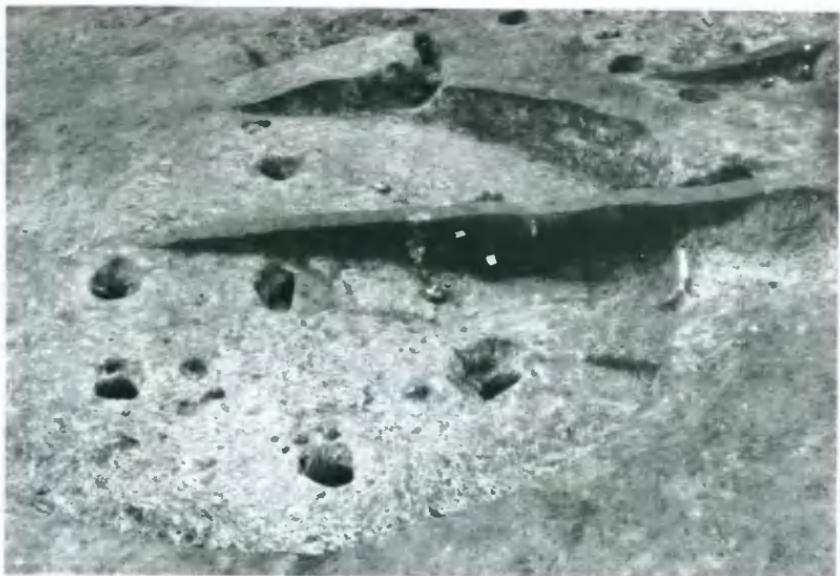


1. No. 1住居址調査状況（西より）



2. No. 1住居址全景（南東より）

図版18



1. No. 2住居址調査状況 (南東より)



2. No. 2住居址全景 (南東より)

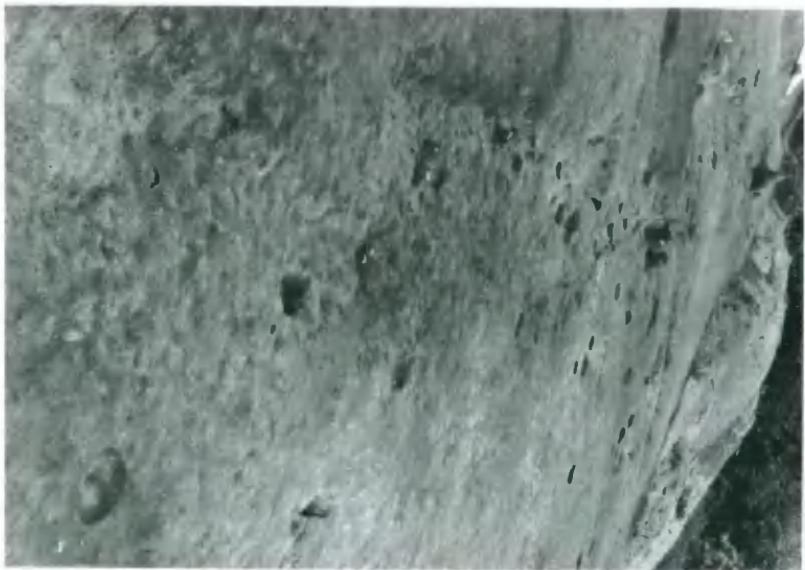


1. No. 3住居址全景（北西より）



2. No. 4・5住居址調査状況（南東より）

図版20



1. No.4・5・6・7・10・11住居址全景 (北西より)



2. No.4・5・6・7・10・11住居址全景 (南東より)

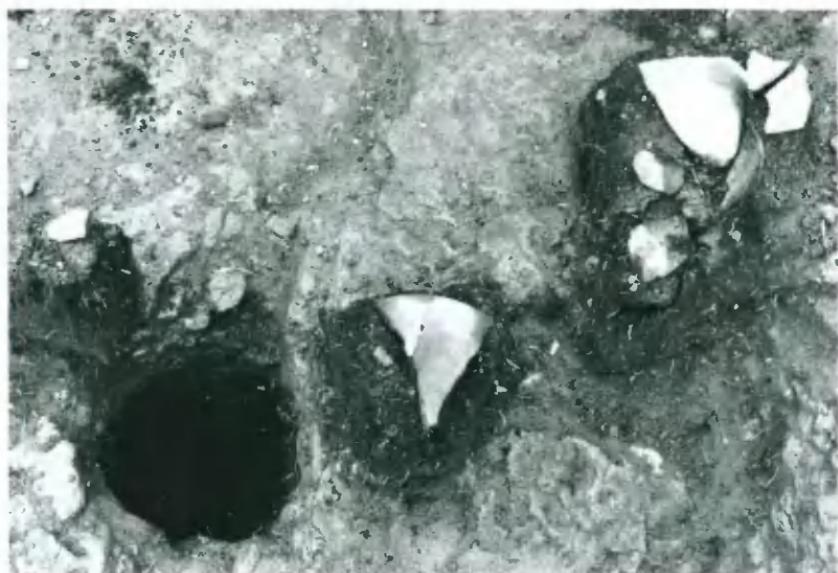


1. No. 5住居址調査状況（西より）



2. No. 10・11住居址調査状況（南東より）

図版22



1. No. 4住居址遺物出土状況（南より）



2. No. 5住居址遺物出土状況（南西より）

図版23



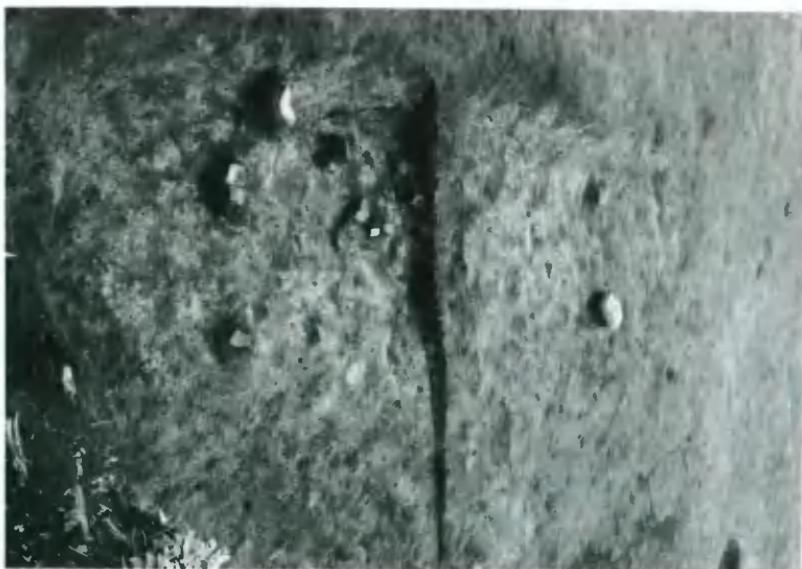
1. No. 8-9住居址全景（南東より）



2. No. 8-9住居址全景（北西より）

図版24

1. No. 14住居址調査状況 (北西より)



2. No. 14住居址調査状況 (南東より)



図版25



1. No. 22住居址調査状況（北西より）



2. No. 22住居址調査状況（南東より）

図版26



1. No. 1住居址西側周辺近景（南東より）



2. No. 2住居址北西側周辺近景（南東より）

図版27



1. No. 16・17・18・19・20・21住居址近景(南より)



2. No. 27土壤・No. 12住居址遺物出土状況(北西より)

図版28



1. No. 26土壤調査状況（南東より）



2. No. 30土壤調査状況（南西より）

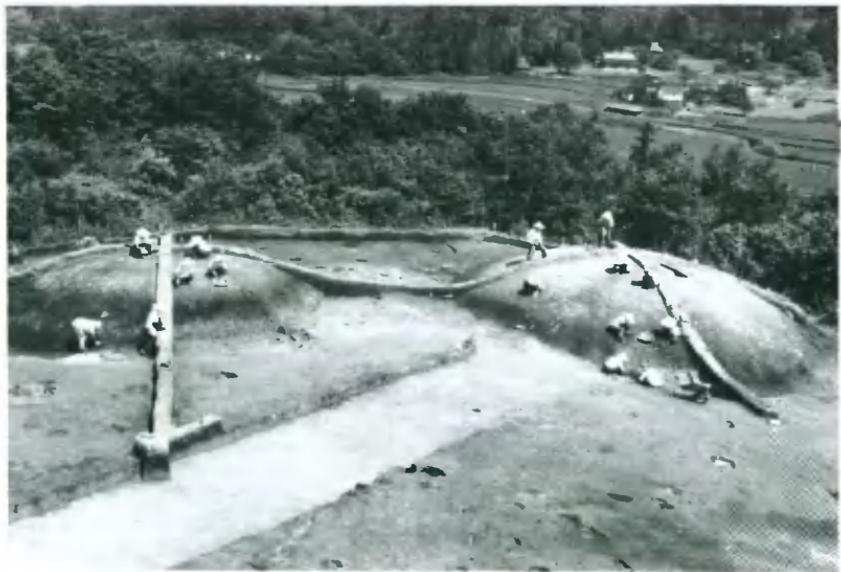


1. 塚の峯遺跡調査状況近景（南より）



2. 塚の峯遺跡調査後近景（北東より）

図版30



1. 塚の峯2・3号墳調査風景（北西より）



2. 塚の峯遺跡住居址調査風景（東より）



1



2



3

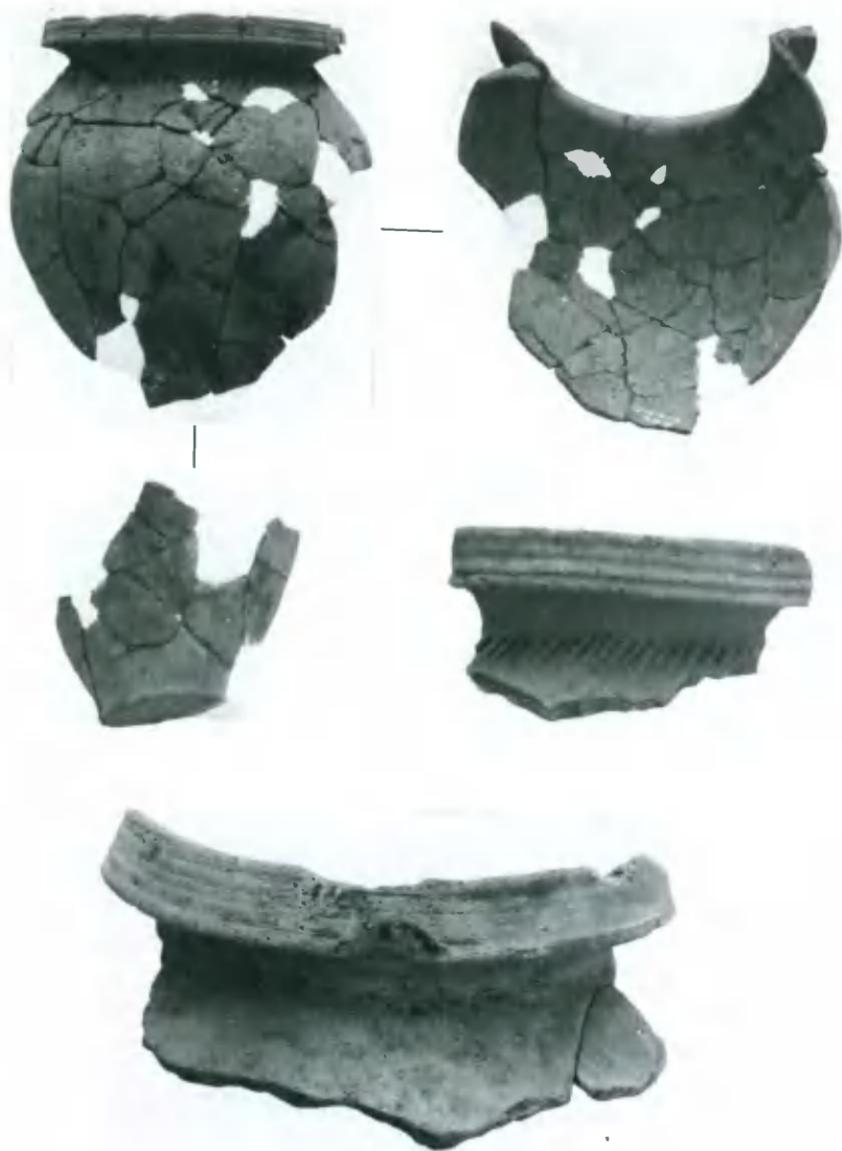


4



出土遺物（縄文式土器）

図版32



出土遺物（弥生式土器）

図版33



出土遺物（弥生式土器）

図版34



出土遺物（弥生式土器）



出土遺物（弥生式土器）

図版36



出土遺物（弥生式土器）



出土遺物（弥生式土器）

図版38



出土遺物（弥生式土器・土師器）

図版39



—



—

1. No. 7住居址出土石庖丁



3. 表面採集鉄斧



—



2. 2号墳出土馬具

図版40



1



7



2



3



4



8



9



5



6



10



11

墳墓出土遺物（須恵器・土師器）

二 本 松 遺 跡 (73)

例　　言

1. 遺跡名 二本松遺跡
2. 遺跡の所在地 岡山県阿哲郡哲西町大竹字二本松
3. 調査期間 昭和51年5月22日～7月17日
4. 調査・報告書担当者 伊藤 晃、山磨康平
5. 遺物・図面等の保管場所 岡山県教育庁文化課分室（岡山市西古松265）
6. 発掘調査にあたっては哲西町教育委員会、株式会社地崎工業に有形・無形の協力を得た。また文化課職員福田正継、浅倉秀昭、中野雅美の各氏には、実測等の援助を得た。

本文目次

第1章 調査の経緯.....	283
第1節 調査の経緯と経過.....	283
第2節 日誌抄.....	283
第2章 調査の概要.....	284
第1節 立地と調査の概要.....	284
第2節 各遺構の概要.....	284
第3節 出土遺物.....	291
第3章 まとめにかえて.....	295

図目次

第1図 地形図.....	284
第2図 調査区位置図.....	285
第3図 調査区内遺構配置図.....	286
第4図 第1号住居址.....	287
第5図 第2号住居址.....	288
第6図 建物I.....	289
第7図 建物II.....	290
第8図 出土遺物1(弥生式土器・土師器).....	292
第9図 出土遺物2(中世の土器).....	294

図版目次

図版1—1 遺跡全景(南岸本下遺跡から)	
図版1—2 調査区近景(北から)	
図版2—1 調査区近景(南から)	
図版2—2 第1号・2号住居址および建物I(南から)	
図版3—1 第1号住居址および建物I(西から)	
図版3—2 第1号住居址および建物II・III・IV(南から)	
図版4—1 第1号住居址(南から)	
図版4—2 第2号住居址およびその周辺(南から)	
図版5—1 土壙1(東から)	
図版5—2 土壙2(南から)	
図版6—1 土壙3(南から)	
図版6—2 土壙4(南から)	
図版7 出土遺物1(弥生式土器・土師器)	
図版8 出土遺物2(中世の土器)	

第1章 調査の経緯

第1節 調査の経緯と経過

二本松遺跡は岸本下遺跡(註一1)と同じく工事用道路が設置された段階で新しく発見された遺跡である。南面する好立地を有していたが分布調査時点においては牧草等のため遺物を確認することが出来なかった。このため発見された時点の3月23日において文化課は道路公団に対し工事中止要請を行い、遺跡発見届の提出・対応策の協議を重ねた。工事も切迫していたが、文化課としてもすぐに調査に入る余裕もなく岸本下遺跡の調査終了後二本松遺跡の調査に着手することになったのである。このため作業員は5月22日から岸本下遺跡に引きつづいて地崎工業から応援を受け調査をつづけた。しかしながら調査を担当した両名は、5月26日から開始した横田東古墳群(註一2)の調査とかけもちで行わざるを得なくなり調査そのものに限界があった。縦貫担当調査員に種々の応援を受けたが、用地内遺跡の工事用道路部分を除いて半分しか掘り抜げることが出来なかった。

第2節 日誌抄

5月22日(土)	二本松遺跡調査開始。
5月24日(月)～6月2日(水)	工事用道路より西側の表土除去作業。
6月3日(木)～6月4日(金)	表土除去作業続行。遺構掘り下げ。
6月4日(金)	対策委員会。
6月7日(月)	調査区北よりの深い谷にトレーナーを設定し掘り下げ。
6月8日(火)～6月26日(土)	遺構検出。一部掘り下げ。
6月28日(月)～7月5日(月)	柱穴掘り下げ。
7月8日(木)～7月9日(金)	柱穴掘り下げ。平板実測。遺構写真。
7月12日(月)～7月14日(水)	平板実測。
7月15日(木)	レベリング。柱穴掘り下げ補足。
7月16日(金)	清掃全景写真撮影。柱穴掘り下げ補足。
7月17日(土)	実測補足。調査終了。

第2章 調査の概要

第1節 立地と調査の概要

当遺跡は阿哲郡哲西町大字大竹字二本松に所在し、高梁川の一支流である神代川の最上流域にあたり、広島県との県境近くに位置している。隣接する岸本下遺跡と同様に工事用道路の通過による新発見遺跡のものであり、調査に急を用し岸本下遺跡の終了に引続いて調査を行った。

遺跡は付近の水田との比高差8~9m程の南面する緩斜面上に位置し、南側に国道182号線、国鉄芸備線を挟み岸本下遺跡、北側に丘陵一つ隔てて塚の峯遺跡が所在する。

遺跡の範囲は工事用道路通過による道路崖面の観察から北側に位置する丘陵の裾より南側の国道182号線までの南北約100mの区間の全面に遺構の存在が想定され、総面積4,000m²のかなりの面積が考えられた。このため重機を使用した全面表土除去を行い時間的な制約を補う方法をとらざるを得なかつた。

主要検出遺構は大別すると竪穴住居址、掘立柱建物、ピット、溝状遺構、その他に分類できる。このうち竪穴住居址2軒と径1m程のピット数基が弥生時代終末~古墳時代初頭にわたる遺構であり、掘立柱建物4軒、その他のピット、および柱穴のほとんどが中世の遺構と考えられる。

第2節 各遺構の概要

第1号住居址

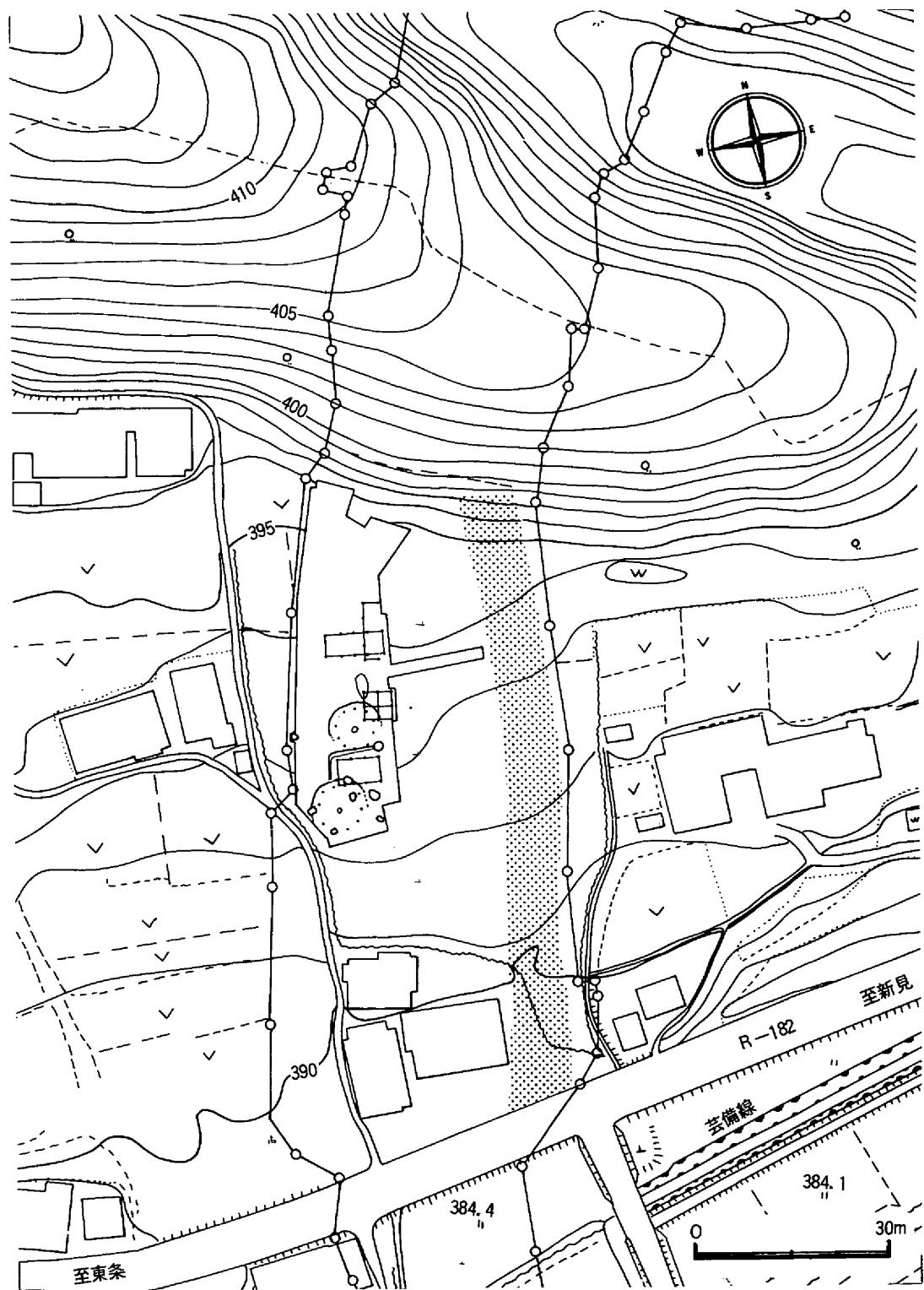
2号住居址と4mの間隔を置き、調査区の南半に検出した推定径8.5mの竪穴住居址である。遺構の残りはやや悪く、壁面は北側の最も良好な場所で深さ25cmと浅く、南半では壁、床面とも削平を受け、さらに中世掘立柱建物に付属する溝により切られており柱痕跡のみである。

柱穴は住居址内に60本程検出し、そのうち、



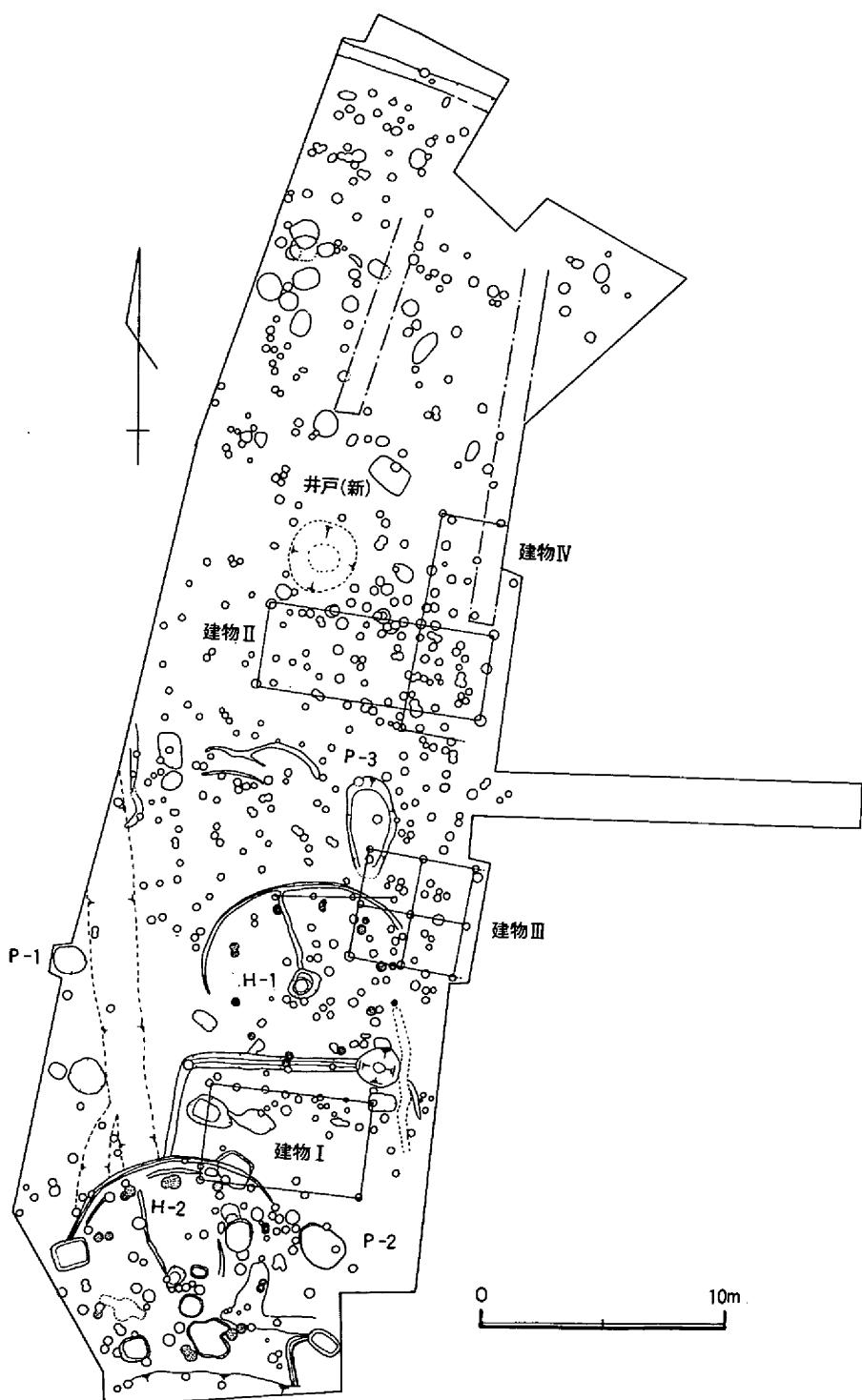
第1図 地形図

二本松遺跡(73)



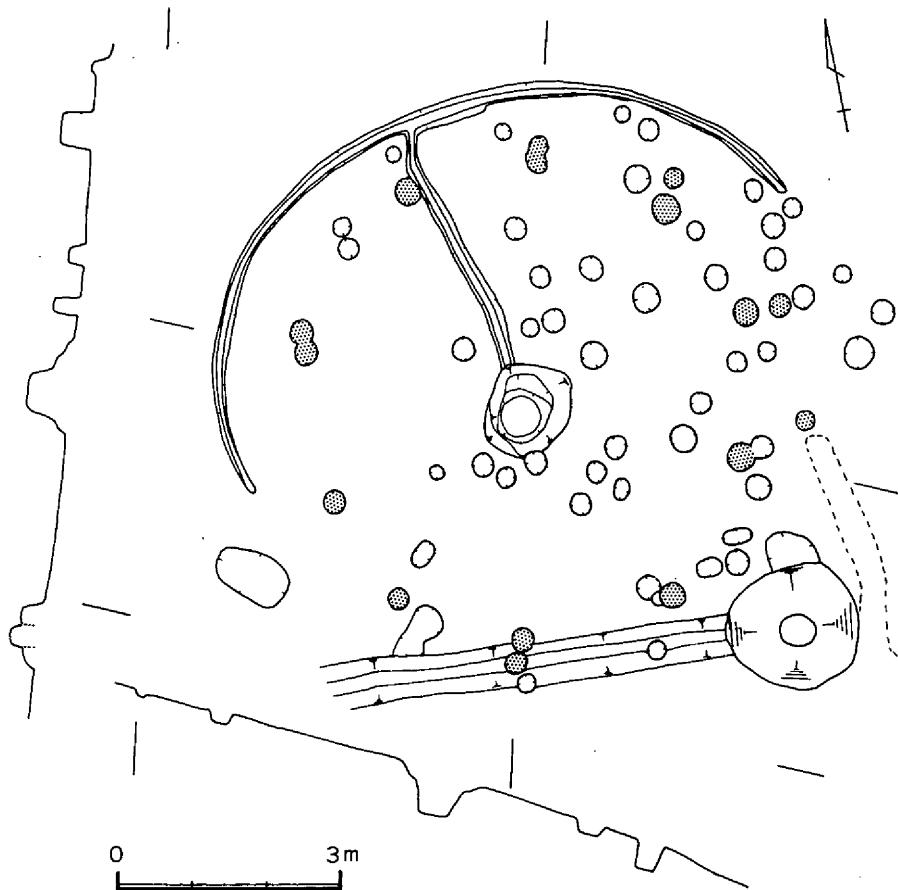
第2図 調査区配置図

二本松遺跡(73)



第3図 調査区内遺構配置図

二本松遺跡(73)



第4図 第1号住居址

L. 396m

本住居址に伴う柱穴としては壁面より内側1m程の場所に2m前後の間隔を置き検出した径30cm、深さ40~50cmを測る10本程が直接伴うものと考えられる。

住居址内中央には上面径1.25×1.0m、深さ60cmを測り断面U字形を呈す中央ピットを設けている。さらに、このピットと北側の残存している周溝間に長さ3.3m、巾20cm、深さ10cmを測り、断面U字形を呈す床溝を施している。

住居址内出土遺物は遺構の残りが悪いため、少量の土器片のみで時期を確定するものは認められない。

第2号住居址

調査区の南端に検出した推定径9.5mを測る竪穴住居址である。遺構の残りは1号住居址と同様に悪く、壁面は北側の最も深い場所で深さ25cm程と浅く、周溝および床面も北半部分のみで南半では柱穴のみである。

住居内柱穴は中世遺構と重複して複雑であるが、壁面および中央ピットより推定して、住居址壁面

二本松遺跡(73)



第5図 第2号住居址

L. 395m

より1m程内側に2m前後の間隔を置き検出した径30cm、深さ30~50cm程の9本が主柱穴と考えられる。

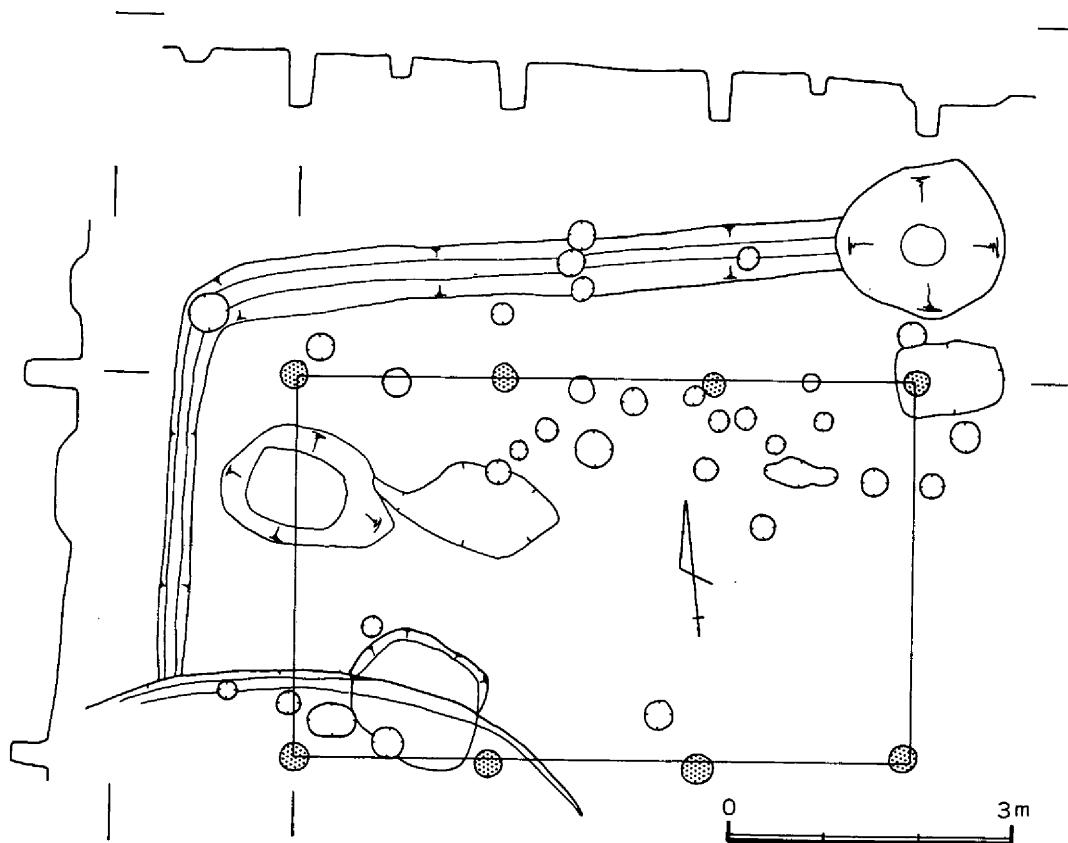
また、本住居址は建替えが行われたとみられ住居址内に別の周溝が残存し、主柱穴も重複又は数本が集中しており、中央ピットも2基認められる。

住居址内出土遺物は少量の土器片のみで、1号住居址と同様時期を確定する資料に乏しい。

土壤1

1号住居址と4.5mの間隔を置き調査区の西端に検出した円形のピットである。規模は径1.3×1.0m、深さ18cmを測りやや袋状の断面を呈す。

ピット内出土遺物は本遺跡中最も多く、また時期的にもやや幅のある遺物であることから二次的な堆積の可能性も考えられる。



第6図 建物I

L. 395m

建物 I

東西3間(6.5m)、南北2間(4m)の掘立柱の建物で、東西の柱穴は2.1~2.2mごとに見られるが南北間には見られない。柱穴の直径は30cm前後で、現存深さは50cm前後である。北側と西側に一状に幅30~60cm、深さ20cmの溝が伴っている。また北東限に直径1.8m深さ1.5mの井戸あるいは水溜用の施設が伴っている。溝で区画された内外にもこの時期と考えられる性格のはっきりしない土壌状遺構、柱穴群が見られたが、まとまりがついたのは後述する3棟のみであとははっきりしない。

出土遺物は、溝内より中国製陶磁器、土師器の碗、小皿等が出土しており、他のこの時期の遺構とほぼ同じ時期であり幅は広いが鎌倉~室町時代にかけてのものである。

建物 II

梁行(東西)4間(9m)桁行(南北)2間(3.4~3.7m)で東西両側は2.6mを計り少し広く中2間分が2m前後の建物である。柱穴幅40~50cm、現存深さは30cm前後である。

建物 III

東西は2間分(4.5m)、南北2間(4.5m)であるがさらに東に伸びるものと思われる。柱穴幅30cm、



第7図 建物II

L. 396m

現存深30cm前後を計る。

建物IV

東西1間分(2.4m)、南北4間(9m)で、建物IIに直交する形であるが、これも東に伸びるものと思われる。柱穴幅30cm、現存深さ35cmを計る。

その他の遺構

直径1m前後の円形あるいは不整円形の土壙を何ヶ所か検出したが、時期的には古墳時代初頭のもの2~3を除けばこの建物群に伴うものがほとんどである。土壙2からは特に多量の土師質碗、小皿が出土しており他の遺構もほとんど同時期であろう。

又調査区の中央から直径2.8m、深さ2.5mの井戸を検出しているが出土遺物もなく新しい近世末~近代の時期ものと考えられる。

第3節 出 土 遺 物

弥生式土器～土師器

(1)は推定高24cm、口径13.5cmを測り二重口縁を有す壺形土器である。口縁端部はほぼ垂直に立上り、外面に14本の浅い凹線文を施している。体部外面はヘラ磨き、内面ヘラ削りを行い器壁が非常に薄い。底部はやや平底を呈す。

(2)～(20)は壺又は甕形土器である。このうち(2)(10)(18)(19)は二重口縁を有し、口縁部がほぼ垂直ないし内傾して立上り(18)を除き丹塗りである。(18)(19)の口縁部外面には浅い凹線文を施している。なお(16)(19)は器台形土器の可能性がある。

(3)～(10)、(13)(14)(15)(17)は二重口縁を有し、口縁部が外反する。口縁端部はやや角ばったもの(10)(7)(8)(14)(15)と丸味を持ったもの(3)(4)(5)(9)(10)(13)とが認められる。外面はほとんど無文であるが体部に櫛描波状文を施すもの(6)、口縁部に列点文を施したもの(9)等が認められる。(5)は他とやや異なり体部内面を除き内外面ともヘラ磨きを行い丹塗りである。

(11)(12)は口縁部がく字形に外反するものである。(11)は手づくねの小形品である。(20)は口縁部がく字形に外反し、端部の肥厚するものである。口縁端部に3本の浅い凹線を施している。

(21)～(24)は高杯形土器の杯部で、(2)を除き内外面とも丹塗りである。口縁部は二重口縁を有するもの(21)、ほぼ垂直に立上るもの(23)、垂直に立上った端部がさらに横に肥厚したもの(22)(24)が認められる。(22)は端部上面に4本の浅い凹線文を施し、端部には等間隔にヘラ刻目文を施している。

(25)～(28)は高杯形土器の脚部である。(26)は脚部に孔を穿ち、内外面とも丹塗りである。(28)はやや長い脚部に孔を穿っている。

(29)は口径11.2cm、器高7.2cmを測る均整のとれた完形の小形丸底壺である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面にハケ目、内面にヘラ削りを行っている。色調は赤褐色を呈し黒斑が認められる。胎土焼成とも良好である。

(30)～(32)は底部片である。やや上底のもの(30)、わずかに平底が認められるもの(31)等がみられる。

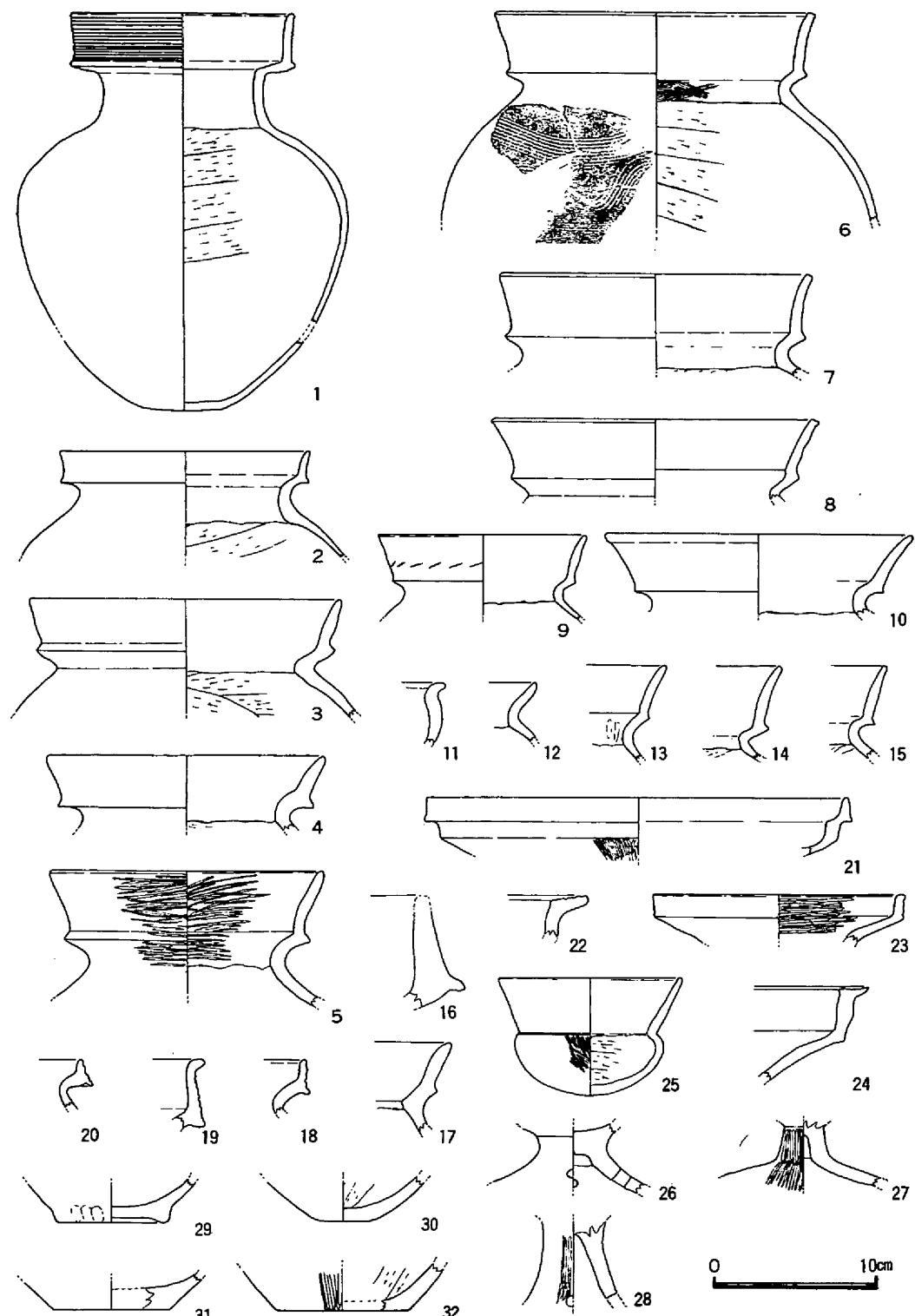
以上が弥生時代中期～古墳時代前期にわたる出土遺物の概要である。

この出土遺物中で古い時期に属するものとして、中期後半のものとみられる(21)、後期前半とみられる(22)(24)等であろう。また、中心となる時期は弥生時代末～古墳時代前期にわたる期間とみられ、この時期の遺物が最も多く認められる。

中世の土器

中世の出土遺物は土師器の碗、皿が圧倒的多数であるが、数点ずつではあるが中国からの輸入陶磁である青磁、日本製陶磁である唐津焼、瀬戸あるいは美濃系統の灰釉陶、黒釉（天目）、備前焼それに備中南部で焼かれた亀山焼と思われるものなどである。これらの遺物は主に掘立柱建物Ⅰを北・西に囲む溝内、北側の浅い凹状の土壙3、数百を数える大小のピット群の中から、あるいは黒ボコの上層に淡褐黒色の包含層が見られその中から出土したものである。

二本松遺跡(73)



第8図 出土遺物1 (弥生式土器・土師器)

椀一（第9図14～27）口径11～13cm内に収まり高さ3～4cm灰白色、灰黄色、灰色を呈する。底部はヘラギリがほとんどであり粘土紐を巻き、口縁の立ち上がりは回転台～ロクロで引き上げている。高台を貼り付けたものも数点見られる。

小皿（第9図1～13）口径7～8cm内に収まり、高さは1～1.5cm内である。底部はヘラギリを行い、椀と同じく粘土紐を巻き、口縁部のみを引き上げている。胎土は淡赤褐色、灰黄色、灰白色などさまざまなものが出土している。

土鍋—31は口縁部を外側に外反するもので口径33cm深さ推定15cm程になる土鍋あるいは三足鍋の手である。外面は縦方向の板目、内面の横方向の強い板目を残している。

備前焼—図示できなかったが、擂鉢片、大甕片が数点出土している。

龜山焼—（29、33、34）大甕の破片と擂鉢片が暗灰褐色包含層から出土している。34は、大甕の破片で須恵質の焼であり外面は細かいものは 2×2 mm、大きいもので 5×5 mmの格子状たたきを残している。内面に青海波が部分的に残るがたたきを板状工具で消している。

須恵質のものその他に瓦質で黒色をおびているものも存在する。29は擂鉢の小破片で灰褐色を呈し余りかたくない。4～5本の条線を残している28は須恵器、30は黄灰色の土師質の小破片で条線は見られないが、擂鉢～こね鉢のたぐいであろうと思われる。

国産陶磁器類 35は、掘立柱建物Iに伴う溝内から出土したもので浅い椀状を呈する。口径11cm、高さ3.7cm、低い高台を持つが、これは後からヘラで削り出している。釉は薄い淡緑色を呈している、胎土は灰色で繊微であるが、釉のかからない外面および高台部は、淡褐色を呈している。

36は、掘立柱建物Iに伴う溝内から出土した輸花皿で口縁の外から笠状工具あるいは指で押えている。口径12.5cm、高さ3.5cmを計る。高さ0.4cmの削り出し高台を持ち高台より上1cm程と、疊付も丁寧に削っている。釉は明るい灰緑色で、胎土は灰白色を呈する。35、36は唐津系のものと考えられる。

黒釉（天目—37）口縁部片と高台部のみの出土で椀状なる茶黒褐色の釉がかかる。胎土は白色で幾分小砂粒を含んでいる。高台部内側に浅く削っているが、1cm程の幅で茶褐色になっている。

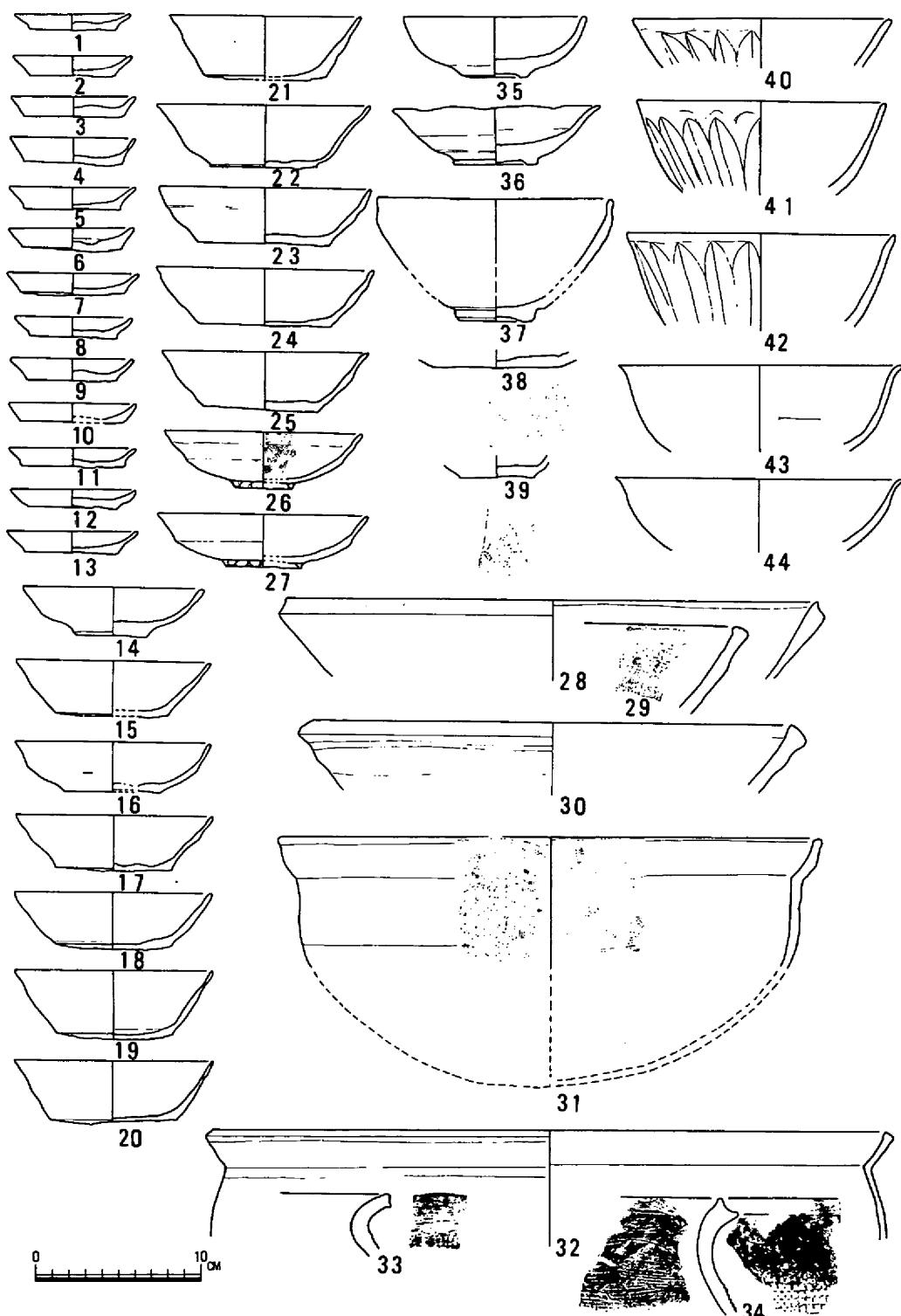
39、小皿状の底部破片で底部に糸切りを持つ、内面に自然釉がかかる。胎土は灰色を呈す。38は、椀状の底部破片で底部に糸切りを持つ。内面に自然釉がかかり、胎土は灰白色を呈す。

輸入陶磁器

青磁40は、口径15.5cmを計る椀状の口縁部破片である淡緑色を呈し、外面に型で押したと思われる鎬連弁紋が巡る胎土は灰色である。41は、土壙3から出土し、口径15cmを計る。緑灰色を呈し、外面に型押しの鎬連弁紋が巡る。胎土は灰色である。42は、口径16cmを計り、緑黄色を呈す。外面に1、2と同じく型で押したと思われる鎬連弁紋が巡る。43は、口縁が少し外反する。口径17cmを計り、淡い青色を呈す。外面は無文であるが、内面に文様状の線が一本走る。胎土は灰色を呈す。

44は、青磁43と同じく口縁が少し外反する。口径17cm、胎土の灰色が影響してか透きとおった灰白色を呈している。

二本松遺跡(73)



第9図 出土遺物2（中世の土器）

第3章 まとめてかえて

まとめてかえて遺構の概要をまとめて見たが、この遺跡は主に二つの時期に要約することが出来る。一つは弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての住居址、土壙であり、今一つは中世の掘立柱建物群と土壙であった。掘立柱の建物は4棟分しかまとめることが出来なかつたが2と3は直交するような型で重複しており時期差があることがわかる。数百ヶ所以上の穴状ピットは何らかの建物等痕跡であるがまとめることが出来なかつた。しかしながらこれら中世の建物群に伴つて出土した遺物は、在地の亀山焼、備前焼、土師質椀、小皿、土鍋に混ざつて中世一般集落では余り見られない中国製陶磁である青磁や唐津、瀬戸あるいは美濃系統の陶器を含んでいたことである。これらの伴出はこの建物群の時期・意味を考える上で非常に興味深いものである。亀山焼の実態については西川宏氏の問題提起以来(註一)余り研究が進んでいないが、平安末期にその開窯の時期が求められ、備前焼、勝間田焼(勝田焼とも呼ばれている)(註二)と時期を同じくし、器種構成も同じように、大甕・擂鉢(片口鉢)、椀・小皿を含んでいる。備前焼が中世～近世にかけて大いに発展したのに対し亀山焼・勝間田焼は中世で終息してしまうようである。

青磁等の中国製陶器に関しては、昨今北九州において亀井明徳氏等により中世輸入陶磁の研究が進められ、分類・編年・生産地推定等も行なわれている。(註三)二本松遺跡で出土したこれら青磁の点数は少ないが、在地の土師器等に今まで余り編年等が試みられなかつた一つの時期を与えることの出来る有力な資料である。そして亀井氏の言うこれら青白磁は、Ⅲ期に含まれると思われ、龍泉窯系で13～14世紀即ち鎌倉時代後半～室町時代前半に位置付けることが出来る。そして、これらの建物群はこの遺跡南500mの所に位置する岸本城址と何らかの関係を求めることが出来ないであろうか。岸本城についてはいつ築城されたかはっきりしないが、尼子氏に属していたとされ、この周辺の主な中世城址が毛利氏により天正年間にすべて落成していることから見て相前後して落城していると見れば、下限を16世紀中頃に収めることができ、築城の時期は二本松遺跡から出土する古い時期の遺物すなわち鎌倉時代前半に求めることが出来ないであろうか。

註一、西川宏「亀山焼の再評価」『考古学研究第11巻3号』 43、1965

註二、勝田郡勝央町勝間田周辺で焼成された中世を中心とする古窯址群で現在まで20基以上が確認されている。

註三、上野精志、亀井明徳、森本朝子「遠國遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告

—XVI—】1977、福岡県教育委員会



1. 遺跡全景（南岸本下遺跡から）



2. 調査区近景（北から）

図版2



1. 調査区近景（南から）



2. 第1号・第2号および建物I（南から）



1. 第1号住居址および建物I（西から）



2. 第1号住居址および建物II・III・IV（南から）

図版4



1. 第1号住居址（南から）

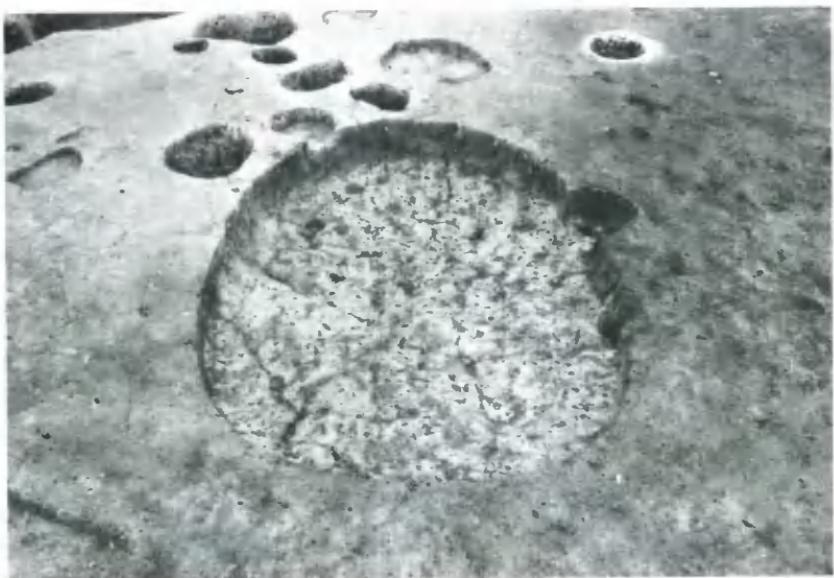


2. 第2号住居址およびその周辺（南から）

図版5



1. ピット1 (東から)



2. ピット2 (南から)

図版6



1. ピット3 (南から)



2. ピット4 (南から)

図版7



出土遺物1 (弥生式土器～土師器)

図版8



出土遺物2（中世の土器）

岸 本 城 址 (75)

例　　言

- 1、遺跡名 岸本城址
- 2、遺跡の所在地 岡山県阿哲郡哲西町大字大竹字岸本。
- 3、調査期間 昭和51年8月10日から10月27日
- 4、調査担当者 発掘調査は松本和男、友成誠司が担当した。なお10月12日から10月27日までは正岡睦夫、田仲満雄両調査員の援助を得た。
- 5、報告書担当者 報告書の作成、執筆は現地調査の結果を松本がとりまとめた。
- 6、国土地理院の承認番号 本文中に掲載した岸本城址周辺地形図（第1図）は「建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭52中複、第200号」
- 7、岸本城址周辺地形図（ $\frac{1}{3,000}$ ）（第2図）は日本道路公団作成による $\frac{1}{1,000}$ 路線設計図を使用した。第3図、4図に用いた岸本城地形図及びグリッド、トレンチ設定図は岡山調査測量KKに委託した地形測量図を用いた。
- 8、遺構図は松本、友成、正岡、田仲が実測、測量した原図を松本が淨写した。遺物実測図の作成、拓本、淨写はすべて松本が行った。
- 9、発掘調査した時点で遺物に注記をしたが、報告書作成時にトレンチ、遺構の名称を変更した。遺物には旧遺構名で注記されているので、新旧対象表を作成した。

旧 遺 構 名 称	新 遺 構 名 称
第1トレンチ	T-2
第2トレンチ	T-3
第3トレンチ	T-1
本丸	1郭
第1出丸	2郭
第2出丸	3郭
1区、2区、3区、4区の表土層	1郭内表土層

- 10、写真撮影は、遺跡遠景、遺構写真を友成、田仲が担当し、遺物を松本が担当した。
- 11、遺物保管場所 岡山県教育庁文化課分室（岡山市西古松265）において一括保管している。
- 12、発掘調査の実施にあたっては、下記の方々の御協力をいただいた。記して謝意を表わす次第である
(順不同、敬称略)

日本道路公団、哲西町教育委員会、清水建設株式会社、株式会社地崎工業、
(発掘調査作業員)

横山萬郎、橋本茂、佐々木薫、藤枝利雄、横山正美、川上好友、渋川雅雄、南部誠吉、小川恒雄、安田一之、佐々木文一、山本義夫、生熊武夫、田辺淨二、坂藤操、橋根証視、清水直人、小山良三、白石正一、柄木武志、藤原喜代子、好井智子、細川節衣、寺奥昭子、住川安子、長谷川茂子、小林まゆみ、三上ミチコ、小谷美栄子、大日南篤美、三好年子、北原時代、藤岡文子、藤沢みわか、藤村八重子、伊藤カズ代、橋根光枝、松原キクヨ、中村ハルコ、西川百合子、藤村信子、小山照子。

本 文 目 次

例 言

本文目次

第1章 調査の経緯	304
第1節 岸本城址の位置及び現状	305
第2節 調査の経緯	305
第3節 発掘調査日誌抄	308
第2章 調査の概要	310
第一節 城址に伴う遺構	310
1、第1郭	310
a、建物I	311
b、柵列I	317
c、登坂路	317
d、溝1	317
e、柱穴	317
2、第2郭	317
a、B—B'柱穴列	319
b、階段状遺構	319
3、第3郭	319
a、建物II	319
b、堀I	319
c、堀II	321
d、溝2	321
e、A—A'柱穴列	321
4、第4郭	321
5、その他	321
第2節 その他の遺構	322
1、土墳墓	322
2、土墳	323
3、1号住居址	323
4、2号住居址	324
第3節 遺物	326
1、表面採集、トレンチ、第1～3郭出土遺物	326

2 第1郭～3郭出土遺物	327
3、鉄器	331
第3章まとめにかえて	333

図 目 次

第1図 岸本城遺跡周辺地形図 ($\frac{1}{50,000}$)	304
第2図 岸本城周辺地形図 ($\frac{1}{3,000}$)	306
第3図 岸本城地形図 (調査前) ($\frac{1}{1,000}$)	307
第4図 岸本城トレンチ、グリッド設定図 (調査前) ($\frac{1}{1,000}$)	311
第5図 岸本城グリッド設定図 (調査後)	312
第6図 岸本城地形測量図 (調査後) ($\frac{1}{400}$)	312・313
第7図 岸本城遺構全体図 ($\frac{1}{400}$)	313
第8図 T—1断面図 ($\frac{1}{80}$)	314
第9図 T—2断面図 ($\frac{1}{80}$)	315
第10図 T—3断面図 ($\frac{1}{80}$)	316
第11図 W—E断面図 ($\frac{1}{160}$)	317
第12図 建物Ⅰ実測図 ($\frac{1}{80}$)	318
第13図 建物Ⅱ実測図 ($\frac{1}{60}$)	320
第14図 土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)	322
第15図 1号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)	323
第16図 2号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)	324
第17図 2号住居址内出土遺物実測図 ($\frac{1}{4}, \frac{1}{8}$)	325
第18図 表面採集、トレンチ、第1～3郭出土遺物 (実大、 $\frac{1}{2}, \frac{1}{4}$)	329
第19図 第1郭～3郭出土遺物 ($\frac{1}{4}$)	330
第20図 鉄製品実測図 ($\frac{1}{2}$)	331

第21図 岸本城縦張図 ($\frac{1}{1,500}$) 333

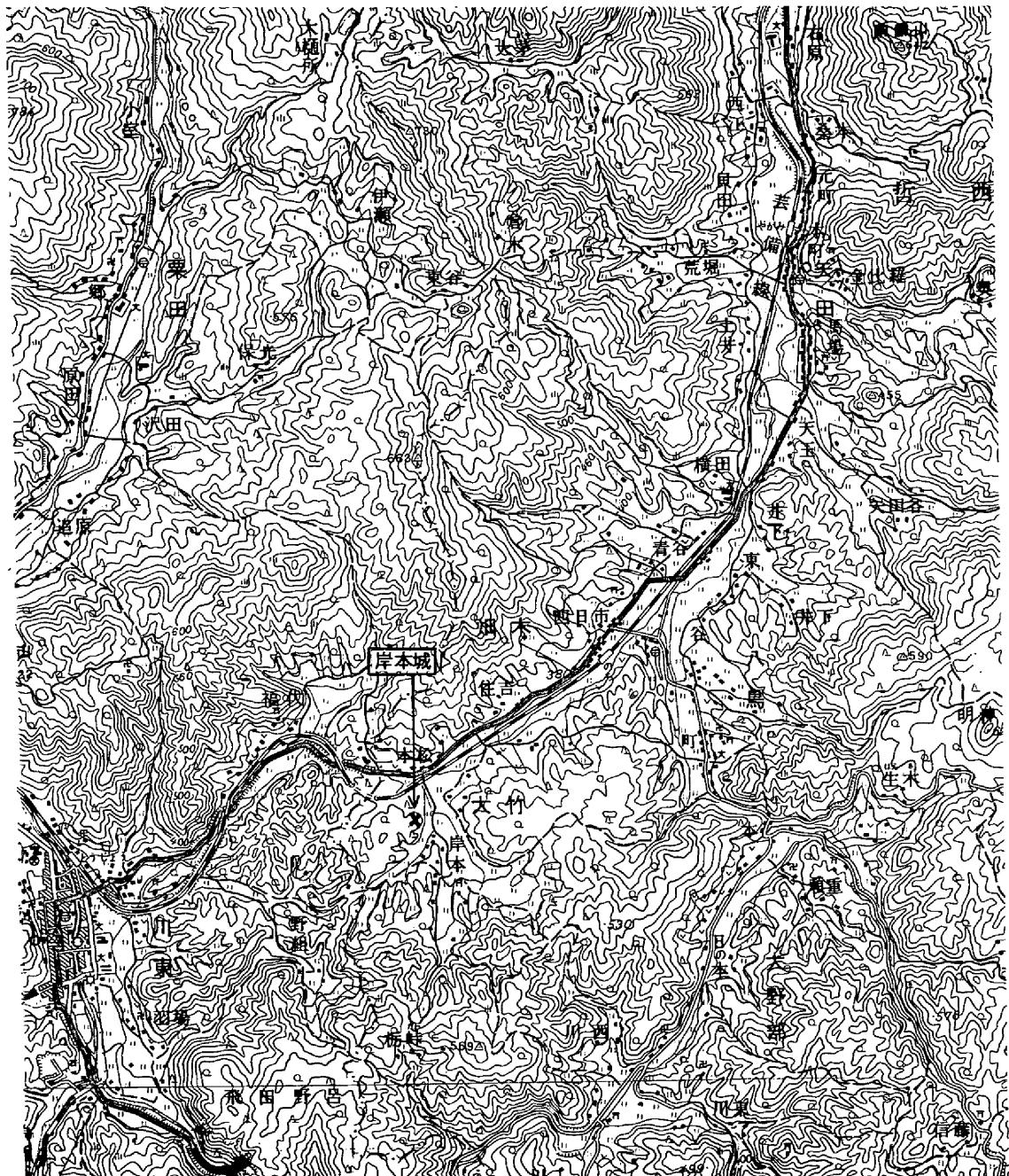
図版目次

- 図版1—1 岸本城遠景(北東から)
 　2 岸本城近景(東から)
- 図版2—1 1郭、2郭全景(東から)
 　2 1郭、2郭、3郭全景(北東から)
- 図版3—1 1郭、2郭北側部分(東から)
 　2 1郭遺構(建物1、土壙など)(西から)
- 図版4—1 1郭南側斜面(南から)
 　2 建物1全景(西から)
- 図版5—1 2郭全景(北から)
 　2 2郭全景(東から)
- 図版6—1 2郭南東斜面(北東から)
 　2 2郭遺構(南から)
- 図版7—1 3郭遺構全景(建物II、堀1、溝2など)(西から)
 　2 3郭全景(北から)
- 図版8—1 3郭全景(南東から)
 　2 3郭と東斜面柱穴(東から)
- 図版9—1 登坂路(北東から)
 　2 2郭東斜面と階段状遺構(北東から)
- 図版10—1 溝1近景(南から)
 　2 溝1全景(北から)
- 図版11—1 T—2(1郭から斜面にかけて)断面(西から)
 　2 T—2(1郭盛土)断面(西から)
 　3 T—2(2郭部分)断面(西から)
- 図版12—1 T—3(1郭盛土造成)断面(北西から)
 　2 土壙墓1、2全景(北東から)
- 図版13—1 土壙墓1発掘段階(北から)
 　2 土壙墓1完掘(北から)
 　3 土壙墓2(北から)
 　4 土壙墓3(南西から)
- 図版14—1 T—1トレンチ断面(盛土部分)(北西から)
 　2 1号住居址全景(東から)

岸 本 城 址 (75)

- 図版15—1 2号住居址全景（北東から）
2 2号住居址全景（遺物とりあげ後）（北東から）
- 図版16—1 2号住居址内遺物出土状態（東から）
2 岸本城遠景（発掘調査終了後）（北東から）
- 図版17—1 岸本城遠景（発掘調査終了後）（東から）
2 岸本城全景（発掘調査終了後）（南から）
- 図版18 2号住居址内出土遺物
- 図版19 表面採集、トレンチ、1～3郭出土遺物
- 図版20 1～3郭出土遺物
- 図版21 1～3郭出土遺物
- 図版22 1～3郭出土遺物
- 図版23 1～3郭出土遺物
- 図版24 1～3郭、トレンチ出土遺物

第1章 調査の経緯



第1図 岸本城遺跡周辺地形図 (50000)

第1節 岸本城址の位置及び現状

岸本城址は岡山県阿哲郡哲西町大字大竹字岸本に所在する。(第1図、2図)(図版1—1、2)岡山県における中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の対象遺跡は合計75遺跡あるが、岸本城址は岡山県の最西端に位置し、あと数百メートルで広島県境に達するという最終遺跡である。哲西町には南西から北東に流れる神代川がある。神代川の両岸には標高600~700m前後の山々が連なり、その山間を神代川は流下し、各所に小さな冲積地を形成している。この神代川沿いの地形は古代より人馬の往来に利用されており、出雲街道と呼ばれていた。

岸本城址は哲西町の最西端にある。城は北東に派生する丘陵東端部(標高約400m)に位置する。城の東側斜面には水田が開けており、この城との比高差は約30mある。岸本城からは哲西町の冲積地を一望におさめる程の眺望はなく、わずかに東城方面に抜ける国道182号線と旧東城方面への間道を眼下に見るだけであり、防禦的に優れた立地ではない。恐らく、西、南方面に対する注意を向けるための城と考えられる。岸本城の縄張りは丘陵先端部の自然地形を利用している。東斜面(東城方面への間道)は急傾斜となっており、丘陵の切断は丘陵先端で南東に開口する谷の入り込みを延長して掘削するだけで築城は容易にできたと推察される。

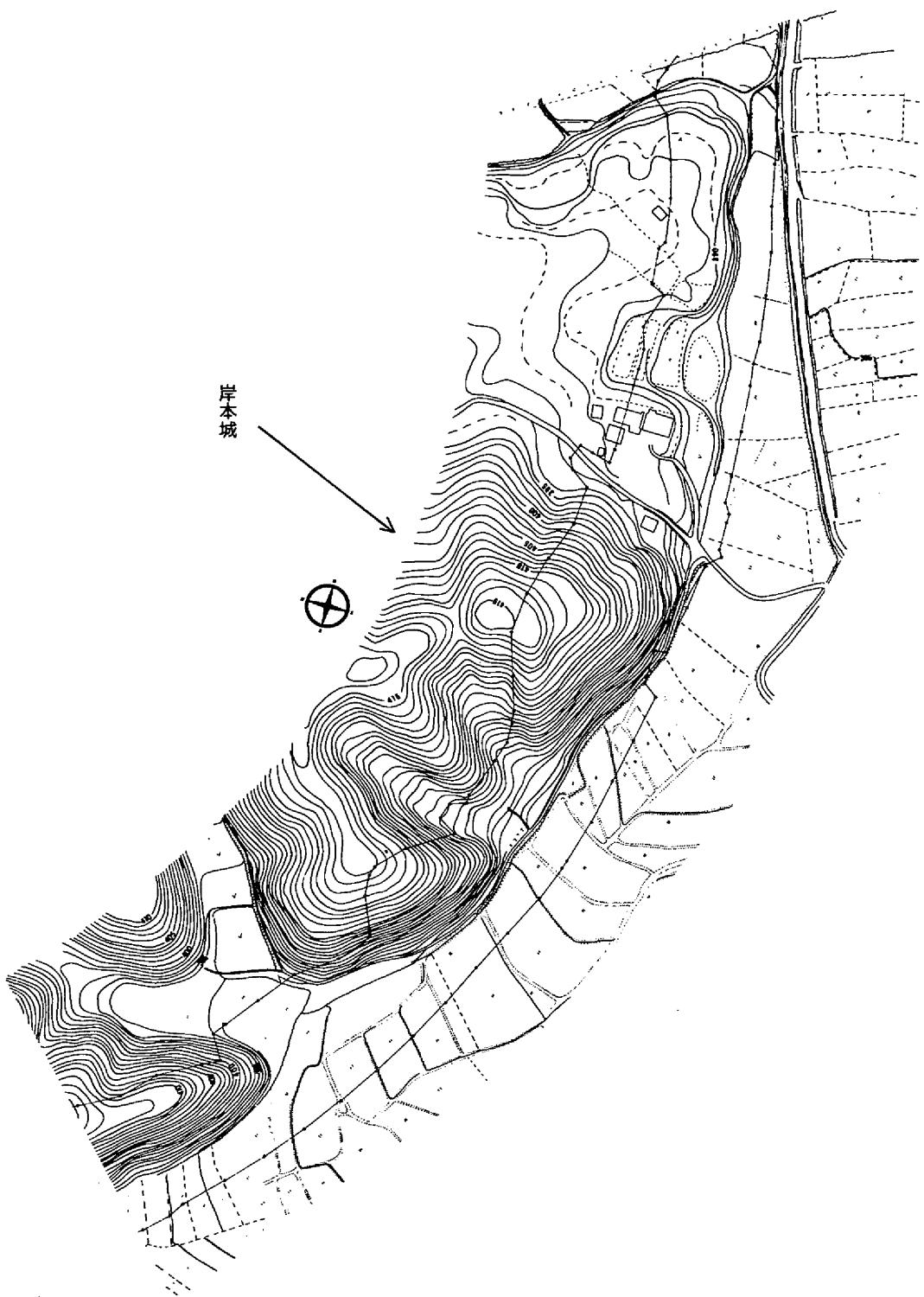
発掘調査前における地表観察では本丸は25×30mの平坦部をもち、その西端に10×15m、高さ約1mの高まりをもつ部分がみられた。本丸の南と東側には張り出し部分が観察され、北側用地外(標高406.5m付近)では幅約1m、高さ約1.5mの土壘が残っている。このため、岸本城には少なくとも本丸、郭が二カ所、土壘が一部存在し、ほぼ築城時の状態で保存されているといえよう。

第2節 調査の経緯

岸本城は古くから「岸本城」あるいは「岸本山城」という名称で文献に記載されている周知の中世の城址である。(註1)この岸本城が中国縦貫自動車道建設に伴って破壊されることについて、保護対策についてはルート決定後も具体的になされなかった。(註2)このため、ルート決定によって城址の約 $\frac{1}{2}$ が破壊の対象となったわけであるが、その範囲は本丸に相当する第1郭と2つの郭で城の最も重要な位置を占める遺構であるため、ルートにかかる部分が保存されても価値は半減すること必至である。このような姿になって残る岸本城に我々は最善の努力をしなければならないが、そのためには充分な発掘調査期間の獲得がまず第1の条件であることはいうまでもない。以下岸本城址の発掘調査の経緯を述べてみたい。

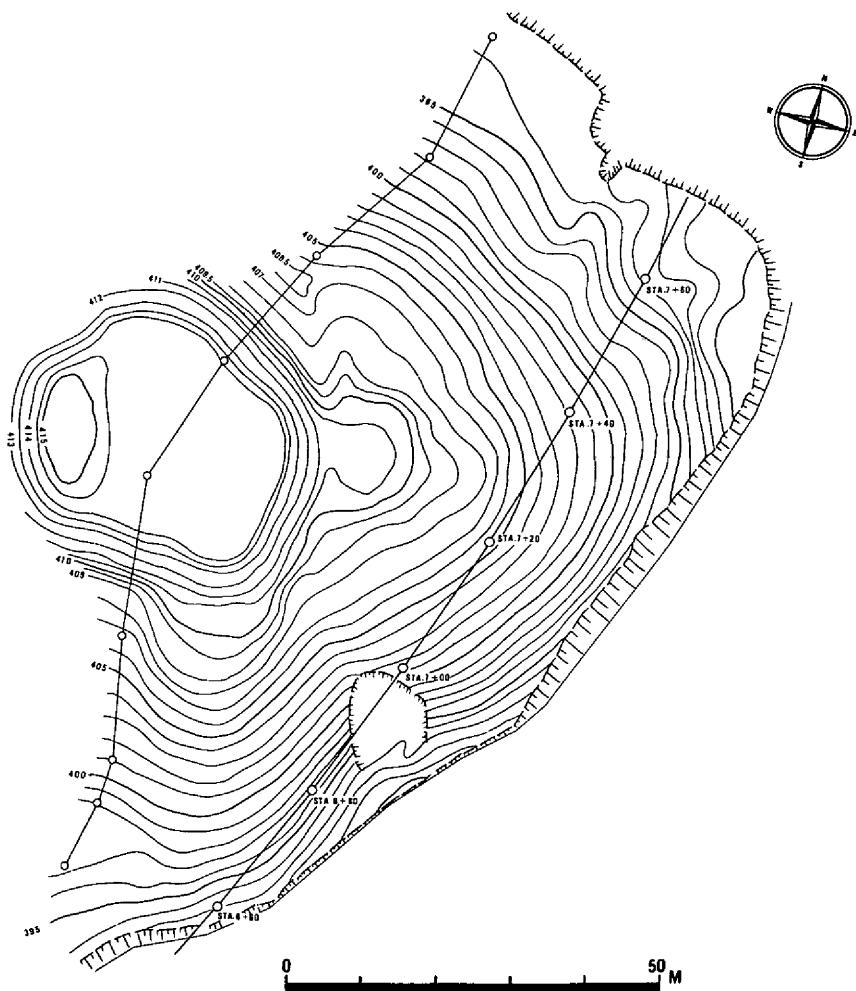
岸本城址の発掘調査は昭和51年4月2日の調査員会議において、担当調査員と調査日数が示された。岸本城址は中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の分布調査において、『尾根上に中世の山城が存在し、用地内に土壘の一部がかかる。』(註3)という概要であったため、調査期間を「1カ

岸本城址(75)



第2図 岸本城周辺地形図 ($\frac{1}{3000}$)

岸本城址(75)



第3図 岸本城地形図（調査前）(1:500)

月」（契約発掘面積 360 m²）、担当調査員は福田、中野パーティーと決定した。このパーティーは忠田山遺跡の発掘調査が終了すると引き続き岸本城址の発掘調査を実施することになっていたが、昭和51年8月中旬の段階で忠田山遺跡の調査終了が若干延びることがわかった。一方、松本、友成パーティーは御供川遺跡の調査終了が予定より短い期間で終了することになったため、調査担当者を変更することになった。

しかしながら、昭和51年度に新編成された松本、友成パーティーは発掘調査に従事する作業員全員を工区請負い建設業者に斡旋してもらって調査を行ってきたが（大倉遺跡、御供川遺跡）、岸本

城址は請負い建設業者が異なるため作業員の提供を受けることができなかった。本工区担当の建設業者は発掘調査開始日までに作業員を集める時間的余裕がないということで作業員斡旋の協力が得られなかっただけ、本遺跡の調査を行ううえで作業員の獲得は大きな問題となった。この解決策として、作業員の余裕がある現場、発掘調査が終了間近になっているところからの配置換えによって本遺跡の調査を実施することを調査員会議で決めた。これによって、藤木城址、西江遺跡の作業員が参加してくれることになり、友成が昭和51年8月10日～12日まで草刈り作業を実施した。また、盆休み後の8月16日からは休憩小屋の建設、器材の運搬、トレーニング調査を開始した。

本格的な発掘調査を開始したが、作業員数が圧倒的に少なく、8月の毎日の出席人員は8名であった。したがって、調査はトレーニング調査(T-1～T-3まで)と第1郭の一部表土排除作業を実施するにとどまった。8月31日からは御供川遺跡の調査を終了した松本が岸本城址の調査に加わった。9月6日からは忠田山遺跡の男性作業員10名が参加し、あらたにベルトコンベアーガルが搬入され、やっと発掘調査は軌道にのった。こうして、1郭、2郭、3郭、4郭の表土は完全に排除し、斜面の大部分も排除できた。10月12日からは田仲満雄、正岡陸夫両調査員が応援にきてくれた。

昭和51年10月15日が発掘調査終了予定日となっていたが、主な作業(遺構の発掘、実測、写真撮影など)が完了してなかったため、10月15日に日本道路公団広島建設局、東城工事事務所の方々と現地で話し合った結果、10月27日まで調査を延期することで合意した。最終期限が決定した後、土壙墓、住居址が追加検出され、作業員の人々には10月中旬から調査終了まで毎日残業をしていただいた。発掘調査面積は約1,700m²である。

出土遺物の整理作業は現場の作業と併行して遺物の水洗、注記作業を行った。現地で残った遺物については岡山県教育庁文化課分室に運び込んだ後に水洗、注記作業を行った。報告書の作成は本来ならば発掘調査に従事した調査員が全員で分担しなければならないが、友成が退職したため、報告書の作成作業は全て松本が行った。

第3節 発掘調査日誌抄

昭和51年8月10日～8月12日

草刈り作業

8月16日～8月21日

仮設作業、器材の運搬、トレーニング1、2の発掘調査。

8月23日～8月31日

トレーニング1、3の発掘調査。頂上平坦部(1郭)の表土排除作業。

9月1日～9月11日

第1郭の表土排除作業。第1郭から2郭への斜面の表土排除作業。

9月13日～9月18日

第1郭から2郭への斜面の表土排除作業。第3郭の表土排除作業。

岸 本 城 址 (75)

9月20日～9月26日

第1郭と2郭の中間斜面、第1郭と3郭の中間斜面、第3郭付近の表土排除作業。

9月27日～10月3日

第1郭北側斜面、第2郭と第3郭の中間平坦面の表土排除作業。

10月4日～10月9日

第2郭南急斜面、第2郭と第3郭の中間付近の表土排除作業。5日対策委員会。

10月11日～10月17日

第1郭、第2、3郭の遺構検出作業。断面実測、写真撮影。西江遺跡作業員の応援。

10月18日～10月19日

第1、2、3郭の遺構検出作業。

10月20日

第1郭の遺構検出、実測作業。第1郭の写真撮影。

10月21日

第2、3郭の断面写真撮影、実測作業。第1郭の遺構実測。遺構の全景写真撮影。

10月22日～10月24日

第1郭、2郭の遺構検出、遺構の精査。地形測量。

10月25日

第1郭の写真撮影、遺構実測。第2郭の地山土層まで掘り下げ。

10月26日

岸本城全景、第1郭の写真撮影。地形測量。住居址2軒の発掘調査。

10月27日

住居址の発掘、写真撮影及び実測作業。第1郭の断面補足調査、第3郭遺構実測。発掘器材の運搬作業。

註1 「備中集成志」九の巻古城之部、研文館吉田書店 昭和51年復刻刊行。

「古戦場備中府志」卷之二 吉備群書集成第五巻所収 吉備群書集成刊行会 昭和6年

「阿哲郡誌」上巻 社団法人阿哲郡教育会刊 昭和4年

永山卯三郎編「岡山県通史」上編 岡山県 昭和5年

「哲西史」哲西町 昭和38年刊

註2 考古学関係者が歴史時代（特に中、近世）の遺跡に無関心であったとの指摘があり、反省しなければならない点であろう。しかし、このことは考古学関係者だけの問題ではなく、中～近世史の研究者も同様に無関心であったといわざるをえない。（ただし、著名な遺跡については保存アピールがなされた。杉山博「備中國新見莊危うし！」歴史手帖10 1974—2巻10号 名著出版 昭和49年10月刊）

註3 新見以西については、昭和49年7月に文化課職員全員によって再度分布調査を実施した。その結果、岸本城址が中国縦貫自動車道の用地内にかかることが判明した。

第2章 調査の概要

哲西町における中世城址は文献に表われているもの、新規発見したものを含めると10カ所にもなる。(註1) これらの城はいづれも鎌倉時代から戦国代時末期にかけて築城されたもので、とりわけ戦国時代末期の毛利氏と尼子氏という中国地方の二大勢力による抗争に伴い築城されたものが多いようである。

岸本城は『備中集成志』(註2)によれば尼子家の軍将であった吉岡質休、同右京道秀が城主となっている。また、吉岡質休は『古戦場備中府志』(註3)によれば因州より移城したと追加記載されている。そして『阿哲郡誌』(註4)では東西1町25間、南北1町10間と城址の規模を明らかにしている。廃城については「新見のゆずりは城は天正3年(1575)正月落城。岸本城、要害城はこの前後に落城したものと思われる。」(註5)と岸本城の落城時期を推定している。

以上のような先学の研究と表面観察をふまえて発掘調査を実施した。

発掘調査はまず北側斜面にT-1(1×43m)を設定し、築城当時の地形と土層観察を試みた。(第4図)その結果、暗茶褐色土層から弥生式土器、サヌカイト製の石鏃などが出土し、このトレンチにおいて整地層を確認した。(第8図)(図版14-1)本丸址と推定される1郭にはT-2(1×45m)、T-3(1×52m)を直角にクロスさせることによって土層観察を試み、併せて2郭、3郭の平坦部及び斜面の土層観察を行った。(第4図)その結果、1郭の平坦部縁辺に明瞭な整地層を確認した。(第9図、10図)(図版11-1、2、12-1)このことは1郭平坦部が全て地山削平でなく、造成によって平坦部縁辺が拡張されていることであり、全面発掘調査における表土排除への知見を得た。こうして全面発掘調査を行った結果、1郭では建物、土壙墓、土壙、柱穴、2郭では柱穴列、竪穴住居址、3郭では建物、溝、柱穴を検出した。附属する遺構として登坂路、階段状遺構、堀などを検出した。(第7図)

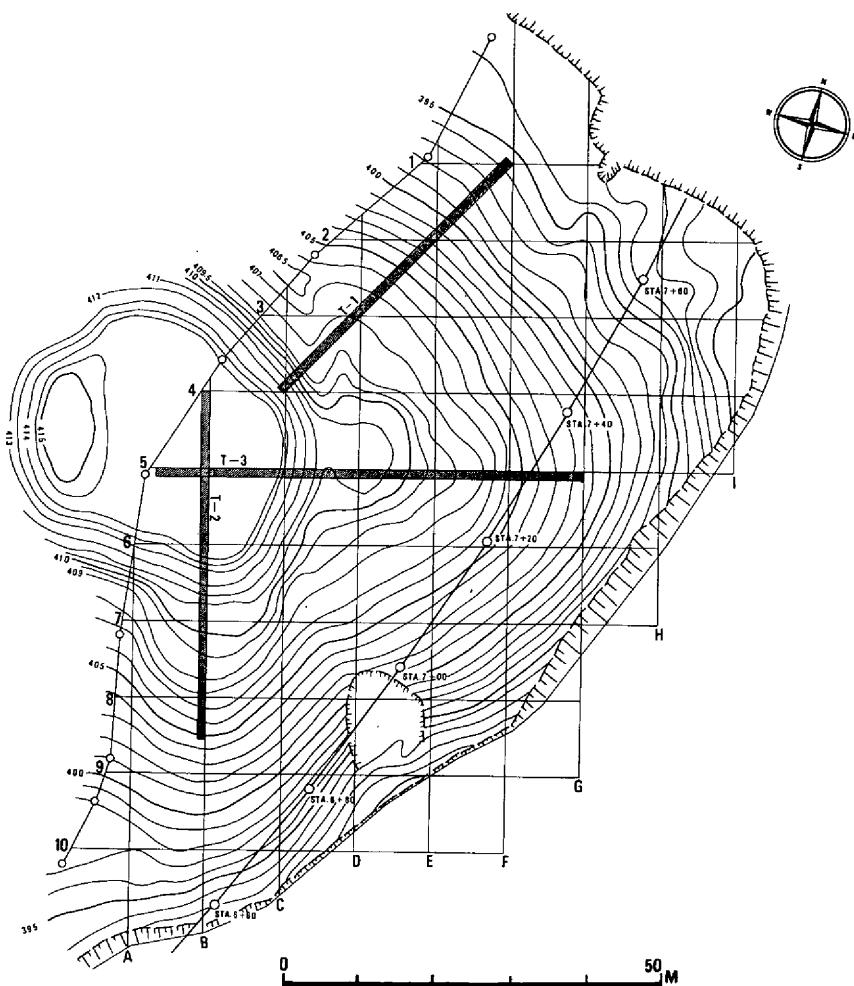
このように岸本城址の発掘調査は城址に伴う遺構の他に土壙墓、竪穴住居址を検出するなど予想外の成果を得た。以下順次その内容について述べる。

第1節 城址に伴う遺構

1、第1郭 (第5図～7図) (図版2、3、4)

1郭は本城址の最高所に位置し、本丸に相当する郭である。表面観察における面積は約650m²あり、最大面積を所有する遺構でもある。発掘調査はT-2、T-3調査による結果をもとに進めた。平坦部縁辺にみられた整地層は、T-2においては旧地表土(黒色土)の上に黄色ブロックを含む黄黑色土、灰黑色土、黒色土などを使用し、T-3では地山の削平によって表わされた黄色地山土(第3紀

岸本城址(75)



岡山県阿哲郡哲西町大字大竹地内

岸本城 (STA 6+600)
(STA 7+600.0)

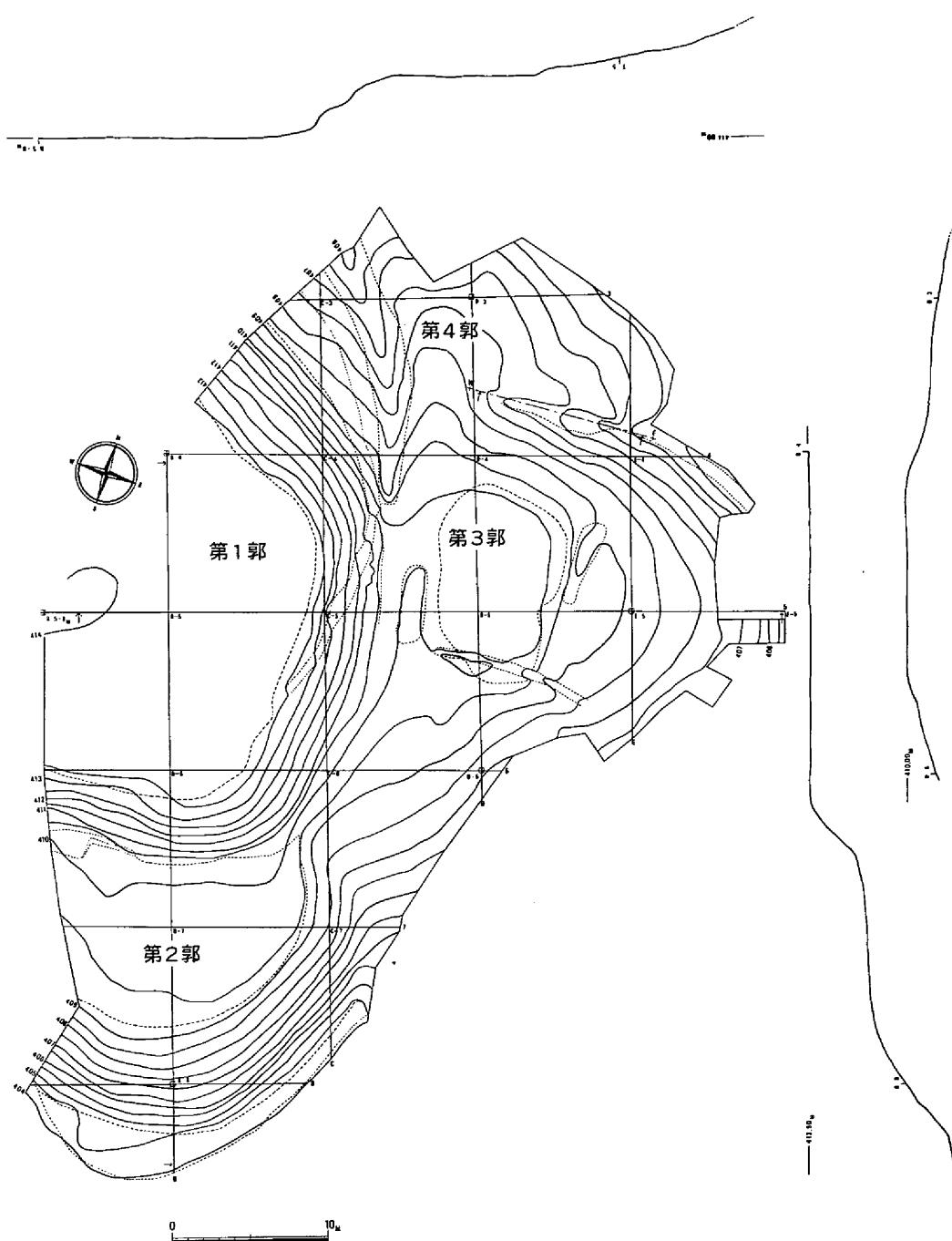
第4図 岸本城トレーニチ、グリッド設定図(調査前) ($\frac{1}{1000}$)

層)の上に黄褐色土、黒色土、黄茶色土、淡黄褐色土によって整地されていることが判明した。この整地は1郭平坦部を拡張することによって城としての形態を整えるということが第1目的であり、併せて平坦部縁辺を急峻にすることが含まれていたと考えられる。

a、建物I(第7図、12図)(図版3-2、4-2)

1郭のほぼ中央部に位置する掘立柱建物である。遺構の一部は用地外にかかるため規模不明である。検出された柱穴からみて2間×2間あるいは2間×3間の建物を推測させる。柱穴間心々距離は南北列が270cm、380cm、東西列は230cm、280cmを測る。柱穴掘り方は20cm～50cmを測るが、柱痕跡は20cm

岸本城址(75)

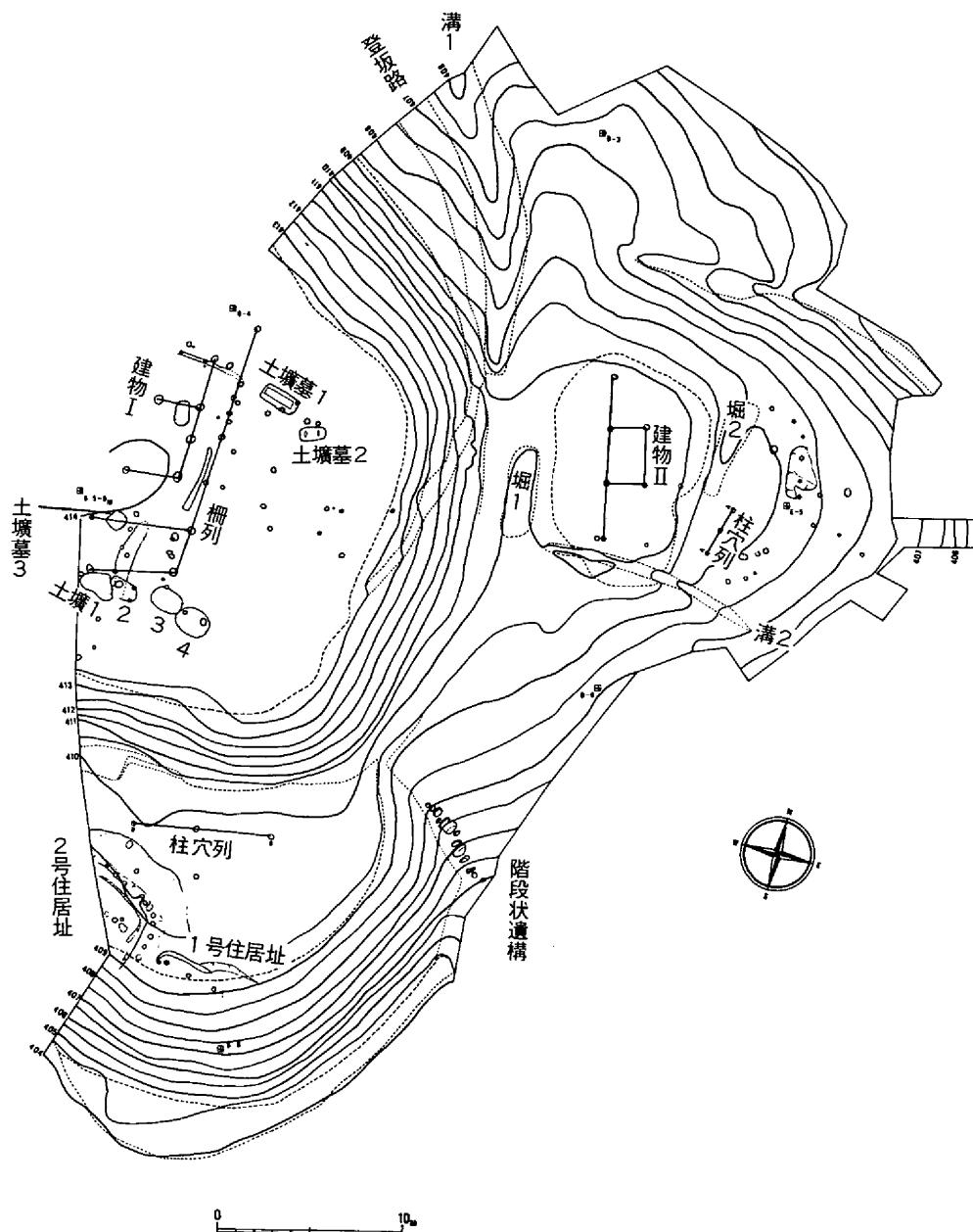


第5図 岸本城グリッド設定図(調査後)

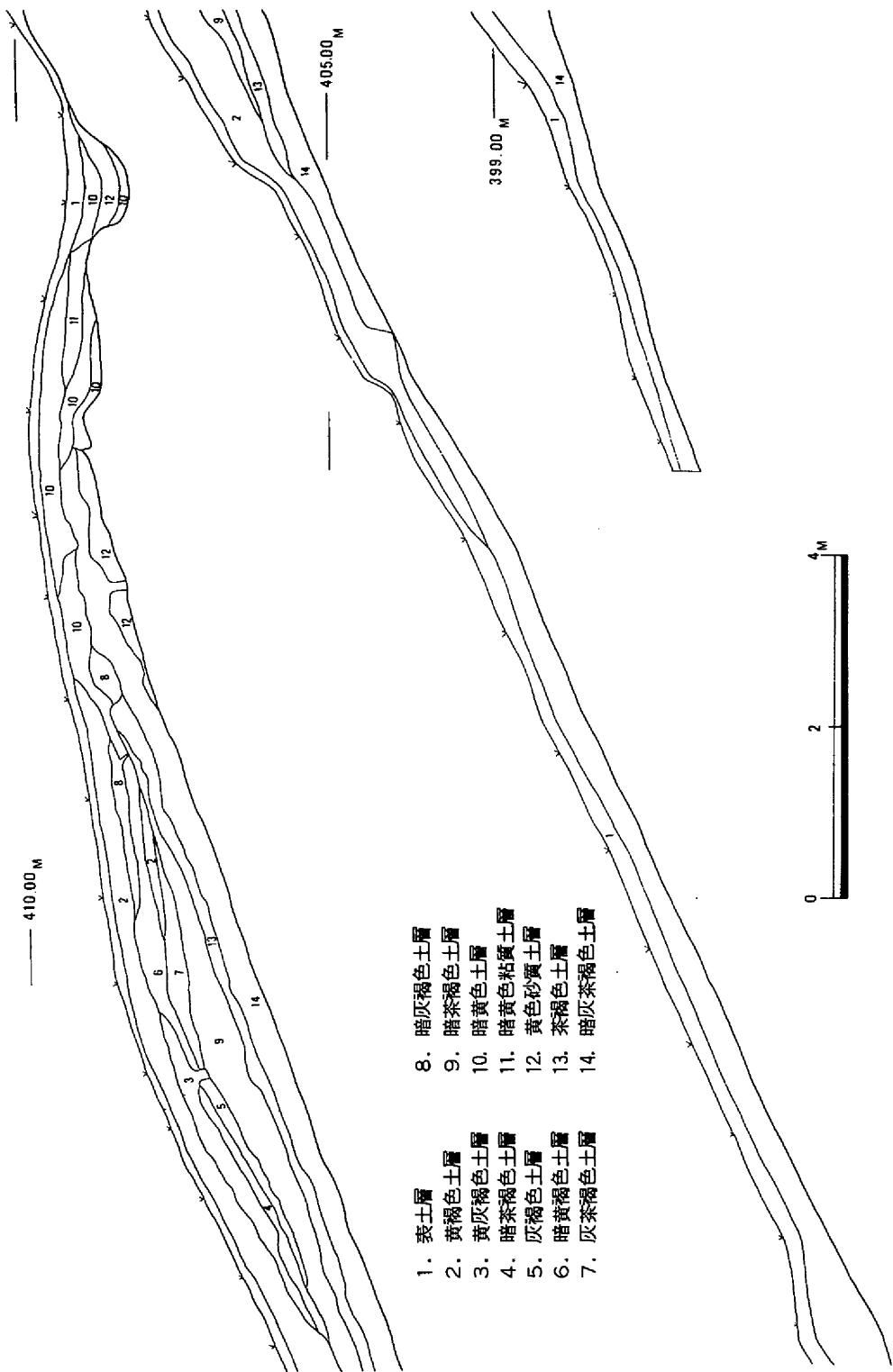


第6図 岸本城地形測量図（調査後）(1/400)

岸本城址(75)

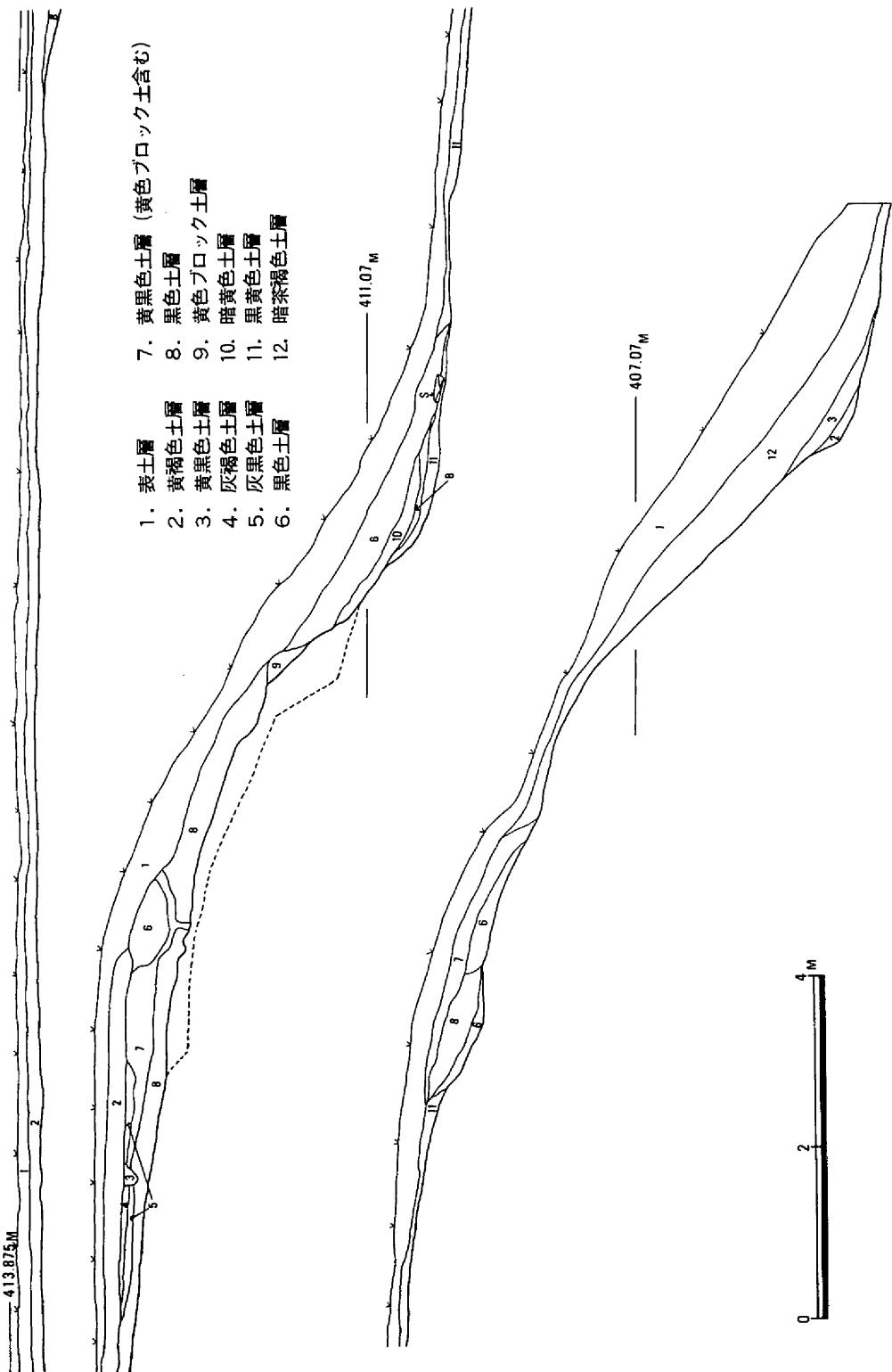


岸本城址(75)



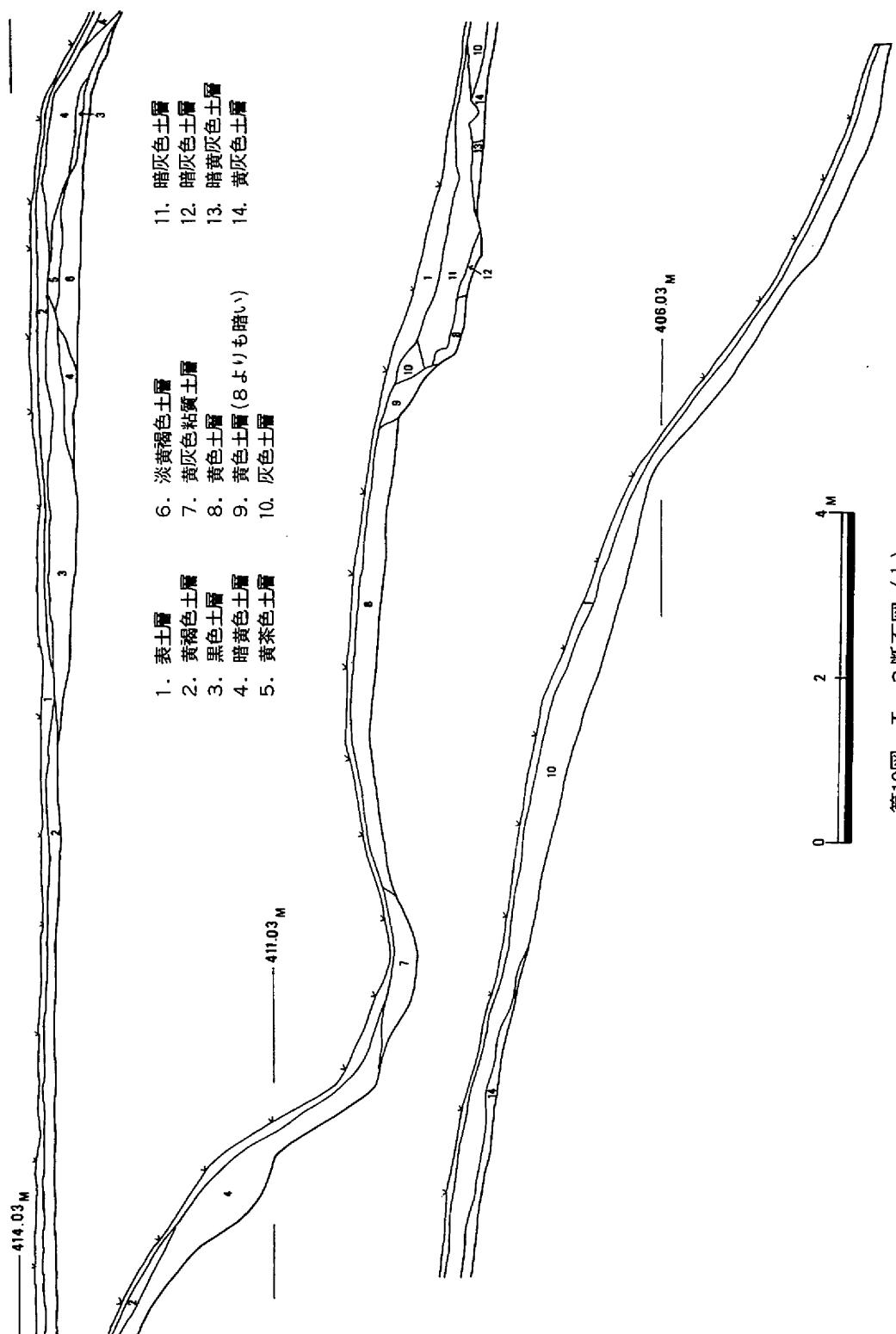
第8図 T-1断面図 (1/50)

日本城址(75)



第9図 T-2断面図 (80)

日本城址(75)



第10図 T-3断面図 ($\frac{1}{50}$)

程のものばかりである。出土遺物はない。

b、柵列I（第7図、12図）（図版3—2）

建物Iの東面と南面にみられる。柱穴は20cm～30cmを測り、深さは20cm～60cmを測り一定していない。柱穴間心々距離は約300cmを測る。この遺構は城址に伴うものと思われる。出土遺物はない。

c、登坂路（第7図）（図版2—1、9—1）

1 郭東側斜面に北から南に向けて登る幅60cm～100cmの登坂路が検出された。この遺構は下方に存在したと思われる居館と3郭から1郭に登坂するためにつくられた路で、地山斜面をL字状に掘り込んでいる。登坂傾斜角度は約20°である。出土遺物はない。

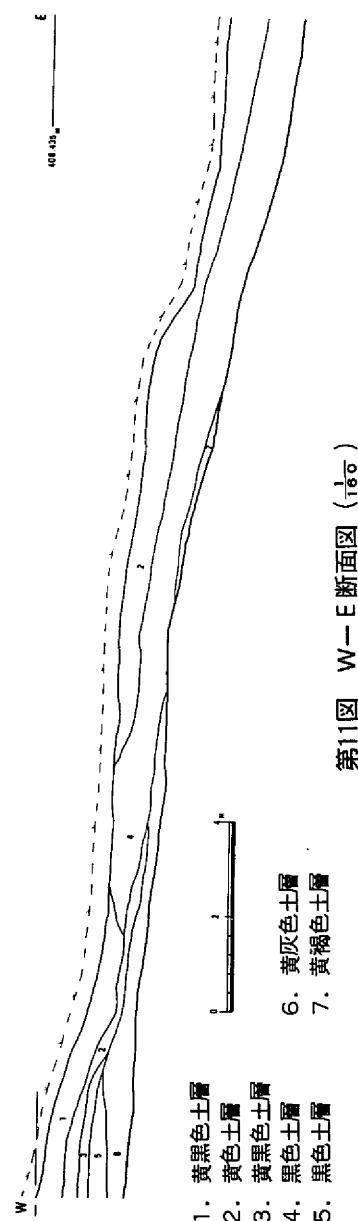
d、溝I（第7図）（図版10）

1郭の北東斜面に検出された溝1は南東から北西に流下する。遺構の大部分は用地外に存在すると思われるが、今回の発掘調査では長さ4.6mを検出するにとどまった。溝は1郭の北東斜面と東斜面の交わる位置から開始しており、ここから北西に傾斜を強めて流下していく。溝の上端部はU字状に掘り込まれている。登坂路（標高410mの所）と接近しているため遺構検出の際には登坂路が一部消失していたが、本来は別につくられ明瞭な区別があったと考えられる。溝の規模は上端部で幅100cm、深さ60cmを測り、中程（標高407.5mの位置）で幅200cm、深さ60cm、下端部で幅300cm、深さ70cmを測る。（いづれも最大幅と深さ）雨水溝としての機能と併せて防禦にも利用できる遺構である。出土遺物はない。

e、柱穴（第7図）（図版3—2）

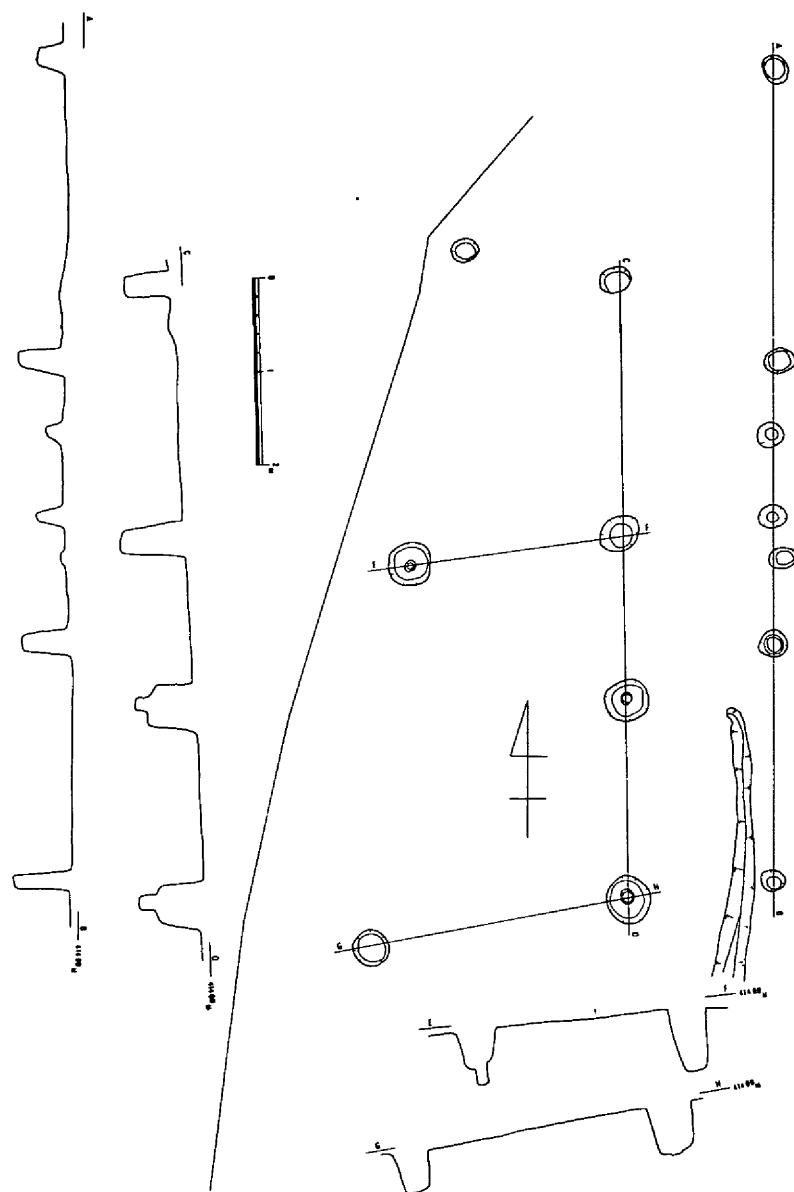
1郭では柱穴が多数検出された。柱穴は地山削平面と整地層から掘り込んでいるものの2種類が認められ、城址に伴うものと考えられる。柱穴掘り方は20cm～30cm、深さは10cm～40cmを測る。検出された柱穴から建物にまとめることができなかった。出土遺物ない。

2、第2郭（第5図～7図）（図版5、6）



第11図 W-E断面図 (1/10)

岸 本 城 址 (75)



第12図 建物I実測図 ($\frac{1}{60}$)

2郭は1郭の南側斜面下に位置し、1郭との比高差は約4mを測る。西側部分が若干用地区外になるが、ほぼ2郭の全容を表わしている。2郭は地山削平によって、1郭との間の斜面勾配を急峻にしており、約35°の角度を有する。また、この郭の南から東側に面する斜面は約50°という傾斜角度をもち、防禦は堅固となっている。このように急峻に築成された2郭平坦部には柱穴列しか検出されなかった。なお、東側斜面に13段の素掘り階段状遺構が検出された。

a、B—B'柱穴列(第7図) (図版5—1)

2郭平坦部と1郭南側急斜面の境には平坦部形成時に地山を掘り込み、角度をつけるという配慮が認められた。B—B'柱穴列は築成時配慮された平坦部の中央より少し北に東西に3個検出された。柱穴掘り方は西から22cm、30cm、40cmを測り、柱痕跡も10cm、20cm、30cmと不揃いである。この柱穴列は1郭を防禦するための柵状構築物あるいは城内への侵入者迎撃のための構造物であろう。出土遺物はない。

b、階段状遺構(第7図) (図版9—2)

2郭の東側斜面に検出された。2郭の南側斜面下(標高404.5m)に幅約1m～3mの犬走り状平坦面が廻っている。ここから2郭あるいは3郭に登るためと推定される階段状遺構が検出された。遺構は地山をL字状に幅約30cm～80cm、深さ約5cm～20cmを削平してつくっているが、急斜面の所だけ設けていたようである。13段検出できた。出土遺物はない。

3、第3郭(第5図～7図) (図版7、8)

3郭は1郭の東側斜面下に位置し、1郭との比高差は4mを測る。平坦部はほぼ長方形(8×10m)を呈し、東、南西側に堀、溝をもつ。3郭は地山削平によって平坦面をつくっており、この平坦部で掘立柱建物が1棟検出された。この3郭は北は二本松方面、東は四日市方面、南は岸本方面を望むことができる。

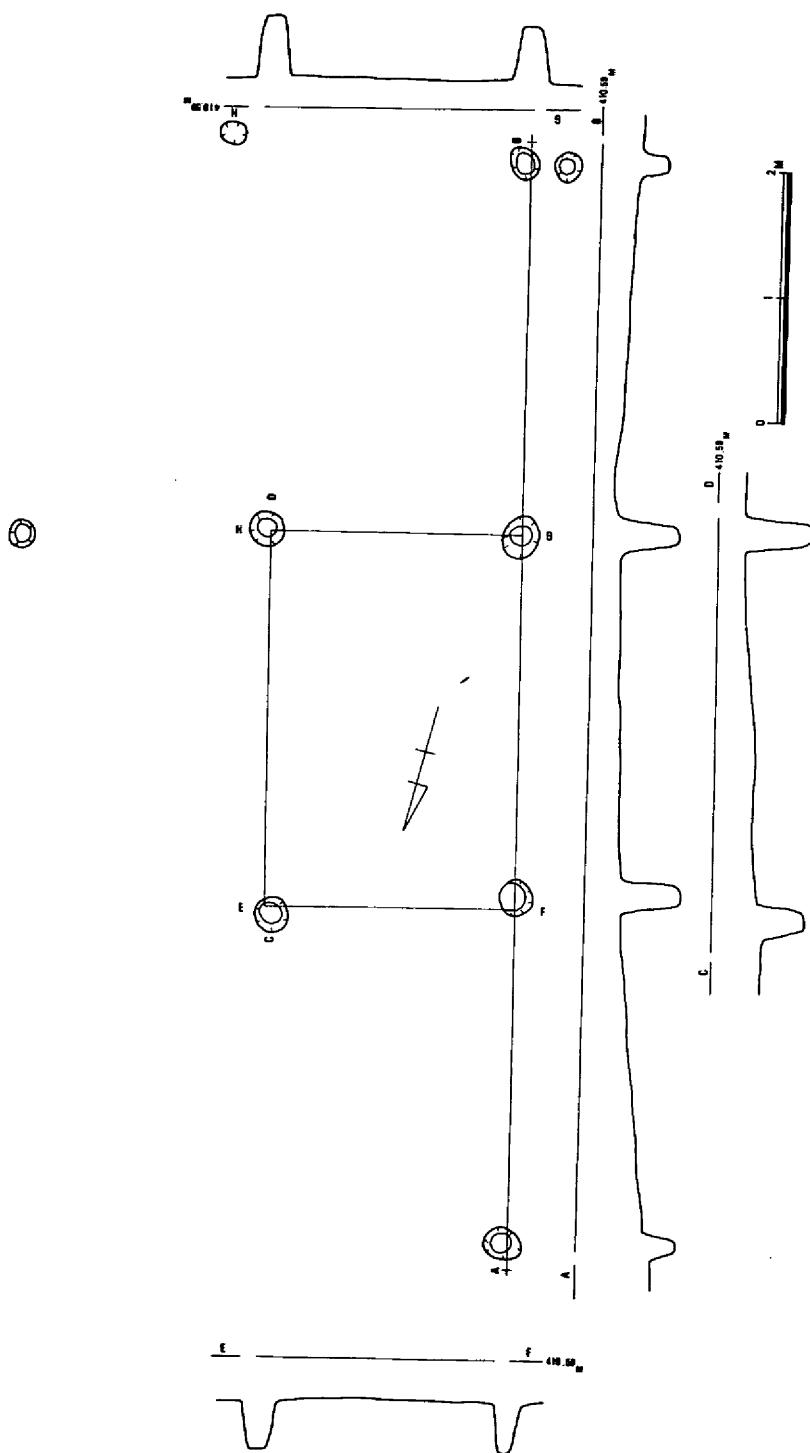
a、建物II(第13図) (図版7—1)

3郭の中央平坦部に建物が検出された。棟方向はN11°Wで1間×1間の建物である。梁間は200cm、桁行は300cmを測る長方形の建物である。柱穴掘り方は30cm、深さは20cm～30cmを測る。また、この建物の西側桁行部分の両側に柱穴が1個ずつ検出された。北側の柱穴は掘り方20cm、深さ20cmを測り、柱穴間心々距離は260cmである。南側の柱穴は掘り方30cm、深さ25cmを測り、柱穴間心々距離は290cmである。この2個の柱穴は建物IIに附属するものであろう。出土遺物はない。

b、堀I(第7図) (図版7—1)

1郭東斜面の下端部に幅1.8m、長さ5m、深さ40cmを測る長椭円形の堀状遺構が検出された。遺構の埋土は黄灰色粘質土である。雨水がたまって第3紀層の流れた土が沈殿している状態を示している。

岸本城址(75)



第13図 建物Ⅱ実測図 (16)

岸本城址(75)

平時は手洗いなどに使用されたが、非常時には1郭への防禦施設にもなったと思われる。出土遺物はない。

c、堀II(第7図)(図版8-2)

3郭の平坦部東斜面の北側に幅2m、長さ5.5m、深さ0.2m~0.5mを測る堀状遺構を検出した。北側部分は保存状態が悪く、発掘当初は溝状遺構になるものと思われたが、最終的には堀状になった。出土遺物はない。

d、溝2(第7図)(図版7-1、8-2)

3郭の南側に西から東に向けて走行する幅約60cm、深さ5cm~40cmを測る溝が検出された。3郭に伴う遺構と思われる。出土遺物はない。

e、A-A'柱穴列(第7図)(図版8-2)

3郭の南東の低位平坦面に柱穴3個が検出された。柱穴掘り方は約20cm、深さ15cm~25cmを測る。柱穴間心々距離は140cmずつを測る。遺構の立地、柱穴規模から柵列の可能性が考えられる。出土遺物はない。

4、第4郭(第5図~7図)

表面観察では郭の確認ができなかったが、遺構の存在が推察されたためT-1トレーナーを設定した。T-1(第4図、8図)は1郭北側斜面から丘陵下端部まで設定したトレーナーである。このトレーナーで溝(幅160cm、深さ60cm)を1郭の裾部で確認した。この溝から19.4m下方(標高406m)に整地層(2~11、13層)がみられた。そしてW-E断面図(第5図、11図)においても同様の整地層が観察されたことから、この附近にもう1ヵ所、郭が存在することが確認され第4郭と称した。この郭はすべて盛土造成である。この盛土造成は旧地表土上に整地するのが大部分であるが、一度地表土を除去した後に整地するという方法もみられた。面積は約100m²と推定される。1郭との比高差は5.5mである。なお、平坦部には遺構が確認できなかった。出土遺物はない。

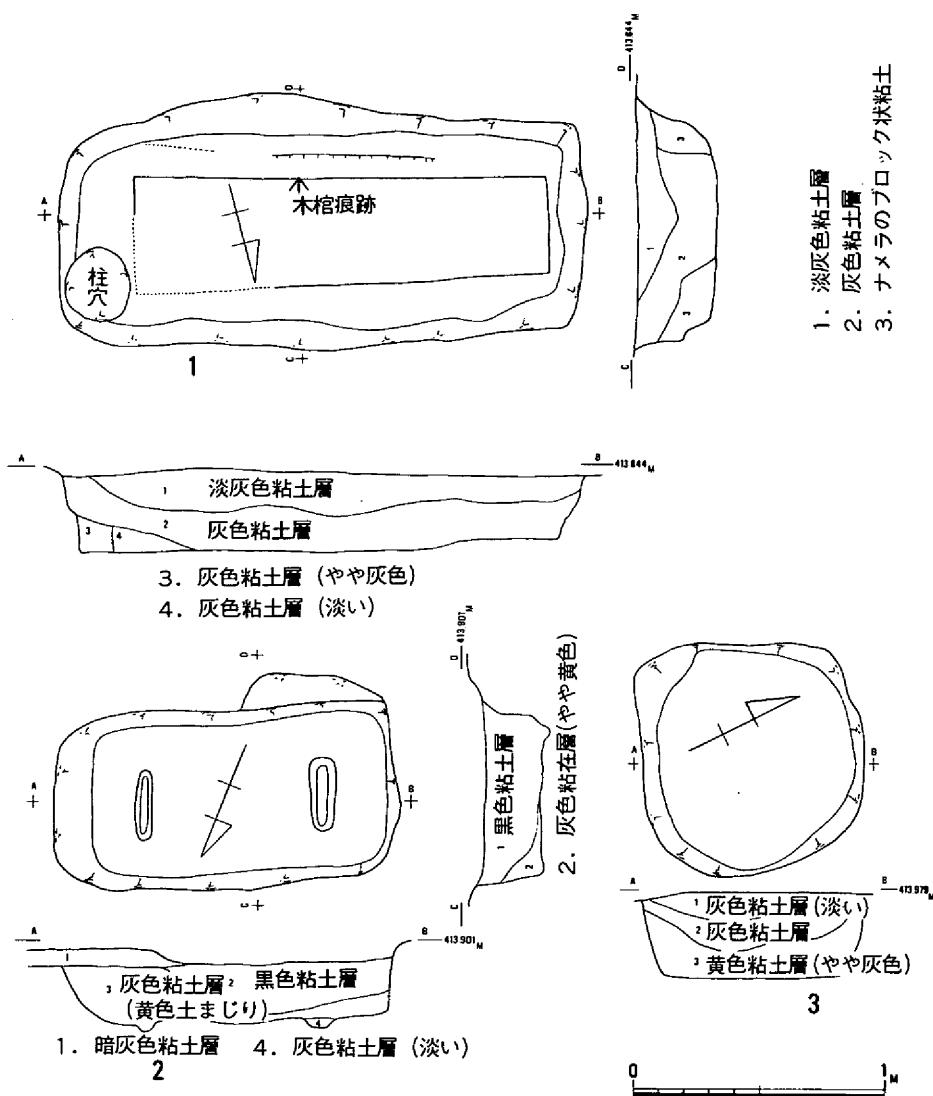
5、その他(第7図)

3郭の北東斜面(E-3区、E-4区)に幅1m、長さ約6mの武者走状地山平坦面が検出された。この平坦面は西の方向に続く痕跡がみられ、3郭と4郭の間を通るものと思われる。調査期間の関係で、遺構の全容を確認できなかった範囲である。なお、同様の武者走状地山平坦面は2郭の端部にも認められることから岸本城址の周囲には本遺構が廻っていたものと推察される。

第2節 その他の遺構

1. 土壙墓 (第14図) (図版12-2、13-1~4)

土壙墓は1郭の平坦部において3基検出された。土壙墓1は掘り方90cm×210cm、深さ31cmを測り、長方形を呈する。内部には40cm×160cmの木棺を埋葬していたと思われる痕跡が確認された。主軸方位はN 76°Wをとる。出土遺物はない。土壙墓2は1に近接して検出された。掘り方は70cm×135cm、深さ25cmを測り長方形を呈する。主軸両端に幅2cm~4cm、長さ25cmの小口板痕跡が墓底で確認され

第14図 土壙墓実測図 (1 ~ 3) ($\frac{1}{30}$)

岸本城址(75)

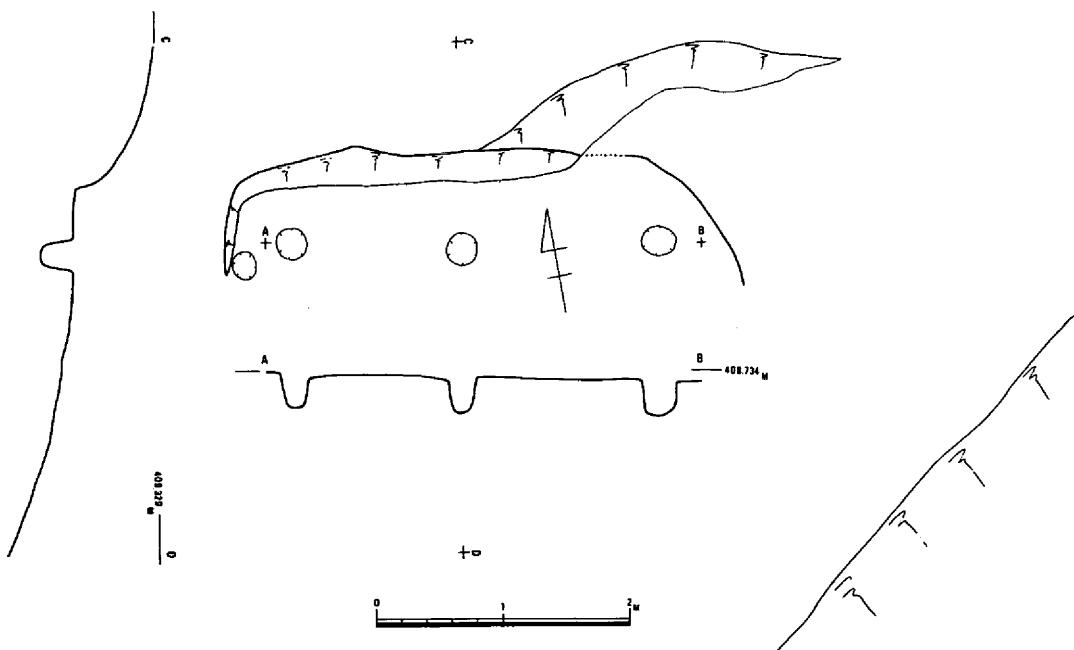
た。主軸方位はN 69° Eをとる。出土遺物はない。土壙墓3は1郭平坦部の西に位置する。掘り方は90cm×93cm、深さ35cmを測り隅丸方形を呈する。墓内において木棺痕跡や小口板痕跡を検出できなかった。主軸方位はN 26° Eをとる。出土遺物はない。

2. 土壙(第7図)

1郭の南西平坦部において、土壙が4基検出された。土壙1と2は切り合っている。掘り方は約1m×2m、深さは10cm～20cmと浅い。出土遺物はなく、土壙の時期、性格については不明である。

3. 1号住居址(第15図) (図版14—2)

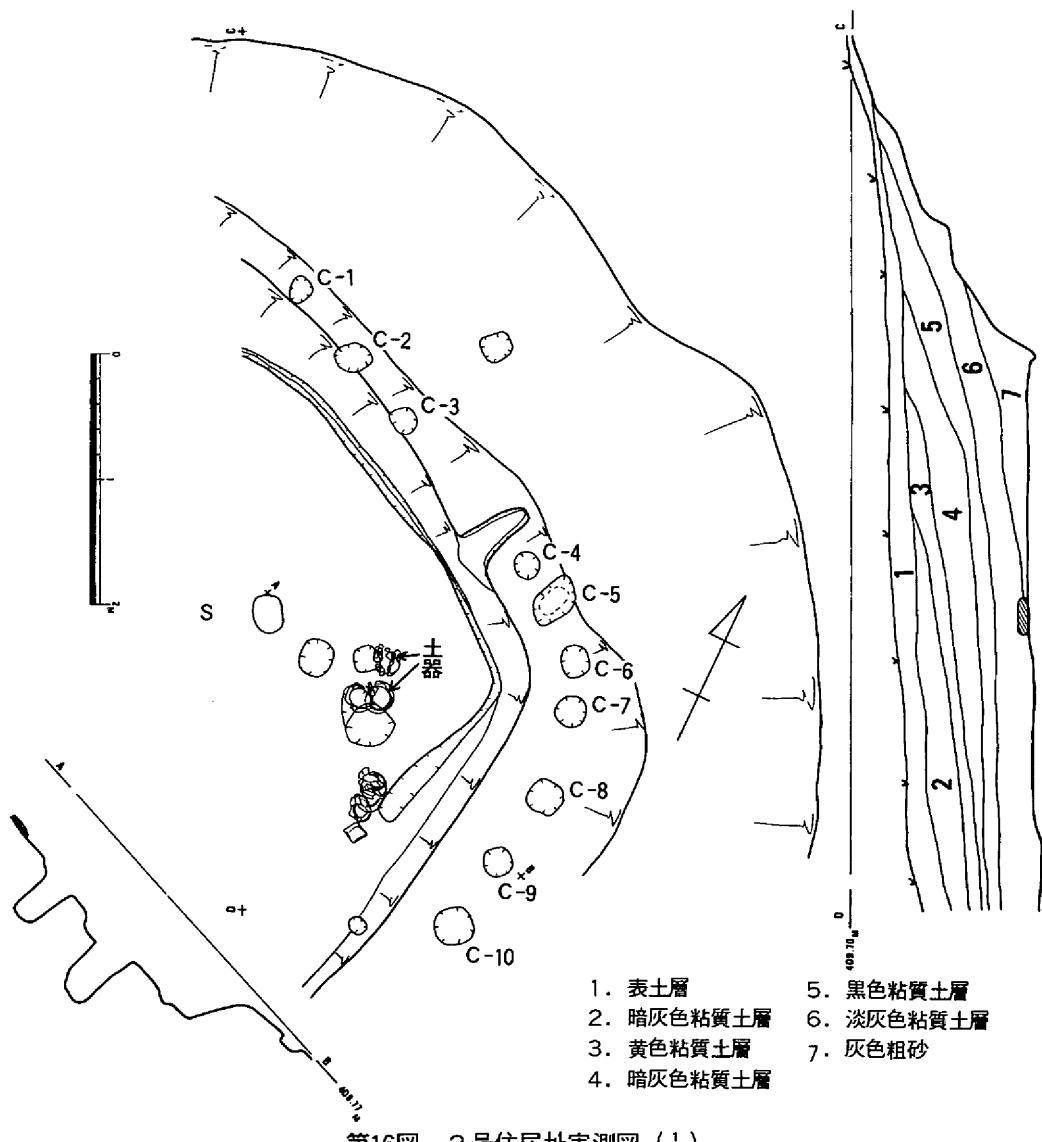
2郭の平坦部縁辺はT—2トレンチにおいて整地層を確認したが、この整地層は竪穴住居址の上に盛土することによって平坦部縁辺を形成し、併せて急峻にしていることが判明した。この1号住居址は整地層を除去した後検出されたものである。住居址は地山を掘り込んでつくられているが、保存状態は悪い。検出された遺構は北壁部分と柱穴だけであるが、規模は1辺が約3.5mを測る隅丸方形の竪穴住居址である。現存する壁高は20cmで、壁体溝はつくられていないようである。内部にはこの住居址に伴うと思われる柱穴(掘り方20cm～25cm、深さ20cm)が3本検出された。遺物は埋土内から弥生式土器片(甕の胴部片)が1片のみ出土した。弥生時代後期のものと思われ、この住居址の時期決定の参考になろう。

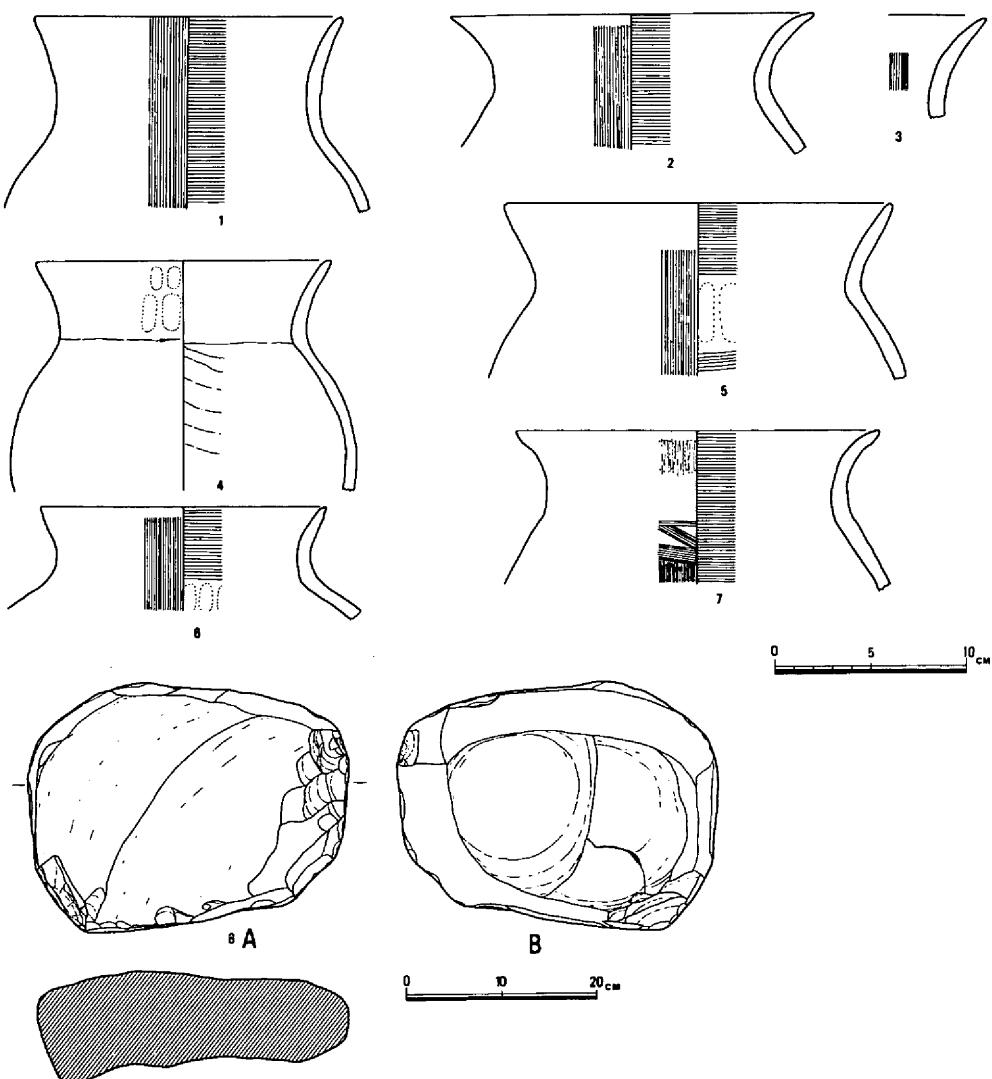


第15図 1号住居址実測図 (1/50)

4、2号住居址(第16図、17図)(図版15、16—1)

2郭平坦部の南西隅において検出された。遺構の約半分は用地外に存在するが、一部は築城時に削平をうけている。住居址は地山を掘り込んでつくられており、北壁は床面まで3段の掘り込みが確認され、その深さは120cmにも達する。1辺は北壁体溝から推測して3.5m~4mの隅丸方形を呈するものとと思われる。内部には柱穴が2本(掘り方25cm、深さ40cm、50cmを測る)が確認され、幅10cm、深さ5cm~10cmを測る壁体溝が検出された。また、住居址の北東コーナーから約1m北寄りの壁に幅30cm、長さ60cm、深さ約30cmを測る煙出し状遺構が検出された。しかし、カマドの設置痕跡が認められないこと、床面周囲に焼成を受けた形跡が全く無いため、遺構の性格は不明である。この住居址は

第16図 2号住居址実測図 ($\frac{1}{50}$)

第17図 2号住居址内出土遺物実図 ($\frac{1}{4}$, $\frac{1}{8}$)

前述したように地山を削平した掘り込みが外側に確認されたが、下段掘り込みにおいて柱穴（掘り方 $20\text{cm} \sim 30\text{cm}$ 、深さ $10\text{cm} \sim 20\text{cm}$ を測る）が10本検出された。柱穴C—5を除いて $50\text{cm} \sim 100\text{cm}$ 間隔で存在し、この住居址を構成する柱穴群と考えられ、本住居址の構造を知るうえで重要である。出土遺物からみて古墳時代後期（6世紀中葉～後葉）に構築したものと思われる。

出土遺物

土師器

住居址床面から出土したが、復元すると7個体分あることが判明し、図示した。形態はいづれも甕で

あるが、胴部下半から欠損しており、器形の詳細は不明である。

口縁径は15cm前後のもの(1、4、6)と20cm前後(2、5、7)の2種類がみられる。形態はいづれも頸部から湾曲しながら外反し、端部は薄くなるものばかりである。器外面は縦位のハケメを口縁端部付近から施すもの(1、2、6)、頸部から施すもの(3、5)がみられる。4は指ナデ整形が施され、頸部には指頭圧痕がみられる。7の頸部は指ナデ整形後ハケナデされ、胴部は上からハケメが横、斜、横そして縦位に施されている。器内面は横位のハケメを全体に施すもの(1、2、7)と頸部のみ指頭圧痕を有するもの(5、6)がある。4の胴部は指ナデによる整形がみられた。1~7の胎土は砂、石英粒など混入物が多く、焼成も悪い。

石器

石皿状の石器が床面から1点出土した。26cm×34cmを測り、両平坦面に磨滅痕がみられる。A面は周辺部に調整打痕がみられ、平坦面の大部分に磨滅痕が観察される。B面は磨滅が著しく、相当使用されていたことがうかがえる。特に中央部の磨滅が著しい。石材は流紋岩と思われる。

第3節 遺 物

1、表面採集、トレンチ内出土物(第18図1~9、28)(図版19—1~9、20—1~6)

1は表面採集、2、4~9、28はT—1の9層(暗茶褐色土)、3はT—2の表土層で出土した。1~6、8は甕である。1は口径26cmを測る。頸部から「く」字状に外反し、口縁端部は上下に拡張する。端部外面には3条の沈線がみられ、胴部外面はヨコナデ、内面は指頭整形痕が頸部下までみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土は砂、石英粒などを混入している。2は口径17cmを測る。頸部から「く」字状に外反し、口縁端部は上方に拡張する。端部外面には浅い退化凹線が3条施され、内面にはヨコナデがみられる。胴部外面には縦位のハケナデ、内面は指頭整形がみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土には細砂、石英などの混入物がみられる。3は頸部から「く」字状に外反し、口縁端部は上下に拡張する。端部外面には浅い3条の沈線、内面にはヨコナデがみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土には雲母、砂などの混入がみられる。4は口縁端部外面に浅い沈線が3条みられる。色調は黄灰色を呈し、胎土には石英、細砂の混入がみられる。5は口径19.5cmを測る。頸部から「く」字に外反し、口縁端部が上方に拡張する。頸部外面には3条の凹線がみられる。内面には頸部近くまで横位のヘラケズリがなされている。色調は黄褐色を呈し、胎土には細砂、石英粒を含むが比較的に精良な粘土を使用している。焼成は良好。6の口縁端部外面にはヘラ状工具による沈線が6条みられる。色調は灰色を呈し胎土には石英粒、砂の混入がみられる。7は壺の頸部付近である。頸部外面は縦位のハケナデ後、斜位の凹線を施している。胴部外面は斜位のハケナデ、内面は指ナデである。色調は灰黄色を呈し、胎土には石英粒、雲母が混入している。8は口径17cmを測る。頸部から「く」字状に外反し、口縁端部は上方に拡張する。端部外面には3条の凹線が施され、内面はヨコナデされている。頸

部より下位は横位のヘラケズリがみられる。なお、頸部外面にススの附着がみられる。色調は赤褐色を呈し、胎土には細砂、石英その他混入物が多い。9は甕の底部である。底部直径 5.5 cm を測る。器外面にはヘラ調整がなされ、色調は暗灰色を呈する。胎土には細砂、石英を含む。28は石鎧である。a面は全体に調整剝離がみられるが、b面はポジティブな剝離面で縁辺部にのみ調整剝離が施されている。石材はサヌカイトである。重量は 1.42 g である。1～3、9は弥生時代中期後半、4～8は後期前半のものである。

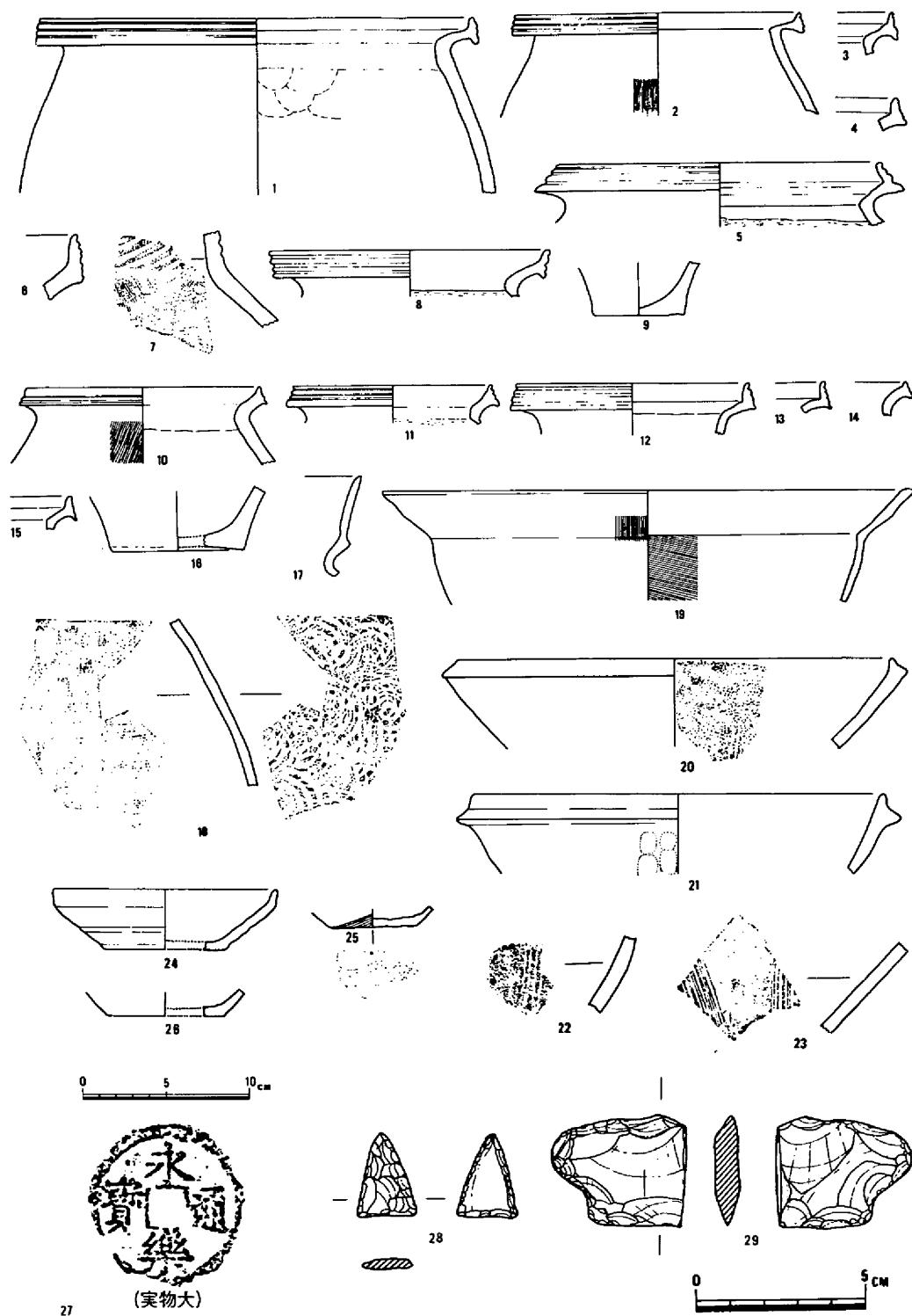
2、第1郭～3郭出土遺物（第18図10～27、29、19図）（図版19—10～17、図版20—1～5、7～10、21～23、24—1～4）

1郭～3郭の平坦部及び斜面において弥生式土器、打製石庖丁、土師器、須恵器、土師質土器、須恵系瓦質土器、陶器、古鏡が出土した。なお、これらの遺物は全て表土層から出土した。以下順次述べる。

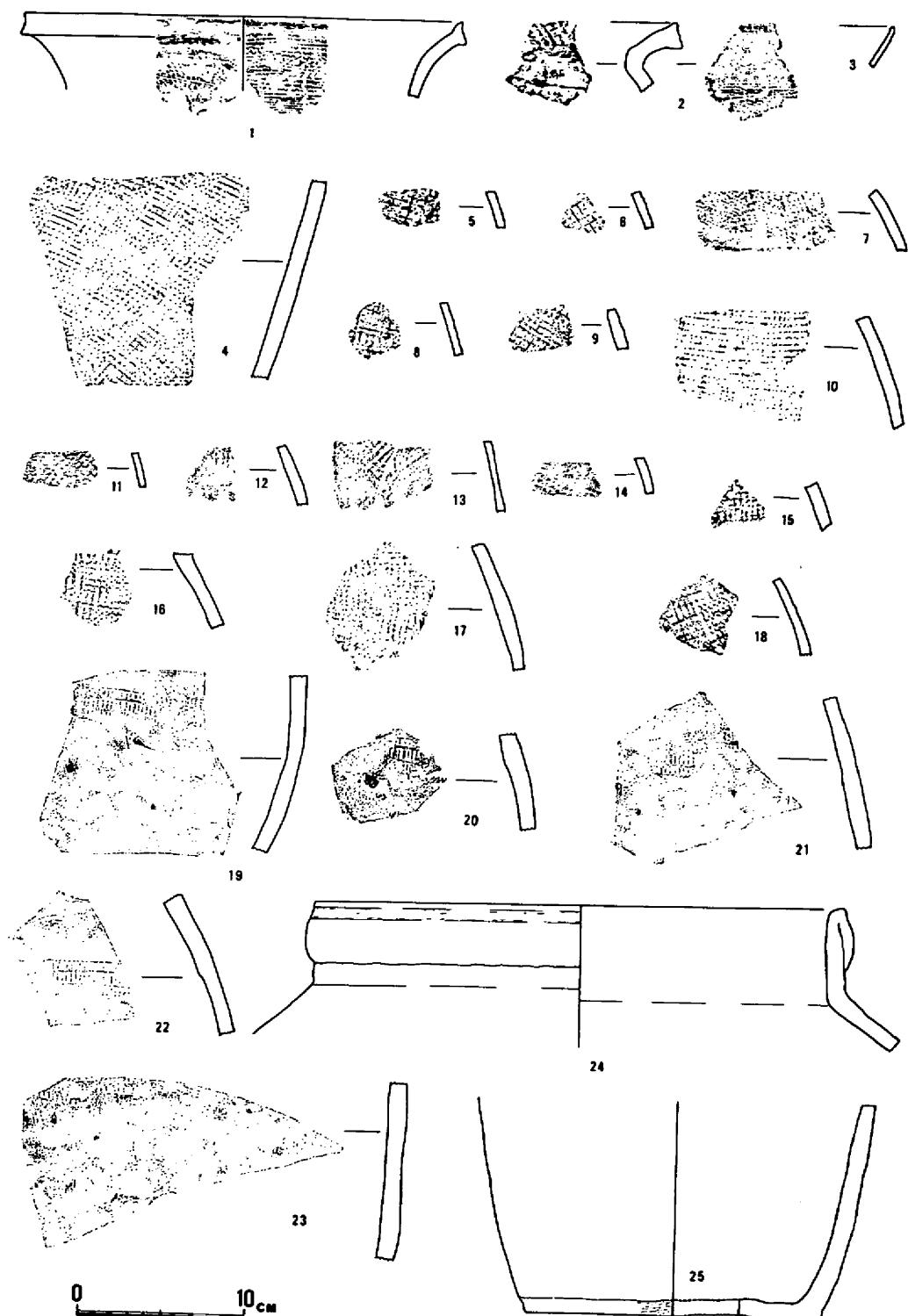
第18図10～15は甕の口縁部である。10は口径 14 cm を測る。頸部から「く」字状に外反し、口縁端部が上に薄く少しのびる。頸部には浅い 2 条の退化凹線、内面にはヨコナデがみられる。胴部外面は右斜位のハケナデ、内面は指ナデがみられる。色調は暗褐色を呈し、胎土には雲母、石英などが混入している。11は口径 12 cm を測る。口縁端部には 3 条の沈線がみられる。内面は頸部直下まで横位のヘラケズリが施されている。色調は暗褐色を呈し、胎土には雲母、石英が混入されている。12は口径 14 cm を測る。頸部からやや外反し、端部は上方に拡張する。端部外面には 3 条の浅い凹線がみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土には石英、雲母、砂などが含まれている。13は端部が上方に拡張した口縁部である。端部外面には 4 条の浅い沈線がみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土には石英、雲母の混入がみられる。14の口縁端部外面はヨコナデされ、頸部内面にはヘラケズリが施されている。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂、雲母、石英の混入がみられる。15は口縁端部が上下にやや拡張する。端部外面には 2 条の浅い沈線がみられ、内面は頸部までヨコナデされている。色調は黄褐色を呈し、石英などが混入している。16は甕の底部である。底部径は 8 cm を測る。外面にはヘラみがきが施され、内面はヘラケズリがみられる。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂、石英粒などが混入している。17は壺の口縁部である。頸部から「く」字に外反し、上方に大きく拡張するもので、二重口縁といわれるものである。土器の内外面とも剝離が著しく、調整痕は不明である。色調は黄灰色を呈し、胎土には砂が多く、焼成は悪い。18は須恵器で甕の胴部片である。内面には明瞭な青海波を残し、薄手につくられている。色調は表面が黒色、中は茶褐色を呈し、胎土は精製粘土を使用している。焼成は良好。19は口径 32 cm を測る土鍋である。口縁部は強く外方にのび、端部はナデて平坦にしている。頸部表面には縦位、胴部内面には斜位のハケナデがみられる。なお、胴部外面には煮沸痕がみられる。色調は暗黄色を呈し、胎土には砂、石英粒などが混入している。焼成は悪い。20～23は捕鉢とコネバチである。20は口径 26 cm を測る。内面には 6 条のカキメが下から上に施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂、石英粒が混入している。焼成は悪い。21は口径 24.8 cm を測る。口縁部に幅約 1 cm の鶴がついている。表面は指頭整形痕、内面はヨコナデがみられる。色調は暗茶色を

呈し、胎土には砂、石英粒が混入している。コネバチと思われる。22は内面に6条の縦位のカキメがみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土、焼成とも悪い。土師質である。23は内面に6条が一単位の縦位カキメが施されている。外面は縦位のハケナデと指頭圧痕がみられる。色調は外面が淡黄色、内面が黒色を呈する。胎土には砂、石英その他混入物がみられる。瓦質である。24~26は土師質の碗である。24は口径13.5cm、器高3.6cmを測る。口縁部はほぼ直口し、体部外面はヘラ調整がみられる。底部はヘラケズリである。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には砂の混入がみられる。25は底部が糸切りで、一部底部外にも痕跡を有する。色調は暗茶色を呈し、胎土には石英などを含むが精良な粘土を使用している。26は色調が黄灰色を呈し、精良な粘土を使用している。27は中国明代の鋳造貨幣である。損傷が激しく、保存がよくない。29は打製石庖丁である。横長の剝片を素材としており、a面、b面ともポジティブな剝離面がみられるが、縁辺部には調整剝離が施されている。刃部は直線的なものと思われる。なお、両端には紐かけのための抉りがみられる。計測最大値は4.0cm(横)×3.3cm(縦)×0.7cm(幅)である。石材はサヌカイトで、重量は13.0gである。第19図1、2、4~18は亀山焼と呼ばれている土器である。器形は全て甕である。1は口径26cmを測る。口縁端部は上下に拡張し、ヨコナデされ、頸部には粗い縦位のハケメがみられる。内面は横位のハケメがみられる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には雲母、石英粒が混入している。やや硬質の焼き上りを示す。2は口縁部外面と頸部以下に格子の叩目が施され、胴部内面には粗いハケメが横、斜位にみられる。色調は灰色を呈し、胎土には石英粒が混入している。3は碗の口縁部で施釉がみられる。地肌は淡茶褐色を呈している。4は胴部片である。外面は格子の叩目がみられる。格子は3cm×3cmの正方形の板を使用したことがわかる。色調は暗灰色を呈し、焼成はかなり硬質である。7~8はいづれも胴部片である。外面は格子の叩目、内面はヨコナデやハケメがみられる。色調は灰黄色、暗灰色、黒色を呈しており、胎土には細砂、石英粒など多くのものが混入している。焼成はやや軟質である。19~23は日本製陶器で常滑焼と思われる大甕胴部片である。外面は指ナデ、ヘラケズリ調整がみられ、粘土のつなぎ目の部分を叩きしめるために押印がされている。内面は横位のヘラケズリ、指ナデ調整がみられる。色調は外面が灰茶色、黄緑色ないし赤褐色、内面は灰色を呈している。胎土には細砂、石英粒など混入物が多く含まれている。焼成は堅緻である。なお、19~23は同一個体と思われる。24、25は備前焼の大甕である。24は口径32cmを測る口縁部である。口縁部は直立するが、折り返して玉縁を形成する。この玉縁は下方に薄く、幅広く垂れ下がっており、外面には押えによる凹みがわずかにみられる。内面はヨコナデがみられる。色調は茶褐色を呈する。25は直径18cmを測る底部である。外面は指ナデがみられるが、底部との境は横位のヘラケズリがみられる。色調は茶褐色を呈する。なお、24、25は同一個体と思われる。その他項を設けていないが、図版24-3、3Aは外面にゴマがかかった暗灰青色の大甕胴部片が出土している。この陶器は備前焼に比べて胎土、重量などで異なる。製造元は不明である。天目茶碗片(図版24-4)が3郭付近の表土層から1点出土している。胎土には石英、長石、細砂を含む。胎土からみて日本製のものであろう。以上、岸本城から遺構に伴わない遺物の概要を述べたが、時期的には弥生時代中期後葉から室町時代までの幅がみられる。特に城址の年代を知る手がかりになるものとして、擂鉢、亀山焼、備前焼がある。

岸本城址(75)



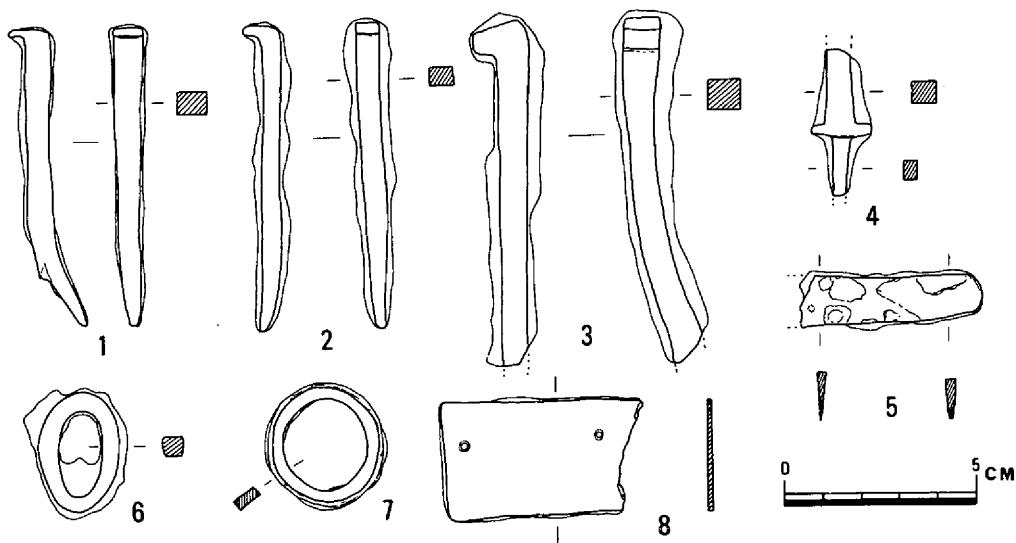
第18図 表面採集(1), トレンチ(2~9, 28), 第1~3郭(10~27, 29)出土遺物(1/2, 1/4)



第19図 第1郭～3郭出土遺物 (1/4)

3、鉄器（第20図）（図版24—5～12）

鉄器は本丸址と推定される1郭において7点（第20図1～5、7、8）、T—3トレンチで1点（第20図6）の合計8点出土した。1～3は建物に使用されたと思われる鉄釘であり、いづれも頭部を叩いて扁平にし、T字状に曲げたものである。1と2は完形で、断面は長方形を呈し、頭部は少し幅が広い。3は断面が正方形を呈し、頭部は少し幅が広い。1は全長7.8cm、頭部は1.1cm×0.8cmを測る。2は全長8.1cm、頭部は1.0cm×0.6cmを測る。4は鉄鍔で茎の部分である。5は小刀子と思われる。現存長は1.2cm×4.7cmを測る。6、7は刀装品の一部と思われる。6は断面が正方形、7は長方形を呈する環状鉄製品である。8は現存長が5.3cm×3.1cm×0.15cmを測る用途不明の鉄製品である。形態は長方形を呈し、中に0.1mm～0.15mmの穿孔が2個ある。これらの鉄製品は表土層から出土している。



第20図 鉄製品実測図 (1/2)

- 註1 (1)見坂山城
 (2)岩高城
 (3)万石城
 (4)土井城（中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施。文献に記載されていない城址。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告④収録）
 (5)豆木城
 (6)藤木城（中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査を実施した城址をいう。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告④収録予定）
 (7)藤木城（中国縦貫自動車道建設で発掘調査した城址を藤木城と呼称しているが、この城址の北西丘陵に本格的な城址が存在する。俗に茶臼山といわれ、文献に記載されている規模とも合致し、この城址が文献に

岸 本 城 址 (75)

表われる藤木城と思われる。(6)は藤木城に関連する砦の可能性があり、別名称を与えることが適當と思われる)

(8)西山城（要害城）

(9)岸本城

(10)育野城

註2 『備中集成志』九の巻古城之部 研文館吉田書店 昭和51年復刻刊行

岸本山城 大竹村

吉岡質休。同右京道秀。吉岡ハ菅家ノ餘裔ニテ越中国ノ在名也。尼子家軍将トシテ武功有。

註3 『古戦場備中府志』卷之二 吉備群書集成第5巻所収 吉備群書集成刊行会 歴史図書社 昭和45年復刻刊行

岸本山城 大竹村

當城主吉岡質休。同右近道秀。吉岡は菅家の餘裔にて越中の國の在名たり。尼子の軍將として武功傑出す。依而因州より褒賞を得て移城す。事跡東鑑陰徳太平記にあれば、繁きを恐れて不記。

註4 『阿哲郡誌』上巻 社団法人阿哲郡教育会 昭和4年

岸本城

野馳村大字大竹、二本松岸本山上にある古城趾にして、東西一町二十五間、南北一町一間あり。府志に曰く当城主は吉岡質休、同右近道秀にして、吉岡は菅家の餘裔、越中國の在名たり。尼子の軍將にして武功秀でたるを以て褒賞を得、因州より移りて之れに居りしと。

註5 『哲西史』哲西町 昭和38年 99頁引用

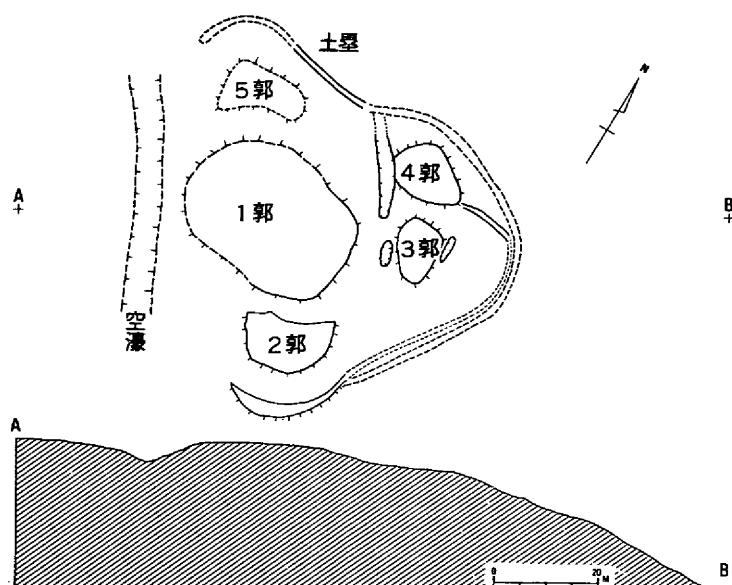
第3章 まとめにかえて

岸本城址の発掘調査における概要は第2章において述べた。城郭の形態は表面観察で往時の姿を大部分復元することができる。本城址においても同様で、発掘調査は本丸址と推定される第1郭と2つの郭を想定して調査を実施したものである。その結果、表土除去後の精査において城址に伴う多くの遺構を検出することができた。以下、岸本城址の調査成果をまとめてみたい。

1、城郭の形態と機能

城の形態は先学によって、各種に形態分類が試みられ、現在では3～5形式に分類される。（註1）岸本城址は立地面からみれば、平山城の範疇に入るものであり、築城方法は中世城郭に一般的にみられる方法であろう。城は中心郭をなす本丸とそれを取り巻く郭で構成され、背後は空濠で防禦するというもので丘陵全体を有効に活用しているといえよう。中国縦貫自動車道で記録調査した範囲は限定されることから細部は不明であるが、今回の発掘調査でその大部分を知ることができた。すなわち、第1郭は丘陵頂上部に位置し、本丸と推定される遺構である。頂上平坦部は地山削平によって形成されているが、縁辺部は整地されており、整備と防禦面は他の3郭に比較して優れてい る。1郭を囲む2～4郭は規模、内容において大差はないが、急峻な斜面（傾斜角度約50°）をつくり登坂困難な状態にしている2郭は防禦面で優れている。

3郭は櫓の役目をする掘立柱建物が1棟検出されたが、その展望は約250°が限界であり、眼前に攻撃してきた敵の動向を知るのが精一



第21図 岸本城縄張図 (1:500)

杯であったと思われる。なお、この建物の両側には柱穴が2個検出されているが、建物にとりつく柵状構造物であろう。4郭は全て盛土によって築成された郭である。南東部分では旧地表土上に盛土がみられず、黄色地山土の上に直接盛土されており、北西部は旧地表土上に盛土するという同一郭において造成方法が異なっている。直接に地山土に盛土した範囲は3郭が地山削り出しによって平坦部や、斜面を形成する際に削りとった部分であり、築城当初はこの4郭は存在しなかったと思われる。恐らく、毛利、尼子両勢力の攻防戦において3郭前面の防禦が弱いため補強された増郭と思われる。なお、未調査ではあるが北側に第5郭の存在を思わせる地形がある。そして4郭と5郭間の下位等高線には土塁が一部残っており、また武者走りの痕跡と思われる平坦面が所々に検出できたことから、恐らく2郭まで土塁が廻っていたものと思われる。なお、溝1は「縦堀」の機能をもつが、土塁の外まで掘削しているかどうか不明である。このように岸本城址は1郭と4郭は盛土による造成を行い、2郭と3郭は地山削平によって形成されていたことが判明した。1郭と5郭の内容が不明確であるが、掘立柱建物が数棟・柵列等が存在したことであろう。居館は城に近い低地に存在したものと思われ、二本松遺跡（註2）が有力な推定地と考えられている。

2、年代について

中世城郭の築城、廢城については文献に表わるもの、不確定要素が強いが文献が存在するもの、全く文献に記載されていないものがある。歴史的役割の大きかった城、大規模な城については、戦記、記録が残されているようであるが、出城、砦など中小の城址は年代決定が困難といえる。このような現状をふまえて調査を実施した。

a、出土遺物からみた岸本城

城址に伴う遺物として、備前焼、亀山焼、常滑焼、土師質土器、天目茶碗片、鉄釘などがみられた。量的には亀山焼片が多く、備前焼、常滑焼の大甕は各1個体分しかなかった。恐らく大甕は本丸で水甕として使用されていたのである。亀山焼は鎌倉時代後葉～室町時代前葉、土鍋、擂鉢は鎌倉時代後葉頃に比定できると思われる。備前焼大甕は備前焼特有の赤褐色を発光し、口縁部の玉縁も巾が広く、室町時代前葉の特徴とされるものに類似し（註3）、美濃、瀬戸系と思われる天目茶碗片、常滑焼とともに本城址の存在期間を知るうえで参考となる。また、1408年初鋸の永楽通宝など各地で生産された商品を使用しており、若干の時期差を考えて鎌倉時代後葉～室町時代前葉にかけて築城されていたと推察される。

b、文献からみた岸本城

第1章、2章において文献からみた岸本城の概要をみたが、築城から廢城に至る経緯は不明な点が多い。『古戦場備中府志』（註4）、『備中集成志』（註5）等では城主は尼子方の軍将の一人である吉岡質休、同右近道秀となり同一人名が記載されていることからほぼ誤りないとと思われるが、『古戦場備中府志』ではさらに「因州より褒誉を得て移城す」と具体的に城主が移城してきたことを記載し

ているが。『備中集成志解題』（註6）において河本一夫氏は『古戦場備中府志』の内容は「備中国城主の事績並に合戦記で史実の正鶴を失し」と批判していることからみて、因州からの移城は再検討しなければならないであろう。しかしながら、尼子の軍将であった吉岡質休、同右近道秀がこの岸本城に駐屯したと仮定すれば、出土遺物からみて既に城として整備されていたと思われる。

では、山陰の雄、尼子氏の軍将として記載されている吉岡氏とはどのような人物であったのか。文献では尼子氏が天文9年（1540年）に大内義隆氏に寝返った毛利元就氏を討つための戦闘に応援、参加した者は尼子一門、伯耆、備前、美作、播磨、備中、備後、隱岐、出雲、石見、安芸の諸城主とされ、これらの諸城主の他に多くの家臣が動員されたとしている。（註7）毛利氏を討ち取るために相当の兵力を動員したものと推察されるが、この時の尼子家臣団の中に吉岡姓がみえることから、吉岡質休もしくは一族に関係ある者と思われるが、それ以上の詳細は不明である。また、「武功有」と記載されているが、何時、何処での武功なのか全く不明である。吉岡氏の岸本城に移城については、三村元親による新見杜城の大改修は尼子氏の備中方面への南進策に対して、その防禦を強化するためと同時に、この城を中心に交通路の要所に支城（註8）をかまえて尼子方の侵入に備え、永禄8年～元亀元年頃までは尼子氏自身が毛利氏に滅ぼされたこともあって、容易に備中に再侵入することができなかったと思われる、吉岡氏の移城は天文年間～永禄8年の間に配属された可能性があるといえよう。一方、廃城時期についても詳細は不明である。『哲西史』において、天正3年に杜城が落城するが、岸本城などはこの前後に落城するとの見解がみられ（註9）、現在ではほぼ通説となっているが、発掘調査では勿論それを証明する根拠を見い出すことはできなかった。しかし、岸本城が天正3年頃まで尼子方として君臨するならば、孤立無援の状態で城を守っていたことになる。この時期の領主と家臣団は決して堅い絆で結ばれてはおらず（註10）、吉岡氏は永禄9年に尼子氏が毛利氏に滅ぼされるや在地勢力の三村氏と和睦したことであろう。一方、三村氏は県南の雄、宇喜多氏に主君が暗殺されたため（註11）、宇喜多氏を滅ぼすため南進しなければならず、岸本城などは眼中になかったと思われる。このような時代背景のもとで岸本城は天正3年頃まで存続したと推測される。

廃城時期が『備中兵乱記』（註12）に記載されている備中松山城、新見杜城の落城前後に毛利方に他の城址とともに攻略されたとするならば、三村元親の居城である備中松山城を落城させるための戦略であり、このような戦略の一つとして岸本城も攻撃されたものである。

3、城址に伴わない遺構、遺物

城址に伴わない遺構として住居址2、土墳墓3、土墳4が検出された。1号住居址は埋土内から出土した土器片から弥生時代後期のものと考えられ、2号住居址は床面附着の土師器から古墳時代後期（6世紀中葉～後葉）と思われるものが検出された。住居址は丘陵斜面に構築されたものであり、この丘陵にはまだ数多くの住居址が予想される。土墳墓は3基検出されたが、棺の内外から出土遺物が無く、主軸方位が異なるため、若干の時期差はあるかもしれないが、西江遺跡（註13）など土墳墓群を検出した遺跡の類例からみて、弥生時代後期のものと思われる。遺物はトレンチ、第1郭～3郭において弥生時代中期～古墳時代の遺物が出土したが、遺構に伴うものはなかった。恐らく、築城前に

はこの丘陵全面にかなりの遺構が存在したものと思われる。また、サヌカイト製の打製石庖丁が出土していることも注目すべきことである。遺跡周辺にみられる適当な石材で石器を製作する反面、この地方ではなかなか入手が困難な石材であるサヌカイトを使用していることをここでは指摘するだけにとどめたい。

4、最後に

岸本城址の発掘調査は範囲や検出された遺構数、遺物の量的制約によって、充分にその責務を果すことはできなかつた。不確定要素の多い中、中世城址の存続年代、遺構の性格を正確に把握するためには、城址、附属構造物、居館などを総合的に調査し、併せて文献とたえず比較しながら考察することが重要であろう。しかし、それでも歴史の流れの中でどのような在り方（役割）をしていたかを知るうえにおいて満足のいくものではない。共通の問題意識をもつ考古学、中世史、歴史地理学の研究者による総合的な研究によって初めて、権力闘争の拠点である城址の解明ができるのではないか。

註

- 註1 大類伸、鳥羽正雄「城郭及城址」『考古学講座』第9巻雄山閣 1929年
大類伸、鳥羽正雄『日本城郭史』雄山閣
小室栄一『中世城郭の研究』人物往来社
伊禮正雄「中世城館址の調査」『考古資料の見方<遺跡編>』柏書房 1977年
分類方法としては、山城、平山城、平城、沼城、水城、など立地条件によって細分する方法と縦張形態による方法がある。
- 註2 伊藤晃、山磨康平「二本松遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(22)』岡山県教育委員会 1977年
- 註3 間壁忠彦、間壁葭子「備前焼研究ノート(2) —中世備前焼の推移—」『倉敷考古館研究集報』第2号 1966年
間壁忠彦、間壁葭子「備前焼研究ノート(3) —備前焼窯址の分布と性格—」『倉敷考古館研究集報』第5号 1968年
- 註4 『古戦場備中府志』巻之二 吉備郡書集成第5巻所収 吉備郡書集成刊行会 歴史図書社 昭和45年復刻刊行
- 註5 『備中集成志』九の巻古城之部 研文館吉田書店 昭和51年復刻刊行
- 註6 註5に同じ
- 註7 山本清『新修島根県史』通史篇1 島根県 昭和43年 P.468~466を参照
家臣団の人名は『陰徳太平記』によるものを記載しており、そのなかで山中一党、神西、広田、桜井、原、吉岡、疋田、遠藤、池田、相良、大西、本田、平野、津森、松田とあり、吉岡姓がみえる。
- 註8 篠ノ巣、竹野城、角尾山城、朝倉城、粒根城などである。
- 註9 『哲西央』 哲西町 昭和38年

岸 本 城 址 (75)

註10 敗戦が濃厚になると家臣が敵を城内に手引きしたり長期戦では敵方の家臣団の切り崩し工作が盛に行われた。

註11 天文9年（1566年）、三村家親は久米郡惣村興禅寺で宇喜多直家の手兵、遠藤兄弟に暗殺された。

註12 『備中兵乱記』吉備群書集成第3巻所収 吉備群書集成刊行会 歴史図書社 昭和45年復刻刊行

註13 正岡睦夫、田仲満雄、二宮治夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(20)』岡山県教育委員会

1977年

図版1



1. 岸本城遠景（北東から）



2. 岸本城近景（東から）

図版2



1. 1郭・2郭全景 (東から)



2. 1郭・2郭・3郭全景 (北東から)

図版3



1. 1郭・2郭北側部分（東から）



2. 1郭遺構（建物I, 土壙墓など）(西から)

図版4



1. 1 郭南側斜面（南から）



2. 建物Ⅰ全景（西から）

図版5



1. 2郭全景（北から）



2. 2郭全景（東から）

図版6



1. 2郭南東斜面（北東から）



2. 2郭遺構（南から）

図版7



1. 3郭遺構全景（建物Ⅱ、掘1、溝2など）（西から）



2. 3郭全景（北から）

図版8



1. 3郭全景（南東から）



2. 3郭と東斜面柱穴（東から）

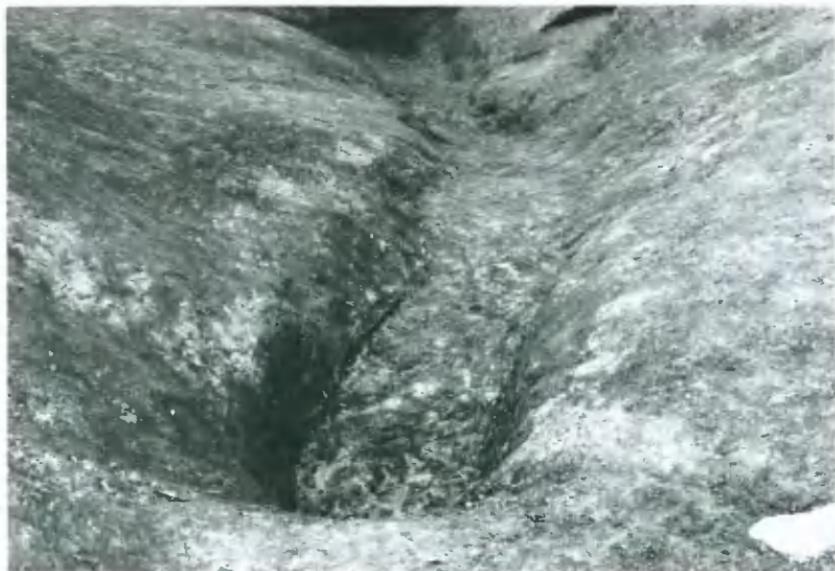


1. 登坂路（北東から）



2. 郭東斜面の階段状遺構（北東から）

図版10



1. 溝1近景（南から）



2. 溝1全景（北から）



2. T-2 (1 郭から斜面にかけて) 断面 (西から)



2. T-2 (1 郭盛土) 断面 (西から)



3. T-2 (2 郭部分) 断面 (西から)

図版12



1. T-3 (1郭盛土造成) 断面 (北西から)

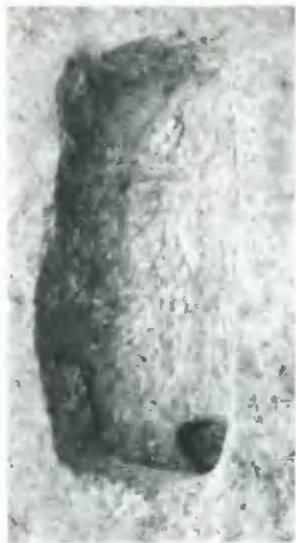


2. 土壌墓1・2全景 (北東から)

図版13



1. 土塚墓1発掘段階（北から）



2. 土塚墓1完掘（北から）



3. 土塚墓2（北から）
4. 土塚墓3（南西から）



図版14



1. T-1トレンチ断面（盛土部分）(北西から)



2. 1号住居址全景（東から）



1. 2号住居址全景 (北東から)



2. 2号居址全景 (遺物とりあげ後) (北東から)

図版16



1. 2号住居址内遺物出土状態（東から）



2. 岸本城遠景（発掘調査終了後）（北東から）



1. 岸本城遠景 (発掘調査終了後) (東から)

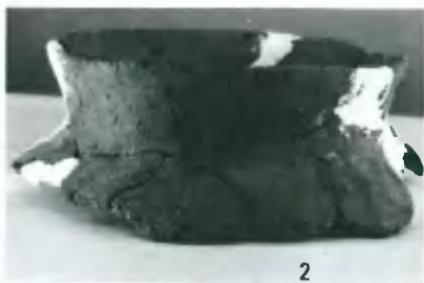


2. 岸本城全景 (発掘調査終了後) (南から)

図版18



1



2



3



5



4



6



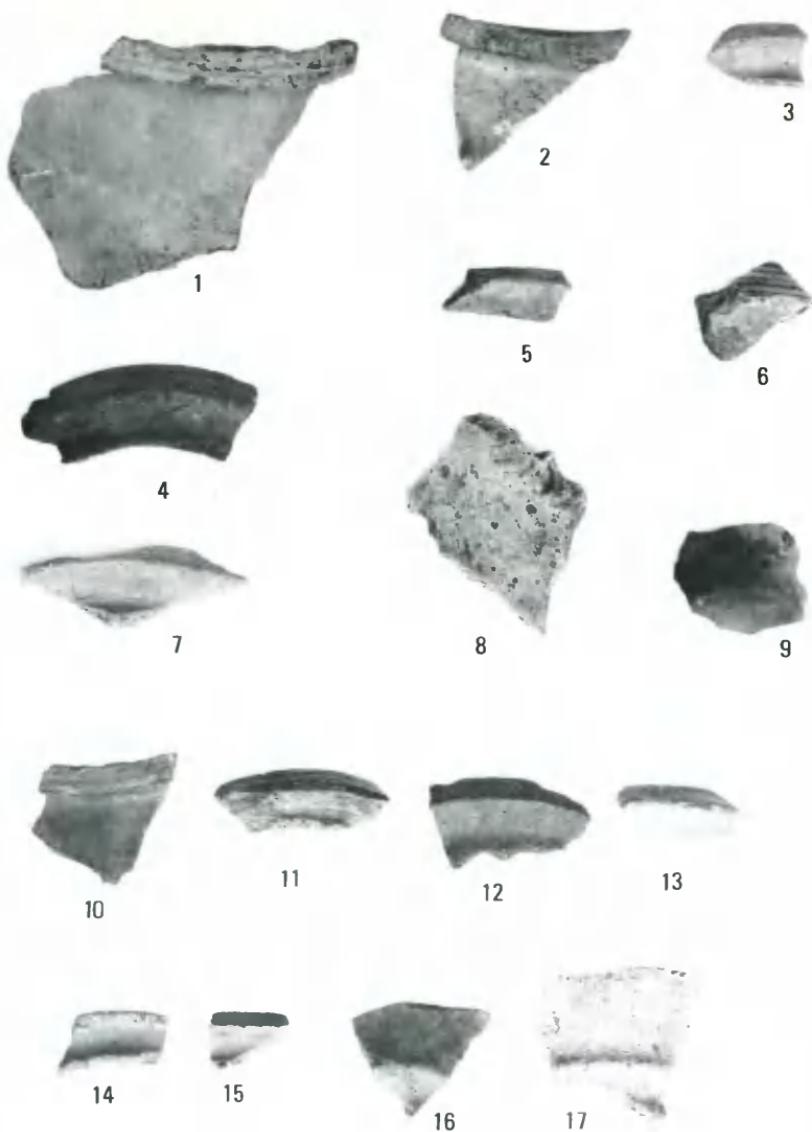
7



8

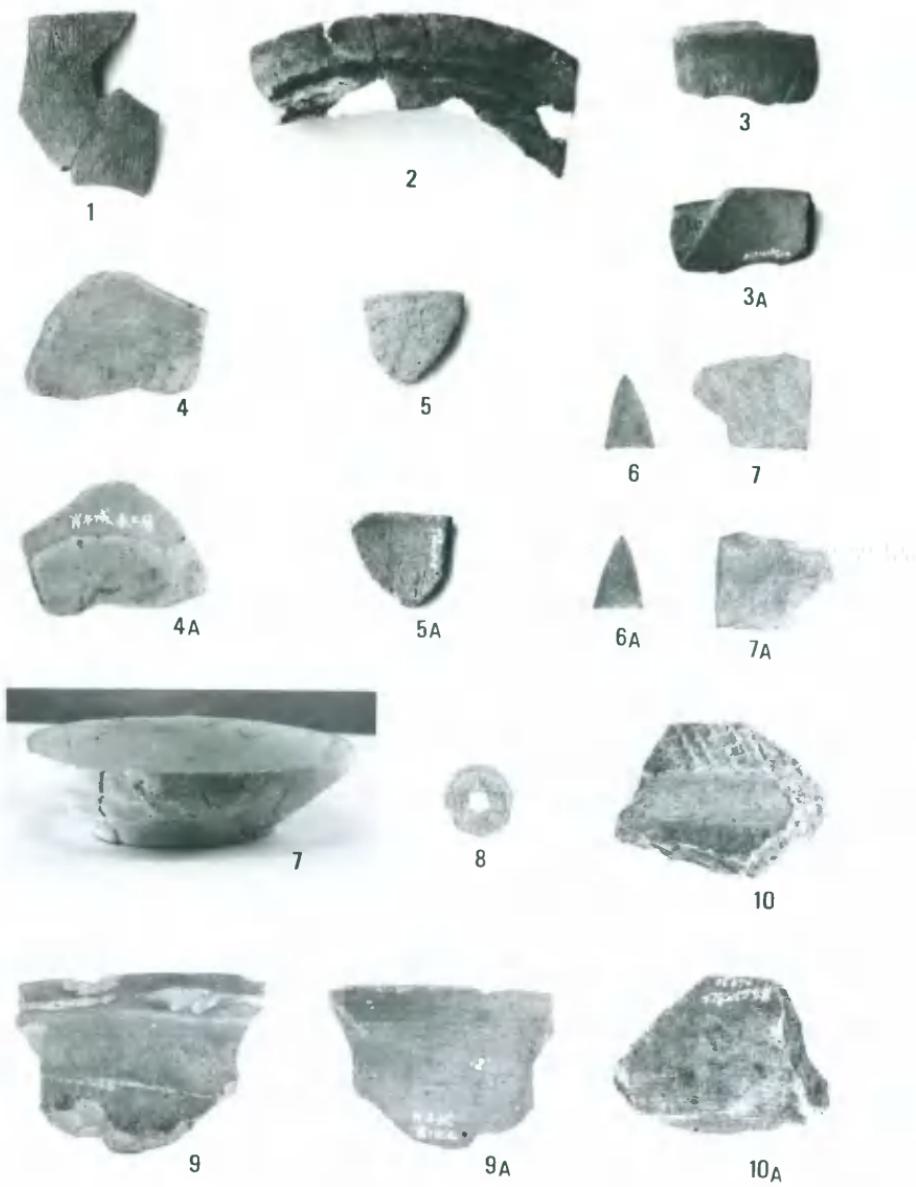
2号住居址内出土遺物

図版19



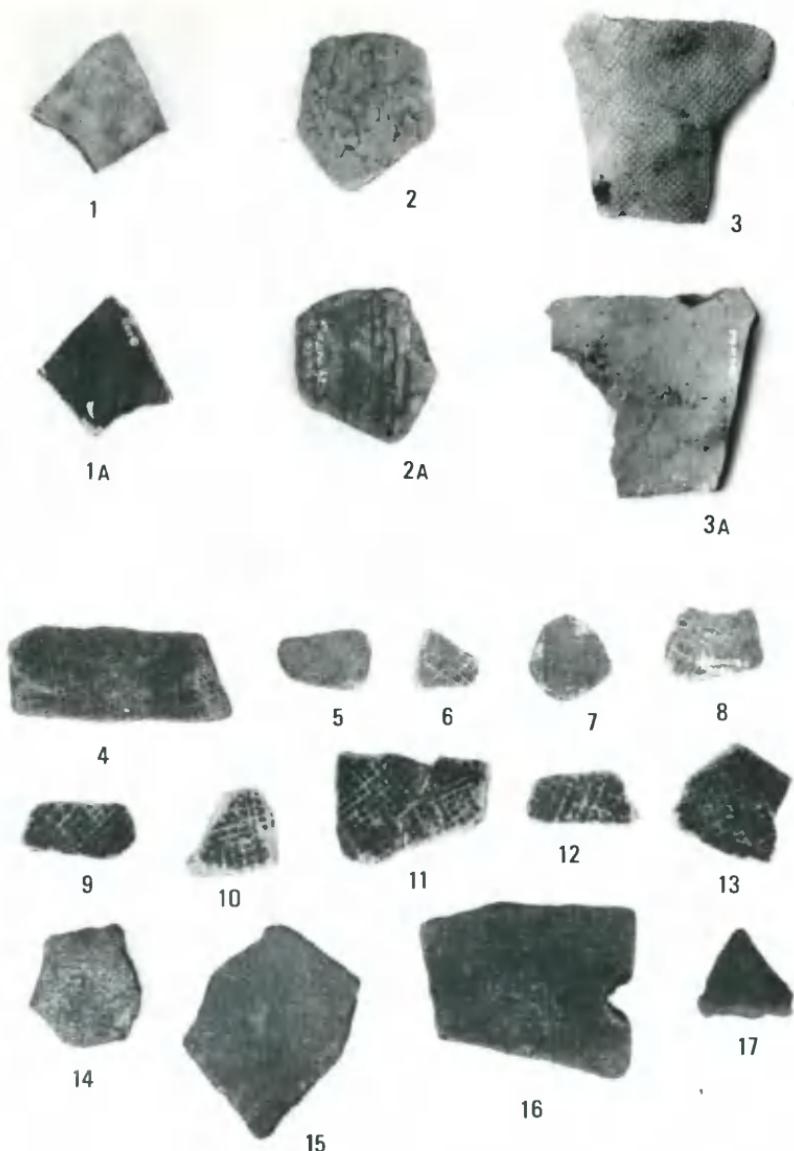
表面採集、トレンチ、1～3郭出土遺物

図版20



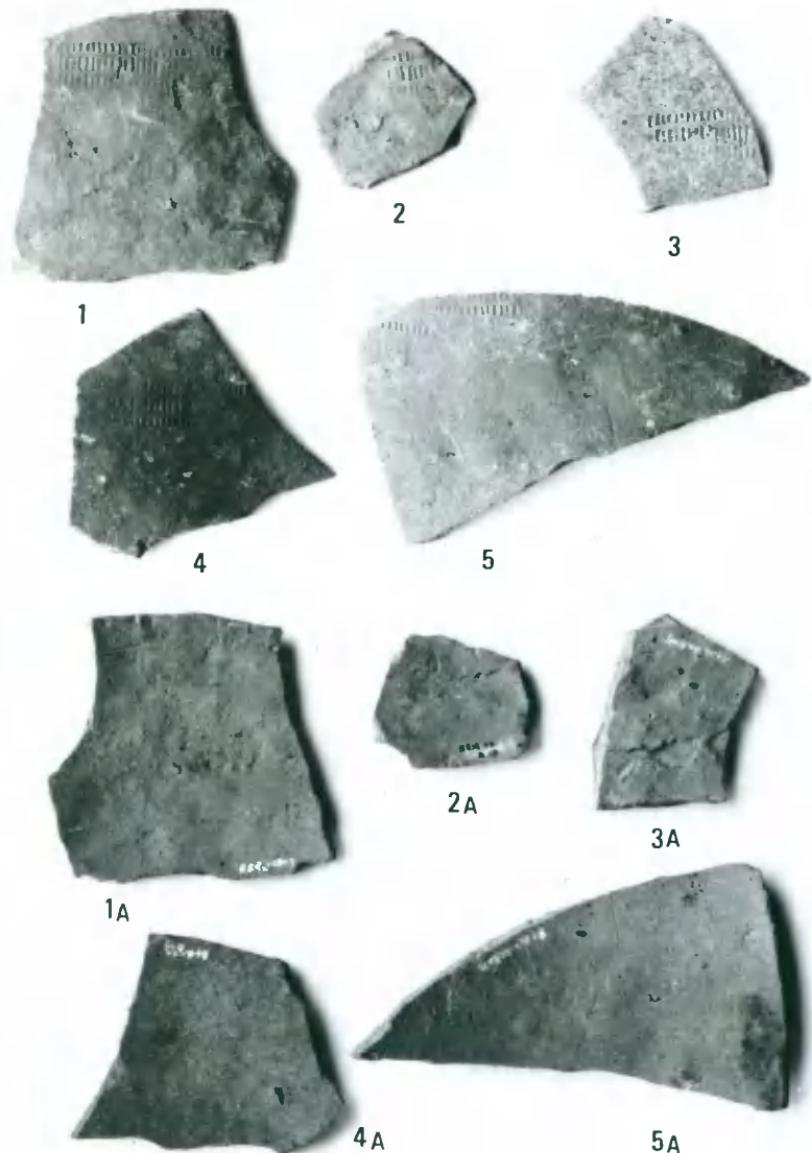
1～3 郭出土遺物

図版21

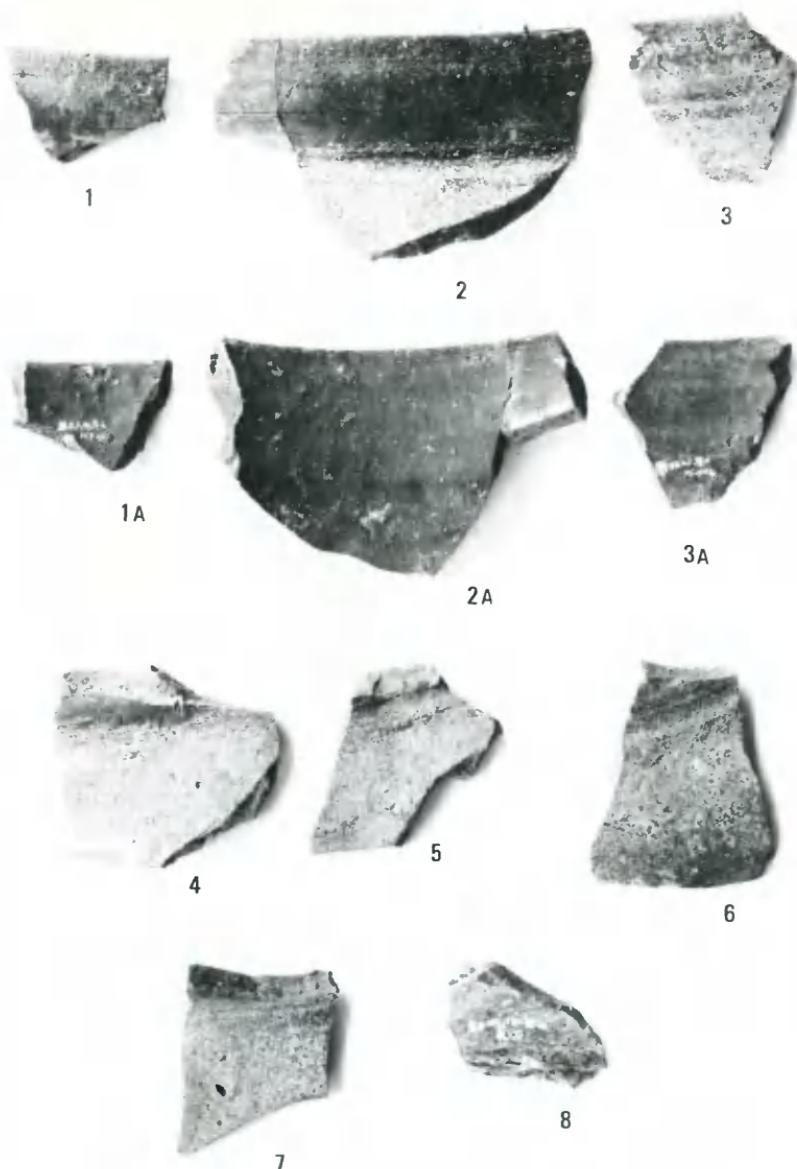


1～3 郭出土遺物

図版22

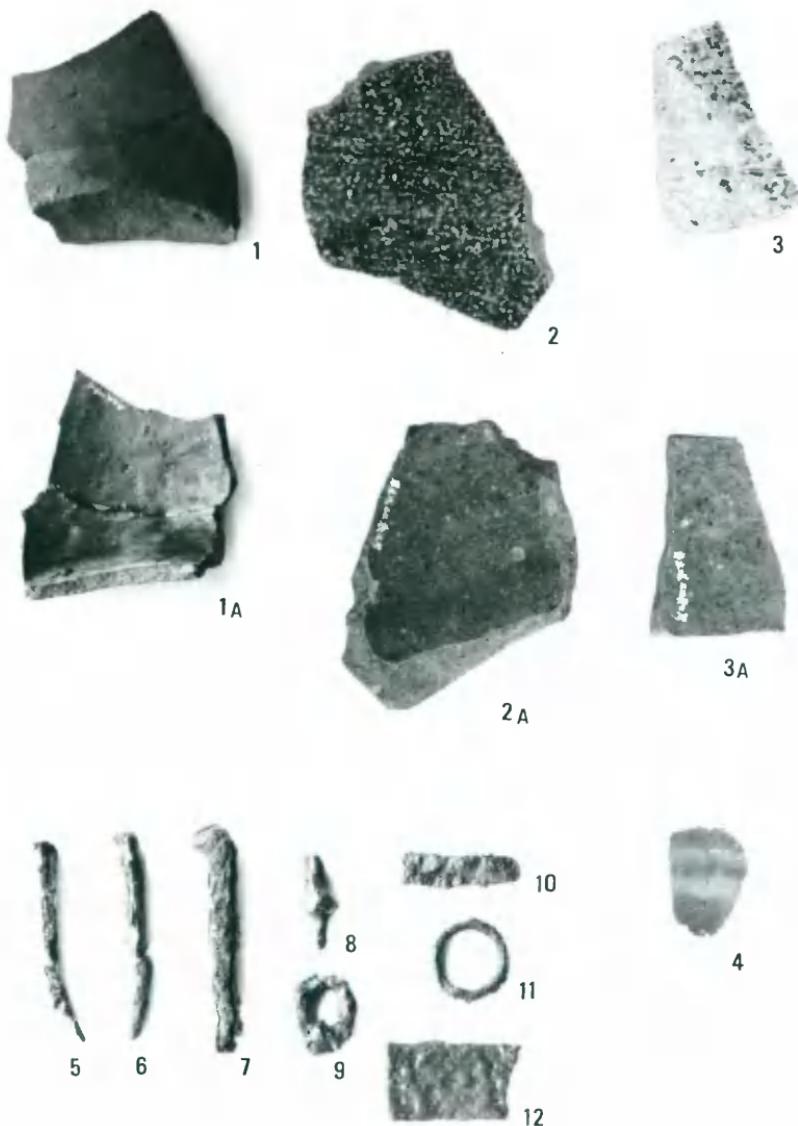


1～3 郭出土遺物



1～3 郭出土遺物

図版24



1～3 郭、トレンチ出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(22)

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 12

昭和52年12月 印刷

昭和52年12月 発行

編集発行 岡山県教育委員会

印刷 岡山県用度課